大正十二年六月十五日印刷
大正十二年六月二十日發行

花袋全集第八卷
（非賣品）

不許複製

著作者　田山錄彌
東京市小石川區東青柳町二十九番地
發行者　川俣馨一
東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷者　松浦政吉
東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷所　株式會社博文館印刷所

東京市小石川區東青柳町二十九番地
發行所　花袋全集刊行會
電話小石川一〇五四番
振替東京三一七〇〇番

一時間以上も、二人はそこで話した。お園がその身の上話をした時には、始めはフム、フム、とただ平氣で聞いてゐたお鶴も、次第にその物語に引寄せられたといふやうに、『それで、もう結婚するの？　フム』と言つて深く考へに沈んだ。

すぐ言葉をついで、『矢張、眞面目でなくつては駄目ね。正直でなくつちや……。いつまで經つたつて、――相手がいくら變つたからとて、矢張心は同じだから、人間は同じだから。』

『本當ですとも――』

かうお園は深く共鳴した。

お鶴にも、矢張、さうした男の苦惱があつて、この松原の中の觀音堂――餘り世間には知られてゐないけれど、眞面目に信仰すれば非常に靈驗が多いといふこの觀音堂へと參詣してゐるのであつた。それは晴れた靜かな、桃の赤い花が目もさめるやうに松の間を綴つてゐるやうな春の日であつた。二人は猶ほ暫くその茶屋の緣臺に腰をかけてゐた。

『世の中も變るものだが、人の心と言ふものも變るもんですね。』

こんなことを二人は話し合つた。二人はそこから少し來た松原の角で別れた。

――花袋全集　第八卷　終――

『家は何うしてるんでせう?』

『もう滅茶々々ですね。親父さんが死んでも、お袋さんの生きてゐる中は、まだあの人の自由にならないやうなところがありましたけども……』

『お袋さん、亡くなつたんですか?』

『去年の春でしたさうですよ。』

『さうですかね。まア、あの丈夫なお袋さんが……』

お園はその男とその母親を思ひ出さずにはゐられなかつた。かの女の多い戀の中で、一番無邪氣であつた戀、一番美しかつた戀、一番本當であつた戀、また一番別れるのが辛かつた戀、その戀の當體の男が、今も相變らず女を玩弄具にして、家の亡びるのにも頓着せず、待合のやうな小料理屋の上さんと長火鉢に相對して坐つて夢中になつてゐるといふ話を聞くのはかの女に取つて悲しいことであつた。その男のためにも、眞面目に觀音さまに手を合はせてやらなければならないやうな氣がした。

『何うしてさう目が覺めないんですかね、男は?』

かうお園は染々言つた。何うか、さうした心の境遇から一刻も早く脫離して、本當の靜かな心持になつて貰ひたいとお園は思つた。(早く一人前の一家の主人になつて、きまつた細君を持つて吳れゝば、それこそ何んなに嬉しいだらう)と思ふと、いろ〳〵なことが思ひ出されて、淚が出さうになつて來た。

『いゝえ、今は、ぢき、この近く……』かうお鶴は言つたが、『それでも、去年の暮に、ちよつと國に行つて來ましたよ。』

『さうですか。それは好う御座んしたね。』二人の間には、やがてＩの溫泉場や、上さんや、その他いろいろな人達の消息などが盡きずに語り出された。

百二十

お鶴は種々なことを話した。五年振で歸國したので、その間には變つたことも隨分多く、思ひも懸けない思人が死んでゐたり、一度亭主にした男にばつたりある處で邂逅したり、一時全盛であつたＫといふ溫泉宿が息子の道樂のためにすつかり零落してしまつたりした話が、それからそれへと盡きずに出たが、ふとある話をお鶴が始めると、それに關聯してひとり手に思ひ出されて來たといふやうに、

『何うしてます？　今、あの人？』

かうお園は訊いた。

『矢張、今でも、あゝして女を引張つてゐますよ。……え、え、あのお芳なんかはとうの昔に捨てられて了つたんですがね。』かうお鶴は言つて、『今度もちよつと逢ひましたよ、富春亭で……。何でもあそこの上さんとも出來てゐるやうな話でしたよ。』

『さうですよ、園ですよ。温泉にゐた園ですよ。』
『まア、それにしてもよく私がわかりましたね。』じろじろとお園の顔を見ながら、『それも、國かなんぞで逢つたんなら、すぐわかるといふこともあるけれども、こんなところで逢はうとは思ひもかけないもんだから。』
『さうですともね……。それでも、私は、貴方がこの近所にゐるツていふことだけは知つてゐたんですけど……。それでわかつたんですけども……。』
これを切つかけに、かれ等の間には盡きない國の話が始まつた。お園が此方に來て初めて、M屋を訪ねた時の話の出た時には、『さうですかね。そんなことをちつとも知らないもんですからね。それはお氣の毒だつたね。』などとお鶴は言つた。
そしてすぐ言葉をついで、
『矢張、あの旦那?』
『いゝえ、もうとうに――』かう言つて、お園は今は全くその人には未練も何もなくなつた話をした。それにひきかへて、お鶴は未だにそのM屋で出來た男で苦しんでゐるらしく、矢張、いろ〳〵心願の筋があつて、そしてこの松原の中の觀音堂にお詣りに來たといふことであつた。
『A町ですか? 矢張――』

の中の路を通つたりして、その觀音堂へとお詣りに出かけて行つたが、お詣りをすませてその堂前に唯一軒ある休茶屋の方へと戻つて來た時、かの女は其處に、かの女より前に、その向うの緣臺に腰をかけて休んでゐる三十前後のやつぱり茶屋女らしい年增をふと見懸けた。

始めはそれと氣がつかなかつたが、何氣なくその橫顏をちらりと見たお園は、（オヤ！）と思つた。（お鶴さんぢやないかしら）と思つた。

それはお園が一昨年初めてこの平野に彷徨して、困つて、最初にT町のM屋に訪ねて行つた時に、もうそのM屋にはゐずに、男と一緒にA町に行つてゐると言はれた女であつた。（しかし他人の空似といふこともあるから。）かう思つて、お園はもう一度見直して見た。しかも何うしても見紛ふべくもないお鶴であつた。

思ひ切つてお園は近寄つて行つた。

『お鶴さんぢやありませんか。』

思ひもかけずその名を呼ばれて吃驚したといふやうに、また、餘りに思ひ懸けないので、ちよつとは誰れであるかゞわからないやうに、凝とお園の顏を見詰めてゐたが、漸く思ひ出したやうに、

『まア、園ちやんぢやないかね。』

かう言つて立上つて來た。

今は不思議にもすつかり跡方なく消えて了つて、眞面目な、落附いた、正直な心のみが代つてその胸を領するのをお園は見た。男性に對して恨を持ち、復仇を持ち、皮肉を持ち、更に一歩を進めて、男を玩弄具にしやうとした心などは、今は何處へ行つて了つたかと疑はれた。

觀音さまの御利益か、それともまたかの女の眞面目な心の自然の賜か、その年の秋も半ばになる頃までには、次第に、さうした世間の噂もわるい方から好い方に變つて行つて、今は誰もかれ等の間をわるく言ふものはなくなつた。『さうだつてな、其前の上さんの四十九日にあの女に逢つたんだつてな。不思議な緣だとさ。』などと人々は言つた。

百十九

その冬もすぎて再び春は來た。

お園と杉山との話は次第に進んで、その四月の先妻の一周忌をすませた後には、愈々公に式を擧げることになつた。近所でも今はその話を知らないものはなく、始めは反對した校長も、N屋側であつた料理屋の夫妻も、却つて熱心な贊同者となつた。

Tからも、それを祝ふ手紙が、猶ほ二度も三度も來た。

それは四月に入つてから間もないある日のことであつた。お園はいつものやうに、沼に添つたり松原

『ちよつとお詣りに行つて來ますから……』朝、起きて、何事もなく、平常のやうに働いてゐると思ふと、かうお園は俄に思ひ立つたやうにして出懸けた。

『また、お參りかえ？』

後では上さんはかう言つて笑つた。

『あの觀音さま、昔からあるにはあるのだけども、御利益があるのかしら？　此處等よりも却つて、遠方の人が知つてゐるので、さうかしら？　そんなに御利益があるのかしらと思ふことがおるがねえ。』

ある時は、上さんはこんなことを言つて、參詣に行くものゝ多少をお園に訊いた。『參詣に來るッていふほど、お詣りに來るものはありませんね。』とお園は言つた。

しかも、その觀音堂――昔は大きな寺の一部であつたらしいのに拘らず、今はその小さな堂しかなくなつたやうな、その小さい堂の御利益のために、その寺の住職が今は却て生きて行くといふやうな觀音堂であつたけれども、それでもお園の爲には難有い値ひ難い佛であつた。それに、そこまで行く路が面白かつた。桃の實の鈴生りになつた林が連續したり、深い蘆荻の緣に剖葦が喧しく鳴いてゐたり、松に埋れた小さな村に機を織る音がさびしくきこえたりした。お園は何ぞと言つては、そこに行つて手を合はせた。

しかも、お園は自分ながら自分の心の變つたのに驚かずにはゐられなかつた。あの戀心は何處に？　またあの嫉妬や虛榮は何處に？　一刻も男に縋らずにはゐられなかつた心は何處に？　さうしたものは

ぱつたり逢ふやうなわけがない。』さうした話は、その夜、二人の間に盡きずに出た。
『でも、奥さんの一周忌をすませてから、ね……。さうでなくつては、何だか私は氣がすまないから。
こして、その中には、N屋の方もすつかり綺麗にして了ひますから。』かうその時お園は眞面目に言つた。
その夜は月が美しくキラキラと川水に光つて、遅くまで二人は欄干に凭つてそれを眺めてゐたことを思ひ出した。

百十八

それから種々のことがあつたことを續いてお園は思ひ出した。初めの中は、互ひにそれを内所にして置くことにしたが、いつ洩れるともなく世間に洩れて、N屋の主人にも知れ、料理屋の亭主や上さんにも知れ、女中達にも知れ、果ては杉山の學校の方まで知れて行つたことを思ひ出した。
ある期間は、そのために心配した。(學校なんか、何うでも好い。これだけのことで——別に、非難すべき缺點でも何でもないことで、それで此處にゐられないといふならば、東京くでも、何處へでも出て行く……)かう言つて、杉山は、その戀の申出の決して世間的のものでなく、また第二義的のものでないことを表明したが、しかしお園の身にしては、一緒になるならさういふことにならずに、穩かに一緒になりたいと思つた。お園はその頃、獨りで、よくそこから一里はどある松林の中の觀音にお詣りに行つた。

しないかと思つて、それを恐れてゐるんです。』

『…………………。』

流石にお園はそれを言出すことを躊躇したことを思ひ出した。また、つゞいて、思切つて、N屋の主人との關係を話した時には、流石に杉山も思ひもかけないといふやうな顏をしたことを思ひ出した。暫し二人の間に沈默があつた。

杉山はやがて言つた。

『で、それが、何うなんです？　貴方の心がそれから離れられないのですか？』

『そんなことはありません。』

かう言つてお園はその事情を詳しく話した。

『そんなら、何でもない。そんなことは何うでも好い……。そんなことは故障にも何にもならない。』

杉山は存外平氣で、益々その話を進めたのであつた。

否、そればかりではなかつた。その夜の一二時間は、かれ等に取つて、眞面目な、淨い、互ひに心のやさしく細かく交錯するやうな時間であつた。お園は男から男へ移つて來たこれまでの生活のことを話せば、杉山は杉山で、あの土手の闇の路を歩いた時の話などを持出した。『たしかに、さうですよ。さういふ運命にちやんとなつてゐたんですよ。でなくつちや、あの四十九日に、あの松原の中で、貴方に

『…………………』
お園は默つてゐた。
『何うだらう？　本當のことを言つて呉れませんか。』
『………………』
『………？』
お園は漸く、『何うして、そんなことを仰有るんですの？』
『別に、理由はないんです。此間、あそこで逢つた時から、もうさういふ氣がしてゐたんです。死んだ妻が墓の中から特に貴方を選んで呉れたやうな心持がして爲方がなかつたのです。それから、自分でも種々に考へて見たし、これからの將來を何うせ一人で暮すことも出來ない身である以上、是非とも貴方に來て貰ひたいと思つたんです。』
『…………』
お園はまた默つたが、すぐ思切つて、『でも、私にはいろんなことがあるんです……。それをお聞きになれば、すぐ厭になつて了ふやうな事があるんです。』
『そんなことは大丈夫です。これまでに貴方にあつたこと、また、現にありつゝあること、そんなことを私は決して問はないつもりでゐます。それよりも、何うしても、貴方が離れられない伴侶があれば

とが出來たでせう。つまり誰れに對しても、本當で、そして深切であらねばならないといふ心持を持つことが肝心なのです。それに對して歹向つて來る心はない筈ですから。――いづれ、その中話がすつかりきまつたら、また改めて知らせてよこして下さい。私も是非一度は行つて杉山といふ人にもお目にかゝりたいと思つてをります。N星の主人の問題でも、もし話が面倒になつて、中に入るものでも必要な場合には、いつでもさう言つておよこしなさい。私は決してそのために盡力することを厭ひませぬから…………………。

――何は措いても、目出度い、よろこばしいことと思ひます。いづれ、詳しいことは後便にて申上ぐべく、先は……。

百十七

お園は杉山がかの女に初めて將來の話をした時のことををり／＼思ひ出した。それはその松原で逢つてから三月ほど經つた夏の暑い夜で、その時も、杉山はやつぱり客として酒を飲みにやつて來たのであつたが、突然、杉山は眞面目にその話を持ち出した。

『…………？』

持ち出したあとで、緊張した心の態度で、杉山はその答を待つた。

い者の前には、正しい道が開けて來たでせう？……何うか、これを忘れずに、今までの艱難、今までの經歷、今までの辛勞は、皆なさうした正しい本當の生活に入る道程であつたといふことを忘れずに、益益その心を磨くやうにして下さい。折角つかんだものを決して離さぬやうにして下さい。今までの貴女の生活を恥かしいとか卑しいとか思ふには及びません。何んな生活でも、過去の生活は過去の生活として立派に生かして行かねばならないものですから。

——杉山といふ人には、私もその中行つて逢つて見たいと存じてをります。兎に角あの歸りに、その人に逢うたといふことも、奇遇以上の奇遇と言はなければなりません。それに、N屋の主人との話を貴方も隱さず、杉山といふ人も、それを知つて、別に世間の普通の人達のやうに、大問題にしなかつたところに面白いところがあると思ひます。公明正大といふ德は、兎角、男の專有物で、女性には由來あまりないものですけれども、今度といふ今度は、貴方もその德の大きいことを悟られたであらうと思ひます。互ひに信ずる心持さへあれば、何んな邪魔が入つて來たとて、それはちつとも恐るゝことはありません。そしてその互ひに信ずるといふことは先づ此方から信ずるといふことから完成されて行くのですから、それを忘れないやうに。

——N屋の主人に對する貴方の態度も、立派だつたと思ひます。實際、本當のもの、虛僞でないもの、好い加減でないものほどそれほど力强いものはないのですから。今度は、貴方も十分にそれを理解するこ

わるいことをしたとか、他に男を拵へたとかしたのなら、それはまたそこに理窟もあらうと言ふものだけれども、丸で、さういふ汚ないことはないんだからな。何うかして、さうした眞面目な生活に入りたい。男一人女一人の正しい道に入りたいと言つて、それからさうい心持になつて行つたんだからな、後護たいところは、女にも、杉山さんにも少しもないんだからな。N屋にしたつて、女から、さう言はれて見れば、是れは何うもしやうがないぢやないか。……惚れた女なら、一層さうぢやないか。』料理屋の亭主はある時こんなことを上さんに言つた。

百十六

ある日お園は東京のTから長い長い手紙を受取つた。

それは、この間、杉山との話をちよつと知らせてやつたその返事であつたが、それには、その話に對する、喜悦の情が溢るゝやうに現はれてゐるのをお園は見た。Tは書いた。——たうとう時が來ましたね。私が貴女のために望んだ時が。男と女が本當に入つて行かなければならない生活が。更に言ひ換へれば、私と貴女との間が本當に兄妹として呼ばるゝ時が……。私はその手紙を見て、何んなに喜んだか知れません。つまり、あの時、私が言つたこと、私が豫言したこと、その言葉は時を移さず、直に運命となつてあらはれて來たのでしたね。實際、私の言つたことは間違ひはなかつたでせう。ちやんと、正し

『一體、何うして、そんなことを考へ始めたんだね？』

かうN屋の主人が訊いた時には、『つく〴〵、今までのやうな生活に懲りたのです！』かうお園は遠慮なく言つて、『今までは、餘りに、何も判らずに暮して來ました。男に惚れたり、惚れられたりするのを唯好いことにして、夢中でやつて來たのです。まア言つて見れば、何も彼もわからなかつたのですね。行き當りばつたりに右に轉んだり左に轉んだりしてやつて來たんですね……。しかし今はやつと目が覺めたやうな氣がしました。ですから、後生ですから、新しい生活に私の入つて行くのを許して下さい。』

『でも、あとで後悔するよ。とても長くはつゞきはしないよ。』

『そんなことはありません。』

かうお園はきつぱり言つた。

N屋の主人との關係は、旦那と圍ひ者との關係ではなかつたけれど、主人が容易にお園を手放さうとしないので、かなりに後まで種々のごたごたが殘つた。しかし初めはN屋側で、何の彼のと言つてお園を壓迫するやうな形を取つてゐた料理屋の亭主や上さんにも、次第に二人の心持がわかつて來たと見えて、後には却つてかれ等のために一方ならず骨を折つて吳れるやうになつた。

『本當に、N屋の亭主はしやうがないな。男だもの、その位のことはわかりさうなもんだがな。惚れた女なら、一層さうして潔く承知してやらなければならないんだがな。それも、女が男の目を盜んで、

百十五

N屋の主人にしても、さういふお園の堅い決心を何うすることも出來なかつた。二人の間には、ある時、次ぎのやうな會話が繰返された。

『ぢや、何うしてもさういふ決心をしたといふんだね？』

『え！』

『何うしても、それぢや俺の世話にはならないといふんだね？』

『え……。濟みませんけれども、さういふことにして頂きます。私は私で、何うしても身をきめなければならないと思ひますから。』

『それも好いだらうけれど、學校の教員の女房などになつて、それで、お前は滿足してゐられるのかえ？』

『それはやつて見なければわかりませんけども、何うなるものかわかりませんけども、兎に角、今度はさうしてやつて見ようと思つてをります。いろ〳〵艱難もあれば、思ひ通りに行かないやうなこともあるのはわかつて居ますけれど、何うかしてそれは貫いて行つて見たいと思つてをります。何處に行つたつて、思ひ通りには行かないのはわかり切つてをりますけれど……。』

校長に呼ばれた時にも、杉山はすべて隠すところなくその話をした。少しも躊躇するところはなかつた。『では、君は、今の教員といふ資格を賭しても、それを實行しやうとするのか？』そこまで校長は話を持つて行つた。それでも、杉山は少しも逡巡した返答をしなかつた。

困つたけれども、校長には何うすることも出來なかつた。

『それは、茶屋女だッて何だッて、そんなことは差支ない話だけれども……何うも、ちよつと人聞きがわるくつてな……』

『しかし、さういふことが、教員の資格に關することはないと私は思ひます。何故なら、私とかの女との間には、何等さうした不純な、不潔な分子はないのですから……。唯、私がその女の性質と行爲と心とに引寄せられて、妻にしたいことを此方から申出したばかりですから。』

『それはさうだから、好いとは思ふけれども……』校長は考へて『いや、却つて躊躇逡巡しない方が好いだらう。ぐん〳〵やるならやる方が好からう。つまり、君にさへやましいところがなければ、ちつとも差支ないわけだから。』

『それぢや、何うか――』

かう言つて杉山はそこから出て來た。

學校でもかなりに大きな問題にされた。

N屋の主人と女との關係を提げて、强意見をするために、杉山の許に訪ねて行つたある友達は、かれよりも却つて杉山の方がよく其事情を知つてゐるのに驚かされた。杉山は言つた『それは、僕もちやんと知つてゐるよ……。イヤ、かの女が一番先にそれを僕に話したよ。そしてさういふことのために、僕等の一緒にならうとする心は少しも弱められやしなかつたんだよ。もう少し、僕もかの女を信じてゐるんだよ。』

『でも、困るぢやないか。』

『何うも、しかし、それは爲方がない。既往は僕は咎めないつもりだ……。それに君達は、何う思つてゐるか知れないけれど、僕とかの女との間柄は決して肉體的に出來たんぢやないんだからね……。さうした約束も、かの女の方から望んで來たのではなくつて、僕の方から持込んだのだからね。どうか、僕の妻になつて呉れ、死んだ妻があの世から選んでくれた妻のやうな氣がするからと言つて、此方から申込んだんだからね。』

かう言つて、杉山はその松原の中の寺の話やら、前から女を知つてゐた話などをした。

『ふむ、さうかえ？　そんな緣故があるのかえ？』

何うしてもその話はやめさせるつもりでやつて來た友達も、後には爲方なしに點頭いて歸つて行つた。

『何うして？』

『だつて、皆なそんなことを言ふからさ。』

『さう――？　だつて、私、そんな話を杉山さんからされたことはないわ。』

『ぢや、お前さんがさうでなくつても、向うがさうなのかも知れないよ。お前さん、望まれてゐるのかも知れないよ。』

『さうですかね。』

などとお園はわざと平氣で言つた。

百十四

この噂は最初は單なる噂であつたけれども、いつかそれは事實となつて二人の間に現はれて來た。

その年の秋には、近所の人達は、最早杉山とかの女の間を知らないものはなかつた。あるものは、『杉山さん、堅いのに、何うして、あんな茶屋女なんかに迷つたんべ……。惜しいことをしたなア。魔がさした。』などゝ言つた。ある者は、『でも、あの女、あれで中々面白い所がある女ださうだ……。茶屋女などとは思へないやうなところがあるさうだ……。『何でもあゝなつて行く徑路にも面白いロマンチツクな物語があるんださうだて。』などと言つた。わるく言ふものもあれば、好く言ふものもあつたりして、一時は

入つて來ずには居られないやうに思はれた。

かの女はその後も二三度その松原の中の寺に獨りで墓參に行つたことを思ひ出した。何のために、さういふ氣を起したか？ それはお園自身にもよくわからないやうなものであつた。或ひはその墓の魂が無意識にかの女を引寄せたといふより他爲方がないやうなものであつたかも知れなかつた。三度目に行つた時には、その寺の山門の前の家の上さんとも懇意になつて、種々杉山の家のことだの死んだ細君のことだのを詳しく聞いた。上さんは上さんで、『あんたは何處にゐるだア。親類にでもなるんかね。』

『いゝえ、別に――』

かう言つてお園はぢき近所にゐるといふ話をした。

『はア、さうけえ。それぢや、杉山さんの親類ツて言ふ譯でもねえんだね。』こんなことを言つて、上さんはいくらか笑ふやうにしてお園の顏を見た。

さういふところから噂に立てられたか、それともまた杉山と一緒に飲みに來る友達の間に問題になつて、そして評判に立てられて行つたが、二人の間には、まださうしたことは少しも言はれたり話されたりしてゐないに拘らず、世間ではそれ以上に、何の彼のと色濃く二人を觀察した。

『お前さん、本當？』

ある時、料理屋の上さんはかうお園に向つて訊ねた。

百十三

一時は同化し難き他郷、素氣のない深切氣のない土地の風俗、情味に乏しい田舍訛り、とてもこんな處には長くは居られないと思つたこともあつたが、その思つたことすら不思議に感じられるほど、此頃では土地の空氣に一種のなつかし味を持つことが出來るやうになつて來た。

濶々とした平野も、綠の深い松原も、その間に點々として散在してゐる村落も、今はもうさびしいといふ感じをお園には起させなかつた。外形と違つて、この地方の人達は存外暖かな心の持主であるといふことなども次第にお園には飮み込めて來るやうに思はれた。これと言ふのも、その杉山といふものが、ゆくりなくかの女の前に現はれて來たためであつて、N屋の主人だけでは、かの女は決してさうした心を起さなかつたに相違ないのであつた。

逢つたり話したりする機會は次第に多くなつた。それはかの女に取つても不思議に、或ひはあの松原の中の寺の墓の魂が夫をさういふ風に導いてゐるのではないかと思はれるほどであつた。かれ等はさうしたことについては一言も打明けて語らず、女の方からもさうした意味を持つた流盻ひとつ遣はなかつたけれども、それでもさうした約束は、あの舟橋の橋の袂で相見た時から、または闇の土手の路を歩いて來た時から、ちやんと出來てゐて、たとへ一時は離るゝことがあつても、いつかはその運命の轍の中に

思はれた。』だつて、お上さんがあるぢやありませんか。お上さんのことをもう少し考へてお上げなさい。』かうした言葉は、戀に盲目になつた男の眼を開くには十分でなかつたにしても、無理に壓迫して來る男の心を防ぎとめる楯としてほ、有效に役立つた。

『だつて、私がイヤならしやうがないでせう。』ある日、突然かう言つたが、その言葉は、N屋の主人でも誰でも容易に突き破つて來ることが出來ない强さを持つてゐた。お園はさうした言葉を平氣で口にすることが出來るやうになつたかの女を驚いたやうな心持で凝と見詰めた。さうした今と比べて、いかに昔は愚かであつたか。いかに自分といふものを本當に考へてゐなかつたか。唯、自分のために怒つたり泣いたり恨んだりばかりして本當に自分といふものゝ價値を考へずにやつて來たか。(成ほどそこから新しい道が開けて來る。)折角つかまへたその心の一筋の綱を、今度こそは容易に放すやうなことはすまいとお園は思つた。

其後度々お園は杉山に逢つた。杉山が同じ學校の同僚と一緒にその料理屋に來たこともあれば、お園が杉山の家近くまで一緒にかれを送つたこともあつた。成ほど杉山の家はそこからさう遠く離れてはゐなかつた。篠竹の繁つた川の土手の上を二三町で下りて、ひろい田圃を一つ越せば、もうそこは杉山の村であつた。

て見れば、矢張見えない處に不思議な運命の糸のやうなものがあつて、それが微妙にかの女の心なり境遇なりを支配し且つ操りつゝあつたことが知れた。

（觀音さまにでも手を合はせて賴むやうな心の蘇生）が、その時以來かの女の胸に新しい芽を出した。そして其新しい芽が萠え出してからは、其心の周圍にあるあらゆるものゝ影が、皆な異なつた色彩と意味とをかの女の心の上に齎して來た。Tにわかれて歸つて來たのも、其歸途に路をまちがへて杉山に逢つたのも、其亡妻の墓に詣でる氣になつたのも、それから度々杉山に逢ふ機會が出來て行つたのも、皆なその新しい（心の蘇生）に由つて、ひとり手に起つて來た不可思議な奇蹟のやうな氣がした。

（信じ得れば、曲つた心が出て來ない。わるいことが出來ない。唯それだけで好いのだ……。それで新しい道が開ける。）かう言つたTの言葉が、いろ〳〵の事件に遭遇すればするほど、力強い意味を着けて來るのをお園は感じた。實際今までのかの女は、かの女の自身の心をすら完全につかむことが出來なかつたのではないか。自からの欲する心に迷つて、何方に行つて好いかすらわからなかつたのではないか。唯、かしこく利口に立廻りさへすればそれで好いと思つてやつて來たではないか。そして今日まで何等縋るべき力綱を得なかつたのも、皆なその爲めではなかつたか。

N屋の主人の問題にしても、その新たに得たまことの心を持つて接して行つたがために、深い暗い淵に陷らずにすんだばかりでなく、N屋の主人をさへそこから浮びあがらせる事が出來たやうにお園には

の話は、何うにか彼うにか、すつかり切れた。別れたといふまでには至らなくとも、兎に角餘りにしつこく此方の自由を縛らないことを條件にして、そのまゝ再びそこに腰を落附けることとなつた。

しかしお園がそこに腰を落附けるに就て、それ以外に、最も有力な大きな理由があつたといふことは、それは亭主も上さんも少しも知らなかつた。

お園は今、考へて見ても、不思議な氣がした。自分の意志とか、または自分の希望とか言ふものではなしに、さうした自然の運命が最初からチャンとそこにさうして機縁の熟するのを待つてゐたやうな氣がした。そして山の旦那にしても、Tにしても、またはN屋の主人にしても、かの女がさうした自然の運命の中に入つて行くために、わざ〳〵その前にあらはれて來た人物のやうにかの女には思はれた。杉山にあの松原で逢つたといふことも、あの松原の中の寺の墓に詣でたといふことも、またはそれより以前に、あの舟橋の畔りの茶屋で邂逅したといふことも、後から飜つて考へて見れば、皆な一つ一つ意味があつて續いてゐる運命の繪卷であるやうにしか思はれなかつた。

百十二

その料理屋を捨てゝ東京に出るなり、國に歸るなりしなかつた一つの原因――それは始めは夢のやうな空想でもあり、自分でも馬鹿馬鹿しいと思ふやうなものでもあつたけれども、しかも後になつて考へ

絶えず往來し、K町に向つて工事中の鐵道工夫の鶴嘴の音は次第に松林の中を進んで行つた。やがて收穫は終つて、野には靜かな冬が來た。ある朝は霜が白く置いた。

お園は矢張依然として、その河下の料理屋に客分として働いてゐた。しかしN屋の主人のやつて來るのは此頃ではもう元のやうに繁くはなく、何處かに一軒ちやんとした家を構へてやるといふ相談も、女の方から打込んで行かないために、そのまゝ中止といふ形になつて了つてゐた。

『世話して吳れるッて言ふんだから、世話して貰つたら好いぢやないか、園ちやん！』かう上さんが勸めるやうにしても、お園は成るたけその羈絆から離れることにのみ心を注いだ。

『何うして、さうなの？』

かう上さんが訊くと、

『だつて、上さん持の男に世話になるのはもう懲々ですよ。』

かう言つて、お園は成るたけその關係を薄くするやうに、やうにと心がけた。そこの上さんも、亭主も後にはお園の心持を知つて、無理にN屋の主人に押附けるやうなことはしなくなつた。

しかし夏の末頃に、矢張その關係で――N屋の主人が、餘りに執念く纏つて來るので、一度は思ひ切つて國に歸るなり、東京に出るなりしやうと思つたことがあつた。しかしその時も料理屋の亭主の盡力と、お園の客扱ひの上手なのに打込んで、何うしても手離したくないといふ上さんの希望とで、N屋の方

の心の位置からは一段高いところに身を置いたやうにも、またはかうした忠實な、まことな心でゐさへすれば、何んなに辛い世の中をも正しく安心して渡つて行かれるやうにも考へられた。(さうだ……かうした淨い正しい心を持つてゐさへすれば、何んな運命に此身がなつたつて、それは悔やんだり嘆いたりすることはない。世間は皆な親類にも友達にもなる。)かういふ風にも思はれた。この路を眞直に行きさへすれば間違ひはない。村に入つても何でも眞直に行けばひとり手に大通りに出ると言つた杉山のさつきの言葉も、單に道を教へたばかりではないやうな氣さへした。お園は新しい力を得たやうにしていそいそとして歩いた。

百十一

それから月日は經つた。

蚊の多い夏もすぎ、松原に初茸の出る秋も來た。河を上下する帆影の上には、靜かな色ある平野の雲が靡きわたつた。

脊戸の小さな川の畔りには、水引の細かに赤い白い花が點綴され、澄んだ淺い水に臨んで農夫が鎌や鋤を洗つてゐるのなどが見えた。夕炊の煙は、新しい茅葺の家から細く颺つた。

あたりには別に何も變つたものはなかつた。T町の製粉會社の煙突は依然として西風に靡き、汽車は

ちよつと考へたお園は、『何うなりますか、わかりませんけども――ことに由ると、急に東京に行くかも知れませんけども、大抵はまだあそこにをるつもりです。あそこは容分のやうにして來てゐるんですから、いつでも出て行かうと思へば、行けるんですけど。』

『知つてゐる人でもあるんですか、あそこの料理屋の人が――?』

『いゝえ、さうでもないんですけども……』かう言つてあとを濁したお園は、ふとあのN屋の主人のことは、初めはこの杉山から聞いたのであつたといふことを思ひ出して、變な氣がした。

もうわかつてゐるから好いといふのを、杉山は強ひて一緒に、誤り易い二筋道のわかれる角のところまで送つて來た。

『ぢや、その中、屹度またお目にかゝりますよ。近いんだから……』こんなことを言ひながら杉山は前を指さして、『この路を眞直に行きさへすれや間違ひはありません。村に入つても何でも、眞直に行きさへすれば、あの料理屋のある少し手前の大通りに出ますから。』

『難有う御座いました。』

かう言つてお園は別れた。

お園は清々したやうな氣になつた。また好いことをしたやうな氣もした。何の欲望もなしに、心からその細君を悲しみ得たといふことは、尠からぬ快感をかの女に誘ふに十分であつた。何だか自分が平生

『父が死ぬと、間もなく他へ嫁いて了ひまして、別に子供などもありますから。』
『さうですか、それはお氣の毒ですね。』
『十二三の時から、此間、お話した溫泉場へまゐつて、そこで大きくなつたやうなもんですから……。』
『御きやうだいは？』
『兄が東京に出て、何うやら彼うやらしてをりますけれど、――田舍になぞゐないで東京に出て來い。いつでも世話はしてやるからと言つてよこすんですけども、矢張、嫂もあり、子供もありますからね。』
『矢張、親に早く別れたのが不仕合せですねえ。』
『本當で御座いますよ。』
『僕なんかでも、父親に死なれたことが、かうして田舍に埋れて了ふ大きな動機になつたんですから。』
こんな話をしながら、二人はその墓地から出て來た。あか桶は矢張お園が持ちながら。
山門から出ようとする時、杉山は、
『本當に難有う御座いました。佛はどんなに喜んでゐたか知れない……。』
『いゝえ……。却つて御迷惑だつたかも知れませんね。』
『そんなことはありませんよ。』かう杉山はいくらか笑つて見せて、
『まだ、當分、あそこの料理屋にゐるんですか。』

『皆なこれは、御先祖のお墓？』
かう杉山に訊いた。
『いや、これは親父の墓です……。それから、此方のがお袋の墓です……。』
『それぢや、もう貴方には御兩親ともゐらつしやらないんですか？』
かう始めてそれと知つたといふやうにしてお園は言つた。
『え、親父には六歳の時に別れましたし、お袋には五年前に死なれました。』
『まァ、さうですか……。』
『全くの一人ぼつちですよ、僕は――』かう杉山はさびしさうに言つた。

百十

『さうですか。お一人きりなんですか。それでは一層おさむしいんですね。』
『貴方は？』
今度はかう杉山が訊いた。
『私も父親には早く死に別れました。母はまだ居りますけども、ゐてもゐないやうなんですから。』
『何うしてです？』

つてゐるやうにも見えた。線香の煙は風もないのに高く騰つた。
やがて身を起して立つて此方に來た杉山に代つて、今度はお園が色花を手向け、線香を立て、水を灌ぎ、同じやうに蹲踞んで、そして深く額に手を合せた。と、他人ではないやうな、または一度も逢つたことのない人とは何うしても思はれないやうな、姉か妹か、それとも亦親しい友達か何ぞのやうな深い魂の一致が何處からともなくあらはれて來て、軀も心もすべてその墓に引寄せられるやうな氣がした。熱い熱い涙さへ總身に溢れ出して來た。
お園は容易にその墓から離れて來ることが出來なかつた。
で、尙暫らくその墓前に手を合はせてゐたが、やがて靜かに立つて此方へ戻つて來た時には、その眼が、深い睫毛が涙に濡れてゐるのを杉山は見た。杉山も心から感謝せずにはゐられなかつた。
『難有う……佛も喜んでゐますよ。それ御覽なさい、その證據には、線香の煙があんなに高く立つてゐる！』
かう言つて、杉山は墓標を細く取巻いて騰つてゐる線香の方を見た。
お園は何か言はうとしたが、俄かに悲しくなつたといふやうにして、脇を向いて、手巾で眼を拭いた。
暫し沈默が續いた。
しかしそれもやがては始めの靜かな心の狀態になつて行つたといふやうに、お園はあたりを見廻して、

百九

『かういふ處にお墓になつてお終ひになつてはねえ。』

いかにもその若い細君の短い一生に撲たれたといふやうにして、お園は其墓の前に行つて立つた。

杉山にも種々なことが思ひ出されて來て、今更に哀傷の念が湧き上つて來るやうに見えたが、さうしたお園の言葉にも調子を合せる餘裕はなく、默つて持つて來た樒を花立の中に挿し、煙の騰つた線香をそのまゝ墓標の前に立てゝ、さて水を灌いでから、一枚取つて水に浸した樒の葉を、さながら自分の悲哀のシンボルか何かのやうに、ぴたりと新しい墓標に貼けたりして、長い間躊躇んで瞑目して手を合せた。

後に立つて凝とそれに見入つたお園の胸には、やさしい男の本當の心が深く染み渡るやうに全身に漲つて感じられて來た。購ひ難い、または見難い尊い心の世界にその身が入つて行つたやうにも、または見えないところに或る萬能の佛のやうなものがあつて、ゆくりなくかうしてかの女をこの墓に伴れて來て呉れたといふやうにも……。思はずかの女も手を合せた。

杉山は容易にその墓前から立つて來なかつた。瞑目して手を合せてゐるさまは、さながら墓の中の魂に對して親しげに物を言つてゐるやうにも、または生前のさま〲のことを思ひ浮かべて深い悲哀に浸

お園の眼にはところ〴〵障子の破れてゐるしんとした寺の本堂や、鷄が二三羽餌をあさつてゐる他には誰もあたりに人の影も見えない庫裡や、庫裡の井戸のすぐ傍の物干棹に女の襦袢や腰卷のかけつらねて干してあるのや、二三本ある梅の木に實が澤山鈴生りについてゐるのなどが映つた。かうしたさびしい處で墓になつた人のことなどが脈々と思ひ出されて、つゞいて、かうしてゆくりなくその人の墓に詣づるのも何かの緣だといふ風にお園には考へられて來た。

裏は一面のひろい墓地で、杉の疎らな木立の中に、周圍の松原から雜つて入つて來たかと思はれる松などが多い墓石の中に點綴されてあつた。手も入れないで延びたまゝになつてゐる要垣や、半ば壞れたまゝになつてゐる墓の扉や、さうかと思ふと、新しい花崗石の立派な墓などが際立つてあたりに目に着いた。

やがてある墓の前に來ると、杉山はづか〴〵とその中に入つて行つた。

『此處ですか。』

『えゝ。』

正面には、大きな舊い墓が三つも四つも並んで、その右の隅にそれと思はれる新しい墓があるのをお園は目にした。提灯は既に骨ばかりになつて、樒の青々としたのが半ば墓を埋めるやうにした。

置いてある氏名の新しく黑く書いてあるあか桶を取つて、好いと言ふのを先に立つて、その傍の井戸端で水を汲んだ。桔槹の大きく上下する音がギイときこえた。

『方丈さんゐたかや？』

かう杉山が上さんに訊くと、

『晝前はゐたつけが、さつき、どけぇか法事があるつて言つて出かけて行つたつけ。經讀むんけ？』

『いや、經は昨日、親類が來て上げて行つた筈だで、用はねぇんだがな。』

『さうけえ、昨日來たのが、あれが親類けえ。あの年取つたのは、亡くなつた人のお袋さまけえ？』

『さうだ……。』

『先生さあ、何うして、一緒に來なかつたや。』

『昨日は、何うしても學校が休めねえで、夜まで學校にゐたで。』

『さうけえ。』

線香を持つたり、花を持つたり、またお園があか桶に色花を持つたりして、山門から本堂へと眞直に、そこからまた右に本堂に添つて裏の林の中の墓地へと二人が並んで靜かに歩いて行くのを、上さんは見えなくなるまで見送つた。（そんなことはなかんべ……。親類のものか何かだんべ。あの先生は堅いだで、そんなことはねえ。）かう打消しながら、上さんは家の中に入つて行つた。

は行かれないやうな氣がして來ましたから、私にもお參りさせて下さいましな。』

杉山はちよつと躊躇したが、すぐ、

『それは難有い……。死んだ妻も喜ぶでせう。何うかお參りして下さい。』

『貴方にもお世話になつたし……。また、今日かうしていろ〳〵お話をうかがつて、何だかお參りさせて頂きたいやうになりましたから。』

『何うか、さうして下されば――』

で、杉山が線香を買ふために、その門前の小さな家に立寄るあとについて、お園もそこにあつた樒や色花などを買つた。

百八

頭を箒のやうにしてゐたそこの上さんは、學校の先生が一緒に伴れて來た此處等あたりに餘り見懸けない綺麗なお園を不思議さうにして見た。そして杉山の方に何か意味のありさうな笑顔を見せた。

それを杉山は見て見ない振りをしてゐたが、迷惑とは思はないまでも、何處かかう調子の合はないやうな、きまりのわるいやうな、誤解されては困るやうな、さうかと言つてまた却つてそれを得意にしてゐるやうな氣分が、それとなくその心の周圍に起つてゐるのをお園は見た。お園は先に立つて、其處に

ゐた時分とは、三四年も後の卒業でしたけれど、出來の好い方で、卒業する時にも一番で出たんです。』
『ぢや、よくお出來になつたんでせうね、惜しう御座いましたね……。何うしてまたそんな病氣が出たんですかねえ。』
『體はもとから弱い方でしたから、さういふ病氣のぢき出さうな體格でしたから……。それに、學校は何うしても衛生がよく行届いてゐませんからな。』
『惜しう御座んしたね。』
次第に、杉の古い樹は近くなつて、寺の屋根も、それにつゞいた山門も、山門の傍にある鐘樓も、はつきりその前に指されるやうになつた。田舍にしては、かなりに大きな寺であつた。しかもその周圍は依然として松原で、半ばそれに埋められるやうになつて見えた。
やがて近づいた山門の前には、墓掃除の番人が、其内職に線香だの樒だのを置いて置く小さな家屋が一軒ぽつんとして立つてゐた。
その前に來て立留つた杉山は、
『この路を眞直に行くと、村に出ますから……そこを構はず行つて、』と敎へかけると、それをお園は遮るやうにして、
『何だか變ですけども……お近附きにもなつてゐない奥さんですけども、何だかこのまゝ素通りして

暫く默つて並んで歩いたあとでお園はかう訊いた。

杉山は點頭いて見せて、『もう少し行つたところです。』

『さむしい處ですね。』

『田舍ですからね。』

かう言つたが、ちよつと一ところ明いたやうに松の途絶えてゐる方を杉山は指さして、『そら、そこに、屋根が見えるでせう。そら、松原の中に杉の大きな樹がある、そのすぐ下のところに――』

『えゝ、えゝ。』

『あれがさうです。』

『御先祖からの？』

『えゝ、さう。』

年若くして死んで、かうした沼のほとりの松原の中の寺にさびしく埋められた細君のことが更に一層深い哀愁をかの女に誘つて來た。お園は訊いた。

『奥さんは、矢張この御近所の方でいらしつたんですか。』

『いや、少し離れてゐるんです。河の上流二十里ほどの小さな町で生れたんですが、十二三の頃から、織物の出來る町に來て、それから縣の師範に行つたんです。』その頃を思ひ出すやうにして、『私が行つて

人間は一人で生れて來たんだから、死ぬ時も矢張一人で死んで行かなければならないんだ。何んなに愛したものだつて一緒に伴れて行くわけには行かないんだから。』それは、人間の孤獨と言ふことを證據立てるためにTが言つたものであつたが、しかもそれが今實際の事實としてかの女の胸に浮んで來た。

『世の中は思ひのまゝにならないことばかりですねえ。』

かう心から感じたやうにしてお園は言つた。

杉山にもお園の心が、態度が、姿が不思議にやさしくしほらしく映つて見えた。この前の時にも、(なんだ、酌婦ぢやないか。)といふ批判以上に何處か本當の女らしい氣分がしてゐたが、今は一層さうした感じが濃やかになつて行つてゐた。(酌婦にも、かうした眞面目な、素直な、本當な女があるんだな。)といふ風に杉山は思つた。

百七

沼はまだ見えてゐたけれども、ぐるりとそれを廻つて歩いて來たやうにいつかその大部分はあとになつてゐた。松原の中の路は猶ほ續いた。

草藪の中には、脊の低い山躑躅だの、山木瓜の花だの、名の知れない細かな白い花だのが雜つた。

『お寺はこんな方なんですか?』

『本當ですねえ……。思つてゐましても、生きて顏を見合せてゐる中は、本當に思ひ合ふやうなことは出來ないもんですからね。……でも、貴方のやうに、さう仰有る人すら澤山にはありませんよ。それだけでも、奧さんは何んなに喜んでゐらつしやるか知れないんですよ。』

『まア、せめて、さう思つてゐる中だけでも本當に思つて、お墓參りでもしてやらうと思つてゐるんですけども……。何うも、死んで了つては、しやうがありませんよ。今になると、どんなに重い病氣でも、どつと寢てゐても、生きてゐて呉れた方が好いと思ひますからね。』

『それはさうでせうとも、人情ですもの。』

杉山は暫し默つて歩いたが、やがてまた話をつゞけて、『不思議でした。死ぬまで私のことを心配して呉れて、いづれ一人ではゐないだらうが、何うか私の再生のやうな細君が出來るやうに、私が蔭ながら護つてゐるなんて言ふんでした……。それは氣はたしかでしたからね、死ぬまで……。あの病氣は皆なさうだつて言ひますね。』

『お可哀相にね。』

お園はかう言ふより他爲方がなかつた。愛した夫に離れて死んで行く女の悲哀が深く深く考へられた。生別、死別、世の中にはさうした悲哀は澤山にあるのである。合つたものは離れ、生れたものは死んで行かなければならないのである。かう思ふと、ふとTが言つた言葉が思ひ出されて來た。『何うしたツて、

百六

歩き乍ら、杉山は死んだ妻の末期の話などをした。未だにその姿は眼に見え、その聲は耳に殘り、生前の數々の追懷は、何ぞと言つては身に纏つて思ひ出されて來て、常にその悲哀を新にするらしかつた。

『死んで了つてから、いくら思つてやつたつて駄目ですけども、生きてゐる中に、もう少し本當に思つてやれば好かつたと思ひますよ。本當に、妻のして吳れた半分も此方はしてやらなかつたんですから。』

かう言ふのをお園はすぐ引取つて、

『さう仰有やるのが本當なんです……。奥さんはそれで滿足してゐらつしやいますよ。それこそ本當に、草葉の蔭から、かうしてお參りにお出でになるのを喜んでゐらつしやるに相違ありませんよ。』

かう言つたが、その自分の言つた言葉に引寄せられたといふやうに、急に涙ぐましい心持にお園はなつた。今更のやうに不仕合せな其身が、假令自分が死んでも、さうしたことを言つて吳れるものすらない此身が悲しまれて來た。

杉山もいつか染々した氣分になつたといふやうに、

『何うも人間はしやうがないもんですよ。生きてゐる中は、ちつとも本當のことは出來ないで、死んでから、始めていろ〳〵なことがわかるんですから。』

御座んしたのに……。それさへなしにねえ。貴方もさぞ……』

『いや、もう何うも仕方がないんです。若くつて可哀相でしたけれど、何うもあの病氣では、しやうがありませんからな。唯、殘念なのはもつと金でもあつて、あんなにわるくならない中に、海岸にでもやつて置けば、もう少しは生命が持つたかと思ふことです。しかし何うも仕方がないんですよ。これも死んだ者の不運ですから。』

『でもねえ。』

『何うも、人間ッて言ふ奴は、しやうがないもので、生きて居る中は、そんなに思はずに、死んでから、いろ〳〵役にも立たないやうなことばかり思ひ出して……』

『それはさうですともねえ。』かう言つて、お園は少し間を置いて、

『でも、貴方が、よく御看病でも何でもなすつたでせうから、奥さんも喜んではお亡くなりでしたでせうけども……』

『…………………』

何か言はうとしたが、新しい哀傷が胸に漲つて來たといふやうにして、杉山は口を噤んで了つた。松の微かに鳴る音がした。

『今日は四十九日です。』

『さうですか、まア。それでお墓參りに……。ちつとも知らないもんですから……』杉山の方を見て、『ぢや、あの時から、幾日も經たない中にお亡くなりになつたんですね。』

『さうです。あれが二月の末でしたから、あれから三十日ほど生きてゐましたかな。何うも爲方がないんです。』

『お可哀相にね。』

かう心から言つたお園は、若くつて死んで行つた細君を悲しまずにはゐられなかつた。ことに、女の方から戀をして、漸く思ひがとどいて、一緒になつたほどもなく、さうした不治の病ひに取つかれて、その愛した夫の傍から、否應なしに、永久に離れて行かなければならなかつた細君のことを思ふと、自分などは、まだどれほど仕合せだか知れないとお園は思つた。逢つたことのない人のやうにはお園には思はれなかつた。

『本當に、お可哀相でしたね。年はおいくつでした？』

『二十三でした。』

『まだお若いのにねえ。』

染々とした調子で、『せめてお子さんでもあれば、思ひの種にはなつても、それでも形見になつて好う

『今日は學校の方は？』

杉山は少し考へるやうにしたが、

『今日は學校は休みました。墓參りに來たもんだから……。』

『墓參？』

（誰方の？）とまで言はない中にふと念頭に浮んで來た考へをお園は自分で押へるやうにして、（もしやそれは奧さんでは……）といふ表情をしてお園が見せると、

『たうとう亡くなりましてね、あれも……』かう言つて杉山は溜息をついた。

『奧さんですか？』

『え……』

『さうですか。』強く撲たれたやうにお園は言葉を長く引張つて『さうですか、まあ……。ちつとも存じませんもんですからもうそんなにお惡かつたんですか。』

『いや、もう、駄目なことは、とうから駄目だつたんですけれど……』

かう言ひかけて止した杉山の言葉には、流石に新しい哀傷の情を離れることが出來ないといふやうな何處か淋しい悲しい調子が籠められてあつた。

『何時でしたの？　お亡くなりになつたのは——？』

杉山はすぐ先に立つて歩き出した。『あとに戻つても好いけれど、こゝを行つても、あそこの少し手前のところに出る路がある。その方が近い。』かう言つて、沼の縁を縫つたやうな、一面松原で、一面草藪の路をすた〳〵歩いて行つた。

お園はそのあとにつゞきながら、

『貴方の家は、それぢや、この近所にあるんですか？』

『僕の家？　僕の家は、これからまだ向うだけれど、そんなに遠くはないんです。』

『此間の家が――？』

『えゝ。』

『そんな方角になるんですかね。この間は、夜だつたから、ちつとも判らなかつたですけれども……ぢや、私は貴方の家のぢき近くにゐたわけですね。』

『あの料理店とは十町位しきや離れてはゐませんよ、僕の家とは？』

『さうですかね、まア、不思議ね。』お園は思はずこんなことを言つた。

百五

續いてお園は訊いた。

『つい、此間から。』
『あそこの方が面白いかね。』
『いゝえ、面白いとか、何とか言ふんぢやないんですけども、少し事情があつたもんですから。』
『…………………』
杉山は何か言はうとしたが、それはよして『そして、また何うしてこんなところを歩いてゐるんです？』
『昨日T町に用があつて行つて、遲くなつて泊つたんですの。ところが、路を間違へたんでせうかしら？　何だか此處に來て見ると、昨日歩いて行つたところとは違つたやうですから、誰か人がゐたら訊かうと思つてまごく／＼してゐたんですの？』
『あゝ、それでは、右に行く奴を左に入つて來たんだ……』
『矢張、違つたんですね、それぢや――。何うも變だと思つたんですよ。昨日は、こんな沼なんかなかつたやうに思ふのに、變だ！と思つて立つてゐたんですの。』笑つて見せて、『好い鹽梅だ、向うから人が來る。あの人に訊かうと思つてゐると、それが貴方だッたぢやありませんか。本當に不思議ねっ』
『奇遇だね。』
『これで、二度、お世話になるわけね。』『こんなことを言つてお園は笑つた。

出して、

『まァ、杉山さんぢやありませんか？』

と思はず聲を立てた。

男はちよつと不思議さうな顏の表情をして、俄かにかう呼びかけられた女を見たが、すぐそれとわかつたらしく、

『ホウ、これはめづらしいところで。』

と言つて、やつぱりなつかしさうに此方へと寄つて來た。

『何うも貴方らしいと思つて、さつきから見てゐたんですよ。』

杉山は莞爾しながら、

『それにしても、何うして、こんなところに來てるんです？』

『いゝえ、もう、私、此頃はもうA町にはゐないんですの……。今はね、ぢきこの向うにゐるんですけども……』

『向うつて？』

『それ、そこに、河の下に料理屋があるでせう。あそこにゐるんですけども……』

『あゝ、あそこに來てゐるのかえ。』かう杉山は言つて、『何時から？』

錆びた沼には、日が林を透して斜にさし込んで來てゐた。蘆や荻や眞菰の新芽がツンツン出てゐて黑く淀んだ水の上には、靑いまたは鈍色をした藻が一面に浮んでゐたが、中には白い花の咲いてゐるのが見えた。向うの岸に田舟が一隻浮いてゐるばかりで、路をきかうにも、人の影はあたりに見えなかつた。唯、つたつて來た路が、長く沼に添つてうねくとめぐつてゐるばかりであつた。お園は困つてあたりを見廻した。

矢張誰もゐなかつた。さうかと言つて、さつき若夫婦のゐたところまで戻つて行くには、既に餘りに遠く來すぎてゐた。爲方がないので、お園は暫しそこに立盡した。

かの女はかうして十分ほどゐたが、ふと氣が附くと、かの女の來た路ではなしに、松林の中途から出て來る路を靜かに此方にやつて來る一つの中折帽があつた。まだ遠いので、何ういふ人か、その眉目ははつきりわからなかつたけれど、兎に角次第に近寄つて來るらしく、好い鹽梅だと思つて、お園はそれを待つた。

百四

その姿は草藪のかげに、または松の影の濃淡の中に見えたり隱れたりして、次第に此方へと近寄つて來たが、眉目のいくらかはつきりして來た頃から、凝と眼をそゝぎ始めたお園は、いきなり其方へと步き

婦の働くさまを見詰めた。

暖かい、寧ろ何方かと言へば汗ばむほどの日影が、明るく靜かに女の白い手拭の上に照つた。草藪の中には、蕨が旣に木になつて、枝を出し、葉をひろげてゐるのがそこに雜つた。

かれ等とて、細かに内部に入つて見たならば、餘所目に見るほど樂しくもないであらう。姑とか小姑とか、その周圍のものに對する氣兼ねとか、さういふ浮世の苦勞は矢張その身のまはりに纏はりついてゐるであらう。しかし、少くともかの女よりは幸福である。かうして孤獨で、何も本當に摑んだものとてはないかの女よりは——。

またしてもかうした悲しい考へが簇つて來さうに、涙ぐましい氣分が誘はれて來さうに思はれたので、お園はそのまゝそこを去つて、急いで歩き出した。

靜かな松原の中の路が猶ほ暫し盡きずに續いた。

やがてその松原がいくらか疎らになつたと思ふと、そこにふと錆びた小さな沼があらはれ出して來るのをかの女は見た。(はてな!)とお園は思つた。ふと昨日歩いて來た時にも、矢張かうした沼があつたかしらと思つた。あつたやうにも思へれば、無かつたやうにも考へられる。あの時は夢中で話をしてゐたので、それと氣が附かなかつたのかも知れないが、かうした沼なんかなかつたやうにも思はれる。

(路を間違へたんぢやないかしら?)いくらか胡亂になつて、お園はまた立留つた。

しかも、それでも、それだけでも、さうした小さいシインだけでも、お園には羨ましい生活のやうに見えた。單純ではあるが、純で、本當で、何の心の蟠りもない樂しい生活のやうに見えた、しかも曾ては、さうした生活をつまらない生活と思つたかの女ではなかつたか。あゝして深い男女のことも、世に稀な歡樂のあることも知らずに、平々凡々に暮してゐる生活もつまらないと思つたかの女ではなかつたか。いかに淺はかに自らを知らないかの女であつたらう。お園はかう思つて、立留つて、凝とその二人の睦しさを見た。

百三

妻ば夫に向つて笑ひ懸け、夫は妻に向つて話し懸けつゝ、暫しは樂しい、心持の好ささうな姿をあたりの靜かな空氣の中にくつきりと見せてゐたが、やがて、その畠の右の隅の處に男が行つてサクサクと黃熟した麥を刈り始めると、女もそのまゝ元の位置に身を戻して、蹲踞み加減になつて、頻りに鎌を動かしてゐた。かれ等はかうして午近くまで働くであらう。畦から畦へと刈つては揃へ、揃へては並べ、並べてはまた刈るであらう。そして、午近くなつて、輕い疲勞と餓とがかれ等を凉しい木の蔭へと伴れて行くであらう。そこには土瓶に入れた水があるであらう。携へて來た辨當があるであらう。栄らしい栄とてもない麥飯も非常に旨く食べるであらう。こんなことを思ひながら、お園は猶ぼつとその若夫

此身に運がないのだ、それだけの運なのだ。それは何うも致し方がない。だから、そんなことは思はずに、少くとも自分だけは、その眞面目な力綱に縋つて、これから生れ變つたやうに本當にならなければならない。』かう思ふと新しい心が鮮かにかの女の胸に湧き出して來て、何も彼もはつきりと解つて來たやうな氣がした。次第に、麗らかな朝のやうな晴れ晴れした氣分になつて行つた。

曾ては、さびしい處、さびしい心細い他鄕と思つた松原も、今日は麗かに朝日にかゞやいて、そこに入つて行く折れ曲つた路も、かの女の心を惹くやうに思はれた。小鳥は好い聲を立てゝ鳴いた。をり／＼疎らになつた松林の間からは、農村の家々の屋根が見えて、鷄犬の聲が別天地でもあるかのやうに、のどかにあたりに聞えた。靜かな靜かな心持にお園はなつた。

村に添つた畠では、手拭をかぶつた百姓の若い妻が一人でさびしさうにして刈遲れた麥を刈つてゐたが、をり／＼その鎌にきら／＼と日が光つた。

と、見ると、かの女の歩いてゐる路の向うの路から、一人のこれも矢張まだ若い農夫が、鎌を持つて此方にやつて來るのが見えた。初めは別に氣も附かなかつたが、それはその畑に獨りでさびしく麥を刈つてゐる女の亭主であるらしく、やがてその傍に行くと、何かわからないスラングで聲をかけた。若い妻も鎌を止めて、立つてそして何か返事をした。

それは何でもないことであつた。來やうと思つた處に人が來て遲くなつたといふやうなことであつた。

お園は言つた。

百二

種々な思ひの果てはぼんやりしたやうになつて、お園は朝の田舍道をうかうかと歩いて行つた。醫者を乘せた俥がかの女を追ひ越して行くのも、向うから米俵を積んだ運送車がやつて來るのも、時間に遲れたらしい小學校の女生徒が泣きさうにして急いで步いて行くのも、何も彼もかの女の眼には入らなかつた。悲しいやうで、辛いやうで、そしてまた喜ばしいやうな氣分が一緖になつてその胸に簇つて來た。

（あそこの上さんは、かの女がさうした東京の男と一緖に出て行つて、一夜家を明けたことをN屋の主人に話すに相違ない。……だけど、そんなことは構はない。何かぐつぐつ言へば、その時は此方から暇を貰つてやるばかりだ。本當に、そんなことは小さなことだ。）こんなことをお園はひとりで口に出して言つて見た。

かう思ふと、Tが言つた言葉、（眞面目で、本當でありさへすれば、屹度新しい運命が來る。本當の生活が來る。それは今から豫言して置いても好い。）と言つた言葉が、殊に、はつきりと、色濃く、種々な多くの言葉の中に浮び出して思ひ出されて來て、それがかの女のこれからの力綱でもあるかのやうに感じられた。（實際、それで新しい運命がひらけなければ、それは此身がわるいのではない。それこそ本當に、

つきりとお園の眼の前に歷々と印象されて殘つてゐた。『矢張、駄目なんだね。一度犯した體の過失は、何うしても容易には贖はれないんだね。兄妹になつて世話をしやうと思つても、兄妹ではゐられないんだね。』かうTは笑ひもせずに言つて、(まだ、今はかの女は一人だから好いけれども、他にきまつた男と言ふものがないのだから好いけれども、こんなことは早くやめて、本當にお前のためを思つて、本當の兄妹になつて世話をしてやりたい。そしてかうした過失を償ひたい。)といふやうな意味のことを言つて、そしてまた溜息をついた。

さうした戀――戀と言つて好いか、それとも戀ではなしに愛と言ふべきものか。それは何と言つて好いかわからないけれど、兎に角かうした經驗は、これまでお園には曾てなかつたことであつた。涙と歡樂とが忘れ難く體に絡み着いて、その涙が單に悲しいとか、思ひのまゝにならないとかいふ涙でなく、歡樂もまた樂しいとか、嬉しいとかいふ普通の色戀の歡樂ではなく、心と心とが融け合ひ、魂と魂とが觸れ合ふやうな不思議な感じのするものであつた。何んな色戀でも、女の男に對し、男の女に對する二つの異つたものから自然に生じて來る喰違ひと言つたやうなものがあるものであるが、さうした心持はつひにお園に起つて來なかつた。お園は從順な、從順な羊であつた。かの女はTの言つたことを何も彼も點頭いてきいた。悲しいけれどしかも感謝なしには聞かれないやうな涙が終夜床を濡はすばかりにした。『さうですね、本當にちやんとした夫を持たなければ駄目ですね。』かう心から痛感したやうにして

かう言ひ交しただけで、Tはプラツトホームから長い橋を渡つて向うに、お園は獨りで淋しく停車場前の廣い通りの方へと出て來た。

停車場前の旅舍に寄つて、ちよつと話して行かうとさつきは思つたのであるけれど、さて獨りになつて見ると、それも詰らないやうな、あの上さんの顏を見たところで爲方がないやうな氣がして、そのまゝ眞直に歩いて行くのは止して、寺の裏の路を町はづれの方へと折れて行つた。

種々なことがごた〴〵と一緒になつて、かの女の頭の中に浮んで來た。昨夜、床に入つてからした、かに泣いたこと、流石のTも持餘して終には默つて腕組みをして床の上に坐つてゐたこと、あの女があつても好いから、何うか一緒に東京に伴れて行つて呉れと縋つて頼んだこと、Tがいろ〳〵にそれが不可能であることを說いたこと、(さうした戀をするのは、却つてお前のために好くない……。かう僕が言ふのはお前を捨てるのではない。却つてお前を拾ふのだ……。お前のためを思ふからだ……。それは、僕の言つたことは、あとになればわかるから。)とTが言つた言葉、それに對して、かの女はかなりに思ひ切つたことを言つた。それは、(表は立派に眞面目なことを言つて、裏では女に縋られない、捉へられないためのづるい手のやうなものではないか。)といふやうなことも言つた、それはさうでないのは、かの女にはわかつてゐたのであつたけれども、それまで言はずにゐられないやうな止み難い戀心であつた。Tはその時深い深い溜息をついた。その溜息――その深い溜息と凝とかの女を見たその眼とは、今でもは

もりなら、借金も出來るだけは出してやらうなど〻言つて呉れるやうなことをしやう。Tだとて、決してかの女を思はぬのではない。ただ、その思ひ方が普通の色戀とは違つてゐるのである。普通の色戀では滿足出來ない心持にTはなつてゐるのである。そしてそれはお園にも――矢張同じやうに辛い苦しい色戀を經て來たお園にもよくわかつてゐるのである。何うすることも出來ないかれ等の戀ではなかつたか。

　何か言はなければならない。また言ひたいことも澤山にある。しかし、かれ等にとつては、それはお互ひに今言ひ出すことは出來なかつた。かれ等の戀は今の狀態で滿足して別れなければならなかつた。二人は大きな寺の中のぬけ路を、靜かに默つて歩いて行つた。淡竹の藪には、午前の日が朗かに照つて、雛僧が頻りに山門の前を掃いてゐた。

百一

　停車場ではさう待つ間はなかつた。乘客の混雜した中、田舍の人達の何か聲高に話し合ふ空氣の中に半ば埋められるやうにして、碌々話もせず、別れをつける暇もなしに、匆卒に、

『ぢや、その中に……』

『お大事に……』

女の身の情けなさは、また、弱い女性の身の悲しさには、さうした本當の愛は言葉として、氣分としてわからないことはないのであつたけれども――けれども矢張、離れ心地がさびしく物足らなかつた。何んなに爲めになる、かの女の心の革新を圖るために有効な言葉であつても、言葉そのものよりも、Tが熱心にかの女に向つて心を注いで來て、すぐにも東京に伴れて行つて吳れた方が嬉しくもあり、賴もしくもあるやうな氣がした。しかし、さうした複雜した心を言ひあらはすことがお園には出來なかつた。またそれを言ひあらはし得ないやうな心の位置に今はお園は身を置いてゐた。

やがてかれ等は旅舍を出て、停車場の方へと向つて步いた。

『お前は、すぐ歸るのかえ？』

かうTは訊いた。

『え……』

『具合がわるくないかえ？』

『別に、具合がわるいといふこともありません……』

Tはあとを何か言ひたさうにしたが、しかもそれは言はない方が好いといふやうにして默つて步いた。お園にしても、Tがかの女を思つてゐないことはないのはよくわかつてゐた。さうでなくつて、何うして、昨夜かの女にあゝした金を吳れるやうなことをしやう。また、いよ〳〵田舍をよして東京に來るつ

『あゝ。』
『ぢや、また、その中、手紙を出しますから。その時は本當に相談相手になつて下さるわねえ。』
『いゝとも……』
『矢張、N屋の方は、餘り長く續けてゐない方が好う御座んすね。』
『その方が好いと思ふね。』
そのあくる朝、その旅舍を出る前に、かれ等はこんな話をした。言ひたいことは澤山にある。また言つても言つても盡きないやうな、いかに言ひあらはさうとしても十分にその心持を男に示すことの出來ないやうな氣分がお園の胸に一杯に滿ちわたつて、さびしい悲しい氣がした。さう思つてはいけない、また濟まないと思ひながら、しかも、矢張かの女の手からTが滑つて向うに行つて了ふやうに思はれて爲方がなかつた。
『だつて、私が困つて行つた時には、貴方は屹度相手にはしないに相違ない。』かう昨夜も度々言つたが、その時は、Tは、眞面目に、眞劍に、寧ろ妹でも叱るやうに、
『言ふ口の下から、女はすぐあゝ疑ふんだからしやうがない……。疑つてはいけないよ、本當に……。疑つてゐては、いつまで經つたッて、お前の本當の生活は建設されないよ。』と言つたが――そしてその言葉はお園はよくわからないことはなかつたけれども、それでも便りなさがわびしく心の底を占めた。

『よくわかりました……。でも、本當に、今日はいろんなことを教へて貰ひましたね。淋しくても、さうした貴方がゐると思ふと、何んなに心丈夫だか分りやしません。そればかりを力にしてゐますよ。』

『好いとも……』

『うそぢやないでせうね。』

『まだ疑つてゐるのか。しやうがないな。』

『さうぢやないんですけれどもね。ちよつと言つて見たんですよ……。なら、これから、私が手紙を上げても返事を下さいますね。東京に行つてお宅にあがつても、逢つて下さいますね。』

『あゝ。』

『屹度ですね。』

『くどいね……』Tは笑つて、『その代り、過ちは再びしないよ。今夜から本當の兄妹だよ。』

『兄妹？』

そんなことが出來ますかと言ふやうな顏をして、お園は艶に笑つて見せた。Tも一緒に笑つた。

百

『ぢや、もう、これからすぐ歸るのね。』

んなに遲いんでせうか。』かうTに訊いた。

Tは時計を出して見て、

『まだ十時少し前だよ。』

『なら、まだ早いわね。もう少し話しませうね。』かう言つたが、氣がついたやうに、『お酒を少し召上る?』

『さア、少し飮むかな。』

ベルを押してまた女中を呼んであつさりとつまみ物か何かで酒を一本持つて來て貰つて、それからまた長い長い種々な話がつゞいた。

塀一つ隔てた向うの活動館では、未だに盛んにやつてゐるらしく、チョボの入る音だの、板を叩くやうな音だの、觀客の騷ぐ音だの、癇高い役者の臺詞だのが、しめやかな二人の話の間を縫つてきこえた。

『ぢや、さうした方が好う御座んすね。厭なら、厭だときつぱり言つて了つた方が好う御座んすね。』かう言つたお園の話は、またN屋の主人のことに舞ひ戻つて來てゐた。

『そればかりではないよ。何でも、きちんとすることはきちんとして置かなければいけないよ。ぐづぐづして迷ふから、土臺がいつまで經つても立たないんだから……。今度こそ、この人はと思つたら、一生懸命に、眞劍にならなくつては駄目だよ。』

好い……』かうTは確信するやうな力強い調子で言つた。

九十九

旅舍の女中達の眼には、二人の狀態が初めから異樣に際立つて感じられて見えた。女が酒の酌をするではなし、男が戲談を言ふではなし、何か眞面目に、眞劍に話をして、時々二人とも默つて考へるやうにするかと思ふと、今度は男が比較的に高い聲をして、兄が妹でも意見するやうにして話したり、さうかと思ふと、嬉しさうに樂しさうに女が笑つてゐたりして、何が何だか少しも鑑定がつかなかつた。『變な人達ね。』などゝ女中達はかげで噂した。

でも、さつき並んで活動館に出かけて行つた時には、矢張普通の色戀の仲として點頭かれるやうな形があつたが、一時間經つか經たないのにもう歸つて來て、別に酒を命ずるでもなく、菓子を取るでもなく、さうかと言つて、寢ようとするでもなく、再び相對して坐つて、微溫い茶を絞つて汲んで、それを口に當てながら、また盡きない話を始めるのであつた。

女中は命ぜられた鐵瓶に湯を入れて持つて來たが、再び室を出て行かうとする時わざと、

『もう、お床を延べませうか。』

『まだ、好う御座んすよ。』かうお園は言つたが、女中の緣側を向うに歩いて行つたあとで、『もう、そ

い。』
『さうかえ、それぢや歸らうか。』
かう言つて、Tは先に立つて、群集をわけて、出口の方へと出て行つた。
宿に歸つて來てから、
『田舍の連鎖なんか、つまらんだらう?』
かうTが言ふと、
『詰らないことはありませんけども、考へると涙が出て來て、あんなもの見てゐられないやうな氣がするんですもの。』
『何うして?』
『だつて、貴方の仰有つたことについて、いろ〳〵考へなければならないことが澤山に澤山に出て來るんですもの。』
『なんだ……。あそこで、そんなことを考へてゐたのかえ?』
『だつて、私は淋しいんですもの。』
『いや、さつき僕の言つたことを信じて、眞面目にやつてゐさへすれば、ぢき淋しくなくなるよ。運が向いて來るよ。つまらぬ心配や苦勞はしない方が好いよ。それは確だ……。今から豫言して置いても

かの女は笑つて迎へなければならないではないか。

しかしTの言つたことは、力强いあるもの――即ち、自分がもう少し眞面目にならなければならない。今までのやうにうかうかと浮草のやうな生活を送つてゐてはならない。眞劍にあるものを攫むためには、觀音さまへ手を合せる位に眞面目にならなければならないといふ心持をかなりに深くかの女に打ち込んだ。身を投げやうとしてW川の畔りに立つた話をした時、Tは心からそれに撲たれて、一方かの女を憐むと共に、一方かの女のために、さうした心の經驗をしたことを祝賀したが、その時言つたTの言葉、『それを生かさなくつてはいけないよ。心から自分の不幸であることを痛感しなくつてはいけないよ。』と言つたその言葉の中に、いかに眞面目な、やさしい、人間の心があるかを思ふと、お園は感謝せずにはゐられないやうな心が湧き出して來て、涙が出て爲方がなかつたことを思ひ出した。自分の相手として、單に色戀の相手としてTを今まで視てゐたことが恥かしいやうにも、勿體ないやうにも思はれて來たことが思ひ出された。

『もう歸りませう。』

かう急にお園は言つた。

『まだ、好いぢやないか。』

『だつて、こんなものいつまで見てゐたつてしやうがない。それよりも、もつと貴方の話をきく方が好

た。何の芝居だかちよつとわからなかつたけれど、矢張、一人の女と二人の男の悲劇らしかつた。

『かうして立つて見るわけにも行かんね。』かう言ひながらTは下りた。

『隨分大入ですね……。』

『それはさうさ、三里も辨當を持つて、朝からやつて來るやうな連中だからな。』

お園はまた腰掛の上にのぼつた。

九十八

やがてちよつと隙のある處を發見して、そこで一時間ほど立つて見てゐたが、眼は舞臺の方へ行つて居るに拘らず、お園の心は常にその内部に向つて頻りに波立ちつつあるのを感じた。攫んだやうで攫んだやうでないTの言葉、それを攫んだと信じなければいけないとTは繰返し繰返し言つたのであるが、そのTの心持は決してわからないことはないのであるが、またさうしたTのやうな男を持つたことをも喜ばずにはゐられないのであるが、しかも淋しい悲しい思ひにお園は襲はれずには居られなかつた。矢張、何處まで行つても、かの女はさびしい孤獨ではなかつたか。希望を置いたTからも、何等的確なものを攫むことは出來ずに、明日は矢張あの旅舍に歸つて行かなければならないのではないか。『そんなことは小さな問題だ。厭なものなら厭と言つて了つて差支ない。』とTは言ふけれども、矢張、あのN屋の主人を

辛うじてその小さな腰掛の上に立つことが出來た。

『見えるかえ?』

『え……』

しかし肩の支へがなくては、危なくつてとても立つてゐられさうにもないので、Tはそのまゝお園の溫かい手を肩に感じさせながら默つてそこに立つてゐた。何か武士と娘とが出てゐる幕らしく、田舍廻りの役者の臺詞がいやに不調和に、癇立つて高くあたりに響いてきこえた。

暫くお園は見てゐたが、やがて下りようとするので、

『好いよ、好いよ、見ておいでよ。』

『でも、詰らないのよ。』

『下りるのかえ?』

お園はTの力を借りずに、そのまゝ下に身を卸した。

『貴方見て御覽なさい。』

『好いよ。』

『でも……。』

Tもちらつとその上に乘つて見た。武士がまた一人出て來た。前の武士との立廻りが始まりさうに見え

何處も彼處も、一杯で、舞臺を明かに見得るやうな場所は、容易に二人には見當らなかつた。『此方が好いかも知れない。』かう言つて、觀客の群をわけて、いくらかすいた方へTはお園を伴れて行つたけれど、其處でも舞臺の上の半分——役者の胸から上だけしか見ることが出來なかつた。

『駄目だね、矢張。』

かうTは匙を投げたやうにして言つた。

お園はそれでも、入らない以前とは、いくらか見たいやうな念が生じたらしく、頻りに群集の中をわけて、脊伸びをして、足を爪立てゝ、一生懸命にそれを見ようとした。

ふと傍を見たTの眼には、そこで菓子だの蜜柑だのを賣つてゐる店の隅に、小さな腰掛——今まで誰か腰掛けてゐてちよつと用事が出來て立つて行つたやうな小さな腰掛のあるのが映つた。

『ちよつと貸して呉れ給へ、ぢき返すから……。此處にゐた人が來たら返すから。』かう言つてそれを引張つて來て、そこに立つて熱心に舞臺の方を見てゐるお園の袖を引いた。

『好いの? 借りて?』

『好いさ。』

で、お園はそれに乘らうとしたが、急に中心を失つて、危く倒れかけやうとした。Tは急いで半ば抱へるやうにしてそれを支へたが、お園は半身をTに寄せ、右の手で、しつかりTの肩につかまりながら

Tは言つた。

『だから、さつき報酬的の心がなくならなければ駄目だと僕が言つたのだ。お前と僕との間にしても、だから、體を合はせることが、色戀が、目的ではないと言つたのだ。つまりそれ以上にお前のことを思ふと言ふのだ。だから、他日、お前が本當にかうした生活から、男一人女一人の生活に入ることが出來れば、一番先に喜ぶのは僕だよ。』かう言つたが、急に悲しさうに、『でも園ちやん、僕は漸く此處まで來た。此處まで來るのは辛かつたよ。』種々思ひ出すやうにしたTの眼には涙が光つた。

九十七

『活動でも見せてやらうか。』

そんなものは見なくつても好いと言ふのを、だつてまだ早いからと言つてTはお園を伴れて出懸けた。賑かな灯、物を賣る店、あたりには男や女がぞろ〳〵通つて、淋しい田舍町にも似合はず其處だけは切離したやうに明るい光線が渦を巻いてゐた。闇夜の空は晴れて、星がきら〳〵と瞬くやうに美しく光つた。見かけは大きな活動館であつたけれど、入つて見ると、一等席も二等席もないやうなごた〳〵とした場所で、立錐の地もないやうに詰つてゐる田舍の觀客の頭が芋の子でも洗ふやうに黑く一杯に滿たされて動いてゐるのが見えた。役者の言つてゐる臺詞、碌々調子も合はないやうな鳴物、行儀の惡い觀客の囁き、

思つてゐることを遠慮なく打ち明け、そして猶ほ互に思はうとする戀ではないか。その間には、物質も、利害も、爭鬪も、不純な手管も何も彼も入つてゐない。同胞の愛、骨肉の愛と更に異るところのない戀ではないか。明日は別れて行つて了つても、お互に一生の間忘れずに、また艱難に逢つた時には、言つてやりさへすれば、いかやうにしてもその援助をしやうと男のいふ戀ではないか。これ以上に、かの女はTに對して望むところがあるであらうか。かうした情は、愛は、かの女の要求を直ちに容れて、一緒に東京に伴れて行かうといふ戀よりも更に一層深い本當のものではないか。何故なら、かの女からは何物をも求めずして、そしてかの女のために永久に思ふことを忘れないと言ふのではないか。

『もう、よくわかりました。本當によくわかりました。』

かうお園は眞面目な顏に嬉しさうな色を湛へて言つた。

旅館の女中達――さつきから、かうして坐つて、酒も飮まずに、戲談も言はずに、また膳が運ばれて來ても碌々お酌もせずに、ちつとも色戀といふやうな態度を見せないお園を不思議さうに見てゐる女中達に對して、かうしたTのやうな、眞面目な、深切な、本當にやさしい男を持つてゐることをお園は誇りたいやうな氣がした。またさうした女中達に比べて、自分が何段も何段も上に浮び上つたか知れないやうな氣がした。(本當にさうだ。信じなければ駄目だ。信じさへすれば、何事でも出來ないことはない。)

かう思つたお園は、新たに心の光明を得たやうな氣がした。

九十六

それは不思議に眞面目な、センチメンタルな、いろ〳〵なことの取集めて胸に簇つて來るやうな夜であつた。お園には何も彼も思ひ出されて來た。最初の男に別れた時のことも、溫泉場に澤山に集まつて來た放蕩兒のことも、ある男にあとをつけ狙はれて當分は家に隱れてゐなければならなかつたやうなことも、何も彼も……。自分のやつて來たことには、皆なそれ〴〵その時々の理由があつて、別に惑ふところもなく、繪卷に繪卷を重ねて、時には浮氣に、時には利害に、また時には自暴に、鐵火に、俠氣に、義理と人情の柵に、一つ一つさま〴〵の異つた光景を描いて殘して來てはゐるけれども、しかも、今度のやうに、深く本當のことを考へさせられるやうな心の位置にその身を置いたことは、つひぞこれまでに一度もなかつたのであつた。お園は、自分の一生の繪卷の中の最も荒凉とした、また最も色彩に乏しい、艱難と不如意との荒野の中にさまよつてゐるやうなその數枚の繪の中に、かうした一夜があらうとは思ひもかけないやうな氣がした。『さうですね、本當にさうですね。N屋の主人のことなんか何うでも好いんですね。そんなことは、小さなことなんですね。本當に世話になるならなる、ならないならならないときめて了へば好いんですね。』かうお園は痛感したやうにして言つた。

これでも戀かと思はれるやうな戀ではないか。自分の心のまゝを隱すところなく言ひ、且つまたその

―しかもその女が此處等の酌婦らしい扮裝をしてゐるといふことが、早く諒解を上さんに與へたらしく、そのまゝちやほやと迎へられて、やがて二人は裏の中庭に面した離れた六疊の一間へと案内された。

『好い家だね。』

『え。』

かう言つたが、そのまゝ疲れたといふやうにして、ぐつたりと體を、足を横にしてお園は坐つた。

『疲れたらう？』

『え、隨分……何しろ、かなり歩いたんですもの。』

『それに、理窟ばかり言つてきかせたからね。』

かう笑ひながらTが言ふと、

『でも、本當に、私のためになりましたよ。誰もあんな話をして呉れる人なんかなかつたんですもの……。つくぐ〵私も考へましたわ。これからは了簡を入れかへなくつては駄目だと思ひましたわ。矢張、女はちやんとした亭主を持たなければならうそね。』

『それは、さうとも……。お前にも、何うかさうなつて貰ひたいね。そして、かうして二人で歩いたことを、昔話にして話したいもんだね。本當だよ、眞面目でなくつちやしやうがないよ。一生男から男へ移つて行かなけれやならないからな。』

『しかし、今日はもうどうせ好いんだらう。泊つて行つても……。』

『でも……。』

『歸るのかえ？』

『歸らなくつても好いには好いんですけども……。』

『それぢや、活動でも見て、今夜は遊ばうか。』

かう言つたが、ふと、其處に小綺麗な、ちよつとした旅館兼料理屋らしい家のあるのをTは見て、

『此處は何うだえ？』

お園もちよつと覗いて見たが、

『あ、こゝが富士屋だ。何處にあるかと思つた？　何でも、T町の活動のある近所だとは聞いてゐたんですけれども、何處にあるのかしらとさつきから思つてゐたんですよ。此處は、町でも好い旅館ですよ。』

『ぢや、さうしやう。飯でも食つて、活動でも見ようぢやないか。』

『え……。』

で、二人は入つて行つた。それは一人客などは、じろ〳〵と顔やら扮装やら持物やらを見られて、『生憎、お座敷が塞がつてをりまして、』などと斷られるやうな家であつたが、女と一緒であるといふことが――

二人は停車場を横に掠めて、靜かに町の通りの方へと歩いて行つた。

九十五

お互ひに今夜を何うしやうかといふことは問題であつた。T は過失はもう再びすまいと思つてゐる。お園もさうした色戀の心を起さうにも起されないやうな氣分になつてゐる。それでは、二人は物でも食つて靜かに話でもして、本當の同胞のやうにして淸く別れようか。しかしそれも出來なかつた。二人は彼方に行つたり此方に行つたりして、日の暮れ近くまで、町やら、屋敷やら、城跡やら、活動小屋のあるあたりやらを歩いた。

東京から來た子芝居の連鎖劇の畫看板が夕暮の空氣の中にぼんやり見えて、處々にはもう灯のついた家もあつたが、そのあたりのさまはやがて來る夜の賑かさを想像させるに十分であつた。飮食店の軒を並べたところから少し行つて奥の方を覗くと、出來てからまださう日を經たない大きな活動寫眞館が、周圍に電氣やら、酸漿提灯やらを無數に美しく輝かして、藝者を伴れた男や、酌婦らしい女や、または町の娘達が、既にがやがやとその館の附近に渦を巻いて集まつてゐるのをかれ等は見た。

『何うする？　何か食はうか。』

『何うでも……。』

『好いよ、好いよ。』

と言つて、それを腕にかけるやうに抱へて持つて歩いた。

T町に入らうとするところで、

『何處に行くんだね？』

『何處ッて、まだきめてもないんですよ。』

『停車場前へ行くかえ？』

『さア、あそこへ行つたッて、つまりませんね。』

『さうだな……』かうTは言つたが、『まアもう少し歩かう。……今日は何か御馳走してやらう。園ちやんも、今日はのんきに一日遊ぶつもりで、勝手にするさ。』

この園ちやんがお園に一種變つたはづかしさを覺えさせた。河添ひの旅舍にゐた初めの頃は、Tはよくこの『園ちやん』を使つたものだつた。

普通ならば、かうしたTの態度に滿足せずに、猶ほ深く甘えて突込んで行つて、『園ちやんなんて水臭いわ。』とか、『人を妹扱ひにばかりしてゐる。』とかなんとか言つて、そのまゝにはして置かない揚合であつたけれども、Tの話の眞面目であつたのと、一々深くその言葉がお園の胸に染み込んでゐるのとで、さうした輕い浮はついた態度に出ることは出來なかつた。それがお園には悲しいやうな氣がした。

さうだ。男女の間も普通には皆さうだ。……併し、僕はさうぢやない。僕はいつでも、お前の本當の生活をするための援助はいつでもしてやる。いつでも遠慮なく相談する方が好い……。』暫し途切れて、『これも何かの緣ぢやないか。突然、あゝいふところで逢つて、その逢つた時から、理由なしに、お前が僕を引きつけて、兎に角あの時、あゝいふ眼にお前を逢はせたといふことは、通り一遍に、袖を觸れて通つて了ふ人々とは、何處かに違つた何物かがあつたに相違ない。だから本當にさうする方が好いよ。僕はお世辭でも何でもなしに、本當にさう思つてゐるんだから……』かうTは染々した調子で言つた。

お園は何がなしに、涙が出て、急には何も言ふことは出來なかつた。

かれ等の前には、田園は既に盡きて、自堊の土藏と、製粉會社の大きな工場の烟突と、信號柱のそれと指點される停車場とを持つたT町が既にその前にあらはれて來てゐた。麗かな少し暑い位な午後の日影は、茶色がゝつたTの薄い外套とそれと並んで歩くお園の派手な納戶色がゝつた蝙蝠傘とを照した。行違ふ人達は皆な振返つて見て行つた。

『暑いね、なか〳〵。』

かう言つて、Tは長い話から俄かに自分に返つたやうにして、薄い外套を右の手で脫いた。

『持ちませう。』

かう言つてお園が寄つて來るのを、

いやうな念が滲むばかりに心の底から湧いて來た。

『お前は、さうは思はないかね。兎に角、かうした男を――かうまで男と女の苦惱を嘗めて來て、男と女の苦惱のためには、何んなことでもして一臂の力を假すことを惜しまない僕のやうな男を、色戀でなしに、このさびしい辛い人生の伴侶として持つといふことは、非常に心丈夫なことだとは思つて呉れないかね。そしてさうした伴侶は、戀人以上、または兄乃至伯父以上に、本當に力になり、賴りになる伴侶だとは思つて呉れないかね、矢張、女だから、體を合せる戀人でなくつては不安心に思はれるかね。』

『そんなことはありません。よくわかりました。』

お園の眼には涙が光つた。

九十四

『お前の今の考へでは、N屋の主人を捨てゝ、僕と一緒に東京に出たいと思つてゐるかも知れないけれども、しかし、それはいけない。東京に出るなら出るで、もつと眞劍に、眞面目に考へて見なくつちや――』かうTは言つたあとで、『本當に眞面目に、眞劍に考へたことなら、いつでも、何んなにでも力になつてやるよ。かう僕が言ふと、それは普通のお世辭で、色戀でもないのに、又たとへさういふことが一度や二度はあつたにしてもさうした言葉には縋ることは出來ないと思ふかも知れない。世間は皆な

ことも出來なかつたといふ。普通ならば、男の意地とか、またはその女の爲に金をつかつたとか、これほど心と情を見せても此方の心がわからないかとかいふ形で意地わるく女を把持してゐるものだが、さうでなしに、その女が必死にTのために必要であつたといふ純な心で、Tは竟に竟に捨てる氣にはならなかつたといふ。そしてそのため、女は何うであらうとも、此方だけは、何事があつても、何んな屈辱を女が此方に示すやうなことをして見せても、變らずに、絶對に女を愛してやらうといふ心を起したといふ。それからといふものは、その決定を得たために、心が色戀などといふ、報酬的のところに留つてゐずに、非常に安らかになることを得たといふ。さうしたTの話を聞いてゐる間、お園は何處となく涙の胸にあふれて來るを覺えた。かの女は曾てさうした男の深い戀に逢つたことはあるであらうか。さうした深い戀心をかの女に對して感じなければならないやうな位置に度々男を置いた經驗はあるけれども、男は決してTの言つたやうな深い心を曾て一度でも注いで來たことはあつたであらうか。皆な單純に、怒つたり恨んだりして、そのまゝ向うに行つて了つたではないか。

『それほど思はれた方は仕合せですね。』

かうお園は言はずにはゐられなかつた。

成るほどそれほどまで思はれて、猶も女が男を捨て、男が女を捨てることは出來ないに相違ない。お園はTの話の中に言ふに言はれない人間の深い魂のあるのを見落すことが出來なかつた。難有い、難有

道ではなかつたか。

九十三

お園には夕暮の河水に面して立つた時のやうな眞面目な悲しい心が一杯に胸に漲つて來た。しかしそれは單に自分の願望が遂げられないためといふやうな單純なものではなく、自分の過去が振返られると共に、Tの言つた言葉なり說明なりの中にいかに本當な眞面目な心持が潛んでゐるかといふところに、ひとり手に釀されて來た人間の悲哀といふやうなものであつた。お園は何も知らずに、折角味ふべく理解すべく置かれた境遇をも運命をも、何をも味はずに、理解せずに夢中でやつて來たことを思つた。浮草のやうに今日は西、明日は東といふほどではなかつたにしても、要するに、浮はついた心持で今まで送つて來たことを思つた。『さうなるのは當り前ぢやないか。』Tばかりでなく、自分でも、さう言つて自分の腑甲斐ないこれまでの生活や心や魂を鞭うちたいやうな氣がした。

話すところに由ると、Tは色戀のあらゆる辛さを嘗めたといふ。2でなしに、3として存在しなければならない苦惱を散々に嘗めたといふ。女を他から離して自己のものにするためには、女の生命を奪はうかと思つたことも何遍あるか知れなかつたといふ。それでも――それほどに辛い眼を見せられても、それでもTは女を捨てなかつたといふ。愛する心と憎む心とが渦のやうに一緒に亂れ合つて、何うする

ら男へ、中年になつてからは、金のある男から男へ、老いては、止むを得ず女房子のある一人の男に滿足して、萎びて日蔭者となつて了ふのがその大團圓である。

『つまり、なるやうにしかならなくなつて行つて、すまして行くからですね。』

お園はかうTに言つた。

『さうだ……。だから、さういふ運命にいやでもなつて行つて了ふんだ。先へ先へと考へずに、あとからあとへと廻つて行くやうになつて了ふんだ。人間はそれぢやいけない。自分の思つたことは、正しいことなら何うしても、何んな思ひをしても、佛樣に手を合はせてまでも、通さうと思ふ位に深く考へて見なけれやいけない。』

『本當ですね。』

かうお園は染々身に思ひ當るやうにして言つた。

靜かな田舍道を並んで縺れるやうにして歩いて行くかれ等が　かうした話をしてゐようとは誰が想像し得るであらうか。甘い色戀の中としか見えないかれ等を。または人目にも羨ましいと思はれるやうに打解けて話して行くかれ等を。現に、その時分、かれ等の出て來た料理屋でも、上さんや女中が寄つて、種々かれ等の甘い噂をしてゐたのであつた。

しかもお園に取つては、色戀どころが、深い深い忘れられない印象を與へられたそのT町までの田舍

Tにだけは隱さうとは思はなかつた。

N屋の主人に身を任せたのも、實はその上さんに對する反抗のためだといふことを話した時にはTは、

『それ見給へ、それがいけないと言ふんだ……。それが本當でないと言ふんだ。自分の身が假令漂泊しなければならないからと言つて、それで好い加減に、樂な方に身の振り方をきめて了ふからいけないのだ……。だからいつまで經つても、男から男へと移つて行かなければならなくなるのだ。山の旦那のことだつてその通りだ。此方からもつと深切を見せてやらなければならない所だつたのだ。それをさうはせずに――つまり辛いから好い加減にして忘れるなりやめるなりするから、その辛さの程度が低ければ低いだけそれだけ、また此次ぎも同じやうなことをする段取りになつて行くのだ。何遍も何遍も、人によつては、一生同じことをして暮して行かなければならなくなるのだ。さういふ女が澤山あるぢやないか。』かう言つてお園の心の底を動かすやうにした。

『本當にさうですね。』

お園にも、Tといふ人が何ういふ人であるかといふことが、次第に飲み込めて來た。成ほどそれはさうであるとお園は思つた。これ迄かの女の經て來た閱歷を振返つて考へて見ても、皆なその通りである。Tの言つた通りである。否、彼女の經て來た閱歷がさうであるばかりではない、さうした境涯に生きてゐる女達は皆なさうである。さうでないものは一人もないと言つてもよい位である。若い中は好きな男か

『今は、何うなすつて?』

『まだ、何うにもなりやしないけれど、そのまたあの女が、その戀ひした男を本當に攫むことが出來ないで煩悶してゐるんだよ。向うが矢張、女を玩弄具にするやうな質の男だからね。』

『世の中は皆なさうね。いたちごつこね。山の旦那だツて、またあの山の女だツて、矢張さうですからね。何うしてかう世の中は、いすかの嘴のやうにチグハグになるやうに出來てゐるんでせうね。』

『皆ないゝ加減な所で、面白半分にやつてゐるからだよ。本當でないからだね。』

『本當にさうですね。』お園もかう心から言はずにはゐられなかつた。

九十二

お園が密かに胸の底に抱いてゐる欲望――もしTにさういふ氣があつたなら、假令Tに女があつても構はないから……東京に一緒に伴れて行つて貰ひたいといふ欲望、その欲望をも、初めの中はかなりに強く、はつきりと把持してゐて、Tの理窟つぽい、眞面目すぎる言葉や態度を、寧ろ水臭いやうにも、またはTの隙を見て追つて行くかの女を防ぐための手管のやうにも思つてゐたが、次第に、さうした自分の欲望は失せて、Tの言ふことが、またTのかの女の爲に戀以上に、兄か伯父かと思はれるやうに深切に、爲めを思つて言つて呉れることが、染々とお園の胸にも染みわたるやうになつて來た。お園はもう何も彼も

と、他から手を出されるんだから……。しかしあそこの主人が手を出さうとは思はなかつたね。堅さうな人だつたがな。』

『堅いには堅い人ですけどね……』かう言つて、お園は長くその主人の世話になつてゐる氣はないといふやうな話をそれとなく匂はせた。

『そんなことを言はずに、世話になつたら好いぢやないか。』

『もう懲々……お上さんのある人には、つくづく懲りましたからね。第一、罪ですもの。女同士が、味方にならずに、敵になつてゐるのは厭ですもの。』

『それはさうだね。……何うしても、男と女とは二人が本當なんだね。二人で、本當にお互ひの魂を握むやうにするのが本當なんだね。』

かう言つて深く考へるやうにしてTは歩いた。お園も默つて歩いた。

『僕もあれから、隨分いろんな目に逢つたよ。』暫くしてからTは言つた。

『何うなすつたの？　一體――？』

『あの女が他の男に眞劍になつて戀ひしたさまを、ぢつと默つて見てゐなければならないやうな眼に逢つたんだよ。お前は山の旦那を振放つて、此方に來て、いつそ身を投げやうとしたさうだが、僕はそれを振放たずに、ぢつとして見てゐたんだよ。辛かつたよ。』

ぎ、蠶豆の實が大さく目につくやうな田舍道を、並ぶやうにして歩いて行つた彼等の間には、次第に話が話に纏はり、心が心に絡み、それからそれへと深い底の絲を引き出されて來るやうにして、お園もいつかその身の上話をも殘すところなく打明けて話した。これまで誰にも言はなかつたやうな身を投げやうとした話をも、一里の闇の路を教員と提灯をつけて歩いて來たことをも、水たまりがあつてそれを男の手に縋つて辛うじて飛越えた話をも……。否、更に進んで、今の身の上——河添ひの旅舍からK町へ、K町から更に此處にやつて來た紛糾について話した時には、流石に、N屋の主人に圍はれてゐるとは言ひ切つて了ふことが出來なかつたので、未だにN屋の主人に執念く追ひ廻されてゐるやうにして話したが、それを聞いた時にはTは少からず動かされたらしく、『ふむ、ふむ、』と言つて熱心にきいてゐたが、急に、圖星を射でもしたやうに、『それぢや、N屋の主人に無理に手込めに逢つて、それであそこに來てゐるんだね、』と言つてお園の顏を凝と見詰めた。

『さうぢやないんですよ——』

かう慌てゝお園は打消したけれども、サッと顏が赧くなつて來るのを何うすることも出來なかつた。

『いゝやね。言つて了つたつて……。お前なんかに取つては、體ぢやなくつて、心なんだから……。節操がそのすべてぢやないんだから。』かう慰めるやうに、何もきまりをわるがる必要はないといふやうにやさしく言つて、『女だから、何うもしやうがないんだね。ちやんときまつた男があつてさへ、まご〳〵する

『なければ、歩くのかえ？』

『でも、好い氣候ぢやないの、半里位のんきに歩くのも好いぢやありませんか。話しながら歩く方が車に乘るよりいくら好いか知れやしない。』

Tは爲方がないといふやうにして、お園について歩いた。

『家で、變な顏をして見てたね？』

『見てゐたッて、構ひやしませんよ。私、あそこに、女中として來てゐるんぢやないから……。客分として來てゐるんですもの。』

その理由を突込んできいて來たなら、すぐ打明けて話さうと思つたけれども、Tは別にそれをあやしみもしないので、お園は默つて靜かに歩いた。かうしてTと歩くのは、お園には何となく嬉しかつた。色戀であると同時に、何處か兄さんのやうでもありまた伯父さんのやうでもあるのが賴もしかつた。どんな勝手な眞似でもして、縋つて、すねて泣いて困らせてやつても構はないやうな氣がした。路の兩側の草藪の中には、小さな山躑躅が燃えるやうに所々に雜つて咲いてゐた。

九十一

少し汗ばむやうな六月の午後、黄熟した麥の刈り殘されたのも最早少く、水田には綠の長けた稻が戰

『さうしても好い。』
餘り進まないのを强ひてさういふことにして、お園は店に來て、半日ほど暇を貰ひたい話を上さんにした。上さんはいやに笑つて、(何も餘所に行かなくつたッて、此處でも好いぢやないか、邪魔をしやしないよ。)と言つたやうな表情をしたが、それでも別に厭な顔をも見せなかつた。お園はみづから辯解するやうに、『もと、東京で恩になつた旦那なんですよ。丁度、此方に來た次手に寄つて呉れたんですの。そんなんぢやないんですのよ。それは、お美喜さんに訊いて見れば、わかるわ。固い旦那なんですもの。ねえ、お美喜さん。』などゝ其處に來たさつきの女中に話しかけた。
二階のTは、お園がさう言ふので、午飯をすましたり、勘定をしたりして、やがて其處から出懸けた。
店を出て、五六間此方に來てから、
『何處へ行くんだえ?』
『T町へ行きませう。』
『歩いてかえ?』
『近いんですよ、T町へは。さうですね、半里位しかありませんよ。』
『半里ぢやきかないよ。』
『なら、もう少し歩くと、車があるかも知れないから、あつたら乘りませう。』

かう言ひ出した。

『此處ぢやいけないのかえ。』

『いけないことはないけれど、まだ來たばかりだし、貴方が泊つてゐらつしやるにも何だか氣詰りでせうから、ちよつと出て見ませうぢやありませんか。』

『…………。』

『いやなの？』

『いやぢやないけど、お前は好いのかえ？』

『それは構はないわ。斷つて行きさへすれば――』

『此處でも僕は構はんけども……』

『いろ〳〵話があるんですよ。私だつて、貴方があゝした薄情な眞似をして歸つて行つてから、いろいろな目に逢つたんですからね。死なうかしら？ と思つたこともあるんですからね。私が嫌ひになつても、話だけは何處かでゆつくり聞いて貰はなくつちや――』

『それはいくらでもきくがね。』

『此處では、ちよつと具合のわるいことがあるんですよ。それは、あとで話せばわかるんですから。ね。お酒はもうよして、御飯でも食べて、それから出かけませうよ。』

て、『お前などの考へでは、色戀ッて云ふことは、唯、體を合はせることばかりと思つてゐるのかえ？』

『…………』

『さうかえ、何うだえ？　さうならさうで、さうした迷ひから覺めなければいけないね。體を合せることも大切なことには違ひないけれども、それ以上に、色戀は本當のことがなくては駄目なんだよ。さうでなくつちや、いくら男から男へ移つて行つたつて駄目なんだよ。體を合せるのは、魂を合はせるための方法だよ。體を合せてゐれば、おのづから魂も合ふやうになるにはなる道理だけども、それよりももつと大切なことがあるんだよ。體を合はせてゐたつて、魂は一生合はずにゐるやうな夫婦も、あつちこつちにざらにあるぢやないか。だから、お前のことを考へないどころぢやない。體を合はせるばかりでなしに、それ以上に、本當にお前を思つてやらうと僕は思つてゐるんだ……。だからこそわざ〳〵やつて來たんぢやないか。』

九十

兎に角、此處では、詳しい話も出來ないので、何處か、二人きりでゐられるやうな處をあれかこれかと心の中でさがしてゐたお園は、

『T町へでも行つて見ませうか。』

しくなつたといふのかね？』

『さうでもないですけどもね。』

『ぢや、薄情になつたやうに見えるかね。』

『そんな風にも見えませんけれどもね。何處かかう……』お園は言ひかけてよして、また笑つて見せて、

『ちよつと言ひにくいわね。』

『言つて見給へよ。』

『さうですね、色戀とか、何とか言ふよりも、兄さんとか、伯父さんとかに逢つたやうな氣がしますね。』

『ふむ、さうかな……さうだらうな。』

ちよつとTは考へて、『何うしても、さうだらうな。僕の心持が今さうだから。お前に逢つても、色戀か何とか言ふことよりも、お前の力になつてやりたい。お前の賴りになる人になつてやりたい。たとへば、お前が相談して來ることでも、成るたけはそれを出來るやうにしてやりたい。もし物質で出來なければ、言葉だけでも力になつてやりたい。さう思つてやつて來たんだから――』

『ぢや、もう、私なんかのことは考へてゐないのね？』

『さう言ふから駄目だよ。さうぢやないよ。誤解しちやいけないよ。』Tはぢつとお園の顏を見詰め

うな眞面目な話ばかりをした。お園にしろ、女中にしろ、ちよつとでもそれから一歩先に切込んで入つて行かうとするとTは默つてたゞ盃を口に當てた。

女中のゐなくなつた時、

『ちよつと逢はない中に、貴方は隨分變りましたね。』

かうお園が言ふと、

『さうだらうね。變つたらうね。いろんなことがあつたからね、あれから。』

『何うなつたんですの一體？　本當に？』

『あとで話すよ、ゆつくり。』

かう言つたが、持つてゐた盃を下に置いて、

『それにしても何う變つたね？』

『何うつて、別に言ひやうはないけど、眞面目になつたわねえ。』

『元から眞面目さ。』

『それは、先だツて眞面目でないことはなかつたけども、一層眞面目になりましたね。』（もう私なんか相手にしては下さいませんね。）といふ表情をお園が見せると、

『言はば、まア、何う言ふんだね？　馴れられないツて言ふやうな形かね？　それともまた氣むづか

つの肌に刄を當てるか、でなければすつかり自分のものにするかしなければ生きてゐられない)ッていふやうな境まで通つて來たんだからね。ところが不思議なもんだ。さういふ風に、相手を自分のものにしやうといふ心を失くして、唯、向うを愛する、自分が愛さなければならないものだから愛する。かういふ態度に出て行くと、お互ひに、お互ひの心持がよく解つて來るものだよ。さうした男に、薄情の刄を猶ほも當てる女は恐らくはないね。もし、あるとすれば、それは此方の思ひやうが足りないのか、それとも向うが低能なんだね。さういふ人は寧ろ憎むよりも憐れんでやらなければならないやうなもんだね。」

半分しかわからなかつたけども笑ひに打消して了ふには餘りに眞面目なTをお園は見た。(暫らく逢はない中に、何うしてこんな風になつたらう。)かう思ひながらお園はTを凝と見詰めた。Tにも大きな心の悲劇があつたらしいのがかの女にもわかるやうな氣がした。

八十九

Tの話やら、態度やらからお園が捜し出して來たものは、かの女が逢はない以前に思つてゐたものとは、丸で違つたものだつた。或はTは別な人になつたかとさへ思はれた。洒落や、歡樂や、通や、粋な心持や、つまり女が隙をもとめて細かに且つ巧みに切り込んで行けるやうな餘地は少しも持つてゐずに、否、持つてゐてもあらはに現はさずに、現に、女中を傍に置いても、二人の關係などは少しも疑はれないや

來たよ。つまりその相手を自分のものにしやうと思つたり焦つたりした心がいつか一轉化して、それがわるいのだ。いくら愛したものだと言つて、體も別だ、心も別だ、男と女との性の違ひもある。草や木でさへ、生のあるものは一本だつて自由にならない。枯れて了つてからでなくては自由になれない。生かして置きたいといくら思つたつて、枯れなければならないものならば枯れて了ふ。戀だつて矢張さうだ。相手を自分のものにしやうと思ふのが間違つてゐるのだ……。そのため、嫉妬も起り、喧嘩もし、壞さなくつても好いものをも壞して了ふ形になるのだ。だから嫉妬が起つたら、却つて一層向うに深切にしてやるやうにしなければならないいんだよ。』

『さう出來れば好いにきまつてるるんですけれどもねぇ！』

凡夫の情けなさにはそれが出來ないといふやうな調子で女中が言ふと、お園もそれに合せて、

『本當ですね。さういふことが出來れば、一番それが好いには違ひがないんだけども……』(さういふ貴方さへ、さうは言つても、實行は出來ないんでせう。)といふ顏の表情をして見せて笑つた。

『笑つちや駄目だよ。本當のことを言つてゐるんだよ。君達にも大切なことを言つてゐるんだよ。その證據には、僕の言つてゐることが、皆な君達に思ひ當ることばかりだらう。これでも、僕はこゝまで考へて來るのは、容易なことではなかつたからね。散々女を玩弄具にした揚句、一つの女の魂と打つかつて、それでえらい目を見せられて、うんと苦しんで、(憎い奴だ。あいつは生かしては置けない。あい

かう言つたTの聲は說法者のやうに强かつた。

八十八

Tはすぐ言葉をついで、『向うが本當に動いて來ないのは、此方にもそれだけ眞劍なところがないからで、それを以て、一概に、女なり男なりを非難するわけには行かないよ、何んな男だッて、女の方から本當に一心に動いて行けば、それを玩弄視するものはありやしないからね。皆な同じ人間だもの。』

『本當に、さうですね。』

かうまた女中は眞面目に言つた。

お園は默つて聞いてゐた。成ほどそれはさうである。好い加減で止して了ふからいけないのである。それなりになつて了ふのである。かう思ふと、自分のこれまでやつて來た男から男へと移つて行つた生活も、それにちやんと當てはめて考へられて來るやうな氣がした。

『僕なんかだつて、その點では、隨分辛い、悲しい、また、思ひのまゝにならない火水の中を通つて來たんだからね。いくら、此方から、心を注いでも受けて呉れない。それが皆な水の泡同然になつて了ふ。これではとても駄目だ。徒勞だ。生命の浪費だと思つて、何遍そこから引返して來たかしれない。しかし、最後には、さうした心、つまり自分さへ思つてやつてゐれば好いといふ犧牲的の心が生れ出して

いふことではない。さうした報酬的のところからもつと先に出なければ――。』

『さうですね。』

女中も思ひ當るといふやうにして點頭いてきいた。

『考へて見給へ。』かう言つて、Tは盃をちよつと口に當てゝ、『君方が男から男へと移つて行かなければならないやうになるのも、さうした報酬的のところに捉へられてゐるからです。男が捨てるから、此方も捨てる。これでは際限がない。折角、男を相手にしても、その男の本當の魂まで入つて見たのではなくつて、上つ面な心にちよつと觸つて見た位なものにとゞまつて了ふ。折角、戀をして見ても、それでは殘念ぢやないですか。』

『それはさうですね。それが、本當にはちがひありませんね。此方から最初は思つたんだから、此方だけで深切に思つてやりさへすれば好い……。あゝ好いことを訊いた。本當よ、それは、お園さん。』女中は眞面目になつてかうお園に言つた。

『でも、さういふ男ばかりありませんもの。』

かうお園が言ふと、

『それがいけないのだ。何故、男がさうなら、さういふ男の眼をさまさせてやるといふ眞面目な心持にならないのだ。何故、もつと深く男の魂まで攫まうとしないのだ。男は皆な同じだ。男に違ひはない。』

にしても、女にしても、お互ひに信じなくては駄目だ。疑つては駄目だ、惚れた女なら、飽までも惚れる。向うが思はうが思ふまいが、一心になつて惚れる。それが本當なんだ。此方さへ眞面目に、本當にしてやれば好いのだ。向うが何んなにうそで固めたやうなことを言はうと、また騙したり、玩弄にしたり、金をまきあげるために、ありもしない情を女が見せたりしても、そんなことには構はずに、此方で本當に思つてやりさへすれば好い。本當に思つてやるッて言ふ心がなくつては、折角、男が女を思ひ、女が男を思つても、結局は壞されて了ふ。つまり折角惚れ合ひ、思ひ合つた仲でも、お互ひに疑つたり、嫉妬を燒いたりして、壞して了ふといふ形になるものだ。』と細かく男女の間の心持を說明してきかせた。

と、女中は不意に、

『では、本當に思つてやりさへすれば、その戀は成就するッて言ふんですか。』

『いや、成就する、成就しないぢやない。成就する、成就しないは、二の次ぎで、それより先に、此方から思つてゐるんだから、いつまでも思ふ。向うの相手が、何んなに浮氣をしやうが女を拵へやうが、また女なら男をこしらへやうが、自分だけは思つてやる。思ふことをやめない。捨てられても思つてやる。何故なら、思つたのは、初めから此方が思つたので、その思つたといふ心には、報酬的な意味はない筈であるからである。向うが思はないから、此方もやめる。これは普通の世の中の色戀だが、さうした色戀はざらにあるが、それでは決して本當の戀ではない。本當に、男が女を思ひ、女が男を思つたと

お園にはまだなれなかつた。Tがその事情の何事をも知つてゐないらしいのも、それを打明けることを礙げる動機の一つにはなつた。

『でも、あそこで、あの娘が私のことを何か言つてゐたでせう？』

『何だか事情があつたらしいやうな口振ぢやあつたけども、詳しくは言はなかつたよ。此方でも聞きはしなかつたけれど……』

『さう……』考へるやうにしてお園は言つた。そこに女中が膳を運んで階梯を上つて來る氣勢がした。

八十七

名物の鯉のあらひが出たり、蓴菜の新しいのが出たりして、酒の酌を女中と二人でしてやつたが、此前、逢つた時とは違つて、Tがいやに眞面目なことを言ふやうになつたのをお園は見た。勿論、この前にも、何方かと言へば、眞面目な、洒落などは滅多に言はない方であつたが、しかし今のやうに落附いて、莞爾して、話でも何でもずん〲出來るといふ方ではなかつた。女中のゐる前で、訊かるゝまゝ、山の旦那と切れた話をした時には、『そいつはいかんな。何故もつと深切に思つてやらなかつたんだえ。それぢや、女の嫉妬ばかりで、此方からわざ〲打壞したやうなもんぢやないか。』此頃お園が考へてゐる胸にぴたりと思ひ當るやうなことを言つたり、また、男女の心の爭鬪の話になつた時には、『兎に角男

『もう好いには好いんですの。一片附き片附いたには片附いたんですの。』

『矢張、それぢや間に合はなかつたわけだね。』

かうTは笑ひながら言つた。

『さういふ譯でもないんですけどもね……。』お園も笑つて、『何うして？　あの方？　御機嫌好いんでせう。』

かう輕く、いくらか嫉妬を見せたやうにしてお園は言つた。

『駄目さ、もう。』

Tも笑つた。

『うそばかり言つてゐる！』

『うそぢやない、本當だよ。』

さういふ言葉のかげにも、その綺麗な女が、自分などはとても何うすることも出來ないその女が、まだ依然として隱されてあるのをお園は見た。お園はまた默つて了つた。

暫らくしてTは、

『それにしても、何うして、こんなところに來るやうになつたんだね？』

『いろ〳〵譯があるんですよ。』かうは言つたものゝ、それを詳しくTに打明けて話さうといふ氣には

お光ちやんもこれが大きくなつたんだつてね。』

と言つて、腹の大きくなつた手眞似をして見せた。

『えゝ……』

かう言つてお園は少時默つた。

Tはすぐ言葉をついで『實はもつと早く來なければならないんだつたけれども……丁度旅に行つてゐてね、四五日前に歸つて來たばかりなものだから、あの手紙も、それまで見なかつたんだからね、それからすぐ來るつもりだつたけれども、一日二日は、暫く留守にして置いたもんだから、用事が溜つてゐてね。これでも早く來たんだけれど……』

『さう？ 旅に行つていらしつたの？』かうお園はそれで飲み込めたといふ表情をして、『何うしたんだらう？ ぢかにお出でにならなければ、手紙位下すつても好いと思つてゐたんですのよ。まさか、貴方がそんな薄情ぢやないと思つてはゐましたからね。それでも何うかすると、もう私のことなんか、ちつとも思つてゐて下さらないのかと思つて、悲しくなつたこともありましたよ。』かう言つて間を置いて、でも、そんな貴方ぢやないと思つてはゐましたの。いつか、きつと來て下さるとは思つてゐたたんですけども……』

『それで、何うしたんだね、一體――？』

今度の事情を知つてゐるか否かをその質問の中に籠めた積りでゐたが、Tはそれまでは知らぬらしく、
『知つてたとも……君があそこからA町に行く時の話なんかしてゐたよ。』
『さう――？』
かう言つてお園はTの顏を凝と見るやうにした。

八十六

女中が下りて行くと、二人の會話の調子はすぐ變つて行つた。
『それで、A町にいらしつたんですか。』
『それはさうさ。』
『何か、私のことを言つてゐたでせう？』
『いや、ちよつと午飯を食つただけだから、別に何も込み入つた話なんかしやしないよ。お前がゐなくつちや爲方がないからね。』
『誰が、私がこゝにゐることを敎へました？』
かういくらか探るやうにしてお園が訊くと、
『あの娘つ子がゐたらう。あの娘が敎へて呉れたよ。短い間にも、あゝいふところは變るもんだね。

廊下の鏡の前にちよつと立つて髪を直し、それから着物も着替へたいとは思つたけれど、それよりも一刻も早く逢ひたいやうな氣がするので、そのまゝトントンと階梯を二階に上つて行つて、しかももしや人違ひではないかと一方には危みながら、ソツと覗くやうにして顔を其處に出した。

果してTであつた。

『まァ！』

かう言つてお園は笑つていそ〳〵して室の中に入つて行つた。

しかし、さつきの女中が傍にゐるので、いろ〳〵と積る話を押へるやうにして、

『いついらしつたの？』

『今來たばかりだよ。』

『昨夜、N屋に泊つたのですか。』

『いや――』

『それぢや、今朝、何處から來たんですの？』

『T町の停車場前に泊つてね。君のことをいろ〳〵聞いて來たよ。』

『さう……？』ちよつと途切れて、

『お上さん、知つてゐて？』

『いくつ位？』
『さうね、もうそんな若くはない人だよ。』
『さう――』『いよ〳〵Tに相違ないと思ひながらも、わざとそれを面にあらはさずに、
『何うして私を知つてゐるのがわかつたの？』
『だつて、來て、私がお茶を持つてあがると、すぐ、此家に、お園さんて云ふ人がゐるだらう。元、町にゐた――ッてかう言ふんだもの。』
『お前さん、何ッて言つて？』
『ゐるつて言つたわ。』
『さう――』嬉しさが込み上げて來るやうにしたが、それを押へて、わざと平氣な樣子をして、『今すぐ行くわ。これを洗ふと……』
かう言つて、再び井戸流しに戻つて來たが、落附いて洗物を續けてゐるわけには行かなかつた。お園は自分ながら不思議に思はれるほど嬉しさを覺えた。あの川の渡しで別れた時は、寧ろ男の無情を呪つて、今度來たら、振つて振つて振りつけてやらうと思つたのは、あれは自分かしらと思はれる位であつた。お園はそこ〳〵に洗濯の手を留めて、洗つたものだけを物干竿に干すとそのまゝ急いで家の中に入つて行つた。

八十五

そこに來て一週間ほどしたある日の午前のことであつた。矢張その日も好い天氣で、街道には六月の初夏の日影が美しく照りわたつてゐたが、裏の井戸流しで洗物をしてゐたお園を朋輩の女中は此方から手招きして、

『ちよいと、ちよいと……』

『何ァに――』

お園は振返つて訊いた。

『ちよいと――』猶ほも手招きを留めずに、此方に來なくつては話が出來ないといふやうにして笑ふので、爲方がなしに、洗物をそのまゝにして、お園がその傍に行くと、

『お前さん、知つてゐるお客様よ。』

『さう――』

平氣を粧つて、かうは言つたものゝ、Tではないかと思ふと、胸が俄に躍り出した。

『何んな人？』

『さうね、髯の生えた、大きな體格をした方よ。』

つとめてゐる女中達にしても、一人として男と戀心とに虐まれてゐないものはなく、皆なさうした境遇に表は笑つて裏では泣いてゐるのである。（矢張、あの時思ひ切つて死んだ方が好かつたかも知れない……）かう思ふと、（今だつて出來ないことはない。やらうとさへ思へばすぐだ。）とつゞいて思はれて來て、その靜かに小さな瀨をつくつて流れてゐる水面がぢつと見詰められた。

と、微かに山の旦那のことが思ひ出されて來た。此頃ではその時起した嫉妬や戀心はもう遠く忘れたやうになつてゐた。二日も三日も全く忘れて了つてゐることもめづらしくはなかつた。それが、今、不思議にも、微かではあるが、かなりに强く思ひ出されて來た。旦那の方にも、無理はあつたが、此方にも、全然その責任がないとは言はれないやうに考へられた。嫉妬に目が眩んで、本當に男のことを考へて見る餘地がなかつたのである。打壞さないでも好いものを此方から進んで打壞したやうな形もないではなかつたのである。しかし、今では、もう未練は起つて來なかつた。再び山の旦那を何うのかうのといふ心は少しもなかつた。それがお園には堪らなく深い悲哀を誘つた。

ふと氣が附いて、（いつまでこんな處に立つてゐたツてしやうがない。）かう思つて、お園はそこから引返して來た。淡竹の藪には既に大きくたけた筍が五本も六本もツンツン出てゐて、スカンポと俗にいふ赤い莖の草があたりに繁つてゐた。午前の日影は疎らな林を洩れて、その明るい光線をかの女の肩やら髮やら裾やらに投げた。鱸のギイといふ音が靜かに聞えた。

は螢が明滅して飛ぶやうになつたけれども、寒い夕暮に土手に下りて、水に映るさびしい夕燒の空を見た時のことは竟に竟に忘れられなかつた。お園は悲しい氣がした。あの時、死んだ積りで眞面目に働かう、眞面目に生きやうと思つたことが、何うにもならずに、矢張、男の玩弄具に均しい身の上となつて、かうしてこの同じ川ぞひの田舍に彷徨して、何うなつて行くやらわからないやうな運命の波に漂つてゐるのが悲しく且つ辛かつた。いつになつたら、さうしたきまつた、正しい生活がかの女の前にやつて來るかわからないやうな氣がした。

東京のTからは、何の消息もなかつた。そこから新たに手紙を出さうかと思つたけれど、落ついて考へて見ると、それは却つて其身の愚かしさを男に示すやうにしか思へなかつた。Tだツて、もうかの女のことを何とも思つてゐないに相違なかつた。或はまたTが返事をよこしたにしても、中途で抑留されて此處まではとゞいて來なかつたかも知れなかつた。さびしいさびしい氣がした。

前二階の一間から見ると、街道が白くさびしく連つてゐて、それが前も後も際限なく、何處までも何處までも續いてゐるやうな氣がした。何うかすると、旅客がひとりさびしく通つて行くのが見えたりして、故鄕戀しさの心に燃えた。

裏の畠の中の路を越して、低い土手の上に行つた時には、またしても、川がその身を引くやうにした。何處にいつたとて、變りはない。何處に行つたとて不幸と艱難と不如意とがあるばかりである。其家に

『W川？』

ふと、思ひ附いたやうに、

『ぢや、この下か上かに舟橋のかかつてゐるところがありますね。』

『舟橋？』と言つて、女中は考へてゐたが、やがて思ひついたらしく、

『あゝ、T町からS町へ行く途中の？　あゝ、さうでした。あれは舟橋でしたね。』

『さうすると、此處は、あの上になるんですかね？』

『え、さうです。あそこからは一里位上でせう。』

『さうですか。』

かう言つて、お園は奇遇を感じたやうにして、ぢつとその川を眺めた、闇の中を一緒に歩いて來た病んだ妻を持つた教員のことなどがふと胸に浮んで來た。

八十四

靜かに折れ曲つてゐる川がなつかしいやうにも、またはさびしいやうにも、不思議にかの女の身に纒つて來た。をり〳〵通つて行く白い帆、微かに水を渡つて響いて來る艫の音、春は旣に過ぎて、庭石の間には霧島の躑躅が燃え、あたりの綠葉の日に照る光はきら〳〵とかゞやき、麥の穗の赤くなつた上に夜

るといふことであつた。その世離れたさまも、却つてさうした客のために好いといふやうな形もあつた。

それに、K町の料理屋の人達よりは、主人も上さんも、女中達も、皆なさうした事情をよく飲込んでゐて呉れて、（？）始めて行つた時から、（これなら、居られさうだ……）とお園には思へた。上さんは四十一二であるが、ちよつと見ても、前生の粋な稼業がすぐわかるといふやうな人で、N屋の主人に對しても、打解けて戯談口などをきき、お園に向つても、何彼と深切に世話して呉れた。主人もN屋の主人とは交情が殊に好いらしく、商賣の話の中にをり〳〵女の話などを雜へて、酒を飲みながら、打解けて話してゐるのをお園は見た。

やがて何の氣なしに、二階にのぼつて行つたお園は、（おや！）と思つた。何故なら、矢張、そこにも川があるからであつた。勿論、その川はあのA町にある川のやうに大きくはないけれども、また、その土手も高くはなかつたけれども、その高くないために、折れ曲つた河水のところ〴〵に淡竹や篠竹の藪をあしらひながら、さびしく流れてゐる態が美しく眺められた。

そこにゐた女中に、

『この川は、A町にある川とは違ふんでせう。』

お園はかう訊いて見た。

『え、あの川とは違ひます。これはW川です。』

らか顏をあかくして車に乘つた。やがて二臺の車はK町をあとにして走つた。

八十三

お園は途中に松原の中に錆びた沼の水光が朝日に輝いてゐるのを見た。また、さびしい村落が雜木林に添つて低く連つてゐるのを見た。白い埃の立つ長い街道に、土地の機屋らしい男が荷車を曳いて行つたり、草鞋脚袢の行商がとぼ〳〵とさびしさうに歩いて行つたりするのを見た。しかしそこはそんなに遠くはなかつた。一里半も來たと思ふ頃、お園はごた〳〵と五六軒人家の固まつてゐるその向うに、かなり大きな家のあるのを見たが、やがて車はその前で停められた。

それはこゝら附近の機業地の人々が酒を飮みに女を伴れて來たり、泊つて行つたりするやうな半ば旅舍で半ば料理屋の樣な家であつた。元はこのすぐ下の處を通つてゐる街道の一驛に、Yといふ遊女町があつて、一時は非常に賑やかに榮えて、鼓や三味線の音が常に絕えない樣な處であつたが、ある出來事の爲に、その遊廓がすつかりFの方に引けて了つてからは、全く田園と農村とになつて了つて、今ではもうさうした昔の面影は見る事は出來なくなつたけれども、それでもその移轉の時に、遊女屋から料理屋になつて、一軒そこに踏留つたやうなその家には、昔の空氣を懷しむやうにして客は集つて來るらしく、ちよつと見ては、こんな處でよく家業が出來ると思はれるやうな外觀の淋しいに似合はず、かなりに繁昌す

紙の返事さへ寄越さないかも知れないとは思つたけれども、それでも場合に由つては、ひよつくらそこにTが顔を出して來はしないかといふやうにも思はれた。『何だこんなところにゐるのか。わざ〳〵あつちまで行つたんだぜ！』かう言つてやつて來ないとも限らなかつた。それは此頃では、身を任せた翌日あたりに比べては、N屋の主人の熱情がいくらか素直に受け入れられるやうになり、また自分の身の位置から言つても、今はその言ふなりになつてゐるより他爲方がないので、そのまゝくつついて行つてゐるけれども、もし、Tに熱情があつて、ひよつくらやつて來て、東京へ一緒に伴れて行つてでもやると言ふならば、その方が結句新しい運命がひらけて好いやうにもかの女には思はれてゐた。しかし、もしさういふ人が訪ねて來た時には、(何處其處に行つてゐるから、そこに來るやうに……)とも言ひ置いて行くわけにも行かなかつた。爲方がない、落附いた先に行つてから、もう一度手紙を出すから好い。こんな風にお園は思つた。

そこの主人や、上さんや、二三日懇意にした女中達は、半ば嘲けるやうな、半ば笑ふやうな、また何處かにさうした年上の男を咬へて行く女を憎むやうな表情をして、かの女とN屋の主人と一緒に車を並べて出て行くのを見送つた。N屋の主人が車に乘らうとする時、此處の主人は、傍に寄つて來て、小聲で、何か頻りに言つたが、それは無論、あまりに深い惑溺を意見するための言葉であつた。『うん、よし、よし、わかつた。そんなに心配して呉れなくつても大丈夫だ。』こんなことを言つて、N屋の主人はいく

情の眼色を持つてゐたりして、勝手に、自由に、情婦としての女を託して置くことが出來ないやうな形であつたからであつた。

N屋の主人にしては、外形は普通の旅舍乃至料理屋の女中にして置いて、そして自分の情婦であることを完全に好意を持つて承認して吳れるやうなところ、また自分が訪ねて行く時には、半ば客にし、半ば同じ家庭の人のやうにし、一通りの歡樂を恣にしても大目に見て置いて吳れるばかりでなく、更に慾を言へば、かれのゐない時にも、女の監督を間接にして吳れるやうな家が欲しかつた。『お前さへそのつもりなら、その中もつと自由が出來るやうに、ちやんと一軒構へてやるけれども、まア、當分はさうして我慢をして貰はなくちや――』かう言つて、N屋の主人はあれかこれかと、都合の好ささうな場所を心の中で搜した。

二三日經つてやつて來た時には、N屋の主人には、もうその心當りの場所が出來たらしく、『さう十分と言ふわけには行かないけれど、當分あそこで、我慢してゐて吳れ……。此處にゐるよりはそれは好いには好いに違ひないから……。何しろ、此處は、遠い親類つゞきになつてゐるで、主人は好くつても、はたが煩さいからな。』かう言つて一緒に出かける支度をお園にさせた。

お園には河添ひの旅舍から此處に移つて來たことについてすら、東京のTへあてゝやつた手紙の返事のことが氣になつた。T自身出て來るやうなことはないとは思つてゐたけれども、殊によると、あの手

年の暮の漂浪を繰返さねばならぬやうなハメに陷らなければならぬ位置まで押詰められてゐたのであつた。（何ァに、女だもの、その位のことはしやうがない。）こんな風にも輕く考へてゐた。

お園は悄氣た顏をして、その淡竹の藪に明るく午前の日影のさし込んで來てゐるのを眺めた。

ふと氣がつくとチヤンカラチヤンカラ地機を織つてゐるのは、其竹藪のすぐ向うの低い屋根の小屋の中であつて、明放した窓からは、櫛巻にした、かの女と同じ位の年恰好の女のせつせと梭を此方にやつたり彼方にやつたりしてゐるのが見えた。あんなにしてゐても、あんなに扮裝も構はずに、終日機臺にこびり着いたやうにして働いてゐても、それでも男は亭主一人で、その亭主がまた、その女房や子供のために、他にみめよき女があるのをも餘所に、せつせと一日外に出て働いてゐて、夕暮になつて歸つて來て、赤く燃える圍爐裏の火の周圍に樂しく團欒して暮らしてゐるのであると思ふと、自分の生活が、自分の心の生活が、さうした人達よりも一層悲慘な境遇にあるやうな氣がしてつくぐ〳〵その身が情なくなつた。思はず涙がほろりと落ちた。

八十二

そのK町の料理屋にも、お園は長く落付いてゐられなかつた。それは其處の主人がその狀態に同情せず、何處か意見がましいやうなことをN屋の主人に言つたり、お園に對してもいくらか不愉快らしい感

はあゝ馬鹿であつたかとさへ疑はれた。

かの女は何うかして本當の生活をしたいと思つてゐたのではなかつたか。一人の男と一人の女と睦じく暮らすやうな位置になるまでは、身を堅く持つて暮してゐる覺悟ではなかつたか。男から男へと移つて來たこれまでの生活を、あの時きりやめて了ふ筈ではなかつたか。かう思ふと自分ながら、自分のあさはかであつたこと、一時の腹立に夢中になつたこと、人に對する怒りのために自分の大切なものを失つたことなどが、ぼんやりながらも、それからそれへと、思ひ出されて來て、下に行つて、家の人達と雜つて話をする氣になどなれなかつた。

それに、さうした女の弱點に附け込んで、理不盡ではなかつたとは言へ、一面いろ〳〵な誘惑に近い甘言を並べ立てゝ、遂にその目的を遂した男が憎く呪はれた。本當に思つて吳れるなら、何んなことでもしてやる。一軒立派に料理屋なり何なり拵へて、ちやんと押しも押されもしないやうにしてやる。こんなことをN屋の主人は昨夜も繰返し繰返し言つたけれども、そんなことは當てにして待つてゐられることではなかつた。それにかうした田舍に、氣風も言葉も感情も何も彼も自分にそぐはない他鄕に、これから長い間落附いて圍はれて、月に三回の旦那の來訪を待つてなどはとてもゐられないやうな氣がした。

しかし、かの女に取つては昨夜のことは止むを得ないことではあつた。あそこまで迫られて、それでも猶それに應じなければ、昨夜の今日と言はず、直に此處から出て行かなければならないやうな、再び去

サッサと此方に出て來ようとするのを、上さんが恐ろしい劍幕で、無理無體に、店の方へつれて行かうとした。伴れて行つて、主人とお園の面皮を皆なの前でむいてやらうとした。そこに、外に出てゐた主人は、急いで飛んで來た。凄じい渦は忽ちそこに捲きあがつた。

お園は夜道を車で送られて此方に來る間、口惜しくつて、口惜しくつて爲方がなかつたことを思ひ出した。何うしても、あの上さんに目を見せてやらなければ業が沸えて爲方がないやうな氣がした。何遍も何遍も體が赫として來たことを思ひ出した。

八十一

お園はまた此處に來たことを思ひ出した。あとを追つて、N屋の主人のやつて來るまで、此處の主人主婦を捉へて、散々上さんの酷いことを言つたことを思ひ出した。しかし、今になつて考へて見ると、何うしてそれから身を任せたか。何うして上さんに意趣返しをすることにのみ心を捉へられて、身を任すことを何とも思はなかつたかといふことを繰返して考へた。

後悔するやうな心持が強く起つて來るのをお園は感じた。續いて、此處に再び園はれ者の身になつたり、『それ見たことか、あんな立派な口をきいてゐながら、矢張出來てゐたんぢやないか。』と上さんから言はれたりして、いやな嫉妬を身に受けるのを堪へ難い苦痛のやうに思つた。自分ながら何うして昨夜

びしい暗い町の料理屋を發見した。かの女の一夜泊つた室は、丁度二階の奥の六疊であつたが、障子を明けると、さびしい淡竹の藪があつて、せゝこましい裏の野菜畠の隅にお稻荷さんらしい小さな祠の祀つてあるのなどを見た。地機を織る音が、そこからも此處からもチヤンカラチヤンカラ聞えた。

お園は一日の中に起つた暴風雨のやうな光景を頭に浮べて見た。あの上さんの夜叉のやうになつて怒つた形、厨の瀨戸物の放りつけられて粉微塵に壞れた形、隱居のあの大きな手から血が垂れて流れたさま、あの親類の娘が、何が何だか判らないで、呆氣に取られて見てゐる顏、狂氣のやうになつた主人の表情、さうした凄じい光景は、皆なかの女一人のために起つたと言つても好いのであつた。上さんは何うしても二人の關係を信じて一歩も讓らなかつたし、隱居は隱居で、事實のあるなしに拘らず、さうした女中は暇をやるが好いと言ふし、主人は主人で、出來てゐるもしない關係だけに、一層お園のために辯解するし、またその辯解のかげには何うしてもお園を自分のものにしなければ承知しない意氣込が力強く交つてゐるし、始めは一言二言言つたのが始まりで遂にあゝした大活劇を演じたことを、お園は下唇を咬むやうな心持で思ひ浮べて見た『盜人たけだけしいとはお前のことだ……生やさしい蟲も殺さないやうな顏をしてゐやがつて……』

かう言つた上さんの言葉を耳にしてから、お園は俄かに赫となつたことを思ひ出した。『さうですとも……。さうでもないものをさう言ふなら、よう御座んす。立派にさうなつてあげますから。』かう言つて、

置いたTの宿所を書いた紙片をその帶の間に探つた。

八十

その手紙を出した翌日は、お園はもうその河添ひの旅舍にゐなかつた。その夜遲く、かの女は車に乘せられて、そこから一里半ほど隔つたK町のある料理屋へと送られ、やがてそれにつゞいてそのあとを追ふやうにして、主人はやつて來たが、その一夜を境にして、お園は何うしても主人の言ふことを聞かなければならない身になつた。

その料理屋はN屋とは遠くはあるが、いくらか續き合ひになつてゐて、そこの主人とN屋の主人とは兄弟のやうに交情が好かつた。從つてそこの主人は心配して、何うかしてさうした關係にならないやうに、お園は確かに引受けるが、さうしたことは思ひとゞまつて貰ふやうに遠廻しに意見したが、張り詰めたN屋の主人は容易にそのいふことには從はなかつた。

それでも、お園に、もつと確乎とした了簡があり、飽まで潔白でゐやうとする意思があつたなら、さうした關係にもならずにすますことが出來たであらうが、夥しく上さんに對して腹を立ててゐるかの女は、(ざまを見やがれ)と言つてやるために、それが言ひたいばかりに、遂に男に身を任せた。

そのあくる日、N屋の主人が歸つて行つたあとに、お園は明るいのんきな河添ひの旅舍の代りに、さ

なに妬く位なら、浮氣をしないやうに亭主をちやんと自分で縛つて置くやうにしたら好いぢやないか。」といふ氣になつた。口説かれた當座には、旦那にはすまないが、疑はれては困るから、一度お上さんによく飲み込むやうに話して置かうとかうやさしく思つたこともないではなかつたけれども、またそれを逸早く打明けて言はなかつたのは、一つは旦那に恥辱をかゝせてはと思ひ、一つはかの女自身にも滿更捨てゝも了ひたくないやうなところもあつたためであるけれども、今となつては、もうさうした辯解的の言葉は、口から出したくも出なくなつて了つた。（疑ふなら勝手に疑ひなさい。その代り、まご〳〵すると、本當に、火をつけて見せて上げますよ。）かうした心の態度で、お園はわざと澄ましたり、すねたりして見せた。

その癖、さうしたことを面倒臭いと思つたかの女は、ある夜、客の用事をすましたあとで、座敷の奥の一間の明いてゐたのを好い幸ひにして、ソッとランプと硯箱とを持つて行つて、東京のTへあてた手紙を書いた。

その手紙には別に深い事情は書かなかつたけれども、その身が非常に困つた境涯にゐるといふこと、何うか今度だけで好いから救けると思つてすぐにも東京に出るやうにして呉れといふことを簡單に書いた。しかし教育とてもないかの女には、それを書くにも、字を忘れたり何かしてかなりに長い手間を取つたが、やがて書き終つて、それを封筒に入れて、さつき自分の包の中から骨折つてさがし出して來て

て、いつそこれを切つかけに東京に出て行かうかなどゝお園は考へた。

こんなところにゐて、田舍の人達を相手にしてゐるよりも、その方がどれ程利口な爲方か知れなかつた。こんな田舍にゐては、將來身を固めるにしても、碌な相手はありやしない。機屋の旦那か、百姓の金持か、でなければ此旅舍の主人の言ふが儘になる位が關の山である。かの女はかう思つて、其日は一日そのことばかり考へてゐた。Tのことなども思ひ出されて來た。(あの人だつて、かういふ時には相談相手になつて呉れても好い筈だ。……何うせ、あの女とは今でも切れてはゐないだらうけれども、その女があつたつて構はない。その位の世話はして呉れるには相違ない。)こんな考へも絶えずお園の頭に往來した。

『本當に、そんな眞似をするから、召使ひが大柄を面をしてゐる。』とか、『そんなにあの女が好いなら、好いやうにちやんとして置くが好いぢやないか。』とか、さうした上さんの言葉は聞くともなく常にお園の耳に入つて來た。從つてこれまでのやうに、單に召使ひとして、愛憎なく使つてゐることは出來なくなつて、何ぞと言つては對抗するやうな態度を常に上さんはお園に示した。さうなると、お園の方でも、矢張人間であるから、これに對して、細かい反抗の形がおのづから心や態度の中に出て來て、ふゝんといふやうな氣にならぬわけには行かなかつた。亭主が浮氣で、あゝしてなりふり構はず働いてゐる上さんが氣の毒だと最初は思つたやうなこともいつか消えて、今度はあべこべに、(出來た仲でもないのにそん

合はせたお園の耳に入つた。はつと思つて、かの女は急いで其處から引返して來た。そればかりではなかつた。その前から既にお園は上さんから、または隱居の上さんから、娘の養子から、常に疑惑の眼を持つて見られてゐたのであつたが、それはお園自身にもわからないことはなかつたのであつたが、しかも、さうした上さんの言葉をきいてから、一層それがお園にはつきりと觸れ出して來た。(だつて、構ひやしない……。此方は何にもしやしないんだもの。淸淨潔白なんだもの。疑はれたつて何だつて疑ふ方がわりいんだ……。そんなことは構ひやしない。)まだ堅くしてゐるだけに、さういふ風に公明正大にそれを打消して、何とも思はない顏をしてゐられたけれども、それでも時には、さうしたハメに陷つた旦那が、いくらか可哀相になつたり、また可笑しく思はれたり、まだそんなこともしないのに、理由なしに嫉妬を燒く上さんが小憎らしく感じられたりして、何うなつて行くか自分にも分らない潮流の中に、ゆたに、たゆたに漂つてゐるやうな心持がお園にはした。

七十九

その一家の人達の疑惑の眼は次第に壓迫の度を强めて來て、時には餘りわからないのに腹立たしいやうな氣分になることもあつたが、ある日は、かうした空氣の中にゐるのが面倒臭く、主人の言ふことを聞いて、新しく運命を切り開いたにしたところが、何うせ大したことのありやう筈のないのなどを思つ

の下に來てゐることを考へると、お園はひとり手に微笑まれるやうな氣分にならずにはゐられなかつた。

かの女が首を縱に振りさへすれば、その旅舍の上さんも、また隱居夫婦も、何うすることも出來ない優越な位置にかの女は今は立つてゐるのであつた。もしや夜半に主人がやつて來はしないかと思つて、お園は夜はいつも親類の娘に一緒に寢て貰ふことにして居るけれども、しかも朝起きた時には、晴れ晴れした好い顏色をして、急いで着物を着、帶をしめて勝手の方へと行つた。

しかし、この人知れずにあたりに漂つてゐる色濃い氣分は、そのまゝいつまでも二人の間だけで濟まされてはゐなかつた。或はこれがお互ひに旣に完全に出來てゐて、それで双方承知して祕密にしてゐるのならば、比較的長く他に勘附かれずにゐたかも知れないけれど、一方は押し、一方は拒ぐ、しかもその拒ぐにも、拒ぎきりではなしに、何處かに押し返すやうな調子があつたがために、その行動はおのづから他に異樣に思はせるやうなところが出來て來てゐて、いつとなしに、隱居の上さんが疑ひ、若い娘の養子が疑ひ、次第にそれが上さんにも目をつけらるゝやうになつた。『旦那、本當に駄目ですよ。お上さんに變に思はれるぢやありませんか。』かうある時、やゝ强く、お園は言つたが、さうした空氣は漸く重苦しくなつて行つた。

ある時、それとなく聞くと、『本當にしやうがありやしない。もう大抵懲りてゐさうなものだのに……。何うしてあゝ若い女が好いんだか。』こんなことを上さんが聞えよがしに言つてゐるのが、ちよつと行き

に、幾人も女があつたんぢやありませんか）とか、（何うせ、捨てられるんですもの）とか言ふことすら出來なかつた。何故なら、さう此方から突込んで行けば、すぐ引たくられて、引返して來ることが出來なくなる恐れがあるからである。滅多に親しみをすらあらはすことが出來ないほどそれほど男の心は熱かつた。また眞面目だつた。しかしこの熱いのは、眞面目なのは、男が女を手に入れるまでの熱さ、眞面目さで、一度身を任せて了へば、さうしたものは、すぐ冷却して行つて了ふものであることをお園は既に餘りに多く經驗した。

七十八

さうかと思ふと、時には不思議なほど得意に、いやにはしやぐやうな氣分にお園はなることがあつた。それと言ふのも、T町で進退維れ谷まつて、漂浪の憂目を感じながら、この河添ひの旅舍にさびしくやつて來た時に比べて、まださう年月も經つてゐないのに、自分ながらも驚かるゝほどの心や境涯や位置の轉換を見たからであつた。もう行詰つたかと思ふと、見えないところにある運命の神のやうなものがゐて、忽然として新しい心や境涯の展開されて行くさまは不思議なやうであつた。口說かれて困つてゐるには相違ないにしても、今ではこの旅舍は、かの女に取つて、辛いさびしい、または絕えず主人やら上さんやら朋輩やらから壓されて小さく縮こまつてゐる場所ではなくなつた。主人さへも今はかの女の勢力

まゝある期間持續して保つて行きたいやうな心持もしてゐるのである。さうかと言つて、それは女の浮氣のやうな心でもなかつた。かの女の經歷に、もし、あの身を投げやうとした一齣がなかつたなら、或はさうした心が起らなかつたかも知れないと思はれるやうな心であつた。

しかし男から壓迫して來る熱い心は、かの女をしてさうした中間に留まつてゐることを不可能ならしめる形も十分にあつた。單に面白いなどとばかり、浮氣に、氣輕に思つてゐることは出來ないやうな場合が次第に起つて來た。

『だつて、そんなこと。』

男から迫られる度每に、さう言つてそれを卻けてはゐたが、またさういふ言葉のかげには、いつも上さんのあることを匂はせては置いたが、そんなことでは男は默つて手を束ねてはゐなかつた。

或は離座敷の雨戶を閉めてゐる時、或は二階の廊下を掃除してゐる時、或は裏の畠で莢豌豆を赤い前垂に摘んでゐる時、或は主人の仕事をしてゐるのを知らずに畠の傍の小屋の前を通つた時、さうした時に、その男の戀心は、時には否味に、時には皮肉に、また時には歎願に、怒りに、訴へに、いろ〳〵な形となつてあらはれて來た。

お園はしかし何うすることも出來なかつた。『だつて、そんなこと』といふより以上に、立入つて男の以前の生活をその否定の材料にすることとさへ出來なかつた。(だつて、旦那は浮氣なんですもの)とか、(前

七十七

はつきりと意志がわかつてからお園は殊にその主人の眼の執念く纏りついて來るのを感じた。それに、かの女にしても、もう前のやうに知らぬ顏をしてゐる譯には行かなかつた。それを迎へて脇に外すとか、成るたけ見ないやうにするとか、でなければわざとはしやいで戲談のやうにしてごまかすとか、その何れかを選ばなければならなかつた。時には辛い壓迫を總身に覺えて、何うしたら好いかに迷ふやうにして、眞面目な、暗い、憂鬱な顏をしてゐることなどもあつた。

他人には無論言へなかつた。またそれを話して苦勞をわけて貰ふやうな朋輩もその手近にはゐなかつた。さうかと言つて、上さんや親類の娘などに知れたらそれこそ一層大變である。折角思つて臭れた男に恥辱をかゝせる形になる。それも、本當に厭で、ふつふつ厭で、何うしても相手にすることが出來ないといふのなら、さうした態度に出て行くことも止むを得ないことではあるが、さうもかの女は思つてゐないのであつた。何處か嬉しいといふやうな氣もしてゐるのであつた。さうした思ひをかけられないよりも、かけられた方がかの女には好かつたのである。それからまた一方では、さうした數々の經驗を嘗めて來てゐるだけに、初心な戀の小娘でないだけに、さうしたジレンマの位置に身が置かれたことをいくらか面白いと思ふやうな氣も何處かでしてゐて、靡くともつかず靡かぬともつかないやうな心をこの

つてゐるのをお園は見た。お園ももうさつきのやうに笑つたり何かすることは出來なかつた。

二人はすたく歩いた。

土手を越して、今度はうねうねと細く折曲つてついてゐる路を、なづ菜やもち草や蒲公英やげんげに雜つて青く赤く彩られた路を、默つて下へと下りて來たが、畠の傍を通る時、主人はちよつと振返つて、

『本當に、さつき言つたことは、戯談ぢやないからね。好いかえ？』

お園はちよつと困つたやうにして點頭いて見せた。しかもその最後の(好いかえ？)と押すやうに言つた言葉は何となく胸に支へた。男の女に對する强さを何處までも示されたやうな氣がした。

畠から此方に入らうとする處で、

『もう好い。』

かう言つて、主人はお園の手からたもを取らうとした。

『持つて行きますよ。』

『好いよ、好いよ……』かう言つて强ひてそれをお園から取つた。お園はまたさびしい悲しい辛い氣がした。(だつて、それは無理だわ……)こんなことを思ひながら、赧い顏をして、お園は畠から庭の方へ入つて來る柴折戸の前に來た。

たツて好いんだから、ゆつくり考へてからでも好いんだから……』

何處までも眞面目な主人は、强い熱い心の要求のすぐ滿たされなかつたのにいくらかしよげたといふやうな顏色をして、そのまゝ五六步、ざるの置いてある土手の草原の方へと戻つて行つた。

お園は笑ひにまぎらせ、戲談にまぎらせて、兎に角その一難關は過ぎたけれども、一方では眞面目であるだけそれだけ悄氣た男を氣の毒にも思ひ、また苟くも主人とも言はれるものから、さうした切ない心を遂に遂に打明けられたことを困つたことにも思ひ、それに雜つて、その言ふことを聞きさへすれば、何うにかかうにかかの女の運命に一轉化を來たすことを思ひ、しかもさうなつた曉には、當然繰り返さるべき2と3との苦しい經驗の再び烈しく渦を卷いて來ることを思つた。種々な心が、光景が、瞬時にかの女の頭を掠めて通つた。悲しいやうな淺ましいやうな氣もした。かうして男から男へと移つて行かなければならない身が傷く振返られもした。

お園は泣きたいやうな、笑ひたいやうな變な顏をあたりに見せて、たもを持つたまゝぢつとそこに立つてゐた。

やがて主人は、鰻や鯉のごちや〳〵と躍りはねるざるを、短かい天秤棒の折れにかついで此方にやつて來たが、この時には、もうしよげた顏から眞面目な顏になり、その眞面目な顏は、もう再びとさうした言葉を口にすまいといふやうな、またさうしたことを敢て言つたのを後悔するといふやうな顏にな

『だつて、駄目ですよ、そんなこと。』
『何故?』
『だつて、そんなこと出來やしませんよ。わかつてるぢやありませんか?』かう言つて、ソッとやさしく男の手を離して、二三步步き出して、また崩れるやうにして笑つた。

七十六

始末にいけないといふやうにして主人は默つて立つて見てゐたが、急に無理に言ふことをきかせやうとするのも得策でないと思・たらしく、また、さうした女の態度の中には滿更不可能でない、正面から男を振つたといふ形ではないのを見て取つたらしく、靜かに再びその傍に寄つて來て、
『笑ひ事ぢやないよ。』(しやうがない女だなア!)あとの言葉は口に出して言はなかつたけれど、さうした語氣で、爲方がなしに笑ひ懸けると、
『だつて、餘り戯談すぎるわ、旦那。』
『何うして?』
『何うしてつて……』
『まア、しかし、戯談に言つてるんぢやないから、よく考へてお吳れ。……今、すぐ返事しなくつ

からね。もし、園ちやんが言ふことを聞いて吳れれば、何處か當分は宅でなしに別のところにゐて貰つて、そして一軒料理屋でも始めさせやうとまで思つてゐるんだからね。』主人は何處までも眞面目で、何うしても一度思つたことを通さずには置かないといふやうな表情を見せて、戲談にして切り拔けやうとするお園の方に益々深い熱い心を寄せて來た。

暫く默つて立つてゐたが、急に、お園は笑ひ出した。

『旦那、本當に何うなすつたんですよ。からかつてあとで笑ふ氣なんでせう。いやですよ。』

『まだわからないのかな。』

かう言つて、主人は今は思ひ餘つたといふやうに、いきなりお園の傍に寄つて、そのまゝ手を握らうとした。

お園はそれを振放つて遁げは遁げたが、二三歩で立留つて、益々可笑しいといふやうにして笑つて見せた。

(しやうがない女だな。)

かう言ふやうにして、主人はまた駈け寄つて來て、今度は肩から手をかけて、すつかり體を羽がひじめにしたが、耳に囁くやうに、

『好いだらう？』

『好いぢやないか、もう山の方だッてすつかり切れたんだし――』

お園はわざと驚いたやうに、

『まア、旦那、戯談ばつかり。』

『戯談ぢやないよ。もうちやんとわかつてゐる筈ぢやないか。本當を言ふと、園ちやんに遇つた時からさう思つてゐたんだよ。でも山に旦那があるッて言ふし、無理にッて言ふわけにも行かなかつたからね……。男の心も汲んで見るもんだよ。』

『だつて、そんなこと。』

かう言つて巧に戯談のやうにして笑つて、『でも、戯談にでも、さう言つて下さるのは嬉しいわ。』

『戯談ぢやないッて言ふのに――』

『戯談でなければ、猶ほ嬉しいですけどもね。』

かう言つて、益々戯談にして了つて、『だつて、旦那が私のやうなものに、そんなことを仰有る筈はないもの。』

『さうぢやないよ、本當だよ、』

『でも……』

『うそと思ふなら、本當だッて言ふことをいつでも見せてやるよ。いろ〱これでも考へてゐるんだ

がつて美しく咲いてゐた。

七十五

鯉や鰻で滿たされたざるを片手に持つて、舟から飛んで岸に上つて來た主人は、やがてお園のたもを持つて立つてゐる傍へとやつて來た。

ざるを其處に置いたと思ふと、突然主人は眞面目に笑ひかけて、

『いやかね？』

『え？』

お園にはその意味が初めはよくわからなかつたらしく見えた。

『わかつてゐる癖に……。』

お園は急に顏の色を赧くした。長い間豫期した小さな春の風雨はつひにつひにやつて來たのである。しかし、この場合、お園は決して小娘のやうではなかつた。はつと思つた體と心の衝動をすぐ押へて、

『何でせう？』

としらばくれて見せた。

『いつまで人を吊つて置くもんぢやないよ。ちやんとわかつてる癖に――』主人はかう繰返して、

機會を男に與へることを常に避けるやうに心がけてゐたけれども、しかし一緒に毎日顏を見合はせて、一つ家に起臥してゐては、さうして吩咐られた用事をも斷るわけには行かなかつた。それに、土手には、人もゐることだし、まさか理不盡のことをするやうな氣遣ひもあるまい。かう思ひながらお園は二三歩後れて歩いた。

主人はざるを持つたまゝ、駈けるやうにして土手をのぼつた。

初めは別に何でもなかつた。いつものやうに、主人は岸から流の中に半ば沈んだやうになつてゐる生洲舟の上に飛んで渡つて、麻裏草履に白足袋、新しい下穿を惜し氣もなくあたりに見せたやうな扮裝で、頻りに躍つたりはねたりする鰻や鯉をたもで掬つてはざるに入れ、ざるに入れてはまた掬つてゐたが、やがてそれも十分になつたといふやうに、

『好いか、投るよ。』

かう岸に立つてゐるお園に笑ひかけて言つて、わざとたもをお園に向けて投るやうにした。

『好いか、本當に――』

『好う御座んす。』

正面から本當に投つてよこすかと思ひの外、やがて投られたたもは、お園の立つてゐるところからは二三間離れた方へと飛んで行つて落ちた。お園は急いでそれを拾ひに行つた。そこには蒲公英が黃に簇

く意見するやうな眼色や態度を示したけれども、しかし漸く漲溢して來る男心の壓迫をお園はどうすることも出來なかつた。次第に男の態度は露骨になつて行つた。

ある日の午前であつた。お園は井戸流しのところでせつせつと物を洗つてゐた。と、厨からたもとざるとを持つて出て來た主人は、

『園ちやん、ちよつと一緒に行つて呉れないか。』

河の中の生洲舟から魚を出して來るから、一緒に行つて手傳つて呉れといふのであつた。お園は笑つて躊躇した。

それにも拘らず、近く寄つて來た主人は、

『そんなものは、あとで好いから、一緒に行つてお呉れ。』

『鶴ちやんは？』

『鶴吉は何處かへ行つちやつたから。』

『ぢや、お信ちやんは？』

『まア、行つてお呉れよ。土手の上はのんきで好いぜ。たんほやけんげが一杯咲いてゐるぜ！』

まさかそれでも厭だと言ふわけには行かないので、お園は爲方なしに、そのたもを持つてあとからついて行つた。成るたけ主人と二人ゐるやうな處には行かないやうにしてゐたし、またさうしたあぶない

めてさうした祕密を嗅ぎ出さうとしてゐるのであつた。しかしあたりの評判では、その杉山の言つた女と切れてからは、主人は眞面目に家業にいそしんでゐるらしく、別にさうした女も他にはないらしかつた。

お園はその矛盾した自分の心を自分でも不思議に思ひながら、成るべく主人から來るさうした優しい、ささやかな、しかも絶えざる壓迫から避けるやうにした。菜の花の黄く日に照された前の畠には、蜂のぶん〳〵唸る音がして、終日雌を追ひつかれた牡鷄の時をつくる聲がをり〳〵のどかにあたりに聞えた。

七十四

呼ばなくつても好いのにわざ〳〵呼んで見たり、「鴨などを拵へてゐる傍を通り懸ると、用でもない用を吩咐けたり、時にはまたぼんやりかの女の腰かけてゐる緣側の傍にやつて來て話し懸けたり、見せなくつても好い情を見せたり、上さんばかりではない、他の人達が見ても異樣に思はれるやうな素振や調子が次第に日每に色濃くなつて來るのをお園は見た。

（これほど思つてゐる男の心持がわかりさうなもんだね。）かうその眼が言つてゐることもあれば、（わかつてゐながら汲み取らうとしない情無し女め。）と言つたやうな表情を見せることがあつたり、また怒つたり、脅したり、戯れかゝつたり、遣瀨ない戀心を見せたり、賺して機嫌を取るやうにしたり、いろいろとして見せるのを、お園はつとめて避けるやうにし、またつとめて悟らないやうにし、或時はつよ

めて、凝と此方を見てゐる主人の眼にゆくりなく出會つて、慌てゝ急に畠の方へ眼を遣つたりした。

しかしお園はつとめてそれを避けるやうにした。またつとめてその謎を解かないやうにした。兎に角、さうしたことになつては困るとかの女は思つたからである。またさうしたことになつては、この旅舍にもゐられなくなると思つたからである。お園の身にしては、田舍の旅舍の女中にまで流轉して來てゐるお園の身にしては、また更に山の旦那すらもなくなつて了つてゐる孤獨のかの女の身にしては、さうした思ひを主人からかけられたことは決してわるい氣はしなかつたのではあるけれども、しかも經驗が――上さん持ちの男に懲りた經驗が、十のものなら七つ八つまでその心を押へさせるに與つて力があつた。それはその主人の意志にその身をまかすれば、多少は好いことがあるには相違ないけれども、その結果は矢張同じことであつて、その扮裝も構はずに働いてゐる上さんをその相手にして、お互ひに辛い思ひを嘗めなければならないのにきまつてゐるのである。(何うして男ッて言ふものは、さういふ風に浮氣なんだらう!)ある時は、こんなことを心から考へて、一生懸命に働いてゐる上さんがつくづく氣の毒に思はれるやうなこともあつた。

その癖、お園は教員の杉山からその話を聞いて以來、主人の一擧一動には、常に深い注意を拂つてゐるのであつた。今、主人が何ういふ內部の生活をしてゐるか、何處かに妾でも圍つて置いてあるのではないか、それともまた近所の町の料理屋の女に深間でもあるのではないか。かう思つて、機會がある度に、つと

思議な氣がした。

十十三

その眼がさういふ風にかの女を捜したり、迎へたり、見送つたりしてゐる許りでなく、お園に對して最初から持つてゐた好意好感が、近頃ではそれ以上にある意味と色彩とを持つて來てゐて、此方の出やう如何に由つては、そこにすぐ活きた戀の火がついて來さうにさへ思はれた。

『だつて、それは無理だよ。お園だつて、一人で忙しいんだから。』

かう上さんや隱居に對して辯解して呉れる言葉の裡にも、またはお園のために成るたけ手助けになるやうにしやうとしてゐる行爲の中にも、絶えずやつて來る馴染の飲客に對する批評の中にも、すべてさうした微妙な細かい心が動いてゐて、いつそれが直接にかの女に向つて觸れて來るかわからなかつた。お園は戯談一つでさへ滅多なことは言へないやうな氣がした。

『餘り煩さいことを言ふ奴は、放つたらかして置いて、此方に來てゐる方が好い。家は料理屋なんだから、だるま屋とはわけが違ふんだから。』餘り長く離座敷になど行つてゐると、かうしたことを主人はよくお園に言つた。

朝、離座敷の雨戸を明けに行つて、それとなく厨の方に眼を遣ると、そこに、仕かけた仕事の手を留

爲めではないか。かう思つてまた打消しても打消しても、打消しきれない證據が次第に旅舍の主人の態度の上にあらはれて來てゐるのをお園は見た。

お園はこの頃不思議にも主人の眼が到る處でかの女を見てゐるのを發見した。客の座敷に出てゐる時にも、廊下を膳を運んで通る時にも、または帳場に用があつてそつちへ行く時にも、料理の庖丁を取つてゐる厨の傍を通る時にも――殊に、その厨と勝手を劃る疎い格子のところからぢつと此方を覗くやうにしてゐる主人の眼が、度々其處で動いてゐるお園の眼と逢つた。

（お園は何うした？）

その主人の眼は常にかう言つてかの女を搜してゐるやうに見えた。

時には、平氣ないつもの調子で、

『山から、あの後何とも言つて來ないかえ？』

などと笑ひ乍ら主人は訊いた。しかもその眼の中には、一層かの女に偏つて來つゝある色濃い心があらはれて見えた。

（これではとてもこの家にもゐられない。）さうはお園には思へなかつたけれども、兎に角困つたことが出來たとお園は思つた。或は、初めてT町の旅舍で顏を合せた時からさういふ氣ではなかつたかとも思つて見た。さうでないにしても、その心の芽はその時既に萠してはゐたのに相違なかつた。お園は不

にもそれとよくわかつた。(あんな息子を手管に乘せるのならわけはない。)かう思ひながらも、お園には、そんなことをするのが、今更馬鹿馬鹿しいやうな、またはさうした純な若い男の心を無條件で、玩具にするのは罪のやうな氣がして、何うしてもその相手になる氣にはなれなかつた。中年の機屋さんに對しても、家には上さんがあり、子供があり、夕暮門口に出てその歸るのを待つてゐるのを思ふと、曾て自分が甞めた經驗から押して、

『もう、好い加減にしてやめてお歸んなさいよ。お上さんが待つてるぢやないの。』かう言つて、單に旅舍の酌婦の言ふ口ではなしに、心からその冗な心と時間と金の浪費とを意見してやるやうな氣になつた。

Nのしつこいのにはお園はいつも閉口したが、後には、默つて、放つたらかして、そして此方に來てゐたりした。

其他にも、かの女に寄つて來る男を、いつもかういふ風に、皆な柳に風と輕く受流して、遂にその相手にならうとは思はなかつたが、しかも、お園はある日、ふと困つたことを發見した。それはその前から、變だ、變だとも思ひ、また山に行つて來る前にも、Tが來てゐる時分にも、さう思へばさうした素振がないのではなかつたけれども、しかもそれは自分の思ひやうの故だとばかり打消して、何遍もそのまゝにして了つたことではあつたけれども、それが次第に此頃になつて色濃くなつて來るのをかの女は見遁さなかつた。それと言ふのも、あの學校の教員の話を聞いた故ではないか、疑心暗鬼を生じてゐる

とてもこれからも男なしにはゐられない體であるといふこと、または此方でいくらさう思つてゐても男が決して放つては置かない女の身であるといふこと、それを思つたればこそ、あゝした眞似をする氣にもなつたのであるから、將來はいざ知らず、今の中は成るたけ靜かにぢつとして、もう少し本當のことを考へてゐたいとお園は思つてゐたのであるけれども、しかも男は決してそのまゝにかの女をさせては置かなかつた。振放つても振放つても、さうした男心は絕えずかの女の傍に寄つて來ようとした。『私、尼さんになつたんだから……もう、男は斷つたんですよ。』かういふお園の聲は、をり〳〵春の麗らかな光線と色彩との中にきこえた。

七十二

執念く纏はりついて來るNの他にも、お園を目ざしてやつて來る飮客はかなりに多かつた。一里程離れた村の豪農の息子もあれば、T町の士族町の中で機屋をやつてゐる中年の男は、そこら界隈に地機に出して置く機廻りにやつて來た次手に、車を門の中に曳き込んで置いて、午から夕方近くまでお園を相手にして酒を飮んで行つたりした。それに引きかへて、豪農の息子は、まだ女に對して漸く面白味を覺えたばかりで、唄をうたふでもなく、話をするでもなく、何のためにあちよいちよいやつて來るのかと思はれる位でありながら、しかもお園に對して頗る熱い忘れ難い戀心を抱いてゐるらしいのは、はたの目

てゐる繪となつた。そしてその添景としては、鷄が五六羽、コヽと言ひながら、矢張麗かな春の日影に浴しながら、四目垣の外にのどかに餌をあさつてゐた。

『そんなことを言つて、Nさん駄目ですよ。』

こんなことを言つて、銚子を取りにばた〳〵とその長い廊下を此方に來るお園の姿も艶に見えた。

厨には既に美しい若鮎が繪のやうに並べられ、或は魚でんに、或は天麩羅に、或は酢の物に、命ぜらるゝまゝ、それが客の膳に供せられた。まだ禁漁ではあつたけれども、料理屋でソッと使ふ位は大目に見られて、駐在所の巡査も見て見ない顏をして通つて行つた。

『好い春になりましたね。』

其處でも此處でも、さうした言葉が交された。

靜枝がたうとう旦那にも離れ、そこに園はれ者の化粧品屋の姉にも邪魔にされ、さうかと言つて出たいと思つた東京の方には好い口がなく、止むなく元のK町の古巣へ戻つて行つた時も、穩かな靜かな日で、お園は丁度門の入口のところに出てゐたが、それと聞いては、矢張種々なことを思はずにはゐられなかつた。『もう一度稼ぐのよ。だッてしやうがないもの。』こんなことを元氣よく言つて別れては行つたけれど、これも矢張男のためだと思ふと、一人でさびしさうにして土手の上の方へとのぼつて行くその後姿がいつまでもいつまでも眺められた。

七十一

梅は老いて白くぼやけ、桃は紅に土手の下の畠を飾り、青草は鮮かに到る處に萠え、川は緩やかに霞の底に咽んで流れた。土手の上にのぼつて振返つて見ても、山の雪は既に半ば消えて、その深い襞の連互をも明らかに眺めることが出來なくなつた。

帆は徐かに霞の中から生れてそしてまた霞の中に消えて行つた。

疎らな樹の栽ゑられた旅舍の庭にも、いつとなく春が來て、沈丁花が咲き、椿が咲き、黄梅が咲き、緋桃が咲き、今は門の入口のところにある絲垂櫻が既に闌な色を見せた。あの西風の寒く吹き荒れた冬は何處へ行つたかと思はれるやうに。またあの辛い朝毎の拭掃除のバケツに涙がほろ〳〵と亂れ落ちた冬は何處へ行つたかと思はるゝばかりに――

隱居の朝毎に杖をついて川の水量を見に土手に上つて行く姿も、隱居の上さんが小さな丸髷に結つて、家の子供に雜つて、土手沿ひの畠に野蒜や芹やなづ菜を摘んでゐる姿も、または主人の上さんが扮裝も構はずせつせと働いてゐるさまも、親類の娘が赤い腰卷をくるりとまくつて流元で物を洗つてゐる形も、更にまた客のやつて來たのを迎へて、お園が赤いメリンスの前垂をあたりにはつきり見せながら、『いらつしやい、お客樣。』と言つて座敷へと案内する姿も、すべて皆な美しい春の光線と色彩との中に浮び出し

し、却て山の旦那のことなどをお園に訊いた。『しやうがないよ。女が男のために苦勞するのは――私だつてね、それさへなければね、あんなだるま屋なんかに行きやしないんだけど、しやうがないよ。』
『Fさんは何うしたの？』
『あの人だツて、思つてゐて呉れないことはないんだけども……たよりのない人だもの。』
『しかし、本當にしつかりしなくつちや駄目よ。男ツて言ふものは、皆な薄情なもんだから。飽きれや、平氣で捨てゝ了ふもんだから……。一生懸命になると損だよ。』
『それは知つてゐるけれども、それにはまたいろんなことがあるんだもの。』
お光はいつもの快活に似合はずいくらかしよげたやうな顏の表情をして、『で、山の方はもうすつかり駄目なの』
『駄目さ、もう。』
『よくそれで澄してゐられるね。金でもうんと取つてやつたの？』
『取るどころか、あつたら呉れて來てやりたい位さ、お前さん。』
梅の花の白く午前の光線の中に浮き出してゐる柴垣の角のところで、二人は猶ほ暫く立つて話した。

ら言つた。夜道を一緖に送つて來て吳れた敎員をも主人はよく知つてゐて、『あゝ、あの人、今はあつちに出てゐるのか。數學が出來る好い先生だつた。』などと話した。

お園は不思議にも、此頃は何だか自分の體が大きな運命の流のやうなものゝ中に漂つてゐて、急流の瀨に流さるゝでもなく、さりとて淀んだ水の岸に留まつてゐるでもなく、靜かに緩やかに流されるともなく流れて行つてゐるやうな氣がした。をり〳〵はまだ山の旦那に對する未練が起つて來て、われとわが身の愚かさを自ら憤るやうな心持を誘つて來ないこともなかつたけれども、その時はいつもあの夕日に染つた水面と、闇の中の土手と、船橋の畔りの飮食店とが有效にその心を靜めて吳れた。(ならないものをなるやうにしやうたッてしやうがない。さうしたことを無理にすれは、再びあの苦惱をしなければならない。)かう思つてかの女は成るたけその殘つた心の焰を勞働に因つて忘れやうとするやうに、一日襷を外す暇もないやうにして働いた。

ある日、裏町のところで、ぱつたりお光に行き逢つた時には、向うでは却つてきまりがわるいやうにして、逸早く行き過ぎやうとするのを引留めて、

『お前さん、本當、お腹が大きいッて？』

かう訊くと、

『誰が言つて？　さうあのお茶つぴいが言つたの？』などと言つてゐたが、好い加減にそれはごまかし

『へえ。』

お園もかう言はずにはゐられなかつた。M屋と言へば、此の旅舍とは、位置も評判もぐつとわるく、女中は皆なだるまだと言はれてゐる家である。お園はさうしてゆくりなく沈淪して行く朋輩が可哀相なやうな氣がした。

七十

お園の前にはまた以前のやうな生活が來た。朝は早く起き、掃除をし、拭掃除をし、客が來れば、非戸流しで洗物をしてゐた手を前垂で拭いて、急いで庭を拔けて座敷に案內するといふやうな生活が、生醉の面倒臭い客の相手にもいやな顏をすることが出來ず、物好きに口說かれる男にも體の好い口を利いて置かなければならないといふやうな生活が、また夜は勞れて自分乍ら自分の體でないやうにぐつすり勞れて眠るやうな生活が――『お光の代りを早く搜さなければならない。でなくつちやお園が可哀相だ。』かう主人は頻りに言つたけれども、丁度好い女中は容易に手に入らなかつた。仕方がないので、まだ本當にお客の取扱ひなどの出來ないその親類の娘が半ばお光の代りをした。

山の話をきかれて主人や上さんの前でした時には、『何うも、さうなつちや色戀もお了ひだな……男だつて、薄情ッてばかり言ふのみぢやないんだらうけれど、あとに女が出來ちやな。』かう主人は笑ひなが

『ぢや、その子は誰の子？　Ｆさんの？　向うの人の？』

『向うの人のらしいよ。でも、何方だかわからないけれども。』

『Ｆさん、何うして？』

『Ｆさんも此間のことぢや呆れてゐたよ。そんな女だとは思つてゐなかつたなんて言つてゐたよ。もうあきらめたでせう。俺も役所に出てるお役人だからな。そんな女にいつまで思ひを殘しちやゐられないつて言つてゐたよ。』

『本當かしら？』

『そんなことをしたといふのが……』

『あゝ……』

『それや本當よ。お巡りさんが來てから、顏の色が變つちやつたんだもの。そしてそれから暫く經つと、お錢が出たんだもの。便所の蔭なんか前にいく度もさがしてなかつたところなんだもの。取つて見たけれども、持切れなくなつて、そしてそこに捨てたのね。親方もお上さんも皆な怒つてゐたよ。家の名前に疵がつくッて……』

『で、今、何處にゐるの。ゐるところ、知つてゝ？』

『何でも、その男の指金だらう。Ｍ屋にゐるッていふ話よ。』

『私、すつかり疑られたのよ。本當にあきれちやつた、あのお光ちやんにも……。そら、Fさんぢやなしに、向うに男があるでせう。あの人に貢ぐつもりか何かで、ふとさういふ氣がきざしたと見えるのよ。それだのに、私だッて言ふんで、それはひどい目に逢つちやつた。あとでは、お錢が出たから好いやうなものゝ……』

かう親類の娘は話してきかせた。

『そして何うしたの？　お光ちやん？』

『まだゐるでせう、そこらに？』

『國に歸つたんぢやないの？』

『國には歸れないでせう。Fさんもゐるし、あの男もゐるんでもの。』

つゞいて娘はお園の耳に口を寄せるやうにして、『それに、これなのよ、あの人。』お腹が大きくなつてゐるといふ恰好をして見せた。

『うそだらう。』

『本當よ。』

『何うして知つてるの。』

『何うしてッてさうなのよ……。それやこれやでお錢が要るのよ。それで、盗る氣になつたらしいよ。』

れた男への『惚れつぽさ』が、またさうした純な惚れッぽい心を無殘に踏みにじつて何とも思はない男に對する呪ひが、思ふまいとしてもまた思ひ出されて來て、（これからは思ふさま男に薄情にしてやらうか。あの朋輩のお咲といふ年增のやうに、男を蹂躪つてやらうか。）などとも思つた。しかし、心も體も疲れてゐるお園は、いつかこの他鄕の旅舍の柔かな夜着の中に埋められるやうにしてぐつすり寢込んで了つた。

六十九

河ぞひの旅舍に歸つて來て見ると、こゝでも二三日の中に種々なことがあつたのに驚かずにはお園にはゐられなかつた。ある事件のためにお光はもう其處にゐなかつた。『え？　お光ちやん、もうゐないんですか。』かう眼を見はるやうにしてお園は言つた。

それは本當であるか何だかわからないけれども、お園の出かけて行つた夜だといふ、土地の豪農の息子の蒲團の下に置いた五六十圓入つた財布がなくなつて、始めはその嫌疑が親類の娘つ子にかゝつたが、いろ〳〵なことから、段々お光があやしいといふことになつて、最後は、駐在所の巡査までやつて來て大騷ぎをした結果、一度とられた財布は、やがて厠の窓の外から發見されたが、それやこれやで、お光はたうとうゐられなくなつて、そして自分からひまを取つて行つたといふことであつた。

いくらか事情を知つてゐる上さんは、かう同情するやうにして訊いた。
『駄目よ、もうあんな男なんか。うんと喧嘩して來てやつた。』
『矢張、ゐるのかえ？　山に？』
『えゝえゝもうしやうがないの。すつかりもうあきらめちやつた。お上さん、男ッて、薄情なものね。』
川に飛込まうとした話だけは除いて、あとは山のことやら、女のことやら、歸りは夜になつて學校の先生と一緒に來た話などをお園がすると、上さんはそれに心から同情するやうに、『本當だよ。さうした男をいつまで思つてゐたつてしやうがないよ。却つて、一思ひに切れて了ふ方がお前さんの爲めになつたかも知れないよ。運は何處にあるかわからないからね。』
『本當ですとも……』
此前來て泊つた室とは違つた、奥の六疊に案内して呉れたので、まア、兎に角、今夜だけは緩くり休まうと思つて、心持よく一風呂浴びて來た身を、逸早く女中の敷いて呉れた蒲團の上へと横へた。
お園はこの前此處に來て、右にも左にも行く路がなく、殆ど行詰つて了つた時のことを考へずにはゐられなかつた。もうあの時から、否、もつと以前から、旦那の方の脈はあがつて了つてゐたのである。とても駄目であつたのである。それを知らずに、電報を二度も三度も打つたり何かした許りではなく、河ぞひの旅舍に行つてからも、あれほど深く男に憧れてゐた愚かさが、または昔からもよく朋輩に言は

引返して、漸く町と、四辻と、停車場の位置とが段々飲み込めて來たが、暫く經つた後には、『今晩は――』と言つて明るい硝子戸をあけて、お園はその旅舍へと入つて行つてゐた。
『おや、お前さんかえ。めづらしいね。』
かう言つて上さんは迎へて、
『何うしたの？　何處かへ行つて來たの？』
『山からの歸りですの。』
『さう？　さつきの汽車で來たのかえ？』
『いゝえ、少しわけがあつて、川をわたつて今來たばかりなんですの？　今夜はお上さん歸るにはおそいわね。』
『もう、今からぢや――』
上さんは後の時計を振返つて見て、『もう九時になるよ。』
『ぢや、明日早く歸ることにしませう。今夜はゆつくり泊めて貰つて。』
『それが好いよ。』
『あゝあゝくたびれた――』かう言つて思はずお園は溜息をついた。
『それで、何うしたえ旦那は？』

つてゐることだらう。)かう思ふと、自分の知らない家ではあるけれども、その小さな家庭の光景が歴々と眼に見えるやうに思ばれた。自分には、この年になつても、まださうしてやさしくして呉れる夫と言ふものがない……。お園にはちやんときまつた夫を持つて、家庭をつくるやうな位置にこれまだ一度もその身が置かれてゐなかつたことが悲しかつた。何んな貧しいものでも、皆な一人づゝ夫を持ち家庭を持つて、明るい灯の團欒の中に冬の夜を過ごしてゐるではないか。自分のやうにかうして寒い闇の夜を縋るものもなく歩いてゐるものは一人だつてないではないか。

しかしお園はそれを振放すやうにして思ひ直した。もうかの女はさうした悲哀に捉へられる身ではなかつた筈である。生れ變り生き歸つた身である筈である。氣がつくと、お園は既にT町の明るい灯の街頭近く來てゐた。

六十八

何でも停車場は、町の西の外れにあるのは知つてゐたけれども、夜なのと、入つて來た路が別の方であつたのとで、そこまで來ても、ちよつとその位置がわからなかつた。それに、行つても行つても、此前訪ねて來たM屋の方へ曲る路がやつて來ないので、擂れ違つた男に、『停車場は?』と訊いて見た。教へられて、始めてその大通りの四辻を通り越して、ずつと此方まで來て了つたことがわかつた。で、

最後に振返つた時には、もうその小さななつかしい提灯の火も見えなかつた。

お園は何だか夢のやうな氣がした。ふと不治の病の床に歸りの遲い夫を待つてゐる若い細君が見えた。つゞいて、あの土手の上の水溜りを飛んで男に抱着いた時の光景が歷々と浮んだ。自分ながら驚かるゝほど種々なことのあつた日である。朝、トロコで出かけて行つた時の自分と、そこから出て來た時の自分と、川の畔に立つてぢつと暗碧な水面を見詰めて立つてゐた自分とは丸で別な人間のやうに思はれる。また長い年月の間にぽつぽつ起つた光景のやうに離れ離れに考へられる。遠い遠いある日とある日の出來事を夢か何かで一つ一つ貫いて見たやうな氣がする。ふとわれに返つて、（でも好かつた。あそこで死ななくて好かつた。……あそこで死んではそれこそ犬死だ。）かう思つて見た。

（何うしてあんな氣になつたらう。）かう思つて見た。

山の旦那と喧嘩して出て來たのは、ずつと遠い昔のやうな氣がして居りながら、それが今日の午前であるのが不思議だつた。孤獨のさびしさと嫉妬と恨みとは依然として心に絡み附いてはゐるけれども、しかし最早それに捉へられるやうなことはなかつた。停車場から土手を通つて、川に面して立つた、それから薄暮に舟橋を渡つて、かうして此處まで辛うじてやつて來たといふことが、かの女と旦那との間に、有效に、再び渉ることの出來ない安全な大きな渠をつくつたやうな氣がした。

（もうあの人も家に歸つたらう。病んだ細君は喜んでゐるだらう。何の彼のと、深切に世話をしてや

六十七

『もうT町はそこですからね。』
かう教員は指したが、やがてそのわかれ道のところにやつて來て、
『それぢや……』
『何うも難有う御座いました。ではあつちにお出になることがあつたら、何うかお寄り下さいまし。』
『え……難有う……』
『奥さんもお大事になさいまし。』
かう言つてお園は別れた。と、再び一人になつたといふさびしさが溢るゝやうに胸に押上げて來て、種々なことがごた〳〵と一緒に集まつて渦を巻いた。それを押へてお園はすた〳〵と灯に向つて歩いたが、振返ると、その教員の持つた提灯が闇にぼつつり一つ浮かぶやうに搖いて行くのがはつきりと指さゝれた。
町に入らうとする低い坂の上で振返つた時には、その提灯は最早ずつと遠く小さく、向うに黑くこんもりと見えてゐる村落近くなつてゐたが、そこらに稚樹の影の低い林藪があるらしく、隱れたと思ふとまた見え、見えたと思ふとまた隱れた。

て見え、つゞいて大和障子の明るい家が見え、村の金持らしい樫の高い角刈の垣を取り廻した大きな邸宅が見え、それから少し行くと、またその村は盡きて、向うにいくらか高く明るい灯の多く簇がつてゐるのをお園は見た。

『あれが、町ですか。』

『え、さうです。』

『あなたは？』

『僕は、もう少し行つたところから右に入るんです。』其方の方に黑い杜やら人家やらのごた〱と連なつてゐるのを指さして、『あそこです、僕のゐる處は――』

『何ッていふ村ですの？』

『T村。』

『貴方のお名前は？』

『僕？』笑つて、『僕は杉山ッて言ふんです。』

『大變お世話になりましたのね。』忽ち逢つて忽ち別れなければならないのが悲しいといふやうな調子でお園は言つた。

に、川向うに知つてゐる國の人が來てゐて、それを訪ねてゆくりなく遲くなつたことにかの女は話した。

土手を下りて了ふと、果して路は平かに、よく乾いて、もはやさつきのやうな泥濘は何處にも見出されなかつた。遠い近い村の灯がチラチラとあちこちに見え出して來て、車の軋る音なども遠く聞えた。

『此處等のやうな道なら、提灯なんか借りなくつても歩けるけれど……。』

『本當ですとも、これなら、女でも一人で歩けますけども、さつきのやうな路ではねえ、水溜りのあつたところでは、これはとても駄目だと思ひましたよ。』

『あそこはいつもあゝだが……。此頃では、ことに酷い……』

かう教員は自分で言ふやうに言つて、暫くして『ぢや、今夜はT町で泊るんですね。』

『車があればと思ふんですけどももうありますまい。あつても行くのをいやがりますからねえ。』

『まア、泊つて、明日の朝、早く歸る方が好う御座んすね。……これで、K町までの軌道でも出來るとA町に行くには餘程便利になりますけれどもねえ。』

『もう、出來るんでせう。』

『今年の秋までには開通させるつもりで、工事を急いでゐるさうですけども、矢張、來年になるでせうね。』

こんな話をしながら二人は歩いた。いつか濶い田畠は盡きて、前には二三軒茅葺屋根が黑く闇を劃つ

話の樣子では、その病める細君は、その教員と一度何處かで同じ小學校に女教員をつとめてゐて、女の方から戀をして、そして漸く一緒になつたばかりで、その病氣が出たらしかつた。

六十六

『ぢや、もうどつとおよつてゐらつしやるんですか。』

『いゝえ、さうでもありませんがね、何うも、あの病氣ばかりは治る見込がないんだから困りますよ。』

『本當ですね……。何うかしてお治りになりませんかね。』

『何うもね。』

子供が出來なかつたのが却つて好かつたものゝ、またその出來てゐないのが可哀相なやうな處もあるなどと教員は話した。かなりに深い細君思ひで、その病床の世話なども深切にしてやつてゐるらしかつた。(矢張お互ひに最初から思ひ合つただけに、兩方で思ひ合つてゐらつしやるんですね。羨ましいやうね。)こんな言葉がつい口先まで出かゝつて來たけれども、しかしそれを表に出して言ふやうな輕い氣分にはなれなかつた。

かの女がかうして女の身で、一人淋しい夜道をしなければならない理由を男から訊かれた時にはお園は餘程詳しくその話をしやうかと思つたけれど、流石にそれは言はずに、さつき上さんにも言つたやう

こんな話をしながら歩いて、『ぢやお友達もあの近所にいくらもおありになりませうから、今度來たら是非お寄り下さい。かうしてお世話になつたお禮といふお禮は出來ないかも知れませんけれども……。』などゝお園は言つた。次第にお園の故郷の話や、かうした他鄕に來るやうになつた話や、身の上話に近い話などが段々二人の口に上つて來た。

『さうですか、Iの溫泉場にゐたんですか、』などと敎員は言つた。

お園の方でも、次第に馴々しくその敎員の生活などにまで深く入つて行つた。

こんなことをきくのも、餘り無躾のやうな氣がしたが、何處かで訊いて見たいやうな氣がしたので、

『さう申せば、奧さん御病氣なんですツてね。』

『何うしてそんなこと知つてゐるんです？』

『だつて、さつきあそこで御自分で、おつしやつてゐらしつたぢやありませんか。』

『さうでしたかな……』(早くもきき附けたもんだな）といふ風に暫し考へて、『何うもしやうがないんですよ、もう……』

『御病氣は？』

『もう、何うせ、長くはない病氣なんだけども……。可哀相だからね。來てまだ一年と少しか經たないんだから。』

だるんですか。』

『もう一人、私より前からゐる人がをります。』

『あそこの家庭は面白いでせう。』

『さア、面白いッて別に……。』

『商賣は堅くやつてゐるし、女中にも無理にだるまの眞似なんかさせないけれども、代々、主人が女好きでね。』

『そんなことはないでせう。』

『さうかね、まだ知らないですかね。あの隱居は何人女房を替へたか知れないやうな人ですしね、今の主人だつて、あれで隨分女にかけてはいろんなことがあるんですよ。』

『隱居さんはそんな話ですけども、旦那の方はそんなことはないでせう。堅い方ですもの……。』

かう言ふと、教員は笑つて、

『それぢや此頃堅くしてゐるんですよ。今は何うか知らないけども、私の行く時分には、あの町の中に妾の樣にしてゐた女があつてね。上さん、妬いて困つてゐましたよ。』

『さうですかね。そんな風なところはちつとも見えませんがね。』

『さういふ人が却つてさういふことをするもんですよ。』

ゐから。』

かう言つて、教員はまた先に立つて歩き出した。

六十五

それから急に親しさが増したといふやうにして、教員は色々なことを聞き出した。今までだるま位にしかお鶴を思つてゐなかつたらしいかれは、『あ、さうですか。A町のN屋にゐるんですか。あそこは割合に堅い家だ。』と言つてその近所の事情にも明るいやうな口をきいた。

『あそこいら、お存じですの？』

『あのぢき川下の小學校に三年もゐたんですからね。』

『さうですか。』

『あの家には、よく行つたもんでさ。僕のゐたところからは少し遠すぎるけれど、他に近所にさうしたところがないので、新年の宴會などはよくあそこでやりましたよ。お鶴ッていふ肥つた年増がゐましたが、今まだ、ゐますか。』

『存じません。』

『もうゐないかな……。あゝいふところは移り替りが早いですからね。今は、それぢや、あなたと外にま

『待つた、待つた！』

急に教員は押止めて、『下駄や、足袋をぬらしちやつまらない。待つた、待つた。今、好いことをするから。』かう言つて、提灯を片手に翳したまゝ、そこに半ば水溜りの中にあらはれてゐる小さな石に足を寄せて、動くか動かないかを試して見てから、そのまゝ手を長く女の方へとのばした。

『そら、かうしてゐるから、私の手を持つて一呼吸にお飛びなさい。何ァにわけはありませんよ。』

『さうでせうかしら。』

いくらか躊躇してかう言つてゐたが、やがてお園は男の延した手を堅くしつかりと攫んで、男に引張られるやうにして、思ひ切つて飛んだ。飛び得たことはそれで飛び得たけれど、勢ひ込んだ力に伴れられて、危く前に踣りさうになつて、引張られて、男の體にしつかり抱き着いて了つた。

『まァひどいとこ！』

かう慌てゝ男から離れて言つて『とても一人でなんか通れやしませんね。』

『下駄や足袋は汚しはしませんでしたか。』

『え、難有う。』振返つて見て、『大丈夫です……。お蔭さまで……。まァ、こはかつたこと。』お園はほつと呼吸をつくやうにしたが、『本當に貴方がゐて下すつたればこそ……。貴方こそ好い迷惑ですね。』

『なァに……。もう、これから先は、こんなところはありません。もうあとは路はすつかり乾いてゐ

まゝ一飛びに、それを向うに躍り越えた。すぐ提灯を此方にさしつけて、

『それ、そこは飛ばなくつちや駄目ですよ。水ですよ。』

男について何うやらかうやらそこまではやつて來たものゝ、此處に來てそれを見ると、お園は何うすることも出來ないやうにして躊躇した。

『ぴよんと一息にお飛びなさい。』

『…………』

『飛べませんか。』

『隨分大きな水溜りですね。』

飛ばうにも飛べさうにはお園に思はれなかつた。

『飛べませんかね。』

仕方がない、下駄や足袋なんか何うなつたッてかまはない。やがてお園はかう覺悟をしたらしく、裾を大きくまくり上げて、つゞいて赤いメリンスの腰卷を帯のところに端折りにかゝつた。

それを此方で見てゐた教員は、

『何うするんです?』

『入つて行きますよ。水は深くはないでせうね。』

別に氣にも留めぬといふ風で、教員は提灯を振り振り歩いた。と、向うからぽつりと提灯が一つあらはれ出して、此方に徐かに動いて來るのが見えた。何だか芝居の舞臺にでもありさうに思はれてお園は氣味がわるかつた。しかし近づいて見ると、何でもなかつた。それは中年の農家の女であつた。向うでも氣味がわるいと見えて『今晩は――』などと挨拶して摺れ違つて行つた。

六十四

もう一箇所あると言つた泥濘のところがやがて來た。それは向うに出て行かうすと土手の下り際で、兩側はさびしい篠竹の藪、前は路がぐるぐる折れ曲つて、そのまゝ下りて行つてゐるのであつたが、提灯を翳すと、眞中の水溜りに空の星がチラチラ映つて動いてゐるのがはつきりと見えた。

『此處ですよ、今朝來る時、ひどいと思つたのは――。』

かう言ひながら、それでも教員は、ちよつと見ては、さうした足溜りがあるかと危まれるやうなところを提灯を下にこごむやうにつきつけつゝ、『私についていらつしやい。此方が好い筈だ……。』と言つたり、『それ、それ、そつちは駄目……。そつちは水溜りですよ。』と教へたりして、一歩一歩下駄を踏入れては拔き、拔いては踏入れるといふやうにして辛うじて拾つて歩いて行つたが、少し行くと、その先のところに、何うしても跨がなければならない幅二尺ほどの水溜りがあつた。仕方がないので、教員はその

『何うしてもねえ。』

二人はまた默つて歩いた。

しかし、そんなにお饒舌ではないといふこと、しつかりした堅さうな人であるといふこと、溫泉宿のあるあたりの敎員と比べてはちつともわるゐ擢れがしてゐないといふこと、始めはいくらか無氣味なやうな氣がしたけれども、次第にさうした心持は除れて行つて、今では却つて賴りになるやうに思はれて來たことなどが、默つて歩いてゐる中にも、ひとり手にお園の心に染み込んで來た。

川の土手近く、いくらか勾配がついてゐたが、歩いて行くにつれて、次第にさつき向う岸で見た樣な篠竹の薄暗いガサコソした藪がその兩側にあらはれ出して來た。そしてその藪の向うには、こんもりした林が闇の壁か何ぞのやうに暗く深く連なりわたつてゐた。空の星のキラキラ閃めくのも何となく無氣味であつた。

『さびしいところですね。』

思はずかうお園が言ふと、

『なァに、ちよつとの間ですよ。土手ですからね。これを向うに下りさへすれや、もう村ですから。』

『とても、私一人なんかでは、通つては來られませんね。』

『なァに……。』

『もう少し、ゆつくり行きませう。無理だ……。』

こんなことを笑つて言ひながら、成るたけ靜かに歩くやうにした。

『御迷惑ですね。』

『なァに……。近いんだから、緩くり歩いたッてわけはありませんよ。』

『一里には近いんですッてね。』

『そんなにあるもんですか。この間は半里ッて昔から言つたところですよ。でも、半里には少し遠い……』

成ほど闇では下駄を踏み込みさうな、一歩一歩拾ふやうにしなければ通れないやうな泥濘が其處にあつた。さうした處に出會ふと、その度毎に、教員は提燈を高く擧げて、後からついて來る女の路を照すやうにしてやつた。

『それ、それ、此方が路が好い。』と言つたりした。

『成ほど、これぢや提灯なしでは歩けませんね。』

『え、今朝、來る時、見て置いたから、それでもあそこに寄つて、提灯を借りて來たんですが、闇ぢやちよつとまごつきますよ。まだこれから先に一箇所これよりわるいところがありますよ。汽車が出來てから、土木で餘り構はないもんだから、路はすつかりわるくなつちやつた。』

『結構、結構、これだけあれや十分だ……』蠟燭を出して見て、『それぢや、蠟燭まで借りて行くかな。』

『えゝ、えゝ、何うかさうなすつて……』

食つた饂飩の金は度々かうしてやつて來て、かけにしてあるらしく、そのまゝ教員は、蹲み加減になつて、蠟燭にマッチを摩つたが、いくらか髯の延びた顏はやがて點ぜられた灯に青白く照されて見えた。

『ぢや、何うかお願ひいたします。』かうお園は言つて、勘定をしたり茶代を置いたりして、一緒に出かける支度をした。

六十三

『何うも御迷惑で御座いますね。』かうお園が言つて其處を出てから、夕闇の中を次第に人家の灯にも人聲にも遠ざかつて行くやうな路を、二人は半ば沈默しつゝ半ば途切れ途切れに話しつゝ後先になつて歩いた。提灯の光は歩いて行くその周圍だけを明るく照した。

『歩き方が早くはありやしませんか。』

『いゝえ。』

かうお園は言つたけれども、女の足で男と並んで歩くのは、かなりの努力であるらしく、次第に呼吸がはずんで來るのを教員は見て、

『何うも難有う。今も今、淋しいけども、爲方がないから、一人でぼつぼつ行かうかなんて思つてゐた處なんですよ。行きつけたところなら、一里位、なんでもないんですけども、丸で知らない初めての路なんですから。』

『T町まで行くんですか。』

かう今度は教員がお園に訊いた。

『え、あそこまで參れば、停車場前に知つた家がありますから。』かうした女一人でこんなところに來てゐるのを半ば辯解するやうに、

『汽車で行く筈だつたんですけども、ちよつとそこに用があつたもんですから……。』

『え、好う御座んすとも……。私だッて一人で行くよりか、路伴れがある方が好い。』こんなことを言ひながら、奧から上さんが出して來て呉れた弓張提燈をひろげて見て、

『ヤ、蠟燭まで借りて行つちや氣の毒だな……。』

『いゝえ、好いんだとも……』

『でも……』

『もう一本上げやうかね。これぢや足りねえかも知れねえ。』

立つて奧に行かうとするのを、

やがて上さんの持つて行つた饂飩をお代りして食つたりなどしてゐたが、急に、
『お上さん氣の毒だが、提燈を一つ貸して呉れないかね。途中に、少し道のわるいところがあつたから……。』
『え、え、よう御座んすとも……』
かう上さんは言つたが、ふと、氣がついたやうに、お園の方を向いて、
『あ、丁度好い……。お客さん、先生さんに一緒に行つて貰ひなさるが好い。ぢき、T町の少し手前までいらつしやる方なんだから……』かう言つて、更にその教員の方に向つて、お園に代つて、一緒に行つて貰ふことを賴んだ。生憎車のないことやら、不知案内の女の夜道は心細いことなどを附け加へながら。
『え、好いですとも……』
教員はかう氣輕に言つて、またお園の方を見た。お園も好い道伴れを得たことを喜ばずにはゐられなかつた。『何うも御迷惑でせうけども、さう願へれば本當に結構なのですが……』かうお園は愛嬌ある笑を顏に漲らせながらいくらか立つて賴むやうにした。
『あそこまで一緒に行つて貰ひさへすれやな、T町はもうすぐだから續いてゐるやうなもんだでな。』
好い事をしたといふやうに、上さんはかうお園に言つた。

『御苦勞ですね。』

『饂飩でも一杯食つて行くかな。少し腹が減つて來た。』ポケットから袋は出さずに一本だけ朝日をつまみ出して、それに火をつけてスパスパ吸ひながら、『作造君何うした。出來が好いな。數學は一番だ、お上さん樂みだ。』

『いつも御厄介にばつかりなつてほんにすまねえと思つてゐるだァな。』

上さんは莞爾しながらこんなことを言つた。男はその時始めてそこに若い綺麗な女のゐるのに氣が附いたといふやうにしてお園を見た。

六十二

『御病人はいかがですか。』

かう上さんが訊くと、

『いや、もう、どうも捗々しくなくつて困りものさ……。』

こんなことをその男は言つた。お園は聞くともなく聞いてゐたのであつたが、しかもその小學校の先生は、校長次席の訓導位で、長年この附近に勤めてゐるらしく、病人と言ふのはその細君であることなども段々飲み込めて來た。

でもT町だで。』

爲方がなければさうしやうとお園は思ひながらまた盃を口に當てた。夜道だつて、歩いたことはないではない。不知案内の他鄕だからこそ、何だか無氣味なやうな氣もするけれど、溫泉場にゐた頃には、一里位夜道をしたことはいくらもある。それにしてゝ死神に取憑かれたとは言へ、愚かな眞似をしたものだ。あそこで汽車を下りさへしなければ、今時分はT町に行つてゆつくりしてゐられたのに……。こんなことを思つてゐると、ふと、

『今晩は――』かう言つて、大和障子を明けて靜かに入つて來たものがあつた。見ると三十一二位の脊の高い、色の白い男で、焦茶色の中折帽子をかぶつて、茶色がかつた外套をはおつてゐたが下からはセルの袴が見えて、メリヤスの下穿きにつま皮のついた日和下駄を穿いてゐるのがお園の眼についた。日頃、懇意であり、また尊敬してゐる間柄であるらしく、『まア、お上んなさい。』とか何とか言つて、上框のところに上さんは火鉢を運んで來たり何かしてゐたが、

『今日は遲いんですね。』

『なァに少しばかり話があつて、今まで學校に殘つてゐたもんだから。』

『會議ですか。』

『會議ッて言ふほどのこともないんだけどもね……。面倒臭くつてな。』

『なァに、すぐだで……。五六軒先だでな。だがな、ゐれば好いがさ。』

出て行く男の兒の方に向つては、

『ゐたらな、すぐ支度して來うッてな。お客樣、女衆だから、夜道は不用心だから、成るべく行つて吳れッてな。』

かう深切に上さんは言つて、そのまゝ厨の方へと行つた。お園は他人の深切が更に深くその身に染みるやうな氣がした。お園は一杯二杯盃を口に當てゝ見た。酒は地酒だと見えて、一種いやな臭ひがして、わるく舌に反撥した。

五六軒先と言ふのに拘らず、男の兒は容易に歸つて來なかつた。どうしたかと思つて待つてゐるとやがて、『おつかァ、政ァ何處さがしてもゐねえや。』かう言つて入つて來た。

『ゐねえか、困つたな。』

『此處には旅籠屋はないんですか？』

何なら、此處に泊つて、明日ゆつくり出かけて行つても好いと思つたお園は、更にかう言つて、上さんに訊いた。

『旅籠屋も、元は澤山あつたんだが、今はねえなァ。』間を置いて、『でも、夜道でも、お前さん、そんなに淋しくはねえよ。村もあるし、人家もあるしな、それに一本路だで、眞直に行きさへすれや、いや

やがてそこに上さんが酒と肴とを運んで來たので、お園は訊いた。
『T町までは、此處から、何の位ありますか。』
『一里には近う御座います、二十二三町位のものです。』
『車はあるでせうか？』
『一臺、此處にもあるにはあるんですけども、何うしましたか。』
かう言つて後を振返るやうにした。

六十一

『一臺しきやないんですか？』
『汽車が出來ない中は、隨分あつたんだけれど、今は乘手が多くないもんだでな……。一臺あるのも、百姓半分にやつてゐるんだで。』かう上さんは言つて、もう一度後を振返つて、奥の方にゐる十六七になる、さつきの女の兒の兄らしい男の兒に向つて、『作造、政ン許へ行つて訊いて上げな。お客樣、T町まで車が要るッて言ふだで、行くか何うかッて？』
男の兒は素直に立つて此方へ出て來た。
『お氣の毒ですね。』

『買つて來て呉れる？』お園も首を傾げて、手で女の兒の頭を撫でながら、『好い兒ね。買つて來て呉れるのね。それぢや、ね、買つて來て頂戴ね。』かう言つて帶の間から財布を出して、五十錢札を一枚渡して朝日を二つ買つて來て貰ふことを賴んだ。

女の兒は素直に出て行つた。

お園はさつき土手の上あたりで考へたとは、丸で違つたなつかし味を他人に感じた。人は皆かう自分にやさしいものであるといふやうな氣がした。

嬉しいやうな、生き返つたやうな、生々した心持が胸の底から浮き上つて來た。そこに、女の兒は煙草を買つて戻つて來た。

『好い兒だね、よくお使ひをして呉れましたね。これを上げますよ。』釣錢の中に雜つてゐた白銅一つを女の兒の手に載せると、女の兒は貰つて好いかわるいかわからないので、後退りして母親の方を見た。

『そんなことしねで下さいよ。』

かう上さんはそれを見て言つた。

『少しばかしですよ。』

『お氣の毒なね……』かう言つたが、『お前、お禮を言ふんだよ、お客樣に……』

女の兒は默つて頭を下げて、それをつかんだまゝ、嬉しさうにして向うに行つた。お園も嬉しかつた。

やに笑ひ上戸になつて朋輩に笑はれたり何かしたことは始終あつたが、しかし今まで獨りで酒を飮まうなど丶思つたことはなかつた。それが不思議にも今日は一杯飮んで見たくなつた。危なく命を殞さうとしだのを兎に角免れて來たといふこともあり、酒でも飮んだら、ちつとはむしやくしやする腹の蟲を靜める方便にもならうかともかの女は思つたのであつた。それに、隣りに、何も彼も忘れたやうにして、旨さうに盃を甜り甜り甜り飮んでゐる客の狀態もかの女にさうした心を誘つた。

その酒の出來て來る間に、ちよつと思ひ附いたやうに、煙草を袂にさぐつて見たが、今朝行く時に、買つた朝日は、いつかあら方吸ひ盡したと見えて、あとには一本しか殘つてゐなかつた。お園はそれに火をつけて、のんきさうに徐かに吸つたが、しかもあとがなくては心細いといふやうに、そこらにうろうろしてゐる此家の子供らしい十位になる女の兒に、

『此の近所に、煙草を賣る家はない？』

と首を傾けてやさしく訊いて見た。

女の兒はきまりがわるさうに、急には返事も出來ずにゐたが、それを厨から見てゐた上さんは、『すぐそこにあります……。一軒置いて隣に。』かう早口に言つたが、

『お前、ね、好い兒だからお客さんに買つて來てお上げ、ね、好い兒だから。』

かう續けて女の兒に言つた。

に、右側に、殊に灯の明るくかゞやいた家があつて、それは饂飩、蕎麥、その他何でも食はせて吳れるやうな家であると云ふことがやがてわかつた。覗いて見ると、入口の向うには、鮪の半身が吊してあるのに明るい灯がさし、厨の奥にある大きな扁平たい釜には、湯氣が暖かく渦巻くやうに漲り靡き、空腹の胃の腑を刺戟せずには置かないやうな酒の香や食物の匂ひがあたりに滿ちわたつた。そのまゝお園は少し開いた大和障子の狹い間から身を捩るやうにして入つて行つた。

『入らつしやい。』

厨のところに立つて見てゐた中年の此處の上さんらしい女がかう言つてかの女を迎へた。傍には德利を二本も三本も並べて旣にかなりに醉つてゐるらしい勞働者らしい客があつたが、それも眼を睜るやうにして、突然入つて來た若い綺麗なお園を見上げた。

上さんはやがて火鉢をかの女の腰を掛けたその側に運んで來た。

六十

饂飩のあついのを二杯續けて註文して食つて、それで漸く人心地がついたやうになつたが、急に思ひ出したやうに一本つけて貰ふ氣になつて、その他に別に刺身と煑魚を持つて來て貰ふことにした。

酒はさう好きな方ではない。溫泉宿にゐる時分には、男の相手をして七八杯、時にはもつと飮んでい

明るい灯の並んだ家並の前に來て、お園はまたほつと呼吸をついた。

（あれで死んで了つては、それこそ犬死だ。好かつた、好かつた、死ななくつて好かつた。命拾ひをした。）

かう口にまで出して言つた。

（死んだッて好い氣味だ位にしか思ひやしない……。それにしても何うしてあんな氣になつたか。）

お園は一途にそれを思ひ詰めて、東京の兄弟のことすら思はなかつたことを不思議にした。と、いろいろな事がごた〳〵と一つになつて頭に簇つて見えた。Tの顏も見えた。川沿の旅舍の主人の顏も見えた。

二歩三歩歩いて行つたが、ふとかの女は自分が非常に空腹であるのに氣がついた。さつきトロコに乘る時、午飯を食はうとして、とてもそれが咽喉に通りさうにもないと思つてよして以來、今までかの女には腹が空いたなどといふことは殆ど念頭に浮ばなかつたのである。（さうだ。お腹が空いた筈だ。朝食べたきり、何にも食べないんだもの。）急に、かの女は何處かそこらに夕飯を食べさせて呉れるやうなところはないかと思つてあたりを見廻した。

薄暮は既に夜になつて、冬の暖かい晩によく生ずる薄い白い夜霧が、茫と微かにあたりを包んだ。その中から此方へやつて來る人や車の氣勢がした。

飲食店をその附近に發見するについては、お園は別に多くの手間を要さなかつた。暫く行くと、其處

のやうになつかしくなつて來た。兎に角そこまでは急いで行かなければならないと思つて、船橋の半ばから先は、お園は橋板を鳴らすやうにしてすた〳〵渡つて行つた。

五十九

橋を渡り終つて、お園はほつと呼吸をついた。此時には、さつきとは考へが丸で違つて、何うしてあそこの停車場で下りてあの土手をわざ〳〵あんな眞似をして通つて來ただらうと思つた。自分ながら不思議なやうな氣がした。あれが人のよく言ふ死神に取憑かれたのかも知れない。あれでもしかすれば、この身は死んで了つてゐたかも知れない。かう思ふと、何となく恐ろしい、後が振返られるやうな、またゾッと寒氣がするやうな氣がして、あたりに旣に近く見えてゐる灯や人影や人聲の方へ一刻も早く近寄つて行かなければならないやうに思はれた。

そこには樂げに笑ふ聲がする。何か低く囁いてゐる聲がする。明るい灯が見える。冬にも拘らず店の大和障子を半ば明けて、溫かさうな煙と空氣と人の息とを漲らしてゐる家などもある。誰も彼も、『好いお晩になりました、』と言つて平和に睦しく團欒して夕飯の膳に向つてゐる。お園はかの女が經て來たさつきの世界とは丸で別な世界にでも來たやうな氣がした。かの女には今まで曾てこれほど灯がなつかしく、人聲が力強く感じられたことはなかつた。

したゞかの女はまだ死を思ひ返したのではなかつたけれども、また別に歩くといふ意志もなかつたので
あるけれども、唯ふら〳〵と其處から歩き出して、またもとの街道の方へと出て來た。
船橋の處に來た時には、日はもうとつぷりと暮れて、さつきまでさし殘つてゐた竹藪の微かな餘照も消
え、水にさびしく映つてゐた夕の雲の影も消えて、茫と微白く薄暮の色があたりを包んだ。對岸には、
夕暮の煙や、人家や、人聲や、岸に繋いである船や、チラチラかゞやく灯などかごた〳〵と渦を卷いて
ゐるのをかの女は目にした。
船橋を渡りかけて、丁度その半ばに及ばうとした頃、ふとまたかの女は、(いつそこのまゝ)と思つて、
立留つて、並んだ船橋の舟に低く囁いて渦を卷いて流れてゐる川の面を覗くやうにした。
夕の星のキラキラ水に映つてゐるのが見えた。
併し矢張實行は出來なかつた。つゞいてこんなことをしてゐるかの女を自分で客觀したやうな心持が
何處からともなく湧き出して來た。自分で自分が可哀相なやうな氣が盛に胸につき上げて來た。
(さうだ。死ななくッても好い。これから生れ變つた氣で、命拾ひをした氣で働く方が本當だ。)ほつ
とお園は呼吸をつくやうな氣がした。恐ろしい暗いところから辛うじて浮び上つて來たやうな氣がした。
生き返つたやうな氣がした。
と、對岸にごた〳〵と微白くかたまつて見えてゐる人家や人聲や灯が急に新しい世界でも見附けたか

かつたので、誰にも妨げられずに長い間かの女は其處に立つてゐることが出來た。しかしそのまま飛び込まうとする氣にもなれなかつた。川は微かな瀬をそこにつくつて、低く囁くやうに流れては渦を卷き、渦を卷いては又徐かに流れた。

水の面にさした夕日の名殘は、次第に色が褪めて、オレンヂから褐色になり、鼠色になり、次第に暗碧の色にならうとしてゐたが、しかも對岸の折れ曲つた土手の上の淡竹の藪には、日が落ちた後の餘照がまだいくらかさし殘つてゐて、既に薄暮の色は舟橋あたりに微白く迫つて來てゐるに拘はらず、まだ何處か明るいやうな感じがしてゐた。半ば孕んだ帆が一つ、竹藪の傍を掠めるやうにして、ギイと徐に梶の音をたてゝ通つた。

今が時だ……とお園は思つた。と、急に悲しくなつて來た。かの女は總身の痙攣するやうなのを覺えた。しかしそれは、身を投げる、死ぬるといふ悲哀ではなくて、それすらかの女には實行出來ないといふ悲哀であつた。かうした眞似をしなければならないといふ悲哀であつた。次第にかの女はとても實行の出來ない死神の誘惑から目覺めて來た。

かの女は長い間、凝と水の面を見詰めてゐたことを思ひ出した。その深さうな暗碧な水が、急ちかの女をこの世の覊絆から、悲哀から、面倒な心の煩悶から、空虛なさびしい前途から救つて呉れると思つたことを思ひ出した。しかもそれを敢てさせる激情はもうかの女の體に殘つてゐなかつたことを思ひ出

溜息がひとり手にお園には出て來た。

（もう少し先に行つたら、もつと好い場所があるかも知れない。）

かう思ひながら、お園はまたすた〳〵と歩いて行つた。

少し行くと、今度は街道が土手とわかれて、再びだら〳〵とこんもりした杉の森の中に下りて行つて居るのをお園は見た。かの女はちよつと立留つて考へて見たが、矢張それについて下りて行くより他に爲方がないので、そのまゝそれを森の中へと下りて行くと、やがて正面は、川に、川に架けた舟橋に、その少し手前に、別に細い矢張川に赴くらしい路があるのを發見したお園は、そのまゝ急いで其方へと入つて行つた。

それは漁師達の川狩に行くやうな路であつた。やがてかの女はその前に、すぐ前に、たぷたぷと水の漲つた瀬の早い大きな川が、渦をつくつて凄じく流れて行つてゐるのを目にした。街道からつゞいた船橋の一部もそこからそれとはつきり指された。漁師達の舟も一隻二隻岸に繋がれて水に漾つてゐた。夕日は靜かにあたりを染めた。

五十八

凝とお園は河の面を眺めた。まだあたりは明るかつたけれども、幸ひにその附近に漁師もやつて來な

つて行つたが、そのまゝ川の岸に下りて行く路を求めるやうにして、ぐん〳〵川に面した低い笹藪に添つて歩いて行つた。立留つたり、立留つて考へたり、また歩き出したり、深く流れてゐる川を覗くやうにしたり、誰か見てゐるものはないかといふやうにあたりを見廻したりしてゐる姿が、夕日の明るくさした光線の中にはつきりと浮き出すやうに此方から見えた。

かなりに遠くまで、その姿が小さく見えるあたりまで、お園は低い笹藪に添つて歩いて行つた。

しかし、川が深く穿たれて流れてゐる此處等あたりでは、何處まで行つても、笹藪と木立との間をわけて川の岸に下りて行くやうな路は見當らぬらしく、好い加減行つたのを引返して、やがてお園が此方に戾つて來るのが見えた。

ふと、機廻りの歸りらしい、澁紙で張つた大きな籠を乘せた荷車が、向うからガタガタと音させてやつて來るのをお園は眼にした。と、急に慌てたやうに、またはあやしまれるのを恐れるやうにして、かの女は急いでその畠道から再び街道の方へと出て來た。

荷車を曳いて來たのは、商人風の中年の男で、あと押しに十三四の小僧を伴れて來てゐたが、酌婦らしい若い女が畑の中にうろうろしてゐるのをちよつとあやしむといふやうにして、梶棒を留めて、凝とそれを見てゐたが、そのまゝお園が此方に出て來たのを見て、何か小僧と顏を見合せて言つて笑つて、再び車をガタガタと街道に響かせて曳いて行つた。

何うして、再びあの川添ひの旅舍に行つて働くことなどがこの身に出來よう。何を樂しみに？　何を目的に？　空虛な、がらんとした、縋るものとては一握の藁すらないその荒凉とした人生の流れの中に？（何うしてもそれより他はない。それが私の拙ない運命に相應してゐる。さうしたなら、聞いた人は可哀相に思つて呉れるだらう。恨んでゐる男も女も、その恨みを捨てゝ呉れるだらう。）こんなことを何遍も何遍も繰返しながら、お園は土手添ひの暗い雜木林の中の路へと入つて行つた。

五十七

雜木林を通り越して、だら〳〵と土手の上に登つて行くと、急にあたりが明るくなつて、篠竹のかなりに太く生えた藪が半ば白く半ば青くそこに連つてゐるのをお園は見た。運送車や荷車の轍の跡を縱横に印した路は、川の流れにつれ、土手の屈曲につれて、幾重にもうねうねと折れ曲つて通じてゐたが、少し行くと、左側の篠竹の藪は、いつか緣のまださう深くない麥の畑に變つて、その下に、矢張半ば藪や木立に蔽はれた川の水が、一ところさびしく錆色に流れてゐるのが見えた。

お園は思はず立留つた。そしてそれとなくあたりを見廻した。

さびしい街道には、誰も人の姿は見えなかつた。夕日がただ藪の隙間から線を成してさし添つてゐるばかりであつた。急にお園は、自分の步いてゐる街道から、麥の畑の緣についてゐる細い畠道の方へと入

其向うの雜木林近く行つた時、土手の方から一人の商人風の男が下りて來たが、それと摩れ違はうとして、ふと思ひついたやうに、

『あそこから土手ですね。川までまだ餘程ありますか?』

かうその女は訊いた。

『もう五六町。』

かうかの商人風の男は早口に言ひ捨てゝすれ違つた。

何も知らないから、何とも言はなかつたけれども、もしそれと知つたら、その聞かれた男は、抑揚のない單調な空虛なその聲の調子に驚いたであらう。またその顏の赤い中に一種喪心したやうな、または昂奮したやうな表情を見落すことはなかつたであらう。何故なら、それは死神に取憑かれたやうなかの女で、汽車を下りた時は、まだそれほど思ひ詰めてはゐなかつたけれど、次第に行くべき道を脇にそれて、それより他には、何うにもかうにも行くべき路がないやうに、段々と思ひ込んだお園であつたからである。今やかの女の心と體の周圍には、山の旦那や、Tばかりではなく、その他の男もすべて皆執念くからみついて來てゐて此方から出て行く恨みと、向うからやつて來る恨みとが十重二十重に細かく解き難く結ぼれて、振放さうにも振放すことが出來ずに、その魂を虐んでゐるのであつた。そしてその苦悩と瞋恚とを離れるには、何うしても、その考へを實行するより他に爲方がないやうな氣がした。

五十六

屈曲したW川に沿つて、ぐる〲廻るやうにつくられた土手の上からS町の方に來る街道を通つた人達は、その時、酌婦らしい何處か意氣な扮裝をした女が、低頭きながらぼんやりして歩いてゐるのを見たであらう。後も見ず、脇目も觸らず、さうかと言つて急ぐでもなしに、ぐづ〲とあづま下駄を引摺るやうにして、赤い顏をして通つて行くのを見たであらう。其時、其處には午後四時過ぎの夕日が明るく一面にさしわたつて、路のほとりの小川に臨んだ休茶屋の前には、米俵を山のやうに積んだ運送車の馬が、馬方の休んでゐる間を自分も呼吸がつけるといふやうにして、大きな腹に波を打たせたり、金轡をはめられた口から涎を垂して鬣を動かしたりしてゐたが、その馬と車とが餘りに道に幅をして置かれてあるので、通つて行く人は、皆なそれを避けて、路の泥濘になつてゐるところを拾つて歩かなければならなかつた。その女も矢張そのそばの泥濘をよけて通つた。

その休茶屋から土手にかゝつて行く間は、一條の路しかついてゐない五六町の長い田圃で、そこには夕日が明るくさしわたつてゐるので、向うの土手乃至土手附近にある雜木林が深く暗く繋つて見えてゐるのに比して、思ひ切つて明るくキラキラして、そこを靜かに一歩一歩歩いて行くその女の姿は、さながら金色の空氣の中に浮き出すやうに見えた。

見た。

それに、さうした考へをかの女に促したものは、男の無情とか、女の憎さとかいふことよりも、何も待つてゐるものゝないさびしい空虛な川ぞひの旅舍の生活であるといふことが、かの女には不思議であつた。更に不思議なのは、死んだ子の面影もまたはつきりと浮んで來てそれを促すやうにした。（そんな薄情な世の中なんか捨てゝ、私の許に早くお出でなさい。）かうその幼い兒は呼んでゐるやうな氣がした。

（あの兒さへ生きてゐて呉れたならば――）

またしても、さうした悲しい思ひが胸につき上げて來た。

もう其處等には雪といふ雪もなかつた。昨夜も澤山は降らなかつたと見えて、ところ〴〵泥濘はあるにしても、地上は大抵乾いて、日和下駄で街道を田舍の人達が歩いてゐるのが、汽車の中から見えた。廣いさびしい冬の平野がかの女の前に展けた。

下車すべき驛に着く少し前からお園の胸は動搖し始めた。このまゝそこを通過して了ふのは、自分ながらあまりに意氣地がないやうな氣もした。さうかと言つて、まだはつきりその胸が決定してゐるのでもなかつた。やがて汽車の步みは次第に緩やかになつて、遂に留つた。と、不意に、再び夕日のさした川がはつきりかの女の眼に映つて見えた。お園はそれに引寄せられるやうにして慌てゝ下車した。

さうさへすれば、何もこんなに辛い思ひもしなくつても好いのだ。)こんな風に考へたが、汽車の切符を買ふ段になつた時には、急にかの女は赫となつた。そこに、T町とS町との間に、岸に竹藪の繁つた大きな川のあるのを眼の前に浮べた。そして、そこに、どんよりとさし殘つてゐる夕日に引寄せられるやうにしてお園はその驛までの切符を買つた。

(その方が好い。その方が好い。あそこの停車場で下りさへすればあの川までは、いくらもない。さうすれば、この身と共に憂いも辛いも何も彼も綺麗さつぱりとなくなつて了ふ。さうさへすれば、もうあの河ぞひの旅舍に歸つて、また男を相手にして、辛い思ひをしなくつて好い。)かう汽車の中でも何遍となく思つて見た。一時はそれより他に、かの女の取る路はないやうにさへ見えた。かの女にしては、もうとても、再び男を相手にして、かうした辛い思ひを繰返すに堪へないやうな氣がすると共に、また一方では、生きて行つてゐる以上男の體なしには一刻もゐられないやうなかの女の體をお園は考へた。つくづく淺ましい情けない地獄だと思つた。涙はひとり手にその頰を傳つて落ちた。

しかし、それが好いと思ひながらも、その想像は容易にはつきりした形を取つて來なかつた。人間は考へて死ねるものではない。それは一時に赫となれば、何んなことをするかも知れないけれども、いざと打突かつて見なければ、やらうと思つたことも、容易にやれるものではなかつた。お園は赤い熱い頰を窓硝子に當てるやうにして、さびしい錆色をした川に夕日の微かにさし添つてゐるさまを頭に描いて

悲しんだりしてゐるのだらう。また、何の意味があつて、あの河ぞひの旅舍に歸つて、あくせくと働かなければならないのだらう。死なうとはお園はまだ思はなかつたけれども、かう思ふと、男と女の世の中が辛く染々と總身を刺すやうに感じた。

お園は默つて低頭いて下唇を嚙んだ。暫くしてそこに待つてゐた乘客はぞろ〳〵とレイルの方へと出て行つたが、愈々トロコの出る時が來たのをかの女は見た。お園は默つて其處に行つてその隅の方に小さくなつて乘つた。さびしい路であらうが、空虛な何もないがらんとした路であらうが、時はそんなことには頓着せずに行かなければならない處へとかの女を伴れて行くのであつた。やがてトロコは動き出した。お園は一生の中に再びとは來ることもないであらうと思はれる殘雪の山の町をもう一度振返つて眺めた。

五十五

S町で汽車に乘替へたお園は、自分はT町の手前の驛までの切符しか持つてゐないことを繰返した。トロコからK線の汽車の方へ來た時には、かの女は身も世もないやうに氣が沈んで、これから先、再び河ぞひの旅舍に歸つて行つたところで、何を樂しみにあの忙しい勞働の月日を續けることが出來ようかと思つた。いくらかかの女はのぼせ氣味であつた。(面倒臭い。いつそこの身を打壞して了ふ方が好い。

を食ふ氣には何うしてもなれなかつた。

さうした何うにもならない心の水火の中に、ぽつかりTのことが浮んで來た時には、いくらかそれに縋りたいやうな心が湧いて來ないではなかつたけれども、かの女はすぐそれを打消して、（そんなことが出來るものか）と打棄るやうに心の中に叫んだ。男といふものをすべて呪ひたいやうな、また、女といふものが男のために何んなに侮蔑され、蹂躪され、迫害されてゐるかといふことを考へて、あはれな女性のために泣きたいやうな心持を誘つた。

あの女だとて、今こそ競爭者に打克つたつもりでゐるだらうけれど、いつまたかの女と同じやうに男から棄てられるか知れないのである。その時は矢張かの女と同じく、辛い苦しい心の憂目を見なければならないのである。かうした念が何處から何う萠して起つて來たか知れないが、兎に角さうした念が起つて來ると、かの女が曾て旦那の細君と溫泉宿の二階で顏を合せた時のことなどが脈々として思ひ出されて來て、女は皆な男のために、男がわるいがために、男が薄情であるがために、玩具のやうに拾はれたり捨てられたりするものであるといふことがつく〴〵胸に思ひ當つて來た。あの細君に與へた苦しみを、今はかの女が當然の報酬として、罰として總身に受けてゐるやうな氣がして來た。つく〴〵人間が淺ましくなつて來た。何うして好いかわからなくなつた。

何が面白くつて、彼女は一人世の中に生きてゐるのだらう。かうしてこんな處に苦しんだり嘆いたり

と、急に涙がかの女の頰を傳つて流れた。

五十四

漸く坂を下りて、トロコの終點にある小さな待合室に入るや否や、お園は隅のところに行つて、そのまゝ後の羽目に凭りかゝるやうにして腰をかけた。

溜息がひとり手に出て來て、際限なく種々なことがその心の周圍を繞つたが、暫く經つた後には、蒼白い思ひ詰めたやうな顏をお園はそこに浮き出すやうにして、凝と唯一ところを見詰めた。

鑛夫や、鑛夫の嬶や、百姓や、油染みて處々破れた古脊廣を着た男や、トロコの運轉手や、さういふ人達がその前を絕えず往來したり、喧しく話し合つたりしてゐるが、またその姿は眼に映り、その話聲は耳に入つて、それは何ういふ人達で、何ういふ話をしてゐるかといふことは解つたけれども、しかもそれはかの女には何の關係もなく、何の交涉もなく、自分には唯、男に別れたといふことが、大きな棒でも飮ませられたかのやうに突張つて胸に一杯に滿ちてゐるのをかの女は覺えた。

すぐその前に、小さな恰好な飮食店があつて、トロコに乘る人達がそこに出たり入つたりして、午過ぎの空腹を癒やしてゐるのが、殆ど手に取るやうに見えてゐたけれども、またかの女自身もかなりに空腹を感じてゐて、いつもならばすぐ出かけて行くのであつたけれども、しかも立つて其處に行つて午飯

がないではなかつた。ところが、今は――これからは、全くがらんとした、荒涼とした、何にもない空虚な路がその前に長く續いてゐるばかりではなかつたか。

お園は喪心したやうにして、町からトロコの終點の方へ下りて行つてゐる泥濘の路を眺めた。

しかし今になつては、何うすることも出來ないのである。放たれた矢は行くところまで行かなければならないのである。そして何うならうとも、この重荷は自分で背負つて行かなければならないのである。と、急にかうして歩いてゐるのさへ堪へられないやうな氣がお園にはして來た。もしそこに樹でもあつたら、そのまゝそこに寄りかゝりたかつた。

恨みも、怒りも、激情も、今はその心の空虚を支へることは出來なかつた。

かの女に取つては、今は、靜かに考へて見る場所が、深い戀の痛手を負つたあはれな女を一時絶對に安靜に休ませる場所が必要になつて來た。

かの女はあたりを見廻した。しかしさうしたところは、その近所には何處にも見當らなかつた。爲方がないので、トロコの終點までは行かうと思つて、お園はまた一歩一歩歩き出した。

それにも拘らず、あたりには日が麗かに照つてゐる。半ば雪に蔽はれた白い山はキラキラと光つてゐる。青い、黃い工場の煤烟は、林立した小さな煙突から靜かにゆるやかに颺つてゐる。男も女ものんきさうな顏をして嬉々として笑つて歩いてゐる。かうしたかの女の苦惱には何の關係もないやうに――。

痛い心と眼の刺戟に堪へられないやうになつて、急いで席を蹴立てゝ出て來たことをお園は繰返した。

（なァに始めからあゝした男がゐなかつたものだと思ひさへすれば好いのだ。そして此身が一人だつたと思ひさへすれば好いのだ。これからはさつぱりして好い。辛い嫉妬や戀心に虐まれないだけでも好い。』

こんなことをまた獨りでつぶやいたが、しかも、心は決してさう單純に押へてすまして了ふことは出來なかつた。もうあの男の體からは、歡樂からは、心からは、永久に離れたと思ふと、睦しかつた床の中の物語り、互ひに心と體とを合せた刹那の記憶、さうしたものが一つ一つ鮮かに頭に浮んで來て、それにその憎い女の體が絡み合ひ纏れ合つた。もう虐んで異れる辛い嫉妬も、戀心すらも自分から取去られて了つたのである。お園は堪らなくさびしい悲しい氣がした。

（だつて爲方がない。）

かう言つた聲は嗚咽のやうであつた。激昂にまかせて、または辛さと痛さに堪へかねて、そこから飛び出しては來たものゝ、これから行く先の路は何うであつたか。何處まで行つても辛い悲しい孤獨ではなかつたか。今までは、つれないと言へ、薄情とは言へ、または離れて暮してゐたとは言へ、兎に角さう言ふ思ひを起させる相手があつた。一人ではなかつた。旅舍の深夜の床の中で、嫉妬に燃えて、輾轉反側して眠られないやうなことがあつても、それでもまだ一人ではなかつた。いつか再び花の開く希望

に激昂して、『だから、そんなに厭になつたら、切れるなら切れるとちやんと言つたら好いぢやないか。切れたけれや、いつだツて切れて上げないぢやなかつたんだよ。それを、好い加減に、人を吊つて置いて、まだ人を玩具にしやうと言ふんだからね。本當に圖太いやね。』

『默れ！』

『默れないよ。わざ〳〵お金をつかつて言ひに來たんだよ。聞いてあきれらア、あそこいらの茶屋奉公をするものに、だるまでないものはないとさ。別れる言ひ草にことを缺いて、人に惡名をつけるとは、何といふ淺ましい、男らしくない心だらう……。』

かういふ風に言つて言つて言ひまくつたことをお園は思ひ出した。男の顏が激怒に燃えて、眼は吊し上り、顏は蒼白く、後には手を上げてかの女を打たうとするのを、（打つなら打て）とばかりにその身をすり寄せて行つたことを思ひ出した。それを見かねて、勝手に隱れてゐた女がやがて仲裁に出て來たことを思ひ出した。

（兎に角、言ふだけのことは言つてやつた……。これで清々した。）かう思ひながらお園は歩いた。

五十三

女が出て來て、仲裁をするつもりかなんかで、べちやくちや饒舌り出してから間もなく、いろ〳〵な

がきいてあきれますよ。私はね、いくら落ちぶれても、だるまなんかにはなりませんからね。』

『何だか、わかるもんか。あそこらの茶屋奉公で、だるまでない奴なんかありやしない。』

『だから、それならそれで好いぢやありませんか。茶屋奉公をしたから、それでいけないんならそれで好う御座んすよ。何もお前さんの勝手をする邪魔をしやうと言ふんぢやないんだから……。いくらでも、ぬくぬくと二人で寢るなり、樂しむなり、暮すなり勝手にするのが好いのさ……。だから、お上さんにも捨てられたんですよ。』

『大きなお世話だ……』

お園は男の方をぢつと見て、『これで、そのうち、迎へに來るとさ……。よくあんな手紙が書けたもんだ。大抵、こんなことだと思つてゐた……。それやね、私だつてね、女だからね、あんなすべたに見かへられたと思へや、腹も立つよ。だけど、今ぢや、もう腹も立たないよ。あんなすべたと一緒にされちや、これでも、いやだからね。これでも、茶屋奉公をしても、あんなすべたよりは好いつもりだからね。』

『勝手にしやがれ！』

『勝手にするともね。これでも一度は世話にもなつたと思へばこそかうしてわざ〳〵訪ねて來て上げたんだよ。……ね、死んだあの兒の爲も思つてね。』急に悲しくなつたといふやうに聲を曇らせたが、更

つひぞさうしたあくたれ口はきいたこともないやうなことまで言つた。（何うせ、あんな男に碌なことはありやしない。あのお上さんに愛想をつかされたのも尤もだ……。誰だつて、いつまであんな男に玩具にされてゐやしない……。ざまを見るが好い。私のこの恨みだけでも、碌な死にやうはしやしない。）急に赫となつたやうにしてお園はかう獨語した。

五十二

『お前が勝手な眞似をして、獨りで恨んだり苦しんだりしてゐるんぢやないか。何故、それなら、おとなしく國にぢつとしてゐないんだ……』かういふ男の言葉に對して、

『そんなことを言つたつてそれは駄目です。私は玩弄具の人形ぢやありませんからね。向う向いてゐろッて言つたッて、馬鹿にされて默つて向う向いてやしませんよ。』かう憎さげにかの女は言ひ放つた。

男も次第に激昂した。

『いくら、俺が構はないと言つたつて、だるま奉公をしろなんて言ひやしない。勝手に、自分でさういふことをしたんぢやないか。』

『さうですよ、勝手でしたんですよ。電報を三度まで打つても返事をさへ吳れないからぢやなかつたんですよ。お金がなくなつて何うにもかうにもならなくなつたからぢやなかつたんですよ。だるま奉公

らな木立の中にある小さなお宮、或はそこらに住んでゐる鑛山の人達、碧い空にくつきりと紫に、または黄に、灰色に揚つてゐる幾條の工場の烟突の煙、さうしたものも、曾ては種々な思ひを繫ぎ、男がゐるためになつかしかつたり、戀しかつたりしたばかりではなく、更に、さうしたさま〴〵の光景が、その戀心に雜り合つて、自分の身に常に搦みついて來るやうに感じられたが、今はさうした光景も、物象も、山も川も町も、すべて自分から冷めたく離れて行つて了つたやうな氣がした。今まで親しく馴染んでゐた山の町が、何だか急に見ず知らずの何の緣故も持つてゐない遠い遠い他鄉の町でもあるかのやうに思はれて來た。

（何も彼も、もうこれでお終ひになつた。サッパリした。）

かうかの女はつゞいて思つて、いつそかうしたところは一刻も早く離れ去つて了ひたいやうにして急いで通りをトロコの終點の方へと步いた。

と、今度はつゞいて、そのＳの家の一間の中の光景が思ひ出されて來た。あの貧乏たらしい暮し、長火鉢さへなくつて小さな瀨戶の火鉢で間に合せてゐるやうな暮し、それでも、まだあの自分と一緖に買つた簞笥や茶簞笥は持つて使つてゐるので、それを見た時には、理由なしに嫉妬が起つて來て、女も憎ければ男も憎く、つい言はないでも好いことまでも言つて、それで男を激昂させたやうなところもあるが、何うせ、切れるんだ……切れるんなら、思ひ切つて言つてやる方が好い……かう思つて、今までに

五十一

一時間とも經たない中に、お園は音高くはね返るばかりにその格手戶を閉めて、さながら辛い苦しいところから遁げ出すやうにしてそこから出て來た。

何と言つて好いかわからないやうな氣がした。赫とするかと思ふと、心が底の底まで冷え渡つて、體が地上に深く陷つて行くやうに感じられると共に、眼は眩惑して、頭がぐら〳〵と顚倒するかと疑はれた。何うせ、さうした結果に到達するのはきまり切つてゐると覺悟はしてその入口には立つたものゝ、いざさうなつて見ると、身も震ふやうな激怒と絕望と悲哀とをかの女は感ぜずにはゐられなかつた。かの女はぢつと殘雪の上に照りわたる明るい光線に、低頭き勝ちの眼を落しながら、そこから通りの方へと出て來たが、入つて行つた時の一步一步泥濘を拾つて行つたのに引かへて、今度はあづま下駄が塞まで埋らうが、泥濘のハネが着物の裾にあがらうが、そんなことには頓着してゐられないやうに、またそんなことには全く注意を拂ふ暇がないやうに、すたこら唯だ步いた。

（この鑛山町ももう自分には用がない。もう一生の中に、再びこんなところに來ることはない。）

かう思つた時は、最早かの女は通りに出て、餘程此方まで來てゐたが、さう思ふと、あたり〳〵の屋根に殘つた雪、大きな氷柱、材木屋の用材置場、四面を取圍んだ山轡、深く落ち込んでゐる山の裾、或ひは疎

ない、言ふだけのことは言つてやれ。』かうは思ひながらも、一方では、二人の戀の間柄がたうとうかうしたことになつて了つたことを悲しまずにはゐられなかつた。

靜かにわるい路を拾ふやうにして疎らな樹木の間を通つて、やうやくその家屋の前に辿り着いたお園は、果して、それがSの住宅であるといふことを見た。格子戸の上に白く出てゐる名刺には、Sの姓名がそれと印せられてあつた。

お園ははたと立留つた。

案内を乞ふのが何となく躊躇されたのであつた。ふと見ると、そこに、つま皮のはまつてゐる足駄が一足置いてあつて、此方のまだ明けてない雨戸のかげには、一俵の炭俵の半ば空しくなつてゐるのが置かれてあるのが眼に入つた。いかにも貧しい寒さうな生活であるのがそれとわかつた。

猶ほ暫しの間、話聲でも聞えやしないかと思つて立つてゐたが、あたりはしんとしてゐて、別にさうした樣子もないので、お園は思ひ切つて、音高く格子戸を明けて中に入つた。

案内をも乞はない中に、奥から人の立つて來た氣勢がしたが、二三寸明いた障子のところからSの顏があらはれて、吃驚したやうに、『あ、お前か。』と言つたが、そのまゝ奥に引込んで行つて、暫しは再び姿をそこに現はさなかつた。慌てゝ女を勝手元の方へ追ひやる氣勢がした。

矢張そこも路が泥濘で、ともすると、下駄が埋れさうになつた。低い庇には、大きい小さい氷柱が下つて、日を受けたところだけが、ぽたぽたと雨滴になつて落ちてゐるが、段々奥に入つて行くにつれて、雪の積つた疎な樹を隔てゝ、トタン葺乃至はこの近在で出來る樺紅色の安瓦で葺いた小さな家屋が其處に一軒、彼處に一軒といふ風にあらはれ出して來た。ある高窓の白い障子には、朗かに日影がさし當つた。

眞中に共同で使ふ井戸があつて、お園が入つて來る時、其處に出て横向きになつて水を手桶に汲んでゐた壞れた髷の女が、何だかその女のやうな氣がしたので、ちよつと躊躇して家屋のかげに身を寄せるやうにしたが、此方を向いたその顏は別な女で、そのまゝ水を汲み終ると、手桶を下げて、すぐその傍の家屋の中に入つて行つて了つた。で、お園はほつとして、そのSの家をあれかこれかと物色して見たが、左にある庇の低い、高窓の障子の見える、入口の格子戸の半分まだ雨戸になつてゐるのが、確かにその家であると思はれた。

行つたつて、何うせ何うにもならないのは解り切つてゐる。かの女にしても、さうした形になつてゐる旦那を責めて見たところで爲方がないのもわかりきつてゐる。訪ねて行つたところで、その女と同棲してゐては、お互ひに氣まづい思ひをするばかりである。しかし、何うせ打壞すのなら、はつきり打壞して了ふ方が好い。現に、今度出て來るについても、十に八九はその積りで出て來たのである。(構ふことは

また思ひ返して、それは上さんに打明けては言はなかつたけれども、兎に角一度ぢかに訪ねて見やうと決心して、そしてお園はその飲屋から出て來た。

裏道や、日陰のところは、雪がいくらか固まつてゐるので、さう大して歩き難くはなかつたけれど、通りに出ると、すつかり泥濘で、臺まであづま下駄が埋つて了ふやうなところが到るところにあつた。で、上から晴れた碧い空が蓋をしたやうに見えてゐる山に取圍まれた殘雪の町を、其處此處と道を拾ひながら、フロラアショオルをしたお園が赤い顏をして一歩一歩歩いて行つてゐるさまが、くつきりと午近い明るい日影の中に際立つて見えた。

五十

大きな炭問屋の前に來て足を留めたお園は、店先きと言はず、周圍と言はず、五六貫目俵が横に、縱に、または無雜作にころがされたやうにして、そこら一面に積んで並べて置かれてあるのを眼にした。店では、肥つた番頭が東京から買出しに來てゐる脊廣の男を相手に、算盤を頻りに彈いて見せてゐた。

暫し立留つて考へてゐたが、あやしまれてはと思つて、お園は急いで、その傍に細く入つて行つてゐる露地見たいなところに身を躱した。お園の胸は頻りに躍つた。愈々一大事の瀨戸際に來た時のやうな氣がした。

『そんなことはないでせう。』
『それやね、人の噂だから、本當だか何だかわからないけども、それは皆な一緒にゐるあの女の口から知れるらしいよ。その待合が駄目になつたばかりぢやない。上さんの所在も今ぢや本當にわからないやうな話だよ。』
『そんなことはないだらうと思ひますけどもね。私が去年行つた時には、まだ盛にやつてゐたんですし、あのお上さんはしつかりした人ですもの……。』
『何だか知らないけど、さういふ話だよ。何しろ、いろんなことで、Sさん、大分困つちやゐるらしいよ……。』
『さうですかね。』
ふと、そんなこんなで、T町からあの時かの女が打つた電報にも返事をよこすことが出來なかつたのかも知れないと思ふと、未練ではあるが、そこに一條の明るい道を發見したやうな氣がお園にはして來た。で、猶ほそれとなしに、それからそれへとたぐつて訊いて見ると、Sはその待合を仕舞ふについて上さんから取つた金を、此間いくらかまとめて持つて來たらしく、それで今までの下宿を綺麗にして、そしてあの女と家を一軒持つたやうな話であつた。
一度は行つて見るのはよさうか知ら？　このまゝあきらめて歸つて了はうかしら？　とも思つたが、

しい空氣や、膚に喰ひ込むやうに迫つて來る山の寒さや、さうしたものが、赤裸にされたやうな戀の負傷者であるかの女の心や體に深く深く染みた。

かの女はもう溜息をつくにすら堪へないやうな氣がした。赫となつたり冷めたくなつたりした時機は既に通過し去つて、わるく落附いたやうな心の態度が今はお園の胸を領した。もう何も彼もわかつた。自分の捨てられたこともわかつた。誰も思つて呉れるものもない全くの一人であるといふこともわかつた。

『行つて見たッてしやうがないよ、お前さん。』

かう捨てるやうに上さんは言つた。

『それで、ちつとは好いんですかね、このごろは？』

かうお園が訊くと、

『好いこともないだらうよ。何でも、此間、新しい鑛區を見附けたなんて騷いでるたけれども、何うにもなりやしないんだよ。信用ももう落ちたね。』

『東京からお上さんが來るやうなことはありませんか？』

『東京の方ももうすつかり駄目だッて言ふぢやないか。何でも、その上さんの出してゐる烏森の待合とかも滅茶滅茶になつて了つたッて言ふぢやないか。それに、上さんにも男があるんだッてね。』

話し振やらからそれと推して、いくらか赫となつた氣味で、お園はすたこらそこから出て來たが、いつそすぐ押かけて行つて、言ひたいことを言つて、それこそ此方から捨ててやらうと一途に思ひ詰めたが、もつと詳しく聞く必要があると思つて、裏に廻つて、路のわるい泥濘の間をこねかへすやうにして歩いて、旦那とは仲たがひになつてゐるやうな飲屋の上さんを訪問した。

果して想像した通りであつた。男の薄情に、虚僞に、欺騙に、お園はまた此處でも出會はなければならなかつた。此前來た時には、まだかの女の手前をかねて、旦那が身を躱したり、女が姿を躱したりしたが、今はもうそんな氣がねなどせずに、平氣で、夫婦氣取で睦じく暮らしてゐるといふことであつた。『何うして、あんな女にはまつたかさ……。Sさんも隨分物好きだ……。もうあの旦那はとても駄目だよ。お前さん、思ひ切つた方が好いよ。すつかりあの女に騙されて了つてゐるんだから……。さうかね、お前さんの方へはそんなことを言つてやつたかね。男は罪だね。』かう上さんは一面お園に同情するやうに、また一面旦那をくさすやうな調子で言つた。

四十九

ヂックザックした屋根に殘つた雪や、家並の不整な高低のある山合の鑛山町の小さな工場の煤烟や、何處となく新開地らしい荒々しい人々の顏や、やさしい落附いた氣分などは樂にしたくもないやうな刺々

落ち迫つた山合の方へと自分が入つて行きつゝあるのを見た。寒さうに雪に埋もれた村、雪の積つた石の間を碧く瀬を成して流れてゐる溪流、此方から向うにかけてある橋、鑛石を粗く分析するために出來た小さな工場、夏はこれでも賑やかで、白粉をぬつた女達のゐる飲屋も澤山あるのであるが、今はあたりは、雪と、寒さと、仕事のないのにいぢけて、外形はいかにも山の奥のさびしい村としか見えなかつた。

一時間ほどして、トロコの終點近くまでやつて來たが、いろ〳〵な作戰計畫を小さな胸に抱いてゐるお園は、そこまで行かずに、その少し手前の村の入口の橋のあるところで、賴んで下して貰つて、それから橋を渡つて、村のとつつきのかねて知つてゐる或る上さんの家に寄つた。

丁度好い鹽梅にゐて、『まア、やつて來たの？　此雪に。』などゝ言つて迎へ入れたが、そこでは旦那のことはまだ本當にはわからなかつた。或は捨てられたお園を可哀相に思つてか、または時には取引をしなければならない人の祕密をすつぱ拔いてはわるいと思つてか、それともまた本當に知つてゐないのか、つかまへどころのないやうな話しかして臭れなかつた。しかし旦那が來て居て、二三日前にも此處を通つたといふことだけはお園は知ることが出來た。

その次にお園はそこからさう離れてゐない材木屋を訪ねた。そこではお園は、旦那が元のところとは違つて、それから少し先きの炭問屋の裏の小さな家に住んでゐることを敎へられた。

別に、一緒に住んでゐる女のことは聞かなかつたけれども、その材木屋の亭主の顏やら、表情やら、

『や、またフキだな。』

かう言つたので、お園も急いで外を見ると、果して晝間から危なかしいと思つた空は變つて、大きなぼた雪がボツボツ窓の硝子に當つて白くたまつてゐるのを目にした。

K線の終端驛で下りた時には、汽車の中ではそれほどと思はなかつた雪がかなりに烈しく、冷めたい凄じい風さへ加はつて、電燈の柱に亂れて落ちるさまがキラキラと灯に光つて見えた。お園はその降り頻る風雪を衝いて、トロコの起點まで行つて見たが、今夜はもう山の中に行く何等の車の便もなかつた。爲方なしに、お園はわざと知らない小さな旅舍をそこに選んで泊つた。

四十八

雪が深く積つて、山に行くトロコが留るやうなことがなければ好いがと心配したが、さうしたこともなくて、あくる朝は晴れやかな日影の軒に雀の百囀する窓の下で、お園は目をさました。

朝飯を温いまづい汁や生鷄卵でそこ〳〵にすまして、トロコの出る處に行つてそれに乘つたが、幸ひに知つてゐる顏にも逢はず、向うから聲をかけられるやうな人にも逢はなかつた。鑛山の人夫や、綿フランの汚れた襟卷をした百姓や、ボサボサした髮をした女や、さういふ人達の中に雜つて、吹き晒しの寒い無蓋車の中に、肩掛で半ば顏を包むやうにして乘つてゐたかの女は、次第に雪の深い、兩方から山の裾の

をうろ〳〵してゐたことが旦那の耳にちよつとでも入れば、もうその眞相はつかむことは出來なくなる。旦那は女をかくして了ふにきまり切つてゐる。そして旨いことを言つてごまかして吊つて置かうとするにきまつてゐる。(何うかして、さうした人にも知られずに、こつそり山の中へ入つて行つて見たいものだ。そしてその眞相をすつかり知りたいものだ。)車が松原の中を通つてT町へ行き着く間、お園はこんなことを種々に考へた。

(一日二日と言つて來たけれども、場合によつては二三日後れたツて構ひやしない。はがきでも出して置きさへすれば此方は好いから、十分、その眞相をつかんで來たいものだ。金はTさんの置いて行つたのもあるし、此前の時のやうに、一日二日宿屋どまりしたつて困るやうなことはない。)

こんなことをもお園は思つた。

車夫に賴んで急いで貰つたために、T町の四番の汽車には、何うやらかうやら間に合つて、まだ日の暮れない中にS町から出るK線の汽車に乘り込むことが出來た。それからは、ゴトンゴトンと汽車の搖れる度に滑らかに動く大きな石油のランプの薄暗い下に、または窓から顏を出して見ても、闇の中に山の雪が微かに白く見える他は乘客も疎らな、スチイムもない寒い客車の中に一時間ほども震へて、漸く、トロコの起點のある山裾の小さな村へ近づいて行つた。

隅にゐた乘客の一人が、車窓から外を覗くやうにしてゐたが、ふと、

かうお園は言ひながら、車を賴みに走つて出かけて行つた。

四十七

尋常の手段では、とてもその眞相をつかむことは出來ないとお園は思つた。それには陰からこつそり行つて見るに越したことはないと思つた。とてゝ駄目なものなら、その駄目だといふ光景をはつきり見たい。そして捨てるなら、此方から捨ててやる。惜しげもなく捨ててやる、中ぶらりんにして吊られてゐるのが一番馬鹿々々しくも辛くもある。從つて、お園は今度はあのS町の老夫婦の許にも寄るまいと思つた。また、あの山の旦那の下宿してゐる家にもいざといふ場合にならなければ行くまいと思つた。(それには、あそことあそこに行つて見れば大抵はわかる。大抵旦那が何うして暮してゐるか、あの女と夫婦氣取で暮してゐるか、それとも手紙に書いてよこしたやうに本當に困つて暮してゐるかが判る。)かうその作戰計畫を小さな胸に描いたが、しかも誰にも知られずに、見附けられずにその山の中に入つて行くといふことは、かなり困難であることをつゞいてかの女は繰返した。S町から入つて行くK線の汽車の中は大丈夫だが、あそこから先の半ば鑛山用半ばは旅客用のトロコの線に入つて行つては、知つてゐる顏が多い。

『おや、また來たの？　いつ來たの？』かうすぐ聲をかけられるやうな人が多い。そしてかの女がそこ

『そんなことはないよ。』

『なら、行つてお出でな……。うんと旦那と喧嘩してお出でよ。』

『何うせ、さうさ。今度はもう思ひ切つて、言ひたいことを言つて來るつもりなんだから……。いつまで吊られてゐたツてしやうがないからね。』

『本當だともね……。』

『ぢや、旦那、ちよつと行つて來ますから。』

『すぐ行くのかえ？』

急にすぐ支度にかゝりさうにするので、

『え……。』

『だつて、もう今日は遲いぢやないか。明日にしたら好いぢやないか。』

『でも、早い方が好う御座いますから、これから車でT町まで行けば、四番の汽車には間に合ひますから……。』

『それにしても餘りに急だな、足元から鳥が立つやうだな。』

『山から來たんだよ。手紙が――』かうお光は傍から言つて笑つた。

『手紙なんか來るもんかね。』

な……。』

このまゝ山に行つて歸つて來ないやうになりはしないかといふ疑惑が、その主人の言葉の陰にかくされてあるのがお園にも歴々と讀めたので、

『いゝえ、ほんの一日か二日で好いんですから……。旦那は私が歸つて來ないかも知れないなどと思つていらつしやるかも知れませんけども、そんなことはありませんから。決してありませんから……。何うなるにしても、一度は歸つて來ますから。』

『さうぢやないけれどもね……。實際、忙しくつて困つてゐるんだからね。』

かうは主人は言つたものゝ、お園の達つての願ひを啻なく却けて了ふ譯にも行かなかつた。何故なら、借金がまだいくらか殘つてゐるにしても、來てから今日まで、一生懸命に陰日和なく働いては呉れたし、氣はきいてゐるし、容色も滿更ではないし、客受は好いし、かうした女中を新たに搜すのは容易なことではなかつた。さう思ふだけ、無理も願ひもきいてやらなければならないやうなところがあつた。

『お光に相談して見てな。』

かう言つたが、丁度其處にお光がやつて來たので、主人はそれを呼び近づけて、その話をした。と、お光はお園に向つて、『お前さん、歸つて來るには歸つて來るんだね。それなら好いわ、一日二日位……。行つたきり、鐵砲玉ぢや困るけれども……』

四十六

それから二三日の間、お園は默つて働いてゐたが、ある時、急に、一日二日の暇を貰ひたいことを主人に申し出た。

『何か急な用事でも出來たのかね。』

凝とお園の顏を見詰めるやうにして、旅舍の主人は訊いた。

『別に、急な用事が出來たッて言ふんでもないんですけども、是非一度山まで行つて來なければと思ひまして……。手紙や何かでは、事情もよくわかりませんし、また別れるなら別れるで、きつぱり話をきめて來たいと思ひますから……』

『手紙でも來たのかえ？』

『手紙ッて、此間、一週間前ばかりに來たきりなんですけども……』

『山にゐるにはゐるのかね？　確かに？』

『ゐるにはゐると思ふんです。』

主人は困つたやうな顏をして、『今、行かれちや困るな。お前がゐて呉れてさへ、お前にもわかるやうな忙しさなんだから、一日でも、二日でもあけられると、あとが困るでな。お光だツて困るだらうから

『ちよつと、ちよつと。』

などTは聲をかけた。『また、來て世話になるよ。』

『え、何うぞ……』

さびしい笑ひがお園の顔にあつた。女は振返つてお園を見た。

かうしてゐる中にも、その一隻の渡舟は次第に岸へ岸へと近づいて來た。やがてそこについてぞろぞろと客が下りると、今度は待つてゐた客が代つてそれに乘り移つた。二人の車夫は、代る代る手傳つて一臺づゝその車を横に舟に乘せた。別れる時が遂に來た。

『左樣なら。』

『左樣なら。』

女とTとは車を挾んで並んで乘つた。また別離の言葉は繰返された。水の滴る船頭の長い竿の動くにつれて、舟は再び川の上へと出て行つた。

一人離れて立つてゐたお園は、凝とその舟の動いて行くのを見送つた。いつまでも、いつまでも。皆ながぞろぞろ歸つて行つた後までも……。舟は暫らくして對岸に着いたが、やがてTと女とが並んで靜かに歩いて行くのが小さく此方から見えた。

小さな堀立小屋のやうな渡船場の前で、一行はその渡舟の次第に此方に近寄つて來るのを待つた。誰の胸にも淡い離愁――離愁と言ふほどではないが、久しく滞在して馴染になつたものに別れる情緒が微かに渦巻きつゝあつた。昨夜、女に、何處か東京に出る好い處はないかと賴んでゐた靜枝は、Sとの關係が知れて、旦那との間もいくらか離れ心地になつてゐるのであつたが、女はその傍に行つて、『ではそつちの話さへきまれば、いつでも手紙をおよこしなさいよ。いくらもありますとも……』などと小聲で言つた。（藝はさう大してないけれども、容色が好いから、場合に由つては、うちに抱へて置いても好い。）女はかう思つて、さつきその家を訪ねた時にも、借金の話や、着物のな話どをもしたのであつた。

『大變世話になつたね。』

かうTはわざとお光に向つて話しかけたりした。

主人は主人で、

『鮎の時分には、是非また入らつしやい、こゝでは鮎は若鮎ばかりで、その盛りの頃は、まだ禁漁ですけれども、少しは何うにかなりますから……。』

こんなことを言つて、禁漁規則の出來ない前には、鮎小屋などといふものが川の岸に澤山に出來てゐて、轆轤仕懸の網で若鮎を獲つた話などをした。

一人離れて、赤い顏をして、さびしさうに土手の上に立つてゐるお園に、

かう言つて日の當る緣側の方へと出て來た。

『川を渡つてから車に乘らう。渡場はすぐだから。』

『さうね。』

四十五

で、二臺の車を後にして、二人は土手の方へと步いて行つた。あとからは、旅舍の主人も、隱居も、お光も、親類の娘ツ子も、小僧も、渡場まで見送るつもりで、ぞろ〴〵とついて行つた。

お園も後ればせながら出て行かうとすると、靜枝もそこにやつて來てゐた。

『お前さんも來たの？』

『え。』

で、かれ等もあとから續いた。

今日も風はなくて好い日和であつた。山の雪は閃々と美しく日に輝き、岸に偏つて流れる川の水は、錆鐵納戶の色を湛へて、寒く小さな瀨をつくつた。對岸から出た一隻の渡舟は、日影のキラキラと碎ける中流を今しも此方へとやつて來やうとしてゐるところで、明るい光線の中に、自轉車や、車や、中折帽や、尻をからげた商人らしい男やらが黑く際立つて指さゝれた。

つて行つた時には、女は信玄袋の中にいろ／＼なものを入れて、これから帶を締め直さうとするところであつた。ダイアの指環や純金の指環は、男のメリンスの包や、金時計や、襟卷なぞと一緒にそこに散らばつてゐた。

旅舍の主人も、澤山貰つた茶代の禮を言ひに其處にやつて來た。と、Tは、

『何うもいろ／＼世話になつた。また、その中やつて來るから、その時はまた懲りずに世話をして貰ひますよ。春になると、またのんきで好いでせうから。』

かう如才なく言つて『M町には川を渡つて行くんですね？』

『左樣で御座います。川を渡つて了ひさへすれば、聖天さままでは、もうぢきで御座います。もう一里とは御座いません位で、一田圃越しさへ致せば、もう向うに森が見えますから。』

『そこからO町へ行く路もわるくはありませんね。』

『え、もう好い路で御座います。縣道ですから、T町へ行くのとは、ぐつと宜しう御座います。』

かう言つて、茶代の返禮にと赤い丸い盆に載せて持つて來たタチルだの、繪葉書だのをその隅に置いた。

やがて、すつかり支度の出來た女は、

『それぢや好いのね。お園さん、大變お世話になりましたね。』

遠くない中に屹度再び此處にやつて來ることを誓つた。
しかしそんな言葉が何の役に立つであらう。そんな言葉をあてにして、何うして默つて待つてゐられやう。一度別れて行つて了つては、後は何うなつて了ふかわからないお互ひの身の上である。さうした美しい相手を持つてゐるTが堅くその約束を守つて再びかの女に戻つて來やうなどとは、今の場合、何うしてもお園には考へられない。矢張、自分は捨て草の、根もあらはに、葉は萎れて、やがては枯れて行く運命が相當してゐるのであらう。この辛い、男に離れ難い戀心も、路傍の塵に捨て去られて行く身の上に定められてゐるのであらう。かう思つたお園は、もう何も言はなかつた。昨夜まで二度も三度もTに戻さうとした包金をもう戻さうともしなかつた。それに由つてのみ唯その苦惱を忘れるといふやうに、赤い襷を十文字に綾取つて、せつせと拭掃除をしたり、先に立つて風呂に汲込む水の井戸のポンプを押したりした。離座敷に行くにも、唯、旅舍の女中としてのみの心持で行つて、何んな用事をもわざと平氣な顏をしてやつた。
二人は朝早く立つて、M町の聖天祠にお詣りして、それからO町へ行つて、あちこち見物して汽車に乘るやうなことを言つてゐたが、しかも朝はゆつくりとして朝酒を飲み、もう一度土手の上に行つて川を眺め、綺麗におつくりをした女と一緒に靜枝の家に行つて見たりなどして、いよく〳〵出發の用意に取り懸つたのは、もう十一時も過ぎて、かれこれ午にならうとする頃であつた。旅舍の勘定書をお園が持

かう言つてお園はそれを突返した。

『まあ好いから……。僕だつて、そんなつもりでやるんぢやないよ。小遣にでもしろッて言つてやるんだ。こまつた女だな、さうぢやないッてば！』

Tは無理にそれをお園の帶の間に捻ぢこむやうにして、『屹度、近い中に來るからね。そんな薄情な男ぢやないよ、僕は――』

『いりませんよ。これは。』

かうまた返さうとするのを、

『そんな强情を言ふもんぢやない。屹度だから、屹度來るから。誓つて置くから。』

無理にそれをお園に取らせた。赤い顏をしたお園の眼からは淚が流れた。

四十四

くやしまぎれに、かの女とTとの關係を女に知らせてやらうかなどと思つて、わざと遠慮なくTの前で振舞つて見せたり、唯の馴染では言はないやうなことを口にしてTを困らせたりしたが、しかもその運命は何うにもならずに、いよ〳〵Tが女と共に東京に歸つて行く日の朝は來た。

Tは返す返すも、隙を見ては、お園を一間に誘つて、そんな薄情な自分ではないといふことを言ひ、

果してさうなつて行かなければならない運命がやつて來た。それは午後三時すぎであつたが、お園が廊下に立つてゐると、此方にこつそりやつて來たTは、幸ひあたりに人のないのを好い機會にして、丁度空いてゐた母屋の一間にお園を誘つた。

矢張、完全な戀の復活が出來たのであつた。Tはさうは言はなかつたけれど、兎に角今夜一晩泊つて、明日は午前の中に東京に歸るつもりであることがお園にわかつた。

『いや、それで歸るんぢやないけれど、兎に角、餘り長くなるし、用事も彼方にたまつてゐるからね。何うだね、お前も東京に出て來ないか？』

『だツて……』

『本當にさ……』

『私なんか駄目よ。矢張田舍者ですから、田舍にゐる方が好う御座んすよ。』

『何うも困るな。屹度さう誤解してゐるんだと思つた。さうぢやないんだよ。それや長い目で見てゐれやわかる……。何アに矢張あれは駄目なんだから。』

『…………』

Tが懷から紙に包んだものを出して、それをお園に渡さうとすると、

『好いのよ。そんなもの……。そんな積りぢやなかつたんだから。』

長い廊下の隅に長襦袢のまゝでやつて來て鏡を借りたり、三本足を出して貰つたり、油を少しお園から分けて貰つたりして、長い間かゝつて手水を使ひながらおつくりをしたが、やがて三本足を髻のところに二本さしたまゝで、庭下駄を輕く突かけて敷石づたひに艶な姿をして歩いて行つた。

その日は、昨日に引比べて、好い天氣であつた。風も吹かなかつた。朝飯をすましてから、二人は睦じさうに並んで、川を見に土手の上に行つた。此方で見てゐると、二人は歩いたり、立留つたり、山の雪の閃耀を眺めたり、川の方へ下りて行つたりするのが、さながら活動寫眞でも見るやうに際立つてはつきりと此方から眺められた。

午飯の給仕をした時には、

『何うです？　東京に出ていらつしやいな。こんなところにゐたツて爲方がない。いくらも好いところがありますよ。お世話ならいつでもしますよ。ね、貴方。』

などと半ばお園に、半ばTに向つて言ふやうにして女は言つた。

『何うぞ……』

『本當ですよ、本當なら、そのつもりで世話をしますから。』

『行つたら、何うだね？』

かう傍からTも言つた。しかしそんな言葉に乘ることが出來やうか……。

酒がすみ、夕飯がすみ、靜枝が歸つて行き、最後に夜の寢道具を出す段になつた時には、旅舍の主人の命令で、縣廳の役人でも來た時でなければ滅多に使はない絹布の夜具を、お光と二人で戲談などを言ひ言ひ母屋から運んで行つたが、その時はたまらなく辛かつたことを思ひ出した。爲方がないので、（これも、してはならないことをした罰だ）など丶思つて、自ら責めてそして自ら慰めた。

女が長襦袢一つでゐるところへ水などを持つて行つて、そして（おやすみなさいまし）と言つて、お園は此方へ戻つて來たことを思ひ出した。

それに、Tの許に東京から女が來たといふことは、物見高い田舍の客達の噂の種となつて、何處の室でもその話をしないものはなかつた。二階に滯在してゐる連中などの間にもその話が出てゐて、『お園さん、何うだね。少しは妬けるだらうね。』など丶Fからからかはれた。

いろ〳〵に考へて來ると、自分ながらあやしまれるやうな激情が起つて來て、堪らない孤獨の涙が冷めたい夜着の襟をぬらした。お園は終夜轉輾反側した。

四十三

いつも夙起のTであるのに拘らず、朝日のさして來る時分まで離座敷の雨戸は明かず、明いた時には、女がだらしない姿をして、髮の亂れた白粉のはげた顏を其處に出して廁に行つたり、暫く經つた後には、

である。かの女のことなどはもう何うでも好くなつてゐるに相違ないのである。
それればかりではない、萱間旅舍の主人が言つたやうに、單にその女とこの川沿ひの靜かな旅舍に相違ふがために、そのためにのみこの田舍にTは十日も滯在してゐたかも知れないのである。女に他に男があるといふことも、そのための女の心を完全に得ることが出來ないで悲觀してこの田舍に遁れて來たといふことも、皆なかの女を釣るため、引寄せるためのTの手管であつたかも知れないのである。
（しかし、そんなことはない。それは餘りに邪推すぎる。）
それでは餘りにかの女の立場がなくなるやうな氣がして、もしまた本當にさうならば、かの女がいかに愚であつたかといふことが堪らなく腹立たしいやうな氣がして、强ひてそれを押へた。
夕飯の時には、お園は辛いのを堪へてその給仕をした。此方から强ひて親しみを表はさうとするのをTはつとめてそれを避けるやうにした。それは女に知られては困るからではあらうが、無理はないとは思はれたが、しかもそのTの態度がお園には腹立たしかつたことを思ひ出した。女が酌をしやうとするのを負けずにかの女が横合から度々酌をしてやつたことを思ひ出した。靜枝が聘ばれて、しかもその聘ばれたのは、女がその三味線を借りてその藝を見せるためであつたことを思ひ出した。ちやんとわかり切つてゐるのに、細君らしく見せかけやうとして、『何うも暫く三味線なんぞ持つたことがないもんだから。』などゝ言つたことを思ひ出した。

お園は餘程親類の娘つ子に任せて、此方に來て了はうかと思つたけれども、ゆくりなく起つて來た一種の反感見たいなものに催されてわざと自分で進んで行つてその背中を流してやる氣になつた。その女が夢にも知らないことを、つい今の前、Tと話したといふことが、また人知れず自分の體とTの體と女の體と相續いてゐるといふことが、またそれをその女が少しも知つてゐないといふことが、いくらかかの女に優越の位置に身を置いてゐることを思はせた。それに、この女がTに與へた苦しみの報酬を、たとへ少しではあつても、かの女が復讐してやつてゐるといふやうな氣も何處かでしてゐた。お園はTと同じやうにその女の背中を洗ふために、裾をかゝげてその後に廻つた。

四十二

その夜はお園は辛かつたことを思ひ出した。冷めたい床に入つてからも體中が燃えて、ひとり手に溜息が出て、何うしても眠られなかつたことを思ひ出した。

眼の前には赤い白い色彩がチラチラした。女の艶に笑ふ顔が歴々と見えた。そこでは、その離座敷の一間では、樂しい戀心の復活が行はれつゝあるのである。男が女に無條件で引寄せられて行つて了つてゐるのである。女は何の程度まで深い心でわざ〳〵この田舍までやつて來たかわからないけれども、その女の戀の程度如何に拘らず、男の方の心は、忽ち女の腕に引張られて行つて了つてゐるに相違ないの

『それだけは誓つて置く。決してそんな薄情なことはしない。』

かうTは眞面目に言つた。

お園は何うすることも出來なかつた。それ以上に、Tに對して深く求める理由も資格もまだ持つてゐなかつた。

Tが返す返すもそのことを言つてなだめて、風呂からあがつて行くと、今度は女が艶な姿をして、其處にやつて來て、ダイヤの指環だの、純金の浮彫の指環だのを、金簪の足に連珠のやうにつらねて、『これをちよつと預つて置いて下さいな。』と輕くそこにゐたお園に賴んで、それから金の帶留を外し、黑繻子と琥珀の腹合せの帶をキウと音させて解いて、派手な襦袢をちらほら見せながら、すつぽりと脫いだ着物を丸めて、白い肌をあたりに際立たせつゝ、風呂場の中へと入つて行つた。

『お加減はいかゞですか。』

外にゐた親類の娘つ子はかう言つてそこに顏をさし入れた。

『結構ですよ。熱い位……。』

『少しうめませうか。』

『この位で丁度好うご御座んす。』

やがて後向きに、形の好い丸髷を此方に見せて、心持よささうに湯に浸つてゐるのをお園は見た。

四十一

風呂の沸いたのを知らせに行つて、此方に來て待つてゐると、運よくT は獨りで手拭を持つてやつて來た。そこでお園は初めてその傍に寄つて行くと、

『急に、やつて來られてね、困つちやつたよ。』

かうT は申譯のやうにして行つた。つゞいて、『何アに、そんなことはありやしないよ。大丈夫だよ。』など丶言つた。お園はいろ〳〵言ひたいことが、胸に一杯に疊みかけて漲つて來てゐたけれども、今の場合、さうしたことを細かく言つてゐる暇もなかつた。氣休めとしか思へない言葉にも滿足してゐなければならなかつた。

それでも風呂の中では、T の背中を洗ひながら、思ふ存分とまでは行かないまでも、心の中の懊惱をいくらかは言つた。T も困つてゐるらしかつた。『僕はそんな薄情な男ではないから安心しておいでよ、』と言つたり、『さうぢやないよ。決して誤解しては困るよ。』と強く押附けるやうに言つたりした。燃える嫉妬を言ひ現はすには、いかなる言葉も不滿足で、不十分で、物足らないことをお園は感じた。背中を流しながらも、一度自分のものになつたT の體が再びその女のものとなつて行くのを思つて、赫と體中が燃えて來るやうなのを覺えた。

かういふTの聲がした。
『さつきから見てるのよ。』かう言つて、お光は指を二本口に當てゝ、チウと吸る眞似をして見せた。それは此間Tが外國の女の話をした時、それが喜悅の意を表はすものだといふことを二人に敎へたのであつた。
お光はもう一度それをやつて、
『さうでせう？』
と首を傾げて訊くやうな素振をして見せた。
『あはゝ。』
とTは笑つた。
『私より先に、此人が見てたのよ。』お園が留める暇もなく、お光は平氣でこんなことを言つて了つた。
『うそよ。好い加減なことを言ふのよ。』
それには頓着せずに、『Tさん、好いことをきかせて上げませうか。』かうお光が言つて何か言はうとするのを、お園は今度は必死になつて留めた。お光はまた崩るゝやうにして聲高く笑つた。やがて女も緣側に出て來た。

『まア、びつくりした。この人、いつあがつて來たの？』
『あんまり夢中で見てゐるからだよ。岡焼は體に毒だよ。』
『…………』
『ちよつとお見せ、よく見えるの？　何をしてるの？』さういふお光も矢張それに引寄せられるといふやうにして、そこに立つて、暫し室の中の二人を見てゐたが、『矢張、あゝして睦じくしてゐると妬けるね。』と言ひながら、いきなり聲を立てゝ、
『Tさん――』
と呼んだ。それを留めやうにも留める暇はお園にはなかつた。
『Tさん、こゝにゐるのが見えて？』かうつゞけて高い聲で言つて笑つた。
Tは不思議な處から自分を呼ぶものがあるのに驚いたといふやうに、あたりを見廻して、暫しはそれとわからなかつた樣子だつたが、漸くそれが二階の上から來たことに氣が附いたらしく、そのまゝ立つて縁側に出て來た。
『分つたでせう。私達のゐるところが――』
かう言つて又あはゝと崩れるやうにお光は笑つた。お園も爲方なしにそれにつれて一緒に笑つた。
『えらいところから見てゐるんだな。』

四十

何處にゐても、母屋の一間にゐても、または厨に近い土間にゐても、井戸流しで物を洗つてゐても、離座敷のことが絶えず氣に懸つて、何ぞと言つては、疎い樹木を透して微見えてゐる室や縁側や半ば明けられた障子の方やらにのみ眼を遣る氣になつた。そこに近い母屋の一間にゐた時には、Tが女と一緒に何か睦じさうに笑つたりする聲が手に取るやうにきこえて來た。

二階の飲客の一騷ぎして歸つて行つたあとの掃除をしに上つて行つたお園は、見るともなく、其處は丁度離座敷を下に見おろすやうになつてゐて、しかもその室の中まですつかり一目に且つ離れて見ることが出來るやうになつてゐるのを發見して、掃除の手を留めて、窓に凭るやうにして暫しひそかにぢつとそれに見入つた。Tを前に、女は斜に品をして坐つて、甘えるやうな態度で、何か頻りに話してゐるのがかの女の眼に映つた。Tは時々笑つて、そして點頭くやうな形をして見せた。

暫しの間、身動きもせずにお園は熱心にそれを見てゐた。と、いつの間にかそこに上つて來てゐたお光は、

『何を見てるのよ。そんなに嫉妬を燒くもんぢやなくつてよ。』

かう言つて、輕くお園の肩を叩いた。

など〻その女は言つた。

（そんなに邪魔になるなら、もう參りませんから。）かうした眼をして凝とTを見てそして此方に戻つて來た時には、お園は體がわな〳〵と顫へるやうな氣がした。Tの言つたことはそれは本當であらう。女を避けてかうした田舍まで來てゐるといふのは、決して男の手管で言つたのではないであらう。本當にあの女には他に惚れた男があつてそれでTを苦しめてゐるのであらう。しかし、かうしてわざ〳〵やつて來られて見ると、離れやうとした心がまたわけもなく卽いて行つて、ずる〳〵と女の方へ引寄せられて行く男のさまが、はつきりと手に取るやうにお園には見えた。あの美しさとやさしさと怜悧さを持つた女は、Tをその掌中に收めるについて何の手間ひまを要しないであらう。Tにしてもまた、その愛情の復活についてわななくやうな喜悅を感じてゐるであらう。そしてかの女などはTにはもう何うでも好くなつて行つてゐるであらう。かう思ふと、辛い辛い心がお園に湧いて來た。

お園には、あゝしてやつて來る山の旦那がないのである。かの女の戀心は、塵埃に埋れた珠玉のやうになつてゐるさへあるのに、その上に更にかうした火と水とが新たに押し寄せて來たのである。（ああした仲にならなければよかつた。）かう單純に、または、（金でも澤山貰つてやるから好い。）かう手輕に考へてすまして了ふことは出來なかつた。從つて、その離座敷で進行しつゝあるTとその女の戀心の復活の光景が、痛くかの女の眼の前を繞つた。

と共に女をも見、男と女の間柄の濃さ淡さをも見、男だけを離して其を自分の方に引寄せるやうにし、男にいろ〳〵な恨みを言つて見せ、自分の當然持つてゐる要求を言つて見せ、遣瀬ない愛を見せ、かうしたハメに陷つた自分の悲しさを見せ、男の薄情を責める瞋恚を見せた。否、さうして自分の方の心を男に見せると共に、かの女は中に挾まつて困つたやうな男の眼を見、濟まないと詫びるやうな眼を見、また此方の眼の動き方如何に由つては、(だつてしやうがないぢやないか。急に思ひもかけずにやつて來たんだから)といふ焦燥したやうな眼を見、かの女との關係を女に悟られまいとする臆病な眼を見、(まア、落附いておいでよ、あとでわかるから)といふやうな眼を見た。これに比べては、女の眼は、それとはつきり知つてゐないために、單に旅舍の女中としか視てゐないために、さう大して深く複雜には動いてゐなかつたけれども、それでも何うかすると、ちよつと凝視めるやうな、かすかに疑つて見るといふやうな、鋭い尖つた眼色をしてかの女を見またTを見るのをお園は見た。そして口ではさうした社會に多く見る女のやうに、如才なくお園に話しかけ、Tの世話になつた禮を言ひ、茶代を餘計に置き、多くの祝儀をかの女に奥れた。Tの言つたやうな二人の間の心の紛爭は、少しもその顏に見せないばかりでなく、細君氣取で、Tの世話を種々とするやうな態度をお園に見せた。

火照つて爲方がない顏をお園がしてゐると、

『暖かなところね、此處は――。溫泉場見たいなところね。』

（それで、Tさん、此處に長く逗留してゐたんだな。）

かうはつきりとは言はないまでも、それに近いやうなことを言つては、お園に笑ひかけるやうにした。

で、漸く火を臺十能に取つて、此方にやつて來ると、廊下のところで行違つたお光はまたお光で、

『Tさんの奥さん來たんだツてね。別品さんだつてね。』

かう言つていやに冷かすやうな笑ひ方をした。

『奥さんぢやありやしないよ。ちよつと見たツて解るぢやないか。』

かうお園は言つたけれど、お光の言つた言葉と、その冷やかな笑顏とは、かの女の胸を刺すやうにした。

三十九

お園はその時から成るたけ親類の娘つ子に離座敷の用事をさせるやうにした。しかし絶對に其處に行かない譯には行かなかつた。それにその二人を離座敷に遣つたまゝにして靜かにそれを眺めてゐるといふこともかの女には出來なかつた。

恐らく其處に行つた時のかの女の眼ほど鋭敏に働いたものはなかつたであらう。その眼は男をも見る

の出來ない競爭者ではなかつたか。たとへその女に他の男があつてTがそのために苦しみ、そのために一時こんな田舍に來てゐることになつてゐるとはいへ、また現に昨夜もその女をTはおとしめて、『そつちの方はもう何うにもならないんだよ。もう、お前の山の旦那と同じことだよ。』など丶言つてゐたとはいへ、かうしてわざ〳〵その女が訪ねて來るところを見ると、Tとその女との間には、まだ切つても切ることの出來ない愛情の羈絆が纏綿しつ丶あることはそれは知れ切つたことであつた。曾て山の旦那の細君に逢つた時には、此方にすまないといふ心持があつたので、さうした競爭心は多少起つたにしても、それは寧ろ微々たるものであつたけれど、今は却つて深い力強いしかも何うにもならないやうな失望の雜つた嫉妬の起つて來るのをお園は認め得なかつたか。(あんなうまいことを言つて、此方から進んで行くやうに持ちかけたのは、あれは男の巧な手管で、まんまと自分が乘せられて行つたのではないか)とさへ思はれた。折角つかんだと思つた運命も忽ち旋風の爲めに吹き卷かれて行つて了つたやうな氣がした。

大きな爐から、堅炭のカンカン起きたのを火箸で挾むのも、何だか自分の心を暗示されてゐるやうで、一つ挾んでは、長い火箸を下に置いて、お園はつゞけて溜息をついた。一面に眞赤に起きた爐の火は、赤いかの女の顏に火照つた。

すぐその傍で何か料理をしてゐた主人は、

かう言つた女客の聲が耳に入つて始めて目を覺したらしいTは、吃驚したやうにあたりを見廻して、

『や、やつて來たのか。』

三十八

『えらい處にゐるのね。』

こんなことを言つて、女は兎に角此處までやつて來て安心したといふやうに、『あつちこつちで聞いて來たんですよ。新聞社にも電話をかけたし、Sさんにも逢つたし、奥さんにも逢つたわ。』

Tは何か言はうとして言はずに、困つたやうな、きまりのわるいやうな顔をしてゐたが、お園が信玄袋を置いてそこに立つてゐるのを見て、

『火を持つて來て呉れ給へ。』

と言つた。Tは顔を赤くはしてゐたが、さう命じた言葉が何となく素氣ないやうにお園には聞えた。お園は體が赫としたり、また氷のやうに冷めたくなつたりするのを覺えた。かの女は恐るべき、とても自分などは相手になることの出來ない競爭者をそこに發見した。あの美しさ、あの際だたしさ、あの立派な扮裝、あの形の好い丸髷と長いすつきりした襟足、何うおとしめて批評しても、あんな女とは言ふことの出來ない競爭者でそれはなかつたか。またそれはとても田舍の旅舍の女中風情で何う彼う言ふこと

てつきりそれに相違なかつた。

お園はぢつとその女客を見たが、そのまゝすぐ踵を旋らして、急いで先に立つて、その女客を案内するといふよりは、寧ろ早くこれをTに知らせやうとするやうに、長い廊下を足音高く其中ほどまで行つて、そこの敷石に置いてある下駄をつつかけて行かうとすると、

『おい、おい、御案内をするんだよ。』

あとからつゞいて來た主人に呼び戻されて、止むなくお園は二足三足戻つて、もう一足そこにあつた下駄を女客のために並べたが、主人の其處まで持つて來た信玄袋を受取つて、そのまゝ先に立つて、敷石傳ひに離座敷の方へと案内した。

『離座敷なの?』

『え……。』

お園の顏には赤く血が漲つた。

疎らな樹の間を通つた時にも、Tはまだそれと夢にも知らないらしく、晴れた日にはいつも明けておく障子もぴつしやり閉めて、此方から上つて行つても、それを明けやうともしなかつたが、入つて見ると、Tは行火に凭つたまゝ、俯伏になつて、心持好さゝうに居眠りをしてゐるのであつた。

『まア、およつてるのね。』

た時には、主人は眼を睜らずにはゐられなかつた。それは此處等ではつひぞ見かけたことのない、扮裝も眼に立つほど立派な、ダイアの指環などをはめた、裾からは派手な長襦袢がほらほらとこぼれて見えるといふやうな女客であつた。

(入らつしやい。)

とも言はずに立つて主人が其方へ行くと、女客は莞爾しながら、その入口のところに立つて、

『あの、此方に、Tさんといふお客がいらつしやる筈ですが……。』

『へえ! いらつしやいます。』

と主人は急に頭を下げた。

それで女客は初めて安心したといふやうにして、帶の間から小さな財布を出して、きめてきた賃銀よりいくらか多く車夫に渡して、『何うも難有う御座います、』などゝ言はれてゐたが、

『おい、誰かゐないか。Tさんのお客樣!』

かう主人の聲をきゝつけて、客のない暫しの暇の間を、二階の階梯の向うの六疊の一間に坐つて、旅舍の娘や、上さんや、お光と一緒に自分の襦袢の襟のつけ替へなどをしてゐたお園は、急いで立つて其方へと出て行つたが、はつとして、度膽をついたやうにしてそこに立留つた。『Tさんのお客樣』と言つた主人の言葉が耳に入つてゐるので、急にお園の胸は烈しく躍り出した。

つたり、朝は平氣でいつものやうに赤い襷をかけて、湯氣の立つバケツを其處に持つて行つて、長い緣側の拭掃除をしたりした。そしてをり〳〵見ないやうにして見る眼が、矢張見ないやうにして見てゐるTの眼と宙に合つて互ひににつこり笑つたりなどした。

此頃にめづらしいやうな暖かい日和の好い日が續いた。西風も滅多に吹かなかつた。四目垣の下の福壽草の黃は既に老けて、早梅の枝には點々とした花が晨の星のやうに白く見え出して來てゐた。午前の日影はTの坐つてゐる机のあたりまで長く明るくさし込んで行つた。

三十七

Tが來てから、十日目の午後二時頃のことであつた。その日は、連日の好い日和にも似ず、朝の中はわるく曇つて、何うにか天氣が變るさうなと思はれたが、午少し過ぎる頃から、果して小雨が降り出して、番傘や蛇の目傘が町の通りから土手の方へと上つて行くのなどが見えるやうになつた。小さな雨滴の音の靜かに軒の樋から落ちる氣勢などもして來た。

ふと深く幌をした一臺の車がN屋の前に來て留まつた。

それはT町から客を乘せて來た車であるといふことは、一目見ただけで、帳場に坐つてゐた主人にはわかつたが、やがて車夫の外した幌の中からあらはれた二十八九になる色の白い丸髷に結つた女客を見

からすべてを擧げてTに縋つて行くにはまだ餘りに早いやうにかの女には思はれた。もつと深くTの身の上や、心や、そのかげにゐる女を知らなければ、出て行くにしても容易に出て行かれないやうな氣が何處かでしてゐた。

しかしそれは心の底に持つてゐる考へで、何ぞと言ふと、離座敷の方にお園の心が引張られて行くのは事實であつた。彼等はもう客と旅舍の召使との關係でもなければ、單なる馴染または友達といふやうな間柄でもなかつた。不思議にもかれ等は以前のやうに笑つたり戯れたりまた騷いだりするやうなことはなくなつた。唯、默つて眼と眼とを合はせて笑つた。

もう他人ではない。たとへ、このまゝ別れて了つても、決して他人ではない。他郷と他郷に一年二年を經過しても、再びまた逢ふ時には、ぴたりと心と心を合はせることが出來る身の上になつて了つてゐるのである。また假令どんなに遠く離れて了つても、またこれきり逢はないやうなことがあつても、かれ等は矢張何處までも他人でなしに、互ひに互ひのことを思ふことの出來る身の上となつて了つたのである。(わるいことをしたね。)と言ふやうな眼の表情をしてTはお園を見た。

『東京に出てお出でな。』

とも、Tはもう言はなくなつた。

しかもお園は別に變つたこともないやうにして、朝夕の膳を運んだり、行火を拵へて持つて行つてや

三十六

Tのことは次第に深くお園に飲み込めて來た。その陰にゐる一人の女――それは狹斜街の女であるといふことも、その女にTは全身を注いでゐながら、しかも完全にその女の愛を得てゐないといふことも、その女には別に惚れた男があるといふことも、そのため水と火の中にゐるやうな苦惱をこれまでに味はせられて來たといふことも、しかもその女とはまだ切れてゐないといふことも、何も彼も段々とわかつて來た。お園はこれを機會に、かうした田舍を去つて東京に出たいやうな微かな希望を胸の中に起したけれども、しかもすぐ一緒に伴れて行つてと言つたやうな無理なことも言はなかつた。

一方山の旦那のこともまだお園には思ひ切れなかつた。何故なら、さつき店にゐた時、少年の郵便配達が持つて來た二三通の手紙の中には、山からの便りがあつて、そこにはこの間の手紙とは打つて變つて、やさしいことが縷々として書いてあつたからでもあり、また心からその山の旦那を思ひ切つて了つたわけでもないからでもあつた。(此方が離れてゐると向うで思つて來る。此方が思つて行くと、向うで離れて行く。)かういふ意味のことをTが言つたが、男と女の仲はさうしたものだなど〻言つたが、(成ほどさうだ。)とその手紙を帶の間に挾みながらお園は思つた。

それにTとさうした仲になつたことは、嬉しくもありまた力にもなることではあつたけれども、此方

庭の疎らな樹の間を拔けて、野菜畠の方へ出て行くのを見た時には、

『あの客かえ？』

『え、さう……。』

『好い男でもないね。もう年を取つてるね、餘程……。』

これでいくらか安心したといふやうにして、Nは仲間と一緒にお園を傍から離さないやうにして酒を飮んだ。『もうしめたもんだ。これで、向う側のあのS一家を動かして、五千株も持つて貰へば、あとは刄を迎へずして解けるやうなもんだ……。唯、あのS一家だけだよ、難物は……。だからあれだけは大いに熱心にやらなくつちやいけない……。』などとNは言つた。鐵道を敷いて、地方の繁榮を謀つてやるといふのを一方ならず鼻にかけてゐるらしく、曾ては旅舍の主人を捉へて、『これで、汽車が出來て見給へ、この町なんかぐつと違つて來るぜ。殊に、この家なんか何んなによくなるか知れないよ。』などと言つて、暗にもつと十分に世話をして呉れても好いことを諷した。ある時は、『これでも、これが成功しさへすれば、僕だつて發起人だから、千株や二千株は默つて貰へるからな。その時は、お園ちゃんなんかにも、何でもしてやらアね。』などと言つた。お園は唯笑つて聞き流した。Tが散歩から戻つて來た時には、お園は急いで立つて其方へと行つた。

『東京の方……。』

『長くゐるのかね、もう。』

『もう、一週間位ゐらつしやるわ。』

『河川の方の人？』

『いゝえ、さうぢやありません。』

『何の用で來てゐるんだえ？』

『存じません。』

かうお園は言つてすぐ向うの方へ行かうとすると、

『おい、園ちやん、此處に來てゐたつて好いぢやないか。少しお酌位して呉れても好いだらう。』

『今、ちよつと用をして來ますから。』

かう素直にお園は言つて、そして廊下を店の方へ行つた。

其處に來ても、お園は落附いて長くゐずに、ちよい／＼席を外して立つて行つたり、敷石傳ひに、物を持つて離座敷の方に行つたりするのが此方から見えるので、更にそこにお園が行つた時には、Nは、

『好い男なんだらう、離座敷のお客は？』などゝお園に言つた。

それとは知らずに、離座敷の障子が明いて、Tが退屈でもしたやうに、そこにある下駄を突かけて、

三十五

O町から此の町を經て、川を渡つて、K町まで連續せるB線の鐵道を計畫してゐる人達は、をり〳〵この旅舍に來て午飮を食つたり泊つたりして行つたが、その中の一人のNといふ二十七八の男はやつて來た時からお園に眼を附けてゐるらしく、此の前用事で二三日滯在した時にも、いろ〳〵いやらしいことを言つたり何かしたが、そのあくる日の午頃に仲間のもの二人と一緒にやつて來て、『何だ？　離座敷は塞がつてゐるのか。』などゝ言つて、そつちを樹の間から覗くやうにして、爲方がなしに母屋の方の一間に來て酒を飮んだ。

『園公は何うしたね？』

お光を捉へてかう聞いたりした。

お園が離座敷から出て來ると、『おい、此方へ來い。』と言つて手招きした。來ると、

『何者だね？』

『離座敷のお客……？』

『さうさ。』

した。お園は白い半身を茫とした湯氣の中に現はしたり、湯殿に出て體を洗ふでもなしに、ぐづぐづしてゐたり、また湯の中に肩まで沈めたりしてゐたが、早くも着物を着て了つたお光は、

『隨分長湯ね。』

『だつて、温るくつて出られないんだもの。』

『そんなに温くはなかつたぢやないか？』

『温るくなつたのよ、もう。』

『ぢや、先に寢るよ。』

『あゝ。』

『お湯の中で、居眠りなんかしちやいけないよ。』

こんな捨臺辭を言つてお光が向うに行く氣勢がやがて此方まできこえて來た。

お園はもう一度ぢ
うと靜かに湯の中に身を浸した。今夜ばかりは山の旦那に對する苦しい悶えも何處かに行つて了つたやうな心持がした。で、よく暖まつて、漸くして上つて來たが、寢卷に着替へるとそのまゝ、何も彼も滿足したやうにして、いつもの床の中に入つて、ぐつすり寢て了つた。毎夜氣になるお光とＦのことなどはもうかの女の頭の中になかつた。

生憎その夜は忙しく、遲くなつてからやつて來た泊客などがあつて、仕舞湯に入つたのは、もう十二時すぎであつたが、お光とお饒舌をするにも平生とは違つて何處となく張合があつて、いつものやうに辛い話などはしなかつた。元氣よく背中の流し合ひなどをしてお光が出たあとまでも、長く風呂に浸つて、銀杏返の頭を此方に見せたまゝ、をりく後れ髮を白い手で掻き上げたりなどした。

と、今まで持つた男のことがゆくりなく其胸に上つて來た。比較して見るといふ積りでもなかつたが、それが色々とひとり手に比較されて來るのが不思議だつた。山の旦那に圍はれた時分に持つてゐた男のことも思ひ出されゝば、初めて娘から女になつた時の男のことも思ひ出されて來た。その時分は、かの女の性慾生活もまだ幼なくて、男の體のことなどは何もわかつてゐなかつた。また男の心などもよく飲込めてはゐなかつた。初めて本當にかの女のために性慾生活を開いて與れたのは、矢張何うしても、あの山の旦那だつたなどゝも思つた。人間といふものは不思議なものだなどとも考へた。

妹にしやうと言つたり、さうした間柄になつては駄目だと言つたり、つとめてその間に越え難い垣を結ばうとしたりしながら、しかも遂にそこで踏留つてゐることが出來なかつたTのことを考へると、ひとり手に微笑まれて來るやうな心持がした。矢張、何うしても遠くて近いのは男女の仲だ……こんなことをも考へた。獨りで思ひ出して微笑した。

湯は何方かと言へば溫い方だつたが、却つてそれがかの女の今の樂しい氣分に相應はしいやうな氣が

春の自然の漲溢に押されて、忽ち元のやうに流れ出したやうな氣がした。(これで好い――)といふやうな氣がした。

やがて急いでそこから出て來たことをかの女は思ひ出した。もう一人ではない、今までのさびしい一人ではない、かう思つたことをも思ひ出した。その夜はいつもに似ず、氣候が暖かであつたためでもあらうが、何となく〳〵あたりが春の夜でもあるやうに思はれて、雨戸を閉めずに、灯が明るく照つて人聲のしめやかにきこえてゐるのも、何となくかの女の心に相應しかつた。お園はもう一度振返つて一枚明いた戸から灯の微かに洩れて來てゐる離座敷の方を見た。あたりには誰の姿も見えなかつた。

三十四

考へて見ると、去年の暮に、T町の旅舍で漂泊してゐた時分、其處から奉公口があつて見ず知らずの田舍に來ることに話がきまつた時分、またはあの朝日のさし透つた松原の中の路を寒い朝風に吹かれながら車の上で震へてやつて來た時分に、かうした運命がその前にあらはれて來ようとはお園はいつ想像したであらうか。田舍の金持の息子、でなければ機屋の旦那、でなければ繭の仲買の男、さうしたものでなしに、他にTのやうな男がその相手にならうとはいつ想像したであらうか。お園は悲しいその自分の運命から生き返つて來たやうな氣がした。

らう。何ういふ風に胸が躍つたらう。『そんなことをしても好いのか？』かう言はれなくとも、その時山の旦那のことをお園は思つたことを思ひ出した。（たうとうあの旦那にもかういふ風にして離れて行くのだ。）と思つたことを思ひ出した。何うなつて行くかはわからないけれど、自分の運命が益々渦に渦を卷いて行きつゝあることゝ思つたことを思ひ出した。

互ひに戀の傷手を負つた人達ではあるけれども、矢張互ひに熱い血の流れてゐる男であり女ではなかつたか。また、さうした戀の傷手に惱んでゐる同じ心が益々その互ひの引く力を强める動機とはならなかつたか。お園は、默つてTの眼を見詰めた。その眼の中には愛があつた。戀があつた。本能の强い力があつた。またTの眼の中にも、決してかの女の心を、體を拒み得ないあるものがあるのをかの女は認めた。

『だつて、しやうがないんですもの。』（あなたには始めてお目にかゝつた時から他人ぢやないやうな氣がしてたんですもの。）このあとの言葉は、それとはつきりは言はなかつたけれども、眼が、表情が、氣分がすつかりそれをTの前に示してゐたに相違なかつた。

それからかの女は何を言つたらうか。何も言はなかつたらうか。Tの其後の態度に滿足して、心と體とを寄せた以外に何も言はなかつたであらうか。――かの女は獨り微笑せずにはゐられなかつた。

一方ではまた今まで邪魔するものがあつて、それにつかへて久しく流れずにゐた溝の水が、何等かの

て來て介抱した。

三十三

お園は離座敷からそッと敷石を傳つて此方へとやつて來た。

胸は頻りに躍つた。誰かに見られやしないかと思つた。誰かに勘附かれやしないかと思つた。（そんなことはない、誰も知つてゐる筈はない。）かうは思ひながらも、我知らず自分の周圍を見廻すやうにした。疎らな庭樹の間からは、まだ戸を閉めない母屋の室からの灯が明るく此方にさして來てゐるのが見えた。

嬉しいやうな氣もすれば、たうとう望みを遂げたといふやうな氣もする、あのTがすつかり自分のものになつたやうにも、またはそのTの體を自分が知つたやうにも……。と、心がいやに躍つて、押へようとすれば愈々躍つて、自分ながら餘りに小娘らしいのに氣が附いた。つゞいてその時のさまが歴々と眼に映つて見えた。

『思つてゐないことはないんだよ。お園ちやんは好きだよ。しかし、さういふことをして了つたつて詰らないぢやないか。またいろ〳〵な苦しい思ひをお互にしなければならなくなるよ。』こんなことをTが言つてゐたことをかの女は思ひ出した。その時、かの女は何と言つたらう。何ういふ顏の表情をした

ある夜は、眞面目に、

『本當に、友達にならうね。僕の妹にして置かうね。屹度だよ。』

かう言ふので、

『妹なんかいやですね。』

わざと戯談半分にお園が言ふと、

『いやかえ、妹では……。妹では不足かえ。』お園の顔を見て、

『でもな、一緒になつちやつては、面白くなくなるからな。また辛い經驗を嘗めなけれやならないからな。……妹になつてゐてお呉れよ。』

『え、妹でも結構……。』

『その代り、力になつてやるよ。君だつて不仕合せな女だからな。かうした兄を持つてゐるのも力になるよ。』

『結構ですとも……。』

『それぢや、さうしやう。』

かう言つて、そのしるしだと言つて、Tはお園の手を堅く握つた。

一夜は酒を少し多く飲み過ぎた故か、『苦しい、苦しい！』とTは言つた。お園は水やら藥やらを持つ

の……』と小聲で歌つて見せて、

『つまり長い長い夜といふことなんだ。その長い長い夜を待つても待つても女は來ずに、一人でぽつねんとして寢るのかなアと言ふんだ。丁度、僕の心持をそのまゝ歌つて吳れたやうなもんだ。あの歌を吟じて見ると、男がごろりと佗しく丸寢をしてゐるさまが目に見えるやうな氣がするぢやないか。色戀は辛い。つくぐ〵辛いものだと思ふね。』

『さういふ意味ですか、あの歌は――。ぢや、私なんかも矢張同じですね。』

『本當だよ。君だツて同じだとも。矢張それで苦しんでゐるんだ……。』

かう言つて頭を傾けて、『つくぐ〵色戀の世の中だ。辛い色戀の世の中だ。』

あし曳の

山鳥の尾の

しだり尾の

ながながし夜を

ひとりかもねん

かう再び聲を張りあげてTは吟じた。お園はその時はその悲しい節に、そのいかにも辛いらしい色戀の世の中に身も心も引き入れられるやうな氣がした。

三十二

しかもお園の目には、一人寢るのがTに取つて此上なくさびしさうに見えた。大抵その時はTは輕く醉つてゐたが、『何うも夜中に眼が覺めて困る。昨夜は一時から目が覺めて、何うしても眠られなくつて困つた。』かう言つたり、『それが眠られないばかりなら好いが、人間だから、色々のことが考へられてね。何うも夜中に一人眠られないでゐるのは辛いもんで。』と言つたりした。

『あゝあゝまた一人寢るのかな。』

時にはこんなことを言つて、侘しさうにちぢこまつて、頭を此方に向けて、ごろりと寢た。

ある夜は、酒のあとで、百人一首の歌の話をTは持ち出した。『君、あの中に、足曳の山鳥の尾のツて言ふ歌があらアね。』

『ながながし夜をでせう。』

『さう、さう、あの歌は百人一首の中で一番旨い歌だが、何ういふ意味だか、君にはわかるかね。』

『よくはわかりませんけど……』

『あれはかう言ふんだ……』言ひかけて考へて、『好い歌だなア、考へれば考へるほど好い歌だな。本當に身につまされる歌だ。昔の人も矢張あゝして女を待ち明かしたのだ……足曳の山鳥の尾のしだり尾

藝者の歸つたあとで、『本當に此處等には碌な藝者もをりませんね……。皆な、あゝしてガチヤガチヤ騷ぐばかりを能にしてゐるんですから……。それから思ふと、私のゐた溫泉場には、好い姐さんが隨分ゐましたがね。』

かうお園が言ふと、

『それはあそこいらはこんな田舍とは違ふよ。何しろ、福島が近いんだから。羽二重屋さんが金ビラを切るからな。姐さんだツて、大抵はあそこは東京種が多いんだからね。』

『本當ですよ。勝次なんて言ふ姐さんは、藝一方で賣つた人で、東京からお相撲が來た時だツて、決して馬鹿になんかされやしないんですからね。』

こんな話をしながら、膳を片づけたり、座敷を掃除したりして、やがていつものやうに、緣側の隅にある押入から寢道具を出して、それをすぐ隣りの四疊半の副室に敷いた。

『今夜は寒いから、行火を入れて置きませうか。』

などゝお園はやさしく訊いた。お園は用事をすまして、『おやすみなさいまし。』かう言つて、いつも輕い佗しい失望を感じながら、敷石づたひに此方へと來た。

お光に、

『お園さん！』

などゝ母家の方から呼ばれた。

『本當にしやうがありやしない。何うかしてるんぢやないか、もう。』

こんなことをお光が獨言のやうに言ふのをお園は耳にした。またある時は、『その證據には、山の旦那のことをこの頃は少しも言はなくなつたぢやないか。』かうお光が親類の娘ッ子に言つてゐるのを聞いた。

『馬鹿におしでないよ。そんな旦那ぢやないんだよ、あのTさんは――』時にはかう辯解するやうにして言つたが、それがお園には嬉しいやうにも、また樂しいやうにも思はれた。もうそのTはすつかり自分のものになつたやうな氣も何處かでしてゐた。

Tは一日物を書いてゐたりしたが、しかも夕方は早く切り上げて、風呂が沸いたのを知らせに行くとすぐ入つて、それから好い心持さうにして、晩酌の膳をお園の運んで行くのを待つた。時には靜枝ともう一人一本になつたばかりの妓などを聘んで、そして賑かに一二時間を過ごした。三味線などもよくわかるらしく、好んで小唄ものなどを選んで、小聲で、

『今朝の雨にまたしつぽりと居つづけの……』などゝ唄つた。甚句やサノサを常にガチヤガチヤと喧しく彈いてゐる藝者達は、後には默つて三味線を下に置いた。

てきこえた。

午前の日影は美しく川に照つた。

三十一

『實際、色になつて了つては、世話も何も出來なくなるからね。』

『それはさうですとも。』

『不思議なもんだね。……さういふ風に、男と女との間は出來てゐるんだね。』

『さうですね、それは本當ですね。關係があつちや、何うしてもさういふ風には行きませんからね……。』

二人は日に日に交情が好くなりつゝあるのであつたが、それを、その濃くなりつゝあるお互ひの心に強ひて垣を結ふやうにして、かれ等はよくこんなことを言つた。

『女の友達と言ふものもまた好いもんだよ。』などゝTは言つた。

それにも拘らず、かれ等の間柄の次第に接近しつゝあるのはお園にもよくわかつた。Tは決してかの女をわるく思つてはゐなかつた。或はいくらか思はれてゐるかも知れないとお園は思つた。從つて離座敷に用を足しに行くのが樂みのやうな氣がして、何ぞと言つてはお園は其方へ出かけて行つた。そして

『いやなこと！』かう言つたが、急に、お光の方を見て、
『あそこまで行つて見ませうか。Kさんがゐるんでせう、彼處に。』
かう言つて意味ありさうに、下流に遠く見えてゐる赤い白い三角の旗のビラビラと靡いてゐるのをお園は指した。
『行つたッてしやうがないよ。』
『だッて、お前さん、大騷ぎをしたことがあるぢやないの？』
『ちよつと好い男には好い男だけども、少し威張るから、嫌ひさ、あの人……』
『さうね、ちよつと、さういふところはあるわね。でも、來い、來いッてよく言ふぢやないの。お茶位飮ませてやるなんて――』
『河川の技手さんかえ？』
かう傍からTは言つた。
Tも此處に來る時、Sの渡しをわたつて來たので、その紅白の三角旗の立つてゐるところは通つて來て知つてゐる。
硝子窓で四面を張つたやうな小さな家屋、そこでは若い技手が一人二人、脊廣か何かで、大きな卓に凭つて、頻りに圖を引いてゐるのをTは見て來た。下流には、トロコの土を運ぶ響が高くあたりに響い

よ。』

こんな會話を取交しながら、てんでにそれを搜して歩いた。暫し經つた時には、お光は川の岸、お園は土手の裏、Tはもつと先の方へといふ風に、やがて離れ離れになつて行つたが、再び一緒に集まつた時には、お園の紫のメリンスの前垂の中には、やがて來る春が想像されるやうな青いなづ菜の綠が際立つて美しく滿ちてゐた。

『午のおかずが出來た。』

など、Tは笑つた。

ふと立留つて、山の雪の方を見てゐるお園に、

『思ひ出したね、また……』

笑ひながらTが言ふと、

『さうぢやないんですよ。もうあんな人は何うでも好いんですよ。』

『丁度、此處等に當るね。』

Tは重なり合つた襞の深く入込んでゐる山の方を指して見せた。

『さうなりますかね。』

『一度行つて來たら、何うだね。』

近所の林から伐出す粗朶を船頭がせつせと舟に積んだりしてゐる前を通つたりして、そこ〻となく土手の上を歩いた。

『のんきで好いね。かうして歩いてゐると……。』

『本當ですね。』

『もう、なづ菜が出てる。』かう言つてTはそれを一つ採つた。と、

『さうね。少し摘んで行きませうか。』

それがめづらしいといふやうにして、お園は躊躇んでそれを摘み始めた。

『何してるの？』

あとから來たお光は、『あゝもうなづ菜が出てるのね。私も少し摘んで[illegible]。』かう言つて、矢張面白さうにしてそれをさがし始めた。

『いろ〳〵なものが出るだらうね？　春になると……。』

『え、もう少し暖かくなると、つくしなんかも澤山出ますよ。芹もこの向うに行くと、隨分ありますよ。』

『摘草に來るものもあるだらうね？』

『田舍ですから、そんなにめづらしくないから、大人は來ませんけども、子守なんかよく摘んでます

『でも、しつかりしてゐるのね。あの隱居さん。』

『されはさうさ……。まだあれで、何うかするとあのお上さんが困ることがあるんだつて言ふから……。』

『困るつて、何が？』

『わからない人ね。强いんだとさ。』

『馬鹿馬鹿しい……』

また二人はあはゝと笑ひ轉げるやうにした。

『何も珍らしくないぢやないか、そんなこと。』

かうTが言ふと、

『だッて、七十いくつよ。もう……。それで、二三年前までは、お上さんの他に女が一人位欲しい位だつたんだつて……。』

かう言つてお光はまた笑つた。

三十

それから三人は岸に一軒ある運漕店の方へ行つたり、生洲の舟の水中に沈んでゐるあたりに行つたり、

山の雪は、今日は暖かいので、いくらかぼんやりしてゐるけれども、川は美しく錆びたお納戸色に流れて、對岸を縱橫に動いてゐる河川工事のトロコの汽罐車から、白い煤烟が漲るやうに揚るのがそれと眺められた。土手のすぐ下のところにある小さな渡船場からは、自轉車や車や二三人の客を乘せた一艘の渡舟が、今しも岸を離れて行つたところで、船頭のさす長い竿の動くにつれて、次第に午前の日影のきらきらと美しく輝く水の上の方へと出て行つてゐた。

ふとそこに近く、岸に、水量をはかる照尺の立つてゐるのを、お園は目にして、

『これ? 隱居さんが賴まれて每朝見に來るのは?』

『さうよ、これよ。』

『隱居さんほどこの川の水のことに詳しい人は他にないんですつてね。何んなに水が出ても、隱居さんだけは、落附いて騷がないんですツて――』かう言つて、お園は、その旅舍の隱居が縣廳から賴まれて、年中日に二度づゝ、水量を見に來る話などをTにした。

『ふむ。』

などゝTは聞いてゐたが、『矢張さういふことは年寄でなくつちやわからないからな。』

『何しろ、六七十年も見てゐるんだもの。』

かうお光は言つた。

などと二人は體も崩れるやうにして笑つた。

『何うしたんだえ？』

『何でもありやしないのに、此人が私を突ついて笑ふんですもの。』

『うそ、お前さんぢやないか、先に突ついたのは。』

こんなことを言ひながら、意味もないのに二人は猶ほ笑つた。

『何處へ行くんだえ？』

『一緒に土手に行つて見るんですよ。お園さんの岡惚について……。』

『お園さんの岡惚つて誰だえ？』

『あはゝ。』

とまた二人は體をもがくやうにして笑つた。

『何が可笑しいんだね、そんなに？……』

こんなことを言ひながらTはずんぐ〜先に立つて土手に上つた。

そのあとから呼吸を切らして、女達は矢張笑つたり何かして上つて來たが、上り切ると、お園は、

『おゝ好い景色！』

かう言つて四邊を眺め廻した。

『いゝえ、いくらもないんですの？　さうしやうと思へば、何うにでも出來る位の借金しかないんですけども……』

『しかし、まア、もう少し山の返事を待つてゐる方が好いね。東京に出ようと思へば、いつでも出られるんだから。』

『それもさうですね……。』かう言つたが、お園は笑つて、一層深く打解けたやうな表情をして、

『好いところがあるでせうか、東京に……』

『ないこともないね。その時は、知つてゐる女將もあるから、話してやらうかね。その代り、僕は色にはなれないよ。』かう言つてTは大きく笑つた。

『まアあんなこと――』

いくらか顏を染めたお園はいつもに似ず艶やかに見えた。

二十九

春のやうな暖かな穩かな日であつた。泊り客も皆な立つて行つた午前の靜かな旅舍のひまな時に、Tが野菜畑を横ぎつて、川を眺めに土手に上らうとすると、あとからお園もお光も追蹤けて來た。

『あはゝ、あはゝ。』

『それもさうだね……。それにしても何とか言つて來さうなもんだね、山から？』

『駄目には駄目だと思ふんですけども……』

『山に來てゐるには來てゐるのかえ？』

『旦那ですか。來てるんですとも……。それは山でその女と一緒に暮してゐるのはちやんとわかつてゐるんですけども……。私なんか何うでもよくなつたんですよ、もう。』

『そんなこともないだらうけれどもね。』

『さうなんですよ。それはわかつてゐるんですの。だけど、餘り男としては薄情すぎると思つて……』

『何か、誤解してるんぢやないか、お互ひに。君の方でも、旦那の方でも……』

『そんなことはないんですの。捨てられたには捨てられたんですがね。』急に赫として來たといふ風で、『いつそ、思ひ切つて東京に出ようかしら？　そして待合奉公でもしようかしら？』

Tは考へるやうにして、『それも決心一つで、好いには好いかも知れないね。待合奉公だツて、本當にやつてゐる分には、立派に身が立つて行かないこともないんだから……。』

『それはさうですとも。こんな田舍にゐるよりも、その方がどれほど好いかしれないとも思ふんですけども……』

『此處には、借金はあるのかえ？』

『え、さうも思つてゐるんですの。山の旦那のお上さんの家も、烏森で意氣な商賣をしてゐますし、麻布にある弟も、私がこんな田舍に來てゐるのを可哀相に思つて、山の方はあきらめて、東京に出て來ないか、さうすれば、いくらも好い口はあるツて言つてよこしたんですけども……。』

『それはさうだね。かうした田舍にゐるよりは、東京で稼ぐ方が金にもなるし、身の爲めにもなるにはなるね。』

『落附く氣があるかなんかなら、此處でもそれは身の立つやうにならないこともないでせうけども、いつまでもかうした田舍にゐる氣もありませんしね。いつそ思ひ切つて東京へ行かうかとも思ふんですよ。』

『でも、旦那のことが思ひ切れないんだらう？』

かう笑ひながらTは言つた。

お園も笑つて、

『思ひ切れないこともないんですけども、一度は逢つて、言ひたいことは言つて、そして別れるなら、きつぱり綺麗にわかれたいと思つてゐるんですから……。此處にかうして來たんでさへ、自分の勝手でやつて來たんですからね……。これからまた一人で勝手に東京に出て行つては、それこそいよく打ち壞しになつて了ひますからね。』

お園の點頭くのを見て、

『だから、まア、當分、遁げてゐやうと思ふんだ。そしてこんなところまでやつて來たんだよ。ところが、かうした田舍にも、矢張、戀に苦しんでゐる君のやうな人がゐるんだからね。人間は何處まで行つても辛いもんだよ。』

かう言つて、Tは晩酌の盃の冷えたのをぐつと呷つた。

（粉微塵に碎けて了ふやうな氣がする）その一語は深くお園の身につまされた。かの女もさうした氣が絕えずしなかつたであらうか。何も彼も身も魂も滅茶滅茶に碎いて棄てゝ了はうとは思はなかつたであらうか。今でもをり〳〵は山の中に飛んで行つて、憎い憎い憎い女の髻を執つて、短刀かなんかでぐさと刺してやらなければ業が煮えて爲方がないやうに思ひ詰めることはないであらうか。

『まア、然し、こんなことをいくら言つて見たつて爲方がない。』

Tはかう言つて、强ひて笑ふやうにして、盃をお園にさした。お園は長い廊下を種々なことを考へながら步いた。

二十八

ある時はこんな話をした。

だから……。』
『本當ですね。』
『だから、皆な酬つて來るんだよ。いや、酬つて來ると言ふよりも、皆な自分から拵へて行くんだよ。君が戀心に苦しんでゐるのも、僕がかうやつて田舍をさまよつてゐるやうになつたのも、皆な自分から起つたことだよ……。だから辛くても爲方がない。』
『さうですね。』
お園は心から動かされた。
『だから、君ばかり、さうした戀心に苦しんでゐるとは思はない方が好いよ。人間は皆なさうなんだから……。誰でも皆なさういふ風に苦しんでゐるんだから。皆な自分の心からさういふものを拵へて、そして、てんでに苦しんでゐるんだから。』
『旦那なんか、そんなことはないでせうけども……。』
『いや、僕だつて同じだ。君と少しも違ひやしない。かう見えても女には深切だつたんだからね。心から惚れて見たこともあるんだからね……。しかし、もう、匙を投げた。戀を突き詰めて行くと、自分の身が滅びる。自分の魂が滅びる。それは、君にもわかるだらうが、體が粉微塵に碎けて了ふやうな氣がするからね』

は出來ないからね。血があるからね。』

二十七

『本當ですね……。』

『それに、また、色戀はそこまで行かなくつちや面白くはないんだからね。好い加減のところで、不見轉を買つたり、女もまた厭々ながら體を貸したりする位のところで踏留つてゐれば、別に苦情もなしに、あはゝなどゝ戯談に笑つてすましても行けるし、すんでも行くんだけれどね……。さうしてはゐられなくなるからね。』

『本當ですよ。』

『だから、つくづく思ふね。人間は矢張一人と一人が好いんだね。女は人の妻になつて忠實に夫に仕へるし、男はその愛した一人の妻を守つて、すこやかに暮して行くのが何よりだね……。君なんかも、今の中、よく考へて、早く本當に賴りになる男を持つ方が好いにや好いんだね。』

さうした言葉は染々と深くお園の胸に染まずにはゐなかつた。

『私なんかも、山の旦那のお上さんに逢つた時には、本當に、それは罪だと思ひましたもの。』

『さうだとも……。人間は何んなに墮落したつて、さう思はずにはゐられないやうに出來てゐるん

『だッや、旦那も、さうした苦しい思ひをしたことがあるんですね。』

ある時、かう訊くと、

『さうかも知れないよ。かうして、こんな田舍にまご〳〵してゐるのも、そのためかも知れないからね。』

などゝTは笑つた。

『別品さんでせうね？』

『何が――？』

『その方が――』

『さうかも知れない。』

Tはまた笑つた。

かと思ふと、眞面目に、『だからわかるよ。君の辛いのも……。赫として、ゐても立つてもゐられなくなることがあるね。これほど此方では思つてゐるのに、向うでは他の相手とぬくぬくと歡樂に耽つてゐると思ふと、寢込みにでも何でも踏込んで行つてやりたいと思ふね。だから、新聞などにも出齒庖丁騷ぎや、身投げや、心中や、いろんなことがあるんだがね。人間は皆な同じだ。色戀でも、上つ面で、面白半分で、唯、體を合せることばかりに興味を持つてゐる中は好いが、そこにいつまでも留つてゐること

い薄い戀で、世間の戀は大抵さうした程度で行はれてゐるが、それでは折角戀をした效がないと言つても好いやうなものだ。』この言葉の中にも、いろ〳〵考へなければならないことが澤山にあるのをお園は思つた。『旦那のことをもつと深く思つてやらなければばうそだよ。』などともそのTは言つた。

『でも、折角思つてやつても、その男に女があつたり、女に男があつたりするやうな時は何うしたら好いでせう？』

かう訊くと、Tは、通り一遍の質問ではないやうに眞面目になつて、

『それが辛いんだ。君だつてそれに苦しんでゐるのはよくわかる、僕だツてそれに苦しんだことがある。現に、今でも苦しんでゐる。さう言ふ苦惱――何うにもならない苦しみを散々甞めさせられたればこそ、さつき言つたやうな（壞されない戀）と言ふことが考へられて來るんだ……。』

『さうですかね。』

かう言つただけで、その時はお園は別に深く訊きもしなかつたけれども、さうした言葉を持つてゐるTのことが種々に考へられた。次第にお園にはTの此處にやつて來た理由などもおぼろげながら飮み込めて來た。Tのかげには一人の女――絶えずその胸を痛めてゐる一人の女があるに相違なかつた。そしてその戀のために苦しんでゐるに相違なかつた。お園自身と同じやうに、そのTも矢張、戀の傷手に苦しんでゐるのではないかといふ風に考へられて來た。

きるとすぐ、隱居が一番先に火を入れるので、女中達が起きたり泊客が起きたりする頃には、いつももう好い加減に手水をつかふ湯は沸いてゐるのであつたが、Tは一あたり行火にあたつてから、庭下駄を突かけて、敷石傳ひに、顏を洗ふためにそこにやつて來た。それを見ると、お園は爲かけた用事を捨てゝ置いで、急いでそこにライオンの小袋と新しい楊枝とを持つて來た。そして次手に湯をも汲んでやつた。

二十六

Tの話の中には、色戀に對する深い理解があつた。お園はその話の中に、これまで無意識に、盲目的にやつて通つて來た自分を發見して、『本當にさうですね。男と女の中はさういふもんですかね。』などゝ心から撲たれたやうにして言つた。

成ほどそのTの言ふやうに、惚れられるよりも惚れる方が面白い。損ではあるが面白い。それは確かに自分が旦那に圍はれた頃に持つてゐた男に對する經驗で點頭かれる。

『此方から思ふのに、向うで思つて呉れないと思ふのはまだ淺い。向うで思つて呉れやうが呉れまいが、此方で深く思つてやりさへすればそれで好いのである。それで戀の目的は達せらるゝのである。唯、思ひ方の淺いのを慨くべきである。向うで思つて呉れないが爲めに、折角思つてやつた戀の壞されて行くのを慨くべきである。從つて報酬的にすぐやめたり壞されたりして了ふ戀は、戀と言つても極めて淺

『夜が遅うござんすからね。』

『夜は何時頃になるえ？』

『大抵十二時位ですけれども、昨夜なんか、客が遅くありましたもんですから、一時でした、寢たのは……』

『大變だね。』

何でもない言葉ではあるけれども、それが通り一遍のお世辭とは思へなかつた。それ以上になつかしくお園の耳には聞えた。

昨夜お光と一緒に床の中で言つたことなどがお園には思ひ出されてゐた。『さうね、私は何うしてだか、餘り若い男は嫌ひ……。何うしても年層の人の方が深切だもの。』かう言ふと、Fのことを當てつけられたといふ風に取つたお光は、

『それや、お前さんはさうだらうよ。それも山の旦那に仕込まれてるからだよ。私なんか、お爺さんは眞平……。若けれや若いほど好いわ。だつてその方が此方の自由になつて面白いもの。』かう言つてお光は笑つた。（成ほどさうかも知れない。旦那に仕込まれた故かも知れない。あの人の言ふ通りだ……）

こんなことをお園はぼんやり考へた。矢張、旦那への戀心をそれとなくTへも移してゐるのであつた。

長い廊下の隅に大きな石の臺があつて、そこに置かれてある丸い湯を沸かす桶のテツパウには、朝起

苦しんでゐはしないかと思はれるやうなことが飲込まれると共に、客にもお園の男に惚れつぽい、戀心を抱かずには片時もゐられないやうな女であることや、絶えず山の旦那の方へ色濃く偏つて靡いてゐる心や、笑ふ時に男の心を惹かないでは置かないやうな眼や眉が親しく深く染み込んで來た。

客の姓名をお園は既に知つて、いかにも人なつこいやうに、『Tさん、Tさん、』などゝ呼んだ。

少くともお園に取つては、さびしい悲しい運命の持主であるかの女の前に最初にあらはれて、そのTが一日なり二日なりそこに滯在して笑つたり話したり、また其處等を散歩したり、机に向つて物を書いたりしてゐることが、いくらか樂しいやうな、または力になるやうな心持をかの女に誘つた。何處を見廻しても、他人ばかりで田舍はさびしく、自分の辛い身の上話をしやうにも、染染耳を假して吳れる人達もないやうなこの他鄕に、さうしたTを迎へたといふことは、今のお園に取つては決して小さな事實とは思へなかつた。お園には、始めてそのTがやつて來た時のことなどがまたしてもくり返して考へられた。

朝も起きるとすぐ、お園は一番先に火を持つて行き、つゞいて行火を拵へて持つて行つてやると、起きぬけに土手の上に山の雪や川を眺めに行つたTは、丁度そこに歸つて來てゐて『難有い、難有い……行火にかぎる。今朝は寒いね。』などゝ言つて、莞爾してそれに手を當てながら、

『旅舍なんかに奉公してゐては、朝の早いのが辛いね。』

ある時はお園は訊いた。

『男ッて他に女が出來ると、初めの女はすぐ忘れて了ふもんでせうか？』

『そんなことはないけどもね……。』客は笑つて、『しかし男と女の中の覺めたり燃えたりするのは不思議なもんでね。覺めたとなると、しやうがないもんだね。覺めたものに、いくら此方から惚れて見ても、何うにもならないやうなもんだね。そしてその戀の傷手ッて言ふものは辛いもんだよ。』

『本當ですね。』

かう言つてお園は溜息を吐いた。

此頃、不思議にも、山の旦那に對する戀心がお園には燃え出してゐた。思ひ切つたり、また思ひ出したり、この儘では別れられないと思つて赫としたりした。山の中にゐる女と夜戲れてゐるさまなどもをりをり眼の前に繪のやうになつて浮んで來た。情慾に燃えた赤い顏をして、寒い西風の吹く緣側の拭掃除などをしながら、『もう捨てゝ了はう。構ふことはない此方から捨てゝ了はう！』などとお園は思つた。

二十五

敷石傳ひに物を運んだり、その度びに顏を見合せたり、何でもないことを話し合つたりする中に、お園には次第にその客の心や氣分や、女性に對する細かい愛着や、或はその陰にその客もまた戀心の處分に

『男から言はせると、女も薄情だよ。だから、薄情とか何とか、お互ひに言ふやうものぢやなくつて、惚れた方が何うしてもさういふ役廻りになると言ふ方が好いんだね……』

『それはさうですね。』お園も考へるやうにして、『だから、惚れる方が損ですね。』

『その代り、惚れた方が惚れられるよりは面白いからね。』

『それはさうかも知れませんね。』お園はまた考へるやうにした。

これに限らず、さういふ風にハキハキと物の判斷をするやうなその客の口のきゝ方がお園には賴もしいやうな氣がした。お園はいつ話すともなく、溫泉場でその旦那に圍はれた話や、旦那の細君がやつて來て、妊娠七月の目に立つ體で逢はなければならなかつた辛さなどを話した。ある夜溫泉宿に行つて、それとなく帳場で宿帳をひつくり返してゐると、ふと今朝來た客の中に旦那の細君の名がある。吃驚して逃げて家に歸つたのを、上さんやら、番頭やらが來て、無理にその細君に逢はせた。さうした話を細かにしてきかせた時には、

『ふむ、それは辛かつたらう。細君によくされただけそれだけ辛かつたらう、』など丶客は心から耳を傾けてきくやうにした。

『その子供さへ生きてゐると好かつたんだね。』

かう染々と客は言つたりした。

二十四

離座敷の六疊に移つた客は、机に向つて物などを書いてゐた。をりをりは此方で氣を附けて、火を臺十能に入れて持つて行つたり、行火を拵へて小掻巻をかけてやつたり、夕飯の時は成るたけ傍についてゐて、一本二本飲む酒の酌をしてやつたりした。次第にお園は親しくなつて行つた。

つい訊かれるまゝに、男のためにかうした田舍に奉公までするまでになつた身の上話をした時には、普通の多くの客の上つ面な同情とは違つて、『矢張、さうした悲しい歷史を一つづゝ持つてるんだね……。何うも、さういふことでもなくつちや、東北からこんなところまで來る筈がないと思つた。』かう染染した調子で言つて、『やつぱり、惚れたものがさういふ目を見るんだね……。男にしても、女にしても……。』客自身にも思ひ當る節があるやうにした。

暫し考へるやうにしてゐたが、

『それで、便りはあるのかね、旦那から？』

『一度ありましたけども、矢張失敗してゐるもんですから、迎へにも來られないでゐるんでせう。』

『でも……』

『一體男ッて薄情なもんですからね。』

かう言つてお光は笑つた。

『何がさ？』

『何がつて、お奢りよ。』

『馬鹿々々しい……』

『だツて、お前さんだつて、イヤぢやないぢやないか？』

『好い加減なことをお言ひでないよ。かう見えても、私には、山の旦那があるのよ。』（お前さんとは違ふよ。）といふ語氣を見せてお園は言つた。

『そんなにむきにならなくつたツて好いぢやないか。』

『だつてさ。』

『むきになるだけ、ほの字だよ。』

お光はわるくはしやいで、笑ひながら、ばた〳〵と向うに駈けて行つた。

それにしても、何をする旦那だらうとお園は思つた。（かうしたさびしい田舍に、一週間も滯在すると言ふのは、何か理由がなくてはならない。河川の方に用事のある人かも知れない。それとも新たに敷設する汽車の方の人かしら……）かうも思ひながらも、何となくそれが、その客の來たことが、自分の運命に何等かの見えない連絡をしてゐるのではないかといふやうな氣がした。

を伴れに來て吳れたのならば、何んなに嬉しいだらう。)など〻思つた。あの時、此方から辯解してやつた手紙の返事はまだ來てゐなかつた。

『離れの方を借りられるんだね？』

『え、え、いつでも明いてるんですもの。』

『此方でも好いけれども、隣りに客でも來て騷がれては困るからね……。その代り、宴會でもあつている時はいつでも明けるから。』

『長くゐらつしやるの？』

かうお園が訊くと、

『長くつて、さう長くもないけれど、一週間世話にならうと思つてやつて來たんだよ。靜かに物を考へたり何かするには好い處だからね。』

『ぢや、さう言つて、離座敷の方にしませうか。』

『まア、あとで好い……。今、すぐでなくつて好い。まア、少し休んで、午飯でもすましてからで好い。』

此方に來て、

『長くゐるんだとさ。……あの旦那……。』

『そら、私の言ふ通りだらう？』

二十三

やがて土手を下りて、野菜畠を突切つて此方にやつて來たその客を『入らつしやいまし、』と言つて女中達は迎へた。

『またやつて來たよ。』

などと客は言つて莞爾して、お園の導くまゝに、此前案内された庭に面した室へと通つた。

『よくやつて來たらう。本當だつたらう、噓ぢやなかつたらう？』

『今、そこで、お光ちやんと一緒に見てたんですよ。何うも、旦那らしいつて――』

『さうかえ？　見てたのかえ？　H町からSの渡しまで車で來て、川を渡つてから歩いて來たが、土手の上の西風の寒さと言つたら、顏が向けられない位だつた。』

『さうでしたらうね、生憎な西風ですもの。西風が吹くと、それや外は寒いんですから。』

そこに逸早くお光が大きな臺十能に一杯火を入れて來たのに、客は手や顏を當てながら、

『そのかはり、山の雪は綺麗だつた……。丸で銀か何かのやうに、ピカピカ光つて見えるんだから……。』

『寒いですね。山の雪は――』お園は（これが自分の旦那で、あの山の雪の中から、金を持つて自分

否、そればかりではなかつた。その日は一夜泊つて行きたいらしく、『用さへないなら、今夜一晩是非泊つて行くんだがな。』などと、名殘惜しさうにして、待たせた車に乘つて、皆なに送られて出て行つた。待つてゐた車夫にも、『晝飯に一本つけてやつて呉れ給へ。しかし、一本だけにして置いてくれ給へ。餘り醉つぱらはれて車が輓けなくなつても困るから。』などゝ言つて、膳の上に猪口を一つ載せさせた。

歸つたあとで、お光に、

『好い旦那ね、さつぱりしてゐるのね。矢張東京でなくつては駄目ね、田舍ではとてもあゝした氣分の旦那はないわね。』

かう言ふと、お光も點頭いて、

『前橋の銀行のAさんといふ人にそつくりよ。あの人よりはでつぷり肥つてゐるけれども……。だから、私入つて來た時、てつきりAさんだと思つた――』

『何をしてゐる人だらう?』

『さアね、ちよつとわからないね。矢張銀行か會社あたりの人ぢやないかしら。』

それきりその客の噂はしなかつたけれど、お園の胸には、をり〳〵その姿や言葉や氣分などが浮んで來て、それから自分の旦那のことを思ひ、あの客のやうにして、旦那が迎へに來て呉れゝば好いと思つたりした。昨日も四目垣にさびしい夕日のさし添ふのを見てふとその客のことを思ひ出してゐた。

も、深い理解があるやうに感じられた。お園は無論、自分の身の上話などはしなかつたけれども、また僅か一時間ばかりの對座では、さう打解けて話をする暇もなかつたけれども、何となく氣の置けない人のやうな氣がした。客は大島の襲ねに揃の羽織を着て、派手な羽二重の長胴着を袖口の間から、チラホラ見せてゐるやうな人だつた。

それに、年恰好が丁度山の旦那位で、その話振りにも何處か似通つたやうな氣分があつて、早口な、何でも物事を早くきめて了ふやうな、さつぱりしたところと、笑ふ時、顏を少し上に向けて、あはゝといかにもやさしげに笑ふさまとは似てゐるといふ程ではないにしても、同じ年輩に共通した一種のなつかしい類似を持つてゐた。何をしてゐる人かしら？　役所勤めをしてゐる人ではなし、さうかと言つて商人ではなし、銀行員らしいところがあるにはあつても、何うもさうとは點頭けないところがあるし、客に馴れたお園にもちよつとそれを判斷することは出來なかつた。

しかしその時にも、このあたりの川や、山の雪や、または旅舍の靜かなさまは、十分にその客に氣に入つてはゐたらしく、『これは好い、これは好いところだ……。生中、つまらぬ溫泉場などよりも却つて此處の方が好い。十日ほど來てゐたいな。その中、ひとつ出かけて來よう。』などゝ言つて、滯在の費用や、一日いくらで賄つてもらへるかといふことや、郵便や交通の便不便や、その他いろ〳〵なことを詳しくかの女に訊いた。お園はわざ〳〵店に行つて、主人に室のことや滯在費のことを訊いてやつたりした。

暫くしてその客は土手から下りて來たが、下りる時、餘りに急な勾配を飛び下りたので、下駄の齒を拔いて了つたと言つて、それを拾つて持つて來て、自分で入れさうにするのを、お園が取つて深切に踏石で叩いて入れてやつたりした。客は『好いな、何とも言へないな、山の雪と、川の眺めは――』など〻口を極めて褒めた。『こんなところにこんな好いところがあるとは思はなかつた。』など〻言つた。否、それればかりではなかつた。お園のすらりとした、脊の高い、色の白い、取なしの素直なのにも、川魚料理の旨いのにも、寒鳩の小鍋にも、すべて氣に入つたらしく、段々話してゐる中に、お園のいくらか訛のある言葉から、『あてて見ようか、君は何處だか？　此處等ぢやないね。東北だらう。會津、福島、でなければもう少し遠く仙臺、それより先ぢやない。』かう圖星を中てたやうな觀察をした。それからしてお園にはなつかしかつた。

二十二

その時いろ〳〵な話をしたといふほどではなかつたけれど、かの女のゐた溫泉宿にも泊つたことがあると言ふし、その東北地方のことも詳しく知つてるるし、かの女の生れた會津のことなども何彼と話が出て、『それなのに、何うしてこんな田舍に來たんだえ？　矢張、男のために苦勞をしてゐるんだね？』など〻笑ひながらその客は言つた。お園の眼には、その客はかなり苦勞人らしく映つた。色戀のことに

『さうらしいのねえ。』

かう言つたお園はいくらか胸が騷ぐやうな氣がした。其客を再びこの旅舍に引寄せたのは、川の眺望、山の雪の眺望、または日當りの好い世離れた旅舍ばかりではなく、かの女も與つて力があるやうな氣がした。それは今から十日ほど前であつた。丁度お園が此處に來て漸く新年の宴會を二つ三つすまして、ほつと呼吸をついた頃のある日の午頃であつた。その客は車を門のところで下りてそして此方に入つて來た。お園はその時襷がけで井戸流しのところで菜か何かを洗つてゐたが、『いらつしやい、』と言つて、そして手を前垂で拭き乍ら出て迎へた。一目見た時から旦那らしい好い旦那だと思つた。顏や扮裝にも此處等あたりでは見ることの出來ない客だと思つた。

丁度お園の番だつたので、客の選ぶまゝに、中の日當りの好い四疊半に案内して、そこで一時間ほど晝飯の相手をした。『好いところだな、こんなところとは思はなかつた。』などゝも言へば、『何しろ、暖かで日當りが好くつて好い。』などゝも言つた。午飯の支度のまだ出來ない中に、下駄を穿いて出かけるから、何處に行くのかと思つたら、『川を見て來るんだ。』と言つて四目垣の小さな扉から、野菜畠に沿つて、急いで前の土手に駈け上つた。見てゐると、その姿は彼方へ行つたり、此方に來たり、または川に面して立つて後姿を見せたりして、山の雪やら川やらを熱心に眺めてゐるらしかつた。お園はその時旦那のことを胸に浮べたことを覺えてゐる。旦那のゐるあの山の雪を見てゐるなどと思つたのをも覺えてゐる。

『ちよつと、ちよつと。』

かう室の中にゐるお園を呼んで、

『この間の人ぢやないかしら？』

『この間の人ツて？』

『そら、私が前橋の銀行の旦那に肖てゐると言つた――』

お園はそれを聞くと、急に傷事を止して此方へと立つて來た。

『どれさ？』

『そら、今、土手から、此方へ下りて來ようとする？』

『さうね、さうらしいね。』

『さうだよ、さうだよ。』

『だつて、あの方、東京の人だもの。さう度々やつて來る筈がないよ。』

『だつて似てるもの。外套だツて、帽子だツてそつくりぢやないか……。さうだよ、さうだよ。』

段々近附いて來るのを見て、

『さうかしら？』

『さうだ……あの旦那だ。』

たりした。戶外には西風が吹き始めたらしく、庭のあたりで、木の葉や紙屑の散らばる音がガサゴソときこえた。

お園はいろ〳〵なことを思ひ出して、輕いしかし辛さうな溜息などをついたりなどしてゐたが、それも一時の時計をきいたゞけで、二時も三時も知らずに、いつか靜かに眠つたらしく、お光がソッと障子を明けて戾つて來たのも、夢現に知つてはゐたが、しかもすぐまた眠つて了つて、今度眼の覺めた時には、隱居がもう雨戶を明けてゐた。

お園は急いで起きて着物を着て店へと行つた。

竈の下に出來たオキを十能に入れて、早起きの旅客の枕元へそれを持つて行つたり、廊下の此方の隅にある手水に使ふ湯のテツパウの火の加減を見たりしてゐる中にお光は漸く眠さうな眼をして起きて來た。しかし、お園は何も言はなかつた。お園は唯ぢつとお光の顏をめづらしさうに見詰めた。

箒と掃塵を持つて、二階に掃除に上つて行つた時には、とつつきの室に、Fは夜着を頭からかぶつたまゝまだ熟睡してゐた。

二十一

西風の寒く吹く日であつた。お光は日當りの緣側に立つて、土手の方を見てゐたが、

今日は客が多く、忙しかつたので、疲れたと見えるなどと思ひながら、お園もやがて眠つて行つたが、それから何の位經つたか、十分經つたか、二十分經つたか知らないが、ふとある音に眼を覺したお園は、傍に今まで熟睡してゐるとばかり思つてゐたお光が、ソッと靜かに半身を起し、少し考へてあたりを見廻し、お園が熟睡してゐるのに安心したといふ風にして夜着を元のやうにそつとかけて、もう一度此方を見て、後の障子を音のしないやうに靜かに明けたが、思ひ附いたといふやうにまた二三歩戻つて來て、今度は障子の隅に置いてある臺ランプをフッと吹き消した。で、あたりは闇になつたが、それでも店の方のランプの餘光が微かに此方まで來てゐるので、お光の黑い姿がソッと障子を閉めて廊下に出て行くのがそれと見えた。

『何處に行くんだらう？』

かうお園は思つたが、それと同時に、二階に滯在してゐるFのことが急に頭に上つて來た。

お園は默つてその氣勢に耳を傾けた。果して想像した通りであつた。お光は障子を傳ふやうにして、靜かに階段のある處までたどりついたらしかつたが、そこの板敷のギイギイ鳴るのを氣にするやうにして、やがてこつそり階段を上つて行く輕い足音がした。

お園は半ば起き返つた身を再び元のまゝに蒲團の上に橫へたが、そのためにすつかり目は覺めて了つて、暫くは再び眠ることが出來なかつた。お園は旦那のことを思ひ出して、體中が赫とあつくなつて來

であるものではあるが、此處は一層さうした空氣が濃やかであるやうにお園には段々飮み込めて來た。國で散々男で苦勞して來たといふお光にさへ矢張男があるらしく、それと思つて見れば、二階の屬吏の年の若いFとさへさうした關係があるかも知れないやうに見えた。お園は旦那に對する戀心がさうした空氣の中に深く埋められて行くやうなさびしい氣がした。

二十

お饒舌をしながら、仕舞湯に長い間浸つて、お園が出て來たのはもうかれこれ十二時過であつた。店では誰も彼も寢て了つて、縱横に敷かれた蒲團の上には、高く吊されたランプの五分心の半ば引込められたのが、薄暗くあたりをぼんやりと照した。

好い心持に湯に暖まつた體には一日立働いた疲勞が出て、赤くのぼせ上つた顏を手で押へたりして着物も着ずに、恍惚としてゐると、あとから出て來たお光は、『何してるのよ。もうお寢な……。湯ざめがするよ。』かう言つて、自分から先に六疊の夜着の中に入つて行つた。

暫くしてから、お園も此方に來て、寢巻に着替へて、冷めたい床の中に入つたが、その時はもうお光は顏を向うに向けて、いつもする習慣になつてゐる話もせずに、微かな呼吸を規則正しく刻んで、早くも眠つて了つたやうに見えた。

お園は不思議さうに、また深く考へるやうにして、暫し默つてゐたが、『私なんかにはとてもそんなことは出來さうもない。』

『私だつて、今はさう思ふけれども、年を取ると、さうなるのかも知れないのねえ。』

『それであの婆さん、子供があるの？』

『ことのお爺さんの種ぢやないけれど、今年四十になる立派な息子がこの近在にゐて、いつまでもそんなことをせずに歸つて來いツて言ふんださうだけども、矢張、道樂で、あゝして箱でも持つて歩くのが面白いんだとさ。』

『へえ。』

かうお園は言はずにはゐられなかつた。

お園は次第にA町の空氣や、そこに住んでゐる人達のことを知るやうになつて行つた。成ほど一時は榮えた町であつたといふことは、種々な昔の歡樂の跡がさういふ風に殘つてゐるのでもそれと想像された。雜貨店の上さんがいやに意氣だと思つて見ると、それは元K町で藝者をしてゐてそこに旦那に圍はれてゐるものであるといふことがわかつたり、通りから曲つて行つたところに、しやれた構への家があると思つたら、それはT町の物持の愛妾の家で、三日おき位には旦那が車でやつて來るといふ噂を耳にしたりした。表面は何處でも靜かで何事もないやうに見えてゐながら、底は存外男と女の色の濃い世界

『藝者も屹度したことがあるのかも知れないよ。三味線は旨いよ。それにね、猶ほ面白いのは、宅のコレが一度大騷ぎをして、親類なんか不承知だッたのもきかずに、上さんにしたことがあるんだとさ。』
『コレッて？』
『お爺さんさ。』
『まア……。』
『それもね、一年位一緒にゐたさうだけども、矢張いけなくつて、出て行つて了つたんださうだけども……。今でも、その時の話なんかしてることがあるよ。』
『隱居さんと？』
『隱居ともしてるけども、隱居のお上さんと話してゐることが多いよ。もう、あゝなると、色戀のことなんか何でもなくなると見えるのね。夢か何かのやうになつて了ふのね。屹度――』
『さうかねえ、まア……。私なんかには、とてもそんなことは考へられないけれども。』
『可笑しなもんだね。』
『それで、お爺さんなんかも、何とも思つてゐないのかしら？』
『何とも思つてるやしないよ。あはゝなんて笑つて話してゐることがあるよ。』
『さうかねえ！』

側には、近所の雜木林から伐り出した粗朶が一杯に山のやうに積まれてあつて、をり〳〵傳馬が一二艘そこに寄つて來ては、船頭と船頭の聲とが、それを一生懸命に舟の中に運んだ。その下流五六間を隔てて、碧い寒い水の中に全く沈み果てたやうになつて、その旅舍の生洲舟は繫がれてあつた。小僧はざるとたもとを傍に置いて、持つて來た鍵でその舟の錠前を明けた。やがて大きな鯉や鯰や鰻がそのたもの中に躍つてすくはれた。

十九

ある夜、その靜枝の箱を持つて、六十五六にもなる婆さんが頓狂な聲を立てゝ入つて來たが、用を濟ますと、暫し店の火鉢のところに坐つて、主人や隱居の上さんを相手にいろ〳〵と世間話をして行つた。あとでお光は言つた。

『箱屋の婆さん見て？』

『あゝ。』

『あの婆さん、今でこそあんなだけども、昔は別品で鳴らしたんだとさ。此町でも評判な女だつたんだとさ。』

『あの婆さんが？』かう言つてお園は驚くやうにして、『藝者でもしたことがあるの？』

枝さんの方ぢや、あのSさんに惚れてるんだから。』
『ぢや、旦那の來ないやうな時に來るんだね。』
『さうだらう、屹度……。』
『罪ね。』
『だつて、靜枝さんだつて、その位のことはなくつちや――。旦那ツて言ふのはもうお爺さんだもの。』
『でもね、』かう言つたが、『あの人何處から來るの？』
『川を渡つて二里ほどあるM町から來るのよ。靜枝さんがK町に出てる頃からの色だつたのを、それを、今の旦那が此處に伴れて來て置くやうにしたのよ。あの人にだつて金はあるんだけども……』
『さう――』
丁度、客がやつて來たので、番に當つてゐるお光は話を中途でよして、『入らつしやい、』と言つてばたばたと向うに行つた。お園は猶ほもひとりで土手の方を眺めた。と、此處に來た三日目の朝、始めて小僧と一緒にその土手に登つて、思ひもかけない大きな美しいT川を見たことを思ひ出した。またその土手の上から、平野の三面を繞る山の雪が銀のやうに閃々と眩ゆく日に光つて見えたのを思ひ出した。T町の停車場の前の工場の煤烟からかけて、S町のある位置、つゞいてかの女の旦那が鑛脈をさがしに行つてゐるA山群の深い細かい襞が半ば以上雪に埋れてゐるのを指し示したことを思ひ出した。土手の向う

『そら、歸つて行くぢやないか、Ｓさんが、そら……。』
かう言つて、更に聲を張上げて、
『Ｓさん！』
と大きく呼んで見て、
『憎いね。知らん顏をして行くよ。きまりがわるいんだよ。』
更に大きく、
『Ｓさん！』
と、今度はきこえて、ちよつと此方を振返つて、またすた〳〵と土手の上を歩いて行つた。それは色變りの外套を着た中折の焦茶の帽子をかぶつた若い男であつた。
『誰さ？　あれ？』
『知らないの？　靜枝さんのＳさんぢやないか。』
『靜枝ッてこの間來た藝者？』
『さうさ……。』
『あの人、旦那があるんぢやないの？』
『さうさ……。ちやんとこの裏に家を借りて、世話をしてゐて吳れる旦那があるんだよ。ところが靜

『何うせ、薄情なものだよ、男は――。捨てるとなると、平氣で捨てゝ了ふんだからね。この位なら、もつと先に、此方から捨てゝやれば好かつた。』

『何うしたのさ……』見ると涙がこぼれさうになつてゐるので、お光はあやしむやうにしてお園を見た。お園は默つて、長い廊下に雜巾を當てゝ行つた。四目垣の外では、此處の養子が日雇取と一緒になつて、絲を引張つて、桑苗を栽ゑてゐるのがそれとはつきり見えた。

十八

日當りの好いその長い廊下で見てゐると、その前の大きな堤防の上を種々な人達が通つて行つた。額髮を手拭で卷いて朝早くから日當りをさがして歩く子守の群、毎朝川を渡つて河川の工事場につとめに行く脊廣姿の若い技手、小學校の先生、かと思ふと、桑苗の束を三つも四つも脊負つて、面白い恰好をして、自轉車を走らせて行く近在の百姓、時には長い路を西風に寒さうに吹かれて、町から町へとさまよつて歩く旅藝人の群なども、土手を通ると近いといふので、其上を通つて行くのなどが見えた。

ある時、お光はお園に指さした。

『そら、今、歸る……。』

『誰が？』

これが待ちに待つた手紙？　かう思ふと電報に電報を重ねて打つてやつたその返事すらよこさなかつたことも、自分が捨てられて邪魔にされてゐたといふことも、S町の老夫婦が自分に素氣なかつたのはがした。流石に手紙の終りの方には、やさしい言葉が書き列ねてあつて、いづれそのうち機會を見て迎へ旦那がさういふ心であつたからであるといふことも、何も彼も一つ一つはつきりわかつて來たやうな氣に行くとは書いてあつたけれども、またそれがかの女の心をいくらかは繫ぐやうな情緒を起させたけれども、それと知つたなら、すぐにも迎へに來なければならないやうな熱い心のそこに燃えてゐないのがかの女には非常に物足らなかつた。それも皆な山の中にあの女が新たに出來た爲めだとお園は思つた。お園は手紙を帶の間に狹んで、そのまゝやりかけた拭掃除を始めた。雜巾を絞るバケツの湯の中にをりをり淚が雜つて落ちた。

其處にやつて來たお光は、

『迎へに來るつて？』

『………』

『お見せな、手紙を？』

『見せたつて、しやうがないよ。其の中、來るとさ。』

『その中ツて、何時なのさ？』

『待つてゐた人？』

半ば問ふやうに、半ばからかふやうにして、お光は笑ひながら、今、店で受取つたばかりの一通の手紙をお園に渡した。

果してそれは待ちに待つた旦那からの手紙であつた。『さうでせう、待つた人からでせう。』お光は猶ほ追懸けてこんなことを言つたが、こんなことには頓着せずに、お園はそのまゝ此方に來て、離座敷の縁側の處で、後姿を此方に見せて、そして呼吸をはずませるやうにしてその手紙の封を切つた。

旦那は頭からかの女の國を出たことを叱つてよこした。また勝手にさうした行爲に出たことを叱つてよこした。かれが事業に失敗して何うにもかうにも出來ないのはかの女も知つてゐる筈である。東京でも身を躱してゐなければならないのは知つてゐる筈である。それなのに、宅に電報を打つたり何かして、ちつとも此方のことは思つて呉れない。お前は勝手でさういふことをしてゐる。さういふ積りなら、此方にも亦此方の考へがある……。總てが、かうした調子で、田舍の旅舍などに身を沈めたことを、見捨て難い罪過でも犯したやうに、または此方が好きでさうした處に入つて行つたやうに書いてよこした。

お園は默つてそれを見てゐたが、その手紙の文句のかげにかくれてゐるいろ〳〵の事情、山の中に新たに出來た女、その爲め離れ氣味になつてゐる旦那の心、その心を押しかくしてわざと此方がわるいやうに責めて來た言葉、さうしたことが渦のやうにお園の頭に簇つて集つて來た。

も、隱居の人の好い莞爾した顏にも、親類の娘ッ子の働くには働いてもいやに底意地のわるいやうなところのあるのにも、娘の養子のやさしい弱々しい氣風にも、二階の郡役所の屬吏のKがいやにかの女にからみ附いて來るのにも、何にも彼にも馴れて來てはゐるけれども、それ等はすべてかの女の今まで經て來た生活や境遇とは丸で變つた緣のないやうなものに思はれて爲方がなかつた。何處を見渡しても、國で見たり聞いだり、また逢つたり離れたりしたやうななつかしいもの、なつかしい人達もなかつた。

朝毎に白く寒く置き渡す霜、井戸流しに冷めたく凍つたまゝに殘された靑い菜、四目垣の下に黃ろくめぐみ始めた水仙や福壽草、裏の精米所から終日響いて來る臼や杵の地響きするやうな轟き、くつきりと晴れた冷い空氣、さうした中に、戀の痛手を負つたかの女が、ひとりぽつかりとさびしく浮べて置かれてあるやうな氣がした。

十七

『お園さん、手紙！』

廊下のところでかうお光が手を振つて聲を立てた。丁度その時、お園は襷がけになつて、朝日の當る離座敷の緣側の拭掃除をしてゐたが、それを聞くと、そのまゝに雜巾をそこに放つたまゝにして、急いで此方へとやつて來た。

だ。その頃は旦那の眼を忍んで嫦曳の歡樂を重ねたこともあつた。またある時は、それが旦那に知れて、旦那はそれを荒立てなかつたけれど、溫泉宿の上さんにひどく叱られたこともあつた。お園はその頃旦那に味はせた苦惱が、今は的確に自分の身の上に酬つて來てゐるのををり〳〵考へた。つゞいて子供を懷妊した頃から、旦那の情が次第に身に染みて忘れられなくなつて來たことを思つた。(あの兒さへ生きてゐて吳れたら)(旦那が失敗して此方の山に來るやうにさへならなかつたら)かうしたことが繰返して考へられた。

しかし、かうした悲觀ばかりではなしに、旦那の身の上、運命、事業の失敗から押して、それと言ふのも、今は東京にゐてさへ身を躱してゐなければならないやうに旦那がなつてゐるためだといふ風にも考へられないこともなかつた。從つて山の中にゐる女に對する嫉妬は單に空しい影の樣なもので、或ひはいくらかなりとも、その失敗を恢復したならば、旦那は決して、此身をこのまゝ捨てきりに捨てゝ了ふやうなことはないなどゝ强ひて自ら慰めることなどもあつた。

時にはまた、かうしたさびしい田舍が、田舍の旅舍が、前に長く續いた大きな川の堤防が、または野菜畠の霜が、世離れた境遇が、かの女の戀心を埋めて了ふところのやうにも思はれて、堪らなくさびしい悲しい氣もした。段々さうした旅舍の人達の生活にも眤み、よく酒を飮みに來る周圍の旦那衆の空氣にも浸り、朋輩のお光の此處にやつて來た戀物語にも同情し、上さんの機嫌の好し惡しの細かい氣分に

しかしお園はさびしかつた。來た日の夜に、暇をぬすんでちよつと手短かに此處に來たことを書いて旦那にあてゝ手紙は出して置いたが、とてももう旦那は自分には戾つて來さうもないやうな氣がして、涙はひとり寢の冷たい夜着の襟をぬらした。

十六

旦那に對する戀心は絕えずお園の體に絡み附き纏はり着いた。何とか言つて來さうなものと思つてその便りを待つ心と、とてももう旦那は自分に戾つては來ないといふ心と、山の中にゐる色の生白い女に對する嫉妬とが、常にやつて來てはかの女を惱ました。時にはかの女はぼんやりして廊下の日當りの處に立つてゐたり、流し元で物を洗ふ手をとゞめてそれとなしに考へてゐたり、客の前で銚子を持つてお酌をしながらも、心は其方の方に行つてゐたりした。旦那に綜らずに勝手に自分の運命の路を辿つて此處にやつて來てから、一層その戀心が辛く重荷になつて來るのをお園は感じた。時には、何うしても此まゝ旦那は捨てゝ了はれないやうな氣がした。今頃は山の中で、かの女のことなどは忘れて、その女といちやついて戯れてゐるなどゝ想像すると、赫と體中が火のやうにあつくなつて、居ても立つてもゐられないやうな焦躁を覺えた。

と思ふと、旦那に强ひて圍はれた頃にまだ切れずにゐた男のことなどが、をり〳〵かの女の胸に浮ん

持つて來て、それを午前の日影の暖かにさし添ふその井戸流しで丹念に洗つてゐるさまがくつきりとあたりに際立つて見えてゐたりした。時には主人が、『もう、鰻も、鯉もねえな。一つ出して來なけれやなんねえ……。』こんなことを言つて、ざるとたまとを持つて、前の大きな堤防を越して、河岸の方へと出かけた。そこには生洲舟があるのであつた。

鴨や雁は滅多に持つて來なかつたけれども、其附近の松林や雜木林の中でよく獲れる寒鳩は、よく村の獵師達が打つては持つて來た。來た翌日にも、主人や隱居が店先でそれを値切つて買つてゐるのをお園は見た。『鳩なんかは、昔はこんなに珍重しなかつたんだがな……。何うもしやうがねえ。鳥が少くなつちやつたで……。』隱居はこんなことを言つて昔を憶ふやうにした。

お光の言ふやうに、客はさう大して多くはやつて來なかつた。泊り客の方はそれでも夜になつてからかなりに多く集まつて來たが、飲客は來た日には三組か四組しかなかつた。それに、少くとも色白のお園の姿は、此處等にはめづらしいものとして客の眼に映つたらしく、『えらい別品さんが來たね。』などゝいふ聲をそこでも此處でもお園は耳にした。

二階には、郡役所のあるT町から出張して來てゐる耕地整理のための屬吏が二三人ほど滯在してゐたが、さういふ人達にも、新に來たお園の姿は目に立つて美しく見えるらしかつた。お園は彼方からも此方からも、めづらしさうにして自分を見てゐる眼に出會つた。

月をするので、町に買物に出かけて來るものとてもなく、朝の霜が白く小注連に置いてゐるばかりで、さびしく年は暮れて行つて來た。

隱居の上さんが若いので、それを主人の上さんと間違へたり、またその上さんが召使ひに雜つて、身裝も構はずせつせと働いてゐるので、來たてには、知らずにぞんざいな言葉をかけて、お光に注意されて、『まアさう、あの方が旦那のお上さんなの？』と言つたりしたが、次第にさうした空氣にも馴れて、旅舍の人達の生活にも段々はつきりと浸つて行くやうになつて來た。

臺所の一隅にある二つ並んだ大きな竈、その傍の大和障子をあけて外へ出ると、そこにはポンプ仕懸けの井戸があつて、それを押す度に、綺麗な水が、瀧津瀨の樣に手桶やら流しやらに亂れ落ちた。午前の十時頃には、いつもきまつて、風呂の水を汲むことになつてゐるので、そこから竹の樋を長くわたして、そこを通つて客間のある長い廊下に面した庭の方へ行くには、何うしてもその下をくゞつて行かなければならないやうにして、女中達が代る代るせつせとポンプを押すのであつたが、來た翌日からは、お園は襷がけになつて、赤い腰卷を見せ、色の白いすらりとした姿をあたりに見せて、お光や親類の娘つ子と一緒になつて、そこでポンプを押した。竹の樋からは、水が漲るやうに風呂場の中にあふれ落ちた。

かと思ふと、小さな丸髷を結つた隱居の上さんが、籠と庖丁とを持つて野菜畑から霜にしもげた菜を

『お前さん、この近所？』

『いゝえ、私は沼田……。』

『沼田ツて、聞いたやうだけども……、遠いところなの？』

『なアに、一日あれや行ける處だよ。』

段々室のさまや家の樣子などもお園には飲み込めて來た。長い日當りの好い廊下に面してあつさりとした庭があり、その庭の向うに四目垣があり、そのまた向うに野菜畑があつて、それを隔てゝ大きな高い堤防らしいものが長く續いて見られた。離れ座敷は奧に一つ、野菜畑に添つて一つあつて、客が其處に來ると、女中は踏石づたひに膳や何かを其處に運んで行くやうになつてゐた。お園はお光に訊いた。

『あれは土手？　あの向うには何があるの？』

『あの向うは川だよ。大きな川だよ。』

『さう？　川なの？』

お園は始めて知つたといふやうにして明るく日影の當つたその堤防の方を眺めた。

十五

田舍は大晦日もさびしく、町では松竹を立てたり注連飾をするけれども、近在は多くは月おくれの正

ら、隱居は隱居、上さんは上さん、召使は召使、養子は養子といふ風にはつきりと映つて來た。かの女がいろいろに挨拶したり何かしてゐる傍を、十八九位の赤い襷をかけた女中がじろ〳〵横眼で見ながら通つて行つたりした。

車夫は自分が口入れをしたものだけに、何彼と中に入つて挨拶したり、お園の爲めにその身の上話の一部を話したり、『本當に、此處の衆は、皆ないゝ人ばかりだから、安心して、堅く勤めなさい。』と言つたり、後には將來一緒に働く筈のその女中のお光に引き合せたりした。

『俺が家はすぐ通りを右に曲つたところだで、親元のつもりで、用があつたら何でも言つてきさつせい。』と深切に言つたりして、そして空車を曳きながら歸つて行つた。

店から大きな階梯の下を通つて客の室の方に出て行かうとするところに、障子などのところ〴〵破れた、疊もさう大して新しくない六疊の一間があつたが、そこはお光や旅舍の遠い親類に當る十五になる娘ッ子などのゐるところで、客もなく用事もない時には、養子をした此家の娘なども交つて裁縫をしたり何かするやうな一間であつたが、お光に敎へられて、お園はその押入の中にその持つて來た信玄袋を入れたりなどした。

『正月になれや少しや忙しいだらうけれども、今ぢやそんなに客はねえよ。』

かうその女中のお光は、矢張いくらか訛のある言葉で言つた。

車はそのさびしい町の通りを少し行つてそして右へ曲つた。

十四

草の枯れた大きな堤防のやうなものが眼に映つた。續いて家並の外れにさう大して立派でない二階屋と、その入口の大和障子と、松の綠の靡いてゐる古い門に軒燈の出てゐるのとが映つた。そしてその門には新しい年を迎へるための松竹の注連飾が既に立てられてゐるのが映つた。

その門のところまでは行かずにそこで梶棒を下した車夫は、汗をも拭かずに、其まゝ大和障子を明けて入つて行つた。と、女の顏やら男の顏やら、上さんらしい人や、その隱居だと一目でわかる肥つた莞爾した人やら、めづらしさうに此方を見てゐる小僧やら、上框のところに置いてある自轉車やら、野菜の一杯入れてある大きな籠やら、客を迎へるための眞鍮の火鉢やら、壁にかけてある三越の美人の古い廣告のビラやらが、一緒になつてごた〴〵とお園の眼に映つた。そしてその入口の左の方には、棚と板の間と釜とを持つた廣い厨がそれと指さゝれて、鮪の半身の吊してある向うに湯氣が白く颺つてゐるのが覗かれた。

そのごた〴〵した中から、やがて主人の顏があらはれた。お園はその顏をのみたよりにするやうにしてやがて全く知らない旅舍の人達の中に入つて行つたが、次第にその一緒にごた〴〵とした人達の中か

『姐さんなんかも、地道に堅くやるだよ。さうすれやA町は好いところだで……。』

次第に松原は開けて、ひろ〴〵としたさびしい野があらはれて來た。もうA町も近くなつて來てゐるのがそれとお園にも知れた。村落の所在を示したこんもりした杜。その中に一本際立つて高い樹があつて、鳶が二三羽のんきさうに舞つてゐるのが見えた。

『もう、ぢきね?』

『もう、あそこに高い樹が見えべい。あそこの傍に竹藪があらアな。あそこを出ると、もう町の入口だ……』

段々その竹藪は近寄つて來た。赤い腰卷を見せた田舍娘の二人づれが、車上のかの女を振返つて見て行つたり、小學校の先生らしい脊廣姿が自轉車を走らせてつ行たりしたが、やがて町の入口らしい人家がぽつ〳〵その前にあらはれ出した。

お園の眼にはやがてさびしいさびしいA町が映つた。成程T町やS町とは比べものにならない、これでは町と言ふよりも大きな村といふ方が好いやうな、藁葺と瓦屋根との交錯した、ところ〴〵に齒の拔けたやうに野菜畑や空地などのある、さうかと思ふと、大きな塀を取り廻した田舍の金持の邸宅らしい家のあつたりする町が……。お園はさびしいと悲しい心持が簇々と胸を塞ぐやうに集つて來るのを感じた。

なゆるめるやうにして、『でも、皆な百姓相手でしやうがねえのさ。』
『お上さんは何んな人？』
『いゝ上さんだ……。名代の働き者だアな。あそこぢや隱居夫婦に旦那夫婦に、それに今年の春、總領の娘つ子に養子を取つたで、三夫婦揃つてむつまじく暮してるゐ家だでな。もとはな、町は船附でな、御維新前なんかには、江戸に行くには皆そこから川舟で下つて行つたで、賑かな處だつたんだな。N屋はその時分からある舊い家だアな。今の隱居なんか、それは通人で、酸いも甘いも何も彼も呑み込んでゐるやうな人だアな。若い時は芝居の囃し方をして、あつちこつちを打つて廻つて歩いたさうだが、太鼓なんか實に旨かつたさうだ。三味線でも何でも上手なもんだ。今でも、何うかすると、若いものと一緒に唄ふが、聲も節も旨いもんだ。』
『いくつ位になるの？　その隱居さんは？』
『七十二三だんべ。それから思ふと、今の旦那はまア堅い方でな。これはまたしつかりしてらア。』
『車屋さん、昔からA町のものなの？』
『なアに、このちよつと先の在のものだよ。中年にいろ〳〵なことをしてすつちやつてな。もとはそれでも田地の一二町はあつたんだがな。何うもしやうがねえんさ……。でも、A町に來てから、皆なに可愛がられてな。今ぢやそんなに苦勞もなしに、かうして何うやら彼うやらしてるだ。』少し走りながら、

て來たと思ふと、路は次第にその村の中に入つて行つて、矮びた大根の繩につらねて干されてあるくづ屋の軒、（たばこ）と書いた赤い小さな板の看板が出てゐるばかりで、ぴつしやりと大和障子の閉められてあるやうな店、鐘が一つさびしさうに吊されてある半鐘臺、朝日の日當りに二三人子供の出て遊んでゐる村のお宮、それが盡きると、再びまた前のと同じやうな美しい日影のさし透つた松原が長く長く續いた。

十三

その松原の中を近路をして行くやうなところを通つたり、それから潤々とした麥畑の方へ出て行つたり、遠い路を朝早く小學校に通ふ子供の群に逢つたりして、次第に車はA町の方へと近づいて行つた。

『町には茶屋は何軒あるの？』

かうお園はまた車夫に聲をかけた。

『大きな茶屋はまア、N屋一軒だアな。他にT屋といふのに、松澤といふのがあるけれど、だるま屋だでな。』

『そのだるまは餘程ゐるの？』

『だるまは隨分ゐるな……。あの町にしては多すぎる位ゐるな。十五六人もゐべいかな。』いくらか足

證人になつて貰つた。その時にも、もしも旦那が來てゐるのではないか。此處に寄つて山の中に行つたのではないか。かう疑つて、注意していろ〳〵あたりを見たりしたが、矢張さうした樣子は何處にも見出されなかつた。『まア、しやうがねえ。そんなことをして、あとでSさんに何とか言はれるかも知れねえけども。』かう言ひながら、老主人は澁々ながら判を捺して呉れた。

『旦那が私のことをまだ少しでも思つてゐて下さるんなら、かうして私が困つて奉公に出たことをよく言つて下さい。決して勝手で、さういふ眞似をしたんぢやないんですから。』かう言ひ置いて出て來たことを思ひ出した。

今日はもう暮も押し詰つた二十九日であつた。それにしても、國を出てから他鄕に行き詰つた身の上が、何うにもならずに、かうして悲しい奉公の身となつたことを思はずにはゐられなかつた。いつかの女はかうしたところにかうした思ひを抱いてさびしく車に搖られて行くと想像したであらうか。またかうして浮草のやうに他鄕から他鄕へとさまよつて行く身にならうと想像したであらうか。その前途には何がかの女を待つてゐるであらうか。幸福かそれとも不幸か、それとも益々漂浪の深みにと落ちて行く運命か。それとも亦行き違ひで旦那は知らずにゐて、折角そこに行つてまだ幾日も經たないのに、金を持つて迎ひにひよつくりやつて來るやうなことはありはしないか。

松原が盡きて、朝の烟の低く靡いた、ところ〴〵に藁葺屋根の點綴されたさびしい村落があらはれ

うそれがやつて來なかつた時のさびしさと悲しさとを思つた。かの女は竟に旦那から離れて、自分ひとりで自分の運命の道に上つて來たことを思つた。

『隨分、さびしいところね。』

かうお園は車夫に聲をかけた。

『一體、そこまで何里あるの？』

『三里にはたつぷりだんべ。』

『その間に、町はないの？』

『村はあるが、町はねえ。』

『T町の半分位はあるの？　それでも……。』

『とても、半分なんかねえ。三つ一つも何うだか……。何しろ、戶數が二百軒位しかねえんだて。』

『さう？』

かう言つてお園は默つた。風はない日であつたけれども、車の走るにつれて、朝の寒氣は刺すやうに顏やら手足やらに染みた。コオトを着てるない身の、フロラアショオルを何遍も首に卷きつけるやうにしても、それでも寒さに體が震へた。

昨日、A町のN屋の旦那がやつて來た。そして一緖にS町に行つて、荒物屋の老夫婦に無理に賴んで

などゝ車夫は訊いたりした。

暫くして、なた豆のやうに叩き潰した烟管を煙草入に藏ひながら、

『これは好かつた。N屋でも、旦那が喜ぶだんべ。好いところに來合せた……。なあに、相談つて言つたッてわけはねえ……。すぐまとまらア。何しろ、なくつて困つてゐるんだから。ぢや、姐さん、好いね。話がきまれや、明日、俺が一人でか、それとも旦那を伴れてかして迎へに來るア。好かつた、好かつた……。』かう言つて車夫は喜んで出て行つた。お園はさびしいやうな氣がしてそのあとを見送つた。

十二

その翌々日の朝早く、お園を載せた車は、T町からA町に通ずるさびしい街道をしづかに輾つて行つた。

兩側の松林には、朝日が晴れやかにさし透つて、霜に伏した草藪や萱原にはをり〳〵小鳥の靜かに枯葉を踏む氣勢がした。並んで立つた林の途切れた間からは、雪に光る遠い山々がさながらパノラマでも見るやうに美しく見渡された。

お園は昨夜までも、今朝までも旦那からの電報なり手紙なりの來るのを待つたことを思つた。たうと

かうまた上さんは言つた。

『それぢやお世話をして頂くことにしませうよ。』かうお園は言つたが、何となく淋しい悲しい氣がして、いよ〳〵旦那と離れて、一歩別に踏み出すといふことが大きく胸を塞ぐやうにした。しかし、今になつては、何うすることも出來なかつた。

『で、お金は貸して异れるでせうか、少しは――』

いくらか躊躇したやうに、顏を少し赤く染めてお園が言ふと、

『それや、話せや少しは貸して异れべいとも……大抵は女中はさうだでな。』

かう車夫は言つた。

『澤山もいらないけれども……。此處の勘定もしなけれやならないし、少しは小遣だつて持つてゐなけれやならないから。』

『さうどこぢやねえ……』車夫はかう言つて、更に上さんに向つて、『好かんべな。』

『お前さんが、それで好いなら、別に苦情はありやうはないよ。』

かう上さんはお園に言つた。

『ぢや、さうしませうよ。證人はS町の人でも、誰でも立つて貰ひますから。』

『ぢや、いくらべい、借りていいんだな。』

『百姓ばかりぢやねえ。不思議なところだよ、A町は――。あつちこつちから好い客が遊びに來るやうな處だアなア、お上さん。K町からも川を渡つて來るし、I町からも來るし、あそこは何でもかくれて遊ぶには好いところかも知れねえて……。だから、藝者なんかでも、あそこに行きや大騷ぎをされる。そら、この町に出てゐた田舍廻りの女優なんかをしたことのある、そら、何ツて言つたつけな、さうさう、松葉、あの姐さんなんかでも、ちやんとした旦那があつて、それでゐて、あそこでは賣れるんだからな……。色氣ぬきで賣れるんだからな。それに、町の旦那衆方もさびしいんだんべ。宴會でもしやうといふ時に、そのお酌でもさせやうツて言ふものが、だるまぢやしやうがねえんで、堅けれや堅いほど大騷ぎをされる處だアな。この姐さんなんかだツて、堅くせえしてゐれや、好いことが屹度うんとあらア。この町や、足利や桐生あたりぢやちよつとねえことがあらア、なア、お上さん。』

『それはさうだね。容色さへよけれや、珍らしがられるところだね。何しろ、妾新道なんて言ふところがあつて、彼方此方の旦那衆が女を圍つておくやうなところだから。』

『それに、そんなことを言つちや何だが、そのN屋つて言ふのは、川魚料理が旨いんで名代な家だな。ちよつと、この町なんかには、あそこ位旨くつて廉い料理を食はせる家はありやしねえ。何しろ、隱居も、今の旦那も、若い時は、研究に、あちこちの料理を食つて歩いたやうな人だでな。』

『家としては申分はないよ。』

お上さん。誰だつて知つてるア。だからあそこにや、昔から長くつとめてゐるやうな女中が多いや。それや、心配はねえ。そんなところには、この俺だつて世話はしやしねえから……。』

『N屋なら、家には不足はないけれどね。』

かう傍から上さんも言つて、『唯だ、さびしいのはさびしいね。此處からくらべると、ぐつと田舍だから。』

『でも、お上さん、A町は好いところだぜ……。田舍は田舍だけども、世間離れがしてゐて、閑ひものなんかがゐるには好いところなんだから……。存外、あれで面白いところだよ。』

『さう言へばそれもさうさね。』

意味あり相に上さんは笑つた。

十一

『客筋は？』

お園はつゞいてきいた。

『來るお客けえ。さア、何ウッてきまつたこともねえが、居まはりの旦那衆がおもだんべい。』

『おもに、百姓？』

『だつて、しやうがないんですもの……。もう東京からの便りも當てにはなりやしないし、年の暮ではあるし、いつまでもかうしてお世話になつてゐるわけにや行かないし、兎に角一度さうでもしなければしやうがないんですもの。そこはこの町のやうなところですの？』

『此處とはぐつと小さな、もつと田舍の町だけども、却つて靜かで好いにや好いかも知れないがね。』

『では、お世話をして戴かうかしら？　證人には、S町の人でも、また國の溫泉場の上さんでも何でも立てますから。』

『さアね。……お前さんが、さう決心がついたら、好いかも知れないね。』

上さんはかう言つて、車夫にその話をした。

車夫はじろ〳〵とお園を見てゐたが、上さんの話を聞き終ると、『さうけえ。お前さんが行くつて言ふんけえ。溫泉場にゐて、客扱ひにも馴れてゐるんだね？　それはよかんべ。』

『しかし……』お園にはちよつとその旅舍のことが氣になつたといふやうに、『しかし、だるま屋ぢやないんですねえ？』

『だるま屋？』正直な車夫は意想外な質問といふやうな顏の表情をして、『だるま屋？　そんなところにや、俺だツて世話はしねえ。なア、お上さん。A町のN屋ツて言へや、こゝらでも通つてゐるやうな堅い家だアな。それに上さんだツて、旦那だツて、また隱居だツて、皆な好い人ばかりだアな。なア、

方に入つて來たが、
『賴まれて來たんだが、お上さん、好い女中が一人なかんべか。』
『何處だえ？』
『N屋だがな。此間から一人しかゐねえんで、困つてゐるんだが、今日もそんなことを言つてゐたがな……。』
『さうねえ。』
『暮と年始を控へてゐるでな、何うしても早く欲しいつて言ふんだがな。』
『いくらもありさうなもんだがね。A町に……。』
『ところが、だめだよ。それも、何でも御座れなら、いくらもあんべいが、矢張、家風に合はねえぢやいけねえもんだで……。』
『それはさうだねえ。』
其時、丁度外から入つて來たお園は、それに耳を留めて、
『何處です、それは？』
『A町つて、これから三里ほど田舍だけどもね、』お園のことが丁度上さんの胸にも浮んで來てゐたので、『さうさね。お前さん、本當に茶屋奉公する氣なの？』

三味線にも何にも合はない唄を平氣で唄つてゐる肥つた金の有りさうなその客のうしろ姿をもお園は見た。

それとなく女中に訊いて見たところでは、そのあたりでは、茶屋の女中で一面だるまであるものが多く、それもわづかの金で客の意に從ふものが多いらしく、さういふ奉公なら、いくらでも右から左へと口が澤山にあるけれども、堅い女中をさがすやうな旅館は滅多にないらしかつた。それに、此處等あたりでは、大抵の旅館は、料理屋を兼業にしてゐて、藝妓は皆な褄を取つて平氣で入つて行つた。

『それでも此處の家なんかまだ堅い方なんですよ。』

などと女中は言つた。

年の暮の既に眼の前に迫つて來てゐるのもお園にはある焦燥と不安とを感じさせた。若し旦那がひよつくりやつて來はしないか、そして今までの心配がすつかり跡方もなく拭はれて了ひはしないかといふやうな氣が絕えずして、お園は下りの汽車の來る度に、煤煙をひろい野や松原に靡かせてやつて來る長い列車を何遍となく眺めた。

十

A町から客を乘せて來た四十先の車夫は、賃錢を貰つてから、汗を拭きながら、上さんのゐる帳場の

のあるまで落附いてゐる方が好いといふ口吻で上さんも主人も話した。かうした稼業をしてゐる人達だけに、お園の身の上話もすぐ眞面目に飲み込んで呉れて、『困つた時はしやうがないよ。矢張お互ひつこだもの……。旅でさういふ眼に逢ふ位困ることはないもんだからね。』など〻上さんはやさしく言つた。懷に入つて來た窮鳥ではあり、それがまた美しい何うにでも役に立つ毛色を持つた小鳥であるからではあらうけれど……。

『それやね、家にゐて貰つても好いにや好いんだけども、今ぢや、手も十分あるし、もつと好いところもあるかも知れないからね。』など〻上さんは言つた。

お園は自分の生ひ立つた土地とは違つて、スラングにも一種の調子があり、性急にやつて來て、性急に酒を飲んで、そして濁聲に唄をうたふ人達を見た。また女は女で、しやきしやきと尻をからげて、廊下の拭き掃除をやつたり、臺所を働いたり、泊り客に向つて、立つたま〻早口に物を言つたりするやうな人達を見た。『色氣なんかありやしないよ。もう食氣だよ。』さうした女達は、こんなことをづかづかと客の前で平氣で言つた。一夜は隣りの一間に藝者が二人も三人も來て、機屋の旦那らしい中年の客を取卷いて、ガチヤガチヤ三味線を彈いたり、酒に醉つたり、唄をうたつたりしたが、二階のはしごのところで微醉機嫌になつて、褄をほらほらさせて、『お上さんそんなことは厭だよ。』など〻捨臺辭で上つて來るその藝者の一人にお園はぱつたりすれ違つたりした。

一日はまた經つて行つた。廊下を掃除する女中などにもいくらか懇意に口をきくやうになつた。入口のすぐ傍になつてゐる廣い厨や大きな釜から白く騰る湯氣や、そこらに散らばされてある膳椀や、赤い襷をした女中や、廊下の突當りにある大きな鏡や、上さんとは大分年が違ふらしい半禿げた主人や、さうした中に、かの女は何うなつて行くかわからない自分の運命を眺めた。冬の日の寒い街道を馬や車や運送馬車などがガタガタと通つて行つた。丁度市日で町は賑やかであつた。

九

其處でお園は三日暮した。

半ばは旦那からの便りを待ち、半ばは何うしても新しい道の方へ出て行かなければならない身の運命を覺悟するやうな心持で、或は燃えたり、或は沈んだり、時には却つて浮々するやうなこともあつて、わざわざM屋まで出かけて行つて、その上さんに奉公口を頼んで見たりなどしたが、旦那からの便りは竟に竟にやつて來なかつた。

お園は後には、旅舍の上さんの處に行つて、かうしたハメになつた身の一伍一什を話したりなどした。幸ひに旅舍の人達は思つたより深切で、拂ふべき旅籠賃すら十分に持つてゐないかの女をも、別に厄介扱ひにはせず、待てるだけ待つなら待つが好いし、いざ何うしても茶屋奉公に出るといふなら、その口

ふみ且つ惑はれたが、今はそれが疑ひなき事實としてあらはれて來た。何うにもならないからと言つても、何うにかしなければならないハメになつて了つた。

お園は信玄袋の中にある着類を頭に浮べた。金がいよ〳〵足りなければ、しやうがないから、譯を話して着物でも何でも質に置くより外爲方がないと思つた。お園は漸く決心した。恥辱を忍んで、旅舍の上さんにその話をした。次手に、何處か茶屋奉公をする好い口はないかとも訊いて見た。

『そんなことをしないでも、何とか東京から便りがありさうなもんですがね。』

かう旅舍の上さんはお園の顏を見ながら言つた。

『でも來るか來ないか知れない便をいつまでも、待つてゐるわけにも行きませんから。』

『堅氣の茶屋奉公は、ちよつと、此處等では面倒で……』かう言つたが、お園が身の生立やら、大きな溫泉場の旅舍に長年つとめてゐたことやら、そこの上さんのことやら何彼を話してきかせると、いくらか上さんも信用して來たらしく、後には、『まア、もう少し便りを待つて御覽なさい。』などゝ深切に言つて吳れた。

お園は滿更ではない自分の容色が、また茶屋奉公をした經驗があるといふことが、かの女のためにある新しい道を開く有力なたつきとなることを思つた。その話を上さんに打明けてから、かの女はいくらか重荷が輕くなつたやうな氣がした。

風、硝子戶のガタガタと動く音や、屋根の庇にひゆうひゆう鳴る響や、そこはかとなく枯葉が轉がつて行く氣勢などに雜つて、辛い悲しい心や、腹立しい思ひや、戀心や、これからの生活に對する不安や、何うにでもなるやうになれと言つたやうな自暴氣味に近い氣持や、時々赫と燃えるやうに起つて來る嫉妬や、さうしたものが渦のやうに亂れ合つて、眠つたと思つては覺め、覺めたと思つては眠つたといふ風に幾度か轉輾反側して、曉近く疲れてぐつすり眠つたが、再び目が覺めた時には、もうちやんと雨戶が明いて、日が明るく室內にさし込んで、火鉢にはもう火がちやんと來てゐた。あれほど凄じく吹き荒れた風もいつかすつかり落ちて、裏の田圃には、霜が白く置き渡してゐるのがひろびろと靜かに見渡された。

氣は氣でなかつたけれど、しかし待つて見るより他爲方がなかつた。

朝飯をすませてから、かの女はもう一度電報を旦那に宛てゝ打つた。しかしそれでもまだ安心が出來ないので、二番の汽車で荷物を旅舍に置いたまゝにして、S町の老夫婦の店にまた出かけて行つて見たけれども、しかし矢張旦那の消息は遂に得ることは出來ずに、お園はそこから引返して來た。

旅舍——その停車場前の旅舍は、今はかの女の運命の窮まる場所としてその前にあらはれて來た。『留守に何にも來ませんでしたか。』『歸つて來るとすぐ、かうお園は女中に訊いて見たが、電報も手紙も何も來てゐなかつた。旦那はいよいよかの女を捨てた。十に八九まで。かうしたことになりはしないかと危

そこにあるのではなかつたか。また旦那の細君に辛い思ひをさせたその嫉妬が同じく其處に渦を卷いてゐるのではなかつたか。かう思ふと、其處にも此處にも、好い加減にやつたことが一つ一つ蘇つて來て、今のかの女を執念く取卷いて來るやうな氣がした。

山を越してやつて來る羽二重屋さん達の豪奢な大氣な風俗、近いＦ市から自働車でやつて來る仲買商の賑やかな豪遊、女でも男でも、言葉から氣分まで何も彼も同じなつかしい國氣質で、ヵと言へばツウと通るその溫泉場の空氣に比べて、この知らない平野の人達の生活は、いかにかの女に疎々しく且つ冷めたくは感じられなかつたか。かの女は今更のやうに、夜の更けゆくにつれて賑やかになつて行く大湯のさまなどを繰返した。

ふと廊下を通つて襖をあけた女中は、一通の電報を持つて來た。お園は急いで受取つて封を截つたが、それは旦那の乾兒に當る人の方からやつて來たもので、『ユクヘヲサガシテシラセル』と書いてあつた。矢張、結句何うにもならないやうな電報であつた。しかしこれで見ると、山の中に旦那の行つてゐないのは事實らしく思へた。

八

旦那の方へ打つた電報の返事は竟にやつて來ずに、夜は朝になつて行つた。終夜吹き荒れた平野の西

ともあつたにも拘らず、そこらに見るやうなひどい女達の群にも入らずに、何方かと言へば堅い女中の一人としてそこに勤めてゐることが出來たが、しかし、かの女にもいろ〳〵戀の經驗はなかつたか。男心の浮氣で、厭きつぽくつて、それで女を自由に玩弄具にしないでは置かないやうな悲しい經驗、またはいくら此方から情を見せて惚れて見ても、何うにもならない樣な辛い經驗、厭で厭でしやうがないやうな男に執念く追廻されて金も何もいらなくなつて遁げ廻つた怖しい經驗、ちよつと惚れて一夜身を任せてそしてまたすぐ互ひに忘れて了つたやうな經驗、さうした經驗はかなりに多く身に纏はり絡み附いてはゐなかつたか。旦那を持つやうになつてからも、始めの中はその情だけでは物足らなくて、ひそかにかくれて男に逢ふやうなことはなかつたか。またはかの女のために身を持ちくづして朝鮮くだりまで落ちて行つた男はなかつたか。かの女は長年一緒につとめてゐたお廣といふ體を男に貸すことなどは何とも思つてゐない女中の言葉などを今でもをり〳〵は思ひ出した。『お錢にさへなれば好いんだよ、生中、人情を持つたりするからいけないんだよ。』かうそのお廣は常に言つた。

しかしその人情は、細かに、絶えず、一のものなら一、二のものなら二、三のものなら三といふ風にかの女の心に、體に蘇つて來てはゐなかつたか。酬いられて來てはゐなかつたか。かういふ風に旦那の情が忘れられなくなつたのも、又かうして知らぬ他郷に突詰めた心を抱いて悲しく彷徨ふやうな運命に陷つたのも、皆さうした細い心と體の反射乃至報酬から來てゐるのではなかつたか。捨てた男の恨みが

それを斷つた。

『では御ゆつくり。』

扉を閉めて女中は出て行つた。

ふと氣がつくと、戶外には此處等に名物の西風が急に吹き出したとおぼしく、庭の木の葉のガサコソする音や、雨戶や硝子戶のガタガタと動く音が凄じく且つさびしくあたりに聞えた。

七

十五までは大きな城跡と、四面を遶る山巒と、雪の深い人家の庇の長い街道とを持つた町に何も知らずに生ひ立つたが、それから他鄕に出なければならなくなつたかの女は、次第に種々な人情の厚薄や、表裏や、欺騙や、淫蕩の空氣などに浸るやうになつたことを思ひ出した。それから二十四の今日まで、考へて見ると隨分種々なことがあつた。三味線や鼓の音の夜中まで聞える溫泉場、褄を取つて町の通りを急ぎ足に歩いて行く藝者達、無邪氣な娘心につい知らずに扉をあけて入つて行つた狹い浴槽の中にゆくりなく見た二人の若い男女、いやらしい話ばかりをわざと面白がつてするやうな中年の按摩、かの女のゐた大きな溫泉宿の主人にも、妾が隱して圍つてあつて、始終上さんが嫉妬をやいてゐるやうな空氣の中に娘から女になつたが、上さんに可愛がられてゐた爲めに、內々には客を取つたこともあり、男に惚れたこ

氣がして、いくらかかの女はほつとした。今の場合、專念に旦那に縋る方が本當だと思つたが、さう思ふと、あつい淚がほろ〳〵とかの女の頰を傳つて流れた。

『これほど私が思つてゐるのに……』

お園はあとからあとへと淚が盡きずに溢れて來るのを禁じ得なかつた。脇に人目がないのを幸ひにお園は泣いて泣いて泣きつくした。

しかしその悲哀もやがて過ぎた。かの女は自分の顏を廊下のところにある大きな鏡に映して見たりしてゐたが、今度は手拭を取つて、女中に案內して貰つて、奧の梯子段の下のところにある風呂場へと行つた。狹い風呂場には、白い湯氣がぼうつと籠つて、冷たい體をその中に浸けると、燒けた鐵砲に湯の染みる音がジイとした。

扉をあけて、さつきの肥つた女中が、

『流しませうか。』

と言つて半身をそこに現はした。

『好いですよ。』

『でも……。』

『好いの、好いのよ。』流して貰へばいくらかやらなければならないといふ腹もあつて、お園は强ひて

その突當りの室に案内されて、『なるやうになれ』とは思つたが、しかもじつとして落付いてゐることは出來なかつた。かの女はその欅の木の蔭の料理屋でそこの上さんからもお鶴の話をきいたことを思ひ出した。その上さんが莞爾したお世辭の好い女であつたことを思ひ出した。餘程その時その上さんの情に縋つて、奉公口をさがして貰はうかと思つたことを思ひ出した。しかし勝手にさういふことをしては、假令此方に反抗の念は燃えるやうにあつたとしても旦那に對して濟まないといふ心が口まで出かゝつたその言葉を押へさせた。

旅舍に來ると、すぐに、かの女は電報用紙を女中から貰つて、『スグコイ』といふ文句に旅舍の名を入れて、そして旦那にあてゝ打つて貰つた。しかしことに寄ると、旦那の細君がそれを中途で奪つて了ふといふ懸念があつたので、旦那の常に行くその乾兒見たいな男の許へも、わかるやうに、またすぐそれを旦那に知らせて貰ふやうに、金のなくなるのを氣にしながら、かなり長い電報を打つた。

兎に角此處で待たう。かうお園は決心した。勝手に茶屋奉公などをするのはいかにしても旦那に對してよくない。あてつけがましい仕打である。捨てられたものなら、邪魔物に此身が本當になつてゐるなら、それならそれで、ちやんと一度逢つて、綺麗に話をつけて別れるなら別れる。それが本當である、自分はまだ旦那のものである。旦那から暇が出たわけではない……。かう思ふと、それが未練であると、一方にはそれを打消す考へが熾んに起つては來るけれども、しかも力強いある捉へどころを得たやうな

『え？』

『先月の初め頃までゐましたが、暇を貰つて行きましたよ。』

お園はがつかりして了つた。困つた顔をして立つてゐたが、

『國に歸つたんでせうか。それとも、此の近所にゐるんでせうか。』

『さア。』

と言つてその女中はまたお園の顏を見て、『つい、此間まで足利の方にゐるツて言ひましたけども……何うしましたかね。』間を置いて、『しかし國には歸つたんぢやありますまいよ。此處を出るにもわけがあつたんですから。』女中はかう言つて家によく來る客と出來て、その客に伴れ出されて行つたらしい話をした。

お園は困つて了つた。漂浪の運命はいよ〳〵かの女に近寄つて來た。

六

お園はその夜自分を停車場前の旅舍の一間に發見した。

それはかなり大きい新築の旅舍で、そこには瘦せた神經性の顏をした上さんや肥つてでく〳〵した女中などがゐた。思ひ餘つて止むを得ず一夜はそこに過すべく決心したかの女は、廊下から二階に上つて

て、白粉の斑になつた、寒さうな顏をした若い妓が二人づれで何か笑ひながら向うからやつて來た。お園は立止つて訊くと、

『そこですよ。』

かう言つて一人の丸顏の方がその向うの二階屋の裏口の見えてゐる料理屋を指して敎へて、そしてそのまゝ素氣なく笑聲をつゞけて行つた。

却つて裏口の方が都合が好いと思つたお園は、そのまゝ靜かに入つて行つたが、風呂場の細い赤い煙突から煙が眞直に颺つてゐるのと、物干棹に女の腰卷や足袋が干してあるのと、狹い野菜畑に淡く夕日が殘つてさしてゐるのとの他は、しんとしてあたりには誰の姿も見えなかつた。案内を乞ふにも何だか氣がさしたといふ風にして、お園は暫しそこに躊躇してゐたが、やがてひよつくりそこに矢張女中の一人らしい銀杏返の女が出て來た。

『あの……。』

と言つてお園は近寄つて行つた。

『あの、此方に、お鶴さんッていふ人がゐる筈ですが……。』

女中はじろ〱と捜すやうにお園の方を見て、

『お鶴さん？　もう、あの人はとうに居りませんよ。』

S町からT町に來る間には、岸の淡竹の藪に日影の淋しくさしてゐる川があつたり、次第に濶くなつた平野を取卷いた山巒の雪のきら〱と光り輝くのが遠く指さゝれたりした。お園は今朝出て來た山の雪の方を振返つて眺めた。

やがてお園は田舍にしては大きい停車場を發見した。ペンキ塗りの新しい工場の煙突から盛に煤煙の渦卷き上るのを發見した。停車場から出て行つた眞直な路が、兩側に新開らしい人家を並べて、町の大通りへと突當つてゐるのを發見した。信玄袋を停車場に一時預けにして來たかの女は、いくらか身輕になつた氣分で、一町ほど此方まで歩いて來たが、そこに、店先に出てゐる牛乳屋の男がゐたので、M屋といふ料理屋の位置を訊いた。

『M屋？　それは此方から行く方が近い。』

かう言つて、その男は丁寧に裏道の方を敎へて奥れた。

大きな寺の山門の前のやうな處を通つてお園は右に折れて行つた。冬の日影はもうかぎろひつゝあつた。淡竹の藪、小さな菜の畑、その向うに大きく高く聳えてゐる欅の大樹、M屋は丁度その欅の樹のかげになつてゐると言ふので、それを目當てに歩いて行くと、藝者屋の軒を並べてゐるやうな新道があつ

て見よう。』と決心した。

『なアに何うにかなる……。いくら思ひ詰めたところでしやうがない。止むを得なければ、お鶴さんに賴んで奉公口をさがして貰ふばかりだ。……旦那だッて、さうしたら、ちつとは可哀相だと思つて哭れるだらう。』かう思つてお園は帶の間から小さな財布を出してそして勘定をした。

お園は腹の中で、自分の持つてゐる金を數へて見た。かの女は十圓と少しばかりの金を懷にして國を出て來たのであつたが、汽車賃と、昨日山の中で泊つた旅籠賃と、その他にも何の彼のと言つてつかつてゐるので、もう八九圓しか殘つてゐないのをかの女は思つた。此處等で、猶ほ一日二日、三日とぐづぐづして旅舍どまりをして居れば、もう國に歸つて行く旅費もなくなつて了ふのである。勿論、かの女にしては、國に歸つて行く考へはないのではあるけれども……。

そんなことを思ひながら、お園はその小さな財布を靜かに帶の間にしまつて、そして出かける支度をした。

『難有う、お歸んなさい……』

かう後からかけられる賑やかな聲も、かの女に取つては、何だか悲しいやうなさびしいやうな氣がした。お園は信玄袋を抱へて、しほ〳〵として停車場の方へと行つた。

な夜を、あちこちと見物して歩いて行つたことなどが、今の辛い、さびしい、または腹立たしい不安な心と一緒になつて雜り合つた。傍の小さな硝子窓からは、いかにも停車場前らしい廣場に午後の日のさしてゐる中を、商家の番頭らしい男が自轉車を輕く走らせて行くのが指さゝれた。

此處の亭主や上さんの働いてゐる厨の大きな釜からは、蓋を明けると共に、湯氣がぱつと白く颺つた。

『お待遠さま！』

汚れた前かけをして、髮をぼさぼさせてゐる十五六の娘つ子は、かう言つてやがて出來た饂飩を二つそこに運んで來た。

空腹であるのに拘らず、種々思ひ出してぼんやりしてゐたお園は、これで漸く我に返つたといふやうにして箸を執つたけれど、しかも思ひ出せば出すほどその身の上が悲しくなつて來て、滿足にはその饂飩すら咽喉に通らないやうな氣がした。お園は半ば食ひかけた鉢を下に置いては、人に怪しまれないやうに脇を向いて、ソツと手巾で涙を拭いた。

銘仙に絲織の羽織を着て、羽二重の腹合せの帶をしめて、流行おくれのフロラアショオルをして、信玄袋を抱へて、かうして一人此處にゐるといふことがお園には堪らなく悲しくなつて來た。

『もう一度、山の中に行つて、捜して見ようか？』などゝ突詰めてお園は思つた。

しかし何うやら饂飩を食つて了つた頃には、いくらかその悲哀は過ぎ去つて、『兎に角T町までは行つ

『ぢや、また、來ますから、旦那が來たら、私が來たことをよく仰有つて下さいな、お上さん。』

『えゝ、好いともな……。年内には來るにや來る筈になつてゐるぢやでな。』

強ひて引留めもせずに、主婦はお園を送り出した。

お園は漂浪の身の辛さを染々と覺えた。しかし何うすることも出來ないので、かなりに重い信玄袋を抱へるやうにして持つて、泥濘の裏路を元の停車場の方へとやつて來て、その前のポストの中にその手紙を投函したが、上りの汽車の時間には、まだ一時間ほど間があるのをかの女は見た。急にかの女はまだ午飯をすましてゐない身の空腹を感じた。かの女は外に出てあたりを見廻したが、その向うに『うどん、そば』と大きく障子に書いてある家のあるのを見出してそのまゝ其方へと歩いて行つた。

四

註文した饂飩の出來て來る間、お園の頭には種々の光景が掠めて通つた。旦那や、大きな温泉宿や、情の深いそこの上さんや、義理に責められて始めて旦那に逢つた夜のことや、懐妊して七月のお腹をしてゐた時、ゆくりなく旦那の細君がやつて來て、厭でも應でも逢はなければならないハメになつて行つたことや、いよ／＼その細君に逢つた時の辛さや、その細君が寛容で金を澤山呉れてお腹の子を大事にせよと言つた言葉や、かと思ふと、旦那と一緒に東京に行つて、大きな旅館に泊つて、春の花の賑やか

るのでもなかつた。消息がまた絶えて來た

主婦は店が忙がしいので、碌々お園の相手になつてゐなかつた。慰めて呉れて、一日二日は泊つて行つても好いやうな口振は見せて呉れるやうなものゝ、さてその底には何處かさうはならないやうな冷いものが横はつて、或はやがて來る旦那のためにも、此處にかの女を泊めておくのは迷惑らしいやうなところもあつた。何うしてもかの女は此處から出て行かなければならなかつた。

『兎に角、私はT町へ行つて見ますよ、お上さん！』

かう言つてお園は立上つた。

『でも、一晩泊つて行つたら何うだね？ さうすれや、旦那も來るかも知れないし……。』

かう主婦は愛想よく言つた。

お園はしかし出かける支度をした。かの女はもう少し前にふとT町を思ひ出した。そこには國から來てゐるお鶴といふ女がM屋といふ茶屋に奉公してゐる筈である。

『兎に角、其處に行つて相談して見よう。さうしたら、好い智慧も貸して呉れるかも知れない。それに、T町は此處から二里しかない。汽車で一町場だ……二三日してまたやつて來るのもわけはない。』かうお園は決心したが、出かける前に、ちよつと筆と硯とを借りて、かなり時間を費して、東京の旦那に宛てて手紙を一通書いた。

かう主婦はやさしく言つて吳れた。しかし、お園はさうしては居られなかつた。お園は困つて了つた。溜息がひとり手に出て來た。

三

お園は何うすることも出來ない身の上を感じた。此處に何時までもかうしてゐるわけには行かず、さうかと言つて今更國に歸つて行くわけにも行かず、旦那のあとを追つてこのまゝ東京へとも思はぬこともなかつたけれども、捨てられてゐるかも知れない男に縋るのも腹立しいやうな氣がして、そこに坐つたまゝぢつと深く考へ込んだ。

『いざとなれば、さうするより他爲方がない。』

かう思つたお園は、國を立つて來る時の最後の決心を繰り返した。いざとなれば、茶屋奉公でも何でもする。酌婦にでも何でもなる……かう決心してかの女は國を出て來たのであつた。大きな東北の溫泉宿に十五の時から勤めてゐたかの女は、客扱ひには馴れ切つてゐるし、客の機嫌の取りやうも十分に知つてゐる。さうした境涯には大した苦勞もなしに入つて行くことが出來る身の上だつた。しかし、それは最後の、萬止むを得ない時の決心で、さうなるまでには、飽まで旦那の心をも探り、その話をも聞き、顏をも見た上でなければと思つてやつて來た。またさうした行詰つた境遇に陷ることを決して望んでゐ

『兎に角、もう一度寄つて聞いて見よう。』
かう思つてゐる中にも、小さい汽車は、停車場に二つも三つも寄つたり、山裾のやうなところをぐるりと廻つたりして、次第に地平線の廣く見える平野の中にあるS町の瓦甍のごた〳〵と重なつて指さゝれるあたりまで出て來た。ところどころに殘つた雪の上に、午後の明るい日は麗らかにさした。
それから一時間ほど經つた後には、お園は矢張昨日と少しも變らない停車場の柵に添つた路や、あづま下駄では拾つて歩かなければ通れないやうな泥濘の深い路の奥にある小さな店や、ごたごたと車や荷馬車の通つて行く裏街道や、小さな丸髷に結つたにこ〳〵した主婦や、日光が十分にさし込んで來ないのでそこらの物がすべてはつきりと見えないやうな暗い奥の六疊の一間や、長火鉢の周圍のきちんと片附いてゐる向うに大きな佛壇の見えてゐるやうな陰氣な空氣の中に、何うすることも出來なく行詰つたかの女を發見した。旦那は矢張今日もそこに來てはゐなかつた。またいつやつて來るといふあても得られなかつた。疑へば矢張山の中にゐたかとさへ思はれた。
『もう出て來るには來なくつてはならない用もあるんだけれども、何うしたかさ……。年内には是非出て來るだんべと思ふんだけども……。』かう慰め顏に主婦はお園に言つた。老主人は、今日は商用があつて、A町まで行つたとか言つて留守であつた。
『まア、ゆつくりして行かつせな……。折角國から出て來て、逢はねえでは行かれめいから。』

かうお園は續いて思つた。と、人の好い年寄夫婦の小商賣をしてゐるちんまりした日當りの好い店が眼の前に浮んで來た。お園は昨日もそこに寄つて旦那の消息を聞いたのである。山には旦那はまだ行つてゐないだらうといふのを、強ひて彼の女は出かけて行つたのである。その正直な年寄夫婦の言葉を信ずることが出來ないほどそれほどかの女は旦那を疑つたのである。お園は去年から今年の春にかけて、旦那に伴れられて、山の中に出懸けて行く時に、いつもきまつて其處で汽車を下りて、その年寄夫婦の店に一緒に寄つて行つたことを思ひ出した。

それは荒物などを商つてゐる小さな、庇の低い店で、旦那は昔からこの年寄夫婦を知つてゐて、――或はある物質上の力にも旦那がなつてやつてゐたことのあるやうな人達で、旦那が行くと、『Sさん、Sさん、』と言つていつもちやほやした。S町の停車場から、柵づたひに裏路を少し行つて、ごたごたした人家の間を拔けて行つたやうなところにその店はあつた。

昨日そこの年寄夫婦の言つた言葉などをお園は繰返した。『お前さんは矢張、國にぢつとしてゐる方が好くはねえかね。何しろ、Sさんは此頃失敗つゞきなのだから。』かうその老主婦が言つた言葉の中にも、自分に對する旦那のさめ心地や、薄情や、冷淡な態度やらがそれとなく窺はれるやうな氣がお園にはした。『旦那は一體、何う思つてゐるんでせう。私なんかもう邪魔物にしてゐるんでせうか。』かうお園はその老夫婦に訊いて見たりしたことを思ひ出した。

京も二三日前は大雪であつたといふ話、さうした談話が前からも後からも盡きずに聞えて來た。其間を寒さうに水洟すゝる襤褸を着た老爺などもあつた。

お園はかなりに大きい信玄袋を抱へてゐた。その中には着替が二三枚、化粧道具が二つ三つ、講談本が二三冊、外に手廻りのものと、死んだ兒の寫眞とが入つてゐた。お園は一昨日の夜、多年世話になつた大きな溫泉宿の上さんに散々意見をされた。

『お前がさうした勝手なことをするなら、もう私は知らないから、』と言はれながら、それをも振切つて出て來たことを思ひ出した。雪の積つた中を、誰にも見送られずに、ひとりぼつねんとして、あの停車場までの道を步いて來たことを思ひ出した。僅かな旅費と、旦那に對する半ばは嫉妬、半ばは戀ごゝろ、またその他には兎に角行つて見なければわからないといふ心とを抱いて……。『もう國には歸れない。』かう思つてお園は下唇を噛むやうにした。汽車は山合の小さな停車場に來てとまつた。

二

『兎に角もう一度あそこに寄つて聞いて見よう。ことに由ると、山の中には旦那はまだ來てゐなかつたことが本當で、今日あたり東京から來てゐるかも知れない。來れば屹度旦那もあそこに寄るに違ひないのだから。』

思ひ出した。あとで旦那の前で泣いて泣いて泣き盡したことを思ひ出した。

自分は好きであの旦那を持つた譯ではない。初めは厭で、厭で爲方がない位であつた。それを何の彼のと言つて、すかしたり誑したりして、かうして離れ難ない心になるまで引張つて來て置きながら、今更、捨てゝ了ふとは餘りに薄情な仕打である。と、不意に死んだ兒が思ひ出されて來た。『あれさへ生きてゐて呉れゝば、旦那だつてかうまで私から離れて行きやしまい。』涙が急にお園の胸に押し上げて來た。

お園は山から平野の方へ出て來る小さな汽車に乘つてゐた。それは平野が細長く山の中に入り込んでゐるやうなところで、夏は麻の畑の綠が行人の肩を沒するやうな土地であつたが、今は二三日前に降つた雪がところどころに、丘の襞やら、人家の屋根の裏やら、日蔭やらに殘つてゐて、いかにもさびしい冬枯の眺めであつた。川原石原の濶くあらはれた谷に流れてゐる水の瀨が見え、半ば山に凭つた寂しい町の人家が見え、更に續いて淡竹の藪に午後一時過の日影のさしてゐるのが明るく見えた。汽車はガタガタ動きながら走つた。

お園の周圍には、此處等に住む荒れた唇をした女だの、荒くれた大きな手をした男だの、口の周圍に汚いくくさの出來てゐる孫をつれた婆さんなどが、ごたごたと、貧窮と艱難と辛酸の縮圖を見るやうにして乘つてゐた。いろいろな話――そこらで出來る石灰の話、段々押詰つて不景氣な年の暮であるといふ話、東

河ぞひの春

一

『あそこにあの時ゐたんぢやないかしら？』かう思ふと、色々な疑惑が起つて、お園は頭の眩惑するやうなのを感じた。と、つゞいて汚ない山の宿屋の一間が見え、破れた襖が見え、日當りの好い暖い二階の欄干が見え、確かに旦那のものに相違ない見覺えのある鞄が見え、きら〳〵と眩く日に光る山の雪が見えた。『しかし、矢張來てゐなかつたのかも知れない。いくら薄情だつてゐてゐないといふ筈はない……。折角、わざ〳〵遠くから山の中まで逢ひに行つたのだもの、いくら捨てられた身にしても……』かうつゞいて思つたが、しかしさうばかりは言つてゐられなかつた。いろ〳〵なことがそれを裏切つた。それは旦那が失敗してかの女を十分に構つて呉れる餘地がなくなつたのも、今度のやうになつて行く原因の一つではあつたが、それよりも此方の山の中にあの色の生白い女が出來たのが、むしろその大きな原因であつた。お園はこの前やつて來た時始めてその女に逢つたことを思ひ出した。赫となつたことを

河ぞひの春

變らない戀の唄を高く空にうたつた。

目も遂に出さうもないのに斷念して、またもとの通り門前の小作に麥をつくらせることに約束した。

で、再び鋤を入れて見た小作の農夫は「いゝ地代も取上げたんべいが、何をやつたんだか、えらく堅い地所になつちやつて、あれぢや元のやうにするにや、二三年肥料でもうんと入れねえぢや駄目だ……。矢張あぶ蜂取らずだな、和尚さん。」などと言つて愚痴をこぼした。

八

一二年經つた後には、誰ももう此處が一度さういふ風に繁華な町であつたなどといふことに氣が附くものはなかつた。知つてゐるものは、益々其處が昔の一部に復歸しつゝあるのを見た。また知らないものは、此處は昔からこのまゝかうした野であつたとのみ思つた。

草は益々繁つて、殘つた路も細く、果てはその路すら半ばそれに埋めらるゝやうになつた。唯、煉瓦を燒いた竈――煙突は既にひとり手に崩れて了つた――が赤く草原の中に、ある時ある人の事業の跡を語るものゝやうに夕日にあらはれて見えてゐるばかりであつた。枕流亭ももうなかつた。

時はまた靜かに經つた。

土手の上からは矢張美しいT川の流が見えて、冬は遠山の雪が金屬のやうに閃々と輝きわたつた。春はその草路の中のさゝやかな赤い花に露が置いて、天上の星の光が夜毎に來ては接吻した。雲雀はその

は川向うのＫＭ驛の方が距離にしては近いけれども、川を渡らなければならない不便があるので、主として H 町驛の方からの交通の連絡で保つことにして、一里半には少し遠い處を、路を直したり、新たに廣告の立板を處々に立てたりして、一時ぱッとするやうな開業祝をした。H 町驛の前には、人の眼を惹くやうな美人を描いた大きな廣告板が押し立てられたりした。

しかしその結果の思はしくないことは、やがてあたりに知れ渡つた。月に五組六組では、いかに經驗のある人の經營でも、何うすることも出來ないらしかつた。二月ほどしてまたその家は閉ぢられて了つた。ほごしてＴ町へ持つて行かうなどと益田が言つてゐるといふ噂なども傳へられた。

もうその時分には、そこには、停車場も社宅も、その他の家屋も一軒も殘つてゐるものはなかつた。塵埃の腐つた上には、草が繁り、トロコの線路やロウリングホンドを取去つたあとには、唯、地が低く殘つてそれと指さゝれるばかりであつた。家々の礎の跡も何も彼もわからなくなつて了つた。すべて皆な埋もれ盡された。一時その持つてゐる土地を汽車の倉庫に使用するがために借りられて、借りられた方ですら驚くほどの高い地代を月々拂はれるのを、思ひもかけない好い報酬として喜んでゐた寺の和尙は、それもすつかり駄目になつて了つたので『それから思ふと、分福茶釜を持つた寺なんか好い。豪氣なもんだ。』などと頻りに愚痴をこぼしてゐたが、しかも、もしかひよつとかして、別莊地にでも借りるやうな東京の好奇者もあるかも知れないと思つて、一年そのまゝに寢かして放つて置いたが、さうした

り…………………………………………………。

記念すべきこの日よ。》

七

松原の中にある枕流亭の所在を示した廣告板――人の指で指さしたり何かしてあるペンキ塗に黒く字を書いたその廣告板は、あたりがさうしたルウィンになつても、猶ほ處々に半ば傾いたり、曲つたり、また場所に寄つてはすつかり倒れて地に委して了つたりしてゐたが、それでも割合に月日の經つまでそのあとを留めてゐた。その年の秋になつても、まだその板は一枚や二枚は土手の上に殘つて見られた。

勿論そこの女中や料理番はとうにゐなかつた。女將は役者と媾曳してゐたことが知れて、一時、益田と手が切れたやうになつたが――何でもその家屋を手切の代りに女が貰つて、それを女が他の經驗のある女將に貸して、秩父の長瀞のやうにあらためて經營すると言はれてゐたが、それは矢張第三者の噂で、益田と女との間は今猶ほ切れず、その家屋は益田の所有で、女は打たれたり虐まれたりして後、此頃では東京の妾宅の方につれて行つて置かれてあるといふことであつた。枕流亭では、その隅の六疊の一間だけ明けて、村の老爺がそこで自炊の留守番を長い間してゐた。

ところが、秋になつて、更に新しく別な人に由つて、矢張つれ込宿が營まれることとなつた。それに

の人生に、歴史に常にをり〳〵起り來る一大光景ならずや。否、人生の歴史とのみにはあらじ、われ等の心のシインの中にも、常に日毎に起伏し來れる大なる光景ならずとは誰か言ひ得ん。榮枯盛衰の理、否々、單に榮枯盛衰の跡として一過眼し去るには、餘りに予には生々しく且つあまりに重大なり。

予は煉瓦の竈の中を覗き見たりき。また予は停車場の寂としたる塵埃の中に彷徨したりき。また予はトロコの縱横に引殘されたる跡をさまよひたりき。此處に於ては、一本一草と雖も、予に取りて深き意味を語らざるはなかりき。否、深き人生の意味のみにあらじ、われ等の細かき心理の起伏をも示さざるものなかりき。此處に住みし人達は如何にせし。お玉や驛長やY屋の主婦やまたM屋の主人や、それ等はすべて如何にせし。更にまたそこに起りし悲喜劇はいかに。かの天下を騷がせしDとS子の情死はいかに……。予は不幸にして當時此地にあらざりしと雖も、その物語は當時いかに予に人生を暗示したりしぞや。更にまた今日のこの荒涼たるルウインは、いかに一層深き人生を暗示しつゝあるぞや。

予は一二時間そこを去ること能はざりし。予はロオマの廢址をさまよふ詩人以上なりき。奈良、ブルウジの廢墟と雖も、いかでかくのごとき生々とした印象を予の心に與へ得べきや。予は涕泗の横流し、悲哀の胸を塞ぐを留め得ず。現に今、これを記するに當りてすら、滂沱として涙流る〳〵何となれば、これ人生なればなり。人間の運命なればなり。また予もつひに赴かざるを得ざる人生の歸趣なればな

日を經た水田が青々として連つてゐるのが、次第に元の野に戻つて行くやうなさまを見せた。半ば壞しかけて梅雨に逢つたらしいM屋の二階建の旅館の片庇からは、凄じい雨が日に夜に小さな瀧津瀨のやうに亂れ落ちた。

そしてこのルウインの傍を、ルウインとも何とも思はないやうに、時間毎に汽車は沼のほとりから來て、緩い勾配にかゝつて、その荒れ果てたさまを眼下に見つゝ、斜めに雨を繪のやうに車窓にあしらひながら、いつも轟々としてT川の鐵橋へとかゝつて行つた。

六

敎員のSは、枕流亭が出來てから間もなく轉任を命ぜられて、同じ郡中ではあるが、四里ほど離れた村にやられたので、いろ〳〵な噂は耳にしながら、遂に此處にやつて來たこともなかつたが、ある日用事があつて、ふと其處を通つて見た。かれはその時の感じをその例の日記に書いたが、それは是非とも此處に引いて見なければならないやうなものであつた。

(六月――日、晴、

予は驚愕と悲哀とを抱いてそこを過ぎたりき。否、悲哀なしに、何人かこゝを過ぎ去ることを得ん。これ、單なる一光景にあらず。單なる田園の一出來事、または一消長にあらず。これ皆すべて、われ等

トロン、テイブルの中には、赤く銹びた鐵に雨水が溜つて、そこに金氣がきらきらと浮び、短かい長い草が罅隙を求めて縱横に蔓つてゐるのが佗しく覗かれた。あの大勢の群集や車掌見習達が終日忙しげに事務を執つた大きな賑やかであつた室もガランとして見透され、乘客の出口であつた柵の上の屋根は、半ば破壞されたまゝに放つてあるので、雨はそこからびしよびしよと降つて洩れた。

煉瓦を燒く竈も、今はすつかり荒廢されて了つてゐた。其處にはもう煙も立たなければ、人の住んでゐる氣勢もなく、唯、赤い半ば崩れかけた煙突が小高く恨めしげに降頻る雨の中に立つてゐるのを見るばかりであつた。否、もし人があつて其中に入つて行つたならば、更に荒凉としたそのあたりの眺めに驚かずにゐられないであらう。ところどころに散らばつた未製品の煉瓦、一かたまりになつて殘された材料の土、竈の中には雨水が一杯に滿ち溢れて、半ば燃えかけの石炭のそこらに散らばつてゐるさまは、人に竟に不成功に終つた人間の事業の悲しさを語らずにはおかぬであらう。其處にも草は既に一面に繁り合つてゐた。

でも、何うかすると、その降り頻る梅雨の中を、僅かに一條だけ殘つてゐる路を求めて、番傘にばらばらと雨の音を立てながら、土手からRの渡頭へ行く村の人達の姿などがをりをり見えた。

面瘡を病んで一夜の中に死んで行つた酌婦のゐた家のあたりは、既に全く空地になつて、壁の縱横に崩れ伏した中に、厠のあつたあたりの路がそれと殘つてゐるばかり、そこから向うには田植を終つて十數

てゐるのであつた。

『ぢや、行かうね、お常さん……』

『忘れ物はないかえ……』

『もう、何にもない積りだがね。』かうお玉は言つて、Y屋の上さんの方を向いて、『ぢや、お上さん、さやうなら。』

『さやうなら。』

運送車のがたがたと動いて行くあとから、お玉とお常のかぶつた手拭の白く動いて行くのが微かに夕暮の空氣の中に見えた。Sはあとから續いた。

五

梅雨は晴るゝ間もなく降つた。

半ば壞されたまゝに殘された家屋、腸の無殘にあらはに露出してゐる破れた壁、處々に積み上げたまゝに放つてある塵埃、人が住まなくなつてがらんと見透しになつてゐる停車場、青苔で一面に蔽はれた儘に放つてある汽車の送水機、路には何時生えるともない草が既に縁に繁つて、鐵橋を架ける時に使用したトロコの線のまだ取外されずに縦横に殘つてゐるのも半ばそれに蔽はれて了つてゐるのが見られた。丸い

日の暮れる頃には、それでもM屋ではあら方移轉の片が附いた。疊を二三枚積み重ねて、そこで握飯などをつくつて、働いてゐる人達はそれを夕飯の代りにしたが、主人は、
『それぢや、お常……お前は、お玉とあとの一臺について來い。』
『え、よう御座んす。』
で、一臺の車について先づ出かけて行つた。
そこへお玉の情人のSがひよくり顏を出した。
『おや、お前さん、來たの……？』
かう言つてお玉は莞爾した。
『Sさん、もつと早く來れば好いのに……。手傳に來るなら。』お常も笑ひながら言ふと、
『もつと早く來るつもりだつたけれど、ついおそくなつちやつた。少し手傳はうか。きまりがわるいから。』
『もう好いのよ。この車について行きさへすれや好いのよ。』
『さうか、もうそんなに早くきまつたのか？　早かつたなア。』
細々したものを山のやうに積んだ運送車の最後の一臺、それにはバケツを載せたり、ランプを壞れないやうに紙屑籠に詰めたのを動かないやうに結はへたりして、そして靜かにそこから發つて行かうとし

『本當ですよ。』

隣のＹ屋では、二三日前、既に家財をＴ町へ運んだが、それでもまだ殘つた仕事があるので、今日も上さんはそこに來て、女中を相手に何かせつせと働いてゐた。停車場前の通りはすつかり荒廢して、塵埃は積むに任せ、紙屑は飛んで散らばるに任せ、壞した家の壁は崩れて倒れるのに任せて、誰もそれを片附けるものもなかつた。軒を並べた家並は既にあら方取壞たれて、齒の拔けたやうにがらんと裏の田圃まで見通しになつて了つた。

『今日は何うしても向うに行くかね？』

上さんはかうお玉に聲をかけた。

『何うしてもすませて、向うに行くつもりですよ。もう、お別れだ……此處にも……』

『本當だねえ。お名殘が惜しいね。』

などと上さんは言つた。

この二軒に限らず、今日引越して行く家は、猶ほこの他に三四軒はあつた。折角村から此處に移つて來た土手下の溜りの車夫達の家族達も、不平を散々並べた末は、いくらそれを言つたつて仕方がないといふ風に、てんでに、車を持つて來て、そして家財をそれに載せた。午後の日影の照つた土手には、今日もさうした車が續々通つた。

運ぶと言ふので、手拭をかぶつたり、塵拂や箒を手にしたりして、せつせと其處で働いてゐるのが見えた。折角新築した大きな二階屋も、今はすつかり雨戶が閉められて、形の好い松も街道の埃にまみれてイヤに白くなつてゐるのがあたりに際立つて見えた。

お玉やお常がせつせと家財をそこに運び出すと、運送車の人足は一々それを受取つて、そしてそれを車の上へと積み上げた。簞笥、長持、戶棚、鏡臺、寢道具、次第に車は一杯になつて、それが立つて行くと、今度は別の運送車がまたそこに引寄せられて來た。

『これだけの設備をしたんだから、引越すだけでも中々大抵ではありませんな……』

ふと通りかゝつた人は、これも矢張眞黑になつて働いてゐるM屋の主人にかう聲をかけた。

『やア……、もう御難でさ。……何しろ永久築城のつもりでやつたんですからな。』

M屋の主人はかう言つて手を留めた。

『えらい騷ぎさな。』

『何うもしやうがねえ。』

『それでも、向うの家は、もう着手しましたかな。』

『いや、まア、ほんの小屋でさ。』

『誰れだつて、此處がこんなにならうとは思はねえだでな。』

競爭ぢやかなはないからな。これも優勝劣敗の眞理を表はしてゐるやうなものだね。』

『本當だ……。忽ちルウィンになつちやうんだね。色々な人達が考へたり、思つたり、泣いたり、怒つたりしたことが、すつかりあとになつて了ふんだね。ロウマや、奈良や、ブルウジだつて、これに違ひやしないね。ひよつとした動機とか、あるものゝ意志とかの下に、忽ち崩壞されて行く繁華のさまをまざ〳〵と目に見せつけられたやうな氣がするね。』

こんなことをその乘客達は話し合つた。鐵橋の上からは、その中に枕流亭の埋れたやうにしてある松原が眺められた。

四

凋落と破壞とは既に其處にあつた。早くも家屋の取崩しに取懸るものもあれば、家はそのまゝにして置いて、さつさと移住地へ移轉して行くものもあつた。もう一人としてかうしたルウィンに踏留まらうとするものもなかつた。今日も一軒取りこぼたれ、明日また一軒取壞されるといふやうにして、次第に元の荒野原にならうとしてゐた。大工の破壞する手に從つて、壁の崩れる埃は、をり〳〵白くあたりに颺つた。

ある日は、M屋の女達が、主人の指揮のもとに、取敢へずそこから家財道具をH町の停車場の假宅へ

腹の中で言つて、そしてがらんとした停車場の方へと歩いて行つた。

T町の躑躅は、今が盛りで、來る汽車も來る汽車も、それを見に出かけて行く都會の乘客で一杯であつたが、汽車がそのがらんとした停車場を掠めて、轟々としてT川の鐵橋にかゝつて行くさまが、あとに殘つた人々の眼に映つた。

去年來て知つてゐる乘客達は話し合つた。

『ホ、この停車場はなくなつたんだな……。あんなに賑やかであつたところだつたがなァ。成ほど鐵橋が出來たためだな。』

『さうだね。不思議な氣がするね。隨分、家もあつたんだがな。一時的の町ぢやなかつたやうだがな……。これは困つたものがあるだらう？』

こんなことを言つて、人の往來の少くなつた、戸の閉つた家屋などの多い、または戸を明けてゐる小料理屋の店先にさびしさうに一人ぼつねんと立つて此方を眺めてゐる酌婦などを眺めた。

汽車が鐵橋にかゝつて行く前では、

『ホ、現金なもんだな。すつかり土手もさびれちやつた……。去年なんか、あの土手の上は賑やかなもんだつたがなァ。桑畠の中に女の蝙蝠傘がつゞいて行つてゐるやうだつたがな。』かう言つて考へて、

『それに、石油エンジンが通つてゐたぢやないか……。あれなんかも何處かへ行つちやつたんだね。汽車と

かうM屋の主人が言ふと、

『だつて、無理でさ……。自墮落な眞似ばかりしてゐるんですもの……。あれぢや、とても成立たない。先代の死んだ頃にや、奴も少しはしつかりしてゐたつけが、何うもあの家ももう駄目ですな。』

とY屋は合はせた。

枕流亭の話なども出た。噂によると、妾は益田からそれを貰つて、猶ほ依然として營業をつゞけて行くか、でなければ誰かもつと東京の經驗のある料理屋か何かに讓り渡してやつて行くらしいといふことであつた。益田の話なども出た。

（もう、この裏田圃にもお別れだな。好いところだつたのに……）若いAはこんなことを思ひながら、獨り欄干に立つて、げんげの一面に咲いてゐる、またはところ〴〵耘ひ返してある水田を眺めた。湧くやうにきこえる蛙の聲、明滅して飛んで行く螢、涼しい夜風の入つて來る夏の夜などは、何んなに若いかれを慰めたか知れなかつた。かれは今度の變遷も自分の讀んだ外國の小說のシインか何ぞのやうな氣がした。

驛長は既に二三日前、家族を新しい任地の方へと送つて置いたので、家財道具ももうその社宅には殘つてゐなかつた。送別會から歸つて來ながら、かれはちよつと立留つて、錆びた沼に夕日の赤く映つてゐるのを目にしたが、（忙しくつて、碌々釣魚もやれなかつたが、沼にももうお別れだ。）こんなことを

などゝ言つた。Bがふと思ひ出したやうにKの話をして、『それにしても、Kは何うしたかさ……。あれがあそこのだるまに夢中になつて困つたけがな。』

『さう〳〵……。今ぢや何處にゐるかわからないだらう。A君知らないか？　知らない？　何うしてゐるかさ、先生。あのだるまの死んだのも知らないんだらう？　あんなに夢中になつた女がもう此世にゐないのも、まだ知らずにゐるんだよ、屹度……』

『あの女は可哀相だつた、しかし……。本當にKに惚れてゐたらしいからね。』

『何つて言つたつけな名は？』

『お袖つて言つたァね。』

『さう〳〵お袖だ……』

こんな事を言つて人達は笑つた。M屋は折角此處に出した旅館をその儘つぶして了ふのも惜しいし、T町には本店があるので必要がないから、あらためてそのまゝH町の停車場前に持つて行く權利を會社側から得てゐた。そして矢張、お常とお玉とを置くらしかつた。Y屋はT町の方へ移轉する計畫を着々實行してゐた。

煉瓦の竈は、もう烟を立てないやうな日が多かつた。政はもうとうに其處にはゐなかつた。

『失敗だな？　矢張、あそこも……。』

丁度其の頃、M屋の主人もK屋の主人もT町から此方に來てゐたので、その送別會らしいものがM屋の二階で開かれた。驛長は莞爾しながら立つて、『兎に角、こゝは面白いところでした。このまゝ元の草原になつて了ふといふこともなまじひに小さく貧しく榮えるよりは好いことだと思ひます。私は諸君のためにも、さう深く根を張らない中に、壞すにしても容易に壞すことの出來ない空氣の釀して來ない中に、銘々に元のところにお歸りになるのを結構だと思ひます。それは資本を澤山におつぎ込みになつた方も御座いませうが、それは人生にはまゝあることで、何うも致し方が御座いません。兎に角、汽車が出來たために、かうして諸君と相識り、また、停車場がなくなつたために、諸君と別れて行くといふことも意味のあることだと思ひます。それに、一番愉快だつたのは、その間を非常に活躍して、生々として暮したことです。三年の間には、隨分いろ〳〵なこともありました。中でもDとS子の情死などは世間を動かすやうな騷ぎをしたでは御座いませんか。面白かつたと思ひます。意味があつたと思ひます。これで諸君にお別れしても決して遺憾は御座いません。何うか、諸君も御健全に、またお目にかゝる時があると思ひます。』といふ演說をした。

誰も彼も隔てなく話し、快活に笑つた。Hは、お玉を捉へて、

『お玉さんと僕とが此處は一番先きだつたね。もうとうに、何うかならなければならない人が、まだかうして此處にゐるんだから不思議だね。』

時には、流石にめづらしいので、そこらの人達は老若男女を問はず、皆な土手の上に登つてそれを眺めた。

容車と貨車との混合列車を五六臺つけた汽車は、ところどころに開通の祝ひの小旗を靡かせ、汽罐車のところには大きな國旗を交叉させて、そして靜かに、新しく出來た鐵橋の上へとかゝつて行つた。白い黄い黑い煤烟はもく〳〵と簇りわたつて、やがて鐵橋をわたつて行く轟といふ音が長くT川へと轟き渡つた。

『萬歳！』

といふ叫びが、そこに集つた子供等の口ばかりから出た。

つゞいてその日の三番列車は、今度は大勢のめづらしさうな乘客の顔を列車に滿載して、そしてその鐵橋を渡つて行つた。晴れた靜かな晩春の好い日であつた。

三

その川沿ひの停車場に汽車が寄らなくなつたのは、それから猶ほ十日ほど過ぎてからであつた。驛長は東京に近いある大驛につとめる身となつた。AもHもそれと一緒に行くことになつたが、あとの四五人は或は新しく出來たKM驛に、或はT驛へと皆な好いやうに割り振られた。

とだがな。矢張、この土地より上州の方が人物があるんだな。』

などゝ言つた。若いAにも、何となくさうして滅亡して行くこの驛前の凋落が悲じく映つた。

もう其頃には、鐵橋をつくるために入込んで來た工夫や土工も大方はゐなくなり、それと共にT街道の方に開けて出來た小さなだるまやの家屋なども逸早く取毀され、女達も時期に由つて南から北に行く渡り鳥のやうに、散々にあちこちに散つて了つた。さうしたさびい悲しい空氣の中に、やがて賑やかなT川の鐵橋開通式の日は來た。

二

しかもいつの間にか、繁華の渦はT町の方へと全く移つて行つてゐた。鐵橋の開通式と言つても、此處は形ばかりで、賑かな儀式や宴會やは、T町の停車場でやることになつてゐた。

此處での重立つた人達は、M屋にしても、Y屋にしても、K屋にしても、皆な主人はT町の方へと行つて了つて、お玉やお常までも一時狩り催されて行つた。停車場には、まだそれでも人々は殘つてゐたけれども、誰も皆氣の乘らいやうな詰らなさうな顏をして事務を執つてゐた。

鐵橋にはそれでも紅白の旗が交叉せられ、酸漿提灯が晴れた日の空氣の中にくつきりと無數に飾られて、いかにも賑はしさうな光景をあたりに呈した。最初の試運轉は、午前の八時に試みられたが、その

KMの停車場、更に遠くT町に行つて見ると、今までの此處の繁華な渦が忽ち其處に移つたやうに、人は集り、犬は走り、林は伐られ、土手は崩され、誰も彼も皆な莞爾してゐるのにも拘はらず、此處では、昨日の榮華は全く一場の夢であつたといふやうに、誰も皆な元氣のない顏をして、羨ましさうに、妬ましさうに、また悲しさうにさうなつて行く土地の運命を眺めた。俄かにあたりはさびしくなつた。驛長の顏にもさびしさが見えた。

『驛長さん、まさか、川向うの小さな停車場へ行くんぢやあんめい……』

かうかれ等の一人が言ふと、

『何處にやられるかな……。何うせ、碌なところにはやられまいよ。何ならぐつと遠くの方が好いな……。それにしても、此處は面白いところだつた。』

こんなことを言つて驛長はさびしく笑つた。

Hといふ驛員は、『T町の停車場には、もうちやんときまつたものがあるんです……。何處にやられるか。餘程好いところにやつて貰はなけれや割に合はない……。此處は忙しかつたからな……。鐵橋の材料を運搬するんで、その勞力は一通りぢやなかつたからな……。うんと手當でも吳れさうなもんだな。』

と、もう一人のBは、

『此處は好い處だがな……。折角これだけ發達したものをそのまゝにして了ふといふことは惜しいこ

を見に行く人達だとて、分福茶釜は此處から行く途中にあるのであるから、いくらかは少くはなつても、好奇に此驛から下りて行く人達も多からうと思つてゐたのであるのに……。また、これからは今までのやうな熱狂的な繁華は求めることは出來なくなつても、地味な、眞面目な發達は却つて今後に於いて期せられると思つてゐたのに……。それが忽ちにして滅亡と凋落の否運に遭遇しなければならないとは誰が豫期してゐたであらうか。從つて賑かになつて好いと思つたその立派なT川の鐵橋も、今ではかれ等に恨めしく映つて見えた。かれ等は寄るとさはると、その繁華の間に儲けたことは言はずに、そこに資本を下したことなどをのみ話した。愚痴が到るところで出た。

『またもとの杢阿彌か……。しやうがねえや。』Rの渡しの船頭は、それを耳にして、こんなことを言つて笑つた。

次第にかれ等は現在よりも將來のことに頭を轉ずる方が銘々の利益であるといふことを考へ始めた。(何うもしやうがない。……それよりも、此處は思ひ切つて、T町の方で豫じめ土地の利權でも得て置く方が利口なやり方だ……。)かういふ風に誰も彼も思ひ出して來た。M屋もY屋もその他の人達も今度はさういふ方針に向つて會社に運動した。

花は咲き、草は萠え、林といふ林は新しい芽で生々した色を着け、野には糸遊のなびく間に農夫がのんきさうに田をひつくりかへしたり何かしてゐるのにも拘はらず、また川を越して新たに出來た小さな

も出懸けた。

枕流亭の畠田は、さうした群の中では、一番有力な、口の利ける、また會社側にも知人の多い方であるが、何でも、此頃、その妾の女將が長い間こつそりそこで東京の役者と媾曳してゐたのが知れて、それもそのDとS子の情死や何かで、新聞記者達が大勢入り込んで來たために知れたのださうだが、そのためこの頃では女に對して怒つて、滅多に東京から歸つて來なくなつてゐた。從つて連中の一人が逢つてその話をした時にも『何うもしやうがない。會社の方針なら、何うもそれも爲方がないぢやないか。』といふやうな何うでも好いやうな張合のない返事をした。

でも、その連中の人達は、會社の社長をわざ〳〵訪問したり、陳情書を出したり、代議士を中に立てて話をして貰つたりした。社長も、重役も、それを聞いては、多少氣の毒に思つたらしく、善後策の餘地を與へて、一時なだめてかれ等を歸したが、しかしさうかと言つて、社の鐵道の根本計畫――他日、政府に讓り渡す場合をもその中に含んだ根本計畫をそのまゝ放つて了ふことは出來なかつた。

一時人の目を驚かすやうな繁華の渦をあたりに漂はせた驛前の人達も、次第に自分等の希望の到底達せられるものでないといふことを竊かに感じ出した。歎息がそこでも此處でもつかれた。さびしい陰氣な影がその一帶の地を蔽つた。

T町まで汽車が通じたところで、此處には眺望の好いT川があり、水鳥の澤山下りる沼があり、躑躅

渡しがないだけに向うの方が便利だし、何でも會社では、川をわたつて十五六町行つたところに停車場を置く方針らしい。それもごく小さな驛で、此處のやうに大きなものにはしないらしい。T町の停車場を大きくして、行く行くは、S町の方へ支線を出す計畫らしいから。』

『本當かな。えらい騷ぎだぞ……、それは。』

俄に思ひもかけない恐慌が天から湧いて來たといふやうにして、其處に住んでゐる人達は騷ぎ始めた。勿論鐵橋が出來たら、此處も多少はさびれるだらうとは、誰にも豫想されてゐないことはなかつたけれども、しかもその鐵橋の完成が、そのまゝかれ等にさうした滅亡乃至凋落の否運の手とならうとは思はなかつた。誰も彼も皆な狼狽した。動搖した。何うなることかと思つた。

『此處に、停車場を置いて吳れさへすれや、それで好いんだ。何も物好きに、向う側の人もゐない桑畑の中になんか新規に立てなくつたつて、此まゝにして吳れれや好いんだ。さうすれば、此處は此處でこのまゝに發達して行くんだから。』

重立つた人達は處々に寄り集つて、かう言つて、その計畫の撤回されることを會社側に運動した。M屋の主人も、Y屋の主人も出かけた。煉瓦の竈の工場の主人は、一時いくらか好運であつたのを、自分からその生活ゝ自墮落にして、妾狂ひなどをして、折角儲けた金をなくして了つたので、今はあら方駄目になつて了つてゐるけれども、それでも矢張その連中の中に顏をつらねた。土手の溜りの車夫の統領

ゐたが、それもやがては薄暮に近く、柔かな光線の中に次第に埋められて行くのを人々は見た。
をり〳〵帆がその下を通つて往來した。

その三

一

『え、それや大變だ……』
『うそだらう？　そんなことはないだらう。こゝに停車場がなくなるなんてそんなことがあつてたまるものか。』
『でも、本當らしいよ。』
『誰がさう言つた……』
『驛長などももう知つてゐるらしいよ。何でも此處はH町との距離も近いし、A町、K町に行くにも

三十

虎はやがて捕へられたが、遂にその罪跡を蔽ふことは出來ず、W町の監獄署へと收監された。その事件の眞相や、虎に對する同情や、捕縛された時の狀態などは、地方版の新聞に詳しく書かれて、一時あたりを騷がせたが、それもほんのわづかの間で、次第にその橋上の悲劇の話も人々の口に上らなくなつて行つた。

その頃には、會社の人達が頭痛に病み、時にはとても架る見込はないと言はれてゐたそのT川の大きな長い鐵橋も、最早ほゞ完成に近く、虹霓を横へたやうなその姿と、丸い弓形の橋柱とは、高く巍々としてあたりに聳えた。遠く平野を旅行する人々も、それを一里二里を隔てた地平線の上に發見して、『や、いよ〳〵鐵橋がかゝつたな、豪氣なもんだな。』などゝ言つてそれを仰いだ。

時には朝の深い霞に包まれて、ぼかしたやうに半ば浮いて見えてゐることもあれば、時には斜に暖かい春の雨が降つて、その上を番傘をさした人々がチラホラ通つて行くのが見えてゐたりした。かと思ふと、晴れた朝の空にくつきりと捺したやうにまた繪のやうにあらはれて見えた。好奇の近所の田舍の少年達は、小舟に艪を押して、わざ〳〵その橋の下に行つて、その太い橋の支柱を叩いて見たり、顏を押し附けて見たりなどした。夕日はいつも明るくそれを照して、川には金屬の美しいかがやきを漲らして

の大きな鐵の柱にうんと言ふほど打ちつけた。『――うん、うん――うん』と言つたと思ふと、熊はぐたりとなつた。オヤと虎の氣が附いた時には、その一擊が急所に中つたと見えて、足を長く、手の尖をブルブルと動かしながら、熊はがつくりそこに身を橫へた。

『ざまを見やがれ。』

かう虎は口に出しては言つたが、また積年の遺恨が始めて酬いられたやうな快感を覺えたが、しかも少し經つて、熊の口に手を當てゝ見たかれは、ブル〳〵と身を顫はせ始めた。脆くも熊は死んで了つたのである。今まであんなに侮辱を自分に加へた熊はもうゐないのである。かう思ふと、一種の恐怖が、何は兎も角自分がさうした罪を犯したといふことが、恐ろしく虎を攫んだ。もう一度かれは熊の傍に寄つてぢつとそれを見た。熊は矢張死んでゐた。ふと、(さうだ……さうしやう、川に放り込んで置け……。さうすれや醉拂つて落こつて死んだと人は思ふわ。……なァに、俺は知らねえつて言つてさへすれや好い。)好いことを思ひついたといふやうにして、虎はその死屍を引張つて來て、橋板のまだ完全に出來てゐないところから川へと突き落した。同時に水烟のサッと颺るのが月の光に見えた。

虎は一散に駈けて鐵橋を向うに渡つた。

堪らなくなつたといふやうにして、虎は近寄つて、ほつかりと一つ熊に喰らはせた。
『打ちやがつたな、此奴？』
『打つたがわるいか。』
『生意氣な……。打つたな。貴樣のやうな、人に鼻を取られ、女を取られ、金せいもらへや好いと思つてゐやがる奴の癖に、俺を打ちやがつたな。』
『何を言ひやがるんだい……』
激怒が虎を捉へたといふやうにして、かれは猶ほほか〳〵と熊を打つた。熊も負けてはゐなかつた。それに、何方かと言へば虎よりも、熊の方が體格も大きく膂力にもすぐれてゐた。
二人はたうとう眞劒な攫合ひを始めた。それは丁度橋を七分ほど渡つて來たところで、明かに月は橋の欄干を照してゐた。二人が手を擧げて攫み合ひ、撲り合ひ、果ては組みついて上になり下になりするのが黑くはつきりと橋の板に映つて動いた。
夜は寂としてゐた。誰も橋の上を通つて行くものはなかつた。
『默つてゐれや好い氣になりやがつて……。八裂にしても足りねえうぬだ。』
『生意氣なことをぬかすな。』
組みつ、轉びつして猶暫くの間二人は橋の上で爭つてゐたが、突然、虎は熊の頭を攫んで、それを橋

虎はさつき自暴酒を非常に呷つたことを思ひ出した。もう腹にも据ゑ兼ねたと思つたことを思ひ出した。しかしかれは押へに押へた。その爲め飲んだ酒も醉を發しなかつた。しかし、何うすることも出來ないかれであつた。かれは三年の間も熊に對して忍んで來た。見て見ぬ振をして來た。かれは熊に對して何うすることも出來ないほど物質の補助を受けてゐる。また權力の強い淫奔な妻についても忍んで來た。何のために、二人ある子供のために……。さつきも自分の買つてゐる女をわざと面白半分に金を積んで熊が自由にしてゐることを知つた時には、むつと腹が立つて來て、われをも忘れて、この重ね重ねの恨を晴さずには置かれないやうな氣がしたが、それも何うやらかうやら押へて一緒に歸つて來たのであつた。

急に、淺ましい自分の境遇、子供のためとは言へ、不貞の噂、そればかりでない、その不貞な噂を自由にしてゐる男にまで、かうして馬馬にされてゐる自分の境遇が思ひ出されて來て赫となつた。

『餘り馬鹿にするな。』

『助六は御免だ……助六は御免だ……』熊は戲談のやうにして、たじ〳〵とあと退りをしながら『好いぢやねえか、親類だで……。貴樣と俺と二人して可愛がつてやれや、お噂だつて喜んでゐるぢやねえか。』

『馬鹿を言へ！』

『さうか。』
『貴様も知つてる筈だ……』
『まア、よせよ。』
『何故?』
後から早足に寄つて行つて、
『何故だえ、こら、虎。貴様は俺と親類だ。なア、わかつたか。』
『わかつた、わかつた……』
『貴様はくやしくねえな。……感心だ。さうなくつちやなんねえ。俺が貴様の鼻と……』
『よせ、よせ。』
『何もよさなくつたつて好いや。鼻、貴様の鼻は好い鼻だッて言ふんだよ。好い白い肌をしてるアな。やさしくつて好い……』
『馬鹿にするな!』
虎は心を据ゑ兼ねたといふ風で、二三歩あとに戻つた。
『もう言はねえ、言はねえ。』
熊は蹌踉として立留つた。

『さうだ、さうだ。』

『貴樣、まだ何か俺に向つて遺恨を持つてゐるか。持つてゐるなら言つて呉れ……。持つてゐねえ、さうだんべい……。持つわけがねえ。さつきは貴樣は怒つたけども、それは怒るのは無理はねえ。人間だからな。血が通つてゐるだで……。俺のほれた女を他の男がやつてゐるときけや、誰だつて好い心持はしねえにきまつてゐらァ。しかし、怒つて、取りつこをして見たつて、しやうがねえぢやねえか。助六ッてな、俺もいつか見たことがあるが、あれや芝居だ……。喧嘩して切つたり張つたりして見ねえ。何方かきられるァ。なァ。さうすれや何方かごねるァ。なァ。するとあまつ子を可愛がりたくつたつて、可愛がれなくなるぢやねえか、何方かが……。つまんねえこんだ。それよりは二人持ちにして置くのが一番好いや、無事だ……』

『さうだ、さうだ。』

『さうわかつて呉れれや、俺も安心だ……。なァ、虎、さうぢやねえか。あのあま、好い肌をしてゐるぢやねえか。あの調子が何とも言へねえぢやねえか。こら……』

『貴樣、醉つてるな、危ねえぞ、熊?』

『大丈夫だえ。あゝあのあまも好いが……なァ、虎。それよりも……それよりも、もつと好い奴があるぜ。』

『橋を行くか。』

『うん、橋を行くべい。』

また默つて二つの影は步いた。

いくらか霞んではゐるが、明るい月は大空に高く昇つて、川の瀨のキラキラと金屬のやうに輝いてゐるのがそれとさやかにその下流に見えた。鐵橋の大きな欄干の影は、ところぐ\橋板の上に黑く落ちて、をりく\そこを渡つて行く二人の影と重り合つた。

『仲好くすべいな、おい虎！』

『仲好くすべい……』

『好いぢやねいか。何うせ、おらたちは親類だ。ともかく親類だ……。そのためにや、ある時にや米もやらア、金もやらア、あのあまッ子だッて、俺らとお前と二人でやつてゐたつて好いぢやねえか。』

『いゝとも……』

『でも、さつき、それと貴樣が知つた時にや腹立てゝゐたぢやねえか……。でもな、つまんねえや、腹なんか立てちや……。女は女よ、野郞の相手になつてせえすれや好いんだ……。貴樣と俺と仲好くして、代り代りにやつてゐれや好いぢやねえか。貴樣の邪魔もしねえ代りに、俺だつて、貴樣の邪魔はしねえつもりだ。……何うせ道具だあな、女は……。なア、これ、虎、さうぢやねえか。』

殘つた。松原の中の離座敷とT川と蜆取りの男の舟と一緒に……。

二十九

T川に架けた鐵橋は次第に完成を急ぎつゝあつた。

そのDとS子の情死のあつてからは、もう三月ほど經つた。橋は既に此方から向うに架け渡されて、案内を知つたものは、それを渡つて大きなT川を渡つて行くことが出來た。今年の踯躅の頃までには、何うしてもT町まで開通させるといふ豫定で、會社では頻りに工事を急いでゐた。

月の明るいある夜の十時すぎであつた。Y屋の隣の小料理店から、かなりに醉つて蹌踉として出て來た二人の男の影があつた。共にこの近在の農夫らしく『大丈夫ですか……では御機嫌好う。』などと今まで相手にした酌婦に送られて出て來た氣勢がしたが、やがて二つの影は、あとになり、先きになりして、土手の上へとのぼつて行つた。

『おい、虎！』

などとあとから歩いて行く方の男は呼んだ。

『何だ……』

前の影は立留つた。

着した顔、S子の友達らしい此處等に滅多に見られないハイカラな女の髷、派手なネクタイをした男、さうした人達が、或は車、或は徒歩で、土手から松原の中の方へと行つた。たしかにDの細君と子供らしい一行がその中に雜つてゐたといふので、いろ〳〵な噂がまた更に新しい噂を生んで行つた。

新聞記者も大勢それを報道するためにやつて來た。さういふ人達は、M屋に寄つて聞いたり、派出所へ行つてぢかに若い巡査に逢つたりした。やがて二人の遺骸は、東京へ持つて行くといふことにきまつて、その夜の九時の汽車で、それをこゝから運ぶことになつた。停車場附近は次第に雜遝した。

白い二つの棺が松原の中から、土手を通つて、此方へと下りて來る頃には、もうすつかり夜になつて、秋の冷めたい霧は茫とあたりにかゝつて、停車場前の灯の影の下に動いてゐる家や、車や、人の雜遝がさながらぼかしのやうになつて見えた。通りでは誰も彼も皆な出て見てゐた。お玉やお常やお政も見てゐた。Y屋の上さんも見てゐた。やがてその白い二つの棺は、大勢の都會の人々に護られて、通りから停車場へと入つて行つた。『それ、それ、あれが奥さんと子供だよ。殘された人も可哀相だねえ。』かういふ聲が群集の中でした。

都會での評判はしかしこれ以上であつた。翌る日配達された新聞といふ新聞には、『DとS子の心中』といふ大きな見出しで二段三段にわたつて書いてあつた。このさびしい野の一角は、忽ち世間に知れ渡つて了つたばかりではなかつた。小說以上のロマンチックな物語は、長い間噂の種となつて人々の頭に

愛慾の羈絆、歡樂の報酬は必然に人間をかうした境に陷れて行くといふ悲劇の氣分は、昨夜からこの朝明けの間にかけて、この狹い離座敷の空氣に漲つたが、それも二人からその近くの周圍へ、またその近くの周圍からそこに出合つた人達へ、更に、停車場の人達へ、廣い世間へとひろがつて傳へられて行くのを誰も彼も感じた。誰も彼もそこに自分を發見した。自分の心を發見した。どんなに豪い人間でも、また何んなに世間に名譽のある人達でも、學問のある人達でも、愛慾の深い試みに逢つては、到底かうした悲劇に逢はなければならないことを思つた。『まア、ねえ。よく／＼だわねえ！』M屋のお玉もこんなことを言つて、それが單に他人の身の上の話ではないといふやうにしてお常に話した。若い車掌見習のAは、またしてもそれを外國の小說のシインの中の一章に引較べて考へた。

しかし一日の忙しい仕事にそれ／＼從事してゐる人達は、鐵橋の工事や材料の運搬に鞅掌してゐる人達は、『ほ、それはえらいことだ！』などと最初は眼を睜つたり心を驚かしたりしたが、やがてはそんなことには頓着してはゐられないといふやうに、またはそれが自分の身の上や、その近い周圍に起つたことでないのを好いことにしてすぐ忘れて了つたやうに、てんでにその仕事の方へと出かけて行つた。いつものやうに日は照り、川は流れ、トンカントンカンする音はあたりに賑やかにきこえた。

とは言へ、DとS子の心中は、大きな事件であつた。午後からは、それに驚いた人達が列車每に十人や十五人はやつて來て、色濃い光景が到るところに渦を卷いた。フロックコオト、羽織袴、悲痛な昂

『さうやつておけ！　そのまゝにして置け！』
かう檢視の人達は言つた。
『Dと言へば、世間でも知られた學者だのに……。殘念なことをしたもんだ……。』
かう署長が言ふと、
『何うもしやうがない……。いろ〳〵譯もあつたんだらう？　よく〳〵でなくつちや、女だつてこんなことはしまいからな……これも惡因緣ぢや。』
醫者は形ばかりの檢視をした。『さァ、明方だな。しら〳〵明け時分だ。……三時間とは經つてゐない。』
などと言つた。
で、種々に調べて書取つたり何かしたが、そのまゝにして離座敷に置く方が好い……。（遺族のものがやつて來るまでそのまゝにして置く方が好い。）といふので、今度は戶板が持つて來られて、それを舟からその上へと移して、皆なしてそれを離座敷へと運んで行つた。
民は、
『もう、好かんべ。おらは歸つても……。えらい眼に逢つた……。死んだ奴はしやうがねえが、おらぐづ〳〵してはゐられねえ。これから稼業に行かねえぢや、一日さまが送れねえで。』こんなことを言つて、始めて警官の許可を得て、そして舟に鹽などをまいて、急いで下流へと漕いで行つた。

と言つたぎりで、凝つとそのめづらし光景に眼を注いだ。

暫くして舟を戻して岸に上ると、

『旦那、もう好いですな、歸つても……』

『まア、待て。檢視が來るまではそこらにゐなくつちやいかん。』

『仕事はしてゝも好いだな？』

『仕事はしてゐても好いが、そこらにゐなくつちやいかんぞ。』

かう命令するやうに言つて、今度は女中のお時と女將を先立てゝ、松原の中の離座敷の方へ行つた。

『いつ來たんだ？』などゝ言つて、若い巡査はいろ〳〵なことを女將に聞いて、それを手帳に書き留めた。

H町には裁判所の出張所があるので、檢視の人々もさう手間を取らずに署長と一緒にやがて車でやつて來た。かれ等も矢張同じやうにして川に行き、離座敷に行き、それから女將や女中を調べた。料理番と僕と若い巡査と、それに民も手傳つて、死屍を舟の中に引揚げた時には、派手な女の着物はぴたりと白い肌にくつ附いて、長い髮からは水がぽた〳〵と滴り落ちた。男の濡れた頭はぐたりと垂れて、いくらか水に膨れた足は女の足と重なり合つた。

二つの屍を結び附けた赤い靑い女の伊達卷を料理番が取らうとすると、

『あの評判な、D とS子！』

『昨夜ですか？』

『今！　今！』

かう言つて若い巡査は走つた。

驛前の家々では、もう皆な誰も起きてゐて、枕流亭の料理番と派出所の巡査と一緒に何か事ありげに走つて行くのを見た。『え？　心中ですつて！』かうした低い囁きがそれからそれへと傳へられた。

土手の上を二人の駈けて行く姿が、川霧の半ば晴れた朝日の影の中にくつきりと見えてゐた。

若い巡査は何も別に變つてゐない靜かな松原の中の家屋を見た。女中のぼんやりして立つてゐるのを見た。女將のお世辭の好いいつもの姿を見た。蜆を取る民は、行きがゝりで、仕事をすることも出來ず、依然としてそこに舟を寄せてゐたが、巡査の姿を見るとそのまゝ急いでその舟をまた岸に寄せて來た。

『民が見附けたのか？』

『え、さうだ……』

『何處だ？』

忽ちその二つの屍を見た若い巡査は、

『フム。』

一同は暫く沈默した。

『まア、しかし……出來たことはしやうがない……。Dの家とS子の家と、それから他にも心當りなところに、電報を打つてやらなくてはならない……。』

かう言つて益田も皆なと共に母屋の方へ引返して來た。益田は、巡査の來る間に、その電報を書くべく女將と二人で居間の方へ入つて行つた。

料理番が停車場の派出所に走つて行つた時には、若いその巡査は、また起きたばかりで、和服で井戸のところで齒をみがいてゐたが、『え？　心中？　それは大變だ？』かう言つて此方に來て、更にまた、『え、DとS子！　あの評判な、新聞にかゝれた？　そいつはえらい事だ？』と眼を瞬つた。

早速、電話の把手を廻して、H町の本署にそれを報じたが、『え、さうですか……。そのまゝにして置く？　よろしい。成るたけ早く……。よろしう御座います。』かう言つてそこを離れて、大急ぎで、制服を着て、劍を吊るして、走つて料理番と一緒に通りに出た。

其處で行違つた驛長は、

『何です、泥棒ですか？』

『いや、心中！　しかもDとS子の心中！』

『え？』

『えらい騷ぎが起つたな。』

かう言ひながら、益田と女將とお時はそのまゝ松原の中の離座敷の方に行つて見た。

離座敷の表の雨戸は一枚明けたまゝになつてゐる。足袋跣足で急いで死に赴いたと見えて、男の下駄も女の下駄もそのまゝになつてゐる。寢床も夜着も後にはね返したまゝで、卷烟草の殼が丸い火鉢に一杯にさしてあつて、敷島の袋の中にはまだ五六本殘つてゐるのを人々は見た。ランプも薄くそのまゝに點いてゐた。あたりには女の手提だの、ぬいだ羽織だのが一杯に散らばつてゐた。

『まア、これも此まゝソッとして置け……。警官に見て貰つてからでなくては、手をつけてはいけんから……。』かう益田は言つたが『何も書置見たいのものはないかえ？』

棚の上や蒲團の下をさがして見た女將は、

『何もないやうです？』

『ふいと思ひ立つて、死ぬ氣になつたと見えるな。』

『さうですね……。急に、さういふ氣になつたらしいですね、明方ですね、屹度……』

『さうかも知れない。三時か四時頃だつたに相違ない……』

『何んな心持でしたらうねえ。』

不意に染々同情するといふやうな調子でお時は言つた。

『兎に角、手をつけるわけには行かん。警察に屆けて、檢視が來るまでは……。定公、』と傍にゐた料理番を呼んで『お前、大急ぎで、停車場前の派出所に行つて屆けて來て吳れんか。』

『かしこまりました。』

で、舟を再び雁木の處に戻して、一同岸に上つたが、飛んで行きかけた料理番を益田は後から呼びかけて『早く行つて、不取敢一緒にあの巡査に來て貰へ。あゝして川の中に放つて置く譯にも行くまいから……。』

料理番は走つて行つた。

『何時頃やつたんだらう?』

『さァ、ね、明方ぢやないかしら……。昨夜はそんな風は少しもなかつたんですがね。睦じさうに、當り前にして話してゐたんですがね。』かう言つて女將は考へてゐたが『勿論、Dさんも、S子さんも、すつかり世間からは相手にされなくなつたし、家の方も駄目になつて行くし、悲觀してはゐました。』

『昨夜は何時頃に寢たんだえ?』

『十二時でしたよ、もう……。ねえお時?』

『え、さうでした。……私がいろんなものを下げて來て、此方へ來ると、丁度時計が鳴つてゐましたから……』

丁度來て泊つてゐた益田は、どてら姿で其處にやつて來て叫んだ。

有名なDと有名な音樂家のS子、その二人の Love Affair は世間でも知らないものはないのであつた。かれ等はこれまで何ぞと言つてはよく新聞に書かれて騷がれた人達である。この刹那にも益田の胸にも女將の胸にも何うしてもさうなつて行かなければならなかつた二人の戀が思ひやられた。二人のことを知つてゐるだけそれだけ一層強い昂奮に打たれた。

『どれ、行つて見よう？』

益田が先に立つて、女將と料理番とがそれにつづいた。お蔦も下りて行つた。皆な舟に乘つて其處に行つた。

『えらいことをして吳れたな。』

その狀態の眼に入つた時、益田はかう黯然として言つた。

『まア、まア、二人一緒に……。なんていふことでせう。』

女將の聲は涙に曇つた。お蔦も料理番もただ默つてそれを見た。川の瀨は女の解けた髮を長く〳〵流した。

いろ〳〵なことが胸に上つて來て、益田も女將も暫しは唯その二つの死屍に對したまゝ、何とも言へなかつた。急に、益田は、

『本當にもうそにも、來て見れやわかるァ。すぐそこだ……。俺ァ、今、見附けたばかしだが、びつくらして了つた。』

お時も驚いたやうに、急いでそこにあつた庭下駄をつッかけて、民と一緒に雁木のところまで行つて見た。成ほどそこには二つの死屍の浮いて漂つてゐるのが見える。

『ぢや、家の客かも知れない。ちよつと待つて……』

かう言つてお時は駈け上つたが、そのまゝ松原の中の離座敷の方へと走つて行つた。暫くしてお時が戻つて來た時には、女將もお蔦も料理番も皆な其處に出て來てゐた。

『矢張さうだ……』

『え、Dさんが……?』

女將は吃驚したやうにして、がた〳〵身を震はせた。

皆な出て行つて見た。今度はお時は民に舟に乘せて貰つて、その死屍の漂つてゐるところまで行つて見屆けた。

『Dさんがまァ……。なんて言ふことをして呉れたんだらう。これは大變にも何にも……。あのS子さんだつて、まァ――』女將は昂奮せずにはゐられなかつた。

『何だと……Dが心中した。』

まさか放つて置く譯には行かなかつた。民はもう一度その方に眼をやつたが、そのまゝ舟を棹で押して、そこからいくらもない枕流亭の雁木のところへ行つた。

（そこにやつて來た奴に相違ない……）かう思ひながら、かれは雁木のところから、石だゝみになつてゐる階段を上つて、そしていきなり女中達や料理番の寢てゐる室の雨戸をドン〳〵叩いた。

『おい、大變だ、大變だ……』

夜が遲いので、かれ等はまだ夜中であるらしく、容易に內では應へがなかつたが、やがて遠くで返事がして、急いで此方に來る足音がした。

隅の雨戸が一枚明いて、そこにだらしない眠むさうなお時の姿があらはれた。

『お前んとこのお客ぢやねえか。心中したものがあるぜ。』

『え？』

『心中だよ。えらいことをやつたもんだ。』

『何處にさ？』

お時は目をこするやうにした。

『すぐ、そこに、二人、男と女とが抱合つて心中してらア。』

『本當かえ？』

白い赤いまた黑いやうなものゝふわ〳〵漂つてゐるのに眼を留めた。

『何かしら？』

かう思つたが、昨夜の風に枕流亭の女中の洗つた干物でも飛んで落ちたんだらう位に思つて、別に氣にも留めなかつたが、さて烟草も吸つて了つて、あらためて仕事にかゝらうとして、舟を少し上流に進めつゝもう一度そつちに眼をやつた時には、民は我知らず『あッ！』と叫んだ。驚くべき光景がそこにあつた。赤いと思つたのは女の腰卷や着物で、白いのは男の腕と女の腕としつかり抱き合つてゐるのであつた。

女の色の白い顏は男の突伏した頭の傍に仰向けに見えて、そこからつゞいた女の髮は瀨に長く黑く解けて動いて流れてゐる。着物はまくれて、男の腿のあたりと女の足と重つてゐるのもそれとはつきり見える。かれ等は體をしつかり伊達卷で結んで、そして淺瀨から此方へ飛込んだものと思はれる。

思ひもかけずかうした驚くべき光景に眼を留めた民は、始めぱぎよつとして驚いたが、次第に冷靜な心持になつて來てゐた。『ふざけた眞似をしやあがつたな。』つゞいてこんなことを思ひながら、棹でその死屍を突ついて見た。するとその二つの死屍は動いた。

民はゾッとした。

『しやうがねえ奴等だな。』

とが流されて、大騷ぎをしたほどであつたが、その騷ぎも今は靜まつて、水は以前のやうに砂洲を挾んで碧く流れ、虹霓のやうな鐵橋が朝に夕に川霧の中に浮んで見えるさまは、さながら繪を見るやうな心地がせられた。『えらいもんだな、機械の力といふものは。……もう橋があんなに出來た。』T川を渡つて行く人達は、いつもこんなことを言つてそれを仰いだ。

その日も矢張此頃に多く見るやうな霧の深い朝であつた。漁師は小舟を輕く操りながら、河岸から河岸へと、蜆を搜すやうにして漕いだ。この川の蜆は、さう澤山は獲れなかつたけれども、粒が大きいのと、味が好いのと、質が上等であるのとで、料理屋へ持つて行くと、割合に高く賣れた。それに、今では川に漁獲物が少くなつたために、勞働者は多くは農の方に使はれて、昔のやうに川を撈ふのを業とするものは尠くなつてゐた。朝の仕事に五六升乃至七八升も取れば、それで一日の生計の半ばを助けることが出來た。その漁師は『蜆の民公』と言はれて、あたりにそれと知られてゐるやうな男であつた。

舟を瀨に偏せて、棹の先についた道具で頻りに川の底を撈ひつゝやつて來た民は、今しも漸く枕流亭の松原の下流のところに來て、ほつとして煙管を腰に探つて、そしてマッチを磨つて、それに火につけた。深い朝霧は川の瀨に斷たれるやうにして流れた。そしてその間からは鐵橋の大きな姿がをり〳〵見えては隱れ、隱れては見えた。

のんきさうに煙草をふかしてゐた民は、ふと、その自分の舟を繫いでゐるところから五六間を隔てゝ、

『御機嫌好う。』

汽車が構内を出て行く間、Mの顏は矢張その窓際から離れなかつた。もう一度手巾を振つて、そして別れて、此方に來た時には、歌子は涙が胸に一杯にこみ上げて來るのを覺えた。

歌子は出口から停車場の外に出て、そして靜かに歩いた。さびしいさびしい氣がした。で、通りへ出てパッと再びその蝙蝠傘を開いたが、そのまゝ周圍から視線の集つて來るのなどには頓着せず、緩かに歩を運んで、川の見える土手の方へと登つて行つた。縫ひ取りしたその蝙蝠傘の大きな蝶は、さながら伴侶に離れたもののやうに、暫し土手から松原の方へとさびしく動いて行くのを人々は目にした。

二十八

その年の秋も末の頃であつた。

すぐ下流にあるA村の貧しい一人の漁師は、その日の生計に、蜆でも獲らうと思つて、小舟に棹さして、夜のまだしらく明けの頃から、川岸をずつと枕流亭の松原のあるあたりまで來た。一昨年も去年も水は出ても、さうひどい洪水もなかつたが、今年は雨が多かつたのと、凄じい九月の暴風雨があつたのとで、九合目あたりまで水が溢れ、一時は枕流亭も危いなどと人々に思はれたほどであつたが、また三分の二ほど出來かゝつた鐵橋の一部が、濁流を堰いたために、凄じい奔漲を來し、臺座の一部と橋杭

たが、やがて時間が來たと覺しく、車掌が列車の戶を一つ〳〵閉めにやつて來たので、あわてゝ歌子はそこから下りた。

かの女はしかもその窓からその身を離さなかつた。

『さつきのブラン持つて?』

『あゝ。』

『他に忘れたものはないわね。』

『あゝ。』

『ぢや、親方にもよろしくね。姐さんには逢はないでせうから、あとで私がよく言つておくわ。』

Mはまた立つて來て、

『今度は九州をすませてからでなくつちや、歸つて來られないから、ことによると秋になるね。體を丈夫にして、何もくよ〳〵思はない方が好いよ。』

『え……』

車掌は相圖の笛を吹いた。

つゞいて汽車は靜かに動き出した。

『ぢや、左樣なら。』

て、そして土手下の方へと歩いて行つた。

『まァ、來て見ろ、嫁子、嫁子！』などと其處等に遊んでゐた子守達は、ぞろ〳〵あとからついて來た。

其處からも此處からも、視線はさうして並んで行く二人の姿に注がれた。上さん達の眼も、酌婦達の眼も、工夫達の眼も、店にゐる男達の眼も……。M屋のお玉は、『ちよいと、ちよいと、お常さん。』などと呼んで、その美しいめづらしい二人づれの方を指した。

停車場に入つて來る時には、丁度そこにゐた若い車掌のAが、自分の讀んでゐる小說の中のシインでもそこに發見したやうにしてぢつと深くそれに見入つた。

發車までの時間はあと五分しかなかつた。かれ等は茶店に休んでゐる暇もなく、もう其處に集つて來てゐる此處等の上さんや、娘や、商人や、農夫の嬶などと一緒に、彼方からも此方からもじろ〳〵視線を注がれながら、Booking-office の前に立つて、名古屋までの切符と入場券とを買つたり、何か小聲で途中のことを囁き合つたり、別れが辛らさうな表情をしてお互ひに顏を見合はせたりしてゐたが、やがて改札口は開いて、乘客はぞろ〳〵とプラットホームの方へと出て行つた。

Mについ〳〵て列車の傍まで入つて行つた歌子は、二等室には、Mの他誰れも乘る客がないので、そのまゝ車室の中に入つて行つて、クッションに並んで腰をかけて、『私も一緒に行きたい』などと言つてゐ

『あゝさうか……。この方が近路になるんだな。』
こんなことを言ひながら歩いたが、Mは、
『まだ、ゐるのかえ、此處に……?』
『さむしいけれど、もう少しゐるわ。向島にゐるよりも、此處の方がいろ〳〵なことを聞かなくつて好いから……。』
『旦那が來るんぢやないか。』
歌子はむつとして、『また、あんなことを。よして頂戴よ。疑ひつこなしつてあれほど約束したぢやないの?』
『でも……』
『でも、何うしたの?』
『矢張、別れが辛いからだよ。一人放つて置くと、不安心でしやうがないやうな氣がするんだもの。』
『疑ひつこなし!』
歌子はMの手を握つた。
段々停車場附近の混雜が近づいて來て、さうしたことも二人はやがて出來なくなつた。歌子は大きく蝶の縫ひのしてある派手な蝙蝠傘を晴れた日影に翳して、睦しさうに並んで、煉瓦の竈の工場を左に見

て打つて置かなければならないので、『もう一日ゆつくりして行きたい。』などと言ひながら、朝飯をすますと、そのまゝ歸つて行く支度をした。

『それぢやね、疑ひつこなしね。私の心持はわかつたでせう。もう少しの辛抱ですから。さうしたら思ふやうに一緒に暮らせるやうになるから、貴方も體を丈夫に、酒なんかあまり飲まずに、堅くしてゐて下さいね。』

『よし、よし、もうわかつた……。決して疑はない。』

さう互ひに理解し合つても、それでも別れて行くのは辛いやうにお互ひにしてゐた。『十一時の汽車で此處を立てば、二時すぎには東京に行けるから、大丈夫ですよ。そして今夜の九時の急行で行くんでせう……。大變ね。』などと歌子は言つた。いよ〳〵出懸ける時には、『私も一緒に停車場まで送つて行くわ。』と言つて、着物を明石の派手なのに着替へて、髮を綺麗に梳いて、わざと車は頼まずに、女將や女中に送られて二人は松原の中を出て來た。

日はT川にキラキラと輝いてゐたけれども、それでもまだそれほど暑いといふほどではなかつた。天氣も好く、綠はかゞやくやうに光つて、鐵道工事の地形の懸聲が靜かにあたりに響いてきこえた。

『この汽車は一體何處へ行くんだえ？』

『Aの機場の方へ行くんでせう。』

お蔦が提灯をつけて、二人をその離座敷に案内した時には、もうちやんと寢る支度が奥の一間に出來てゐて、餉臺や烟草盆や茶道具や烱の細く颺つてゐる蚊遣の器などが、皆な入り口の副室の方に持つて來てあつた。そこで二人は暫しの間、戯談などを言つてお蔦を相手にしてゐたが、『もう、御用は御座いませんね。』かう言つて、庭下駄の音高くお蔦が歸つて行つたあとは、蚊の鳴聲が細く、新しい蚊帳の青い影も濃やかに、遠くで川水の岸に偏つて流るゝ音が微かにするばかりであつた。女の着物をぬぐ氣勢がさらさらときこえた。

二十七

Mはあくる日の幕明きまでには、遂に歸ることが出來なかつた。『まア、好いや、一日用事が出來て歸つて行かれなかつたことにしておけ！』父親や興行師の難かしい顔を思ひ浮べながら、明方にちよつと目覺めた時に、こんなことをMは歌子に言つたが、再び疲れて眠つたかれ等は九時近くなるまで、その離座敷から姿をあらはさなかつた。

いくら言つても言つても、またいくら繰返しても繰返しても盡きないかれ等の戀ごゝろであつた。しかしまたいくら互ひに顔を見てゐても、互ひに體を抱き合つても、互ひに心と心とを合せても、それは竟に際限のないやうな戀ごゝろであつた。Mは休む電報を今日少くとも午後の一二時までに東京に行つ

『何うして？』

『料理番の男が、そらあの肥つた男がゐたでせう。あの人が亭主見たいになつてゐるんですから……。』

『さうかえ？』其處にももう灯が來てゐるので上つて坐つて見て『ランプだね、まだ此方は？』

『ランプもまた落附いてよくはなくつて？』

『それはさうだね……』ちよつと考へて『寢る時は此方の方が好いぢやないか。』

『さうしませうか。』

『その方が靜かで好い……』（…………）何か言はうとして、女の顏を見て笑つて、更にある要求に促されたやうにして、女の體を抱くやうにした。

『まア、あつちへ行きませう。そして一本飮んで、御飯を食べませう。』

で、かれ等は引返して、二階建の方へと來た。もう日はとつぷり暮れて、さつきまで川に映つて見えてゐた赤い雲の影も見えなかつた。二階には明るい灯がついて、女中のお蔦が膳を運びつゝあるのが長い廊下に見えた。

淺く酒を酌み交はしたり、再び女將がやつて來て暫しの間役者の話をしたりしたが、別に三味線の音も立てずに『ぢや、さうしますね。離れの方にしますね。』などといふ歌子の聲がきこえて、人々の往來する影が明るい障子の內外に映つた。

『こんなとこにゐたの？　何處へ行つたかと思つてさがしてゐたのよ……。』
歌子は美しく化粧した湯上りの白い顔を半ばくれかけた夕暮の空氣の中にくつきりと見せて、同じく恍惚と男の見てゐる方に見入つたが、『綺麗ね、雲が、水に映つて……。』
『靜かだね。』
『好いところでせう、東京では、こんな落附いた氣分にはなれないわねえ。』
『本當だ……。』
川に映つた雲は、益々色が褪せて、次第に暗く暗くなつて行つた。
二人はそれから松原の中を縫ふやうにして歩いて、歌子が二三日前から來てゐる離れの方へ行つて見た。そこからも矢張川が見えたけれども、松原の中に埋れたやうになつてゐるので、一層靜かな幽棲らしい感じがした。
『此處に一人ぽつんとしてゐるのかえ？』
『却つて靜かで好いわ。』
『よくさむしくないね。』
『だから、寢る時には、お蔦さんに來て泊つて貰ふことにしてあるのよ。お時さんはあれで一人ぢやないんですからね。』

ずに白粉下をぬつた上を輕く小さな袋で叩いたり、黑い髮を丁寧にわけたりしてゐると、女は湯の中から、

『そこに、御園はなくつて？』

かう聲を懸けた。

『あるよ。』

『なら、かして頂戴。』

Mが持つて行つてやると、歌子は石鹼をつけた顏を斜にしながら手を延してそれを受取つた。

Mはｒ座敷などを見てゐたが、ふとそこに庭下駄があつたので、それを突ッかけて、好い心持で、庭から松原の方へと出て行つた。日脚の長い夏の日も旣に暮れかけて、河に、空に、または松原の一端にはまだ明るい夕照の影が殘つてゐるけれども、上流も下流も旣に茫々と銀の色のやうな沈んだ暮靄に包まれて、帆も舟も何もない川を越し、その向うの平野を越し、村落を越して、ひろい〳〵地平線がそれに打渡して眺められた。半ば出來かけた鐵橋の橋臺は、夕暮の靄の中に浮び出すやうになつて微かにそれと指さゝれた。下では岸に偏つて流れてゐる水の瀨のささやかな音が夢のやうにきこえた。

川に映つて榮えてゐる夕暮の雲の次第次第に淡く淡くなつて色の褪めて行くのをぢつと見詰めてゐると、

『だから、私の心さへ疑はずに置いて下されば好いのよ。私だツて、女ですから、矢張離れてゐれば疑ふけれど、現に、さつきだつて貴方が入らつしやるすぐ前だつて、そんなことを考へてゐたのだけども……。夜なんかだツて、貴方に他の女が惚れたり何かしてゐる夢なんかよく見て、その日は一日氣持がわるかつたりするんですけども、もう私は疑はないわ。だから、貴方も疑はずに置いて下さい。ね、ね、よう御座んすか。』男の身に凭りかゝるやうにした歌子の眼からは涙がほろ〳〵と溢れ落ちた。

女將の眼にも、女中達の眼にも、更にまた料理番の眼にも、羨まずにはゐられないやうな深い戀中のさまが映つて見えた。『まア、名古屋から逢ひに來たんですツて……。それ位までに役者衆に思はれたら、女も好いでせうね。』などとお蔦は言つた。

Mは女と打解けて話してから、すつかり心が落附いて了つた。滿足と、喜悅と、來た甲斐があつたといふことと、境の世離れて靜かでいかやうにも落附いて歡樂の一夜をすごすことが出來るといふことが堪らなくかれを愉快にした。そしてその滿足と愉快とを、昨夜一夜眠らずにやつて來て、更にまたこゝまで汽車でやつて來た疲勞が雜つて縫つた。そしてそれが却つて好い心持にかれを樂ませた。

硝子戶を通して、川の一部がそれと見えるやうな新しい廣いサッパリした湯殿で、女の白い肌と相觸れるやうにして風呂に入つたMは、煤烟やら塵埃やらに汚れた體も頭もすつかり綺麗に洗つて、生れ代つたやうな氣分になつて、鏡のあるところでブラシをつかつたり、役者だけに平生の身だしなみを忘れ

『まア好いのよ。かうして顔さへ見てゐれや安心だから……』

かう言つたが、すぐ『でも、明日歸らなけれやならないの？』

『幕明までには歸る筈にしてあるんだけれど……』

『ぢや、大變ね。明日だツて、ゆつくりしてゐられやしないやね。一番で立つツて大變よ。』

『まア、明日のことは明日だ……。明日になつてから考へることにしやう。一心で來たんだからな、これでも……』

『嬉しいわ。』

口に手を當てゝキスの形をした。

『でも、向うの方は何うしたえ？』

『旦那？ あれつきりよ。本當よ。かう見えても、これで私、一克者なんだから。一度あゝして斷つたんですもの……。旦那にもすまないと思ふけれども、だツて爲方がないと思ふわ……。いゝえ、そんなことはないわ。そんな風に疑ぐるのはよして下さいよ。離れてゐるのは私だつて辛いんだけれども、さうかと言つて姐さんの義理もありますからね。かうして無理な首尾をして吳れやうといふ姐さんですからね。猶ほ義理があるわ。』

は點頭いて見せた。

『まだ、くさくしてゐるんですけどもね。……でも、もう好いの。』

二人は女中達の下に下りた間に、手を堅く握り合はせて振るやうにしたり、思ひ餘つたやうに、女の弱々しい痩削な體をぐつと抱き緊めたりした。

『でも、此處は靜かだから好いわ。お客なんか滅多にありやしないんですからね。田舍の財産家が妾宅に拵へて置くやうな家ですからね。』

『さつきのがさうかえ？』

『え、さう……』

『旦那は來てるの？』

『さうね、ちよいちよいでもないけど……時々來るわ。』

『ちよつと意氣だね。』

『だつて、よし町の千鳥さんッて言つた人ですもの。』

『さうか、道理で……』

『だから、此處なら、誰れにだッて氣のおける人はないわ。それこそ本當に……』（天下晴れて何んなことでも出來るわ）と言はうとしてよした。

『本當に、何うしたのさ。』

して……。でもね、まさか、貴方がいらつしやるなんて思ひもかけないから、さう思つて見る故かしらなど思つて、松の間から出て來るのを見てゐたのよ。さうしたら、矢張、貴方だつたわ。あゝ嬉しい……。』かう言つて歌子は子供のやうに、または車夫の手前があるのをも忘れて、自分で胸を撫でる眞似をした。

女中頭のお時とお蔦とがその氣勢をききつけて出て來た。まだ入口まで來ないのに下りるといふので、其處にMを下した車夫は、笑ふにも笑はれず、呆氣に取られたといふ風にして其處に立つて汗を拭いた。

『姐さんに聞いて來たの？　それでもよくわかつたわねえ。何處から來たの？　さう昨夜の急行で、名古屋から……。さう、それで、また此處まで來ちや、眠る間もなにもなかつたのねえ。』

（御免なさい、私がわるいんだから。）かうした戀ごゝろの表情は、Mの體に染みわたつて感じられた。

女中達に案内されて、川の眺めの好い二階の八疊の一間へと行つたが、女中達もそれを聞いてめづらしがり、益田は丁度東京に行つて留守であつたが、女將も出て來て、『それは大變ね、名古屋からぢや大變だ。』などと言つて歓待した。

さて逢つて見ると、何も彼も融けて流れて、何から言ひ出して好いかわからなかつた。二人はただ嬉しさうにして笑つて顏を見るばかりであつた。

『それで、病氣は何うなんだえ？』

土手の方へ曲つて行く道では、すれちがつた土工が、

『何だ、役者見たいな、いやに色の生白い男だな。』

『枕流亭だんべ。』

などと言つてそのあとを見送つた。

土手を上り切ると、さうした混雜と雜選とはあとになつて、心も開けるやうなT川の流れが、橋臺だけ大方出來た鐵橋を前にして、またはそこに舟やら組んだ筏やら赤い煉瓦を載せた木材の堆積やらを前にして、さながら目が覺めるやうにかれの前にあらはれて見えた。帆が一つ徐かに下流から上つて來た。舵の音がギイと聞えた。

瀟洒な門から、砂利を布いた路に車の齒の音を輕く響かせながら、靜かに松の影の濃淡の縞を織り出してゐる間を入つて行くと、不意に離れの方の松の間から、裾をほら〳〵させて駈けて來る女があつた。それは歌子であつた。

『まァ、貴方？　來たの！　こんなところに！　まア！』

歌子は屐齒の折れるのも知らぬばかりに喜悅に溢れた。

『まァ、本當に、私、夢かと思ふわ。今、ちよつと、其處で見てゐたのよ。お客が來たと思つて見てゐたのよ。すると、ちよつと横顏が見えたの。何だかあなたのやうな氣がして、急に胸がドキドキし出

に照り渡つてゐた。剖葦が頻りにその喧しい饒舌をつゞけてゐた。

やがて汽車はその終端驛に着いた。ぞろ〳〵と乘客と一緒に下りたMは、混雜した村とも町ともつかないやうな人家の軒を並べてゐるのを目にした。トンカントンカン鉋や釿の音がして、野澤組といふはつぴを着た人夫が右往左往に往來してゐるのを目にした。二階建の旅館の赤いメリンスの夜具の干してある欄干に酌婦らしい女が二人立つて何か話してゐるのを目にした。

近く寄つて來た車夫に、

『枕流亭ッていふ家はあるかい？』

『へい、御座います。』

『ぢや、そこまで……』

『へい……』

車夫は逸早く車を持つて來た。

色の白い、眼鼻立の綺麗な、見る人が見れば一目でそれとわかるやうな意氣な扮裝をしたMの姿は、唯、ちよつと素通りしたばかりであつたけれども、それでもその通りの女達の目を惹いた。

『好い男が行く……』

かう言つて酌婦達は店の方へ出て來た。

い田舍の宿に歌子を見ることが出來るといふ念の方に強く引張られて、歸りなどは何うでも好いといふ氣になつた。歌子の面影の絶えずチラ〳〵する間を、小さな停車場や、麥を刈つて了つた後の田圃や、藻の浮んでゐる汚ない川や、驛の前に客を待つてラッパを鳴らしてゐる乘合馬車などがまじつて通つた。ガタ〳〵と遲い速力で、何んな小さな停車場へも一々丁寧に客を拾ふやうにして寄つて行く汽車が終にはもどかしくなつた。Mはがらんとした碌々乘手もない二等室で、横になつたり、起き返つたり、逢つたらうんと酷めてやらうと思つたり、まさか、今かれが行かうと思つてはゐまいから、さぞびつくりするだらうと思つて獨りで微笑んだり、また時にはもう着きさうなものだとあせり心地になつて、車室内にかかげてある赤い線や四角な字で連絡してある線路表の前に立つたりした。

あともう二つで、枕流亭のあるKM驛に着くとなつた時には、今度は今迄とは反對に、もしや行違ひに女は東京に歸つて行つてゐはしないかといふことが氣にかゝり出した。かう行違ひになつた時には飽まで物事は行違ひになるものである。ぐれはまになるものである。名古屋から遠くこんな見ず知らずの田舍までやつて來て、そんな眼に逢つたら、それこそ馬鹿々々しい。かう思ふと、親を言ひくるめ、友達をごまかして、女に逢ふためにやつて來た自然の報酬と言ふ風にも考へられて、また行末は何うなつて行くのであらうなどと思はれて、何となく心淋しいやうな氣にすらなつた。

H驛をすぎて沼が見え出して來た時は、もう午後の四時すぎで、明るい夏の日影がぱつと一面にそこ

へ電話をかけて聞くと、歌子は二三日前から田舍に行つてゐるといふこと、それですつかり失望して了つたが、それに寮の電話に出た女中が、何うしてもその歌子の行つたといふ田舍を敎へて呉れないので、これはてつきり旦那と一緖の避暑旅行、あんなことを言つて心の節操を見せてゐても、それは自分のそこにゐる間だけのこと、旅に出て留守ときまれば、さう變るのが女の心と思ふと、强い嫉妬は燃えるやうに起つて、ゐても立つてもゐられないやうになつた。Mは激していつそ歸つて了はうかと思つたが、また一方には未練と戀ごゝろとが盛に燃えて、何うにも彼うにも爲方がないので、氣まりがわるいのを怺えて、柳橋のS屋に姐さんを訪問した。

其處で、その姐さんの話で、その邪推と、疑惑とはすつかり除れた。歌子はそんな女ではなかつた。矢張、氣がくさくさして爲方がないといふので、二三日前、Iの女將に勸められて、川の眺望の好い、靜かな田舍へでも行つてゐた方が好いとのことで、T川の畔の『枕流亭』へ一人で行つてゐるといふことであつた。Sの姐さんは、これは貴方に敎へては旦那にすまないのだけれど、わざわざ名古屋からやつて來た心に同情して話して上げると言つて、そこに行く汽車の道順などを詳しく敎へて呉れた。

Mは急いで本所の隅の隅にあるやうなその汽車の停車場へと行つた。

Mは生き返つたやうな氣がした。猶ほ二時間半も汽車に乘らなければならないことを考へると、明日の歸りにも差支へはないかといふ懸念も起つたが、しかもそれよりも、さうした遠い世離れた川に近

二十六

有名な歌舞伎の老役者を父親に持つた、自分も若手の名題では評判が好く、かなりに社會にその名を知られたMは、柳橋のS屋の抱妓に二世を契つた歌子といふのがあつて、その旦那の目を忍んでは媾曳しながら、いつか夫婦になることを互ひに將來に約束してゐたが、旅に出ては、その戀ひしさが忘れ難く、殊に、今度出て來るその一月前には、その事情がすつかり旦那の方に暴露したために、歌子は何うしてもこれを機會に旦那に暇を呉れと言ひ出し、旦那は意地で何うしても暇はやらぬと言ひ募り、お座敷にも出ることも出來ず、中に入つたS屋の姐さんが非常に困つて、一時向島のある人の寮見たいなところに、半ば病人になつたやうにして歌子は寢たり起きたりしてゐたが、――それでもMの東京を立つて來る時には、その粹な姐さんの情で、その寮で女に逢つて別れて來たが、いろ〳〵なことが心配の種となつて、寢れば歌子の夢、覺むれば歌子の幻影といふ風に、片時も忘るゝ暇とてはなく、ところ〴〵を打つて廻る芝居の舞臺も多くは上の空に、足も土につかぬやうにして日を送つて來たが、名古屋市では舞臺の都合で、ゆくりなく明日一日は體が空くといふことになり、明後日の夕方の幕明の時間までに歸つて來てゐさへすれば好いと言ふので、Mは急に何の彼のと用事の出來た風に粧ひ、一座した父親の老役者の手前を繕ひ、その夜の一時の急行で、心も魂も飛ぶやうにして東京に歸つて來て、停車場前で寮の方

『さうね。』

『停車場がすぐで、東京まで、二時間半で行けるから、便利だね。』

『拵へると好いわ。』

『でも、また、いざ拵へるとなると、厄介だよ。村の人達への交渉だの、留守にしておく間に賴む留守番だの……。それに我々はまだ田舍に別莊を持つほど老耄れちやゐられないよ。もつと眞劍に働かなければならないんだから……』

『それもさうね。』

『でも、今に拵へるさ！』

こんな話をしながら、かれ等はそこから引返して來た。寺の方へも行つて見たいとは思つたけれど、汽車の時間も氣になるので、またこの次ぎになどと言つて引返して來て、停車場前の休憩店にかれ等は入つて行つた。

花見歸りの客は既にそこらに澤山に集つて來てゐた。此頃では、この驛前の店にも、名物の蓴菜の罐詰や、麥落雁などを置くやうになつて、人々は皆なそこに寄つて買つた。かれ等夫婦も蓴菜の罐を一つ買つた。やがて汽車の時間は來た。改札口の雜遝はまた始まつた。

細君も大きく笑つて、『さうね、丁度あそこいらね。……あの時分は隨分のんきだつたのね。』

『古戰場をかういふところに回顧するといふのは面白いな。』

かう言つてかれもその頃を思ひ出すやうにした。

かれ等は停車場の前を通つて、清水組事務所の前から、工夫達が入るやうになつてから出來た所謂『工夫達の酌婦』のゐる混雜したところを通つて、かれ等のよく散步したT街道の方まで行つて見た。その混雜と渦を卷いた新開町を通る時には、小說家の頭には、ハウプトマンのシレジヤを舞臺にしたドラマなどが思ひ出されて來てゐた。

沼の見えるあたりまで行つて、種々とその時分のことを話の種にしたかれ等は、

『それでも沼は變りませんね。』

『さうだね、こゝは昔のまゝだ。』

剖葦はまだ鳴き初めなかつたけれども、ツンツン芽を出した蘭の新芽や、若い綠の氣持よく揃つてゐる蘆荻や、藻や水草の叢生した沼の上に浮んだ小さな舟や、沼の向うに平らに連つてゐるやうな黃く色の附いた丸味を持つた麥畠や、濶く打渡された平野の遠い地平線などが、かれ等を樂しませた。かれ等の半年滯在してゐた藁葺の家屋には、午後の日影が朗らかにさし渡つてゐた。

『あそこいらに、何んな小さいんでも好いから、書きに來る別莊を一軒つくると好いね。』

場からは、棒杭を打込む地形の懸聲が夥しく川に響き渡つてきこえてゐた。

『歸りに、もつとよく見て行かうね。』

『さうしませうね。』

かう言つて二人は大勢の人達と共に、紅白の旗の飜つてゐる河岸のところに行つて、そこに來てゐる新しいペンキ塗の方の石油の小蒸汽に乘つた。

かれ等が分福茶釜やT町の躑躅を見て、その沼の畔のM屋の支店で、蓴菜や鯉のあらひを肴に午飯をすまして、再びこの停車場附近にその姿をあらはしたのは、午後二時頃であつた。三時十分發の上りまで一時間と少しある間を、かれ等はそこらをぶら〳〵と歩いて見やうとするのであつた。『枕流亭』の廣告札の立つてゐるところに來た時には、『ほ、こんなものまで出來た。えらい發展だな。こんなところまで伴れ込んで來るものがあるのかな。』かう驚くやうにして小說家は言つた。煉瓦の工場なども、かれ等には新しいものとして眺められた。

『蒲公英だの、げんげだの、澤山に咲いてたのは、この先のところあたりでせうね。そらそこに川がある。よく、二人して飛んで渡つた川ぢやない？』

かれは思ひ出したやうにして笑つて、『丁度そこいらだね。』

『まア、あんなことを……』

『兎に角これは驚いた！』

かれ等の眼には、さびしい野の代りに、その上に一直線に見えてゐた土手の代りに、賑やかな町の通りが、大きな旅館が、汽車から下りた客を一齊に黄い聲を立てゝ呼び込まうとする酌婦が、はつぴを着た工夫の群が、または煩さく川岸の小蒸汽に行かない前に車を勸めやうとする車夫が映るのであつた。

かれ等は唯きよときよとしたやうにして土手へ登つて行つた。

川は依然として元のまゝに靜かに流れてゐるけれども、しかし、その淋しさは、原始の狀態に似た姿は、もうそこに發見することは出來なかつた。前年の成功に味を嘗めた船宿の亭主は、あと二隻その石油の小蒸氣を殖して運轉させてゐるので、その塗立の新しいペンキは、かれ等に河港らしい感じをすら與へた。

『川まで賑かになつた。』

『本當ですね。』

かう言つたが、細君は下流の方へ眼をやつて、『鐵橋も出來るのね。』

『さうだね。』

鐵橋の土臺は既に四番目まで出來て、此方の岸に近いところには赤い煉瓦が半ばほど積まれてあつた。河岸から河中にかけて、土工や大工達の頻りに仕事に携はつてゐるのが繪のやうに見えた。河の中の足

『まア、御覧なさいよ。』

かう言つて、驚いて夫に指し示した。

『ほ、變つた！　これは！』

かうその文學者も言つた。

誰がいつこゝにかうした雜遝が渦を卷かうと想像したであらうか。また誰がいつかうした繁華をこの草の野に發見すると想像したであらうか。二人は汽車を下りるまであたりから眼を離さうともしなかつた。

汽車から下りて、並んで步きながらも、

『これは驚いた！』

『本當ですねえ……。もとの樣子なんかちつともなくなつて了つたではありませんか。』

『本當だ！

あたりを振返つて見るやうにして『この路かしら？　よく二人して、步いて土手に上つて行つたのは？』

『さうね、さうだらうと思ふんですけれどもね！』

細君もあたりを見廻して、『お寺があそこだから、もつと向うになつてゐたかも知れませんね。』

作だけは早い瀬に巻き込まれたか、何うしても附近にその姿は見えなかつた。

『何うすべ、俺は！』

かう言つてオイオイ嗚は泣いた。

二十五

その翌年、矢張大勢T町の躑躅を見に來る都會の人達の中に、停車場などのまだ出來ない以前に、あの沼のほとりにさびしく半年を過した文學者夫婦が雜つてゐた。

かれ等は今はあの時分のやうな不遇な貧しい人達ではなかつた。二三年前に發表したある作物は、文壇に夥しい反響を來して、今ではその文學者は日本でもその名を知られる小說家の一人になつてゐた。依然として二人の間には、未だに子供はなかつたけれども、また細君もいくらか年は取つてゐたけれども、それでもまだその姿は美しく、髮なども見事に、殊に派手なパラソルを持つて二人睦しさうに步いてゐるさまは、十分に人の目を惹いた。細君は金の彫刻をした指環を二つまではめてゐた。

停車場が出來たり、賑かになつたりしたといふことはかねてきいて知つてゐたが、しかもかれ等の眼にはこの繁華が、この發展が、この雜遝が、いかにめづらしく且つ不思議に驚かるゝばかりに映つたであらうか。沼が見え出した頃から、顏を車窓から離さなかつた細君は、

『誰だ、誰だ？』

『作だ、作だ、作がわかんねえだよ。』

『それや大變だ。』

かうした動搖が急にあたりに起つた。

『作の嬶、そこらにゐたつけが、何うした？　何うした？』

『作の嬶？』

と誰かが呼ぶと、向うの方で、そんなことは少しも知らずにゐたらしい束ね髮の筒袖の上さんは急いで走つて來た。

『何うした？　何うした？』

『作がゐねえとよ。わからねえだよ。』

『えゝ？　何うしたんだ？』

『今、木が倒れて、川の中へ落つこつたんだが、まだ上らねえだよ。』

『何うすべいな。俺ら……。援けて呉んろよ。俺が衆を……』

かう泣きさうになつて嬶は吸鳴つた。

落ちた木の附近を、一隻の舟は頻りに搜し廻してゐるらしかつた。他の四人は何うやら救はれたが、

へて流れてゐるさまが繪のやうに眺められた。

下では、ところ〴〵に焚火かしてあつて、そこに土工や大工が集つてゐるのが黑く小さく見える。橋の臺が二つ完成して、今は三つ目のところに木を組合せたものが構へられてあるが、そこではもう朝の仕事にかゝつてゐるらしく、船で材料を運んでゐるのや、組立つた木に取りついて働いてゐるのがそれと明かに指さゝれた。

『冬は、川の中の仕事は寒いだらうな。』

こんなことを思つてAが見てゐると、突然、何うした拍子か、組合せた木が折れたらしく、それにくつついて仕事をしてゐた土工の三四人が、ばらばらと一緒に川につゞいて落ちたのをかれは目にした。

『あ……』と思はず聲を立てゝ土手を走り下つた。

かればかりではなかつた。その近所に焚火をしてゐた土工や大工の連中も、そのけたゝましい音に驚かされて、皆そつちへと走つて行つた。

かれが川の岸に行つた時には、もうそこに大勢人は集つてゐたが、川の中に落ちた大工の一人二人は逸早く早い瀨から遁れて、濡れ鼠になつて木に縋つてゐるのなどが見えた。其處にあつた舟の頻りに漕ぎ廻されてゐるのも見えた。

『一人わかんねえだよ……』

が壞れて、それがさかさに倒れかけて、傍で働いてゐる土工が大怪我をしたことなどもあつた。始めはそれほどでなかつた工事も、その年の冬には、もうかなりに盛になつて、それからそれへと續々人が入り込んで來た。

川の方の工事も中々困難であるらしく、土手へ上つて見ると、土手の向う側の下にもバラックが一列に並んで連つて、測量した川のところ〲に、大きな棒杭を何本となく打込んだり、そこに積み上げる爲めの煉瓦を女の土工がせつせと運んで働いてゐるさまが手に取るやうに見えた。川底は測量した豫定よりも柔かく、棒杭を打込んでも打込んでも十分でないので、請負つたものは非常に困つてゐるといふ噂などもあたりに傳つた。寒い朝は、土手下の河岸にところ〲に焚火が燃されて、霜が重ねられた木材や煉瓦や鋸屑の上に眞白に置いた。

契約が二年かゝるといふことであるが、半年經つても、まだいくらも手がつけられてゐないのを人々は見た。

二十四

若い車掌見習のAは、ある朝、ひとりで土手にのぼつて見た。それは矢張寒い霜の白い朝であつた。西風はなかつたけれども、山の雪はきら〲と美しく輝いて、川の錆鐵納戸の色をなして、小波をたた

宅は今はそれ等の家屋のずつと奥の奥になつて了つた。

殊に、一層目に立つて賑やかになつたのは、その驛前の料理屋、だるま屋だけでは足りないので、沼の方へも、土手下の方へも、それと同じやうな小さな飲屋が澤山に出來て、卑しい、大きな聲を張上げる、またいやに白くべた〳〵と白粉を顏中に塗り廻した女が、其處此處の町から狩催されて集つて來て、澤山賃金の入る工夫達を相手にして騷ぎ散らした。お玉やお常やお政などは今は却つてその渦の中に埋められて、其處にゐるかゐないかわからないやうな形になつて了つた。

『これでも酌婦が違ふんですからね。工夫さん達を相手にする酌婦は別にいくらもあるぢやありませんか。』

お玉は何うかすると、こんなことを言つて、いやにしつこい客に向つて、啖呵を切つたりした。

それから（工夫さん達の酌婦）と言ふ言葉が、かれ等の間に多く使はれるやうになつた。『えゝえゝもう賑かですけども、賑やかなのも好いけども。……かう亂暴になつて來ちや困るわね。私達まで工夫の酌婦と一緒にするんだもの。』などと元からゐた酌婦達は言つた。

トンカントンカンする音は喧しい位に彼方此方にきこえた。時には大きな橋の臺にする鐵材などが來て、それを普通では運び切れずに、人足が二三十人も寄つてたかつて、キリンをかけて、曳々聲を出して、一日かゝつて二三十間も運べないやうなこともあれば、停車場から鐵材の工場に持つて來るトロコ

の資本が出來ないのでぐづ〳〵してゐた。ところが、八月に入つて、いよ〳〵その計畫は實行されるといふことになつて、それに使用するための鐵材や木材が次第にその停車場へと運ばれて來た。

『今度はいよ〳〵取りかゝるらしい……』

かう到る處にその噂は傳はつた。

九月に入ると、それはいよ〳〵事實になつて、停車場附近は次第にその雜遝を加へて行つた。川の工事の方の請負らしい男、それに伴れられて來た大勢の工夫、そのはつぴにはいづれも野澤組といふ字が書かれて、土手から煉瓦の工場近くにかけて、バラックのやうな掘立小屋も何軒ともなく建てれば、鐵材の方の請負は、それとは反對に、停車場から沼の方へかけて、淸水組事務所といふ大きな招牌をかけた板塀で取廻した家を拵へて、段々其處には技師らしい髯の生えた肥つた紳士だの、背廣服をつけてちよこちよことあたりを驅け廻る技手だのが出入した。

トロコは縱橫にその構内に引かれて、汽車の貨車が運搬して來た材料は、木材は木材、鐵材は鐵材といふ風に、てんでにその受持の方へと運ばれて行つた。あたりの光景は丸で一變した。曾ては、停車場が野の中にぽつんとしてゐた時代、つづいては停車場が人家に圍まれるやうになつた時代、M屋の二階建の新築の旅館が際立つてあたりの人の目についた時代、その時代から比べると、また一層多くの人家が出來、人が他鄕から大勢集つて來て、軒の低い間に合せの家々はずつと此方の方まで續いた。驛長の社

派手な蝙蝠傘の日に美しく光る春は再び來た。田圃の麥畠の中に男女づれの群の衣裳の隱見する春、ダイアや金の指環やステツキや中折帽の縺れ合ふやうな春、分福茶釜の寺の和尙のにこ〳〵する春、お玉やお常やお政のてんてこ舞ひをする春、沼の入込んだ蘆荻の間に小さな舟の往來する春、蓴菜の土產の瓶を今年は誰も彼も拵へて、其處にも此處にも並べて置くやうな春は來た。

そのランチは隼のやうに此方の岸から向うの岸へと溯洄したが、一隻ではとても汽車每の乘客を乘せ切ることは出來なかつた。で止むを得ず、却つて步く方が好いと言つて、大廻りにRの渡しの方へ土手の上を通つて行く人達も多かつた。野には靜かに蒲公英の黃い花などが咲いた。

二十三

『いよ〳〵出來るかな、鐵橋が――』

かうした噂がそろ〳〵人の口に上つたのは、その晚春の躑躅の賑ひも濟んで、これからあたりは田植と麥刈に忙殺されやうとする頃であつたが、その噂は評判されたり打消されたりして、夏になつても、捗々しい計畫はまだ打立てられなかつた。兎に角、何んなに經濟にしても二十萬圓はかゝる。會社にしては何うしてもそれをつくらなければならないのはわかり切つてゐるが、それを一刻も早く完成して、野州の機業地に連絡させなければ、人形をつくつて魂を入れないやうなものであるが、しかし容易にそ

こんな言葉がそこゝで聞かれた。

この思ひ立は見事に圖星に中つた。T町の躑躅を見に來る都會の人達は、去年で評判になつてゐるので、まだ花には早い頃から、ぞろ／＼と早くもやつて來た。停車場から土手へかけては、再び例の色彩の濃やかな雜沓が始まつた。

始めて試運轉をした時には、その汽船に紅白の旗だの、酸漿提灯だのを一面に飾つて、それに船宿の主人が乘つて、そしてそこから停車場の岸まで二十町ほどあるところを勇ましくやつて來た。兩岸の人人はさびしい川が再び昔の賑やかな色彩をつけて來るのをめづらしさうにして見た。

Rの渡頭の人達や、土手下の溜りの車夫や、乘合馬車の持主などは、この距離の短縮に少なからぬ打擊を感じて、一時その事業に對する反對運動を試みたが、しかし、さうした便利のものをさし留めることは警察でも出來なかつた。いろ／＼すつた揉んだの後、車夫達や乘合馬車の多くは、止むなくその向う岸のランチの着くところにその溜りを持つて行くことにした。

河岸には紅白の旗が建てられ、土手から停車場までの間には、一錢蒸汽の開業——花山への近路といふ圏點つきの大きな赤インキで書かれたビラが處々に張られて、あたりは一層賑やかな春の雜遝の色彩を添へた。『や、こんなところに、一錢蒸汽が出來た。拔目がねえな。』こんたことを言つて、都會の人達は、土手から下りてその旗の立つてゐるところへと行つた。

二十二

向う岸の昔の船宿、外輪の小蒸汽が毎日夕方に眠むさうな汽笛を鳴らして溯洄して來る時分に榮えた土手の船宿、その船宿にその頃使つて不用になつて、何にも用途がないので、爲方なしに船の水車に使つてゐるペンキなどのすつかり剝げた古い小さな汽船が一隻あつた。今年の晩春の花の時に、何か一儲けしやうと思つていろ〳〵考へ廻らしてゐた船宿の主人は、ある時そこに水車になつて動いてゐる汽船を見て礑と膝を打つた。『さうだ、これで一儲け出來る。』かう思つて、かれは早速そこへ下りて行つて見た。もう古く、ひどくなつてはゐるけれど、それでも、これであちこちを打附け、破損したところを直し、近頃流行の石油を使用するエンヂンを一つ買つて來て据ゑ附けさへすれば、それで十分停車場の土手の岸から此方の岸まで眞直に溯洄させること位は何でもなかつた。かれは早速大工を呼んでその仕事に取懸らせた。

水車から離して、それを川岸に引張つて來て繫いで、トンカントンカンやつてゐるさまが晴れた日の川の上流にそれとさやかに捺すやうに見えた。

『一錢蒸汽が出來るんだとよ。』

『船宿の旦那、旨いことを考へたな。』

簞笥、机、大きな鏡臺、ことに廊下にかゝつてゐる細長い鏡には、その妾の婀娜な姿がいつもよく映つた。二階の方にも、押入には、贅澤に給羽二重などを使つた絹布の寢道具が三組も四組も入つてゐた。

料理番と女中とは、その女將が萬事飲込んで世話をして吳れた。『さうだ。その方が却つて間違ひがなくつて好い。』と此方で贊成したので、二人はまだ公然夫婦にはなつてゐないが、誰も皆その仲を承認してゐるやうな人達がやつて來た。女はお時と呼ばれた。他に色の白いお蔦といふのが雇はれた。

益田の旦那は此頃は新築の家屋が珍らしいので、大抵は此方に來てゐた。T町の財產家連を呼んで御馳走をした時には、町の藝者の他に東京からも十人近くの美しい姿がやつて來た。誰も益田の全盛に目を睜らないものはなかつた。『死んだ上さんがゐちや、そんな眞似は出來ねんだが、惜しいことをしたなア。あれぢやいくらあつたつて、益田の身代はさゝふさだんべ。矢張、あの元の上さんは豪らかつただなア。』こんなことを慨嘆するやうに評判するものもあつた。

車夫達はまた車夫達で、『豪氣なもんだな。金せいあれや、何でも出來るんだな。あそこへ行くと、丸で極樂に行つたやうな氣がするぜや。』などと言つた。

丁度、これから賑やかにならうといふ春なので、梅を見に、または春の野を見に近所までやつて來た都會の人達は、さうした川に臨んだ旗亭が出來たのを聞いて、好奇にちよいちよい其處にやつて來た。毎日三組や四組の客は汽車から下りて、その川岸の松原の中に行つた。

瓦の工場の後の土地が少しばかり買はれて、それからずつと土手に上つて行くやうに路がつくられて、一面に綺麗な砂利が敷かれた。

『枕流亭へ！』

かう言ふ客があると、車夫は五六町のところを十五錢賃金を取つて曳いて行つた。

一方に、田舍の酌婦達の淫らな生活があると共に、一方には、次第に都會のさうした生活が入つて來るのを誰も目を瞬るやうにして見た。開業式の日は、役者や藝者や新聞記者などが大勢やつて來て、それは騷ぎであつたといふことであつた。

その松原の中の三棟の建物は、美を盡し善を盡したといふまでに到らなかつたけれど、檜だの、栂だの、ヒバだのが處々につかつてあつて、一番大きい二階建の欄干から眺めると、川が唯一目に見わたされて、靜かに岸に偏つて流るゝ水の音が終夜枕の下にきこえた。一棟はそれからやゝ離れて、松の緣の繁みの中に半ば埋められるやうになつてゐるが、それは六疊と四疊半の二間で、庇も根太も低く、しやれた船板などが使つてあつて、いかにも靜かに人知れない歡樂に耽るに都合の好いやうに出來てゐた。四目垣を取廻した中には草花などが繪のやうに栽ゑられて美しく咲いた。

もう一棟は二階建の家屋とほゞ續いてゐるやうになつてゐるが、それは平家である割に一番數寄を盡くしてつくられてあつて、そこに、金田はその女のために新しい道具を澤山に持つて來て据ゑた。長火鉢、

われ等兒童のためにも、そこは好き運動場なりしに。眺めもよく、風も涼しく、秋は草花など多きところなりしに……。よくそこより川岸に下り立ちて、夏の日など泳ぎたりしを。また、冬はそこより見やる山の雪世の常ならず美しかりしを。心なの村の役場の人達よ。かゝる好きところを僅かなる金貪りて貸し與へんとは――

聞くところによれば、TM町のとかいふ金持の所業のよし。その愛する阿嬌のために築く臺とかや。われ等の如くその月々の生活にすら不十分なるもの多きを。世はさまぐ〵なるかな。眞にさまぐ〵なるかな――》

かう言ふ風に見るものもあれば、今に大宮以上の村の公園が出來るなどと喜んでゐるものもあつた。松原の中には、三棟ほどの家屋が出來るらしく、夏の末には瀟洒な二階造の方が早くも出來て、それが繪のやうに美しい松原の中から見えた。大工の使ふ釿や鋸の音は絶えずそこからきこえて來た。

二十一

このT川の畔に再び春がやつて來る頃には、その松原の中の家屋はもうすつかり出來上つて、枕流亭といふ廣告札は、停車場を下りると、迷ふことなく、直ちにそこに人々を導いて行くやうに、それからそれへと路の角々に立てられてあつた。それに、そこに行く路を近く且つ容易ならしめるためには、煉

助役も笑ひながら言つた。

そこは土手に上るとすぐ見えた。成ほど好い處であつた。土手と同じ位の高さで、松の一ところ諍いてゐる形が、ちよつと海岸の磯を思はせた。坪數にして七八百坪あるが、これに金さへかければ、いかやうにも立派なつれ込宿が出來た。ある日は女は旦那と他に大工の棟梁らしい男と三人で、嬉しさうな顏をして、その松原の中をあちこちと歩いてゐるのを土手を通る人達は見かけた。『金がある人はえらいことをやるな。』とか、または、『益田の旦那、餘程あの女に參つて御座ると見えるな。それや、益田位の身代なら、あそこに家くらゐ、何んな立派に建てやうが、びくともしまいけども……。』とか何とか評判されながらも、着々それは事實になつて行つて、田舍では駄目だと言ふので、わざ〳〵東京から大工の棟梁が弟子共を五人も六人もつれて來て、最初に建築小屋見たいなものを建てゝ、それに寢とまりしながら、汽車で運んで來た檜や栂のりうとした木材にせつせと鉋をかけたり、臺木に穴を明けたりした。

教員のSの日記にはこんなことが書かれた。

(——日、晴。

我等の好散步地とした川岸の松原にも今は家屋の立てらるゝことゝなりて、今日行きて見し時には、大工達大勢集りて棟上をなし居たり。立派なる家建てらるゝと覺し。賑やかになるは好けれど、われ等のためには餘りに好ましくもあらず。

いて、『あそこを御覽な、始めはやり方が下手で、なまなか、田舍の旦那衆を相手にしたから失敗したけれども、田端の人が引受けてやつてから、すつかり好くなつたつて言ふぢやないか。かういふところでするには、思ひ切つて、東京の好いお客を相手にするやうにしなけれや駄目だよ。』かう女將は言つた。で、女はすつかり乘氣になつて、益田の旦那を勸めて、川の見える土地を五六百坪買ふための運動を始めた。

ところが土手にはさうしたものをつくるのを許可されなかつた。土手下ならいくらも好いところがあるが、また安くて適當なところが容易に手に入るが、何うもそれでは面白くなかつた。それで、何うかして、そこから五六町下流の土手のすぐ向う下になつてゐて、しかも地盤が高く、松原などがあつて、洪水の時にもその虞れのない、村有になつてゐるところを一時借りたいといふ話になつて行つた。村でも、何うせ、唯置くのだからと言ふので、割合に高い坪錢で、愈々益田に貸すといふ話のある時分、驛長はそれを何處からか聞いて來た。

『それも好いだらう。つまりは此處の發展の一つになる譯だから……。今に、美しい東京の奴がやつて來る譯だな……。』驛長は面白さうにかう笑つて助役に話した。

『成ほどあそこなら好い……。少し離れてゐたつてさう不便ぢやない……。これはやりやうによつては、本當に旨く行くよ。あの女、旨く考へたな。』

近に、一方かの女の妾宅として、また一方營利上ではあるが、損さへしなければ好い、また客種もちやんと渡りのついたものでなければ需めに應じないといふ程度で、靜かに男女の世離れて遊ぶ席亭見たいなものを拵へたいといふのであつた。本妻は死んでも、益田は流石にその女をそのまゝ家には入れることはしなかつた。女もまた女で、さうした面倒の多い舊家に入つて行つて、うるさい世間の情實の渦の中に加はりたくなかつた。で、東京では東京で一軒あのまゝにして置いても好いから、此の近所に、お前も退屈しないやうな別宅を一軒拵へてやらうと益田は言つた。〈それにはKMの停車場あたりが好い。あそこなら、汽車で二時間と少しで東京にも行けるし、T町の本宅とも多少離れてゐて、煩くないし、〉といふことになつて、それから引續いて、〈それにしては、一人ぽつねんとあそこにゐるのも退屈だ……。決して損はしない。やりやうさへよければ、將來大に發展して、貴方の世話にもならずに、私一人位は立流にやつて行けるやうになるかもしれない。〉と言ふところまで漕ぎ附けて、そして一度はかねて懇意にしてゐる郊外のつれ込宿の女將をも伴れて來て見て貰つた。と、その女將は、すつかり惚れ込んで『好いどころぢやない。立派にやつて行ける……。將來にも見込がある。かうした靜かな處に、さういふものを拵へれば、箱根、鹽原、伊香保にももうお客が倦きてゐるから、屹度好いに相違ない。損なんかするもんかね、お前さん……。お前さんがやつて見て、いけなければ、その時は私が引受けてやつても好い……。好いところだね。すつかり私や氣に入つちやつた。』かう言つて秩父の長瀞の例などを引

ゐた。低い土手下の一廓には、炊烟がいつも賑かに靡き渡つた。
夏の中頃には、M屋の旅館が完成して、その新しい瀟洒な欄干を取廻した二階屋は遠くから見えた。

二十

此頃、T町の益田の美しい妾の姿がをり〳〵其處に見えた。時には獨りで來て、土手の上に行つて長い間立つてゐることがあつたり、土手から煉瓦の竈の工場の方へ下りて來ることがあつたり、また時には、益田の肥つた旦那と東京から汽車を下りて、並んだ姿をくつきりと土手の上に見せて、何か頻りに話してゐることなどもあつた。ある時は、肥つた、東京でも聞えた茶屋の女將であるやうな四十六七の女と來て、矢張、土手の上に行つて、あたりを眺めて、そして歸りにM屋に寄つて午飯を食つた。
今では益田のその妾の美しい姿も、人の眼にはめづらしくはなくなつたが、また驛長や助役と話をしたり、M屋の女中達とも懇意になつたりしたが、しかし度々やつて來て土手の上に登つてあたりを眺めたり何かしてゐるといふことが、あたりの人々の好奇心を惹いた。
段々その話は傳つて行つた。
一番先に、村の人達から、その妾が度々そこにやつて來る理由が驛長の耳に入つた。それはその妾が、自分が曾てさうした社會にゐたことから思ひ附いて、其處に、そのT川の一目に見わたされる土手の附

どに說法した。
M屋はT町の方に本店があり、躑躅のある沼添ひの丘の上にも支店が出してあるので、その繁昌は一通りではなかつたが、停車場前の收入も大したもので、これでは來年までには、もう一棟建て増しをして、一方旅館としての設備をしなければならないなどと主人は言つてゐた。主人の腹では、此方の采配をお常に振らせて、行く行くは、隣のY屋のやうな妾宅にしやうと思つてゐるやうな口吻を見せた。
『KMへ。』
『KMの停車場へ。』
かう誰も彼も思つてゐるらしかつた。初めの一年は、行末は町になるだらうと言つても、まだ二の足を踏んでゐたものが多かつたが、今ではそんなことを言つてゐるのは愚だ。またさう思つたやうにならなくとも、今の中儲けて置くのが勝だといふ風にして、人々が段々こゝに集つて來た。其處にも此處にも新しい家が建てられた。土手下につゞいたところには、小さな二間位の長屋が何軒か出來て、彼方此方から集つて來てゐる車夫達は、皆な村から家財道具を運んで移轉して來た。女房子供などをも伴れて來た。
朝など土手の上から眺めると、あんな方にまで家屋になつたかと思はれるほどその區域はひろげられて、出來た時には、停車場が隅にあつたのが、今ではそれが人家で取卷かれるやうな形になつて行つて

十九

種々な噂が傳つた。この一期だけでも儲けたものは非常に多いといふことであつた。車夫はにこにこ顏で、醉つて、車を曳いて蹌踉として家へ歸つて行つた。馬車の馭者や別當は、腹掛けの丼の中にチャラチャラ金を滿たして、町の場末の女のゐるところに集つて行つた。ことに、蓴菜を始めて瓶詰にして賣り出した男は、一升十五錢のものを七八十錢に賣ることが出來て、しかも無數に賣ることが出來て、十日ほどの間に、お釜を起すほどの大儲をやつたといふ評判であつた。

分福茶釜のある寺では、とてもそんなに大勢見に來るものはないと思つて、觀覽料も別にきめずに、普通思召しといふことにして置いたが、餘りにぞろ〳〵人がやつて來るので、五錢にし、十錢にし、終には十五錢にし、俄かに觀覽券までをも印刷した。そこの和尙は思ひもかけない寶をその古い釜に發見したといふやうにして、にこ〳〵して喜んでゐるといふ話なども停車場まで傳つて來た。

麥落雁を賣る本店でも、維新前にそれをそのつれ合が始めて製造したといふ七十ばかりになる老婆は、『運つて言ふものはわからんもんだ。賣れないものでも、いつ賣れるやうになるかわからない。だから、正直眞當にしてゐることが何よりだ。値打のないものを拵へて置いては、賣れたと言つても、その賣れたといふことが怖いことで、わるけれや、もうお客さまは買はねえから。』などと好い機嫌で息子や嫁な

に滿ちた。改札口には群集が押し合ひへし合ひ、派出所の巡査がいくら制しても制しても制し切れないほどに鬨の聲を擧げた。そして改札を始めるのを待ちかねるやうにして、人々は大騷ぎをしてプラットホームに出て行つた。若い夫婦づれや子供づれなどはとても乘り込むことは出來なかつた。『これぢやとても駄目だ……。もう一汽車延しませう。九時にもまだ一度あるんですから。』などと言つて、さういふ人達は前のM屋やY屋へ行つた。

さうした驛前の料理屋でも、皆なてんてこ舞ひをしてゐた。お玉や、お常や、お政なども今日は酌婦として白粉を塗つたり何かしてはゐられなかつた。かれ等は皆な襷を外す暇もないやうにして働いた。板場では、澤山入れて置いた鯉が足りないので、沼の方へ二度も三度も取りにやつてもまだ足りず、今では爲方がないから、客の註文を斷るといふ始末であつた。M屋の裏の田圃に面した室などには、客が一杯に滿された。

やがて最後の九時十分の汽車は此處を出て行つた。

そのあとはやゝ靜かになつた。丁度月のおぼろに霞んで出てゐるやうな夜で、暖かい夜風が靜かに顔を撫でるやうに吹いた。丁度大風の吹いたあとか何かのやうで、女中達も、男衆も、または軒に並んでかゞやいてゐる灯も、ほつと呼吸をついたやうに見えた。そこゝに白く紙屑が散らばつてゐた。

蛙の聲は裏田圃から靜かに聞えて來た。

『面白いもんだな。』

かう言つて驛長は笑つた。

さうした大勢の都會の人達は、麗らかな晩春の日影に浴しながら、ぶらり〳〵と或は松原の中の路、或は麥畠の綠の田圃、或は丘から丘の上へ越して行くやうなところ、でなければ街道を眞直に車で、古びた衰へた昔の城下町へと行き、半ば草藪に埋れた城址、眞菰や蘆荻の生えた沼、深く入込んだやうなところから、平生見たこともないやうな小さな田舟に乘つて、矢張小さな櫂で巧に舟を行る船頭のさまなどに興がりながら、錆びた沼を渡つて、その向うの丘の上にある躑躅の亂れ開いた丘へと行くのであつた。交通の便のなかつたために、全く文化に後れたそのあたりの純樸な珍奇な生活や、風俗や、または田舍の靜かな畔道は、かれ等を樂しませるに十分であつた。

そしてかれ等のあるものは、沼に臨んだ料理屋で川魚料理を肴に酒に醉ひ、ある者は躑躅の咲いた芝草地で鬼事などをし、またある者は、幾人もゐないT町の藝妓を舟に乘せて、沼の中で三味線を彈かせたりなどして、樂しく一日遊んで、そしてもとの川沿ひのKMの停車場まで戻つて來た。かれ等は、誰も彼も爭ふやうにして、めづらしい蓴菜の瓶詰を、または昔からその町の名產であつた麥落雁を買つてぶら下げて歸つて來た。

從つて夕暮近い停車場の雜沓は驚かるゝばかりであつた。小さな建物はさうした都會の歸り客で一杯

をふき返した。誰も彼も皆な此方へと向つてやつて來た『川向うまで行きや儲かる仕事がある。』かう言つて犇くやうにして出かけて來た。T町とA町、またにH町とT町、その間を一日一回通つてゐた馬車屋は、馬車の車臺が足りないので、壞れて使へなくなつたのを修繕してそれに馬をつけたり、またわざわざ遠くのO町あたりから一臺二臺此方に來て貰つたりした。

『えらいこつちや……』

誰も彼も目を睜つた。

『汽車つて言ふものは、こんなに好い便利なもんかな。』その癖、鐵橋が出來て、汽車がT町からA町の方まで開通すると、自分達の仕事がなくなるのを暗に心配してゐる車夫や馬車の別當などが言つた。

驛長も流石に驚いたやうに、『今日は千二三百人、もつと以上の乘降客があつた。隨分やつて來たもんだな。矢張、都會の人達には田舍ののんきなところがめづらしいんだな。それに、今日は好い日曜日だつたから。』

『これは、もう少し設備をよくして、廣告を盛にすれば、もつとやつて來ますな……。今年はもう遲いが、來年は早くから設備をして置くんですな。』

『料理店なんかも、もつとなくつては足りない位だね。』

『本當でさ……。これでは、鐵橋が出來て、汽車が開通しても、此處は屹度賑やかな町になりますぜ。』

下の溜りではいつも車夫が足りないで困つた。

都會の人達は其處で車を雇ふなり、またはのんきな徒歩を選ぶなりして、土手の上から霞に包まれたT川の岸に下りて、桑畑の新しく芽を出した中をぞろ〳〵とRの渡頭へと行つた。誰れの顏にも春の一日の行樂の樂しさとのんきさとがあつた。あんなに揃つた美しい同士の睦しい若い夫婦もあるかと思はれるのもあれば、可愛い坊ちやんに洋服を着せて、そして何苦勞なく旦那さんと並んで歩いて行くものもあつた。かと思ふと、てつきり藝者と誰の眼にも見える美しい女に大きな丸髷を結はせて、わるくふざけ散らかしながら土手に上つて行くものなどもあつた。

かれ等の眼には、新しく出來た終端驛らしい町のさまが、そこらにゐる酌婦達が、いかにも田舍々々した料理屋などが映つた。『好いわねえ、田舍は？　氣がせいせいするわねえ。何うでせう。蛙が鳴いてゐる。』などと心から樂しさうに歩きながら話した。

此處の土手下に車がなくとも、Rの渡しをわたると、向うに車も數臺來て居れば、乘合馬車も二臺も三臺も來てゐて、さういふ都會の人達を二里ほどあるT町の花山へと伴れて行つた。途中にはお伽話で誰も知らないもののない分福茶釜のある大きな寺などがあつて、其方の方へも、松原の中を傳つたり、田圃に添つた路を辿つたりして、ぞろ〳〵と都會の人達は行つた。

汽車がないのですつかり衰へかけてゐたT町は、川向うまで汽車が出來たために、俄かに新たに呼吸

この頃、教員のSは寫生道樂から、植物採集に移つて、よく沼やら、野やら川やらにめづらしい花をさがして歩いた。この間の日曜には、同僚のNと一緒に停車場からHまでの間を二里ほど歩いて、凡そ目に留る花といふ花を採集した。

『みつまた、すゞめのゑんどう、からすのゑんどう、のみのふすま、すみれ、つぼすみれ、さんしきすみれ、いぬからし、たんぽゝ、こけりんどう、はこべ、ながしくはこべ、ふき、なづな、げんげ。』

さうした花の名が一杯にかれの手帳に書きつけられた。

十八

思ひがけない、また今までに曾て見たことのない賑やかな色彩の濃やかな繁華が一時にそこに渦を巻いた。

汽車の人達の想像以上に、都會の人達はT町の花山へとやつて來た。どの汽車からも、どの汽車からも、派手な蝙蝠傘や、美しく着飾つた衣裳や、中折の帽子や、銀のカンの把手のついたステッキなどが溢れるやうにぞろ〳〵と下りた。

汽車の會社が花の初めに、新聞記者を招待して、こゝまでは汽車、それかれは車で、T町へ伴れて行つて、花火を揚げたり何かして歡迎して、その記事を書いて貰つた影響も決して尠くはなかつた。土手

なつて、此頃では、他の汽車のやうに、きまつた驛々で辨當や茶や煙草を賣るやうになつた。石炭の燻ぶる臭ひのいやに人を刺戟する車室の中の置暖爐も改良されて、スチイムに自づから室内が暖まるやうになつた。『暖氣が洩れるゆゑ、この窓を明け放しにしてはいけません。』などゝ一時は黑い板に白い字で書かれて、六十度以上の室内の暖かさに乘客の顏も赤くのぼせるやうな時もあつたが、今はさうした冬も過ぎた。都から此方の野にやつて來る人達は、到る處に靑々とした麥畠と、それに雜つて咲きすぎてゐる梅の花と、今を盛りに咲いてゐる桃の花とを見た。百姓が野に出て不思議な腰附をして麥の綠を踏んでゐる時も過ぎた。

『今年は、汽車が出來たで、T町の花山は人が出べい。』

汽車でも沿道の名勝は盛に廣告してゐるし、都會の人達にも、春を趁つて、一日かへりの行樂に、妻や子供を伴れて出かけるのが流行るので、沿道の藤の花や、桃の林や、つまらない小さな名勝まで、皆な目を睜るやうに群集の集つて來るのを見た。『今年はT町の花山には、屹度人が出る。臨時汽車位出さなければならなくなるかも知れないぞ。』こんなことを汽車の人達は言つた。果してまだ躑躅には早いといふ頃から、汽車を下りて行く人は次第に殖えて行つた。

春は次第に闌になつた。桃、櫻、杏、さうしたものは一時に野を彩つた。T川の流れもどんよりと霞んで、をり〳〵通つて行く船の櫓の音が緩かに聞えた。夜は蛙の聲が微かに戀を語り始めた。

雪は何遍となく來ては、その野添ひの新らしい墓を埋めた。一月は二月になり二月は三月になつた。沼に添つた路には新らしい草が萠え、青々とした麥畠の隅の早咲の梅が白く咲くのが見えた。雲雀の高く囀る聲が空にきこえた。

十七

西風の吹かない日は、野はもうすつかり春であつた。人達は長い冬の寒さから蘇つたやうにして、沼に添つた道を歩いた。ある日は天神の祭禮だと言つて、晴衣を着た人達が子供を伴れたり何かして、ぞろぞろと野の道を通つて行つた。

一時は足駄でなければ歩けなかつたやうな霜解の泥濘もいつか乾いて、街道には次第に白い埃が立つやうになつた。曇つた日にはもう咲き初めた桃の花が赤く見え、チヤンカラチヤンカラと機を織る音がいかにものどかに鷄犬の聲に雜つてきかれた。

西風の吹荒れる音に雜つて、凄しく煤烟を野に橫折らせて日毎に通つて行つた汽車にも春が來たやうに思はれた。乘客ののんきさうな顏が、いつも車窓の中に重つて搖いて行つた。

汽車の中にも段々いろいろと設備が整頓して行つてゐた。工場の職工見たやうな汚れた服を着て、不思議な制帽をかぶつて、煎餅、あんぱん、蜜柑、柿、煙草などを車中で賣つてゐた仲賣の制度もやめに

『よし、よし。』

かう言つて主人は穴の中が見えるやうにしてやつた。

やがて新らしい墓は築き上げられた。

『脆いもんだな。』

『本當だな。』

『可哀さうには可哀さうよ。一昨日まで働いてゐたんだから。』

こんな話をしながら、提灯の影に縺れるやうにして、人達は其處から庫裡の方へと歩いて行くのが見えた。やがて再び暗い寒い西風の夜となつて了つた。

其處には塔婆が一本立てられてあるばかりで、墓標すらもなかつた。それでも翌日の午前には、お玉とお常とお政と三人してお詣りに來て、樒をさしたり線香を手向けたり手を合はせたりして行つたが、その後は誰もそこに詣でに來るものはなかつた。一度若い車掌見習がやつて來た時には、女達の手向けた樒も枯れて、落葉がカサコソあたりに散つてゐた。若いAは其處から野の方へ出て來ながら思つた。《Kは何うしたらう？　Kはまだ知らずにゐるのだらうか？》實際Kはその時分は何處に行つてゐるかわからなかつた。暫く經つてから、女の死をAが報じてやつたが、その返事すらもやつて來なかつた。Kはもうその海岸の停車場にも勤めてゐないらしかつた。

寺では、和尚は客があつて酒を飲んでゐるらしく、容易に出て來なかつた。寒い風の吹き頻る中に、四人はぼつねんとして待つてゐた。本堂の棺臺の上に置かれた棺が白く闇の中に見えて、主人が持つて來て玄關の入口のところに吊して置いた提灯の蠟燭は風にチラチラと搖いだ。

やがて僧衣をつけて出て來た酒氣のある和尚について、上さんが持つて來て棺の兩側と本尊の前とに立てた三四本の蠟燭、そこで形ばかりの短かい讀經がすむと、人足はばたばた寄つて來て、棺をそのまゝかついで、墓地の無緣の隅のところに淺く掘つた穴のところへと運んで行つた。主人の持つた提燈の灯に照されながら……。

主人は穴を覗いて見て、

『水があるな。』

『何うも、此處等は卑濕地だで、しやうがない。何處でもかうだ。三尺も掘ると、もう水だからな。これでも隨分かい出したんだぜ、なァ。』

かうもう一人の穴掘の男は言つた。

『しやうがねえや……』

黑く光つて湛へてゐる水の中に、棺を踏みつけるやうにして、そのまゝ人足は土を埋めた。

『旦那、提灯をもう少し高くして下さい。』

て埋めて呉れと賴んだ。

湯棺もつかはせず、線香も碌々上げず、僧に來て經も讀んでも貰はずに、此夏自分で買つてよく着てゐた浴衣を一枚着せて、そのまゝ棺の中にやゝ硬くなつた足の骨をほつほつ折るやうにして無理に入れて、形ばかりの白布でそれを卷いて、そして日が暮れてから、主人と主人の懇意の男と、他に人足二人を賴んで、そして夜の道の中を寺へと持つて行つた。

それを店の入口で見てゐたお玉は、いかにも悲しさうにして手を合せて見送つてゐたが、やがて入つて來て、

『今持つて行つたよ。』

『何を……』

『死んだ人をさ……。ああ薄情なもんかね。人間は？』

『だつて、主人の身になつたつて、金ばかりかゝるんだから、無理はないよ。』

かう其處にゐた板場の男は言つた。『それよりも、若いのに、惜しいことをしたと思ふよ。そんなに急に死ぬなら、俺でももう少し可愛がつてやればよかつた。』

『好かない奴！』

お玉は笑ひながら、奥の手の鳴る一間へと行つた。

傍からお常は言つた。

『お前さんもう行つて……？』

『さつきちよつと行つて來た。可哀相でぞく〳〵しちやつた。』

『何んなにして死んでるて？』

『裸にして置いてあつたよ……。あゝもう厭だ、厭だ。こんな稼業なんかふつふつ厭だ……』

かうお常は身震ひするやうにして言つた。

『Kさんが聞いたら、悲しいでせうね。』

『さう、さう、Kさんツて言ふ人がゐたァね。知らせてやれば好い……』

『知らせてやつたつて、何うにもなりやしない。何うせおあしなんかありやしないんだから……。それに、死んだ人は本當に思つてゐたのかしら？』

『思つてゐたには思つてゐたらしいよ……』かうお玉は言つた。

Kのことはその主人の頭にも上つたらしく、驛長の許にその話をしに行つたが、今更呼んだつて爲方がないといふので、主人はすご〳〵歸つて來た。

主人は成るたけこつそりと、誰にも知らせずに、其夜すぐ埋葬して了はうと決心した。主人は自身寺へ出かけて行つた。そして無縁の者の埋められるところでも何でも好いから、やすいところへ穴を掘つ

さつがあつたり何かして、まだ借金がそのまゝに殘つてゐるのに、これから十分働かせなければならないと思つてゐたのに……。葬式まで此方でしてやらなければならないといふのは――『此方の不運なんだから何うもしやうがねえ。』などと繰返し繰返し主人は言つた。

近所でもそれを聞いた時には、誰も驚かないものはなかつた。

『だつて、昨日、そこに出てゐたぢやないか。』

かうお政は言つた。

『まア、吃驚した。え、まア、お袖さんは死んだつて……。』

お玉もかう眼を睜るやうにした。

『人事ぢやないよ、お前さん……。國からは誰も出て來ないんだとさ……。それに、誰も本當に來てやらうといふお客もないんだとさ。あの肥つた男は何うして？　あの繭買さんは何うして？　さうなると人間は薄情なもんだからね。誰も寄りつきやしないやね。可哀相ね。』

『本當ね。……何うしてまたそんなわるい病氣が出たんだらう？』

『手遲れになつたんだとさ。始めに療治をすれば、治らない病氣ぢやないんだつて……。無理をしたんだつて……』

『線香でも上げておやりよ。』

など、言つて、平常と違つて、いくらか蒼い土氣色をしたやうな顏をしてゐた。顏の鼻の下のところに小さな粟粒のやうな腫物が出來て、それが痛い、痛いとは言つてゐたが、それが原因であるなどとは夢にも思はなかつた。

無理をして、つとめて客の前にも出るやうにしてゐた。

それが、二日と經たない中に、一面に顏が腫れ上つて來て、奧の一間に汚れた薄い夜着を着てかの女は寢てゐたが、H町から醫師が呼ばれた時には、その腫物は恐るべき面疔で、もう手おくれになつて、何うすることも出來ないといふことであつた。家の人達は俄かに騷ぎ始めた。電報を遠い國元に打つてやつたりした。

不仕合せなお袖は、その翌日の午後に、枕元に誰もゐないやうな、さびしい一間で、若い二十二歳の一生を終つた。

遠い國元からは、『ユカレヌ、ヨロシクタノム』といふ返事が來た。お袖には父母はなかつた。兄があるけれども、それは道樂者で、女と情死のやりそこなひをしたりして、今では故鄕にゐるか何うかわからなかつた。その電報は何でも遠緣に當るものが打つてよこしたらしかつた。此方にまだ借金が殘つてゐて、滅多に出かけて行くと、それをも背負されはしないかといふ懸念もあつたらしかつた。

主人も上さんもぶつ〳〵口の中で愚痴をこぼした。一年はそれでも働いて呉れたものの、Kとのいき

『もう、閉めませう。寒いから。』

かう言つて、お玉はその殘つた裏の雨戸を引き寄せた。

十六

Ｋが轉任して行つたのは今から三月ほど前であつた。驛長はとても此處に置いてはと思つたので、ある日、かれを社宅に呼んで、懇々と意見して、一二年さうして離れてゐる方が好いだらうと言つた。Ｋは元驛長のゐた海岸に近い停車場の方へやられることになつた。時雨の降る日、Ｋとお袖とは、柵のところで立話をして、そしてさびしく別れて行つて了つた。

其後二人の間には手紙位は互ひに取交されてゐたのであらうか。それともまた互ひに無い緣とあきらめて、思ひ切つて東西に別れて行つて了つたのであらうか。それは誰も知つてゐるものはなかつた。Ｋもまたそれ以來竟にその姿をそこに見せなかつた。若い車掌見習のＡの許には、向うに着いた時、端書が一枚來たが、それだけであとは何のたよりもなかつた。

お袖の姿は依然として其處に見えた。矢張夕方には白粉をつけて、銘仙の着物などに着替へて、其處にやつて來る客を迎へた。別に變つたこともなかつた。

處が、ある日、お袖は上さんに、『寒氣がして、ぞく〳〵して爲方がない。風邪でも引いたのかしら？』

てゐるのが見えた。政はまだそこで働いてゐると見えて、その元氣な姿は偶にはそこから出て來た。

夕暮から雪になつて、今夜は大雪になるだらうなどゝ思ひながら、M屋のお玉が店の戸を閉めてゐると、突然、その降頻る雪を衝いて、燕のやうに飛んで來た自轉車があつた。

見るとそれはかれであつた。

『まァ……』

お玉は喜悦に思はず聲を立てた。

自轉車を其處で下りて、眞白になつた外套をはたいた男は、

『今日は來ると思はなかつたらう？』

『だつて、この降りだもの。』

お玉は嬉しさうにいそ〳〵して、男を奥の一間へと迎へ入れた。M屋でも、好いお客として常にかれを見てゐるので、お玉も誰に氣も置かずに男を款待することが出來た。お玉は火をどつさり持つて來て、

『寒かつたでせう？　待つてゐらつしやい。今、火燵を拵へて上げるから。』かう言つて、緣側の隅から行火などをお玉は出した。

一二枚雨戸がまだ明けてあるので、雪に暮れて行く裏田圃のさびしい寒い眺めが、それと微かに打渡されて見えた。をり〳〵雪のさら〳〵と雨戸に當る音がした。

教員のSの日記には『此間、久し振にて停車場に行つて見たり。山の白き、川の青き、さびしきはこの自然なり。土手下の町に朝の煙低く靡き、いつもに似ずひつそりと靜まり返れるは、この冬の寒さにひそみ果てたるなるべし。夏は蛙の聲湧くばかりなりし裏の田圃にも、薄き氷張りて、日當りにもまだ蓬、なづ菜の綠の芽ぐむをも見ず。ひたきのチチと飛廻れる聲も淋しや。かくてまた雪は來らん。』と書いてあつたが、實際、その通りで、朝霜は白くさびしく家々の低い庇を壓したやうに見えた。

それでも一番の汽車で其處を下りた人は、M屋のお玉やお常や、此頃一人置き出したY屋のお政や、さうした女達が赤い襷をかけて、湯氣の白く立つバケツの中に雜巾を浸して、あたりの拭掃除に忙しいのを見るであらう。日が暖かにさして、新聞配達店の店に飼つてある九官鳥の片言交りの人眞似に近所の子供達の集つてゐるのを見るであらう。あの喧嘩以來、M屋の主人は、T町に歸つて、此頃では滅多にその姿をあたりに見せなかつた。それに引かへてY屋の主人は、概して此方にゐることが多く、女の古を直したドテラを裾長にだらしなく着て、新聞配達の店の亭主と頻りに何か話してゐるのをよく見懸けた。Y屋の上さんはいつも髮を綺麗に結つてゐた。

煉瓦を燒く竈の小さな工場は、以前はそこでの唯一の煙突であつたに拘はらず、四邊のひらけたのにつけて、全く隅の方に押し附けられるやうになつて、あるか無いかのやうに眼に立たなくなつて了つたけれども、それでもをり〳〵その粗末な廉價な煉瓦を積んだ貨車をトロコで停車場の構內へと運び入れ

こんなことを言ひながら、Ｒの渡頭に來て、渡頭小屋の前に來て梶棒を留は下した。

『大きな川ね。』

『これがＴ川と言ふんです。』

暫く立つて眺めてゐるのを、わざと、

『奥さん、そこは寒いでせう……此方にお入んなさい。』

かう言つて、その榾火の傍に誘つた。女は寒いので、そのまゝ小屋の中に入ると、そこに待つてゐた田舍の人達は、いづれも目を瞬るやうにして、その美しい姿に視線を集めた。女の眼には、かうした生活もあるかと思はれるやうな荒壁や、煙りの立つ榾火や、あらくれた男や、蓬のやうにもしやもしやとした上さんの髪やらが映つた。やがて向う岸から舟は來た。女のすつきりした姿と車と他に一つあつた自轉車とは、靜かに寒い碧い川を渡つて行つた。

十五

四周をめぐる遠山の雪がキラキラと金屬のやうに日にかゞやく時が來た。西風の吹く日は殊にそれが鮮かで、碧い空にさながら捺されたやうに見えた。土手下の停車場を出た人達は、誰でもその山の雪を仰ぎ、寒い風に面を削らるゝやうな思ひをして、Ｒの渡頭へと急いだ。

自由にすることが出來るといふこと、そんなことを考へると、種々なことが思ひ出されて、汚ない醜い女と一生を送る自分の身の上などが考へられて來た。寒い風に向つて車を挽いて行く慘めさが、一層深く眼に見えるやうな氣がした。

『寒い風ね。』

『これからは、もう此方は、名物の西風で、ひどいですよ。』

『こんなに寒い處とは思はなかつた。』

『始めていらしつたんですか。』

『え、始めて……』

『田舍は、東京と比べちや、お話にも何にもなりません。』

この女が、よし町か何處かの藝者で、益田の旦那をすつかり擒にして、大金を出さして圍はれてゐるといふこと、それを本妻が嫉妬を焼いて　財產を半分わけにするの何のと言つて大騷ぎであつたこと、さうしたことをかねて耳に挾んで知つてゐるので、それとなくそれを匂はせると、

『田舍なんかいやなんだけども、是非一度は來て見ておけつて、旦那が仰しやるもんですからね。それに汽車が出來て、もうわけはないからつて仰有るもんだから……』

『益田の旦那なんか、しかし好い身分ですな。お金はどつさりあるし……』

つて、其處の爺の出して呉れる番茶を飲んで、一錢二錢を置いた。
ある日の午後、汽車から此處等に倏り見ないやうな、年の頃二十三四の、眼も覺めるやうに美しい、何方かと言へば、背の高い、色の白い、ダイヤの指環を二つも嵌めてゐるやうな女が、小さな手提を持つて下りて、そこまで出張つてゐた車夫にT町まで行くやうに命じた。
鬮に中つた留といふ三十五六の車夫が逸早く車をそこに寄せた。
『T町はどちらです？』
『Kといふところがあるね、町に……』
『え、御座います。』
『そこに、益田つていふ家があるでせう。』
『え……財産家の……』
『そこに行くんだけどもね。』
車夫達は顏を見合せた。かれ等の頭には、かねて聞いてゐたその益田といふ財産家の東京に圍つて置く妾が浮んで來た。これだな……と留は思つた。最近に、T町でその本妻が死んで、大きな葬式があつたことが思ひ出された。
留は車を挽き出したが、かうした美しい女を載せたといふこと、または金さへあればかうした女でも

ひの蘆荻は花を着けたまゝに枯れたのをその一部だけを安く拂ひ下げて、長い鎌で村の人がさく〳〵と音をさせて刈つた。それに冬の日が薄く射した。

獵の時には、汽車は出來ても、または會社ではかなりにそれを廣告したけれども、まだすつかり都會の人達に知れ渡らなかつたと見えて、銃を手にした乘客はまだ澤山はやつて來なかつた。『今年は沼は荒されるだんべ。』かう言つてその周圍の人達が心配したほどのことはなかつた。

それでもをり〳〵は銃の音が靜かな空氣を破つて、水鳥の飛び立つ音がけたゝましくあたりにきこえた。時には思ひもかけない獵の獲物を得意さうにして持つて、M屋の裏座敷で休んで行く都會の人達などもあつた。

次第に寒く寒くなつて行つた。空は碧に、西風は日每に吹いて、土手下の車夫の溜りは日當りで春のやうに暖かであるのに拘らず、それから一歩土手に上ると、面を向けられないほどであつた。車夫は客を乘せながら、『何うも、土手の上は、これからはやり切れねえ。向ひ風ぢや、賃錢を倍貰つてもたまらねえ。』などと言つた。

T川の水はさながら錆鐵納戸の布を流したやうに、ところ〴〵に細長い、または丸い砂洲をつくつて流れた。帆の影もなければ、舟もなく、ただ遠く河川工事の浚渫船から湧くやうな黑い煙が靡いた。渡しをわたつて行く人達も、舟の向う岸からやつて來る間、風の當らない渡船小屋の中の榾火の周圍に集

『あそこへ行つて午飯でも食つて行かうか。』
かうSが言ふと、
『そのお玉さんのゐる家に行つて見ようぢやないか。』
かうMは應じた。
で、二人は晝間は靜かな、飲客などもゐない、ひろ〴〵とした水田に面した一間で、お玉を相手に、川魚料理か何かで、酒も飲まずに午飯を食つた。
それは夏の終であつたが、今はもう秋もすぎて、木の葉ははら〳〵と風にふかれて飛んだ。ある朝は霜がいち白く軒に置かれた。
Sも此頃は寒い風と、そろ〳〵わるくなり出した霜解の路に恐れをなして、滅多にその姿を此處に見せなくなつた。

十四

此頃はもうわざ〳〵乘つて見るやうな乘客はなくなつたけれども、それでも汽車は着くごとに、かなりに多い乘客を此處におろした。
西風は寒く寒く林を鳴らし、草藪を動かし、ことに寺の古い森には、潮のやうな響きを寄せた。沼添

ある日はこの賑はひを見せる爲めに同僚のMを伴れて來た。

二人は土手の上に來て、草を藉いてそしてこの賑やかな小さな渦を卷いた人家や停車場を見た。

『これは何うも驚いた。すつかり賑やかになつて了つた。』

かうMは言つたが、すぐあとをついで、『人間の天然に及ぼす變遷といふものも不思議なもんだね。』

『本當だ……。誰だつて、此處がこんなにならうとは思ひもかけなかつたからね。』

『町つて言ふものは、かうして出來るものだと思ふと面白いね。それにしても、鐵橋は出來るのかねえ。』

『會社に金はないさうだけども、此處まで持つて來て放うて置いては役に立たないから、いづれ出來るには出來るんだらう。』

『鐵橋が出來ても、此處の繁華は變りやしまいね。』

『停車場があるから大丈夫だらう。』

『さうだね。今に、もつと開けるかも知れない。何しろ、此處はK町、A町へも行く交通の衝に當つてるからね。』

こんなことを言つて、あちこち見てゐた二人は、それから土手を下りて、煉瓦の工場に行つて、その大きな竈などを見てゐたが、そこから出て來て、

これが今まで草の野であつたと思ふと、不思議な氣がせずにはゐられない。こゝもこの爲めに開けて、町になつて行くだらうといふ評判も滿更うそではないやうな氣がした。

M屋で、午飯を食ふ。さいの煮附、旨かりし。お玉といふ女中、美しとにはあらねど、色白にして愛嬌あり。）

（――日、日曜日、――晴。

また停車場に行く。煉瓦の竈の工場に知つてゐるものがあるので、寄つて見る。汽車が出來て、運搬の方は好くなつたけれど、製造品は矢張不十分――本當の技師を呼んで來て、もつと資本を下さなければ、とても十分なることは出來ず。それに、近頃こゝの主人、何處かに妾か何か出來て、碌々工場には寄りつかぬといふこと。事業の完成は矢張難かし。意志が固くなくつては駄目といふことを知る……。歸りは、土手の方から歸る。）

かうした記事をかれはよくその日記に書いた。否それればかりではなかつた。かれの寫生帳には、まだ汽車の出來ない時分の煉瓦の竈のさびしい工場が描かれたり、その工場の職人達の生活が描かれたり、またはさびしい沼の蘆荻が選ばれたりした。沼の水あほひなどもあつた。半ば出來かけた停車場などもあつた。沼に沿つて汽車が走つて行くところなどもあつた。何うかすると、散歩に此處までやつて來て、歸りに、近頃開いた店で、出來立ての饅頭を買つて行つたりした。

も熱中し、趣味にも富んでゐたので、兒童達にはS先生、S先生と言つて慕はれた。かれは父母の家が遠いので、始めはそこと此處との中間にあるH町の寺の一間を借りて自炊生活をしてゐたが、それも面倒になつて、去年あたりから學校の一間を借りて、そこに起臥するやうになつてゐた。

かれはよく散歩に出かけた。

その姿は沼のほとりにも、寺の中にも、または野のさびしい道にも、欅の紅葉した垣のところにも、あひるの水かきの黄く動いてゐる澄んだ秋の水の土橋の畔にも、または川の一ところ見わたされる土手近くの松原の中にも見えた。かれは瘦せた、何方かと言へば蒼白い顏をあたりに見せて、寫生をするための板と繪具皿とを携へて彼方此方と歩いた。時には里川の畔に小半日その畫板を据ゑて、熱心に橋をスケッチしてゐる傍に、子供達が二人も三人も集つて來て、『ヤア、先生、繪を描いてゐらア。』などと言つたりした。

この若いSの眼にも、停車場が出來たために、俄かに發展した土手の草路のあたりのさまがめづらしく映つた。その日記にもをり〳〵そのことが書かれた。

（――日、晴。

今日、停車場に行つて見る。あたりの開けたのに眼を驚かす。酌婦の白粉をつけてゐる家なとも出來た。その他、料理屋、休憩店、汽車の人達の住む家など……。

庭の前に、或はゴタゴタと固まつた村落に、或は水の綺麗に澄んだ里川の土橋の畔に出て行つたりしたが、水田に面した向うには、近頃出來た村の小學校の廣い運動場を前にした大きな建物が見えて、喇叭の聲や、唱歌の譜につれて鳴るオルガンや、放課時間を運動場に出て騷ぐ兒童の聲やらが賑やかにあたりに響いてきこえた。

其處からは、午後四時過ぎになると、若い背廣服の教員や、カシミヤの袴をつけた女教員達が、風呂敷包を抱へて一人二人と話しながら出て來た。かれ等は大抵は二里か一里半を隔てた町または村からやつて來て、一日を兒童の相手に暮して、そして樂しい夕飯の團欒を頭に描きながら、野の道を靜かに辿つて歸つて行くのであつた。縣の師範學校の寄宿舍から出たかれ等は、かうした小さな運命に半は甘んじてゐたが、中には絕えずもうすこし生効のある生活へ出たいと思つてゐるものもないではなかつた。しかしかれ等の其志は、大抵は落葉のごとく埋め果てられるやうなのが多かつた。かれ等は一緒に每日顏を見合せてゐる女教員とゆとりなく戀に落ちたり何かして、皆なそれぞれ小さな家庭を持つて、段々年功加俸の年限の來るのを待つやうになつたり、または校長になるだけの希望に滿足したりした。時はかうした生活にも幸福に平和に過ぎて行つた。

その土手の小學校には、Sといふ若い教員がゐた。他の人達の師範出であるのに引きかへて、中學校の寄宿舍からぢかにやつて來ただけに、教員の群の中では勢力はなかつたけれども、志望も高く、學問に

『裏からでも遁げたんだんべ。』

ガヤガヤ種々な聲がきこえた。

しかし暫く經つと、上さんもなだめて奥に伴れて行かれたらしく、『本當にしやうがありやしねえ。人樣の前も面目ねえ……。滅多に女つ子と口もきけねえんだから……』主人はこんなことを言つて、とめに入つて來た人達に禮などを言つた。

やがて人々は散じた。

月は靜かに照した。物の影がすべて黑くはつきりとあざやかに見えた。若い車掌見習は餘り月が好いので、土手の上まで行つて、川などを眺めて暫くして戻つて來ると、あたりはもうしんとして、今し方さうした悲喜劇があつたとは思はれぬばかりに、Y星の灯のさびしく靜かについてゐるのが覗かれた。主人も板場の男ももう其處にゐなかつた。お玉が唯一人ほつねんと白い顏を其處に見せてゐた。

月はいよいよ冴え渡つた。

十三

土手の上をT川に沿つて歩くと、ところどころに、小さな路がそこから下にうねうねと下りて行つてゐて、或は欅の樹で圍まれた茅葺屋根の後に、或は唐箕をカラガラ廻して收穫に忙しがつてゐる農家の廣

に喰つて蒐らうとする氣勢を見せた。眼は怒つた獸のやうに赤くなつてゐた。
上さんの手から振りもぎつたらしい出齒庖丁を板場の男はＹ屋の主人の手から受取つて奥に持つて行つた。
『お常を出さねえか。お常を……。あの太いあまを殺さなけれや、殺さなけれや――』かう呶鳴つて上さんはじたばたした。ともすると、お玉と板場の男と二人で支へてゐるのをも組解かれさうに見えた。亭主が傍に寄つて行かうとするのを、Ｙ屋の主人は頻りに留めて此方に伴れて來た。
外ではいろ〳〵噂を人々がした。
『まア、さうかね、あのお常さんが……』
かう驚いたやうに、小聲である女が言ふと、
『前から出來てゐたんだとさ……。それを薄々知つてゐて、此方によこさなかつたのを、やいやい言つて、旦那が此方に呼んだとさ……。何でも知らないと思つて、ふざけてゐたところに、あの上さん、出齒か何かを持つて飛込んで行つたんだとさ。』
『へえ、さうかね？』
『お常さんが、さうかね。旦那と出來てゐたんかね。』
『それで、お常さんは何うした？』

十二

月の冴えた夜であつた。

終列車が來てからもう一時間ほど過ぎた。若い車掌見習が用事をすまして構外に出て來ようとすると、何かけたゝましく人の叫ぶ聲がきこえた。何かと思つて其方に行つて見ると、M屋の前には、近所の人達が大勢立つてゐるのが黑くかたまつて見えた。

『何だ、何だ……』

『何うした、何うした……』

かういふ聲と共に、家の中では、中年の女の泣き饒舌に饒舌る聲と、主人の尖つた聲とがきこえた。群集の中から覗くと、灯のついた中に、昨日あたりやつて來た上さんが、色の青白い昂奮した顏をあたりに見せて、頻りに泣き饒舌つてゐる傍に、主人がこれも矢張昂奮した顏をして立つてゐて、Y屋の主人は頻りにそれを仲裁してゐるさまが浮き出した繪のやうになつて見えた。

『このあま、太いあまだ……。亭主の寢首もかきかねえ奴だ。』

『お常を出せ、お常を……』

上さんは負けずに呶鳴つた。矢張白い顏をしたお玉がそれを後から抱いてゐなければ、そのまゝ亭主

呷つて、『それに、先の言ふことだつて、半分は手だからな。わるい虫がついた位に思つてゐるところがあるんだからな。何うかして離さう離さうとしてゐるんだからな……。でなけれや、將來一緒にしやうといふ深切が本當にあるなら、こんな風に仲を堰かなくつたつて好いんだもの……。A君、かうしてゐる中にも、かうして酒を飲んでゐる中にも、女の心は僕から離されて行つてゐるんだ。』

『だつて、お互ひに本當に思つてゐるんなら、何んなことがあつたつて好いぢやないか、時が經つたつて構はないぢやないか。時のために打壞されるやうな戀は、本當ぢやないぢやないか。』

『それは君なんかの空想だよ。そんなことは言つてはゐられないよ。かう言つてゐる中にも、女の心は僕から離れて行つてゐるんだ……。』かう言つて、後にぐつたりと身を倒して、後頭部に手を組合せたまゝ、默つて天井を眺めた。その目は大きく開いてゐた。若い車掌にはしかし何うすることも出來なかつた。Kのためにやさしい慰藉の一つも言つてやりたかつたけれど、さうした實際に觸れて見たことのないかれには、何を言ふことも出來なかつた。自分の室に戻つて來てからも、さうした實生活が本で見た色彩の濃い戀愛と雜り合つて頭に上つて來た。子をおぶつて男と一緒に寺から逃げて行つたハイカラの女のことも思ひ出されて來れば、Y屋のお上さんの處にをり〳〵やつて來る肥つた旦那のことなども思ひ起されて來た。わからないわからない實際の生活であつた。やがて一時間ほどしてから、婆さんに起されて、自分の寢床に入つて行くKの氣勢などがした。

て了ふからね。女が、自分の愛した女が、賣物買物で他の男と寢たり、戲れたりしてゐるのは、とても見てゐられない。』

『だつて、だるまだもの……』（そんなことはしやうがない）といふ口吻で笑ひながら傍から老婆が言つた。

『だるまさ、それはだるまさ……。だけど、人間は同じ人間ぢやないか。』

かう言つたKの言葉には、強い反抗の氣分が雜つてゐた。

『だるまなんかに、人情なんてあるもんかね、お前さん。お前さんなんか、騙されてゐるから、そんなことを言ふんだよ。金がないのが緣の切れ目つて言ふぢやねえか。』

『婆さんなんかにはわからねえ……。若い者の心はわからねえ。』かなりに醉つてゐるKはかう手を振つて、『A君、君なんかにも言つて置くが、戀なんかするもんぢやないぜ。辛い、辛い……。』

『そんなことは言はずに、それほど思ひ合つたら、一緒になるやうにしたら好いぢやないか。』

かう若い車掌見習が言ふと、

『それが出來れば、こんなに苦勞はしやしないよ。それは先の言ふのも尤だ……。將來のためには、今、お互ひに逢はずにゐて、兩方で一生懸命に稼いで一緒になるやうにする方が好いには極つてゐるけれど、女が他の客と戲れたり寢たりするを傍で見て、平氣で寢てゐられるかい、A君。』またぐつと酒を

『A君。』
かう若い車掌見習を呼んだ。
『何だえ？』
『一杯飮まないか。』
『澤山だっ』
かう隣の室から車掌見習は言つた。
『そんなことを言はずに、一盃來て飮んで話し相手になつて呉れ。さびしくつてしやうがねえや。』
爲方がないので、若い車掌見習は讀みかけた本を捨てゝ、そして此方へとやつて來た。
Kは默つて盃をかれにさした。
『何うしたんだ。イヤに元氣がなくなつたぢやないか。』
『A君、君なんかにはわかるまいが、本に書いてあることとは丸で違ふよ。君、實際辛い。』
『何が？』
『男と女のことさ。』
『でも、辛いばかりぢやあるまい。面白いにも面白いんだらう。』
『辛いばかりだ……。それも、眞劍にならなけれや好いんだけども……。何うしたつて、眞劍になつ

れかゝる薄暮の空氣の中にその色の白い顏をくつきりと見せて、海酸漿などをギウギウ鳴らして店にゐたり、また表に立つてゐたり、そのあるものは、早くもやつて來た若い男と相對して、何かこそ〳〵立話をしてゐたりなどした。その賑やかな薄暮の空氣を衝いて、汽車はいつも轟々とした響をあたりに漲らせて、停車場へと入つて來た。

それから終列車が來て、一日の用事が終るまでは、Kは殊にぼんやりして働かうにも働く氣にはなれないやうに見えた。

若い車掌見習には、三四月の内に、かうも變つて行つたその生活態度が不思議に見えた。以前のやうな元氣もなしに、停車場から十時すぎに歸つて來て、碌々同宿のものとも話しもせず、呼吸つぎか何ぞのやうに默つて茶を立膝して飮んで、そしてもそもそと自分の室の汚れた夜着の中に入つて行くのが氣の毒に思はれた。

ある時は、餘りに堪へられないといふやうにして、使つてゐる老婆に、

『婆さん、酒を二三合取つて來て呉れないか。』

『また、酒けえ?』

老婆はかうは言ひながらも、澁々ながら立つて酒を取つて來た。

ちびり〳〵やつてゐたが、

驛長は懇々として意見した。それは皆理を盡し、情を盡した言葉である。一つとして難有く思はれないことはない。しかしさうした戀の渦に浸つたものでなければ、到底かれの苦しい、自分でも恐ろしい陷穽とは知つて居ながら何うすることも出來ない煩悶を知ることは出來なかつた。さうした深切な意見よりも、一夜女に逢ふ金を貸して貰ふ方が何れだけ難有いか知れないやうなものであつた。

殊に、その驛長の言葉の中で、いざとなれば轉任もさせかねないやうな口吻と、酌婦風情に男が迷つてゐてはしやうがないと言つたその『酌婦風情』の四字とが強くKの頭に響いた。

（金さへあれば……、金さへあれば、その侮辱の中からかの女を救つてやることが出來るのに……）

かう思ふと、堪らなくなるやうな戀心が却つてかれを襲つた。

ことにかれの働いてゐるところから、その女のゐる家がはつきり見えるのがかれには辛かつた。田舍の百姓の息子か、でなければ汚ない商人などを相手に女が戲談口をきいてゐるのを見る時には、かれはさつさとそれの見えない方へと來た。

それでもKに取つてまだ心丈夫なことは、お袖がかれを振り捨てないことであつた。何うかすると、お袖は停車場の柵のところに來て、そしてかれと話した。

夕暮の六時の下りの來る時分は、殊にKは辛い辛い心の壓迫を受けた。前の軒を並べた家に灯がつく。軒燈がつく。酌婦達は皆な白粉をつけて、晝間働いてゐる姿とは丸で違つたやうに美しくなつて、暮

『それは來て下さるのは好いけれども、お客は、貴方一人ぢやないんだから、それも、貴方が借金をついで下さるとか。何うかして下されば好いけれども、それも出來ないし……。それは何も不人情で、間を堰くとか何とか言ふ譯ぢやないんですけども、そこにはいろ〳〵なことがありますからね……。だから貴方だつて、本當に、お袖の爲めにならうと思ふんなら、少し足を遠退いて、毎日の勤めの方をしつかりとして、そして話の出來るやうにして下さらなくつては――。何も逢はせないッて言ふんぢやないから。』

こんなことを角が立ぬやうに上さんはKに言つた。

一時は毎夜のやうに出かけて行つたKも、此頃は社宅に歸つて、汚れた夜着にくるまつて寢て了ふやうな夜が多かつた。この夏、汽車が開通した時分の快活な、元氣な、よく駄洒落などを言ふやうな氣分はいつかなくなつて、わるく緊張したやうな、常にわく〳〵と震へてゐるやうな、または何うかするとぼんやりと仕事も手につかないやうな人になつて了つた。始めはKはよくその女ののろけを同僚達にきかせた。M屋のお玉なども、

『Kさん、ちよつと此方を見て御覽? 口に何かついてゐてよ。昨夜のぢやない?』

などと顏さへ見ると、冷かしたものであるけれども、此頃では、まご〳〵すると、何んな目に逢ふか知れないといふやうに誰も彼もKをひやかすものすらなくなつて了つた。

ある日は、Kは驛長の家に呼ばれて行つた。

て行く汽車の窓から顔を出して寺の方を見た。
汽車はかうした二人と、田舍の人達と、荒くれた唇と、蓬なす髮と、色の褪せた學校の先生らしい脊廣服とを載せて、夕日にかゞやく沼の畔りを縫ふやうにして駛つて行つた。

十一

Kと酌婦との關係は、もう此頃では誰も知らないものはなかつた。お互ひにのぼりつめた結果のふしだらがそこからも此處からもあらはれて來た。Kは苟くも借りられるところからは、すべて借り盡した。驛長さへも、『困るね、君には。』と言ひながらも、尠なからぬ金を借りられた。

若い車掌見習がその時想像したやうに、その相手は、矢張、そのY屋の二三軒先の小料理屋の色の白い、小づくりな、お袖といふ酌婦であつた。今では女の方でもかなりに深くKを思つてゐた。さうした稼業の家の習ひとして、Kと女の噂のぱつとあたりに立つやうになつてから、Kは餘り歡迎されなくなつた。そこのお上さんにしても、亭主にしても、Kに絞るべき金がなくなつたばかりではなく、賣物であるその女にさうした浮名の立つたことを恐れた。客がそれを知つてやつて來なくなることを恐れた。

『お歸りですか。』

かう聲をかけた。

『え、ちよつと……』

『また、いらつしやるんですか。』

『何うなりますか……』かう言つたが、男から名刺を一枚出させて、『東京に來たら、此處にいらつしやいね。本當に田舍になんか埋れてゐては駄目ですよ。』

『難有う。』

かう言つて輕く辭儀をした。

『もう一人の方はゐらつしやるんでせう?　まだ……』

『え、あの人は……』

で、別れて、二人は列車の中に入つた。暫くして時間は來た。相圖の汽笛と共に汽車は靜かに構内を出て行つた。若い車掌見習の見送る眼をあとにして……。

『歸つて來たら、びつくりするでせうね。お政さんも……、和尚さんも……』

『なァに、あとで、手紙で、わけを書いてやれば好い。』

つく〴〵倦きた田舍にも、今更にいくらか心が惹かれるといふやうにして、かの女は段々速力を増し

女の胸には再び戀に蘇つた喜悦が溢れるやうに漲つてゐた。此頃では毎日毎夜思はぬ時とてもない男と今夜は一緒に語ることが出來る……。かう思ふと、體もわなゝくやうな氣がそゞろにした。かの女の懐にも金はまだかなりにある……。男もいくらかは用意して來てゐるに相違ない……。

『今日は東京に歸らないで、何處かに泊りませうか。』

『何うでも好い。』

『私もいくらか持つてゐますから……』

『でも、泊るやうなところはあるかえ。』

『何處だッて好いぢやないの？ 田舎の何んな宿屋だッて好いわ。』

こんな話をいきせきしながら、停車場へ來ると、もう出札口は明いてゐて、乘客は切符を切つて貰つて、ぞろ〳〵プラットホームへと出て行つてゐた。汽車は既に準備を整へて、新しい列車がさし込んで來る日影を受けながら、既にそこに長く横たへられてあつた。

途中のK驛までの切符を買つて、二人が構内に入つて來ると、其處に例の車掌見習が向うから歩いて來るのにぱつたり出會つた。

車掌見習は不思議な顏をした。殊に、さつき寺の所在を教へてやつた男と一緒にかの女がゐるのを不思議さうにした。矢張小說の中のあるシインがその前に展開されてあるやうな氣がした。

は時計を見い見い焦つて待つたゐた。

『何分あれや行ける？』

『十分あれや大丈夫でせう。』

大急ぎで、かれ等は森の中の草藪の中をわけて、別にしきりといふしきりもない境內を田圃の方へ出て來た。午後四時すぎの日影は明るく靜かに野を照した。沼に漁に出てゐる舟も一二隻そのキラキラする日影の中に黑く見えた。

『近路を行きませう。』

かうかの女は言つて、田圃から停車場の方へ眞直に突切つた。

途中に停車場の構內に入らうとする處にある半間ほどの赤土の絕壁のやうになつてゐるところは、男のあとについて、女も一生懸命に飛び下りた。

少し來て、ほッと一人は呼吸をついた。しかし急いだ足は緩めずに……。

『大丈夫でせう。』

『まだ十分ある。』

『なら、大丈夫……』

で、二人はレイルを横切つて、通りへ出て行つた。

『それよりも、急がなくつちやいけない……。何うかと思つて來たのだ……。上りが四時に出るのがある。』時計を出して見て、『あと三十分しきやありやしない。急いで、行く方が好い。荷物なんか持つて行かなくつても好いから。……あとで何うにでもなるから。』

『でも、餘りヒドくはない？　世話になり放しで……。和尚さん、好い人なんだから。』

『だツて、ぐづ／＼考へたり何かしてゐる中には、またいろ／＼邪魔が入つて來たり何かして厄介だから。』

『それもさうね……』

かの女はちよつと考へたが、（子供をやることになつてゐるんだから、話すと却つて面倒だ……。わるいけれども、また詫びのしやうもある。）『なら、ちよつと待つて頂戴、お政さんだけに手紙を殘して行くから……。心配するとわるいから。』

『早くしないと、間に合はんよ。』

かの女は急いで此方へ來た。誰も見てゐるものはなかつた。あたりはしんとしてゐる。庫裡は離れてゐるので、寺の上さんはゐるのであるけれども、それと氣が附いたやうな樣子もない。かの女は急いでペンで手紙を走り書きに書いて、それを一人の女の方の机の上に置いて、もう一度子供を下して、好い方の着物に着替へて、また負つて、二三必要なものを風呂敷に包んで、大急ぎで此方へ来て見ると、男

『この間、手紙に書いてやつた文學好きの車掌よ。』

『お政さんは?』

『留守。』

『和尚は?』

『矢張留守……』

『それは好い鹽梅だッたね。』

『だッて、この間の手紙のやうに、斷らずに行くわけには行かないわ。』

ふと女の背中の兒に氣が附いたやうに、男は、

『大きくなつたね。』

『起きてゐる?』

『大きな眼を明いてゐる。』

『そら、お父さんだよ。』

搖つて見せるやうにした。子供はえん、えんと躍り上つた。

『嬉しいだらう、お父さんに逢へて……。お寺の子になんかなるのは厭だァね——。わかると見えるわね。』

かう色の黒い方は言つて、新しく起つて來てゐる友の心の狀態をさがすやうにして、凝とその顏を見た。

ある日の午後三時過ぎであつた。和尙は法類の寺に葬儀があつて留守、もう一人の女はH町まで行つて來ると言つてさつき出かけた。かの女は子供に添乳をしてゐたが、ふと、裏の森の方から人の入つて來る氣勢がしたと思ふと、窓のところに來て、ポトポトと障子を指で叩くやうな音がした。

かの女は耳を欹てたが、ふと思ひ當つたことがあるやうに、すつと立つて、そして障子を明けた。そこに袴をはいたかの女の男が立つてゐた。

『まア。』

かう言つたが、小聲で『森の中で待つてゐて下さい……。今、すぐ子供を負つて行くから……』

障子を閉めて、急いで子供を負つて、そして本堂の傍に置いてある下駄を突つかけて、裏の森へと行つた。男は森の中の草藪の中の丁度本堂のうしろに立つてゐる壁のところに立つてゐた。

『いつ來たの？』

『今の汽車で……』

『よくすぐわかつてね。』

『若い車掌見たいな青年が、知つてゐて、すぐ敎へて吳れた。』

ふ話をした。

『だツて……』

不思議さうな顔をして、色の黑い方はハイカラの方の女の顏を見た。

『それはあなたなんかには、さう思はれるかも知れないけども、實生活と藝術とを離して了ふ必要はないと思ふわ。尼さんや坊主のやうな生活をしなけれや藝術が出來ないと言ふのは、まだ本當ぢやないと思ふわ。』

『さうかしら？』

『だツて、さうぢやありませんか。本當に實生活に浸つて見なければ、本當のことは書けないぢやありませんか。』

『そこを言つてるんぢやないんでせう。さういふ意味ぢやないでせう。實際に捉へられてはいけないと言ふのは——』

『さうかしら？』

かう言つたが、『でも、此頃、何うしても、さう思はれて來て爲方がない。新しい考へが起つて來てしやうがないのよ、此頃……』

『變ね……』

『出たら、いらつしやい。……文學をやるつて言へば、矢張、私達と同じですもの。』
『ぢや、あなたも文學をおやりになつてゐるんですか。』
『え、さうよ。』
『もう、一人の方も……』
『さう、あの人も……。』
『それは嬉しいな……。まだ長く此方にゐるんですか。』
『何うなるかわからないけども、少しはゐるわ。』
かう言つてかの女は自分の小さな名刺を車掌見習に渡した。

十

それから一月ばかり經つた。
秋はもう野に來た。夜は蟲の聲が垣に滿ちた。かの女の出した手紙の返事は矢張その雜誌記者の名で來たが、中には男の手紙も封じこめられてあつた。寺の和尚も、一緒にゐる一人の方の女も、少しもそれを知らない中に、かれ等の以前の戀愛關係は十分に復活した。
かの女は一緒にゐる女に、藝術も貴いが、實生活を犠牲にしてまでも藝術をやる必要はないなどとい

本の上から眼を上げた車掌見習は、評判になつてゐるハイカラな女が子供を負つたまゝ莞爾して其處に立つてゐるのを眼にしたが、そのまゝ本を翻して、默つてそれを見せた。

『死の勝利ね。よくこんなものを讀んでゐてね。』

『…………』

『面白い？』

『え……』

『感心ね。……田舎で、こんなものを讀んでゐるものはないでせう。』

『え、ありませんな、田舎では……』

『文學者になる積り？』

『え……』

『それぢや、こんな田舎になんかゐちや駄目よ。東京に出なくつちや――。藝術つて、それは難かしいもんよ。讀んだり書いたりしてゐるばかりでは十分でないわ。東京に行つて、文壇の空氣にも觸れて見なけれや――』

『田舎ぢや、本當に駄目です。』

急に、意氣投合したといふ風で、『その中、東京に出る積りです。』

いやうにして、せつせとすぐれた作をしてゐるのも妬ましく思はれた。時には一刻もその身を離れずに、何處に行くにも、起きるにも寢るにもその身の傍を離れない一塊肉が邪魔になつたり、重荷になつたり、または愛着の羈絆になつたりした。かの女は二三年前の青春の花のやうな時代を胸に浮べては、ひそかに袖を涙に濡した。

かの女を愛慾から藝術に引戻さうとして心配してゐる師の恩愛もさることながら、また再び男に走るやうなことがあつては、師に合はす顏もないと思ひながらも、さびしさと孤獨と愛慾との情熱に絡み附かれては、かの女は落附いてぢつとしてゐられないやうな氣がした。次第に野のさびしさがかの女の心を堪へ難くした。

かの女はある日、一緒にゐる女に知られないやうにして、男に宛てた手紙をその中に封じて、男の友達である或る雜誌記者の許に消息を書いた。そしてその午後に、矢張、一人で散歩するやうな風をして、停車場の方へやつて來て、それを構內のポストに入れた。

ふと其處に、その傍に、例の若い車掌見習が、何か飜譯物らしいものを手にして、熱心にそれを讀み耽つてゐるのが眼についた。と、それに、その飜譯書に引附けられたといふやうにして、不意に、

『ちよつと拜見な、何アに、それ?』

かう言つて、かの女は身をその傍に寄せた。

たために、かれ等の間の戀は破壞された。一つは世間のために、また一つは男とかの女との心の爭鬪の爲めに……。ことにかの女は名譽ある地方の資産家の娘であつたために、一層さうした不面目に對する打擊が大きかつた。かの女は父母からも一時勘當された形になつた。かの女は戀と藝術とに惱みながら、子供の處置をして、新しい生涯に入らうとしてゐた。處が、女の兒一人しかない和尙は、(呉れるなら、貰つて育てたい。)と言ふので、それで寺の細君にその子の怩むまでゐて、そして置いて行かうとしてゐるのであつた。色の黑い方も、矢張同じ師匠のもとにかの女と相弟子で藝術を硏究してゐるのであつたが、『それでは、私も一緒に行きませう。そして田舍で靜かに創作の筆に親しみませう。』と言つてそしてやつて來た。

從つてハイカラの方の一人に取つては、この田舍の寺住ひは、さびしい悲しいものであつた。いろいろなことがかの女の心を時には沈ませ、時には昂らせた。此頃では、一時きつぱりと思ひ切る氣であつた男に對する情熱が盛んに燃え出して來て、新しい生涯を築くために寧ろやつて了はうと思つて決心して來た子供さへ手放すことが出來ないやうな氣がし出した。戀の復活をさへすれば、何もこの子供は田舍の寺の子になどしなくつても好いのだ。三人一緒に睦しく暮して行くことが出來るのだ……。こんな風にも考へらるれば、またそれとは反對に、名譽が、世間が、父母の悲哀が、藝術が、さうした情熱に驅られて行くかの女を遮つたりした。一緒に來た相弟子の女が、藝術の他には、何の苦しみも憂ひもな

來てから、女達に、
『大變ですぜ、あなた方は社會主義者の群だと思はれてゐるんですぜ。』
『まァ……』
『さういふ恰好をして出て歩くからですよ。田舍ぢや、ちよつと眼に立ちますからね。』
『女優に間違へられたり、社會主義者にされたり、隨分、御丁寧ね。』
かう色の黑い方が言ふと、
『まだ、あるわ。……支那人？』ぷつとふき出すやうにして、ハイカラの方が言つた。
『隨分、しかし、政府も神經過敏になつてゐるんだね。』
『本當ね……。それにしても、私のやうな女が、社會主義の中にもゐるんでせうか。』
『それはゐるさ。女性を共產主義的にやつてゐるッて言ふぢやないか。』
『そんなことは出來るもんでせうか。』
『出來るか何うだか、それはあなた方に訊いて見る方が近路だ。』
『まァ。』
と目を睜るやうにしてハイカラな方の一人が言つた。
ハイカラな方は、この半年ほど前に、その戀人である男のためにこの子を產んだ。否、その子の出來

一日二日經つてから、Oは署長に言つた。

『何うもわかりませんが、いくらか臭いところがあるにはありますな。和尙は政府の壓迫するほどそれほど新しい思想は危險でないなどと言つてゐました。しかし、あの女達がそれに何う連關してゐるかは、ちよつとわかりません。』

『二人の何方かが和尙と臭いッて言ふやうなことはないかね。』

『よくはわからんが、まア、そんなことはないやうですな。』

停車場の派出所の若い巡査の報告でも、矢張、さうしたことはないらしいといふことであつた。その二人の女達は、山門を入つたところにある本堂の右の一間を借りて、それから庫裡の方へ行く廊下に七輪や赤い陶器の釜などを持つて來て、そしてそこで自炊をしてゐると言ふことであつた。『變り者は變り者らしいが、何か文學でもやつてゐる女ぢやないかと思ひます。』若いだけに、多少肯綮に中つた觀察をその巡査は署長に上申した。

『その文學が怖いんだ……』

かう署長は言つた。

和尙は和尙で、その後三度までも、別に用もないのにOがやつて來て、長話をして行つたのを不思議にしてゐたが、寺のある世話人から注意されて、その餘りに馬鹿々々しいのに呆れたといふ風で、歸つて

らの友達か何かになつてゐる。そしてそのTといふ男が、あれで中々危險思想を抱いてゐる男だ……。書くものにも、さうした傾向が十分にある。まだ、刑事をつけるほどにはなつてゐないが、政府でも注意をしてゐる。從つて或はさうしたことがないともわからない。向うに言つて置いてやつたが　君もそれとなしに、寺を訪問して、和尙に逢つて見て吳れ給へ。』

『承知しました。』

かう刑事のOは言つた。

『その女はあの寺でその子を生んだんぢやないね。』

『それはさうぢやありません。つい、此間來たらしいから。』

『素性は大抵わかつてゐるのかね。』

『何うも女學生らしいところもあるが、よくわかりませんな……。矢張、危險な思想を抱いた女かも知れませんな。兎に角あゝして、亭主もない子供を生んだり何かしてゐるんですから。』

『まァ、一つ注意して吳れ給へ。』

其後Oは寺に和尙をそれとなく訪問して一時間程ゐた。Oは決してそれらしい素振をも面に見せず、寺に寄寓してゐる二人の女に就ても何の質問もしなかつた。かれは唯、和尙の口から、新しい危險思想についての批評乃至意見をそれと察しられないやうに聞くことをつとめた。

車掌見習もそれを見れば、お玉もそれを見た。土手の溜りの車夫達も二人の話しながら土手に上つて行くのを見送つた。

ところが、それが寺――その向うにある寺に來てゐるものだといふことのわかつた時には、停車場が出來たために、町から派出されてゐる若い巡査の下に、ある命令が署長から下されてゐて、その若い二人の女づれに對して十分注意を拂へといふことであつた。

丁度、その時分、ある恐ろしい計畫を懷抱してゐる群があつて、政府でも、それに對しては十分の注意を拂ふことを各府縣下の警官に命令してゐる時であつた。新しい思想、社會主義、さうしたものは危險分子とした政府から嚴重な監視を受けてゐた。

H町の署長は言つた。

『あの寺の和尙は、そんなことはない筈だがな。勿論、こゝらにゐる田舍坊主ではない。學問も出來る。思想もある。英語なんか達者なものだ……。しかし、あの和尙が、さうした危險思想を懷抱してゐるとはちつとも思はないけれども……、兎に角、重大な問題だから、手落になつては此方の責任になるから、十分調べて置かなければならない。これは此處ばかりぢやない、他にも寺は世離れてゐるから、ちよつと世間に眼に立たないから、かれ等の連中は寺で同志を糾合したり何かしてゐる事實が他にも澤山にあるといふことだ……。それに、さういへば、成ほど、あの寺には小說家のTがよく來る。あの和尙と昔か

『支那の女だんべ。』

などと誰かが言つた。さうかと思ふと、

『女優か何かで、H町に今、芝居を打ちに來てゐる連中ぢやないかな。』

などとも噂した。

その二人が此の近所に姿を現はしたのは、つい一週間ほど前からであるが、それが何處にゐるのであるか、何處からやつて來るのであるか、この停車場附近の人家にゐるものでないことだけは確かであるが、その素性は容易にあたりの人々にはわからなかつた。ハイカラの方が男の兒――確かにその女の生んだに相違ない男の兒を抱いてゐるのも、人々の好奇心をそゝる種となつた。

かれ等は沼の方からやつて來て、T街道を歩いて、それから、この停車場附近を通つて、並んで歩いて土手から川の方へ行つたり、またふらふら通りを歩いて饅頭を買つたり、ふかし芋を買つたりして行つた。色の黑い方が雜貨店に寄つて、半紙を買つて行つたりした。

『この停車場で下りたに相違ないと思ふが、いつ來たんだか知らないか。』

『知らない。』

『ぢや、此處で下りたんぢやないのかな――。H町の停車場で汽車を下りたのかな。』

汽車の方の人達は、寄るとたかるとこんなことを言つた。

な川がその前にあらはれた。かれは黑いその痩せた姿を地上に落して、ぢつと立つてその美しいしかし寂しい夜更の川を眺めた。

次第に上つて行くにつれて、月の光は益々廣くなつて行つた。しんとした土手下の人家も、停車場の黑い建物も、寺のこんもりとした森も、何も彼も明るい月光を帶びるやうになつた。後には蘆荻の一面に生えたその錆びた沼にまでその餘光は及んで行つた。蛙の聲は湧くやうにきこえた。

九

此頃、ちよいちよい、この近所にその姿を見せる二人づれの女の姿が、あたりの人達の噂に上つた。二人とも二十一二の女であるが、一人は痩せた美しいハイカラさんで、いつも生れて半年位しか經たない男の兒を負つたり抱いたりして來た。一人はともすると、その侍女ではないかと思はれるやうな、容色はさうわるくはないが、何方と言へば、色の黑い、物の言ひ方なども、いくらか男まさりといふやうな質であつたが、それは侍女でも何でもないといふことが段々二人の口のきゝ方などでわかつて來た。二人とも此處等では見ることも出來ないやうな、髮の毛を眞中からわけた、女優まげともつかずさうかと言つて束髮ともつかないやうな髮を結つてゐた。

そのお揃ひの不思議な髮が、一番先に人々の眼を惹いた。

ぢやない。あの肥つた、お金か。まさか……。ふとY屋の先きにある矢張り小さな料理屋に二人ゐる女が思ひ出されて來た。さう言へば、あの色の白い方かも知れない。いつか、先生、停車場の外であの女と立話をしてゐたことがあつた。こんなことを思ふと、愈々不思議なロマンチックな想像が簇がるやうに胸に上つて來て、いつそ一緒に行つて見れや好かつた……などゝ思つた。

月は次第にその光の領分を擴げて、物の影が段々はつきりと見え出して來ると同時に、誰か向うに人でもゐて持ち上げでもしたかのやうに、または芝居の舞臺の背景からせり上げられて來るやうに、半ば缺けた光芒のない、いやにわる赤い月が、ほつかり直線を描いた土手の上にあらはれて來た。

『好いな……』

かう思はず口に出して言つたかれは、いつかさうしに性慾の境の想像から心が離れて行つてゐるのを見た。かれは土手に上つて行く氣になつた。

かれは靜かに歩いて行つた。猶はKのゐる家をあれかこれかと心に描きながら……。しかしその軒を並べた家は、また何處でも内では起きてゐる樣子であるけれども、笑聲や話聲はをり〳〵きこえて來たけれども、またある家は表の戸がすつかり明けてあつて、そこの上さんが帳場に坐つて何か錢勘定でもしてゐるやうな光景がそれとはつきりと見えたけれども、Kのゐるやうな氣勢は、何處の家からも聞えて來なかつた。かれは靜かに土手の上にのぼつた。急に、月の激灔として金屬のやうにかゞやいた大き

『そんなら、もう歸つて寢て了へ！』

かう言つて、Kはすたすたと土手の方へ行つた。

遲い月が丁度上つたばかりで、まだその光は此處等には到つてゐなかつたけれども、土手から此方の煉瓦の竈のあるあたりにかけては、爽やかな濃い物の影がそれとはつきり見えてゐた。

かれは暫し立つて見てゐた。

Kは一二度振返つて見ただけで、そのまゝ土手の方へと行つて、曲つて、やがてその姿は見えなくなつた。

かれは不思議な氣がした。驛長だつて、助役だつて、誰だつて、一人づゝ女を抱いてゐるぢやないかと言つた言葉が妙にかれの頭に絡みついて殘つて響いた。讀んでゐる小說の中の人生が、つい此間思つたやうに平凡ではなしに、矢張それが事實であるかのやうにかれの頭に思ひ起された。

それにしても、Kは何處へ行つたのであらう。土手を上つて行つたらしいけれど、この深夜に、Rの渡しがあるわけではなし、また他に女のゐるやうな町や村が其方にあるではなし、かれが見てゐたために入るにも入れずに、わざとごまかしに一時其方に行つたとしか何うしても思はれなかつた。Kはどこか別の裏道から、こつそりそこにあるある家に入つて行つたに相違なかつた。そしてそこには女と酒の歡樂があるのであつた。いづれ、酌婦にはちがひないが、誰だらう。あの綺麗なお玉かしら？　いやさう

似をしてゐるぢやないか。驛長だつて、助役だつて、誰だつて、皆な一人づゝ女を抱いてゐるぢやないか。吾々の若さで、毎日毎日働いてさ、時には、さういふ樂みがなくつちや、生きてる效がないといふもんぢやないか。』
かれは引張つたKの手を振放つて、
『いやだ……いやだ、そんなとこには……』
『君なんかのやうに、本なんかばかり讀んでゐたつてしやうがないぢやないか。實際が何うだかわかりもしないで、本ばかり讀んで威張つてゐたつてしやうがないぢやないか。今夜は伴れて行つてやるから、行つて見ろよ。』
またKの寄つて來るのを、
『いやだ……いやだ。』
かう言つて遠く後退りした。
『何うしてもいやか？』
『いやだ……』
『そんなら、人の邪魔をするなよ。』
『邪魔なんかしない。』

傍に行くと、

『まア、默つてゐろよ。』かう小聲でKは言つて、いきなりかれを一緒に無理やりに戸外に引張り出した。

二三間來てから、

『何處へ行くんだえ？』

『まア、好いから、君も行け……』

『何處へ？』

Kはいやに笑つて、

『わかつてゐるぢやないか。』

『僕にはわからない。』

『こまつた奴だな……。まア、好いから一緒に行つて見ろ。』

かう言つてKは引張つた。

『一體、何處へ行くんだ……。行くところがわかれば、一緒に行つても好いけど……』

『面白いところだよ。君の讀んでゐる小說本の中にあるやうなところへ行くんだよ。……無粹だな……君は……。そんなことはわかりさうなものだがな。もう二十二三にもなつて……。誰だつて面白い眞

かれは時には一時二時までも起きてゐることがある。明日は六時に起きなければならないと思ひながらも、どうしても、讀みかけた本を捨てゝ寢るのが惜しいやうな氣がしていつまでもいつまでも起きてゐた。さういふ時にはあくがれ心が果てしなく起つて來て、わるく昂奮して、自分がえらい作家にでもなつたやうな氣がした。

ある夜のことであつた。十一時がさつき鳴つた。ふと耳を欹てると、さつき自分と一緒に歸つて來て床に入つて寢たと思つたKが、また起きて靜かに着物を着替へてゐるやうな氣勢がする。Hももう寢て了つたらしいのに……、それも此前に一度か二度矢張これと同じやうに深夜にKが出かけて行つたことがなかつたなら、別に氣にも留めなかつたであらうが、その前のことがあるのでふと耳に留つた。帶をしめたり、彼方此方と物を闇にさがしたり、靜かにこつそりと歩いたり、果てはしきりの襖を明けて上り端の方へ出て行かうとしたりする氣勢を聞いてゐたかれは、急に立つて行つて、襖を明けて、上り端の方へ行つて見た。

Kは今しも下駄をさがして穿いて上り端の戸をグッと明けかけたところであつた。

『何處か へ行くの?』

かうかれは聲をかけた。

Kはそれには答へずに、手を振つてそれを制した。

箱を控へた窓際の机に向つて、讀みかけた本を讀んだり、紙を展げて何か頻りに書いたりした。をりをり溜息がそこからきこえた。

かれの頭にはツルゲネーフの淡いやさしい情緒と、トルストイの強い自由を欲する思想と、醜惡な人生をまざ〳〵と眼の前に見せるやうなゾラと、狂氣染みた男女の活鬪を描いたストリンドベルヒと、甘いしかし刺戟のつよい南國の戀を嗅ぐやうな氣のするダヌンチオとが、丸で別々にかれの頭の一部分を占めてゐるやうに、またそれがこんがらがつて滅茶苦茶に雜り合つてゐるやうに、かれの心の中に絕えず複雜した渦を卷いた。かれはをり〳〵若いまだ世馴れない心に、かれがさうした本から得た人生と男女の間柄とを、實際のかれの周圍にある人達の生活と比べて考へて見たりした。しかしかれの周圍にある生活は決して本で見たり味つたりしたやうな色彩の濃いまたは刺戟の強いものではなかつた。其處にはレギンやアンナ夫人もゐなければ、イポリタやジオルジオもゐなかつた。うつくしい戀心に泣く若い美しいロシアの少女のやうなものも何處にも見出すことが出來なかつた。平凡な色彩のない生活と、時間ごとに發着する汽車と、ぞろ〳〵下りて行く乘客と、軒を並べてのんきさうに住んでゐる人達と、それより他には何もなかつた。時にはかれはこんなことを考へた。(小說だから、かうしたことが、色の濃い、人を刺戟せずには置かないやうなことばかりが書いてあるのだ。實際は、外國だつて、さう面白いことばかりはないのだ。矢張平凡なんだ。平凡で、平和で、何も事のないのが人生だ。)

作の飜譯が出版されると、逸早く東京に註文してやつてそれを取寄せた。かれは僅かな月給をそれに大方注ぎ込んで了ふのを何とも思はなかつた。『道樂つて皆なあるもんだね。驛長さんの植木道樂、釣道樂、Kさんの着物道樂、Hさんの酒、君のは本を買ふのが道樂だね。』こんなことを言つて、ある時その驛員は笑つた。驛長は驛長で、かれの本を持つて、ちよつとの用のひまにも、立ちながらでも、歩きながらでも、熱心にそれに眼を曝してゐるのを見て、『中々熱心だね。』などと肩を叩いた。別に、そのために職務を怠るやうなことはなく、人一倍敏捷に勤勉に働くので、誰もそれを咎めるものとてもなかつた。

若い車掌見習は、驛長の社宅の後に出來た三間ほどの家に、他の獨身の二三人と一緒に半ば自炊のやうな生活をしてゐた。生れはかなりに遠い東北地方で、東京で鐵道學校に籍を置いてゐたが、その在學中にも、その學問だけでは何うしても滿足することが出來ず、何うかして一廉の小說が書けるやうになりたいと思つてゐた。藝術! それより他にかれの進んで行く路はないやうにさへ思はれたのであつた。

かれの朝夕起臥する一間も矢張その靜かな裏田圃に面してゐて、夜は蛙の聲が湧くやうにきこえたが、終列車のあとの用をすましてそこに歸つて來るのは、毎夜大抵十時半か十一時位であつた。その他に一週間に一度は、停車場の一間で他の驛員と交代に宿直しなければならなかつた。かれはさう遲く歸つて來てからも、決して同居の人達のやうにすぐ眠つて了はなかつた。一方にさうした本の一杯詰つてゐる本

『さうだ。』

『死の勝利つて、何ういふことが書いてあるんだね。』

車掌見習は振返つて笑つて、

『矢張、我々のことが書いてあるんだよ。』

『我々とは？』

『苦しんだり、悶えたり、男が女を戀ひしたり、女が男を戀ひしたりすることだよ。』

『飜譯もんだね。』

『さうだ……』

『面白いか？』

『呼吸もつけないやうに面白いね。』かう言つて、若い車掌見習は、驛員の方を見た。

驛員はまた本を手に取つて見て『僕なんかにはちつともわからない……』

『………』

何か言はうとしたが、それは言はずに車掌見習は靜かに笑つた。

『死の勝利』に限らず、種々な外國の飜譯小說をその若い車掌見習は澤山に持つてゐた。英語も少しは習つたけれども、原書はまだ完全に讀むことが出來ないので、さうした種類の外國の大家のすぐれた

てあたふたと出て行つたあとで、二つ三つ年上の二本筋の入つた制服制帽をつけた驛員が、そこに寄つて來て、ちよつとその本をひつくりかへして見た。

『死の勝利、ガブリエレ、ダヌンチオ。』

かう本の名が書いてあつた。

《相變らず讀んでゐるな……小說本を》かうその年上の驛員は思つたが、『死の勝利、死の勝利？』と不思議さうに口に出して言つて、《死の勝利つて、何んなことを書いたものだらう。矢張死ぬことでも書いてある小說本かしら？》かう思つて、その車掌見習の讀みかけて置いて行つたところを字をひろつて三四行讀みかけて見たが、それはかれ等がいつも小說本と思つてゐる御家騷動のことを書いたり、仇討のことを書いたりするもの、または藝者の寫眞の卷頭に入つてゐる雜誌の小說などとは夥しく違つて、矢張男と女のことが書いてあるらしいけれども、ちよつと間をひろつて讀んで見ては、容易に意味が取れないやうなものであつた。そこで電話のベルが鳴つたので、急いで本を舊のやうに置いて、室の隅にある電話のところに行つてその受話器に耳を當てた。

暫くしてから、驛員は再びその車掌見習の卓のところに行つた。用をすまして來た車掌見習は、矢張その本に顔を向けてゐた。

『小說本だらう？　それは？』

『二三日前のは？』

『昨日見た……』

『本當に何うしたのかと思つてゐたんですよ。』

『それにしても、えらいところが出來たね。こゝはあの沼のところぢやないか。話にはきいてゐたが、こんなに開けたのかえ、もう……』

『丸で島流しに逢つたやうなもんだわ。忙しいのよ、それは――』

『君一人？』

『さう――』

『それは大變だ。』

長い話がそれからそれへとつゞくらしく、午後の日影を受けて、男が自轉車に凭れるやうにしてゐる傍に女が後姿を見せて立つてゐるさまが長い間それと浮き出すやうに見えてゐた。その傍をいろ〳〵旅客が掠めて通つて行つた。

八

若い二十三四の車掌見習が、用が出來たので、讀んでゐたクロオス表紙の四六版の本をそのまゝにし

に夢中で駈けて行くぢやねえか。』などと言つて見てゐるのにも構はず、せいせい呼吸を切りながら、足を留めずに、土手の上へと馳せて登つて行つた。

油ぎつた素足と、ちらほら見える腰巻とが、いやにかの女をだるまらしくだらしなく見せた。土手に上つて、ほつと呼吸をついてゐるところに、自轉車は滑らかにやつて來てそして留つた。Sの慌てゝそれから下りるのが此方から見えた。

『はゝア、男がやつて來たんだ……。それでな……。それであんに走つて行つたんだ。』かうそれを見とゞけてゐた車夫の一人は言つた。

此方では自轉車を下りたSは、

『何うしたんだ?』

『今、あなたの來るのを家で見てゐたのですよ。』

お玉は猶ほはずむ呼吸をついて、『それにしても、何うしたのさ……。もう二十日にもなるぢやないの?』

『この間知らずに向うへ行つた。』

『だつて、はがきが届いたでせう。』

『行つた翌日届いた。』

浮べながら、明日來なかつたら、また手紙が出さうなどゝ思ひながら、湧くやうな蛙の聲に埋められるやうにして眠つて行つた。

七

それから二三日經つた午後のことであつた。丁度その時客が途絶えたので、お玉は裏田圃に面した座敷の緣側の丸竹の欄干のところに立つて、何氣なしに外を見てゐた。西日がかなりに暑くさし込んで來てゐた。

そこからは、Rの渡頭に向つて歩いて行く土手の上の人達の姿が手に取るやうに見えた。低い緣の草、それにさし添つた暑い日影、一つ二つ通つて行く蝙蝠傘、さうしたものを見るともなく見てゐたお玉の眼には、ふと向うの松原の緣のあたりから隼のやうに早く早く駛らせて來る自轉車が映つた。

お玉ははつと思つた。

それはSであつた。この間中から待ちに待つてゐたSであつた。お玉はわれを忘れたやうにして、急いで店へ出て、親方にことわる餘裕も何もなしに、いきなり下駄を突つかけて、そして駈け出した。

軒を並べた家の人々が見てゐるのにも構はず、餘り急いで駈けて行くので、すれ違つたものが呆氣に取られてゐるのにも構はず、または土手の下の溜りの車夫達が、『M屋のだるまさん、何うした？　いや

驛長の社宅に軒燈のついてゐるのを見たかの女は、十日ほど前、驛長の家族がやつて來たことなどを頭に浮べた。思つたより、またあの驛長さんにしては若すぎる位若い綺麗なハイカラな細君であつた。子供は四つ位になるこれも可愛い男の兒があるばかりであつた。(あゝして、何不足なく暮してゐたら、さぞ仕合せだらう。)などゝ思つたが、つゞいて、(それにしても、何うしたんだらう、今日もやつて來なかつた。)かう思ふと、Y町にゐた時から互ひに深くなつてゐるSのことが強く思ひ出されて來た。今日も度々その男のことを思つた。さつき、飲客に口說かれてゐる時にも思つた。何となく悲しいやうな心細いやうな氣がして來た。

表の戸締りをして、此方に來て、まだ起きてゐる板場の男と二言三言話をして、それからお玉は自分の寢る室に入つて行つた。それは丁度田圃に面した座敷のすぐ隣りになつてゐるやうな狹い三疊ほどの一間であつた。かの女はすぐ蒲團を布いて、そして獨り寢の綿蚊帳を低く吊つて、さて寢間着に着かへたが、閉め切つて蒸し暑いので、いつもするやうに雨戸を一枚明けた。と、夜風が涼しく入つて來て、蛙の鳴聲が裏の田圃を埋めるやうに聞えた。殘螢が唯一つふわりふわりと月光の中を縫ふやうに明滅して飛んで來て、すぐその顏の前を掠めるやうにして、また高く空に向つて飛んで行つた。

(まだ、螢がゐるのねえ。)こんなことを一人で心の中で言つて、そして好い心地で蚊帳の中に入つた。忙しいお玉に取つては、この夜更の一時間ばかりが自分の本當の時間であつた。お玉はSのことを頭に

『これから來るのよ。』

『樂しみね。』

『うそだよ、お前さん。來やしないよ。何うしたんだか、此頃ちつとも來ない。東京へでも行つたかしらんと思つてゐるんだけども、それならそれと言つて行きさうなものだと思つてね。』

『來るよ、今に……』

M屋の方で、呼ぶ聲がした。

『呼んでゐるよ。』耳をすまして、『親方だ……呼んでゐるのは！』

かう言つてあたふたとお玉は歸つて行つた。

まだその飮客はぶうぶう言つて飮んでゐたけれども、それから三十分位經つた後には、それも何うやら歸して、あと一組あつたのを一時間ほど相手をして、それからあちこちと跡片附をしたり戶締りをしたりしてゐる時分には、もう彼是十二時に近く、親方もとうに奧の寢床に入つて眠つてゐた。

表の戶を閉める前に、ちよつと外に出たかの女の眼には、停車場も、何も彼もしんとしてゐる夜更の光景が映つた。停車場にはそれでもところどころに電氣が明るくついてゐたが、月が此頃にもめづらしいほど明るく冴えて空に照つてゐるので、何となくいつもより光が薄くぼんやりして見えた。沼の方からは蛙の鳴く聲が湧くやうにきこえて來た。

蹲踞んで足のところをぼり〳〵かいたりした。

『でも、もうぢき、誰か一人來るんだらう。』

『お常ッていふ人が來るやうになつてゐるんだけども、向うだッて、忙しいからね……』

『兎に角、お前さん一人ぢや大變だ。』

『本當に、何か面白いことでもなくつちややり切れやしない。』

『でも、お客はあるんだらう？』

『あゝ、お客はあるね。馬鹿に出來ないね、こんなとこでも。板場は隨分いそがしいよ。飲客だつて今日七組あつた。』

『好いね、お前さんの家なんか……。矢張招牌が好いからね。』

『だつてお上さんのとこだつて、いそがしかつたでせう。』

『忙しいつていふほどでもないけども……』

『でも、見込のあるところはあるところらしいね。今に町家になるかも知れないなんで言つてゐたが……、鐵橋が出來る時分になると、それは人が入つて來るね。』

かう言つたが、

『今日は旦那は？』

『何處の人だえ？』

『なァに、Bの村の者ださうだけどもね。此間も來たんだよ。すかない奴だよ……。それを思ふと、こんな稼業は本當にいやになつて了ふね、お上さん。』

『まだゐるんかえ？』

『もう歸るだらうよ、一人で……。それに、客種がわるいね、此方は……。土百姓ばかりだもの。町にゐれや、すこしは、それでも好いた客もあるんだけれど……』

『何うも爲方がないね。また好いこともあるよ。』

『だから、此方によこされるのはいやだッて言つたんだけれど……。それに今のところは一人だらう。何でも彼でも皆な私が爲なければならないんだもの……。座敷の掃除から、拭掃除から、何から何まで……』

『まァおかけな。』

かう上さんは勸めて置いて、長い烟管を取つて、煙草をつけて一服吸つた。その後の一室にもう蚊帳が吊つてあるので、蚊がわんわん集つて來た。

『ひどい蚊だね。』

腰をかけては見たが、お玉はすぐまた立つて、蚊の留つたと思はれるあたりをびしやびしやたゝいた。

人で小體に稼業をやつて見ることになつてゐた。旦那といふのは、肥つた五十先の人で、ちよつと見ると、何うして此處の上さんがあれほど眞劍になつて惚れてゐるかと思はれるやうな男振であつたが、そこにはいろ〳〵な譯があるらしく、またはY屋の細君との意地張もあるらしく、男のやさしい深切に絆されたところもあるらしく、今でも二三日來ないと、『何うしたんだらう、旦那は？ 今日も顏を見せない。』などゝ言つて心配した。

上さんは三十二三で、ちよつと色が白く、顏立が好く、愛嬌があつて、ちやんと身じまひでもすると、これでも酌婦であつたことがあるのかと思はれるほど、それほど人の眼に立つた。

ある夜、終列車が來て了つてから、裏口から隣のお玉はやつて來て、立つたまゝで、

『うんざりしちやつた……』

『何うしたのさ……』

『だつて、長尻りで、長尻りで、しやうがないんだもの。夕方から來て、飮んでゐて、まだゐるんだもの。』

『長尻りは本當に困るね。』

『それに、しみつたれよ……。あれで、人を口說く氣でゐるんだから、本當にイヤになつて了ふ。うんと振つてやつた。……』

水は靜かに碧く岸に偏つて、小さな瀨をつくつて流れた。土手と川との間の桑畑や草藪の中にも、夏の日の暑い草いきれをわけて、近路をして、女の蝙蝠傘や白い麥藁帽子が絕えず此方へとやつて來るのが見えた。

六

M屋の酌婦のお玉は、隣りのY屋の上さんとちよいちよい顏を合せるので、ぢき懇意になつて、よく立話などをしてゐたが、何うかすると、ひまの時などには、裏口から入つて行つて、いろ〳〵打明け話などをした。

それと言ふのも、Y屋の上さんといふのが、以前A町のN屋で酌婦をしてゐて、川向うのY屋の主人と深い仲になつて、その上さんとも散々喧嘩などをして、後にはA町の小さな家に圍はれて、つい最近まで其處で五日に一度、三日に一度、その旦那のやつて來るのを待つてゐるやうな身分でゐたが、可愛い女の將來を思つてやる旦那の情と、自分にも然るべき獨立の店を持たせて貰ひたいといふ女の希望とで、停車場が此處に出來るといふ噂の立つた時分から、やれこれ言つてその準備をして、逸早く此處に煙草を賣つたり、手輕な中食を食はせたりする店を出して貰つた。行く行くは、矢張M屋のやうに、綺麗な酌婦を一人二人置いて、飮屋にする計畫ではあるけれども、先づ當分は、上さんと小女と奴僕と三

ひまな時とか、または運わるく、引くくじも鬮も當らないので、いつまでもそこに殘つてゐるやうな連中は、溜りの日影の涼しい處で、目を忍んで小さな賭博をやつたり、またはのんきさうに向ひ合つて將棋をさしてゐたりした。

それから土手を二三町ほど行つて、だら〳〵と下りて行くところにあるRの渡頭——そこには大きなこんもりとした杉の森などがあつて、川に沿つた大きな家は、昔、交通が主として船に頼つた時代に、船宿として榮えた昔を語つてゐるやうに見えたが、また最近まではその渡頭と川がさびしくなつたと共にすつかりさびれて、一日に何度と數へるほどしか渡船も出なかつた位であつたが、一度そこに停車場が出來てからは、俄に渡しを求める人達が多く集つて來て、行つて歸つて來る間には、乘せ切れないほどの客や車や自轉車がいつも岸に待つてゐるやうになつた。『一艘でやつてゐては、しやうがねえや。今二三艘なくちや、とても運び切れねえや。』などゝ待ちくたびれた人達は言つた。

『船頭さん。お錢が儲かつて困るべい。』

『本當だ……』

『不思議なもんだよな。待てば海路の日和ありだと言ふが、運が向いて來ると、金なんかいくらでも出來るもんだな。あんまりあくせくしねえが好いや。』飛んだ人生觀がさういふ人達の口から出たりした。

競爭して乘車を勸めた。T町へ、またはA町へ、その先一二里もあるK町へ、更に遠く野州の機業地の中心であるAS町へ。

かうした車夫達は、この附近の街道にある小さな聚落、または昔の徒步時代に榮えた宿場、さびしい荒れ果てた川沿ひの小さな町などに、一臺か二臺かあつて、たまさかにある客を乘せて、附近二三里、遠くつて四五里のところを走り廻つて、小さな一間しかない荒壁の一家の中に、色の黑い、大きな乳をした、言ふことをきかない子供等を終日呶鳴り散してゐるやうな上さんと一緒に、一生思つたやうなこともなく、懶惰と、飮酒と、賭博――賭博と言つても精々五十錢か一圓の賭をやつて、そしてその賽の目の運の好かつた時に、旨い肴の一皿も食ひ、あばずれ女の酌の一つもして貰ふといふやうな運命に生れついた人達であつた。それが此處に停車場が出來ると、好い爲事がそこに渦を卷いてでもゐるかのやうにして、期せずして皆な此處に集つて來た。おのづからかれ等の仲間には組合といふやうなものも出來た。またその統領分と言はれるものも出て來た。かれ等は客があると、溜りの中から、麻糸の太い數條を組合せた鬮を持出して、それをてんでに一本づゝ引いて、當つたものは、にこにこして好い運にでもあり附いたやうに勇み立つて、がらがらと勢好く車を土手の上まで曳いて上つた。そしてそこで待つてゐる客を乘せた。

そこからは、T川の廣い流が遮るものなく打渡されて見えた。

など、聲を懸けた。川向うに二里を隔てたT町から出店を出したM屋といふ料理屋、それと競爭の位置に置かれてある矢張同じ町のK屋の分店、すぐ川を越した上流にあるKM村の昔の船宿であつたY屋の分店、その他H町から出て來たTといふ休憩店、さういふ家々がずらりと低い軒をつらねて並んで、或はお中食所、或は川魚料理、或はちよつと一杯などと大きく小さくごたごたと大和障子や招牌や暖簾に書かれて、何の家にも靑田に面した見晴しの好い涼しさうな赤毛布を敷いた低い欄干のある座敷が覗かれた。

『えらく賑やかになつたな。此處がこんなにならうとは思はなかつた。』

『丸つきり、田圃で道も此處にはなかつたやうなところでしたがなァ。』

こんなことを言ひながら、荷物を持つた田舍の商人らしい二人づれが群集に雜つて話して行くあとから、繭買らしい秤を腰にさした男、近在の百姓の息子らしい若者、遠く野州の機業地にまで行くやうな角帶に金ぐさりを卷きつけて機屋さん、大きな荷物を抱へて子供の手を引いた上さん、さうした人達が一しきりぞろぞろと通つて行つた。中には、ちよつとその家並の一軒に立寄つて、門口で上さんと話してそしてすぐまた出て行くものもあつた。下りた客の多いのに拘らず、寄つて一杯飮んで行かうといふやうな客は少かつた。

上手の下には、車が七八臺、多い時には十二三臺も並んで、汽車が着く度にさうした群集を目寃けて

『それですよ……。』ちよつと顏を曇らせて、『矢張、材料がいかんのもあるやうですな。もつと好い奴を運んで來なければ、十分にはとても行きませんな……。しかしもう汽車が出來れば、それもわけはないですから……。これからも何分御盡力を願ひます。』

『やァ。』

かう言つて別れた。

『明後日が開業式だ。かうぐづぐづしてはをられない……。さうだ、あれもして置かなければならない。その他にもまだ用が澤山ある。こんなにして遊んではゐられない。』かう獨りで言つて、そして驛長は停車場の中へと入つて行つた。

五

汽車が開通してから、一時物めづらしいのと、交通の燒點がこの一角に集つたためとで、朝の六時半の一番の上りから夜の九時四十分の下りまで、何の列車も皆な一杯に詰つて、乘客は改札口からぞろぞろと潮のやうに構外へ出て、その新たにひらけた通りをT川の高い土手の方へと歩いて行つた。

新しく出來た通りの二三軒の料理屋の前には、銘仙の着物に赤い襷をかけて、いやに濃く顏に白粉を塗つた女達が、流行佛のある門前町でゞも見るやうに、『休んでいらつしやいまし、お寄んなさいまし。』

てゐるやうな海岸近い町の停車場にゐるよりは何れほど好いか知れないと思つた。そんな田舍なんかしやうがないと思つた初一念を飜して、此處にやつて來たことを寧ろ幸福であつたと思つた。

つゞいてまたそのすぐ近くに沼があることがかれを樂しませた。そこには鰻も、鯉も、鮒もすべてさうした川魚が澤山にゐる。とても忙しくつてさうした暇は得られまいけれども、子供の時分から好きで好きで飯を食ふより好きであつた釣魚の樂しみをしやうと思へばいくらでも出來るといふ考が、かれの單調な生活味をいくらか複雜にして吳れるやうな氣がした。かれはをり〳〵剖葦の鳴く沼の方に心をそそられるやうにして振返つた。

そこに向うから、煉瓦の竈の持主がにこにこしながら近づいて來た。

『開業式の日は大いに祝ひませうな……』

持主はかう元氣よく聲をかけた。

『やァ……』

『兎に角、此處に停車場が出來たのは萬歲でした。私はもつと向うかしらと思つてゐた。向うでも好いと思つてゐたんでした。ところがお誂へ通りでしたからな。運動でもしたかのやうに、ちやんと私の工場の傍まで持つて來て吳れたんですからな。』

『製造品の方は何うです?』

『大丈夫ですよ。此處等は一體に水がさうわるくありません。停車場の井戸だッて、さうわるくないでせう?』

『あの位の水なら結構だが、此處はあそこより少し低いからな。M屋の水はひどいッて言ふぢやないか。』

『あそこは別です……。外にまだ一つ二つ掘つたが、皆な好い水が出ます。』

『何うか好い水が出て呉れゝば好いがな。』傍に寄つて覗いて見て、『もう今日の夕方には掘り上るかね。』

『まア、あら方ですな。』

一人の男は體中を赤土だらけにして、井戸の中から綱に引上げられて出て來た。

驛長は宅が出來上つたなら、早速此處に五六本松でも栽ゑて、花壇でもつくつて樂しまうと思ひながら、また、そこを出て、何處でも此處でもトンカントンカンやつてゐるのを眺めながら、始めて來て見た時には、草藪と田と土手しかなかつた處に、さうしたさびしい何もなかつたところに、小さな繁華が其處からも此處からも時の間に押し寄せて來て、或は料理屋を、或は休憩店を、新聞配達店を、運漕店を開業してゐるさまを面白いとも思ひ、頼もしいとも思ひ、また言はば、その上に自分が大將のやうにしてすぐれた位置を保つてゐると思ふと、今までゐた小やかましい混雜した、いやな不愉快な空氣ばかり漂つ

抜けのした酌婦がいつも三度々々運んで來た。

何うかすると、驛長はそれを捉へて、戲談などを言つた。

辨當を置いて歸らうとするのを、わざと呼び戻して、『お玉さん、お玉さん、時には、お給仕位してつたッて好いぢやないか。』

『だッて……。』

『だッて、給仕をする人は別にあるッていふんですか。もつと好い男の……。』

『なら、して行くわ。私でよければ……。お酒でも一本持つて來ませうか。』

『眞平、眞平。』

かう言つて驛長は笑つて手を振つて見せた。

自宅の中では、人足が頻りに井戸を掘つてゐた。

やがて其處に姿をあらはした驛長は、

『好い水が出さうかな。』

『出ますよ。』

かう親方らしい肥つた男が莞爾しながら言つた。

『水がわるいのは一番困るからな。』

つて、『T驛の方が好いんだがな、雅致があつて……それに、將來、橋が出來れや、向うに、もう一つKM驛をつくらなくてはならなくなる譯ですからな。川の向うが、本當のKMなんだから。』

『橋が出來た曉には、此處からすぐT町へつけるやうな社の方針で、それでかう決つたのかも知れませんな。』

『向うは距離が長い。』

『それはさうですけれど。』

『ヤア、KM驛。』

そこにまた丼一つに有りついたやうな顏をして、二十八九の車掌のKがやつて來て叫んだ。

驛長は莞爾しながら、早速それを立てるやうに命じて置いて、まだ出來ないで一生懸命に停車場の一部を拵へてる大工の傍に行つて、暫しの間立話をした。

それから停車場の中に入つて行つて、自分の卓の前で、をりからかゝつて來た電話の受話器を耳に當てて、はァはァと言つて、それに適當な返事を與へたり何かしてゐたが、またぶらりと外に出て、今度は半ば建築中である自分の社宅の方へ行つて見た。

かれは今一間出來た六疊に、寢道具や手廻りのものだけを運んで來て、そして十日ほど前からそこに起臥してゐるのであつた。食事はこれも矢張その前に小料理屋を始めかけてゐるT町のM屋のちよつと垢

端驛になつたために、一層賑やかさが人々の眼を欹たしめた。

『町になるかもしんねえや。』

こんなことを村の人達は言つた。

其處にも此處にも鉋の音と鋸の音と金槌の音とが聞えた。汽車が開通する二三日前まで、まだその驛の名がしつかりきまらないので、ＫＭと呼ぶか、それともＳＧとつけるか、それともまた川の名をそのまゝ取つてＴ驛と呼ぶか、何方か更にわからなかつたが、一日前の午後、汽車で運んで來た驛の名を書いた立札には、白い地に黒く大きくＫＭと書かれてあつた。

『矢張、ＫＭに決つた。』

かう新しい制服制帽をつけた助役らしい男が言つた。

『おい、驛長さんにさう言つて來い。』

かう續いて言はれて、年の若い車掌見習が走つて驅けて行つたが、やがて柔和な顏をした、四十に近い金筋の入つた制帽をかぶつた驛長が莞爾しながらやつて來た。暑い夏の日がプラットフォオムを照した。

『矢張ＫＭか。』

かう言つて、助役と顏を見合せて笑つて、『負けましたな。これぢや丼を奢らせられる譯ですな。』暫し默

た。取敢へずぞんざいに釘と金槌で板を打ちつけられたやうな小さな家が、汽車の開通する日までに七軒も八軒も出來た。

レイルはH町の停車場を出て、暫し、その町の裏の白堊や、人家や、垣や、裏の畠の見えるやうなところを通つて、それから濶い荒凉とした野に出て、小さな川をわたつて、H町からK町に行く路に踏切の番小屋をつくつて、次第にその錆びた、蘆荻の緣の深い、菱や蓮の亂れた、田舟の一二艘横はつた、よくあの文學者夫婦が犬をつれて散歩した沼の畔りの路に添つて、段々その沼添ひの家の見える方へと進んで行つた。汽車の客車の中からはその家の一間が手に取るやうに明かに見えた。

剖葦はキ、キ、キ、といふ聲を立てゝ終日喧しくその饒舌を續けてゐた。

レイルはその沼添ひの家のやゝ後になつたあたりから、少し斜に沼について曲つて、T街道を横ぎつて、やがて寺の山門を右に見るあたりに來て、それから少し勾配がついて、やがてそのT川の高い土手と煉瓦を燒く竈の烟突とを前にして、そこに新しく出來たかなりに大きい一時終端驛の停車場へと入つて行つた。

短かい月日の中に、忽ち渦を巻いたそのあたりの光景は、突然やつて來たものを驚かしたばかりではなかつた。村の人達も皆な眼を瞬つて、急に新しい色彩をつけて來たあたりのさまを眺めた。H町は元から町であつたためにさうその發展は眼に立たなかつたけれど、此處はさびしい草藪であつたのと、終

場にテントを五つも六つも張つて、そしてそこで式の濟んだ後の立食の饗應があつた。藝者は町だけでは足りないので、KS町、G町、E町、川を越したT町までも手を延してかり催して來た。他の町の藝者は皆汽車で運ばれて來たのに、車で川を越して來たT町の藝者は、『好いわねえ、汽車が出來て。早くわたしの方にも川を渡つて來るやうにして下さいよ。さうすると、東京にもちよいちよい行けるやうになるのにね。』かう會社の重役の一人に言ふと、重役は、『汽車が出來たッてさうちよいちよい東京に情人に逢ひに行かれては、旦那がやり切れんぢやないか。汽車なんか成るたけ遲く出來る方が好いんだよ。』などと言つて笑つた。

此處での立食が濟んでから、町の料理屋での更に賑やかな宴會が夜半までつづいた。町の祭禮でもあるかのやうに、何處の家でも『祝鐵道開通』といふ新調の提灯を軒毎に掲げて、在から出て來た群集で到るところ賑ひ合つた。そして時間毎に、汽車は轟々としてやつて來て、潮のやうな乘客をそこに下した。

夏で、沼では剖葦が鳴いてゐる頃であつた。

四

開業式の日はH町ほどの賑ひはなかつたけれど、川の畔りの停車場前の發展は更に更に目覺ましかつ

川の鐵橋をかけなくちやならないにはならないんだが、それがまた一難關さ。』

『ぢや、まア、此處が終端驛のやうになるんだね。』

『なァに、川の岸まで延ばすさ。そしてそこに一時終端驛を置くのさ……。そしてそこで何年か經つのさ……。旨く行けば一年か二年で橋も出來るといふものだが、今の景氣は戰勝の餘波だから、當てにはなりはしない。言はば附け景氣だ。何億といふ金を使つて土地は取れても償金はまァ取れさうな見込はないから、一二年すると、きつとこの反動が來るにきまつてゐる。すると、橋もさう手輕くは出來まいよ。少し無理しても今ならやれるかも知れないが、何しろ困つてゐるんだからな、會社は――。T川の橋では、あそこの重役も、頭痛鉢卷でゐるよ。』

『さうかな……』

かう言つてその一人は點頭いて見せた。

しかしそれは內情で、兎に角汽車が來たといふことが、川を渡れるか渡れないかそれは知らないが、兎に角汽車が來たといふことが、町乃至この附近の人達を賑やかな氣分にした。朝起きるとから夜寢るまで、汽車の話で持切つた。H町の停車場の開業式の日には、知事代理や、縣會議員や、土地選出の代議士や、郡長や、町長やまたは附近の村長、小學校長などがフロックコオト乃至羽織袴でやつて來て、大きな國旗を十文字にその前に交叉させて、停車場をすつかり開放した上に、それで足りないで、前の廣

をたよりにしたH町の兒童であつてはいけません。生れ變つた心持で眞面目に勉强しなければいけません。それに、行儀も正しくしなければいけません。いつまでも田舍者であつては、汽車に對しても恥しい次第であります。』

次ぎに、鐵道の會社の内情に通じた人達は話した。

『で、川は何うするんだな……。この勢ひで、鐵橋をかけて了へば、豪氣なもんだが、それは出來まい。』

『それは無理だ……。會社は今でも隨分困つてゐる。每年、缺損々々で、K驛までさへ延びるか何うかといふことは一時大きな疑問だつたが、N氏が力を入れるやうになつてから、やつとあそこまで出て來た。あそこまで出た以上、何うしても此方に出て來なくちやならなくなつたので、T川まではレイルを引くだけて、別に費用もかゝらないからグングン出來て來たが、さア、T川の鐵橋で一煩悶さ。』

『でも、すぐ出來るやうな話も聞いたが――』

『何うして出來るもんか、あの川の鐵橋をかけるだけで二三十萬圓はかゝるといふ話だ。』

『さうかな。』

『この鐵道としては、何うしても野州から上州の機業地に連絡させ、更に運好くば、足尾まで延ばして、あの鑛山の銅を一手で運ぶやうにしなければ十分な成績を擧げる事は出來ないのだから、何うかしてT

はそはした。利に敏く、智慧に富んだものは、今までの平和な蝸牛の中に縮まつたやうな生活に滿足せずに、或は運漕店を、或は倉庫を、或は小さな料理屋を、或は乘降客の休憩店をその前に經營するために出て行つた。子供達は喜んで駈けて走つた。犬もそれにつれてワンワン吠えながら走つた。

『まア、漸く汽車もやつて來ました。何うも今の世では、停車場のない町つて言ふものはさびしいものでしてな。發達させるにしても、馬車や車では、何うしても十分なことは出來ませんからな。それに、停車場を持つてゐなくつては、何うしても幅がきかなくていけませんや……。これで、電氣か瓦斯でも引ければ、町はぐつと引立つて來ますがな。これからは大に諸君にも奮發して貰はなければなりません。今までのやうな因循な考は棄てゝ、新らしい進取の氣象を十分に何事にも發揮するやうにしなければいけませんな。』

こんなことをH町の町長は大勢人の集つてゐるところで言つた。

小學校の校長は校長で、兒童を集めて、次ぎのやうな演說をした。

『皆さん、私達の町も、汽車と停車場とを持つやうになりました。皆さんも嬉しいでせうが、私も嬉しい。これと言ふのも、日本の天皇の御稜威に由つてあの强い暴慢なロシアに勝ち、今は世界での一等國の群の中に數へられるやうになつたその餘光だと思ひます。從つて皆さんも今までのやうではいけません。昔の汽車も停車場もないH町の兒童であつてはいけません。あのテト、テトいふ馬車の喇叭の音ばかり

驚くべき光景がそこにあつた。

三

何も彼も皆な躍動した。生氣を帶びて來た。人は多くそこに集つて行つた。それは丁度文化の大きな波が、また都會の忙しく息つく空氣が、あらゆる原始的の狀態を破壞せずには置かないといふメカニカルフオオスが、更にまたその當時國を賭しての戰爭の勝利に夢中になつてゐる國民の國運の振興に對する思潮が、一時にこの狹いさびしい昔の野の一角にまで押寄せて來たやうに見えた。出來る出來るといふ聲は數年前から耳にしながら容易にやつて來なかつた汽車が、K驛の交叉點を突破してから、坦々として高抵のない濶い平野を一直線に容易に進んで、W驛、K驛の二つの停車場を置き、更にH驛の停車場が大きな寺の森を後にして準備された。田舍の人達は皆な目を睜つてその怪物のやうな汽罐車の單獨に動いて來るのを見た。鋭い、尖つた刺すさうな汽笛の林の陰に聞えるのを耳にした。また重り合つた雜木山の間から、黑い黃い烟が狼火のやうに颺つて、地を撼すやうな轟音と共に、長い列車の早く動いてあらはれて來るのを眼にした。先へ、先へと土地を收用して、畠も、田も、道路も、時には村の人家の敷地をもそのまゝ眞直に一條のレイルにするために、あらゆる人間の力は用ひられて、はつぴをつけた鐵道工夫の振り上げる鶴嘴の光りが、一種不思議な懸聲と共にあたりにかゞやき且つ滿ちわたつた。誰も彼もそ

つてさがしさうなもんだがな……。それにしても、此處は路なのに、よく知れずに今日までかうしてあつたもんだな。』

『蘆が繁つて、その中になつてゐるで、ちよつくら路からは分んねえ。』

これは他ではなかつた。勝であつた。煉瓦を燒く竈の群で不思議にしてゐた勝であつた。ぼんやりした、無口な、それでゐて女にちやほやされた、また此方からも女なしにはゐられないやうな勝の二十一歳の最期であつた。勝は何うしてこゝにかうした最期を遂げたか。つくづくはかない世をはかなんでかうした決心をしたのか。それとも又戀ごゝろの自由にならない女を恨んでかうした終りを告げたか。それとも亦醉つて好い心持で歩いて來て、闇に路を踏外してこの泥沼の中に陷つたのか。或はまた女を張り合ふ男が他にあつて、それに不意に襲はれて、殺されて此處に投り込まれたのか。それは誰も本當のことを知るものはなかつた。警察から巡査と醫者が來て調べたけれども、日數が經つてゐるので、自殺か他殺かをすらはつきりきめることが出來なかつた。『狐にでもつままれたんだべ。阿呆が――』それと聞いて飛んで來た政はこんなことを言つた。

旅の僧の開基した寺の和尚がその屍に向つて讀經した。

わかつた。かれは網の手になつてゐる竿で、ちよつと顏を仰向けさせて見たが、『キャァ！』と自から叫んで、そして路に上つて了つた。

丁度そこに通りかゝつた男は、その氣勢のただならぬのを見て、急に手を留めて自轉車から下りたが、

『何だ？　何だ？』

『土左衞門でさ……。びつくらしたにも何にも……。俺が、網で魚撈はうと思つて、かうやつて入つて行くと、そこにその土左衞門がゐるぢやないか。びつくらしたにも何にも……』

『何處に？』

『そら、そこに……』

自轉車の男は近寄つて行つたが、指されたところに果して溺死者の横はつてゐるのを見た。

『フム……。まだ若い男だな。』

『隨分日が經つてゐるぜ……。昨日や今日ぢやねえ。この陽氣だで、まだくさくはならねえが、色つてねえ……』

『本當だな。』

また近寄つて見て、

『何處の者だらう……。此處のもんぢやねえのかな。此處等のもんなら、ゐなくなつたとか何とか言

『突ッ走つたんだんべい――』

『さうときり考へられねえ。まさか、野郎、川へでも突ッぺいつたもんでもあんめえ。そんな風は少しもありやしねえものな。』

『ありやしねえとも……』

『困つた奴だな。放つても置けめい。』

かう言つて、政はつゞいて町の警察の方へ出かけて行つた。しかし何うにもならなかつた。いろ〳〵なことを訊かれたり、前の夜に行つてゐたといふだるま屋を調べたりしたけれども、遂にその踪跡はわからなかつた。『矢張、突ッ走つたんだんべい……。仕事がいやになつたんべ。』といふことになつて、そのまゝに月日は經つて行つた。

ところが、半月ほど經つたある寒い日に、沼に注ぐ小川の畔で、網を携へて日振りをしに行つた一人の男は、自分の腿まで入つて行つてゐる泥深い、蘆荻の縦横に折れ伏した中に、ふと人の頭見たいなものゝ浮んでゐるのを見て、ギョッとして二足三足後退りをした。果してそれは溺死人であつた。黑い泥に塗れた髪を伏せて、手を伸して、仰向加減になつて浮いてゐるのであるが、皮膚も何も彼もいやに糜爛して、黄いとも白いともまたは鼠色ともつかないやうな色をしてゐた。冬の事で、まだ悪臭を放つまでにはなつてゐなかつたけれども、長い月日をかうして此處に横はつてゐたのであるといふことはすぐ

まやに寄つて樣子をきいて來るやうに賴んだ。
男はやがて歸つて來た。
『ゐねえよ、親方。』
『でも、あそこに行つたにや行つたんべ。』
『來たには來たつて言つてゐたつけ……。來るにや來たが、一昨日の九時頃に歸つて行つたつて言ふんだ。』
『あまはゐたけえ。』
『ゐた。』
『何うしやがつたんだんべいな。厄介な奴だな。』
かう言つたか、すぐ言葉をついで、
『あまは何とか言つてゐなかつたか。』
『何うしたんだべ……歸んねいけ……つて言つて、おつたまげた顏をしてゐたつけ、何か思ひ當るやうなことはねえけつて言つたら、ちつともねえな、そんな突ッ走るやうな素振も何もなかつた。いつもの通り、酒を飮んで、寢て、勘定がねえつて言つて、そして出て行つたきりだつたよ。』
『不思議なこともあるもんだな。』

ら吹き出した西風が一層つよくなつて、吹きさらしの野は、家から顔すらも出すことが出來なかつた。風は低い堀立小屋の板屋根に吼え、竈の煙突に咽び、更に遠く寺の欅の古樹に潮のやうな音を漲らせた。

政は小便に外に出た。

寺の灯がぽつつり闇に一つ見えるばかりで、あとは風ばかりが荒れた。

『おゝ寒……寒……小便も碌にしてゐられやしねえ。』

かう言つて政は入つて來た。好い加減にかれは醉つてゐた。

『何うしやがつたんべな、本當に……。心配させる奴だな。』

かう政は思ひ出したやうに言つた。

勝は政が引張つて伴れて來たのであつた。野州あたりの生れで、のつそりとしてゐて、家には親も兄弟もあるが、何うしても家に歸るのはいやだと言つて、此前、政の爲事をしてゐた工場に來てゐた。それを不憫に思つて、政はいろ〳〵に眼をかけてやつた。自分の着物などもやつた。此方に來るについても、政は自分で劬つて使つてやるつもりでつれて來た。

翌日になつても、勝は矢張その姿を見せなかつた。

『突ッ走りやがつたな、いよいよ……』

かうは言ひながらも、心配になるので、いつも町に酒や食料を買ひに行く男に次手に勝のよく行くだる

竈から巻き上る烟は、常に西風に横折れて靡いた。
沼の畔りの家をその文學者が去つてから、一二年は既に經過してゐた。

二

勝は午過ぎになつても歸つて來なかつた。
『あきれた阿呆鳥だな。』
『文なしで歸れねぇだんべいや。』
『可愛がられてゐやがるんだよ。あいつ、持てるつて言ふから。』
こんなことを言つて、噂をしてゐたが待つても待つてもやつて來ず、四時すぎになつてもその姿を見せないので、
『何うしやがつたな。』
『仕事が辛いで、突ッ走つて了つたかな。』
『そんなことはあんめいと思ふんだがな。突ッ走るにしても、文なしぢや、何うにもなんめいやな。』
『今に、のそつり歸つて來るよ。あまり遲くなつて了うたで、かへりそびれて了つたんだんべい。』
しかしかれ等は搜して見るといふ氣にもならなかつた。やがて夜が來た。暗い寒い夜が來た。晝間か

その日もかれは午後からやつて來て、竈の中を覗いたり、そこに積まれてある製造品を見たり、また丘の上にその姿をくつきりと見せて、荒野の中に烟を漲らして活動してゐる自分の事業のことを考へたり、夕日にかゞやく沼の方を眺めたりしてゐたが、やがて夕暮近くなつてから、いつもの賃銀を職人達にわたして、そして待たせて置いた車で東京の方へと行つた。

ある日は、煉瓦を見に來た鬚の生えた洋服の男とKと立つて話してゐるのを職人達は見た。

『何うも、もつと色が出さうなもんだがな。……これぢや、何うもしやうがない。質も餘り緻密ではない。』

こんなことをその見に來た男は言つた。

近所でもこの事業についての種々な噂がきかれた。ある人は『とても駄目なこんだ。御本人が元々さうした知識がないんだから』と言つて、てんで相手にしなかつた。ある人はそれをK停車場附近で燒かれる煉瓦に比べて批評した。『もう少し資本を入れなければ駄目だ。技師の一人や二人は置くやうな設備をしなけれや……。それや、汽車が出來れば、滿更捨てた事業でもないよ。發展の見込がないぢやないが、しかし、それにやもう少し何うかしなけれや……』と言つた。

しかし、値が廉いので、地方的にはそれ相應に需要があるらしく、時には荷馬車が轍を深くその草路に印しながら、そこに積んである煉瓦を運んで行つてゐるのが街道を行く人々の眼に留つた。

るかれは、いろ〳〵研究の結果、自分にはさう大して深い經驗がないにも拘らず、此處に小さな竈をひらいて見る氣になつたのであつた。

それに、材料にする土もいくらかはその附近にあるし、燃料もあたりに豐富であつた。かれはいつも巨萬の富を夢みてゐた。

かれはをり〳〵其處に姿を見せた。肥つた四十近い立派な男で、金ぐさりをへこ帶に卷き附けたり、パナマの新しい帽子をかぶつたりして、よく竈のあたりにその姿を見せて、製品の結果を驗べたり、職工を相手にして販賣の方法を話したりした。

製品の結果は、さう好くはなかつたけれども、もう少し研究もし、方法を講じたならば、これで何うやらかうやらおつついて行きさうに見えた。

堀立小屋の中に入つて行つては、

『今に、立派な家を立てゝ入れてやるよ。汽車さへ早く來れや、此處等一面に大きな工場にして見せるがな。』

かう言つて職工を相手に、そのまづい地酒をその圍爐裏のところで飲んだ。

そして來る度に、細かく崩して來た銀貨や白銅のチャラチャラ入つてゐる財布から五日分の賃銀を出して、そしてそれを職工に渡した。

つた。材料は何方かと言へば好い方でない上に、竈も燒き方も完全でないので、とても思つたやうなものは出來なかつたけれども、それでも廉くつて輕便なので、地方的に需要が多く、K町の瓦と言へば、かなりに世間にきこえてゐるのであつた。勿論、此處にこの煉瓦の竈を起したのは此村のものではなかつたが、川向うのS村では昔からきこえた金持で、今でこそ家運が衰退したと言はれてゐるけれども、それでもS村のKと言へば、誰でも知らないものはない位の舊い家であつた。何でも噂では、先年妾狂ひや何かをして、散々家產を蕩盡して、その揚句に先代が死んで行つてから、その息子のKは、家道の回復に腐心して、何うかしてもう一度、元の財產家になりたいと言ふので、それで、いろ〳〵な事業に手を出し始めたといふことであつた。

こゝに竈を起すことについての動機は、いろ〳〵あつたけれど、その中で一番大きな動機は、東京の淺草を出發點にして、下野の機業地に達する汽車が、必ず此處を通過して行くに相違ないといふことをKが何處かで嗅ぎつけたためであつた。K町附近に生ひ立つただけにKは瓦を燒くことに熟してゐた。またその製造の利益の多いのにも熟してゐた。かれはこゝに停車場が出來れば、いかやうにも廣く且つ輕便にその製造品を運ぶことが出來ると思つた。否、そればかりではなかつた。さうした事業が汽車の出來たために、大きな成功をして巨萬の富を重ねたものゝあるのなどもかれは知つてゐた。それに、瓦より煉瓦の方が、たとへ品質は完全でないにしても、これからの社會には需要の多いことを知つてゐる

『本當だ。』

『町まで行つて來うや。』一番若いのにかう聲をかけて、『町まで行けや、もう豚位あんべいや。』

『行つて來べいよ。』

『酒と、食ふ物位ふんだんになくつちや、働けねえや。……勝は何うした？　昨夜も歸つて來ねえか。若い奴はのんきだな。着物もなくつて震へてゐる癖に、あまにかけちや、食ふものも食はねえでも好いだからな。』

こんなことを言つて、政といふかれ等の群では一番幅の利く四十先の大きな男は、圍爐裏の前に大胡坐をかいて坐つた。

『今日は旦那來べいな。來て勘定して呉んねえぢや困る。』

『今日は何にしても來べいよ。』

他の一人が合せた。

『竈の方は定が行つたんか。』

『行つた。』

『何うも旨く行かねえな。……材料がわりいでな。』

此の界隈では、これ以前にも、廉い下等な瓦を燒いたり、陶器を燒いたりするところが其處此處にあ

きな竈が二つまで出來た。

職工が五六人集つて、せつせとその竈の火を燃した。

低い二本の烟突からは、時には漲るやうに、また時には薄く靡くやうに眞直にまた横折れて黄い黑い烟が上つた。

小さな流には、板橋がかけられて、そこをかれ等の寢たり起きたりする低い堀立小屋から、職工達は土を畚に入れたり何かして渡つて來た。材料の土を運ぶトコロはまだ一條も出來てゐないので、かれ等は遠くからそれを運んで來なければならなかつた。

その堀立小屋の中には、夜は小さなランプがぽつつりと一つついて、その下に燻つてゐる圍爐裏の火のをり〳〵燃えあがるのが赤く闇を劃つて見えた。そこではあらくれた男が、三人も四人も集つて、應い地酒に醉つて管を卷いたり、いろ〳〵な儲け話をしたり、でなければ近所の女との色話をしたりして、後にはそれにも倦み勞れて、そして板のやうな薄い蒲團にくるまつて寢た。朝は霜が雪のやうに白かつた。

『えらく寒くなつたぢやねえか。』

こんなことを言つて、かれ等は井戸に行つて顏を洗つて、また圍爐裏の傍に戻つて來て、ぐつぐつ煮えてゐる大きな鍋の蓋を取つて見た。

『肴でも買つて來うや……。かうのべつに大根べい食つてゐちや、働けねえでな。』

のやうな氣がした。一番先に若い細君の色の白い顔、次ぎにかれの髪の長いやつれた姿、それにつづいて荷物を載せた車が三臺並んで靜かに街道の上に動いて行つた。犬はそのあとから路草を食ひながら走つたり留つたりして行つた。

晴れた碧い空には純白な雲が靜かに流れた。

かれ等の立つて行つた翌日は、冷めたい初冬の雨が降つて、土手の下の草路からは沼の蘆荻の白い花が半ば水に埋れ伏したやうに見えた。誰も通つて行くものもなかつた。

その二

一

その草路と土手との間に、一筋の折れ曲つた小さな流が囁くやうに流れて、秋はそこに野菊やらみそ萩やら水引草やらがその影を蘸したが、その流れの上の丘の一部を開いて、此頃、下等な煉瓦を燒く大

を疊んださゝ波の上にさびしく映つてゐるのが眺められた。

一臺の車には、かれ等の身のまはりのものが積まれた。古びて色褪せた大きな信玄袋、荒繩でからげられた柳行李の緣は破れて、中から外國の小說本が一二册はみ出してゐた。汚れた寢道具は大きな淺黃色の風呂敷に包まれて、その上に積まれた。

期待して來たやうに、新しい心の革命もすることが出來ず、女の心も完全につかむことも出來ず、思つたほど感興の充實した小說も作ることも出來ずに、矢張渡り鳥の南から北へ歸つて行くやうに、時が來て、かれ等も再び都會へと出て行くのであつた。たまつた間代は、歸つてから送つてよこすことにしてこらえて貰つた。酒屋、米屋の勘定も待つて貰つた。侮蔑と罵倒とをあとに殘してかれ等はそこから別れて行つた。

普通ならば、此處に世話して吳れた文學好きの青年位は、三里先きの停車場まで見送つて吳れても好いのであるが、それすら今は姿すらもそこに見せなかつた。

かれ等は唯、家の人達に挨拶して、そして車に乘つた。

『左樣なら。』

『左樣なら。』

それは家の人達に別れを告げる言葉ではなくて、沼や、草路や、蘆荻や、土手や、T川に別れて行く言葉

靡きわたる時が來た。葉末の枯れた蓮の葉、菱の葉、蘆荻の葉、その上にさびしい秋の風が吹き渡つた。
かれが此處に來てから書き始めた長い小說は、一度は百枚ほど書いて破つて棄て、一度は何うしても纏らないために、一月ほども手を束ねてぶらぶらしてゐたが、此頃になつて漸く興が乘つて、段々思ひ通りに書けるやうになつた。今はかれは戀愛にのみ沒頭してゐられなくなつた。また田園の迫害を相手にしてはゐられなくなつた。かれは兎に角それを書き終へて、そして一刻も早くこの憂鬱な生活から免れたいと思ひながら終日長く沼に面して坐つて筆を執つた。若い細君もその傍に默つて坐つて、そして矢張一刻も早くその稿の出來上つて都會に歸つて行く日の近づいて來るのを待つた。夫が散步に出かけて行つたあとでは、若い細君はよく其處で出來た原稿の紙數を數へた。
しかしこの頃の田舍の靜かなシインは、かれ等に何とも言はれない快よさと樂しさとを與へた。かれは勞れては、よく沼に舟を漕いで行つたり、土手の下の草路のあたりを步いたり、寺の奧の歷代の僧の墓の前にその姿をあらはしたりした。淡竹の藪を洩れてきこえて來る靑縞を織る機の音を靜かな心持で聞いた。『詩』がいつもかれの頭を流れた。
初冬の寒く晴れた日、これから四周を繞る山の雪が美しくならうとする日、その沼の畔りの家の前には三臺の車がさびしく置かれてあるのが小さく街道のほとりから見えた。西風はもう立ち始めた。沼の蘆荻はガサコソと鳴つた。渡り鳥の羽音は絕えず林から沼に向つて下りて行つた。沼には晴れた空が皺

こんなことをかれは言つた。

しかし彼等の沼の畔りに於ける生活は決して樂な生活ではなかつた。約束した社から金が來ないために、または原稿が賣れなかつたがために、一月を全く財布に金なしに暮して了はなければならないやうな時もあつた。かれ等に室を貸してゐる農夫は、流石に都會でのやうに直接にはその間代を請求しなかつたけれども、しかもそれよりも一層わるい侮蔑と壓迫とをかれ等に與へた。時には鼻洟もひつかけないやうな態度さへ見せた。段々彼等は田舍の人達の汚なく腹黑く卑しい心の生活を知るやうになつた。

『都會に於ける孤獨は、孤獨そのまゝでゐることが出來るけれど、田舍での孤獨は、ぢつとして孤獨でゐることも出來ない。』

かうした言葉をかれはその感想の中に書きつけた。

やがて秋が來た。洪水の憂ひの頻々として傳はる凄じい風雨が來た。空は暗く低く錆びた沼を蔽つた。雨の一時歇んだ時に、土手の方に行つて見たかれは、T川が凄じい濁流を張らして、平生のあの靜けさは、さびしさは何處に行つたかと思はれるばかりに原始の狀態に戻らうとして怒號奔張してゐるのを見た。いつもの桑畑やデルタはすつかり水に浸つて、土手のすぐ下の草まで濁流に押し流されさうにしてゐた。

しかしその凄じい洪水を豫想させた風雨も大したこともなくて過ぎた。つゞいて晴れやかな、月のあかるい、垣根に轡虫や馬追のすだく、木槿のところ〴〵に紅く白い秋が來た。天末にさびしい色ある雲の

『ヂャック、ヂャック。』

かう呼ぶと、その犬は急いで飛んで主人の傍にやつて來た。

寺から土手に上つて行くその草地を、ある夜かれは女と犬とを伴れて歩いた。かれ等は夕暮のT川を見に行つて、餘り長く河岸で逍遙つて、そして歸りは遲く暗くなつて了つたのであつた。その草路に土手から下りようとするところで、かれは急に女に對する強い愛を感じた。いきなりかれは女に寄添つて手を握つた。女の手も心も熱かつた。彼等は家をも臥床をも何も彼も持つてゐる仲ではあるけれども、また家の中ではいかやうなことをしようとも差支ない仲であつたけれども、しかも今は家も臥床も持たない戀人同士のやうにして、唇を合はせたり、女の髮の匂ひを嗅いだりしなければゐられなかつた。女は少しの間それを拒絶したけれども、しかも青草の匂ひと暗夜とがかれ等の周圍にあつた。かれ等は暫し其處に留つた。

暫くして、

『ヂャック、ヂャック。』

かう呼ぶ主人の聲がした。それまで戀の番人をしてゐた犬は、闇の中から二人に飛びつくやうにした。二人は靜かに街道から沼の畔りの方へと出て來た。灯がところ〴〵にチラチラ點綴されて見えた。

『沼のかをりといふものがあるね。一種不思議なロマンチックなものだね。』

かれには彼等の戀愛生活をかうした沼の畔りに置いて見るのがロマンチックな感じを起させた。錆び果てたとも言へれば爛れ盡したとも言へる二人の戀愛狀態は、いかにこの錆びた沼と憂鬱な田舍とに件つてゐたであらうか。そしてその穢く汚れた中に、あの美しい水あほひの花を咲かせたさまに似てゐたであらうか。女はいつもその紫の花を折つて來ては、男のせつせと筆を走らせてゐる傍に生けて置いた。

『この花を見ると、勇氣が起る。』

かうかれは女に言つた。

水鷄の聲も剖葦の聲もかれを力附けた。あの盛んな剖葦の饒舌と、その熱烈な戀こゝろと、水鷄のあの靜かな雄を呼ぶ鳴聲とは倶にかれ等に一種縮に似た戀の『詩』を夢みさせた。

かれはまたよく散步に出かけた。かれは夕日に榮えた沼のほとりから、森の中に見えるその旅の僧の開基した寺の山門へと向つて步を運んだ。そして山門のところに行くと、いつもかれは振返つて、沼と蘆荻とその向うにある自分の家とを見た。

かれはしかし旅の僧の傳說などは知らなかつた。誰もかれにその話をしてきかせるものもなかつた。またこの附近が昔一面の荒野であつたこともかれは考へなかつた。かれは唯步いて寺の中に行つた。

大きな銀杏の樹や、美しく赤く咲いてゐる百日紅がかれを其處に引寄せた。寺は寂としてゐた。何時行つて見ても、讀經の聲もきこえて來なかつた。

いつもさうした昔の幽靈から起つた。
ある夜はひどく喧嘩して、女が家から飛び出したのを追つて、三里もある停車場近くまで行つて、伴れて戻つて來たこともあれば、もう逃げたものと思つて、失望落膽して、思ひ崩折れてゐるところに、ひよつくり思ひ返して女が歸つて來たことなどもあつた。その時は一夜中感謝のエクスタシイに陷つたやうにして男は女を可愛がつた。女はもうその文學者から離れることが出來ないやうな情愛に伴れられて行つてゐた。
かれ等のゐる一間からは、その錆びた沼の一部がそれとのぞかれるやうに、または蘆や荻や藺に半ば埋却されて了つてゐるやうに見えた。さびしい空が雲と一緒にさびしくそこに映つてゐる時もあれば、夕日がわる赤く血のやうに沼を染めてゐる時もあつた。春の末頃から來てその年の冬に及んだかれ等の生活には、さびしいわびしい梅雨が鬱陶しく降り、一歩も外出することの出來ないやうな泥濘がかれ等の心を埋め、やがてそれが濟むと、暑い暑い平野の夏の夕暮などは蚊帳のなかでなければ食事も取ることの出來ない蚊群の襲撃がかれ等を脅かした。かれ等は何遍そこを一刻も早く切り上げて都會に歸りたいと思つたか知れなかつた。否、もし他にかれ等を慰める沼のラスチックな眺めと、T川の涼しい夜風と、美しいお伽噺の中の姫を思はせるやうな水あほひや河骨や旨い廉い鰻や川蝦や、さうしたものがなかつたならば、とてもさう長くはそこに落附いてゐることは出來なかつたに相違なかつた。

言つたら此方で却つて氣の毒になる位であるといふこと、さうしたことがそれからそれへ語り傳へられた。それに、何うかすると、二人で一緒に、これも矢張東京からつれて來た大きな犬をつれて、手を引き合ふやうにしてそこゝと散歩してゐるさまが近所の人々の眼を欹たしめた。『何うだんべ、また、つるんで歩いてゐる。』『田草を採りに出た上さん達がかう言つて手を留めて見てゐるものもあれば、『犬べい見せつけられて、妬けて、しやうがなかんべ。だから、あの犬は始終はッはッ言つて赤い舌を出して匂ひをかいであるいてゐるぢやねえか。』などと面白さうに笑つて話す男などもあつた。それにまたその大きな犬は、かれ等に取つて、かうした他鄕の、田舍の迫害から來るあらゆるものに對する有力な防衞の道具のやうに見えた。その犬はよく吠えた。學校歸りの子供達は、その犬に逢ふと、震へて足がすくんで、摺れ違つて通ることが出來なかつた。田舍にはさうした烈しい犬は何處にも見出されなかつた。

文學者に取つては、しかし、この幽棲は、その生活上またその思想上、決定的のものであつた。何うかしていままでの生活から浮び上がらなければならない。お互ひに新しい心の革命をしなければならない。更に優れた新しい努力を創作の上に試みなければならない。かう思つてかれは其處にやつて來た。一時、あらゆる烈しい都會の刺戟から離れて、新規蒔直しをやるつもりでやつて來た。次に、また以前から女に絡みつき纏りついてゐた他の男性の Love Affair から女を切り離して、完全に自分のものにするには、何うしても一時かうした生活をしなければならないと思つてやつて來た。從つてその夫婦喧嘩は

車やら荷馬車やら乘合馬車やらを載せて、そしてT町へと通つて行つてゐるのであつた。靜かに土手を下る。と、そこに桑畑がある。また草藪がある。年々の出水に捨て去られたデルタがある。そしてその間に通じた折れ曲つた草路が、やがてかれ等をRの渡頭へと伴れて行つた。

四

その錆びた沼の岸にある舊い農家の一間を借りて、ある年、都會から一人の若い文學者がハイカラな美しい細君を伴れて來て暮した。

その文學者の蒼白い、痩せた姿をしてゐるのに比して、その細君は色白く肥つて、髮を女優髷に結つたりして田舍の人達を驚かした。いろ〳〵な噂は時の間にあたりに傳へられた。二人が出來合ひの自由戀愛者であるといふこと、女は一二度は舞臺で役者の眞似をした人であること、男はまださう大してすぐれた作家ではないが、一二世に公にした作品が多少文壇の視聽を欹たしめたといふこと、夜は遲くまで起きてゐる代りに朝は十時頃でなければ起きないといふこと、始終夫婦喧嘩が絕えないといふこと、始めの中はそれを本當にして心配して仲裁してやつたが、段々それは喧嘩の後のいちやつきの色を濃厚にするためだとわかつて、今では誰も喧嘩をしても相手にしないといふこと、あゝいふ夫婦もめづらしいといふこと、朝など行つて見ると、一枚の蒲團に一枚の寢卷をかけて寢てゐて、そのだらしのなさと

道路と沼との間に、一ところかなり廣い地域を、水田にもせず、畠にもせずに、唯、草藪にして殘してあるところがあつて、そこには春はげんげや菫が一面に見事に咲き、雲雀が好い聲を立てゝ空に揚つた。

T川の大きな流を見にやつて來た人達は、大抵其處に來て、すぐのその前に堤防の長く連つてゐるのを目にして、その草藪の中に細く通じた路のあるのを選んで、そこを突切つて、一散に高い土手へと上つて行くのを例にした。土手の上からは、今だにあたりが荒凉とした野であつた時分を思はせるやうなさびしい大きなT川が溶々として流れてゐた。

帆の影さへそこには滅多には上つて來なかつた。

しかし何といふ廣々としたさびしさであらう。また何と言ふ荒凉とした眺めを持つてゐる川であらう。ところどころに砂洲をつくつて水は靜かに流れてゐるが、村落の所在を標示した森が散點されてあるばかりで、岸には何等川を彩る色彩もなかつた。

悠々として流れてとどまらず――そこに來ては誰でもさうした感に撲たれずにゐるものは恐らくはあるまい。

急に上流で、物の轟くやうな音響が川に響きわたつてきこえた。

『ヤ、舟橋だ。舟橋があるんだ。』

かう誰も彼も思はず聲を擧げて言つた。その舟橋の上を、さつきの街道が、錆びた沼に添つた街道が、

旅僧の來た以前からあつたものか、それともその後の川の洪水のために出來たものか、それは記錄がないので、何方だかわからなかつたが、その寺から少し離れて、蘆荻の深く繁つた錆びた小さな沼がをりをり夕日に輝いて見えた。今はもうあたりはすつかり開けた。路も縱横に村から村、町から町へと通じた。乘合馬車がラッパを鳴らして通つて行つた。自轉車なども滑かにその街道を輾らせて行つた。

『何でも、その沼の出來たのは、そんなに古いことではないといふことです。さア、寺とどつちが先だか？　多分寺の方があとだらうと思ふが、百五十年はまだ經つてゐますまい。』かう村の人達は言ふけれども、その沼はもつともつと昔の、原始時代からでもあつたかのやうに、錆色にどんよりと湛へて、藻も底深く氣味わるく繁り、いつもさびしい空が何かの眼でもあるやうに憂鬱に映つて眺められた。そこでは鯉だの鰻だのが獲れた。

しかし夏は色々な水草が繁つて、水あほひや澤瀉や河骨などの花も咲き、赤い白い蓮の花も咲いた。そして冬になると、渡り鳥は今でもやつて來て、もう網で獲ることなどは出來なくなつてはゐたけれど、それでも鴨、雁、鳰などが盛に下りるので、都から來る遊獵者の銃の音はをり〳〵靜かなあたりに響きわたつてきかれた。

H町から大きなT川をわたつて、國を異にしたT町へと通ずる塵埃の多い白い街道は、この錆びた沼の右の岸を通つて、それから大きな治水工事の施してある堤防の上へとかゝつて行くのであるが、この

ろがそれをきゝつたへて、そこからも彼處からもかれた賴みに來た。最初に野と戰ひ、西風と戰ひ、洪水と戰つたやうな新しい開墾地では、醫師も必要だが、それ以上に死を弔つて貰ふ僧が必要であつた。一月以上も留められてゐた後、かれは其處に永住するやうにと幾重にも村の人達から賴まれた。

僧は川の畔りに遠くない小さな掘立小屋のやうな寺に置かれた。其處には村の人達がいろいろなものを持つて來た。米を負つて來るものもあれば、味噌を持つて來るものもある。薪を拾つて來るものもある。本尊がなくてはと言つて、村の頭立つたものは、何處からか彌勒佛の小さい金佛を持つて來て、それを屋の中央に壇をつくつて据ゑた。

そこからは、朝に、夕に、絕えない讀經の聲がきこえて來た。

それは大抵法華經の普門品の一節であつた。

村の人達はその讀經の聲に促されたやうにして、またそれに力づけられたやうにして、辛い艱難な勞働を續けた。生れたものは働いてそして死んで行かなければならなかつた。月はさびしくかれ等の上を照し、星はきらきらと天上の榮えを語つた。

村は大きくなつて次第に富み榮えた。立派な寺の本堂もその旅僧の數代の後には出來た。山門に達する路には、大きな古い杉の並木が繁り、鋪道が出來、墓場には村の人達とともに、その旅の僧を始めとして、歷代の僧の丸い墓が立てられた。名もない草花は咲いて散り、小鳥は好い聲を立てゝ囀り交はした。

『行く。』

て、やがてかれ等は靜かに滿足して家の方へと向つた。かれ等は今夜は眠られぬであらう。渡り鳥の無數にやつて來る羽の音、ざわざわと騷ぐ氣勢、葉と共に枝から枝へ集り落ちる音、それを聞いただけでも、自分達の網に鳥の集るさまが想像されて、睫を合せることが出來ないであらう。日はいつかとつぷり暮れて了つた。路傍の庚申の石も、藁鳰も、丘の畔の薄も何も彼も全く夜の暗黑の中に包まれて了つた。

晝でさへそれとはつきり見えない細い黑い糸の網は、かうして、夜を、靜かな夜を、その丘のほとりに張られて殘された。さうした危い陷穽のあるとは夢にも知らずに遠くからやつて來る渡鳥は――。

三

『世話はするだで、何うかゐて下され。誰が死んでも、佛のために、お經の一つも讀んで貰ふ方丈さんがゐねえでな、此村には――』

かう言つて引留められたのは、六十二三の老いた僧で、一生を旅から旅へと鈴を鳴らし、珠數を手まさぐつてやつて來たやうな人であつた。五六日前、かれは川を渡つてそこに旅にやつれた姿を見せた。

それを村――村と言つてもまだ十二三軒しかない聚落の一軒の主人が、丁度その母親の初七日の供養に當るといふので、それを無理に賴んで、草鞋をぬがせて、そして家に上げて讀經をして貰つた。とこ

『でも、昨夜なんか隨分來たぜ……。家の周圍の欅に來たにも來たにも……。默つて寢て聞いてゐられねえ位に來た。』

『今が丁度好いんだ。今夜は屹度來るに違ひねえ。』

かう言ひながら、かれ等は立つて、先づ竿を立てた。

それは三間位にわたる長さの竿で、それを兩方に立てゝ、そして今度は持つて來た網をひろげた。それは細い黑い糸でつくられな大きな網だ。

一時間位かれ等は其處にゐたであらうか。すつかりその準備の出來上つた頃には、日はもう殘りなく暮れて、オレンジ色の夕照も次第に薄く、遠くに光つて見えてゐた細い川の流ももう見えなくなつてゐた。

かれ等はまた話した。

『寒くなつたな。』

『本當だ。……これから、雪になるのはもうぢきだ。』

『寒に入つたら、また日振でもやるかな。』

『あれも好いが、寒くつてな。』

『そんなことを言つてゐちや、お大名だ。今年も獲物がありさうだぞ。』

『てめいは行くか？』

二

林から野に出ようとするところに、ある時、渡り鳥を獲るための網が張られた。

かれ等はその近くにある村落からやつて來た。一人は竿を擔ひ、一人は網を抱へながらやつて來た。

それは初冬のやゝ寒い夕暮で、そこに網を張つて置いて、朝早くその獲物を獲ようとしてゐるのであつた。西風がうすら寒く野の杜を鳴らして、ガサゴサする丘のほとりの薄や萱に夕日が薄く微かに殘つてゐた。

『何うだ、來さうだな。』

『きつと來る……この風に空の具合では屹度來る。』

こんなことを言ひながら、くつきりと晴れて暮色に染つた空をかれ等は仰ぎ見るやうにした。西風の立つた具合といひ、夕暮の寒い空氣といひ、薄や萱のガサゴサするさまといひ、一つとしてかれ等を滿足させないものはなかつた。かれ等は明朝の獲物の數を頭に浮べた。

かれ等は先づ網と竿とをそこに投り出して、その傍に蹲踞んで、腰から煙草入を出して、石をすつて、ホクチに火をつけて、そしてスパスパと旨さうに煙草を一服二服吸つた。

『今年は來ようがいくらか遲れた。』

く環のやうに繞つた山々の白い雪を眺めて、

『雪よ、雪よ、山の雪よ。』

と叫ぶものなどもなかつたであらう。山は唯冬が來たために白く輝き、野は唯春が來たために麗らかに霞んだであらう。草藪や林は西風の吹くためにざわつき、雪解の水の押し流して來るために、あたりは洪水に浸されたであらう。そしてそれを拒ぐものもなしに、水はただ思ふまゝに氾濫したであらう。從つてその水脈は幾筋にもわかれて、昔のＩの渡頭のあるあたりも、時に由つてはいろいろに變つて行つたさまがそれと點頭かれて考へられた。今でも好奇の旅客は、その昔の渡頭の址を其處か此處かとたづね佗びて、或は村落と村落との間に、或は小さな殘つた流のデルタに、或は古い社の殘つてゐる一帶の低地に、てんでにその新しい發見を誇つた。昔の野の址をたづねやうとするには、今は古い寺、祠、墓、さうしたものの他には、最早何も殘つてゐなかつた。

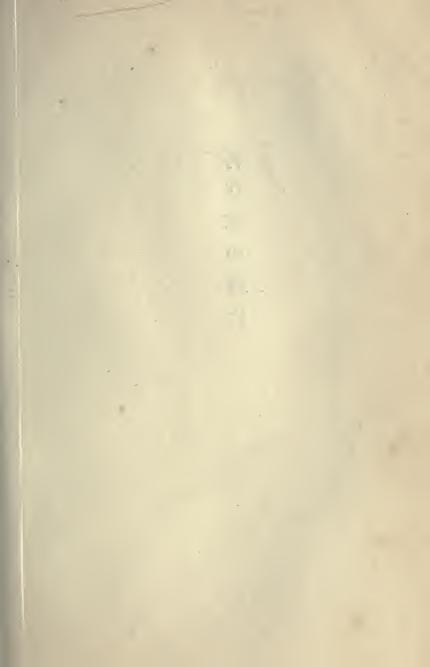
村落や町の中にをり〳〵殘つてゐる古い寺、またはその古い寺の中に殘つてゐる墓や記錄、それは二三百年前まで溯つて行つてゐたが、しかもそれは猶ほはつきりと昔の野のあとを想像させるには物足らなかつた。それよりも、蘆荻の一莖が、または湛へ殘された銹びた沼の水が、そこに冬の來るたびにやつて來る渡り鳥が、この野を行くものに昔の野のさまをあざやかに眼の前に描いて見せた。

再び草の野に

その一

一

麥の畠や水田や村落やまたは、その間を縫つてゐる塵埃の白く颺る路などで蔽はれてゐなかつた以前は、野はもつと荒凉としたものであつた。草藪が草藪に續き、林が林に續き、水は唯低きにつれて自由に流れ、鳥は靜かに春の花の埋れた中に鳴き交はし、獸は野分のあとの亂れた草を踏み分けて走つた。偶々その廣い野の中を此方から向うに横ぎつた長い路があつたにしても、それは深い萱や薄で蔽はれて、通つて行く旅客も稀に、午後の日影は徒らにさびしく樹間から線を成してさし込んで來るばかりであつた。春になると、雲雀は高い聲でその純な戀を名告るやうにして空に囀り揚つた。

恐らく今のやうに、野から路へ、路から土手へ、土手から廣く溶々と流れた川へと下つて、周圍を遠

再び草の野に

てあるある黒い標的を見た。

『折敷け！』

ばたばたと兵士達の蹲つて、銃を構へ装塡する氣勢が微かに曉の空氣の中に見えた。

暫くしんとした。

『狙へ！』

つゞいて第二の聲がぬゝつた。又しんとした。

曉の明星がきら〳〵した。

『撃て！』

凄じい一齊射撃が起つた

三十一

T町を騷がした脫營兵の放火事件、それは隨分長い間地方の人達の記憶に殘つてゐた。M市の新聞は二號活字で、大々的にその面白い記事を連載した。要太郎の故鄕でも、一時はその話で持切つた。

翌年の十一月の初めであつた。M市の新聞はかれが愈々何日を以て銃殺されるといふ記事を揭げた。何等か後の罪人のみせしめといふ意味もあるらしく、東の練兵場の射垜で、何日何時に執行するといふことまで報道されてあつた。M市はまた新しい Sensation に燃えた。誰もかれも好奇の眼を睜つた。何處でもその噂で持切つた。

しかし、東の練兵場で、公衆の前に執行されるといふ報道は、新聞記者の過つた報道であつたか、それともかうした Sensatinal なシインが人心にある惡影響を與へる事を恐れて中途で其議を飜したのか、それは何方だかわからないが、兎に角、其時刻に、それを見に、東の練兵場に出かけて行つた大勢の人達は、皆な失望して歸つて來た。練兵場はいつもの通りで、何も變つたことはなかつた。

其曉であつた。黎明のオレンジ色の空が美しく朗かな朝を豫想させる頃、銃を持つた一分隊計りの兵隊の姿は、指揮者の命令の下に一列に或る間隔を置いて嚴かに並んで見られた。夜はまだ全く明け離れなかつた。山近い曉の空氣は銳く人々の肌に染みた。かれ等はかれ等の前に既に適當の距離を隔てて置かれ

三十

夕日の薄赤くさし添つた小さな池、それに添つた路、二三本生えた小松、そこを追跡隊の人々は度々通つた。蛙が靜かに鳴いてゐた。

蘆や荻や藺の新緑が岸を縁取つて、黑くなびいてゐる藻の上に白く點々として花が咲いた。靜かなしんとした池の面には、少しの皺も小波も立たずに、夕暮の深い碧の空が捺したやうにはつきり映つて見られた。白い雲の影も靜かに落ちてゐた。

池を縁どつた小松の向うに、淺くはあるが一ところ雜木の林があるので、其處はちよつと影が濃やかに何となく暗く陰氣に感じられた。初夏の頃によく見る山木爪の赤い花などがボッボッ咲いてゐた。

三度目にその岸を通つた時、部長の眼にちよつとある物が映つた。それは不思議な光景であつた。それは人の頭だ。水に浸つて首だけ出してゐる人の頭だ。眞白な、死人のやうな、それでゐて鬚の生えた、五分刈頭の……。部長は突然叫んだ。『居た、居た、居た！』

人々は飛んで來た。水中での格鬪が暫し續いた。

れた。

それは丁度さつきかれが歩いてゐた丘の路から少し下つたやうなところであつた。下には路に臨んで小さな池があつて、その半面は赤く夕日に彩られてゐた。

小松の中を一つ〳〵さがし廻つて歸つて來た部長は、

『何うもゐない。』

『不思議だな。』

『本當に不思議だ。』署長も手を拱いて、『それも、深い森があるとか何とかなら、その中にまぎれ込むツて言ふこともあるけれど、別に隱れるにも隱れるやうなところがないんだからな。』

『本當だ。』

『下に下りたんぢやないだらうな？』から傍にゐた町の有志が言つた。

『いつの間にか、非常線を破つて、遁げ出したんぢやないかな。』

『そんなことはない。それは確かにない。』から部長も斷言した。

丘の附近には、かなり大勢の群集が押寄せて來てゐた。皆なわい〳〵言つて騷いだ。

『もう少しさがして見るんだ、仕方がない。』から署長は命令した。

役も自轉車を飛ばしてやつて來た。電報でM市の兵營に照會したら、三日前から脫營してゐる兵士があるから大方それだらうと言つて來たといふ新しい噂なども傳へられた。

接觸を保つてゐる方でも、次第に近く押し寄せて來てゐた。

しかし、五時少し過ぎた頃になつて、犯人の行方が不明になつたのが人々を不安にした。何處に行つたか、その姿が急に見えなくなつた。今まで見えてゐた姿が、丘を越すなり路に出るなりしなければならないその姿が……。

で、追跡隊の人達は、かれの步いた丘から丘へと行つた。彼方此方と殘るくまなく搜し廻つた。R町の路の方の人達も此方へとやつて來て搜した。

『何うしたらう？ 不思議なことがあるもんだな。』

『本當だ。』

『つい、さつきまで見えてゐたんだがな。何處にも行くわけはないがな。』

『確かに隱れてゐるんだ。ゐるに違ひない。』かう署長はせき心になつて言つた。

人達はそれからそれへと搜し廻つた。一番最後にその姿の見えてゐたあたりへは、警官達が代る〴〵行つた。

白いズボンが其處にも此處にも見えた。追跡隊の中には、紫の色をしたT町の町旗などが飜つて見ら

ら丘へと越して行つた。

丘と丘との間には、蘆や荻や藻や蒲などの岸に茂つた小さな池がさながらかくされてあるかのやうにところ〴〵に湛へてゐた。剖葦が頻りに鳴いた。

一面を取卷いた山の翠微は、次第に午後の濃淡の多い影を帶びるやうになつた。丘から先には低い丘が重り、其上に襞の深く刻まれた山が連り、更にその上に高い〳〵屋梁のやうな山嶺の連りが聳えた。雲が其處から渦を卷いて湧き上つた。

何事もないやうに、人々の大勢騷いでゐるのも知らないやうに、野の道には飴屋の笛が聞え、農夫の唄が聞え、麥刈の男女の群が見えた。山近い村からは、塵埃を燒く烟が白く靜けく靡き上つた。かれが一刻も早く夜になるのを望むのと正反對に、追跡隊は、是非とも暗くならない中に犯人を捕縛しなければならないと思つた。R町の路の方から押寄せて來た群集は、中でも殊にその念に驅られた。

『ぐづ〳〵してゐちや駄目だぞ。』

『一人ばかりの犯人を半日かゝつて捕へられないッていふことがあるか。』

かう人々はいきまいた。町での騷ぎは、愈々大きく、火の手が盛んになつて、是が非でも今日の中に逮捕して了はなければならないと誰もかれも言つた。T町の重立つた人達は、皆な出て來た。町長も助

『誰がわるいでもない。俺がわるいんだ！　仕方がない。』

かうもすれば好かつた、あゝもすれば好かつた。かう種々と後悔の念も湧くやうに起つて來たが、今更そんなことは少しも役に立たなかつた。

歔欷きながらかれは獨語ちた。

かういふ間にも、追跡は愈々迫つて來たので、かれは慌てゝかけ出した。

丘から丘への道をかれは縱横に縫ふやうにして歩いた。かれは小松の中に身を隱して見たり、岩穴見たいなところに入つて行つて見たり、M村の方へ行く路の方へ下りて行つて見たりした。しかし、暫くして、そのM村の方へ行く路にも、R町の方へ行く路にも、追跡隊が既にぐるりと取卷いてゐるのを發見した時にはかれは絶望した。かれは既に周圍に網を張られた勞れた且つ飢ゑた獸に似てゐた。

『なァに、その時は突破してやれ！』

かういふ烈しい心の狀態にもをりをりかれはなつた。

かれはしかし飽くまで遁れることを考へた。M村、H村、R町――すべてその方面は駄目らしいが、この續いてゐる丘から丘を越えて行つたなら、何うにか遁げる方法があるかも知れなかつた。それに、長く潛伏してゐれば、夜になる。夜になれば――闇夜になれば、いかやうにも、この網の目をぬけ出して行くことが出來る……さうだ。それが好い。さながら天の佑でも得たやうに、かれは喜んで、また丘か

『何處かへ行つたぞ。』

時には、群集はこんなことを言つて騒いだ。しかし、暫くすると、かれの姿は、あんなところと思はれるやうな路も何もない丘の上のところにあらはれた。

かれは跣足で遁げて來たので、既に處々で岩角などに觸れて、血が二三ヶ所から滴り落ちてゐた。かれはをり〳〵立留つて考へた。何うかして逃げて行く道を、ほつと呼吸のつけるところまで行く道を……。しかし後からの追跡を片時も念頭に置かずにゐられないかれに取つては、その群集からかれの姿をかくすといふことは容易でなかつた。

それはかりでなかつた。かれはをり〳〵甦つて、一昨々日から自分に絡みついて來た運命が、たうとう自分をかういふ窮地に陷れたといふことを考へた時には、かれは何も彼も冷笑したいやうな氣分になつた。かと思ふと、生に對する執着が、強い力でかれに蘇つて來た。遁げられるだけは遁げて見ようと思つて、かれはまた路を丘の陰の方へと取つた。

をり〳〵お雪のことが思ひ出された。もう何も彼も知れたらう。それと聞いて、かの女は吃驚してゐるだらう。呆れてゐるだらう。かう思ふと、かれは何も彼も見事に破壞されて了つた自分の生活を發見せずには居られなかつた。『もう、お了ひだ！』かうかれは思つて頭を振つた。急に、何うにもかうにも堪らなくなつて來たといふやうに、顏に手を當てゝ泣き出した。

早く警察へ言つて置いたゞ。』考へて『昨夜遲くなつても、取りに行けば好かつたゞ。』

『ほんとによ。』

その頃には、追跡隊は既に大勢になつて、丘陵の中に逃げて入つて行つたかれのあとを追ひかけて行つてゐた。其處は小さな赤く禿げた丘が處々にいくつとなく起伏してゐるやうなところで、その丘をめぐつて、畠道や村道が混り合つたり縺れ合つたりしてついてゐた。一つの路はM村に、もう一つの路はH村に、それと交叉して、大きな縣道が山の中のR町へと向つてつけられてあつた。

追跡隊は犯人の遠く遁げ去るのを防ぐために、一方はM村の路を、一方はR町への街道を塞いだ。R町への街道の方へ行つた隊の中には部長がゐた。『この二つの路さへ塞いで了へば、やつこさん、何うにも出來やしませんよ。何方へも出られやしませんから。これで押つめて行けや、袋の鼠も同然だ。』など丶言つて笑つた。

犯人と接觸を保つてゐる方の群集は、要太郎の姿が或は丘の裾の方へ、或は丘から丘へ續く路へ、萱や薄の青く生えてゐるところへと段々動いて行つてゐるのをつとめて見失はないやうにと心がけた。要太郎は今はもう走らなかつた。かれは靜かに歩いた。時には大勢集つてゐる群集の方を眺めた。其間には、汽車が白い烟を眼下の野山に漲らして、T停車場へと入つて行くのがかれの眼に映つた。

『それ、何處かに見えなくなつたぞ。』

いて、はつとして顔色を變へた。かの女の顔は見る〳〵眞靑になつた。『まァ……』とも言はなかつた。しかしかの女は默つてゐた。深くその祕密を胸に包んでおくびにも現はさなかつた。

稻荷前の油揚の婆さまは、

『え、あの兵隊の奴が……』

と呆れて、

『そんぢや、金なんか一文だッてなかつたんだな、野郎。野郎、初めから喰ひ倒すつもりだつたんだな、太い野郎だ。』

『とれねえぞ、もう……』

隣りの婆さまがわざと冷かすやうに言ふと、

『ほんまだ。馬鹿な目に逢つちやつたな。』倒された錢の額を數へて見て、『四十二錢、馬鹿見た。ほんに馬鹿見た。太い野郎だ。どうも、變な野郎だとは俺も思つただァ、……圖太い奴だ。……あ? 兵隊屋敷を突ッ走つて出て來やがつたんか。えらい目を見た。……でも、なァ、相馬屋のこと思へや、大難が小難だ。』

『それはさうともな……』

『でもな、あとで、何うかして取んねえぢやなんねえ、野郎だッて、親類位あんべい。だから、今朝

その噂ばかりで、事件のあるのを好む彌次馬は、其處からも此處からも出て行つた。かれの遁げて行つた裏通りは、人で一杯になつた。

巡査とかれと取組んでこけつまろびつした破れ垣のあたりにも、人々が大勢來て集つて見てゐた。

『此處から遁げたんか。』

『さうだ。』

『こゝを破つて遁げたんだな。……はゝア、成るほど警察の裏だ。』

こんな事を言つて見てゐた。其の現場を見た細君は、『何事が始まつたかと思ひましたよ。ばた〳〵ッて言ふ音が通りでするから、何事だと思つて出て見ると、大きな男が遁げて行くぢやありませんか。そしてあとからお巡りさんが追つかけて行くぢやありませんか。吃驚したにも何にも……』などゝ話した。青年も走つて行けば、子供達も走つて行つた。其日の稼業をそつちのけに急いで出て行く人などもあつた。

『兎に角遁すな。遁しちや町の名折だ。』かう誰も彼も言つた。

裏道から川にかけた橋を渡つて、麥畠の中を通つて、レイルを越えて、犯人と接觸を保つてゐる追手の群のゐるところまでは、群集が陸續として絶間なく續いた。ある野菜畑は荒され、ある麥畑は蹂躪され、レイルの前の小川の畔の草原はしとゞになびき伏した。

丁度要太郎が丘の上にグン〳〵登つて行く時分、避難所の奥で働いてゐたお雪は、始めてその噂を聞

『一體何者だ！』
『脫營兵だとよ。』
『脫營兵！』
助役はかう言つて、『相馬屋に泊つてゐたのか？』
『さうですとさ！』
『それぢや、物でも盜らうと思つて火をつけたんだな。』
『さうでせう。』
こんなことを言つてゐる中に、かれの姿は向うの村に通ずる路に出て、それから畠の中をグングンと丘の中の方へ進んで歩いて行くのが見えた。初夏の午後の日は美しくあたりを照した。
追ひかけて來た人達は、それと接觸を保つてゐたが、此方から見て、何うすることも出來ないやうに思はれた。かれ等もレールを越して此方へとやつて來てゐた。巡査達の白いズボンと、日に光る劍とが鮮かに見えた。大勢集つてついて來てゐる人達も見えた。
少し經つた頃には、追ふ者追はれる者の現場よりは、却つて町の噂の方が大袈裟になつてゐた。そこからそこへと傳へられたその噂は、段々募つて、『逃しちやならん、それこそ町の恥辱だ。一體、警察の奴等がまごまごしてゐるからわりいんだ。遁すッていふことがあるもんか、』などと言つた。到るところ

苦しさうに呼吸をつきながら歩いた。そこはもう畠で、あたりには人家がなく、右には稻荷社の暗い杉森がこんもりと指さゝれた。

追ふ者と遁げる者との間に横はつてゐる距離は何うする事も出來なかつた。向うから誰か廻れば好いがなと思つても、さういふ間はなかつた。かれは川に架けた橋を渡つて、麥畠の黃く熟した中についてゐる路を橫ぎつて、それから停車場の向うに見えてゐるレールの路の方へと走つた。

町ではその噂が忽ち到るところにひろがつた。電話は警察署から彼方此方へとかけられた。停車場へかゝつた時には、事務を執つてゐた驛員が電話口に出たが、それときくと、『大變だ、大變だ。昨夜の火を放けた犯人が此方へ遁けて來たさうだ。』かう言つて驛長に報告すると共に、そのまゝ走つて場外へ出て行つた。丁度その時、要太郎は畠から汽車のレールを越えて、小松の生えた赤土の小さな丘陵の起伏した方へ行く路にその姿を見せてゐた。

『あれだらう？』

『さうだ、あいつだ。』

『のんきさうに步いてやがる！』

其處に集つて出て來た驛長や助役や驛員達はこんなことを言ひながらそれを見てゐた。踏切の少し先のレイルのところをかれは越えて行つたのであつた。

がらびつくりした顔をして見てゐた。ある家では、聲をきゝつけて、何事かと驚いて主人が出て來た。人々は服を泥だらけに制帽も何處かに失つた一人の巡査が、『逃げた！　逃げた！』と呼びながら走つて行くのを見た。

『何だ、何だ！』

彼方からも此方からも其の大聲を聞いて人々が出て來た。向うに遠く半町ほど隔てゝ、一人の男がこれも矢張帽子もかぶらずに跣足で走つて行くのが見えた。

『昨夜の放火の犯人だ！』

かう巡査は矢張走りながら呼吸も絶え絶えに言つた。

『放火の犯人！』

人々は目を呼つた。

その時分には、警察でももう大騷ぎになつてゐた。『逃げた！』といふことと、『いよ〳〵犯人はあいつだ！』といふことと『それ遁すな、』といふこととが一緒になつて人々の頭に上つた。犯人の遁げて行つた跡から、巡査も行けば部長も行き署長も行つた。其處に大勢集つてゐた昨夜の客達も出て行つた。

しかし戰地で鍛へられ演習で馴らされたかれの足は非常に早かつた。遁げる者と追ふ者との間の距離は次第に遠く遠くなつた。かれはあるところまで行つて振返つて見たが、それからは少し足を緩めて、

野菜の畠の方へと一散に走つた。

向うに通じてゐると思つた路は、其處に行つて見ると、柴垣で遮られてゐるので、かれは其處でちよつとまごまごした。その間に巡査は劍を鳴らしてあとから追ひ附いて來る。後から組み附く振りほどく。かぢり附く。擲る。それは唯だ瞬間であつた。二人は聲も立てずにこけつまろびつしたが、かれの爲めに好運なことは、かれの體の凭りかゝつた垣の杭が、古く朽ちてゐて、ぐらぐらと向うへ倒れかけたことであつた。それにかれは一氣に巡査に押されてゐた。かれと巡査とは、やがて一緒に重り合つて杭と共に向うに倒れた。

それは町の裏通りであつた。

一度は下に組み敷かれたかれも、力が強いので、忽ち巡査をはね返し、擲り、蹴り、振り切り、振り放つて、一散にその裏通りを向うへと走つた。

『逃げた！　逃げた！』

あとから追ひかけた巡査は、始めてかう大きな聲を立てた。

『逃げた！　逃げた！　犯人が遁げた……』

かういふ呼聲が靜かな一時すぎの裏通りに長く續いた。

通りには人が二三人通つてゐた。誰も皆な振り返つて見た。ある家では、其處の細君が子供を負ひな

調べることがあるから、』と言つてかれを遮つた。
かれの顔は眞靑になつた。

二十九

午後一時過、かれは絶えず傍について居る巡査に言つた。
『便所に行きたいのですがね。』
『さうか。』
かう言つて、巡査はかれの後について中庭から厠の方へ行つた。例の若い巡査であつた。
かれは其後種々に調べられた。脫營兵であるといふこともう知られた。一昨日長い路を歩いて町に入つて來たといふことも、稻荷前で油揚屋の婆さんを捉へて無錢飮食をしたことも、何も彼も知られた。
かれは訊問の度每、呼吸も塞がるやうな苦痛と懊惱と戰慄とを感じた。今はもう一途あるのみである。
逃遁の一途あるのみである。
大便所の中に暫く入つてゐてやがて出て來たかれは、そのまゝ默つて、そこにある手水鉢で靜かに手を洗つてゐたが、元の方へ行くと見せかけて、いきなりスタスタと別の方へ行つた。何をするかと思ふと、敏捷なかれの手は、さつき見て置いた扉を明けて、そのまゝ追かけて來た若い巡査を突き飛ばして、

『現役かね？』
『は……』かれの顏は緊張した。手を兩側に當て不動の姿勢で立つた。
署長はぢつと長い間見詰めて『いつから來て泊つてゐる――』
『一昨日です？』
『現役兵が何うして、さう長く外に出てゐられるのか。』
『請願休暇を貰つて來ましたから。』
『幾日間――』
『一週間……』
『すぐ電報できけばわかるんだが、本當だな？』かれは默つて點頭いた。
『お前だな、稻荷前で、無錢飮食をしたのは――』
『無錢飮食をしたわけではありません。生憎財布を忘れて行つたものですから……』
『さうか、よし、隊は一中隊だな。電報でき〻合せばすぐわかるから……』
かう言つて次ぎの客の番になつた。他の三人も矢張同じやうにして調べられた。別に難かしい事を聞かなかつた。やがて署長が出て行つたので、『これで好いんですか。』などと言つて、皆な揃つて出て行かうとした。で、かれもあとについて出て行かうとすると、部長は、『君だけは殘つてゐて吳れ、もう少し

かれの腰を下した横のガラス戸からは、狹い中庭を隔てて、警察の母屋の一間が見え、梧桐の深く茂つた綠色が見え、その上に深く澄んだ青空と明るい日の光線とが見えた。

巡査が二人ほど入つて來た。

兎に角、二階と三階とに寢た客に來いといふことであつた。で、三階の客が一人、二階の客が四人、揃つて巡査と主人との跡について行つた。かれも無論その一人であつた。かれ等は今度は長いテイブルの置いてある矢張腰掛の据ゑてある細長い狹い一間へと通された。

署長も部長もゐた。

三階の客が一番先に調べられた。かれは姓名を訊かれ記されてから、いろ〳〵と當夜のことを訊ねられた。警官達は別に彼等を罪人扱ひにしなかつた。署長は莞爾と髯を捻りながら、しかもじろ〳〵と鋭く人間の心の內部まで看破しなければ置かないといふ眼で、ぢつと話をしてゐる人の一言一行を見た。

『いゝえ飛んでもない。慌てゝ飛び下りて、こんな膝をすりむいたくらゐなんですから。』かう言つて、眞面目な顏をして、三階の客は足をまくつて見せた。

次ぎにかれの番が來た。

かれはわざと冷靜を保つた。宿帳に書いた虛僞の姓名を言つて、そして、自分が氣が附いた時には火は既に二階に廻つてゐたと話した。

渡した。そこに扉がある。その向うに青々とした野菜畑がある。物干棹に掛く赤いものを干した小さな家屋がある。その前に路がある。

かれは厠を出て、手を洗ひながら、あたりに誰もゐないのを見定めてから、五六歩向うへ出て行つて見た。あの扉さへ破れば、逃げるのに、さう困難でないのを見て、かれはいくらか安心した。『なァに、戰地でやつたことに比べれば、この位のことは何でもありやしない。』などゝ思つた。

かれは戻つて來て、以前腰をかけてゐた榻に矢張腰をかけた。

『放火は重いんだんべ。』

氣が附くと、かう誰かが言つてゐる。

『重いとも……』

『無期か、十年か？』

『死刑かも知れねえぞ。何でも重いッて言ふこと、俺ァ聞いてた。』

『でも、死刑ぢやあんめい。』

『何うだかわかんねえぞ。』

田舍に生活してゐるかういふ人達は、法律のことなどには明るくないので、『死刑か？　無期か？』と言ふことに就いて、いろ〳〵言ひ争つたりした。かれは聞くともなくそれを聞いてゐた。

に、主人の眼が常にかれの態度から離れないのをかれは感じた。かれはその眼を避けるやうにした。

便所に二三人行くものがあつたので、ふとかれも立上つて其方の方へと行つた。かれには便所よりは寧ろ遁げる時のことが氣に懸つてゐた。いざと言へば、遁げなければならない。……その時は？　その時は？　かうかれは旣に餘程前から思つてゐたが、しかし、いざ遁げるとなると、自分の罪惡を自分で承認した形になる。滅多に遁げるわけにも行かない。かう思つてかれはその逃遁の意思を押へた。しかしいかにしても氣になつて仕方がない。體がわく〳〵するやうだ。で、かれは立つて厠の方へ行つた。主人の眼がかれの方を目送するのをかれは感じた。

正直に大便所に入つて、戶を閉めたが、そこでかれは自分の罪惡と祕密とに正面に對するやうな心持がした。と同時に、一方では、何うかしてこれを切り拔けなければならないといふ努力が渾身に漲つて來た。『そんな意氣地のないことで、何うする。昨夜のやうな大膽なことをやつた身が……』かう何處かで、自分を叱咤する聲がきこえる。かれは兎に角覺悟をきめて置かなければならないと思つた。默つて口を緘してゐれば、罪があつても、罪にさせられないことをかれは知つてゐる。しかし、それをするには、兵營、世間、故鄕、さういふところまで公然に知られることを覺悟しなければならない。新聞にも大々的に書かれるに相違ない。それよりも、逃げる方が好いとかれは思つた。何うせ逃げなければならない身だ。旨く行けば巧に逃げ終らせることが出來るかも知れない。かう思つて、かれは厠の中から外を見

かうした噂がかれ等一行の歩いて行く跡に長く續いた。

中には、困つたやうにしほ〳〵した相馬屋の主人に同情して、『あゝいふ評判の好い家に、かういふ災難が湧いて出て來るんだから、本當に何が何だかわかりやしねえ。俺達だつて、あすが日何んな目に逢ふかわかりやしねえ。それに保險に一文もついてゐねえいて言ふぢやねえか。氣の毒だな、あのおやぢ。』

『本當に、相馬屋が氣の毒だ。』

やがて一行の人達は、部長に導かれて、ぞろ〳〵と警察の松と階段のある入口の見えてゐる門へと入つて行つた。要太郎は一昨日の夕暮、この前を通つた時のことを思ひ出した。見えない、しかし的確な運命の糸のやうなものがあつて、それが其處と自分とを引付けて行くやうに考へたあの空想が事實となつたことをかれは思つた。しかし、かれには何うすることも出來なかつた。

警察の大きな建物に續いて、三面硝戸で明るくしきつた板敷の、ひろい、二三ヶ所に卓と腰掛とが置いてあるところへと一同は先づ入れられた。『かういふ處に入れられたのは始めてだ。』かう言ふものもあれば、『何も經驗の一つだよな。一日遊ぶ氣でゐるんさ、仕方がねえ。』などと言ふものもあつた。此の廣い板敷の中で、時々は巡査達が擊劍の稽古をするらしく、竹刀や道具がそこらに置いてあつたりした。要太郎は何となく落附かないやうな顏をして、隅の方の長い榻に腰をかけてゐたが、此時は朝あたりとは違つて、人の眼が鋭く意地わるく自分にのみ注がれてゐるやうな氣がして堪らなく無氣味であつた。こと

二十八

その日の午前十時過、その避難所から、前夜の大勢の泊客がぞろぞろと揃つて、町の大通りの中ほどにある警察署の方へど歩いて行くのが見えた。主人と巡査部長とが先に立つて、あとから其人達は續いた。要太郎もその中に雜つてゐた。

町ではその噂で持ち切つてゐた。『まだ、放火か粗相かわかんねえかよ。』『放火だとすると、あの大勢の中に誰かつけた奴があるんだぞよ。』『何うも外から入つたものぢやねえらしいな。』こんな噂がそこにも此處にもきこえた。初夏の午前の日は明るく一行を照した。麥稈帽子をかぶつてゐるものもあれば、ほや〳〵した頭髮をそのまゝむき出しに現はしてゐるものもある。旅館の浴衣の泥に塗れたのを着てゐるものもあれば、ちぐはぐの下駄を穿いてゐるものもある。兩側の町の人達は、大抵は外に出てその一行を見送つた。

『でも、物を燒いた客もあるんだらうな。』

『それはあるだらうとも……』

『どうも、災難だから、仕方がないけれど、お客も迷惑さな。』

『もし、あの中に、やつた奴があるとすると、ひどい奴もあるもんだ。』

さう言はれゝば、成ほどあの時、手傳つてやるとか何とか言つて、金や貴重品の入つてゐる箱に手を懸けた。それから、隙を覘つて何かしようとしたやうにも取れば取られる。主人は首を傾けて考へた。

『第一、あの顔からして氣に入らねえだ、己には――。善人ぢやねえぞな、あの顔は？　俺は家に入つて來た時からさう思つた。』

『でもな、無闇に、さう人を疑ふわけにも行かねえだな。』

『それはさうだがな。氣をつけて見ろや、……それにな……』又耳に口を寄せて、『警察にも、それとなく言つて置けよ。何うも、さうぢやねえかと己は思ふんだ。』

小さな聲のうちに包まれた年取つた老婆の觀察、それが深くその祕密を主人に展いて見せたやうな氣がした。主人は默つて腕を組んで考へた。成るほど祖母の言葉の中には、經驗に經驗を重ねた細かい觀察がひそんでゐる。本當にさうかも知れなかつた。しかし一方では、僅かな金を盜むために、わざく火をつけなくつても好さゝうなものだと思つた。主人は何方かと言へば、三階の客に疑ひを挾んでゐたのであつたが、婆さんは、『何うして、お前、三階のあのお客さんなんか、そんなことをする人ぢやねえぞな。一目見て、するかしねえか、わかるだ。』かう言つて、昔聞いたことのある同じやうな場合の話をそこに持出した。主人は深く深く考へに沈んだ。

をした。その間要太郎は緣葉の日に照る緣側のところに胡坐をかいて、ぼんやりとして、頭のふけなどを取つてゐた。

二十七

『お前、お前、ちよつと……』

かう小聲て、そッと手で招くやうにして、婆さんは主人をその傍に呼びつけて、耳に口を當てゝ何かこそこそと話した。

主人は點頭いて聞いてゐたが、時々眼の前に浮んで來る光景を思ひ浮べるやうにしたり、また餘りに他人を疑ひすぎるやうな判斷を考へるやうな表情をしたりして聞いてゐたが、『しかし、餘り人を疑つてもいけないからね。』

『でも、ね、何うも、さうぢやないかと思ふよ。それも、今、ふと、考へごとをしてゐて思ひついたんだがな……あそこは、『又、耳に口を寄せて、『あそこからは、階梯を上つて行けばすぐあそこだから、……それに、よく考へて見ると、をかしいことがあるだよ。第一、兵隊さんが二晩あゝして泊つてゐるツて言ふこともをかしいしな。それに、道具を運ぶ時に、店先にいやにちよこまかしてゐたぢやねえかね。』

『それはさうだな。』

ない。』こんなことを其處でも此處でも言つた。

奥の主人夫婦や婆さんの述べたところでは、女中の粗相では絕對にないといふ主張であつた。その三階の隅に火鉢なり煙草盆なりを昨日は置かなかつた。何うも不思議だ。あそこから火が出るわけがない。かう言つて皆な巡査の問に答へた。婆さんは中でも思ひ當ることがあるやうな調子で話した。『何うかお調べ下さい。いづれ、さういふわるいことをしたものがあると思ひますから、』と言つた。

家族の人達の中の評議では、何うしてもその放火者は二階と三階との客の中にあるらしく思はれた。火災保險も何もつけてないので、金や貴重な財產の一部は出したけれど、この不意の災厄に再び容易に恢復することの出來ない將來について主人は思ひ煩はずには居られなかつた。昔から何代となく評判よく續いて來た旅館、事件といふ事件も災厄といふ災厄もなかつた家、その家がかういふ騷動を町中に起させたといふことも心外であつた。『代々、人に恨まれるやうなことをした例はないんだから、何うしても物取りか何かのした仕業に相違ない。』かう主婦も婆さんも言つた。

それに、かういふことは、主として男女の關係からよく起るものだといふことを主人も婆さんも考へた。そして女中達に觀察の眼を向けた。しかし、誰にもさうした嫌疑のかゝりさうなものもなかつた。

『まア、然し、お上で調べて下さるから此方でやきもきするがものもない。』思ひ出したやうにして主人は言つた。主人は一方そのために抑留されてゐる大勢の客を氣の毒に思つて、度々其方へ行つて、挨拶

『俺いちやつた……』

『何を？』

『金入を燒いちやつた……』

『さう、それはいけなかつたのね。困るでせう。それぢや――』

『困つちやつた。』

『餘程多く……』

『何ァに、少しだけども、十兩ばかし……』

『さう……』と言つたが、氣を兼ねるといふやうにあたりを見廻して、『私と貴方と知つてゐる同士だッて言ふことをわからないやうにしなくつては駄目ですよ。』

『それは大丈夫だ……』

其處に、向うに人の影が見えたので、お雪はすつと別の方へ行つて了つた。

抑留された大勢の客の中には、苦情が百出した。中には忙しい、是非今日の午前中に行かなければならない商用を持つてゐる人などもあれば、『災難とは言ひ條、馬鹿々々しい話だ。これで一日潰されて了つてはやり切れない。時は金だ。』などといきまくものなどもあつた。客が放火した。そんな話はないといふ意見に大勢は一致してゐた。『女中の粗相に相違ない。それを、客を一體にすべて調べるといふ法は

つた口附で、自分の始めてそれと知つた時の光景を話した。『眼が覺めた時はもう眞赤でした。ばちばち物の燃える音がしてましたた。兎に角、三階の隅から出火したことだけは確かですな。』
『それから、二階には、誰がゐた？』
其處にゐた客達は彼方此方から顏を出した。『もう、一人ゐた筈だがな。』客の一人はあたりを見廻してから、庭に立つてゐるかれの方を見て『あゝ、あそこにゐる。あの人もさうです。』
と言つて指した。
若い巡査は振返つてかれの立つてゐるのを見た。かれは顏を見られるのに氣がさしたといふやうにいくらか低頭加減にした。しかし巡査は別に氣にも留めぬらしかつた。
『兎に角、あとで、一應は調べなければならないから、氣の毒だが、誰も何處にも行かずにゐて呉れ。』
かう言つて、若い巡査は、また奥に行つて、もう一人の部長らしい巡査と共に、今度は主人主婦老婆女中といふ順で、いろいろに調べるらしかつた。婆さんが部長に向つて、熱心に何か頻りに述べ立てゝゐるのが、そこにゐるかれにも見えた。
巡査が歸つたあとで、かれは初めてお雪の傍に近づくことが出來た。
『何か燒きやしなかつたか？』
『大したものでもないけど……行李一つ燒きましたよ。』

かう考へてかれはぼんやり立つてゐたが、しかしそれは一時の激情で、段々心が重苦しく沈んで澱んで行くのを見た。それの出來るやうなかれではなかつた。またお雪のことを考へると、とてもそんなことは出來る筈はなかつた。罪惡をごまかしても、何うしても、生きてゐなければならなかつた。

で、かれはまた歩き出した。

裏道を通つて、避難所になつてゐる家の裏門近く行つた時、かれはふと劍の音をさせて、ズボンだけ白い姿を朝の空氣の中に浮出させて、二人の巡査がそこに入つて行くのを見た。かれは一種の重い戰慄を總身に覺えて其處に立留つた。

しかし思ひ返して入つて行つた彼の眼と心と態度とは、すべて鋭敏にその巡査の制服の方へ動いて行つてゐた。その他には何も見ないといふほどの强さで……。かれは巡査の一人が主人と何か話してゐるのを見ると同時に、一人の巡査が此方へ、昨夜泊つた客の大勢集つてゐる方へやつて來るのを見逭さなかつた。

それはまだ若い巡査であつた。かれはその若い巡査が落附いた聲で何か言つてゐるのを耳にした。中にゐた大勢の客達は、或は坐つたまゝで、或は其處まで出て來て、皆な銘々に勝手に自分の見たことを話した。『三階にひとりゐたッて言ふ客は誰だな？』かう問はれて、その商人風の男は、おづおづとしたといふ風で、運わるく三階に泊つたばかりでいくらかかけられてゐるらしい嫌疑をさも迷惑さうに、訥

靜に實行した自分が、それが自分であるのが不思議に思はれる。そしてまた何故そんなことをしたかといふことが不思議に思はれる。依然として無一物であるかれにはことにさう思はれる。急に、後悔の念が凄じく胸を衝いて起つて來た。

人を騷がせ人を驚かしたのは誰か。他人の財産を、何の關係も恩怨もない他人の財産を一夜の中に亡して了つたのは誰か。そして知らぬ顏をして、乃至は出來るならばその罪を他に着せてまでも自分は好い子になつてゐようといふやうな圖太い不正直な考を持つてゐるのは誰か。さういふ人間も矢張血もあり涙もある人間の一人か。かう激昂して自分で考へたが、さういふ性質と性情とを持つてこの世の中に生れて來た自分といふことを考へると、堪らなく悲しくなつて來て、自分の心も苦痛も何も彼も闇から闇へと葬られて行くやうなさびしさと悲しさとで胸が一杯になつた。飜つて考へて見ても、かれのこれまでの生活には、少しの光明もなければ、少しの溫情もない。かれのやつたことは皆な誤解され、憎惡され、罵倒され、冷笑されて、一つとして自分の眞の心の通つたためしがなかつた。故鄕でもさうだ。兵營でもさうだ。戰地でも矢張さうだ。……不意に、潔よく自首しようかと考へる。昨夜火をつけたのはこの身である。自分で自分がわからないこの身である。いかやうなる制裁でも受ける……。かう言つて潔よく自首しようか。さうすれば、この重荷は、心の重荷は釋然として解ける。運命もその展ける路を得る……。

に脛を打ちつけた血のにじんだ跡を出して見せたり、其處等ぶら〳〵歩いたりしてゐた。そしてかれの眼は絶えずお雪を捜した。女中の姿さへ見ると、それはお雪ではないかと思つた。勿論、今の場合、口を利くわけには行かない。うつかりして、疑はれるやうなことがあつてはならない。しかしかれはお雪の姿を眼で捜さずには居られなかつた。夜が明けてから、かれは初めて奥で女中達に雜つて一緒になつて働いてゐるお雪を認めた。

燒跡をぶら〳〵歩いてゐたかれは、稻荷社の門前近くまで行つて引返して、今度は裏の道の方へと行つた。其處にも此處にも狼狽と混雜との跡が殘つてゐる。半ば燒けた子供のつけ紐のついた四ツ身、八分通り燒けた女足袋、まだ火がついてぷす〳〵燻つてゐる小搔卷などもあつた。ポンプの水で雨あがりのやうに泥濘になつた路には、明るく朝日がさして、子守が子供を負つてめづらしさうにあたりを見て歩いてゐたりした。物のくすぶる匂ひがそれとなくあたりに漲り渡つた。

一昨々日から自分に纏はりついて來てゐる運命が、裏の半ば燒けて庇の落ちた二階屋の傍を通る時、又も強くかれの念頭を襲つて來た。理由なしに——本當にこれといふ理由なしに、かうしたハメに陷つて、將來は何うなつて行くかわからない運命のそれでも八分通り通過したことを考へた時、かれはゾッとして身を震はせた。自分ながら自分で何うしてかういふことをしたかわからないやうな氣がした。ランプ壺をつかんで闇の中を三階へと上つて行つた自分が歴々と見える。さうしてさういふことを存外冷

兒に乳房を含ませてゐた。

座敷には泊つてゐた客が七八人避難して來た。逸早く運んで來た親類からの見舞の燒出しの結飯、大きな土瓶、かけ茶碗、さういふものが一杯に其處に並べられた。出火の原因についての疑惑、驚いて寢惚け眼で飛び出した狼狽、それからそれへと何處でも火事の話で持ち切つてゐて、包を燒いたといふものもあれば、大切の書類の鞄を出す暇がなかつたといふものもあつた。慌てゝ戸惑ひをして何うしても出口が分らなくつて困つたといふ人の話は人々を笑はせた。三階の西の隅に寢た客は、商人風の三十五六の色の白いほつそりとした男だが、慌てゝ階梯を半分ほどで踏外した話をしながらも、自分に嫌疑がかゝりやしないかといふ恐れがあるので、何となく困つたやうなしよげたやうな顏をあたりに際立たせて見せてゐた。

女中達も何かしら燒かないものはなかつた。風呂敷包、葛籠、行李、中には永年働いて漸く拵へたばかりの晴衣一重ねなどもあつた。男から貰つた指環を入れて置いた小箱を燒いて了つたものもあつた。男の寫眞だけを持つて逸早く外へ飛出したものもあつた。『何うも災難だから仕方がないさ。御主人はもつと大變なんだから。』などゝ客は女中の一人をなだめた。その間にも夜は次第に朝になりつゝあつた。消し忘れられた弓張提燈の薄明く點いてゐるのを番頭は消して歩いたりした。かれはその大勢の客の中に雜りながら、燒出しの結飯を食つたり、其場々々に適應した話の相手になつたり、手傳ふために簞笥の角

薄青い煙を透して、向うに滅茶々々に蹂躙られた野菜畑と、半分燒けた物干と、その間を拾ふやうにして歩いてゐる人達とが見えた。黎明近く、旅館の人達の立退いた場所へ――それはそこから遠くはなかつた――自分も一緒に行つたことも思ひ出した。いつそこのまゝ逭げて了はうかと思つたけれど、さうすれば愈々自分の罪が知れると思つて、何食はぬ顏をして、その大勢の人達の群の中に雜つてゐたことを思ひ出した。その避難した場所は、旅館の婆さまの弟の家で、かなりに大きな呉服屋であつたが、其處では、裏から入る座敷や居間をすつかり開放して、人達の避難して來るのに任せた。婆さんや子供達は逸早く其處へ伴れられて行つた。女中達も逃げて行つた。主人が其處に來たのは、もうすつかり鎭火して、黎明の光が其處となくあたりに滿ち渡る頃であつたが、激昻と奮闘とに勞れ切つたといふやうにぐたりとして、『何うもわからねえ、あんなところに火の氣のある筈はねえ。……あそこに火鉢や煙草盆が置いてあるから、女共が火のあるのを下げて、それから出たと考へれば考へるんだか、何うも變だ。』などゝ言つてゐた。種々な家財道具は、十中八九は燒いて了つたけれども、それでも手傳人が多く、手廻しも早かつたので、肝心のものだけは出すことが出來た。『ふゝん、あれも出した。よかつたな。』と言つて急に思出したやうに、『あの箱は何うした？』

『出しました。』

主婦も疲れ切つたといふやうにして、亂れた髮を梳かうともせず、ぼりやりした顏をして、末の女の

『さうかえ、貴方が――』

話してゐた人は、振返つて此方を見て『さうかえ、まア、困つたべえ。』

『すつかり燒いちやつた。すつてんてんだ。』

『さうだんべ。……一體、何處から出たんだな。』

『三階だ。』

『お客さん何處にゐたゞ。』

『俺ァ、二階だ。火事だつて言ふんで、慌てゝ目を明くとすつかり煙だもの、びつくりしちやつた。』

『粗相だんべか、つけ火だんべか。』

『それやわかんねえ……』かう言つたが、『兎に角すつかり燒いて了つて、すつてんてんで困つた。財布から何からすつかり燒いて了つた。持つて出たな、時計ばかりだ。』

『えらい眼に逢つたな。』

『本當だよ。』

『どうも、これもな、災難でな、しやうがねえや。』

自分を傍に置いて、こんな話でもしてゐると、――自分に關係のない話でもしてゐるやうに話をしてゐると、いくらか胸の重荷が輕くなるやうな氣がした。

かれは立ち盡した。大勢の人がいろいろなことを言つてかれの傍を通つて行つた。中には、『まだわかんねえか、粗相か放火か？』かう話しながら行くものもあつた。『罪跡は何も殘つてゐない。何も彼もやけた。あの石油の壺も、マツチも、軍服も……何も彼もやけて了つた。それだけは大丈夫だ。誰も知つてゐるものはない。』又疑はれるやうなこともない。』かうは思つたが、脫營兵のことは何う言ひ解いて好いかわからなかつた。しかし一方では平氣でゐようといふ心持がかなりに強く動搖するかれの心を靜めた。『成るやうにしかなりやしねえ。行當つてから考へる方が好いや――』

かう思つて又かれは步き出した。

通りでは、大勢の人々の中に雜つて、まだぶすぶすと燻つて燃えてゐる燒跡を眺めた。人達はいろいろなことを言つてゐる。『これだけの家が燒けるんだから、騷いだ筈だ。』などゝも言つてゐる。その話す言葉が一々自分の頭に反響して來る。ふと又お雪のことなどが考へられる。『構ふことはない。脫營兵がわかつたら、それだけの處分を受けるんだ。』『こんなことを心の中の何處かで言つてゐるのに氣が附く。ふと、ある話が耳についた。それは泊つてゐた人もゐたらうが、困つたらうなといふやうなことを話してゐるのであつた。

かれは突然言つた。

『俺は泊つてたんだ。』

近所の子守が子供を負つて、頭髮を手拭で卷いて、そこらをぶらぶら歩いてゐたりした。其處に、何處から來たともなく、要太郎の姿がひよつくり現はれた。かれは旅館の浴衣を着てゐた。そしてその浴衣は處々泥を帶びてゐた。

かれは蒼白い昻奮したやうな顏をして、細い露地から出て來て、通りの方へと靜かに步いて行つた。かれも亦跡を見ずにはゐられない一人であつた。跡を、恐ろしい騷ぎの跡を、自分の犯した罪惡の跡を………。

かれは夢に夢を見てゐるやうな氣がした。あの三階の石油の壺、あの凄じい火焰、あの恐ろしい騷動、それからつゞいてこの燒け落ちた跡、晴れた美しい朝日、それをやつたのが自分で、そしてかうして自分が此處にゐるとは何うしても思はれなかつた。恐怖と不安と不定、それも昨日とは違つて、今は恐ろしい確實な否定すべからざる物が自分の前に橫はつてゐるのを感じた。かれは不思議な氣がした。一方では自己の罪惡を感じてゐながら、よく自分に——平生は氣の小さい臆病な自分にかうしたことが出來たと思つた。つゞいて成功しなかつたといふことが、徒らにこの火災を起したといふことが、馬鹿々々しい眞似をしたといふことがかれの胸の底から起つて來た。矢張、今もかれは無一物である。何うにもならない。……と思ふと、警察で當然他の旅客と一緖にしらべられなければならない不安が夥しく胸を塞いだ。その方はいかやうにも言譯はすることが出來るが……脫營兵の方は、そつちの方は？

二十六

朝が來た。

靜かな晴れた朝だ。昨夜の騷ぎは、あの凄じい火災は、あれは夢であつたかと思はれるばかりであつた。雨上りのやうにグチャ〳〵した通りには、人はまだ大勢通つてゐたけれども、一珍事、一現象に向けられた興味が、旣に大半は人々の頭から離れて去つたかのやうに、または町の事件がいつか一家の事件に移つて行つたものゝやうに、別に狼狽したり驚いたりするやうな樣子もなく、靜かに、落附いて、唯單に一現象の跡を見るといふやうにして步いてゐた。燒跡には燒け落ちた柱やら長押やら梁やらが縱橫に散亂して、黑くなつて、まだぶすぶすと燻つてゐた。大きな大黑柱は、半分ほど殘つて立つてゐた。

薄白い乃至は灰色をした烟がうつすりと朝の明るい光線を受けて、一ところは焦茶のやうな色をあたりに漲らせた。そしてそれを透して、昨夜騷いだ人達が尻端折をしたり鉢卷をしたりして運び出した家具の周圍を步いてゐるのが見えた。庭であつたあたりには、梧桐の葉が燒けたゞれ、形の好い松が半ば燒け、裏の野菜畑の野菜が夥しく無殘に蹂躪られてゐるのも見えた。野菜畑の向うの二階屋は半分燒けて下がすけて見え、此方の平屋は人が上つたり何かしたので、瓦が一面に無殘に碎けてゐた。何も彼も夜の騷ぎの跡を示してゐないものはなかつた。

水が其處此處に流れて、雨上りか何ぞのやうに路がぐちやぐちやした。『でも、下火になつた。やつぱりポンプは豪いな。あれが來てから、ぐつと火が弱くなつた。これぢや、まア、二三軒ですみさうだ。』こんな話をしてゐるものもあつた。『俺ア、又、何うすべと思つた。火事だ！ ッ言ふんで起きて見ると、相馬屋の三階から火がぽんぽんふき出してゐるぢやねえかね。うつたまげたにも何にも……』

『何うしてまア、三階なんかから出たかな。』

『女中か何かの粗相だべな。』

かういふ會話が其處此處で取交される時分は、火はもうすつかり下火になつて、三階、二階、それから下へとすつかり燒け落ちて、その裏につゞく二三軒の家の半ば燒けて烟と餘焰との中に立つてゐるのが見えた。大黑柱は眞赤になつて、まだ倒れずに半ばそこに立つて燃えてゐた。巡査が劍を鳴らして彼方へ行つたり此方へ來たりした。一臺のポンプ管からは、未だに水が餘焰に向つて勢ひよく迸出してゐた。

『傍に寄るんぢやない！ そばに寄るんぢやない！』

かう言つて、巡査は近づいて來る人々を制した。

もう午前四時を時計は過ぎてゐた。鎭火の半鐘がところどころで鳴つた頃には、明けの明星が既にきらきらと黎明近い東の空に輝いてゐた。

稲荷の境内にも、種々な人々が集つてその火事を見てゐた。火の反射の光で、廣場も、樓門も、社殿も、社務所も一面に晝のやうに明るかつた。祭禮の夜でもあるかのやうに、人がぞろ〳〵と通つた。社殿の前のところには、宮司や禰宜やその家族などが見てゐた。『相馬屋は古い家だがな、何うして火事なんか出したかな。粗相かな。あそこは評判が好い家だから、他人から恨みを買ふやうなことはない筈だが……。それに、百年以來ある家だ。惜しいことをした。』かう年を取つた禰宜は言つた。

晝間要太郎に酒を飲ませた油揚を賣る婆さんも其前に出て見てゐた。その皺くちやな顏が赤く火に照されてゐた。『昨夜とりに行けや好かつた。あの兵隊も燒け出されて困つてゐるべ。』などゝ思ひながら、じつと立つてその二階の燒け落ちるのを見てゐた。そこにもう一人の方の婆さんがやつて來た。

『何年ッて、火事ァなかつたに……』

『ほんだ……』

『えらい騷ぎだ。』

『相馬屋の婆さまも困んべ。』

などゝ噂した。

門前では何處の家でも、前に高張の提灯がかゝげられてない家はなかつた。見舞の人々は、家から家へと歩いて行つた。肩と肩とがすれるやうに人々が群集した。通りには、ポンプのヅック管から洩れた

の夜の火事がはつきりと指さゝれてゐたかも知れなかつた。町に近いところに住んでゐる人達は、『稻荷さんぢやねえかな。見ろよ、あの黑く見えてゐるのが、お稻荷さんの森だんべ。……お稻荷さんでねえにしても、あの門前にちがひねえな。……あそこは、小料理屋があつて、だるまなんかゐるとこだで、粗相でもしたんだんべ。』かう言つて、明るい火を仰いで噂した。

丁度其時、通つて行つた夜行の汽車の窓からは、さも〳〵めづらしい見物だと言はぬばかりに、睡眠に落ちてゐるものも、眠りからさめて、皆な右の窓から顏を出して、すぐ近くにある黑い杉森を隔てた火事を眺めた。火は盛に燃え上つた。火焰のをり〳〵渦卷き上るのもはつきりと見えた。『近いな、すぐそこだ。』かう言ふものもあれば、『かなり大きな家だと見える。中々よく燃える。』など〻言ふものもあつた。停車場には、驛員が灯の下で依然として平氣で事務を執つてゐたけれど、それでもあたりは何となく騷々しかつた。停車場の前を大勢の人が駈けて行つたりした。乘客の一人が車掌を捉へてそれを訊くと、『稻荷の前の旅籠屋ださうです。』と敎へた。夜行の汽車はやがて出て行つた。汽車の進むにつれて、その火は次第に遠く〳〵なつて行つた。『火事はやけ太りッて言ふが、さうばかりでもねえだ。』火事のために散々になつたものもあるだでな。』などと同情したらしい口吻で或る乘客は言つたりした。それも次ぎの驛に來た時分には、天末がぽつと赤くなつてゐる位で、誰の頭からも旣にその火事の印象は薄らぎつゝあつた。乘客達は時計を見たりして、再び眠る支度をした。

一臺は女郎屋の井戸に、一臺は門前の料理屋の井戸にそれを仕かけて、ヅックの太い丸い管から水が高く高く迸出して行つてゐたが、その二本の管の水位では、燃えさかる火は何うすることも出來ないやうに見えた。隣り近所、わけても風下にある家の屋根には、消防に上つてゐる人々の姿が黑く浮き出すやうに見えて、近いところには、火の子の散亂し、黑烟の渦卷く中に、消防の纒の不動の態度を示して立つてゐるのがそれとはつきり指さゝれた。

『もう、一臺、東にかけろ! まご〳〵すると、隣へ移るぞ!』

かういふ命令の下に、今しも其處に到着したポンプの一臺は、向側に行つて、細い巷路の中に井戸を發見して、瞬く間にそれを仕かけたが、そのヅックの水管からは、やがて水が迸るやうに風下の火焰の方へと向つて注がれて行くのが見られた。

『旨い、旨い。』

かう消防の指揮官は言つた。

遮るものなき平野の町の深夜の火事は、二三里の周圍の人達の夢を驚かしたに相違なかつた。或は山裾のさびしい村、或は海岸に近い靜かな田舍、或は街道に添つた二三軒の家屋、昨日かれの通つて來た桶屋のある町あたりでも、皆な寢惚け眼をこすりながら雨戸を明けて見て、乃至は街道へ出て見て、『T町は火事だ、』などゝ言つてゐたに相違なかつた。或はこの西の山奥の半腹にある大きな溫泉宿からもこ

て來た。奥からも、簞笥や長持や鏡臺や葛籠や、さういふものが頻りに運び出される。婆さんと子供達と女達は、危ないと言つて、既に餘程前に表と裏の方へ避難させられたが、主人と上さんとは、それでも家具の搬出の指圖をしなければならないので、奥と店との間を往來して、頻りに手傳ひに來た人達に聲を懸けた。かと思ふと、不意に肝心なものを思ひ出したやうに、『あの簞笥！　あの簞笥も出さなければ！』かう言つて上さんは奥に駈けて行つた。

要太郎はうろ〳〵と彼方へ行つたり此方へ行つたりした。二三度金箱、用簞笥のある處へ行つて見たが、其處には番頭が一人嚴重に番をしてゐて、容易にその鍵を破つたり何かする隙もなかつた。一度はそッと後へも廻つて見たが、それでも何うすることも出來なかつた。で、引返して、今度は奥から運び出して來る道具類に眼を附けながら、手傳の人々の群に交つて、自分もその一人であるかのやうに見せかけつゝ、奥の方へと入つて行つた。晝間、好加減に研究はして置いたものゝ、かう混雜した狀態の中に入つては、流石のかれも何うすることも出來なかつた。生なかなものに目を晃れて、自分の犯した罪惡を疑はれはしないかといふ懸念もかれの敏活な行動の邪魔をした。

此時には、火は既に三階から二階へと凄じく燃え移つて、折り廻した雨戸が烟と火とに包まれてメリメリ燒け落ちて行くのが大通りから手に取るやうに見えた。二階の欄干のところにある大きな梧桐の葉の燒け凋れたのも火を透してそれと指さゝれた。町のポンプは、此時既に、二臺、三臺までやつて來て、

『ヤ、來て呉れたか。賴むぞ、一番先に、此處だ。』

かう言つて、主人は帳場の傍の三尺の押入の方を指した。『よし、よし。』弟と番頭とは、それを明けにかゝつたが、此時、傍に立つて見てゐた要太郎は、『何れ、俺も手傳つてやらう。』かう言つて急いでその傍へと近寄つて行つた。

その押入の中には、小さな用箪笥やら、錠のかゝつた大きな金箱やら、必要なものゝ入れられた大きな箱などが入つてゐた。弟は一番先に用箪笥を出して、つぎに金箱を出したが、『兄貴、お前さんは何にも出さんでも好いから、肝心なものを置いたところに、ちやんとついてゐなくちやいかん……』

『よし、よし。』

主人はかう言つて、金箱と用箪笥とを運び出す番頭達のあとについて行つた。要太郎は其方の方にちよつとついて行つたが、すぐ引返して、さも賴りになる手傳人のやうに、『出すものがあるなら、言へ、出してやるから、』と叫んだ。

主人の弟の眼には、見知らない蒼白い眼の鋭い顏が映つたけれど、さうした深切な手傳人を疑つて見るやうな餘裕もなかつたらしく、そこに葛籠や行李を出すと、その男はそのまゝそれを表の方へ運んで行つた。

さうかうしてゐる中に、町の彼方此方から、不時の災難に援助に向つた人達が、大勢店の中へと入つ

大童になつて下りて來た主人は、『駄目だ、もう駄目だ。出せるだけ荷物を出せ！』かう大きな聲で呶鳴つた。

町は既に騷ぎ出してゐた。俄かに半鐘の音に深い眠をさまされた近所の大勢の人達は、『群を成して通りに集つて來てゐた。今しも、三階の屋根に拔け出した凄じい紅い焰は、怪物が舌を出したかのやうに高く高く燃え上つて見られた。黃い赤い褐色の烟が燃える火を包んで、稻荷の社の門前町を晝のやうに明るくした。

風がいくらかあるので、火と火焰と烟とは、裏の方へ方へと靡いて行く。大きい小さい火の子は、無數の螢火を散らしたやうに盛に空に舞ひ上る。町にある半鐘といふ半鐘は、すべて凄じく鳴りわたる。近所の家々の慌てふためく氣勢、水を連呼する聲、群集のわいわい騷ぐ聲、さういふものがあたりに凄じく張り渡つて聞えた。

『おい、退け、退け！』かう言つて提灯を振り翳して、群集の中をわけて相馬屋の店先に入つて行つたのは、こゝの分家で、停車場に店を出してゐる主人の弟とその二三の番頭とであつた。入つて行つた弟の眼は、此處の主人と番頭とが慌てふためいてまごまごしてゐる傍に、浴衣を着た客らしい男が立つてじろじろとあたりを見廻してゐるのが映つた。弟は呶鳴つた。『兄貴、早く肝心なものを出さんといかんぜ。』

か言ふのも雑つてきこえた。

急に三階から向うの階段を慌てゝ客の下りて行く氣勢がした。

もう長押から、天井、屋根へと火は燃えて行つたらしかつた。晝のやうに明るくなつた光線と共に、かれは次第に火の焔の咽るやうに室内に入つて來るのを覺えた。かれは急いで起上つた。そして、始めてそれと知つて慌てたもののやうに、わざとけたゝましく音を立てゝ二階の折れ曲つた階段を下へと下りて行つた。

『もう、駄目だ！』

大童になつて向うから馳けて來た番頭が言つた。

『駄目か？　もう……』

八

狼狽した主人は、寢卷のだらしない風をしてすれ違つて行つた。

半鐘が深夜の眠を驚かして、けたゝましく鳴り始めた。

誰も彼も皆んな起きて、ぶる〳〵身をふるはして慌て廻つてゐるのをかれは見た。女中も番頭も下男も、何も手がつかないで、うろ〳〵してゐる。氣丈な婆さんは、きよと〳〵としてあたりを見廻してゐる。『提灯、提灯！　何より先に提灯！』かう言はれて、女中の一人は長押から高張提灯を下したには下したが、手足も齒の根もガタ〳〵と震へて、一つの蠟燭を點火するにすら容易でなかつた。急いで、

は一面に明るくなつてゐる。火は障子に燃えついたらしい。

再び自分の室に入つたかれは、そのまゝ床の中に入つて、夜着を頭から冠つた。じつとしてゐた。胸がドキドキした。實行したその時よりも却つて今の方が精神が戰慄するやうなさまを感じた。じつとしてゐられないのを强ひてじつとしてゐなければならない苦痛をかれは渾身に覺えた。

三階では盛に火が燃えてゐるらしい。三階の階段からかけて此方の方の障子も明るく照されて見えてゐる。しかしまだ誰も騷ぐものがない。皆んな知らずに眠つてゐるらしい。三階に一人ゐる客も知らぬらしい。『もう大丈夫だ。あのランプの壺も燒けて了ふ。あとに罪跡の何者をも殘さない。大丈夫だ、もう大丈夫だ。』かう思つたかれは、人が騷ぎ出したら、適宜に下に下りて行つて、その計畫を成功させなければならないと續いて思つた。

『火事だ、火事だ！』

といふ聲が戶外からきこえた。

つゞいて戶を明ける音がする。『火事だ、火事だ！』といふ聲がする。近所が俄かに騷がしくなる。戶を明けたり閉めたりする氣勢がする。內よりも却つて戶外の方に急にガヤガヤと騷ぐ音がした。しかしこれも暫くの間だ。今は內でも起きたらしく、『大變だ、大變だ、三階だ？』と言ふ聲がする。ばたばたと大勢の駈けて上つて來る音がする。聲を限りに叫ぶ聲、つゞいて水を呼ぶ聲、中には女の金切聲で何

ソッと身を外へ出した。

音のしないやうに、あたりが軋まないやうに、拔足して、一歩々々三階へ登る階段の下のところへと行つた。そこは何處からも灯が來てゐないので、眞暗であつた。かれは却つてそれを心安く思つた。かれは手さぐりで、階段を上つて、上りきると其まゝ右の室に入つた。

南の隅の一間に客が一人ゐる筈である。それに知れてはと思つて、かれは屹立耳をして暫しじつとしてゐた。しかしあたりはしんとしてゐる。些の物音もない。それに此室は、壁の陰になつてゐるので、南の一間から來る灯の光も見えない。かれは猶ほ闇の中に立盡した。自分の今犯さうとしてゐる罪惡を反省する心と、躊躇逡巡する態度を罵る心とが兩方から強く押寄せて渦を卷いた。かれは自己の體も精神も顚倒して了ふやうな氣がした。しかしそれも瞬間であつた。かれは思ひ切つて、手に持つたランプの壺の石油を半ば疊の上に明けて、そつとマッチをすつた。光線が蒼白い昂奮したかれの顏を照した。

二本目にすつたマッチの火は忽ちこぼした石油へと移つて、見る〳〵蛇の這ふやうに一面に燃えひろがつた。闇は急に明るくなる。障子の棧の目や、半間の床の間や、ちがひ棚や、さういふものが浮出すやうにはつきりと見える。かれは急に不安になり出した。かれはいきなり石油の半分殘つたランプの壺を火の上にひつくりかへすとそのまゝ、急いでもと來た階段を下へと下りた。

自分の室に入りかけて、また思ひ返して、かれはもう一度階段のところに行つて上を仰いで見た。上

階には三組ほどゐるが、それとて邪魔にはならなかつた。首尾よく行けば、三階に一人ゐるあの客に罪をなすつて了ふことが出來るかも知れなかつた。それにかれの選んだ場所の隣りには、寢道具やら煙草盆やら火鉢やらが置いてあつた。さういふ所から起つたやうに人に思はせることも出來た。

かれは蒲團の上に身を起して、その前に置いてある時計の針を眺めた。もう廿分過ぎた。あと十分經つたら、疲れてゐるので女も大抵寢て了ふであらう。ふとかれは薄暗くついたランプの石油の壺のところに眼をやつた。石油は十分にある。大丈夫だと思つた。

又五分經つた。

かれは又耳を聳てゝ見た。キウ〳〵といふ音はまだしてゐるけれども、他には何の音響もなかつた。事に臨んで案外冷靜であるかれの性質の冷靜が、力強くかれの全身に漲つて來た。かれは一種の力強さを感じた。戰爭で斥候の任務を帶びて、深夜敵の中に入つて行つた時のことなどが思ひ出された。『決行』かう思つてかれは立上つた。

先づマッチを懷に入れて、それからランプをフッと吹き消した。と、あたりは闇になつたが、眼を定めて見ると、二間三間隔てた客のゐる間についたランプの光が微かにそこに來てゐるので、さう眞暗な闇といふほどではなかつた。かれは消したランプの笠を外し、半分位殘つてゐる石油の入つた壺だけを持つて、そしてすつくと立上つて、三階の階段の方へ出て行く隅の障子をそツと細目に明けた。

二十六

女の下りて行く氣勢がした。

その足音は折れ曲つた階梯を下りて、靜かに靜かに向うへと行つた。もう聞えなくなつたと思ふ頃でも、まだそれがはつきりきこえてゐるやうな氣がして、かれは床の中に半ば身を起して、耳を聳てた。

女が女中室にこつそり寢に入つて行くさまがありくと見えた。深夜の寂寞は既に一面にあたりを領して、少し吹き始めたらしい風の外は何の音もきこえなかつた。かれは續けて耳を聳てた。

キウキウといふ音がした。久しい間、かれはそれが何だかわからなかつた。樹の庇に觸れるやうな音でもあり、また誰か寢息を立てゝゐるやうな音でもあつた。かれは暫しそれに耳を傾けた。しかし、それは自分のある事を決行するに就いての何等の障礙でないといふことを判斷して、かれはつとめて心を平靜にしやうとした。かれは枕元の時計を見た。

二時半を少し過ぎてゐた。

兎に角皆な寢靜まつて了ふまで待たなければならないと思つた。今歸つて行つた女の寢靜まるのも……

……。

しかし都合は好いと思つた。今夜は三階には、客が一人向うの遠い方の室にゐるばかりであつた。二

『大丈夫だよ。』

其處に人の來る氣勢がしたので、慌ただしくかれ等は別れた。

かれは室の中にゐることを恐れた。何故かと言へば、それは其處に昔の生活と昔の記憶とがいつも蘇つてかれを威嚇するからであつた。脫いで長押にかけたまゝになつてゐる軍帽と軍服と、劍、それが一番先にかれの眼に着いた。かれの踏込んで來た最初の一步は其處にあつた。淺瀨からだん〳〵深い淵に入つて行くかれの罪惡は其處にあつた。今ではもう其處から脫け出すことが出來なくなつてゐたが——脫け出さうとしてもとても脫け出せなくなつてゐたが、それでもそれを見ると、一昨夜からのことが一つ一つ眼の前に浮んで來て、堪へ難く心を不愉快にした。不安と恐怖とがすぐかれを襲つて來た。

また日が暮れて行くのであつた。三日目の日が、人間の世の中にかういふ不安と罪惡とがあるのを少しも知らないやうな日が、穩かな靜かな日が、荷車の音と馬車の喇叭の音と美しい山々の深い碧とを背景にした田舍の日が。

かれはぢつとそれを眺めながら、廊下の角のところに立つてゐた。理由なしに、淚がこぼれて來た。自分を可愛がつて吳れた老いた祖母の皺くちやな顏が見えた。家出をした時の朝のやうに泣いて泣いて泣き崩折れたくなつた。

つた。でも、其處の一部の見える廊下と店との間のところへは、かれは度々其姿を見せた。
お雪とはまた廊下でちよつとこんな話をした。
『歸つたら、屹度手紙はちよいちよい下さいよ。』
『あゝ。』
『本當ですよ、でないと、心細くなつて了ひますから。』
『あゝ。』
かう言つて、『今日はいそがしいかえ？』
『さう忙しくもない……でもね、』お雪は急に聲を低くして『昨夜は變に思はれてね。』
『何うして？』
『はつきりとわかりやしなかつたけれどね、寢たと思つた女中が起きてゐて、知つてゝね。』
『何う？』
『お雪さん、來たのは今朝だッたね、なんて言はれつちやつた。』
『でも、本當には知れやしないんだらう？』
『それや、わかりやしないけどもね、』かう言つて『でも、今日も種々考へたのよ。……とても一緒にはなれないかと思つて、……一緒になつても好いんだかわるいんだかわからなくなつちやつた。』

時には、豫めその目的物を更に正確に見て置かなければならないと思つて、素知らぬ振りをして、一度ならず二度までもその店先に下りて行つた。古い帳場、算盤、大福帳、老婆の姿、その白髪の老婆が何故かかれの氣にかゝつた。帳場の隣にある金庫に似た箱、大きな錠のかゝつた箱、その上のところには大きな廣告の美人畫が下げてあつた。主人と番頭とは何か其處で頻りに物勘定をしてゐた。二度目に下りて行つた時には、丁度其處に客が二三人來て『入らつしやい、』と言つて、人達は其方に氣を取られてゐた。で、ぼんやり立つて見てゐると、其處にゐた一人の女中が『お出かけ。』かう言つてかれの傍に寄つて來た。『いや、ちよつと湯を持つて來て貰ひたいと思つて……』かう言つてかれはごまかした。

室やら、庭やら、裏の方やらをもつと見て置かなければならないと思つたかれは、二階三階の廊下をぐる〳〵歩いた。しかも成たけ人目に觸れることを恐れて、客がゐたり婢がゐたりするところは急いで何か用事でもあるやうにして通つた。庭から下駄を穿いて向うに行つた時には、木戸を明けて裏の畑の方まで行つた。廊下から裏へと出て行く扉のあることをもかれは見て置いた。野菜畑の向うには井戸があつて、そこで體の大きな下男が喞筒仕懸の奴でせつせと風呂に水を入れてゐるのを見た。もう火を焚きつけたと見えて、靑く白い烟が屋根の上の烟突から細々と颺つてゐた。その向うでは、家の男の兒らしい十二三の少年と七八歲の女の兒とが遊んでゐた。

奥の簞笥の置いてある方も見たいと思つたけれど、流石に人目が繁くて、其處まで入つては行けなか

此方から行く參詣者に、『油揚に玉子、お狐さまに上げる油揚……』と勸める婆さんの聲が後でした。

二十五

自分の運命――ゆくりなく陷つて行つた不思議な重苦しい辛い自分の運命を愈々切り開かなければならない時期が到達したことをかれは思つた。風呂に入つてゐる間にも、厠に行つてゐる間にも、廊下に立つて今日もまた靜かに穩かに暮れて行く夕日の山々を眺めた時にも、鳥渡の間を得てお雪と話してゐる間にも、その運命が絕えず體と心とに執念く絡み着いてゐて、それを決行して了はない中は、飯も碌に咽喉に通らず、話も落附いてしては居られず、すぐ其方に頭が引張られて行つて、自分で自分の體が自由にならないやうな氣がした。自分ながら何うしてかう突詰めたか、何うしてかうその恐ろしいある物に捉へられたか、何うしてその決行といふことに引張られて行つたか、自分でも自分がわからなかつた。をり／＼かれは立留つて、その決行當時の光景を頭に浮べるやうにした。それに、帳場の隣にある金の入つてゐる箱が、何處に行つても――店頭に入つて來た時は勿論、室にゐても、廊下にゐても、誰かと話してゐても、衝動的にすぐかれの眼から頭へと映つて行つた。人々の騷ぐ中に、それを取出してゐる自分が、手傳ふ振りをしてそれを表へ持ち出してゐる自分が、紙幣やら銀貨やらを取出してゐる自分が歷々と眼に見えた。

かれは首を傾けて、『おや、忘れて置いて來ちやつたかな。持つて來たと思つたがな。』かう言つて、『落ちるわけはないが――』

『何だな？』

『財布だがね……確かに持つて來たと思つたんだが。……さては忘れて來たと見えるな。さうだ、床の間に置いて來ちやつたかも知れねえ。』わざと笑つて、『大變だ、勘定が出來ねえ。』

『そこらへ落したんぢやねえけ？』

『落すわけがねえ。』念の爲めといふやうに、もう一度そのあたりを見廻して、『困つたな。』

『何ァに、宿がわかつてゐるで、好いやな。』

『さうだな、氣の毒だな。これァ、えらい恥かきだ。ぢや、すぐ屆けてよこすからな。たしかに持つて來たと思ふんだがな。』もう一遍さがして見て、『矢張、忘れて來たんだ。』ちよつと考へて、『それでいくらだな勘定は？』

『酒が二本に、鍚に燒豆腐……それに油揚、』婆さんは胸算用をして、『四十二錢になるべ。』

『それぢや、すぐ屆けるから、……それに、まだ今日は一日泊つてゐるで……。本當にえらい恥かきをした。』

かう言つて平氣でかれは其處を出て行つた。

二度目に持つて來た德利を空にする頃には、かれの體には、もうかなりにアルコオル性の持つた力が溢れて來てゐた。顏も、胸のところもわるく赤く、眼は鋭くあたりを見廻した。『さうだ。それより他に路はない。自分の出て行く路はない。さうだ。勇氣を鼓してそれを實行するに越したことはない。戰爭に行つて、斥候〻出たと思へば、こんなことは何でもない。盗むとか何とか言ふなら、ドヂを組むと發見される恐れがあるけれど、さうすれば知れつこはない。さうして金を得る……その金さへあれば、何んなにでもして逃げられる。ちやんとお雪に打合せをして置いて逃げられる。そして人の知らないところに行つて、名を變へて了ふ。分りつこはない。お雪だつて、何もこの近所にまごくしてゐなくつても好いんだ。……さうだ、それに限る。よし、屹度實行しよう。』かれはキツと一ところを見詰めるやうにした。

で、最後の一杯を、深く物を考へるやうにして飮み終つたが、急に、かれは懷だの三尺帶の間だのをさがし始めた。袖のない袂のところへも手をやつた。

『おや――』

婆さんは此方を見てゐた。

『おや――』立上つて、周圍を見廻したり何かした。

『何うしたな？』

『兵隊さん、今日來たんけ。』

婆さんは又話し懸けた。

『いゝや。』

『お暇でも貰つて來たんけ？　さうけえ？　つらいッてな、兵隊さんは！　俺が甥が今一人行つてるが、來る度に、雜巾掛が辛いつてこぼして行くだよ。あんじよさうしたことをするか、同じ人間だァにッて言ふこんだがな。これもな、規則だッて言へばしやうがねえがな。』

『何ァに辛いッて言ふこともねえけども……』わざと落附いた調子で要太郎は言つた。

『戰爭さ、行つたけ？』

『行つた。』

『えらかつたんべな。玉ァ來るッてな、頭の上さァへ……』

『それは來るとも……』

『おつかなかんべな。生きた空はあんめいな。』考へて、『俺が出た村で、騎兵でな、林淸太郎ッて言ふんが、戰死したがな、知らねえかよ。』

『知らねえ。』

『大勢ゐんべからな。』

コオル性の強い刺戟が體と心とに染みるやうな氣がした。
『相馬屋かな。宿は――?』
婆さんは又笑ひながら訊いた。かれは點頭きながらまた一杯ぐつと飮干した。動搖し、麻痺し、混亂した頭がいくらか恢復して、萎えた勇氣が次第に頭を擡げて來た。
『相馬屋はいゝ宿だな。』
『さうだな。』
『何うしても古いだで……昔からある宿だべ。俺が祖母さまの時代からあるだで、な、深切だな。』
かれは何の彼のと言ひかける婆さまは相手にせずに、一杯二杯と盃を重ねた。段々體がほてつて來た。熱い熾な血が脈から脈を流るゝやうな氣がした。折々參詣者が通る度に、婆さんは例の籠を持つて、『油揚と玉子』を連發して、その傍について行つた。隣の婆さんも負けぬ氣になつて參詣者に縋り附いて行つた。
『婆さん、もう一本呉れや。』
『お代りかや。』
かう言つて、婆さんは更に支度して置いた別の德利を茶釜に入れた。要太郎はどす赤い顏をして、鋭い眼附をあたりに放つて、そつとぬすむやうにして、皿の中の燒豆腐を挾んで口に入れた。

『お菜は何にすべかな。』

『何があるな。』

『鰯に、燒豆腐に、芋位なもんだ。』

『鰯と燒豆腐くれや。』

暫らくして、小さな盆に德利と盃と鰯を入れた皿とを載せて、箸を添へて持つて來た婆さんは、

『お前さん、兵隊さんかね？』

『何うして？』

『さうだべ？』

要太郎はぎよつとした。

『…………………』

『俺の眼で見れや間違ひこはないだからな、えらかんべや。』笑つて見せて、『だつて、すぐわからアな。頭んところ、黑く白く筋がついてゐらアな。胸がしやんと張つてゐらアな。兵隊さんツて言ふことは一目でわかるアな。』

『さうかな。』

かう言つてかれはいくらか安心したやうにして、手酌で酒を盃に注いで、そしてぐつと飮んだ。アル

かれは婆さまの言ふなりにして、その小さな店の中にある古い長い腰掛に腰をやすめた。

『好い天氣だな、もし……御參詣には何よりだな、もし。』

かう言つて丸い小さな火鉢を其處に持つて來た。

かれは昨日卷煙草の最後の一本を吸つてから、全く煙草を吸はなかつた。で、『煙草はあるかえ、』と言つたが、無いと言ふので、づか〳〵立つて行つて、『一服、おさき煙草だ。』かう平氣で言つて、婆さまの吸つてゐる煙管と煙草とを持つて來て、それを一服つめて旨さうに鼻から出して吸つた。つゞけてもう一服吸つた。

かれは四邊を晌してゐたが、其處に並んでゐる德利と、皿に盛つてある煮染とに眼を付けると、もう堪らなくなつたと言ふやうに、

『お婆さん、酒があるな!』

『一本つけやすか、へえ、かしこまりやした。』

婆さんが後向きになつて、大きな壺から片口にゴト〳〵音をさせて酒を出してゐるのが此方から聞えた。その音が要太郎には何とも言へぬ快さを與へた。やがて婆さんはそれを燗德利にうつしたらしく、傍に置いてある古風な茶釜の蓋を取ると、湯氣がぱつと白く薄暗い家の空氣の中に颺つた。燗德利を入れる氣勢がつゞいてした。

供へる參詣者の來るのを待つて、一々奥の神前に供へるべくそれを受取つた。要太郎も其處で籠を渡した。

それからかれは大きな社殿の方に歩いて來た。かれは別に神に祈念するでもなく、そこにかゝつてゐる大きな鈴を鳴らすでもなく、唯ぢつと喪心したものゝやうに四邊を眺めて立つてゐた。その間にも、參詣者が二三人來ては鈴を鳴らして行つた。

要太郎の姿は、其處に立つたまゝ、暫く動かなかつた。お詣りして歸つて行く參詣者も、其處を通つて行く神官の白衣姿も、庭に綺麗な箒の目を立てゝ掃除してゐる爺さんの姿も、何も彼も全くかれの眼には映らぬやうに見えた。始めはかれは立つてゐたが、暫くすると蹲踞んだ。そして又同じやうにぢつとしてゐた。

參詣者の鳴らす鈴の音が絶えず聞えた。

しかし三十分ほど經つた後には、かれの姿は、今度は門の中を通らずに、その傍の廣場に添つて、ぶらりぶらり歩いて戻つて來るのが見えた。旅舍の浴衣の袖と裾とが靜かに動いた。

華表を出ると、

『お歸り、お歸り、休まつしやれ、休まつしやれ！』

かう言つて、さつきの婆さまがそのまゝかれを其店に引張り込んだ。

『一籠十錢！　一籠十錢！　お賽錢を上げたと思はつしやれ！』

一文も金といふものを持つてゐないのにも拘らず、要太郎はその一人の婆さまの勸める油揚と玉子の入つてゐる籠を無理やりに持たせられた。

しかしかれはぼんやりしてゐた。一面には何うともなれ！と言ふやうな心持が首を擡げてゐた。で、かれは平氣で、押つけられた一つの籠を取つて、それを手に持つて、大きな華表の中へと入つて行つた。

『歸りに寄らつしやれ。』後からかういふ婆さんの聲がきこえた。

小さな籠を持つて一歩一歩社殿の前の門の方へと歩いて行く要太郎の姿は、午後の日影の明るい中にくつきりと見えてゐた。あたりにはさう澤山參詣者はなかつた。田舍の爺婆が一人二人歩いてゐるばかりであつた。廣い廣場には新綠が美しく靡いて光つた。

大きな門――それは古風な典雅な建築で、何でも七八百年をその儘經過したといふので有名であつた。要太郎の姿は、やがてその門のところに見えた。かれは籠を持つたまゝそこに立留つて、梁を見たり長押を見たり彫刻を見たりしてゐた。しかし、かれはそれを注意して、又は興味を持つて見てゐるといふのではなかつた。かれは唯ぼんやりとして立つてゐた。かれの眼は心は、外部よりもかれの內部に向つて銳く開かれてゐた。

籠を供へるところは、丁度社殿の裏の方になつてゐた。そこには十八九の少年が袴を穿いて、それを

て二人は參詣者の袂を取らぬばかりにした。

『一籠十錢！　一籠十錢！』

かう呼ぶ聲が遠くから聞えた。

さうかと言つて、この婆樣達は、油揚と玉子ばかりを賣つてゐるのではなかつた。店にはいろ〳〵な煮染だの、鯣だの、芋子だのが皿に盛つて並べて置いてあつて、一寸休んで一杯飮めるやうにもしてあるのであつた。そして祭禮の時は、この狹い小屋が田舍の百姓の爺や婆で一杯になつた。從つて稻荷の婆さんと言へば、土地でも誰知らぬものはなく、昔から金の儲かる好い株になつてゐて、婆さんが死ぬと、その位置は、町の婆さん達の大きな競爭の的になるのが常であつた。そしてこの慣習はかなりに古い昔からつゞいて來てゐた。狐に供へる油揚を賣るその婆さん達と言へば、その流行神の稻荷での一つのカラアにまでなつてゐた。

要太郎が通ると、婆さん達は油揚と玉子の入つた籠を競つて持つて出て來て、わからないひどい田舍訛の言葉を霰のやうにかれに浴せかけた。

『御利益があるでな、な、一つ買はしやれ！　上げなされ！』

『お狐樣が喜ばつしやるで、な、な、』

一人の婆さんは、執念くかれに絡り着いて勸めた。

行くのが見えた。『お入んなさい。お休みなさい。』といふ聲が喧しく兩側からきこえた。

初夏の晴れた好い日であつた。風といふほどの風もなかつた。午前と違つて、新綠の葉はその鮮やかさと美しさとをいくらか減じてゐたけれども、それでも空氣が澄んでゐるので、碧い空との對照が、美しく人の顏に照り榮えた。物がすべて明るく浮き出すやうに見えた。華表も、門も、社殿も、兩側に並んでゐる家も、參詣に出かけて行く人達も、何も彼も……。

華表を入らうとすると少し手前の右側に、茅葺の、ちよつと見ると小屋のやうな家が一軒並んでゐて、其處に同じやうな婆さんが二人、稻荷のお狐樣に供へるための鷄卵と油揚とを、頻りに參詣者に勸めてゐた。

『油揚と玉子は入りまへんかね。お狐樣に上げる油揚と玉子！』

かう言つては、人が通る度に、出て來て勸めた。

二人とも五十から六十位の婆さんで、純乎たる田舍者で、髮を後に丸く束ねて、汚れた着物を着て、繩のやうな帶を緊めて、しかも二人とも競爭者であるかのやうに、『お狐さまに上げる油揚と玉子！』を連呼した。

ちよつと他から聞いてはわかり兼ねるやうなひどい田舍訛で、『お狐さまな、な、油揚を上げると、えらッ喜ばつしやるでな。きつと御利益のうあるで、な、な、一杯、買つて上げつしやい。』と、かう言つ

『私ばかしでもないのよ。毎日順番があるから……』

かれは女中の雜巾がけをするのを見ながら、暫く其處に立つてゐた。ふと氣が附くと、其處からは、裏の畑――風呂場の背後になつてゐるらしい野菜畑が見えて、そこに此家の老祖母が三歳位になる子を背負つて、彼方此方と歩いてゐた。物干には赤い白い着物や足袋がかけて干してあつた。

やがてトントンと靜かに音をさせて、かれは階梯を下りて行つた。

かれに取つては、尠くとも、此家にお雪がゐるといふことが力でもあり生命でもあり、又氣懸りでもあつた。で、午前はたうとうかれは一歩も外へ出ず、不安と懊惱と神經の動搖とある事を實行するについての妄想と、さういふものゝ中に、徒らに時間を過したが、しかし其間にも、時々はお雪の姿の髣髴を得たいと思つた。かれは厠に行くにつけても、そこらぶら〳〵するにつけても、其處にお雪の姿が見えやしないかと思つて目で捜した。ある時はお雪が他の女中と何か話してゐるところを發見して、その傍を通つて行つた。目と目とで話をした。ある時は風呂場の傍でお雪がせつせと働いてゐるのを見た。

晝飯の時には、氣をきかせて、お雪が膳を運んで來た。

二十四

午後三時頃、旅舍の浴衣を着た要太郎の姿が、稻荷社の門前町から、大きな華表の方へ靜かに歩いて

かう言つて、女中は水の八分目滿たされたバケツを其處に置いた。それは知らない十八九の女中で、銀杏返に結つて、尻端折をして、下から赤い腰巻を見せてゐた。袖を後で結んで、白い兩腕を惜しげもなく出してゐた。

『三階は眺望が好いね。』

こんなことをかれは言つた。

『でもね、高くつて、掃除は厄介ですよ。水を持つて上がるのが大變でね。』

『それはさうだね。手傳つてやらうかね。』

『手傳つて下さいよ。深切があるなら……』

かう言つて女中は笑つた。かれも笑つて見せた。

『本當に大變だな。』ちよつと途絶えて、『しかし面白いこともあるだらうね。』

『何が面白いことなんかあるもんですか。夜は遲く寢るし、朝は早く起されるし、それに一日働いてさ……。夜になると、足が棒のやうになつて了ひますよ。』

かう言ひながらも、じつとしてはゐずに、女中はバケツの水の中から、雑巾を出して、尻を高くして、元氣よく、此方から向うへと廊下を拭いて行つた。

『三階の番は君かね。』

二人は廊下の角のところでかうして立話をしてゐたが、やがて『お雪さん！』と呼ぶ聲が下でしたので、女はそのまゝ下へ下りて行つて了つた。

其後も猶ほやゝ暫く要太郎は其處にぼんやりして立つてゐたが、ふとあることを思ひついたと言ふやうにその向うにある階梯のところに目を附けて、凝つと長い間それを見詰めてゐたが、そのまゝ步を移して、ある見えざる力に引張られるやうにして、一步一步階段を三階の方へと登つて行つた。

三階と言つても、さう大して廣いものではなかつた。廊下が矢張ぐるりと三方を廻つてゐて、六疊、八疊の間が一つ一つ並んでつくられてあつた。客は皆な立つて了つて、どの室も皆ながらあきになつてゐた。床の間に懸物がかけてあつたり置物が置いてあつたりした。ある室には、午前の日影が美しくさし込んで來てゐた。廊下の角からは前に聳えた山々に雲の白く䬃つてゐるのが指さゝれた。

一間一間、見て行つた向うの角のところに、かれはふと隅にかくれるやうになつて四疊半の一間のあるのを見た。そしてその一間の此方の廊下の前には、三階で使ふ夜着や蒲團や枕や煙草盆や火鉢がごたごたと置いてあるのを見た。折れ曲つた階段は、さつきかれの上つて來たのとは丸で別に、それを下りて行くと、丁度かれの泊つてゐる一間の傍に出て行くやうになつてゐた。

ふと、下からバケツを持つた女中が上つて來た。

『あゝ重い！』

それを隱すやうにして、『稲荷さまの祭禮の時は賑やかだらうね？』
『正月はそれは賑やかですよ。』
通りの方を向いて、『そこら、一杯に店が立つから……』
『馬市は何方でやるんだえ？』
『馬？　馬市は、』お雪は指して『そら、華表の向うに、廣いところがあるでせう。あそこが一杯に馬市になるんですよ。それはその時は賑やかですよ。赤いんだの黄いんだの白いんだのいろ〳〵な旗が立つてね……そして、私達が聞いちやわからないけれど、博勞衆達がわい〳〵つて符牒を言つてね。……それに、お詣りが大變ですから……』
『忙しいだらうね、其時分は？』
『それは忙しいにも何にも、何んな室でもお客が三人や四人はぎつしり詰るんですから、それは目が廻るやうですよ。』
『ふだんの緣日は？』
『五日に十日。』
『その時も客がゐるだらう？』
『少しは出ますけども……それはそんな忙しいほどでもない。』

『でも……貴方の父さんや母さんが何とか言ふかも知れないけども……』

『大丈夫だよ。……ぐづぐづ言へば、脇に出て了ふから。俺は家にゐなくつたつて好い人間なんだから。』

『さうですね……』嬉しさうにして、『本當ですね。今度こそうそを言ふと、一生恨んで恨んで恨みぬくから……』

『大丈夫だよ。』

『その積りでね、それぢやね、來年まで私も辛抱するから……』

かう言つたが、『何處かへ行つて來るんぢやないの?』

『うん、行つて來なくつちやならないんだけども……』

『そして、今日歸るの?』

『今日は何うだか……もう一晩泊るやうになるかも知れない。』かう言つたかれは、いつそ女にだけ話して了はうかと思つた。自分の重荷を、運命を……。しかし昨夜もさう思つて打明けることが出來なかつたと同じやうに、かれはそれを深く自分の胸の中に藏めた。尠くともそれを話して了つては、自分の實行しなければならないある事の邪魔になるとかれは思つた。かれは一種の勇氣に似た戰慄を總身に覺えた。

二十三

一片附かたづいた時分、お雪は其處にその姿を見せた。
『もう手が明いた？』
『まだ、用があるにはあるんだけども……もうさつき起きたの？』
『もう、すこしさつき飯を食つたばかりだよ。昨夜は寢られなかつたもんだから……』
『さう……』
お雪は莞爾と嬉しさうにしてゐた。
『誰かに知れやしなかつたかえ？』
『大丈夫ですよ。』
かう言つたが、『昨夜、考へたのよ……。昨夜言つたことは本當？』
かれは點頭いて見せると、
『屹度本當ですね。……それなら私もよく考へて置くから……そしてね、貴方が除隊になる時分、其方に行けるやうにして置くからね。』
『うむ……』

錠の下りた大きな箱が眼に映つて見えた。

滯在客を除いた他の泊り客は、もう大抵支度をして勘定をして立つて行つたらしかつた。『御機嫌よう。』『お大事に。』などといふ聲が店の方から聞えた。

ちよつと出て來ると言つて置いたので、何處かに行つて來なければと思つたが、さていざとなると外出する氣にはなれなかつた。大勢人の歩いてゐる町中を、巡査なども歩いてゐる通りを、足迹を搜されてゐる場所を、うかうかと歩いては行けないやうな氣がした。それに金も持つてゐなかつた。かれは半ば喪心したやうにして、草履を突掛けて、長い前の廊下を、通りに面した方の角の所まで歩いて行つた。

その角のところからは、車やら荷馬車やら旅客やらの混雜した通りを隔てて、角の大きな女郎屋から奥深く稻荷の社に入つて行く廣い路が見えてゐた。初夏の朝日が朗かに照つて、大きい華表の向うに門、その向うに古風な社殿、その背後を塗つたこんもりとした杉の森の中には、暗い綠の葉の中に新しい綠葉がくつきりと際立つて鮮かに靡いてゐるのが見えた。華表の前には二三本幟がばたばたと朝の風に動いてゐた。

此方の門前の小料理屋の前では、赤い襷をかけた女が二人立つて何か頻りに話してゐた。かれはぼんやりしてそれを見るともなく見詰めてゐた。

つたが、よして、此方へ寢反りを打つて、『まァ、まァ、決心をするにしても明日になつてからだ。今夜は先づ寢よう、靜かに寢よう。』かう思つて、かれは眠るべく骨折つた。

矢張、長い間眠られなかつた。妄想は拂つても拂つてもあとからあとへとやつて來た。殆ど際限がなかつた。

しかしいつの間にか眠つたと見える。ふと眼を明くと、雨戸の隙間はもう明るくなつて、女は靜かに障子を明けてそして廊下へ出ようとしてゐた。

一言二言話をして女が階段を下りて行つたあとで、かれは再び深い深い熟睡の境に落ちた。

二十二

女中が入つて來たので、目を覺ましたのは、それから二三時間經つてからのことであつた。いつの間にか、雨戸はすつかり明放されて、朝日が麗かに室から室へとさし込んでゐる。雀がちうちうと喜ばしさうに軒に囀つてゐた。

今日も好い天氣だ。

がばとはね起きて、『もう、遲いのかえ？』

女中は持つて來た火を火鉢に入れながら、『さうだね。そんなに早くもないよ。さつき一度來たんだけ

でなければ寒中氷を割つて水風呂に入れられる。曾て聞いた銃殺の光景が眼に浮ぶ。……ウテ！ バラ、バラ、バラ、バラ。標的にされた奴は忽ち倒れる。かれは其處まで考へて行つて思はずぶる〳〵と戰慄した。

女はよく寢てゐる。すや〳〵と靜かに呼吸をついてゐる。いつそ殺して一緒に死なうかと言ふやうな荒誕な殘酷な心が起つて來る。そしてそれと共に昨夜の心も魂も奪はれた大きな歡樂の光景が病的に誇張されて考へられて來る。扱帶を取る。そしてそれを女の首の周圍にそつと廻す。そしてぐつと緊める。力限りに緊める。聲も立てずに死んで行つて了ふに相違ない。さて死んだのを見すまして、今度は自分で死ぬ支度をする。ふと考へた。自分はその時になつて死ねるだらうか。死ぬつもりでゐても、その時になつたら、生きてるつもりになりやしないか。そしてこつそりと雨戶を明けて、屋根を傳はつて遁げる方法を講じはしないか。と思ふと、自分が今現にそれを實行してゐるやうな氣がする。押しつめられて、行くところがなくなつて、さういふことをしてゐる自分が見える。夜は明けたばかりで、あたりは茫としてゐる。人はまだ誰も起きてゐない。自分は屋根をそつと傳はつて、庭の樹の枝に縋つて、反動を附けて塀に取り附く。まご〳〵すると、ずぶりと足の裏を刺しさうな大き釘がそこに並んでゐる……それをも無事に下りる……一散に街道を遁け出す……。

女はよく寢てゐる。夜着の襟に押されて、靜かにつく呼吸が苦しさうにきこえる。餘程起さうかと思

のない谷底に陷つて行くやうな氣がした。と、一方では、祕密、罪惡に對するかれの興味がかなりに强い力でかれの魂に蘇つて來た。暗い闇の中に自分が見える。安芝居などで見た惡人の心理が自分の心理になる。怖ろしい罪惡を平氣で自分がやつてゐる。罪惡そのものよりも、それを實行する勇氣が潑溂として眼の前に浮んで見える。他人の出來ないことを自分がしてゐるといふことに深い戰慄を感ずる。暗くなつたり、明るくなつたりする。闇の中に無限の罪惡が見える……と思ふと、金銀の輪がちつと見詰めた闇の中に燦爛として見える。つゞいて、閃々とした火が見える。戰爭の巷である。自分が今其處にゐる。黄色い灰色の砲烟が其處にも此處にも颺る。砲聲が耳を劈くばかりに、ひゞいて來る。自分は今その中を通つて、疎らな林の中をぬけて、味方の陣地の方へと歸つて來てゐる。あの時の心持を思ふと、いぢけた意氣地のないやうな氣分は爪の垢ほどもない。何も彼も張詰めてゐる。この世の中の罪惡を犯す心などはそれに比べると何でもない。何故ならば、それは死を賭してゐるからである。かう思ふと、戰爭で養はれた何うともなれといふ氣分が、盛に頭を擡げ出して來る。其處は丸で別の世界だ。喧嘩がしたければする。掠奪がしたければいくらでも出來る。支那の女が小さな足で、ちよこちよこ逃げて行く。それを追ひかけてつかまへる……。

ぐづぐしてゐるから人間は駄目なのだ。死を賭しさへすれば、何んなことでも出來る。出來ないと言ふものはない。と、今度はそれに對する嚴しい制裁が目覺めて來る。自分は倒さにつるし上げられる。

持などを持つてゐて呉れるものは一人もない。

遁げる……このまゝ遁げる……お雪をつれて遁げる。何處の海の果か、山の中か、さういふところにお雪を伴れて遁げのびる。さうすれば、お雪と一緒になることが出來る……地方へ歸つたのでは――除隊されて國に歸つたのでは、到底お雪と一緒になることは出來ない。とても出來ない。親達や親類の反對だけでも出來ないのはきまりきつてゐる。……それに、お雪がこんなにまでこの俺を思つてゐて呉れたとは思はなかつた。熱いまことの心が――さがしてさがし廻した心が、かうして此處にあらうとは夢にも思はなかつた。……遁げるより外に路はない。お雪をつれて遁げる。初めは自分は一人で遁げて、そして、あとからお雪がやつて來るやうにする……。それには是非實行しなければならない。一文も持つてゐない自分は、先づ金をつくることを考へなければならない。……金、……金、……金、かう思ふと、晝間銀行で金を持つて行つたらしい銀行員の自轉車姿がふと浮んで見えた。

と思ふと、一方では、お雪の戀を再び得たことが何とも言はれずうれしいやうな力強いやうな神祕のやうな氣がする。自分の運命の中に突然さうした女の情が入つて來たといふことは、善か惡か、さういふことは少しもわからないけれども、兎に角何等かの暗示であるやうに思はれる。……すぐ自分の傍にその心がある。その魂がある。その呼吸がする。觸れば觸られる。髮がある。油臭い髱がある。

ふとある計畫をかれが考へた時には、かれははつとした。神經が昂ぶつて、體が動搖して、身が際限

『でも、後生ですから。』お雪も泣きながら言つた。
お雪も男の眼から涙の流れて落ちるのを見た。お雪も何うすることも出來なかつた。
『まァ、坐つて……』
かう言つて、男は無理にお雪をそこに坐らせた。
暗いランプがパチ、パチと音を立てた。暫くすると、夜行の汽車が來たらしく、停車場の方で物の動く音が一しきり賑やかに聞えた。お雪はかよわい自由にならない女の身の悲哀を染々と感じた。

二十一

何うかしなければならない。愈々決心を固めなければならない。右なら右、左なら左へ行く決心をしなければならない。かういふハメに陷つた以上はもう仕方がない。實行、實行、それより他に路はない。自分の出て行く路はない。
……それなら、國に歸る？　イヤだ。イヤなことだ。國にはもう思ひ殘すところはない。國に歸つたつて何もない。嬶は無論離緣、父親だつて母親だつて、俺に對して愛情はちつともない。捨てゝ去つたつて、何とも思ひやしない。故鄕のあの山、山裾の町、湯、そんなものだつて、一つとして自分に敵意を持つてゐないものはない。誰の顏も皆な俺を見て笑つてゐる。罵つてゐる。冷笑してゐる。溫かい心

やならないかも知れない。』
『さう？』
お雪は笑つて見せたが、其處に置いてある時計を取つて見て、『もう一時よ。』
『さうなるかね。』
かう言つたが、要太郎は急にある衝動を受けたと言ふやうに、いきなり手を女の方に延ばした。
女はそれを避けるやうにして立上つた。
男も續いて身を起した。
女は男の手に袖を執られながら、『歸して頂戴よ、ね、後生ですから。聞いて戴きさへすればそれでもう好いんだから……。このまゝにして、その代り一生、貴方のことを忘れずに考へてゐますからね、後生ですから、お願ひだから。』かう言つた女の眼からは、ほろ〳〵と涙が流れた。お雪は昂奮してゐた。
『堪忍して呉れ、な、な、本當に、今夜といふ今夜、お前の本當の心はわかつたんだから。今度こそ、俺が本當の眞心を見せてやるから……な、な、本當に堪忍して呉れ、俺だつて、俺だつて、そんなにわるい人間ぢやないんだから、これでも血もあり涙もある同じ人間なんだから、な、な、』かう言つて傍に立つて來た要太郎の眼からも、涙がほろ〳〵落ちた。
『俺ァ、悪人ぢやないんだから、な、な、本當にすまなかつた。な、な。』

『行くどころぢやない。もつと先へ行くんだ。敵の中に斥候に行く時なんか、それやえらいもんだよ。丸で生きてる空はないね。』
『さうでせうね。』
お雪は考へて、『その代り、手柄したんでせう。勳章は貰へるんでせう？』
『何うだか、當てにはならないけれども……ちつとは貰へるだらう？』
『除隊はいつ？』
『順よく行けば、來年だけれども……何うなるか。』重荷に對する不安は、又かれの胸に押寄せて來た。
『今日は何うして此方に來たの？』
かれはぱつとした。脫營兵――かう思ふと胸が震へた。
『ちよつと用があつて……』
『明日歸るんですか。』
『明日は何うなるか、用の都合で、もう一日ゐなくつちやならないかも知れない。海岸まで行つて來なくつちやならないかも知れないから……』
お雪は別に深く疑ふやうな樣子もないのでかれはいくらか安心して、『隊がゐるんだよ、海岸に……K町にゐるか、それともT村にゐるかちよつとわからないがね……。その都合で、明日一日また泊らなけれ

『隨分、いろんな目に逢つたよ、俺も……、』梓のことなどを要太郎は頭に浮べながら、『隨分女にはえらい眼に逢はせられたよ。これも皆んなお前のたゝりだ。』

『旨いことを言ふのねえ。』

『本當だよ。苦勞させて、本當にすまないと思つたよ。だつて、その證據には、嬶の名がお前と同じなので、お袋が呼ぶと、お前を思ひ出して困つたんだもの。』

女はそれには頓着せずに、『でも、私の思ひだけでも屆いたから好い。何うか一度は逢つて話したい。話さずには置かない。何んなお婆さんになつてからでも、一生の中には一度は逢つて話さずには置かないと思つたんだ……。でなくつちや闇へやつた子に對してもすまないと思つてゐたんだから……』

女は長い話をすませて、ほつとしたといふやうな顏をしてゐた。二人はまた暫し默つて相對した。

要太郎は鐵瓶を取つて、まだいくらか熱くなつてゐる湯を急須にさして、それを茶碗についで、自分も飮み、お雪にも勸めた。新しい局面が二人の間に展けて來なければならないやうな氣がそれとなくあたりに滿ちた。

『戰爭は大變でしたらうね？』

『隨分えらい目に逢つたよ。』

『銃丸なんか來るところへ行くんでせうね。』

ゐて、子供も出來ないんでも分らァ。』
『矢張、薄情なのね、貴方は？』
かう女は眞面目に言つた。
『だッて……だッて、』かれはどきまぎして、『だッて、氣が合はない奴なんだもの。』
『奥さんだッて可哀相だ。』
『何ァに、可哀相なことなんかあるもんか。先だッて、ちつとも己のことなんか考へてゐやしないんだ……。向うから離緣されるのを望んでゐるんだもの。』
『何處の人？』
『M村の百姓だよ。』
『大盡？』
『金は少しはあるんだらう。……』かう言つたが、『本當にお前も苦勞したな。』
『え〻……』
『まア、仕方がないあの時分は、己もまだわからなかつたんだから。子供だつたんだから。男と女のことなんかよくわからなかつたんだから……』
『今ぢや、もう餘程經驗が積んで、猶ほ薄情になつたんでせう？』

たりした。故郷の父母の顔、裏の小屋、夕日の當つた女郎屋の色硝子の窓、三等郵便局の卓なども見えた。要太郎は二三本殘つた煙草を靜かにふかした。女は火箸で灰の中をいぢつてゐた。

女は急に訊いた。

『それでも奧さんは時々來て？』

『凱旋した時に、ちよつと一度來たきりだよ。』要太郎は口を歪めて皮肉な顏をして、『嬶なんかに、もう思ひは殘つてゐないんだよ。除隊になつて歸つて行つたッて、嬶なんか、もう歸つて來やしないよ。』

『そんなことはないでせう？』

『だッて、さうなんだもの。この間、お袋が來た時にも、その話をしたんだもの。あんな奴は何うでも好いんだ！』

『だッて……』

『離緣して貰ふやうに話してあるんだよ、もう。何ぅせ、氣が合はないし、それに、親達同士も仲がわるいんだ。』

『何うして、また、そんな奧さんを貰つたんだらうね。』

『始めから、かうなるのは、わかつてゐるんだ。不思議はないんだよ。……思はないとも……嬶のことなんかちつとも思ひやしない。戰地に行つてゐたつて、手紙一本よこしやしない。一年以上も一緒に

で、元の座に戻つて、それから二人は普通の聲で話した。

艱難と苦痛との長い話、それも口に上せては、さう長くはかゝらなかつた。要太郎はお雪の色の白い頬にをり〳〵涙の傳つて落ちるのを見た。思ひ出しては堪らないといふやうにして、話をやめて、袖で涙を拭くのを見た。悲しい思出に自ら誘はれてをり〳〵話を中途でやめる顏のあはれな表情を見た。要太郎も動かされずには居られなかつた。かれは憐れな女の物語に引摺られて行くやうなのを感じた。自己の冷酷と無情に對する報酬が完全に酬はれつゝあるのを感じた。かういふ心持を餘所にして、他に熱いまことの心を求めた自己の愚さなどもくり返された。お雪も要太郎の目の時々潤んで行くのを見遁さなかつた。

艱難の多い人生が今更のやうに要太郎の胸を壓した。自分に離れずについて廻つてゐる重荷、その重荷も時々かれの胸に重苦しく蘇つて來た。年に比べていろ〳〵な經驗をしたとは言ひながら、流石に年のまだ若い要太郎は、これから來る人生の大波に對して、不安と恐怖とを感ぜずには居られなかつた。かれに取つては、これから無限にひろげられた人生は、全く暗黑で一道の光明すらその前に認められないやうなものであつた。

女の話を聞いてゐる間に、今日長い路をM市から此處までやつて來た自分のあはれな姿が見えたり、かくしに一文の金もなくて甘藷を午飯の代りにした自分が見えたり、寢床に熟睡した兵士達の顏が見え

臺の上のランプは、ホヤが黑くなつて薄暗い光線を一間に投げてゐた。お雪は靜かに障子を明けて、少し笑ひながら入つて來た。

要太郎は起き上つた。

火鉢にはまだ火がいくらか殘つてゐて、そこにかけてある鐵瓶の湯はまだ熱かつた。薄暗い光線の中を透して、長押にかゝつてゐる軍服と軍帽とが微かに見えた。

火鉢を前にして坐つたお雪は、餉臺の角のところに坐つてゐる要太郎と、丁度斜に相對するといふ形になつてゐた。お雪は眞面目な顏の表情をして、艶めかしい樣子などは更に少しも見せなかつた。

始めは小聲で話した。

暫くしてから、

『隣は？』

かうお雪は訊いた。

『ゐないだらう、誰も……』

『さう。』

かう言つて『ゐるんぢやない』と疑ふやうにしたが、そのまゝ立つて行つて、中じきりの襖を細目にあけて覗いて見て、『大丈夫、ゐない。』

『何うしてでせうね。』

『矢張、俺が馬鹿だからさ……』要太郎は考へるやうな眼附をして、『戰爭にはやられる。死ぬ生きるの思はする。兵隊の辛い勤務はする。……今でも、それで苦しんでるるんだからな。』

『本當ですね。何うして、あゝ親御さんと氣が合はないんでせうね。』

『誰にだつて氣なんか合はないんだ。初めから、誰にでも憎まれるやうに生れて來たんだから……』

『……』

其時分を知つてるるお雪には、要太郎の境遇が同情されずには居られないやうな氣がした。家の人達が誰も構はない。丸で他人の厄介息子のやうな取扱をしてるる。それを氣の毒に思つたのも、お雪の戀の初めの心であつたかも知れなかつた。

二人は默つて相對した。夜はもう十二時をすぎてるた。誰も彼も皆な眼つた。女中も客のあるものは客の室へ、ないものは女中室にいぎたなく熟睡してるた。お雪は此處にやつて來る前に、既に自分の受持の用事をすまし、主人夫婦、つゞいていつも遲くまで起きてるる老婆の奥に寢に入つて行くのを見送り、料理方の男と番頭とが大戸を閉めて外へ出て行くのを見濟まし、朋輩のお唉が客があつて、三階の奥の一間に寢に行くのを承知してから、靜かにこつそりとこの十番の室へとやつて來たのであつた。

入つて來た時には、要太郎は床の中に入つてるたが、それでもまだ大きな眼を明いて起きてるた。餉

のためであつた。今でも、をり〳〵母親はやつて來て、折角心がけてためて置いた金や着物を持ち出して行つた。

要太郎の妻がかの女と同じ名で、今は里に歸してあるといふ話を聞いた時には、お雪は言つた。

『子供は?』

『子供なんかない。』

『うそでせう。あるんでせう。坊ちやん? 孃ちやん?』

『本當にありやしないよ。』

『さう、本當に……』

お雪は凝つと男の顏を見て、

『お兄さんは?』

『東京の學校に行つてる。』

『もう、大學に入るんですか?』

『來年だらう?』

『矢張、それぢや、あの方ばかり母さんや父さんに可愛がられてゐるのね?』

『何うせ、さうさ……』

かける手管なども覺えた。輕い口なども利くやうになつた。

要太郎が梓を忘れ兼ねて懊惱煩悶してゐる時分、丁度かの女はその遠い溫泉の山の中にゐた。かの女は土地のある若者に思はれて、その男は毎晩のやうにかの女のゐる小料理屋へとやつて來た。小さな室、山に向つた小さな欞子窓のついた室、其處をかの女は今でも歷々と頭に描くことが出來た。その窓からは、山にかゝる雲が見え、白く瀨をなして流るゝ谷川が見え、一時間毎に吹き上げる溫泉の白い湯氣の颺るのが見えた。谷川の橋の上を雨の降る日に傘の通つて行くのをかの女はよく眺めた。

繁々通つて來るその若い男を要太郎と思つて見たこともあつた。そしてその積りで心を靡かせて行つて見たりした。裏の小屋での媾曳の嬉しかつたシインをその儘その山に向つた室でのシインに一緒に雜ぜて樂んだりなどした。忘れ難いのは、初戀の心であつた。しかし、いかに交ぜて見ても、其聲、其顏、其言葉、其表情、さういふところから、その幻影はいつも破れて行つた。その若者のために別にかの女の許に通つて來た中年の男を、振つたり何かしたので、その土地では一時はかなりに評判になつたが、しかしその若者が親類から束縛されて、無理に妻帶した時にも、かの女は別に深く悲しみもしなかつた。その若者と別れて來る時にも、要太郎に別れた時の半分も心も動かさうともしなかつた。

それからかの女は彼方此方へと流れた。E町にもゐたこともあれば、K町にもゐたことがある。そしてそれから移り替つて行く度に、その借金は殖えて行つてゐた。そしてそれは大抵は强慾な母と繼父と

の中にも生きれば生きられる生活があつた。そこで女は男といふものゝ淫蕩な不眞面目な女の眞心を玩具にすることを得意とするものであることを教へられた。自分の正直な小さな心ではとてもその荒い熱い波を凌いで行くことが出來ないといふことをも悟つた。かの女の今までの狀態は赤手で恐ろしい火の中に飛び込んで行つたやうなものであつた。一夜、お雪は泣いて泣いて泣き盡した。それは自分が今まで思つてゐた男の心の冷酷といふことが心から飮み込めたためであつた。あゝした殘酷も、あのやうな薄情も、皆なさうした男の心であると思つた時、一層涙は胸へとこみ上げて來た。胸の底に人知らず思ひを包んで、この眞心のいつかは先方に通ずる機會があるであらうと憑みにして、それぱかりを大事な大事な生命のやうに思つてゐたのも皆な空頼みで、空想で、夢か幻のやうなものだと女は段々思ひ始めたのであつた。かの女は今でもその夜の涙をはつきりと思ひ出すことが出來た。譯なしに涙が出て來る。窓に凭つてゐても出て來る。星の空を見ても出て來る。客の前に坐つてゐても出て來る。そして冷めたい夜床も、浮くばかりに一夜泣き明かした。

その翌年、かの女は其處から溫泉のある遠い山の中に行つた。しかし時は旣にかの女の小さな純な心を碎いてゐた。もう酒席に出て小さくなつてゐるやうなお雪ではなくなつてゐた。客の枕席に侍するにも、最初の一二年のやうな苦痛と悲哀とを感じなくなつてゐた。かの女は運命に從はねばならない身を自覺してゐた。從つてお客を綾なして金をつかはせる術をも覺え、心にもないやさしい言葉を客に投げ

言つた。

要太郎は默つて手を拱いたまゝにしてゐた。かれにしては、かうした大きな運命の瀨戸際に立つて、更にかうした大きな愛情に打突かるといふことは、驚かることでもあり、又更に神祕な不可思議な報酬を報いられつゝあるやうにも感ぜずには居られなかつた。女の戀の苦痛は、これまでかれの經驗した戀の水火の苦痛の中に一々裏書をして再現されて來た。梓や其他の女に向つて注いだかれの空しい愛情を、女も矢張かれの爲めに長い間經驗させられてゐたといふことが、段々かれにもわかつて來た。

女の家は彼の生れた町から東に七八里を隔てたM市に近い廣野の中にある小さな農家であつた。女は毎日彼のゐる山の方を見て暮したといふ。そこに雪がかかつたり晴れたりするのを見ては、闇から闇へと葬られた愛情の塊を思つたといふ。そして唯一言でも好い、それだけでも好いから告げたい。一生の中には是非その話をせずには置かない。かう思つてかの女は暮した。かの女はやがて其處から西に十五里もある町へ酌婦として賣られて行つた。それはこの附近に見るやうな田舍の人達を相手にする家で、一面其家の婢のやうにして働くと共に、夕方からは、着物を着更へたり白粉をつけたりして客の酒の席へと行つた。其處には疳癪持の亭主がゐて、毎日のやうに叱鳴りつけられた。横面を張り倒される位のことは何でもなかつた。二十にもなつて味噌藏の中で一日泣いたりしたことなどもあつた。しかし石の上にも、水火

なかつたといふ。それに思ひもかけない新しい事實がかれを驚かした。女の言ふところに據ると、かれの家を出る時、女は月のものがとまつてゐたといふことであつた。しかし經驗のない身には、別に、さういふことも氣が附かず、始めてそれと疑はれ出したのは、それから二月ほど經つてからのことであつたが、父母に知れて、若旦那の許に又その心配を持つて行くやうなことがあつてはと思つて、何んなに女は苦勞したか知れなかつた。それに、さういふ話を若旦那のところへ持つて行くといふことは、絕對に二人の間を割いて了ふことだと信じてゐたかの女は、小さい心ながらも、獨りでそれを處分しようとして、何んなに苦心したか知れなかつたといふ。幸ひ、近所に、不斷からかの女の不幸に同情してゐて呉れた中年の女がゐて、それをおろすやうにして呉れたが、そのため、かの女は半年以上も苦しい病床に橫はつて寢てゐたといふ。そして、その間にも、絕えず殘酷な戀人のことを思つて忘れることが出來なかつたといふ。

それを聞いた時、

『本當かな――』

かう要太郞が言ふと、

『本當でないことを私が言ふわけがありますか。』

かう言つて、やさしいおとなしい性質に似げなく、女は眼を吊し上げて、涙をほろほろこぼしながら

た。

人の來る氣勢がして別れようとした時、お雪は不意に、男の熱い握手を自分の右の手に感じた。お雪は無理に引離すやうにして、頭を振つて見せた。戒愼と抑制とがまたお雪の胸に上つて來た。

『ぢや、ね、話もあるからね。』

『え。』

かう言つて、女はわざとバタ〳〵と草履の音を立てゝ、店の明るい灯の方へその姿を隱した。

二十

何んな物語がお雪の口から話されたであらうか。虐げられ、蹂躙せられ、打たれ、罵られた小さな鳩の物語――それが何んなに深い影響を要太郎の心と體との上に齎したであらうか。

其處にかれはかれが梓や他の女のために嘗めさせられた爛れるやうな苦痛と悲哀とを發見した。鞭と苔との下に折檻せられるものゝ苦痛と悲哀とを發見した。水と火との中に半ば溺れやうとした憐れなものの小さなものゝ姿を發見した。かの女はかれの家を出てから、母親と繼父との折檻を受けなかつた日はなかつたといふ。殆ど食ふものをすら碌に食はせられなかつたといふ。豪家の若旦那をさういふところまで手に入れて置きながら、何うすることも出來なかつた意氣地なさを何んなにひどく罵られたか知れ

うとしてゐたが、今では、その強い力が、一層盲目的に、丁度遠心力と求心力とが相交錯するやうに、二人の心と體との間にある漲溢を示して來てゐた。

しかし男に對するお雪の戒愼の力はまだかなりに強くその盲目な愛情の中に働いてゐた。厨で忙がしがつてゐる間にも、お雪は種々男のことを考へた。再び陷つて行く自分の運命などゝいふことも考へた。それに、お雪には、此處に來て間もなく出來たKといふ男がゐて、それが深切に何彼とやさしいことを言つて呉れるので、惚れてゐるといふほどではないが、賴りになる人とは思つてゐた。膳ごしらへをしながら、お雪はその男のことを考へたり、二階にゐる昔の殘酷な戀人のことを考へたりした。厨にばかりゐて、二階に上つて行かなかつたのも、單にお雪が忙がしいばかりではなかつたのであつた。お雪はもう昔の無邪氣な小鳩のやうな娘ではなかつた。お雪はその時の悲哀と恨みと母親の憤怒とを今でもをり〳〵は思ひ起した。それでゐて、お雪は又わかれてからも二年も三年もその殘酷な戀人が忘られなかつたことを思ひ出した。或は殘酷なだけそれだけ忘れられなかつたのかも知れなかつた。いつそもう今日は逢ふまい。なまじいに逢つて、自分を陷れて行くよりも、明日になつて靜かに、普通の人と少しも變らないやうにして行く方が好い。かうも考へた。しかしあらゆる抑制も戒愼も、盲目な愛慾に對しては、何の効もないやうな一種の強い衝動をお雪は感じた。

それに、わかれてからの自分の經て來たつらい悲しい境遇を男に話さずには居られないやうな氣がし

『もう、しかし、ぢき隙になりますから……』
『すんだら、お出で……』
『えゝ。』
かう言つて、『でも、誰にも、若旦那が私を知つてることを言はないでせう？』
『言はない、言はない。』
『十番ね。』
『さうだよ。』
白い笑顏が闇の中に浮き出すやうに見えてゐた。向うには、樹の繁つた栽込があつて、その緣葉に、二階からかそれとも下座敷からか灯が明るく線をつくつてさし渡つてゐるのが見えた。そしてそれとは反對に、かれ等のゐる廊下は、暗くなつてゐた。廊下の突當りからは、二階に上る折れ曲つた階段があり、此方は、矢張細い廊下を通つて、店の方へ行くやうになつてゐた。下座敷と二階との寢道具のしまつてある室がそこにあつた。棚には船底枕とくゝり枕とが澤山並んでゐた。
かれはお雪の白い笑顏を見、お雪は要太郎の五分刈の頭と顏とを闇の中に見た。さつき突然邂逅した時にも一度結ばれた肉のきづなが、女の方では男の冷酷に對しての戒愼があり、男の方ではかねて殘酷な自己の所爲に對する一種の反抗のやうな心持があつたのにも拘らず、強い力で互にそれを結び附けや

傍に、一ところ三尺の押入位にくりあけて、そこに大きな金箱らしいものが置いてあることであつた。金庫ではなかつたが、尠くともそこに金が藏つてあると言ふことは、本能的にすぐかれの頭に反響した。かれはぢつとそこに見入つた。今年七八歳になる女の兒に何か言ひかけてゐる白髮の婆さまの皺の多い顏もそれと見た。

かれは急いで階梯を上つた。

十九

それから一時間ほど經つて、かれは厠へ行かうとして、暗い廊下のところを通ると、向うから運よくお雪が來た。

幸に四邊に誰もゐなかつた。

『あ、若旦那！』

『忙しさうだね。』

『今日は下番の方に廻されたもんだから、手が明けられないんですもの。……行つて、お話がしたいけども……』

『…………………』

どが闇の夜の中に透くやうに見えてゐたが、少し町を外れると、もうすつかり闇で、蛙の聲が唯湧くやうにきこえて來るばかりであつた。かれは其處に行つて、やゝ暫く立つてゐた。凉しい風が袖の明いた寛いだ浴衣から肌へと吹き込んで來た。

星の光りに山々の黑く靡いてゐるのが見えた。

引返して、稻荷社へ入る角の古い遊女屋の前に立留つたかれの頭には、山裾の故鄕の町の遊廓が思ひ出されてゐた。こゝらでも、故鄕の町と同じく、矢張、張見世をしないので、廣い座敷が唯がらんとしてゐるだけであるが、それでも、さうした家の内部に熟してゐるかれには、眼に見えない内部のさまも歷々と見えるやうな氣がした。梓の顏などが思ひ出された。

暫くして、其處を出て、稻荷の社の中に入りかけて見たが、灯も見えず、路も闇く、別に心を惹くやうなものもないので、かれはすぐ引返して、ぶらり〳〵と步いて、晝間步いて來た通りを警察署のあるあたりまで行つた。

そしてかれはそこから引返して來た。

お雪の後姿は、矢張、厨の奧のところに見えてゐた。『おかへんなさいまし。』かう言つて其處にゐた人達は迎へた。

ふと、かれの眼にくつきりと映つたものがあつた。それは此處の祖母らしい婆樣が坐つてゐる帳場の

の女中を相手にして、さびしさうにしてもさ〳〵飯を食つてゐた。ある客は、食事をすました後の身を暢々と横へて、手帳などをつけてゐた。大方今日使つた金を書き附けてゐるのであらう。ある室では、洋服姿の男が、これから何處かに出ようとしてゐた。ある室では、客はゐずに、大きな旅鞄が二つまで床の間に置いてあるのがかれの眼に映つた。と、その鞄の中がかれに考へられて來た。

で、かれはお雪の姿を彼方此方に搜したが、最後に、厨の奧に膳拵へをしてゐる後姿を發見するまで何處にもその姿を見出すことが出來なかつた。順番で、今日はお雪は、膳拵への方へ廻つて、忙しくしてゐるのであつた。

店に出た時、四十五六の主人が、

『何處かお出かけですか？』

かう聲をかれにかけた。

『ちよつと町を散歩して來る。』

で、番頭は下駄を並べて呉れた。ふと番頭の禿げた頭が灯に光つて見えた。

『行つていらつしやい。』

かういふ聲をあとにして、かれは大通りへと出た。流石は稻荷の社の前だけに、その門前には、茶屋だの料理店だのゝ灯がちら〳〵と明るくついて、色の白い女を、湯氣の騰つた厨や、二階に上る段梯子な

た。

何時の間に、かう大勢客が來たかと思はれるやうに、室ごとに灯が明るくついて、笑聲だの話聲だのがきこえた。大きな聞えた旅館ではあるけれども、この近所の慣習の料理屋兼業なので、きやつきやつと笑ふ女中などの聲も陽氣に、何處か碎けた、土地の淫蕩の臭ひのあたりに滿ちわたつてるやうなのをかれは感じた。何處かで、三味線の音などがした。

廊下を歩いて行くと、『あら、田中さん、そんなことをしちやいやよ、』などゝいふ女中の聲がした。男が女に戯れてるさまがかれの神經を尖らせた。

『お雪ぢやないか?』

かう思つたが、それはお雪ではないらしかつたので安心して、二足三足向うに行きかけたが、今度はお雪が何うしてゐるか見ないではゐられないやうな氣がし出して來た。お雪はあれつきり姿を見せなかつた。忙しいのではあらうが、何うしたらう? 何をしてゐるだらう? と、急に、『兎に角、家を見て置くことが肝心だ。此處で自分の運命を右なり左なりにきめるのだ。さうだ。見て置かう。』かうかれは思つて歩き出した。

室がずつと並んでゐた。そして廊下がぐるりとその室々を廻つてゐるやうになつてゐた。そろ〳〵暑くなつて來る頃なので、何處の室も大抵障子は一枚位づゝ明けてあつた。ある客は商人らしく、さつき

とが、一緒になつてかれの體を領した。兵士が一人かうして普通の旅舍にとまつてゐることに就いての疑ひが、この旅舍の人達に起つてゐはしないかといふ不安も、をり〳〵は頭を擡げて來るので、かれは鋭い眼附をして、女中の方を見た。お雪と詳しい話をするまでは――それまでは、脫營兵であるといふことを知られたくない。こんな風にもかれは考へた。わざとのんきな風を裝つて見たりした。

『明日は別にお早くなくつても好いんだね。』かう言つて、女中は膳をお櫃の上に載せて、そして下に下りて行つた。幸ひに女中はかれの明日の行程をきかなかつた。疑つてゐるやうな素振も少しもなかつた。再び上つて來た時には、女中はかれが橫に倒れてゐるのを見たが、さつきかれのつけたまゝ其處に置いてあつた宿帳に眼を附けて、

『もう書いたの？』

『うん……書いた。』

寢ながらかれが言ふと、女中はそのまゝそれを持つて、半ば明いた障子のところから出て行つた。

涼しい夜風が室に吹込んで來た。

橫になつて、ぢつとしてゐると、すぐその運命に對する怖しい不安が頭を擡げて來るので――種々と頭が痛くなるほど神經が尖つて來るので、かれはすつと立つて、廊下へ出て、闇の夜に吹く涼しい風に熱い顏を向けた。故鄕に手紙を出して金を送つて貰はうとちよつと思つたが、かれはすぐそれを打消し

『今？』

かう言つて考へて、『五人……』

『割合に少いね。』

『だから忙しいんだよ。』

『お雪といふのがゐるね。』

『知つてるの？』

『いや、さつき呼んでたからさ。』

こんな通り一遍の話をしながら、要太郎は夕飯を四杯までお代りをして食つた。刺身、肴、野菜、椀の汁の最後の一滴も殘さず吸つた。しかも、さうしてゐる間にも、かれは營舍のことを考へずには居られなかつた。昨夜から、今日にかけて、中隊で、大騷ぎをして自分の行方をさがしてゐるさまなどが歷歷と映つて見えた。無論、故鄕にもその報知が行つたらう。M市の知己の許にも尋ねて行つたらう。或は――或は昨夜とまつたあの家にも行つたかも知れないと考へて見たが、誰も班の者で一緒に行つたものはないからと思つて、それは否定した。丁度今時分は營舍では食事がすんだ頃だ。暢氣に煙草でも喫して自分の噂をしてゐるだらう。かう思ふと、昨夜、川の畔でぼんやりしてゐたことが思ひ出された。

女中のをり〳〵話しかける言葉と、さうした想像と、箸を取つて行くにつれて飢が滿されて行く快感

上に並んでゐた。酒を一杯飲みたかつたけれど、かれはそれよりも一層夥しく飢ゑてゐた。晝飯はかれは饅頭とふかし藷で間に合せた。

『姐さん、いつからゐるんだね？』

『私は古狸だよ。これでも……』

『何年位ゐるんだえ？』

『もう三年。』

『面白いことがあるだらうね？』

『面白いことなんかあるもんかね。忙しいのと、眠いのと、それつきりだよ。』

『何うだかな……』

『私のやうなもの、誰が構ひ手があるもんかね。』

『旨く言つてるァ。』

『本當だよ。』

言葉のぞんざいなのに比べて、身裝などはちよつと小綺麗にしてゐた。繻子の腹合せ帶などをしめてゐた。

『一體、何人ゐるんだネ？　姐さん達は？』

てゐた。

あたりを見廻すと、お雪は厨の向うの暗い處に後姿を見せて、半分膝をついて、頻りに膳部の準備をしてゐた。

要太郎はその以前に、既に宿帳をつけ、夕飯を濟ませてゐた。

番頭が宿帳を持つて來たのは、階段の上でお雪にわかれて、自分の室に歸つて來てから間もなくであつた。番頭は腰を低くして、其處に厚い宿帳と禿びた筆の二三本入つてゐる硯箱とを置いて行つた。かれは番頭の去つた後で、宿帳をひつくり返して見て、さて何と名をつけやうかと思ひ迷つた。お雪に逢ひさへしなければ、無論匿名で書くのであつたけれど、お雪自身も自分とお雪とは知合ではないやうにして置いて吳れとは言つたけれども、お雪に見られて、匿名で書いたのを疑はれてはと思つた。かれは又ちよつと思案した。またかれは思つた。何うせ一二日の中には、何うにか自分の運命がきまるのである。又、きめなければならないのである。構ふものか、本當の名を書いてやれと思つて、筆に墨をつけた。しかしかれはまた躊躇した。憲兵隊と警察との連絡は、何うなつてゐるか能く解らないけれど、何の道、それは危險でないことはない。もしものことがないとも限らない。お雪に知れると言つたッて、お雪と自分との知合であることが知られない以上、匿名で書いたとて、お雪に知られるやうなことは先づ先づ滅多にはあるまい。で、かれは自分の近所の町のある商家の息子の名を其處につけた。

夕飯の給仕は、最初かれを此室に案內した女が來てした。刺身、野菜、椀盛――さういふものが膳の

も、女の財布の底などが暗いかれの心の中を掠めて行つた。

かれはやゝ暫く其處に立つてゐた。野は既に暮れつゝあつた。山々にさし殘つた夕日の影も暗く、何處か遠くで馬子の唄を唄ふ聲がした。街道の角の古い大きな遊女屋では、女のさゞめく氣勢が賑かにきこえた。

十八

今は稻荷への參詣の客の大勢來る時節ではなかつたけれども、それでも昔からT町の相馬屋と言つて聞えてゐる旅館だけに、薄暮に大分泊客が大勢入つて來たらしく、女中達の忙しげに二階を上つたり下りたりして行く氣勢や、どたどたと客の座敷に入つて來る音や、手を鳴らす音や、番頭が何か言つてゐる聲などが、其處の角此處の廊下に賑やかにきこえた。『入らつしやい』などいふ聲が下で聞えたりした。

要太郎の眼には、さつきちよつと下りて行つて見て來た、大きな店の明るいさまが歷々と映つて見えた。店の眞中に吊された大きなランプ、明るく四方にさし渡つた光線、しかみ火鉢を前にして坐つてゐる番頭、大福帳だの算盤だのゝ一杯に置いてある帳場の中に坐つてゐる主人、その向うは、厨で、そこには忙しげに物を煮る湯氣が白く颺つて、ランプの薄暗い光線の中に、鮪の一疋なりの大きなのが倒さに吊されてゐるのなどが見えた。女中達は皆な忙しさうにして働いてゐた。何處に行つたかと思つて、

ましたよ。』

突然、下で、『お雪さん、お雪さん！』と呼ぶ朋輩の聲がした。

『はァい、何に、此處にゐるよ。』

かう大きな聲で言つたが、要太郎の方に寄つて、『十番ね。あとで、ゆつくり話しに行きますからね。……でもね、私が貴方を前から知つてるやうにはしないで置いて下さいね。丸で知らない人のやうにして置いて下さいね。』

かれは點頭いて見せた。

『お雪さん、なにしてるのよ。』下からかういふ聲が迫つて來た。

『今、行くよ。忙しいね、本當に……』かう言つたが、要太郎の方を見て、ちよつと笑つて見せて、すたすたと折れ曲つた階段を下りて行つた。

要太郎は二歩三歩靜かに歩いて、廊下の曲り角の處へ行つて無意識に立留つた。突然湧くやうにかれの前に起つて來た思ひもかけなかつた邂逅が、かれの體の底に橫はつてゐる暗い不安の狀態と一緒になつて種々に渦を卷いた。しかし今の場合、かれに取つて、その女がかれの前に現はれて來たといふことは、決して喜ばしくないことはなかつた。久し振で、其の柔かい、やさしい聲を聞き、涙脆い素直な姿を見、なつかしい笑顏に接しただけでも嬉しかつた。それに、女が當然持つてゐるであらう男のことより

『さうですか……』

かれは、『今日はね、少し用があつてね、二三日の暇を貰つて出て來たんだよ。』

『さうですか。』

かう言つたが、お雪は笑つて、『若旦那、色が黑くなつたのね。』

『さうかな。何うしても、兵隊さんになつちやね。』矢張笑つて見せたが『お前も隨分變つたぜ！』

『それは變りましたとも……』ふとそれからの種々の艱難を思ひ出したといふ風に、女は曇つた顏の表情をして、『あれから、いろんなことがあつたんですもの。』

『さうだらうね。』

女の顏をぢつと見て、

『隨分、苦勞したらうね。』

『それや、ね、苦勞しましたよ、若旦那！』種々なことを思ひ出すと、俄かに胸が迫つて來たといふやうに、『話し切れないほどいろんなことがあるんですよ。』

淚が女の眼に浮んだ。

『何時から來てるんだえ？　此處に……』

『此處に來たのは、まだ先月、先々月ですけどもね。此處に來るまでに、隨分、あつちこつちを步き

出してやれ、』などとも考へてゐた。

昔の怨みの痕跡――始めちよつと見えたその怨みの痕が、やがて時の間にすつかり女の顏から態度から消えてなくなつてゐるのを男は見逝さなかつた。一言二言話してゐる中に、かれは裏の小屋で酷く取扱つた小娘の笑ひと表情とを再びそこに發見した。かれに取つては不思議に、または全く奇蹟と思はれるばかりに、自分の心が女に向つて著しく偏つて行つてゐるのを感じた。かれは其處に昔の小婢の涙と色白のあはれな顏と男の冷たい情に泣いて母親に伴れられて行くさまとを描いた。『お雪、お雪。』かう今の妻の名を母親が呼ぶ每に、その小さなあはれな鳩を思ひ出した心が今でも續いて波打ちつゝあるのを感じた。

『若旦那は兵隊さんになつて戰爭に行つてゐるッて聞きましたが、もう除隊になつたんですか？』

『いや、今日、ちよつと用があつてね。』どきりとしたのを面にもあらはさず、かう輕い調子でかれは言つた。

『戰爭からはいつお歸りになつたの？』

『つい此間だよ。まだ五六ケ月しか經たないよ。』

『ぢや、凱旋の時ですか。』

『あの少し前だ。』

はぢつと男の顏を見た。

要太郎はまた要太郎で著しく變つてゐるお雪を見た。かの女はもういつの間にかすつかり大人になつて、肉附にも、顏にも、髮にも、多い男の中を、愛憎と執着と惑溺との滿ちた中を、乃至は欺騙と虛僞と遊蕩との中を幾つとなく通過して來た痕跡の殘つてゐるのをかれは見た。

かれもお雪も種々な記憶やら感じやらの雜然として起つて來るのに逢つて、互に默つて立つたまゝ、急には何も言へなかつた。二人は互に二人を調べ合ふやうにして立つてゐた。

『えらいところで逢つたね。』

男の方がまた言つた。一種の微笑――昔お雪に對してよく男が見せた忘れ難いなつかしい微笑をお雪は見た。

『本當ですねえ。私は、何うも似てる、似てるッて思つてはゐたんですよ。さつき、廊下で後姿を見た時にも、さう思つたんだけども……まさか、若旦那だとは思ひもなかけかつたもんだから……今、そこで顏を合せた時は、本當にはッとしましたよ。』

『全く奇遇だな。』かう言つたかれの心の底には、自分の運命の前に突然あらはれて來たこの一女性が、溺れかけたこの自分に救命繩を投げかけて呉れるか、それとも深い谷の中に一層深く自分を陷れて行く怖ろしい手となるか、それが何方ともわからないやうな不安が起つた。一方では、『こいつから、金を引

聲を聞いて、今は何處に何うしてゐるであらうと思つたお雪を見た。大勢の女に觸れて見てから始めてその小さい眼から出た眞珠のやうなまことの涙を理解することが出來たそのお雪を見た。

『お雪ぢやないか？』

『まァ。』

女も餘りの不意に、暫しは心臟の鼓動に堪へなかつたやうに、または何ういふ言葉を交して好いかと思ひ惑つたやうに、今でも思ひ出すには思ひ出したが、逢つたら、今度逢つたら思ふさま此方から辛く出て行つてやらうと不斷思つてゐたのに、それを現に此處で逢つて、何うした態度に出たら好いかと思ひ惑ふやうに、いくらか躊躇の態度を見せたが、しかし、そのなつかしい、惚れた記憶のある、始めて深い戀といふことを小さな心に植ゑつけてくれたその男に對しては、恨み、つらみより何より先に、なつかしいといふ念が胸に一杯になつて來て、女は平生の考へなどをその刹那の念頭に置いてゐるわけには行かなかつた。

『まァ、ねえ。』

『えらいところで逢つたね、こんなところで逢はうとは思はなかつた。』

かういふ男の言葉の中にも、お雪は其の聲と態度と表情と氣分とのかくすところなく現はれてゐるのを見た。それはなつかしく戀しいと共に、恨めしく腹立たしい聲であり表情であり氣分であつた。お雪

が見えた。

しかし別にかれの心を惹くやうなものはなかつた。かれはそのまゝ靜かに歩を進めて、もと來た廊下を折れ曲つた階梯の方へと行つた。

もう薄暗くなつた二階の階梯を二三段上つて、折れ曲つて、猶ほ昇らうとしたかれは、ふとそこに、上に一人の女の立つてゐる姿を見た。女は顏を斜めにして、柱に片手を寄せて、戸外の夕暮のさまでも見てゐるといふ風であつた。

さつきの女中ではないと言ふことはすぐわかつたが、かれは別に心にもかけず、そのまゝ一段二段と階梯を上つて行つた。ふと、女は此方を見たが、自分の眼を疑ふといふやうにして、更にぢつと此方を見詰めて、

『まァ。』

と叫んだ。

かれも驚かずには居られなかつた。かう言ふところにかれを知つてゐるものはない筈であつた。かれは再び女を見た。驚愕は周章を混じた喜悦と昔の罪惡に對する不安とに變つた。かればそこに小婢を見た。裏の小屋で蟠曳したお雪を見た。縋つて來るやさしい心と情と涙との持主であるお雪を見た。いざとなつて冷淡に突放したお雪を見た。自分の今の妻と同名であるがために、『お雪、お雪、』と母親が呼ぶ

られてあるのが見えた。さゝげに手がやつてあるのなども見えた。赤い白い花などが咲いてゐた。流しに出ても、かれは別に體を洗はうともしなかつた。一瞬の間にも心はすぐその重荷に觸れて行つてゐた。かれはぼんやりとして、考へるともなくまたそのことを考へ始めた。

硝子戸の隅のところに微かにさし込んで來てゐた夕暮の餘照は、次第に薄く薄くなつて、もう少しでその痕をとゞめなくなるばかりになつてゐたが、かれが二度目に湯に入つて流しへ出て來た時には、もうその影も全く消えて了つてゐた。

かれはさびしい氣がした。

それでも湯から上つて、浴衣を着た時には、流石に體がサバサバして、そんなことを同じやうに考へてゐたつて仕方がない、もう少し元氣を附けなければいけない。かういふ風にかれは考へた。一方から考へて見ると、さう煩悶して、思ひ崩折れてばかりはゐられなかつた。如何やうにしてもかれはそのあやしい運命の中から活路を求めなければならなかつた。

かれは風呂場の入口の扉を明けて、それから廁に入つて、やがてそこから出て來て手を洗つたが、ふと昨夜の庭を隔てた居間の燈の光景を思ひ出した。かれはそれとなく四邊を見廻した。

それは槇だの檜だの松だのの繁つてゐる栽込のところに大きな石が置いてあるやうな庭であつた。石燈籠が一つ薄暮の空氣の中に立つてゐた。垣を隔て、隣の廣場を隔てゝ、斜に廣い平野の山のかゞやき

の町は、やがて靜かな初夏の薄暮に迫らうとしつゝあつた。

やゝ薄暗い足元の危い階梯を下に下りると、又、庭の栽ゑ込みに添つた廊下があつて、その奥に則らしいものが見えて、手水鉢などが置いてある。そこに又もやぼんやりとして立つてゐるかれを、『此方です、』と言つて女中は色硝子をはめたその風呂場の扉を明けた。

かれは一番先にそこに掲げてある大きな鏡に自分の顏の映つてゐるのを見た。蒼白い顏、額のところの軍帽をかぶつた白い跡、帽子のあとを印した延びた五分刈の頭、角度の著しく際立つた頬骨、何だかそれは自分ではないやうな氣がして、――昨夜あゝいふことをしたり、長い路をやつて來たりした自分ではないやうな氣がして、ぢつと深くそれに見入つた。かれはまた輕い溜息を吐いた。

湯に入つてゐる時間はかなり長かつた。隊とはちがつて如何にも靜かな風呂場であつた。そこは早や既に薄暗かつたが、それでも前から夕暮の殘照がさし込んでゐるので、まだ洋燈を要するほどでもなかつた。『お加減は如何で御座いますか？』顏は見えずに、外で女の聲がした。

『丁度好いよ。』

綺麗な湯の中に白く自分の體のすき徹るのを見ながら、かれはかう無意味に答へた。あとは女は去つたらしく、外に人のゐる氣勢もしなかつた。

穴から覗いて見ると、其處は家の裏の野菜畑になつてゐるらしく、隱元だの茄だの馬鈴薯だのが栽ゑ

『昨日、一昨日から泊つてゐなさる。何でも、登記所か何かに用があるんでせう。今日は其處に行つてた……』

『在鄕のもんかね？』

『さうらしいな。』

かれは體を起したが、『あゝもう和服を持つて來て吳れたのか、それは難有い。軍服は窮屈でな。』かう言つて立上つて、釦を外して上衣を脫いで、白い埃に塗れたズボンを取つた。下には格子縞の綿ネルのシャツの洗ひ晒しに汗の染み込んでゐるのが見えた。ズボン下もう薄黑く汚れてゐた。

女中がズボンを二階の欄干のところに持出して、埃を拂つてゐる間に、かれは其處に置いてあつたさつぱりした浴衣を取つて着た。

『あゝ、これでさつぱりした。』

餉臺の前にゆるく胡坐をかきながらかれは言つた。

『ぢや、お風呂にお入んなされな。』

女中に促されて、かれは靜かに體を起した。『まア湯にでも入つて考へよう。』かうかれは思つたのである。二階の裏の折れ曲つた階梯の上に來た時、そこに深く茂つた梧桐に日影の薄れて行つてゐるのをかれは見た。風はまだ吹いてゐるが、餘程靜かにはなつたらしく、前に深紫の山嶺の連亙を持つた平野

始めて其處に女中がゐるのに氣が附いたやうに、此方を見て、

『そんなに歩かないのだがな。』

『何處から來たな、お客さん。』

『M市から……』

『汽車でなしに歩いて來たんですか。』

『途中に用があつたで……』

『でも、歩いちや、大變ですね。五里ですか、六里ですか。』

『六里だな。五里には遠いな。』

『さうでせうね。お客樣も、何うかすれや歩いて來たッて言ふ人があるけど、矢張さう言ふで。』

『此頃は靜かかね？』

『今日は靜かだけども……昨日は十人ほどの講中が來てな。それが騷いで、いそがしかつた。』かう言つたが、女中はまだ起きようともしないかれを見て『くたびれが治るだで、すぐお湯に入んなされな。』

『もう、出來てるのか。』

『今、沸いて、向うのお客さんが入つたばかりだ。』

『あのお客さん、前からゐるのかね。』

『よろしいでせうか』

『好いよ、此處で。』

女中はすぐ下りて行つた。

流石にかれは疲勞を感じた。僅か五里の道ではあるけれど――平生ならば半日かゝらずに歩いて來るほどの距離ではあるけれども、精神と神經が動搖してゐるので、十里も十五里も遠く歩いて來たやうな氣がした。かれは劍を吊つた帶皮を取ると、そのまゝいつもするやうに兩手を後頭部に當てゝ仰向に倒れた。

かれは溜息を深くついた。

そして天井を見詰めたまゝ何か物を考へてゐるものゝやうに大きく眼を明いてぢつとしてゐた。

女中はやがて火を持つて來て箱火鉢の中にそれを入れて、殘つた卷煙草の吸殼を十能に取つた。つゞいて菓子と茶とを持つて來た。浴衣をも持つて來た。それでも猶仰向けになつたまゝ、かれは身動きをもしなかつた。

女中は言つた。

『おくたびれでせうね？』

『うむ。』

『お泊りさまで、』『へいさやうで御座いますか。』などゝかれの樣子をじろ〳〵見ながら番頭は言つたが、『ぢや、二階の奧の十番。』かう其處に案內に立たうとして出て來た女中に言つた。

『靜かなところが好いのだがな。』

『へい、ごく靜かで、……今ぢや、何處も空いてをりますから……へい、今は丁度養蠶の時期で、田舍から御參詣が御座いませんから、それは靜かで、へい。』

かう番頭は矢張揉手をしながら言つた。

で、かれはだぶ〳〵するヅボンのポッケットに兩手を差込みながら、幅の廣い階段を女中に導かれて昇つて行つた。

橫肥りに肥つた餘り容色の好くない女中をかれは見た。

成ほど番頭の言つた通り、何處の室もがらりと明いてゐて、二階の上り口の一間に近在の農家の息子らしい客が一人ゐるばかりであつた。やがてかれはそれをぐるりと廻つて、裏の栽込に面したやうな六疊の一間に通された。

『ちと陰氣だね。』

『でも靜かなことはこゝが一番靜かですでな。』

『それはさうだね。』

く深い杉の森を背景にして見えてゐた。

しかし、縁日でも何でもないので、その日は參詣するものも少く、何の料理店にも旅館にも、客がさう澤山は入つてゐないらしかつた。通りの角には、昔、街道であつた時分の名殘の大きな女郞屋の靑い古びた暖簾が、さびしさうな夕風に靡いてゐた。通りには駄馬が五頭も六頭もつゞいて通つてゐた。

ふと左の方を見た彼は、そこに三階建ての大きな古い旅館のあるのを見た。それが相馬屋であつた。店の眞中に置いてある眞鍮の大きな火鉢や、講社のビラや、左にひろく出來てゐる門などが一番先にかれの眼に映つた。店に接して、別に奥深く庭から入つて行く入口なども見えた。

かれはそこに來て立留つて、高い三階を仰いだ。三階の廊下には、白い日除の幕に夕日が明るくさし渡つてゐた。かれは店の方から入つて行つた。

十七

『入らつしやい！』

かう言つて番頭は迎へた。

それにつゞいて『入らつしやい、』といふ上さんやら女中やらの異口同音の聲が聞えた。大きな帳場のところには、かなり年を取つた此家の祖母らしい婆さんが莞爾して笑つてゐるのが見えた。

その相馬屋にかれは泊らうと思つた。『兎に角、そこに行つて考へよう。』かうまたかれは思つた。

かれは向うから來た人に訊いた。

『相馬屋ッて言ふ旅籠屋はまだでせうか。』

『相馬屋、それは稻荷さまの前だ。もうぢきだが――』

『難有う。』

かうかれは辭儀をした。

それでもまだ稻荷社のあるところまでは一二町あつた。やがて流行神の門前町のやうなカラアがかれの眼に映り出して來た。小さな旅館、つゞいて、小さな料理屋、赤い襷をかけた頰の赤い女中、土產物などを一杯に並べてゐる店、正月の初祭は大したもので、近在近鄕から賽客が大勢集つて來て、汽車が臨時列車を出しても乘切れないほどで、その時は旅館は何んな小さな旅館でも、客で一杯になるといふことであつた。それは古い千年も前からある稻荷社で、M市がまだ城にならない時分から、既に儼としてそこに鎭坐してゐたのであつた。

『お入んなさい、お休みなさい。』

かう言ふ聲は賑やかに其處にも此處にもきこえた。

大きな稻荷社は、通りからは、ずつと奧深く入つて行つてゐて、覗くと、大きな華表と門と宮とが暗

娘らしい汚ない爺とが立つて待つてゐた。局員の事務を執つてゐるのが金網を透して見えた。

『爲替や貯金の時間は、もうすぎた筈だがな。』

それとなくかれは思つた。

それから少し行つたところで、かれは、T町警察署と書いた札のさがつてゐるのを見た。かれはぎつくりした。かれはかれとこの建物との間に何か斷つことの出來ない因緣があつて、何となく自分の體がそつちに引張られるやうな氣がした。それは大きな白いペンキ塗の建物であつた。二階造りであつた。門の中に形の面白いひよろ松が一二本栽ゑてあつて、その奧に五六段の石段のある嚴めしい入口が覗かれた。ズボンだけ白い服にした巡査が劍を鳴らして其處から出て來た。

かれは急いで、それを避けるやうに、通りの反對の方の側に行つた。しかし幸にも巡査は一人かうして歩いてゐる兵士をあやしみもしなかつた。かれの振返つた時には、その巡査は旣に遠くの方へ歩いて行つてゐた。

かれは又步調を緩やかにした。

有名な稻荷の社は、何でも町でも南の外れ近いところにあるといふことをかねてかれは聞いてゐた。そしてその町の旅館の大きいのもその近所にあるといふことであつた。相馬屋といふ旅館の名をかれは度々耳にした。『T町では、相馬屋が一等さ。』誰もかれも皆なかう言つた。

のであらう。何處まで行つたら、かれはこの重荷を脫することが出來るであらう。かれの考へは、循環小數のやうに、又それからそれへと繰返された。『あの時躊躇せずに、營門の中に入つて行けば好かつた。何故行かなかつたか。何故……』かう思ふと同時に、いつそこれから宿に着いたら、國に手紙を出して、事情を詳しく書いて金を送つて貰はうか。かういふ考がまた浮んだ。しかしさうすれば、何うしても再び兵舍の中に戾つて行かなければならなかつた。自分のやつた罪惡を明るみに出すばかりではなく、徵罰令以上の恐ろしい禁錮の處分を今度は受けなければならなかつた。從つて、來年どころか、猶二年も三年もあの兵營の中にゐなければならなかつた。本當に何うして好いか、かれには分らなくなつて了つた。

銀行だの、信用組合だのが段々町の兩側にあらはれ出して來た。大きな土藏造の家などがあつた。T銀行と小さく黑い札に金文字で書いてある煉瓦づくりの家の前には、自轉車が二三臺置いてあつたが、丁度その時二十一二のハイカラな店員が、新しい藁稈帽子とセルの洋服とをくつきりとあたりに見せて、そこに置いてある一臺の自轉車に乘つて、すうと巧にそこから出かけて行つた。屹度何處かに現金を持つて行くのに違ひない。あの男の持つた折鞄の中には五百や千の金は入つてゐる。……もつと入つてゐるか知れない……。かう思つてかれはその後姿を見送つた。

郵便局の大きな建物の前では、貯金、爲替と札の出てゐるところに、髮をくし卷にした女と近在の百

町に入ると共に、暫くかれを離れてゐた不安が又かれを襲つて來た。此處には、憲兵の心配はないが、それでもかうして一人で軍服で步いてゐて、もしや人に疑はれはしないか。不思議に思はれやしないか。かう思ふと、何だかたまらなく不安に危險に感じられて來た。何より一刻も早くこの軍服を脫ぐ算段をしなければならないと思つた。さうだ……本當に一刻も早く……。

『しかし、仕方がない。もし咎められたら、外泊で歸鄕中だと答へよう。外泊證を見せろと言つたらまた其時のことだ。……或は、隊からこゝまでもう手が廻つてゐるかも知れないけれど、警察と軍隊とでは搜索の方針も違ふだらうから、まだ大丈夫だらう。知れたら、知れた時だ。』こんなことを思ひながらかれは步いた。

段々町の中心に近づきつゝあつた。しかし思ひの外に時が經つた。ある處で見た時計は、もう五時を五六分すぎてゐた。五六里の路に一日！　自分ながら隨分ぐづぐづして步いて來たものだと思つた。『しかし、あそこで半日は寢たやうなもんだから、』とも思つた。それに、早く行く必要はない。餘り早く行つて泊ると却つて旅館の人達にも疑はれる。

つゞいて自分の財布にもういくらも金が殘つてゐないことが氣になり出した。何處にかれは宿賃を得るであらうか。何處にかれは茶代を得るであらうか。かれはまた昨夜のやうにして金を得る算段をしなければならないのか。かう思ふと、かれはうんざりした。何處までこの重荷がかれについて廻つて行く

時は今度の戰功で、金鵄勳章はとても貰へないが、ちよつとは金が餘計に下るだらうなどと言つて、一年後の除隊の時の話などを母親にした。それもこれも皆な駄目になつたとかれは思つた。續いてかれは山裾の寺の中に埋められてゐる老祖母の皺の多い笑顏を思ひ出した。大きい女郎屋の色硝子の窓に當つた夕日のさまがちよつと浮んでそしてすぐ又消えて行つた。

いつとなくかれは橋の欄干に凭りかゝるやうにしてゐた。もうかれは家鴨の群を見るでもなく、子供の遊ぶのを見るでもなく、又川の流れを眺めるでもなかつた。かれは唯ぼんやりしてゐた。と、その傍を荷車が通つたり、女を乘せた俥が通つたり、人がぞろ〳〵通つたりした。若い町の娘が二人づれで手をつなぎながら、何か面白さうに樂しさうに笑つて話しつゝ通つて行つたりした。

暫くしてはつと氣が附いたやうにして、かれはまた靜かに歩き出した。

町が長く續いた。それはこの平野の中では、M市についでの重要な町で、人口も一萬近くあつて、月に三回賑やかな市も立つので、何處となくあたりが活氣に富んでゐた。家並なども揃つてゐた。

でも、町の中心まで來るには、かなりの距離があつた。尠くとも七八町、もつとあるやうにすらかれには思はれた。呉服屋、乾物屋、雜貨店、金物屋、桶屋、ある家の前では、小僧が精々と荷をつくつてゐた。ある店では、此處等に見かけないやうな若い東京風の細君が、束髮姿を後に見せて、丸い小椅子に腰をかけて、物を買つてゐた。ある店には禿頭の番頭が退屈さうに坐つて通りを見てゐた。

ゐた。左は一面の野で、青々とした水田の果ては濶く遠く、多分海の上に浮んでゐるだらうと思はれる白い大きな鳥の翼のやうな雲が、日に照されて半ば赤く染つて見わたされた。

やがてかれはT町の入口のところへと來た。

川の水が流れてゐた。そこには橋がかゝつてゐる。見ると、向う岸にこんもりとした綠樹の繁茂があつて、その下に偏つた流れに家鴨が七八羽ギャァギャァ言ひながら泳いでゐた。山から出てまだいくらも流れない水は綺麗で、せゝらぎを立てゝ流れてゐたが、此方は石原に青い草が生えて、子供達が其間を跣足で遊んでゐるのが見えた。綠草の中には何といふ花か知らないが白い花が雜つて咲いてゐた。野藤などもかゝつてゐた。

橋の上で又ぼんやりとして立留つたかれは、見るともなく、その水に浮んだ家鴨の群を見た。家鴨は水かきのついた大きな足で、體の重さを持扱つてゐるやうにして鳴きながらよちよち歩いた。ふとかれは故鄕のことを思つた。一番先に、母親の顏が眼に浮んだ。この前の日曜日に別に用事があつてM市に來た次手だと言つて、ある家の二階で半日母親と一緒にゐた。母も老いて、白髮がもう眼に立ち始めて來てゐた。其時里に歸つてゐる妻の話をしたことをかれは思ひ出した。母親は里の人達の義理知らず情しらずを散々並べ立てた後で、『一體、お雪はまた何ういふ氣でゐるんだか。』と言つた。かれは其時、『なァに、投つて置くさ、あんな奴、もう歸つて來て貰はなくつたつて好いんだよ、母さん、』と言つた。其

入口に汚ない襤褸の蒲團を干してゐるやうな家もあれば、ぽつつり道路に面してさびしく立つてゐる農家などもあつた。ところ〴〵川が滿ちて流れて、川柳や芦や萱が青々と生えてゐた。あるところでは、さうした小川に橋がかかつて、その向うに農家の邸宅と思はるゝやうな瀟洒な家に女の姿などが見えた。

摺れ違つた男にかれは訊いた。

『T町までまだ餘程ありますか。』

『いゝえ、もうすぐ。』

と言ひ捨てゝその男は素氣なく向うに行つた。

暫く行つて、かれはまた同じ問をくり返した。

今度は袢纒を着た汚ない爺さんであつたが、立留つて了寧に、『もうすぐだ。五六町あんめい。もう家が見える筈だ。』かう言つて後の方を指して見せた。

少し行くと、果してそのT町――何んな運命が其處にかれを待つてゐるか知れないT町が、午後の日影を帶びてそれと見え出して來た。高い低い甍、白い土藏、混雜した家並、それが廣い晴れた平野の地平線の上に浮き出すやうに……。

汽車のレールがずつと町に入つて行つて、その向うに大きな停車場、信號柱、其處に留つてゐる貨車などが見えた。白ぼつたけた小さな丘陵が其處此處に現はれ出して、ひよろ松が一二本その上に生えて

出て來た上さんは訊いた。

『それ、向うにぐづぐづ歩いて行くぢやねえか。』

『あゝ、あれ。』

かう言つた上さんは、午後の日影の中を、通りの右側に添つて、茶褐色の軍服と軍帽とをはつきりとあたりに見せて、靜かに歩いて行つてゐる一人の兵士の姿を見た。

『本當に變でしたね、親方。』

かう言つて三人は笑つた。風がまた白い埃をあたりに立てた。

十六

T町に行き着くまでに、かれは猶ほかなりに長い時間を費した。腹は減つたけれども、もう晝飯を食ふ錢もないので、二錢出して、かれはまたふかし薯を買つて食つた。同じやうな松並木と、町と、村落と、野と、畠とは、行つても行つても際限なく續いた。

右に絶えずその前景を爲してゐる山嶺の連亙は、その色と姿とをいつか變へて行つてゐた。今は午後の日影の下に、碧は稍赤味を帶び、その複雜した襞も、午前のやうなはつきりした形を見せなくなつた。雲はいくらか出て、遠い山の頂には湧くやうな白い堆積が渦卷き上つた。

はめるさまが面白くつてそれに見惚れてゐたのか、それとも他に何か理由があつたのか、それとも又疲れたのか、それはかれ自身にもわからなかつた。かれは喪心したもの丶やうに見えた。

やがて再びかれは歩き始めた。

亭主は店の中小僧に言つた。

『變な兵隊がゐるもんだな。立つて見てやがつた。』

『本當ですね。私はまた何か用でもあるんかと思つた。』

『餓鬼ぢやありやしめいしな。たがを入れてゐるのを見てゐる奴もねえもんだ。變な兵隊だな。』

『本當ですね、親方。』

『何うかしてやがるんだ。何うだ、あの歩きざまを見ろよ、肩が落ちるやうな恰好をして歩いてら。』

『どれ？』

と言つて、中小僧は仕事をやめて出て來た。それときゝつけて上さんも出て來た。『それだよ、それ、向うによちよち歩いて行く兵隊だよ。ぢつと後に來て立つて見てやがる。それがちよつとぢやねえ、このたがを二つはめて了ふ間見てやがつた。何か言ふかと思へや何にも言ひやしねえ。變なのんきな兵隊もあつたもんだなア。』

『どれさ……。』

かれは其處に來かゝつたが、そのたがに丸める細い割竹のくるくると廻るのに眼を留めて、さながらめづらしいものに見惚れた子供か何ぞのやうに、じつと立つてそれを見た。と言つて、傍に寄るでもなく、何か亭主に話しかけるでもなかつた。かれはぼんやりとして唯立留つて眺めた。

亭主の引くにつれて、細い割竹はくる〳〵と丸まつて、段々たがになつて行つたが、それを亭主は桶の縁にあてゝ、一度あてがつて見て、又外して、緩めたりつめたりして、更にそれを桶の縁にはめ込ませた。そして宛てがつたくさびの上を、桶を廻しながらトントンと輕く叩くと、たがは次第に旨く桶の中ほどのところにはまつて行つた。

トン、トンと叩くにつれて、亭主の手にした桶は面白く廻つて行つた。

かれはぼんやりと立つて見詰めた。

一つ濟むと、今度は亭主は更に又細い長い割竹を取つて手繰つて丸め始めた。くるくると見るがうちに、竹は丸く輪を描いて、手早く再びたがになつて行つた。長い細い割竹が絶えず動いた。

立留つたかれの横顔の半面からかけて、亭主の手元、桶の一方の側、それから店の仕事場、中小僧の鉈をつかつてゐる方へと午後の日影は明るくさしわたつてゐた。

かれはそこに十分ほどじつとして立留つてゐた。何故そこにさうして立盡してゐたか、亭主のたがを

十五

午後三時頃、かれの姿はT町から一里手前にある、昔の中の宿と言つたやうなK町の通に見えてゐた。

それは汚ない衰へた長い町で、養蠶などで僅に息をついてゐるやうな小さな町であつた。從つて何處の家でも、養蠶につかふ籠やざるが干してあつて、軒には白い繭が美しく日にかゞやいて光つてゐた。

いくらか午後からは風が出て、街道の埃がところ〴〵白く騰つてゐるのが見えた。何處かで大工の鋸や鉋を使つてゐる音がした。

かれは軍帽を脱いで、をり〳〵額の汗を拭つた。上衣の釦は半ば外してある。ズボンは遠く歩いて來たといふしるしの埃が白くぼかしのやうに附いてゐる。一歩一歩歩く靴も重さうであつた。

かれはこの町の入口で、旨さうに湯氣の白く騰つてゐるふかし立の饅頭を五つ買つて、それでいくらか空き加減の腹を滿した。今、かれはその町の外れ近いところを歩いてゐた。

其處に一軒、桶屋があつた。店には出來上つた桶だの、出來かゝつた桶だの、桶にする板だのが一杯に棚やら仕事場やらに並んでゐて、中小僧がせつせと臺に板を當てながら鉈で削つてゐるのが、午後の斜にさし込んで來る日影に明るく浮き出すさうに見えてゐた。家の前では、四十五六になるそこの亭主が、地面に筵を敷いて坐つて、桶のたがをかけるために、長い細い割竹を精々と扱いて丸めてゐた。

よぼ〳〵として歩いて行く汚い風をした老爺、何處か近所の百姓の上さんらしい尻からげをした女、二三人づれで、中には女も雜つて、白粉を斑につけて月琴などを持つて歩いて行くョカョカ飴屋、村の醫者らしい八字鬚を生やして鞄を持つた車の上の中年の紳士……。と思ふと、汽車がまたその響をあたりに震はせて勢ひよく通つて行つた。

兵營のさまがをり〳〵かれの頭を掠めて通つたが、しかしもうかれは初めのやうにはつきりと、また長い間それを浮べては居なかつた。何と思つたつて、もうあとへ引かへすことは出來なかつた。先へ――新しい運命へ向つて行くより外に仕方がないといふことをかれは思つた。

T町――其處は汽車では度々通つたが、また話には聞いてゐたが、大きな日本での元祖であるTといふ稻荷があつて、馬市には非常に賑やかであるとは知つてゐたが、兎に角始めて其處に行くかれは、理由なしに、其處にある運命がかれを待つてゐるやうな氣がした。兎に角、其處まで行つて見よう。さうした上で、先へ出るなりあとに戻るなりするとして、それまで一切種々なことを思ひ惱んだり苦んだりするのは止さう。或は其處に行つたなら、思ひもかけない運命が自分を待つてゐて、この不安な不定な狀態を容易に解決し得るかも知れなかつた。

M市からT町まで、五里には少し遠かつた。

れた。

何處を見ても皆な明るく、鮮かに、天地は光りと輝きと喜悅とに滿ちわたつてゐた。それに比べて、かれの心の內部の狀態は、いかに慘たるものであつたらう。いかに暗澹としたものであつたらう。またいかに苦痛に滿たされたものであつたらう。かれはこの明るさと鮮かさと喜ばしさに對して、ぢかにそれに面してはゐられないやうな氣がした。天地はこの通り美しく、人間は皆嬉々としてゐるのに、自分ばかり何故かう辛い苦しい重荷を抱いて懊惱しなければならないのか。かういふハメに陷つて行かなければならないのか。急に種々な記憶やら追想やらが一緒になつて、ごたごたと集つて來て、堪へ難い淚がグッと胸にこみ上げて來た。

丁度此前家出をした時、雪の白い大きな山脈を仰いで淚を流したやうな悲哀が、止め度なく强く漲るやうにかれを襲つて來たっ

かれは泣きながら步いた。

かれは立留つたり步いたり蹲踞んだりした。

大きな街道は長くその前に續いてゐた。向うには美しい松並木がまた見え出して來てゐた。槪してその路を步いて行くものは少い方であつたが、それでもかれは種々な人達に逢つた。草鞋をはいて遠い旅をして來たやうなあはれな旅客、荷車を曳いて疲れたやうにしてやつて來る若者、舊式な屋臺をかついで

『あゝ寢ちやつた、寢ちやつた！』

『餘りよく寢てゐるからお氣の毒だつたけれど、餘り時間が經つて、遲くなるとわりいツてお上さんが言ふから……』

『あゝ大變寢ちやつた……一體何時だ……』時計を出して見て、『もう十一時だ。午だ。隨分寢た。』

『餘程くたびれたと見えるのね。』

『行かう、行かう、大變邪魔しちやつた……』かう言つてかれは立上つた。勘定の外にかれは二十錢女にやつた。

十四

かれはまた歩き出した。

寢たお蔭で頭はからりと晴れてゐたが、昨夜からの疲勞も餘程恢復したやうに思はれたが、その代りにセンチメンタルな物悲しいやうな氣分がかれの心を占めてゐた。

天氣はよく晴れてゐた。日はうらゝかに照つた。若葉の濃い緣は、野にも山にも一面に漲り渡つて、麥の穗は伸び、中でももう黃く色づきかけたものなども見えた。隱元豆の畑、白い紫の花の咲いた馬鈴薯の畑、稻の綺麗に植ゑつけられてある水田、その向うには低い山から高い山へとの連互が鮮かに指さゝ

かれは冗談口を利くやうな輕い氣分でないのに拘らず、それでも矢張女を相手にして輕い口を利いた。かれは女の生れ故鄕などを訊いた。

『さうかえ、A町かえ。』

『知つてゐるの？』

『B町に、親類があるから、よく行つたことがあるよ。』

『さうかね、まア！』

など丶言つて女はなつかしがつた。その近所の話だの、そこのお祭の話などをかれはした。しかしかれは疲れてゐた。飢ゑてゐた。一本酒を飮んで了ふと、かれはすぐ飯を食つた。

膳を片附けて、女の再び其處に入つて來た時には、かれは坐つた位置のまゝに後に倒れて、兩手を後頭部にあてながら、昏睡したといふやうにして眠つてゐた。體の飽滿とアルコールの刺戟とは、苦もなく疲れたかれを眠らせた。

女が枕を出して頭に宛てがつたのもかれは知らずにゐた。

何時間眠つたかかれは知らなかつたが、ふと氣が附くと、さつきのほつてりした女が傍に來て、頻りにかれを呼覺ましてゐた。

かれは驚いたやうな顏をして、すぐ起上つたが、

急に、

『一本、おくれな。』

『お酒？』

『その代り一本きりだ。醉つちやつても困るから……。』

女は笑ひながら出て行つた。かうした女には、客は何ういふ客であるか、これまで自分達と同じやうな女を相手にした客であるか、それともさうでないか。さういふことはすぐわかるらしかつた。やがて女は德利を持つて來た。

そして其處に坐つて酌をした。

あつい酒は疲れた體にじつと染み込むやうに感じられた。頗る旨かつた。一杯二杯とかれは盃を重ねた。

昨夜の女の肌がまたはつきりと浮んで來た。かれには何うしてさう女がついて廻つてゐるのかわからないが、また何うしてさう女が深く自分の頭の中に食ひ込んでゐるのかわからないが、兎に角その纖維と自分の纖維の間に密接なある接觸關係を深く強く持つてゐることを考へずには居られなかつた。かれは悲しいやうな氣がした。とは言へ、ぽつてりした肉附の好い女が、かれと一緒に其處にゐて、酌をして吳れるといふことは、かれをその重荷からいくらか落附かせたことは事實であつた。

『何にもねえよ。』

『そんなことはねえだらう。澤山あるだらう。』

かう輕い心持で言つたが、さういふ心持ではゐられない自分であることを思つて、かれは顏を曇らせた。

女はぐづ〳〵してゐたが、何か田舍唄らしいものを輕く口の中で唄ひながら、立つて向うへ行つた。

一人になつたかれは、それとなく四邊を見廻した。長押には何と讀むのだかわからない大きな字を書いた額がかゝつてゐて、その下に押入れがあり、右に汚いぐしやぐしやした庭が小さく見えてゐた。かれは立つて押入を明けて見た。箱見たいなものと、汚い蒲團と、油だらけになつた船底枕とが入つてゐた。

ふと、酒を一本飮むかなとかれは思つた。昨夜の惡酒がいくらかまだ殘つてゐて、頭がぎん〳〵痛む。いやに壓しつけるやうな氣分である。迎酒をすれば屹度好いにきまつてゐる。かれは腹の中で、財布に殘つてゐる金を考へた。まだ一圓と少し殘つてゐる筈である。『一本、飮んでやれ、構ふもんか。』かうかれは思つた。しかしすぐ手を鳴らす氣にもなれなかつた。

女が玉子燒か何か下膳を運んで來たのは、稍暫く立つてからであつた。それでもかれはまだ酒を飮まうか、飮むまいかと思つて考へてゐた。

『隊におくれちや困つたらうね。』
『うん……困つた。』
『これからまた捜すのかえ。』
『もう少し捜して、わからなけれや仕方がなえから、歸るんだが――』
かう言つたが、『早く持つて來てお吳れね。何にもなくつても好いから……』
『かしこまりました。お酒は?』
『酒なんかいらない。』
『さう?』
女はまだ其處を去らずに、餉臺に寄りかゝるやうにして、色の白い肉附の好い笑顏を此方に見せてゐた。
昨夜の女のことがかれの頭に絡み附くやうに見えた。その女の肉附の好い肌がそこにゐる女と一緒になつてかれを刺戟した。
『忙しいだらう?』
『さう忙しくもねえがね――』笑つてまだ去らずにゐる。
『面白いことがあるかね。』

『ぢや、この村は通過しなかつたんだな。何處に行つちやつたか。』かう言つて、わざとかれは考へるやうな風をして、『ぢや、向うへ行つたと見えるな。』

暫くして『まアお上んなさい。』かう主婦は勸めた。

『面倒だから、此處で好いや。』

『まア、それでも……』

『ぢや上るかな。』

かう言つて、靴をぬいで、かれは上へと上りかけた。ほつてりした方の女がかれの先に立つた。

かれには入つて來た時から、この飲食店の何ういふ種類の飲食店であるかといふことがすぐ飲み込めた。厨の方にずらりと並んでゐる德利、膳、椀、小皿、その下にまだ片附けずにある膳と椀と德利とは、昨夜更けてからのある男の騷ぎと歡樂と耽溺との名殘を語つてゐた。かれは自分の昨夜やつたことなどを繰返した。

かれの導かれたのは、すぐとつつきの六疊の一間であつた。中央に燒こげだらけの餉臺が置いてあつて、疊も酒や汁や燒穴で汚なくよごれてゐた。

安物の火入の緣のかけてゐる烟草盆に一杯になるやうな大きなオキを入れて、軈て女は持つて來た。

女は莞爾と笑ひながら、

かう主婦は言つた。

それには返事はせずに、腰かけたまゝ、かれは火をつけた煙草をスパスパと旨さうに吸つた。淺黑い底には若い氣分のある昂奮した顔が軍帽の下からそれと覗かれた。厨の方にゐる女はまた此方の方を見た。

『まア、お上んなさい。』

主婦は又勸めた。

かれは煙草を吸ひながら、辯護するやうに、『昨夜、演習で後れちやつてね、夜ひる歩いて、すつかり腹が減つちやつた。』

『それは何うも……』

『何處に行つちやつたか。これから隊を搜さなくつちやならない。』

『それは大變ですね。』

『此村は、隊は昨夜通らなかつたかな。』

主婦は女達の方を向いて、『兵隊さん？……通らないやうだつたね、お前。』

『え、通らないやうでしたよ。』

厨の方の女が答へた。

服、上衣を脱いでせつせと俎板で大きな鮭を切つてゐる兵士……。

人家が略々盡きて向うに野と畠と廣い街道とが見え出したと思つた時、かれはふと右側に飮食店らしい家が一軒あるのを發見した。果して古奈屋と言ふ字が入口の障子に書いてあつた。

いきなり入つて行つたかれは、

『朝飯を食はせて呉れないかな。』

其處にゐた主婦らしい中年の女の眼も、襷がけをしてゐた若いぽつてりした一目でそれとわかる酌婦の眼も、前の厨のところに眠さうにして立つてゐたこれも矢張若い女の眼も、皆な一齊に此方を見た。

『へい……』

と主婦は言つて、女達とちよつと眼を合せたが『まア、おかけなさいまし。』

これで安心したと言ふやうに、かれは其處に行つて腰をどつかと下した。かれはかなり疲れてゐた。さう大して歩いて來たと言ふわけではないが、不安が、昨夜からの不健康の行爲が、氣がねと心配と尖つた神經が、久しく忍んで來た飢がかれを全くぐつたりさせた。かれはポッケットから朝日の袋を出して、四本殘つてゐる中から一本出した。襷がけをしてゐるぽつてりした女は、そこにある火鉢をかれの方に押してやつた。

『お上んなさい、奧も空いてゐますから。』

其處でかれに應對したのは、四十五六の汚い親爺であつた。『さうさな。』かうもう一度言つて考へたが、かれと一緒に外へ出て、『もう少し行くとな、右側にな、古奈屋ッていふ家があるァ。あそこへ行つたら出來るかもしんねえ。』

『難有う。』

かれはまた歩いた。

一軒一軒、かれは右側を見い見い行つた。しかし容易にその古奈屋といふ家もなければ、飲食店らしい家も見當らなかつた。唯同じやうな不揃な高低のある家並が續いた。C村信用組合などゝいふ札のかかつてゐる家などもあつた。

ふとガランとした廣場がそれの眼の前の單調を破つた。見ると、それは村の小學校であつた。奥に二階建の大きな校舍が見えて、朝日が晴れやかにそこを照した。廣場には機械體操の鞦韆だの、遊圜木だの、木馬だのが見えた。生徒は既に大勢集つてゐた。風呂敷包を袴の上に負つてゐる女の生徒なども見えた。

校舍の具合がちよつと似てゐるので、かれはまた兵營を思ひ出した。もう奴等、朝飯を食つて了つたらうな。と思ふと、ぞろ〳〵炊事場へと當番の出て行くのが見えるやうな氣がした。炊事の下士が何か呶鳴つてゐるのが見える。つゞいて、戰地での炊事の光景が歴々と浮んで見えた。大きな釜……白い湯氣……磨いだ米を入れた方の釜をザブリと湯釜の中に入れる、……そこらに歩いてゐるカーキー色の軍

かれは入つて行つた。

『うどんか、そばかねえかね？』

其處にゐた肥つた上さんは、靴の音にちよつと驚いたやうに振向いたが、

『まだ、ねえな、朝が早いで。』

『出來ねいかな。』

『出かしや出來るが、まだ、起きたべいだでな。』

『冷めたくつても、何でも好いんだが、昨日の殘つたのもねえか？』

『何にも、はァ、ねえだよ。』

仕方がないので、かれは出て來た。成ほどまだ朝が早い。何處の飲食店でも、朝飯を早く食はせて吳れるやうな家はありさうにも思はれなかつた。かれは二三軒、同じやうにして訊いて見たが、何處でも同じやうな答を得るばかりであつた。

かれはある店で訊いた。

『何處かないかね、食はせる家が？　……昨夜、隊に後れて、夜通し步いて、すつかり腹が空つちやつたんだが。』

『さうさな。』

汽車の通過し去つた空しい長いレールをかれはぼんやりした態度で、立留つて、ぢつと眺めた。暫くしてかれはまたぽつぽつと歩き出した。

十三

人家が見え出して來た。茅葺の草の生えた屋根が、不揃な高低のある見すぼらしい屋根が、古い大きな昔は本陣でもあつたかと思はれるやうな旅館が、一年に幾度鳴るであらうと思はれるやうな半鐘臺が、ぼんやりと喪心したものゝやうに、ぶらりぶらり歩いてゐる男が……。

半ば崩れかけた荒壁の傍に、田舍によく見る外便所があつて、其處に栗の大きな樹に、白い花が一面に咲いてゐるのが見えた。土臺の曲つた、間の溝の仰向いた小さな家に、大和障子がのめるやうにはまつてゐて、半ば開いた處から、束ね髪の汚ない身裝をした女が、欠びをしながら出て來るのが見えた。家と家との間に、狭い野菜畑があつて、馬鈴薯が白く紫に花を咲かせてゐた。家の中で母親らしい聲で何か罵つてゐるのが聞えて、やがて男の兒が急いで家から走り出して來るのが見えた。

かれは急いで來たために、既に餘程前から空腹を感じてゐた。人家のあるところに行つたら、兎に角食ふ物を搜さうと思ひながらかれは歩いて來た。まだ朝飯を食ふ位の金は殘つてゐた。

ふと、うどん蕎麥と障子に書いてある家が眼に着いた。

あつた。敵の騎兵に追かけられて、林の中から池の中に半日かくれてゐた時、あいつは向うの土手の下に小さくなつてゐたつけ……。かう思ふと、考へは戰場の光景の方へとゆくりなく引寄せられて行つた。辛いには辛かつたけれど、面白いにも面白かつた。あの空中にぱッと散る敵の砲彈。……白い乃至は灰色の炸煙。……山陰に巧にかくれてある敵の砲兵陣地、ピカリと光ると思ふと、凄じい雷のやうな轟の反響……。

何だか自分の今歩いてゐるところは、戰地で、あの向うの林のこんもりとした中に敵が隱れてゐるやうな氣がする。自分はある任務を持つて此處に來てゐるやうな氣がする。――急にわれに返る。不安の重荷が依然としてかれの胸を塞いで來る。

『しかし、兎に角、此處まで來れば、もう大丈夫だ。憲兵に捉へられる虞はない。』

かう思つてまたかれは歩き始めた。

その松並木を出ようとする時、ふと遠くから音が近づいて來て、やがて長い汽車が、かれの歩いてゐるすぐ左の畠の中を通つて行つた。それは昨夜十一時に東京を出た急行車で、客車の窓には朝日がさし通つて、客がごたごたしてゐるのが半ば黑く見えてゐた。『あそこにゐる人達は皆なのんきに旅行をつづけてゐるのだ。自分のやうな重荷を持つてゐるものは一人もないのだ。』ふとかう思ふと、かれは堪らなくさびしく悲しくなつて來るのを覺えた。

考へて見ようと言ふやうな念が、かれの心の底の底に潜んでゐた。

『しかし、何を置いても先づ第一に、危險の多いこのM市から脫しなければならない。』かう思つて、かれは一生懸命に場末の家並の不揃な町を步いて來た。

で、町から來る最初の松並木の入口に來ると、かれは立留つて溜息を吐いた。

かれは軍帽を取つて、ポッケットから引出した手巾で、流れ落ちる汗を拭いて、それから胸の釦を外した。

と、兵營の生活がまた新たにかれにいろ〳〵と思出されて來た。もう七時半だ。起床喇叭はとうに鳴つた。もうそろ〳〵人員點呼が始まつてゐる頃だ。あの班長は相變らず鬚を捻りながら號令を立てゝゐるだらう。殊によるとあの將校は難かしい顏をして、營庭で兵士達に號令をかけてゐるであらう。Nは、あいつは平生から仲がわるかつたから、別に何とも思つてゐないだらうけれど、戰友のKは流石にこの俺の身を心配してゐて吳れるだらう。何うしたらうと思つて吳れるだらう。Kには、昨日、町を彷徨いてゐる時に、あのB通りでちよつと出會つた。Kはいくらか酒に醉つてゐて冗談口などを利いた。そこで逢つたこの俺が――その時まではこんなことがあらうとは夢にも思つてゐなかつた俺が、不意に脫營兵の汚名を帶びやうとは、Kも不思議にも思つてゐるだらうし、驚いてもゐるだらう。あの男とは戰爭に一緒に行つて、恐しい塹壕の中の生活の味も倶に嘗めれば、危險な斥候にも倶に出かけて行つたことが

『あの酒がわるかつた。あの酒場の酒がわるかつた。あの時、あの酒を飲まずに、行きにくくとも親類の家に行くか、さうでなければ、中隊長の宅にでも行つて、自分の過失をあやまればよかつた。あの酒がわるかつた。』かう後悔して見てももう追附かなかつた。

それに、一方には、『もうかうなつた上は仕方がない。なるやうにしかならない。ぐづぐづしてゐて、恥の上塗をするやうになつては、それこそ猶ほ愚だ。』かういふ腹があつた。或はかれは、財布に金の餘裕があつたなら、否金があつてもM市では出來ないが、もし出來たなら、逸早くこの軍帽と軍服と銃劍とを捨てゝ、普通の和服に着替へたいと思つた。かれは蒼白い昂奮した顏をして、巡査の交番の前を通るのをすら恐れて、廻り道をして、辛うじて此方の街道の方へ出て來たのであつた。

この街道はM市からずつと長く東京の方にもつゞいてゐるし、又反對に日本の北の涯までも行つてゐるやうな古い大きな重要な交通路であるが、それに沿つて汽車のレールもつゞき、電信の柱も並んでゐた。それはかれの故鄕の方へ行く街道とは全く方角を異にしてゐた。

しかし、かれが何うしてこの街道を選んだか。此方の方に向つて歩いて來たか。知己も緣故も何もない此方面に向つて何故その最初の歩を進めて來たか。それにもかれが廣い自由な世間に向つてその身をかくさうとする意識が動いてゐたことは確かであるが、それ以外に、かれは豫て漫然聞いてゐた大きな稻荷社のある、賑かな馬市の立つそのT町に行つて見て、猶ほそこで、もう一度深く自分の運命について

がやいて躍つた。山裾のところ〴〵に散在してゐる村落からは、朝炊の煙が半ば白く半ば灰色に眞直に立昇つてゐた。

かれは昨夜からのことを細かに頭に浮べながら歩いた。かれはまだ暗い中に、二圓なにがしの勘定をして、逸早くそこから遁れるやうにして出て來たことを思つた。そしてそこから裏道をずつと大通りに出て此方へとやつて來たことを思つた。しかしかれの持つた重荷は、依然として元のまゝであつた。一毫も減じなかつた。兎に角、さういふ危機を遁れたといふ喜悦はあつても、それはほんの一些事で、かれは其の身の處置に就いては猶ほ深く思ひ惱まなければならなかつた。大通り近くに來た時には、もう夜が明け離れてゐたが、かれは何んなにその軍服姿を町の人々に見られるのを恐れたであらう。少し知識のあるものは朝早く兵士の歩いてゐるのを見て怪しまぬものはあるまい。もし、憲兵にでも逢つたら、何と言はう。何とごまかして遁れよう。昨日脫營兵のあつたことは、最早市の憲兵隊には知れてゐよう。或は旣にその搜索の網を張つてゐるかも知れない。路の角で、ひよつくり憲兵に邂逅したが最後、もう萬事了すである。その曉には何も彼も知れる。爲替の一件ばかりではない、昨夜やつたことも知れる。かれはもう川の畔で思つたやうな煮え切らない決心ではゐられないことを痛切に思つた。かれの運命は一夜の中に益々その轍の中に深く入つて行つてゐるのをかれは思つた。もう、何うしても逃遁するより他に仕方がない。今までの自分の生活も知らず、存在も知らなかつたところに行くより他仕方がない。

『今、小便に起きたんだよ。時計が落ちてゐたから……。』

『さう。』女は眠さうにして、『何時、一體？』

かれは時計を見て、

『まだ、三時だよ。』

『それぢやまだ早いわ。』

『でも、今朝は早く歸らなけれやならないんだから。親が大病だつて言ふんだから。』

『でも、まだ早いわ。』

で、再びかれは床に入つた。靜かな話聲が長く〳〵續いた。

十二

あくる朝の七時頃には、軍服を着たかれの姿が、M市からT町の方へ行く大きな街道の松並木のところに動いて行つてゐた。昨夜降つた雨は、からりとあがつて、路傍の草や、木や、小砂利や、さういふものは洗つたやうに綺麗になつて見えてゐたけれども、空にはさうした面影はもう少しも殘つてゐなかつた。碧い濃やかな前の山からは、白い湧くやうな雲がもく〳〵と渦卷きあがつた。

朝日は既に昇つて、その燦爛とした光線は廣い野から遠い山へとさし渡つてゐた。露は皆な美しくか

たが、もう一度出て來て、今度は錢箱の中をかき廻すやうにした。錢の音がした。

その手はすぐ引込んで了つた。

それでもう思ひあきらめたらしかつた。今度は障子が靜かにまた少しづゝ閉められて行つた。そしてそれがまた元のやうに閉つた。

今まで微かに障子に映つてゐた薄い影は、いつかそこから除かれて行つた。人の靜かに歩くやうな氣勢と、をり〳〵ミシ〳〵いふ音、それもいつか元の夜の寂寥に返つて了つた。

ふと夢に魘されたやうに、上さんは微かなうめき聲を立てゝ、寢反りを打つた。今度は白い顏が見えるやうになつた。

此方では、女が眼を覺した。或は無意識に男が靜かに障子を明けて入つて來るのが耳に入つてそれで眼を覺したのかも知れなかつた。女は男が壁にかけてある上衣のところに立つて、後姿を見せて、何かごそ〳〵やつてゐるのが眼に入つた。

女は起上つた。

『歸るの、もう?』

『いや。』

『だツて……』

い足音がして、その白い肌の大きな乳の持主である女が此方にやつて來る氣勢がした。

五燭につけかへた電燈には、薄く蔽ひがかけてあるので、室の中は、さうはつきりとは見えなかつたが、それでも上さんの向うむきになつてゐる髮と、女の兒の此方を向いてすやすや寢てゐる白い顏とがぼんやりと見えた。

錢箱も、用簞笥も、机も、長火鉢も、さつき見た時と同じであつた。上さんのぬいだ着物の赤い裏地が、淡い夜着の上にかけてあるのが見えた。

十一

外の廊下のところに立つてゐるかれの影は、薄く障子に映つてゐた。

靜かに、靜かに、机のあるところの隅の障子が明いた。僅か一寸ほど。暫くしてそれが二寸ほどになつたと思ふと、その下の下から、殆ど疊に近い位のところから、太い手が靜かに動いて來て、それが錢箱の緣にかゝつたかと思ふと、その錢箱はすうとそつちへと音もせずに引寄せられて行つた。上さんは大きな金は用簞笥に藏つたが、あくる朝早く歸ると言ふので、二階の客の勘定した四圓なにがしの紙幣は、小錢と一緒に、鍵もかけずにその中に投り込んで置いた。

大きな手には、やがて、その四枚の紙幣が一枚一枚づゝ握られた。で、一度、その手は引込んで了つ

て、かれは靜かに障子をあけて廊下に出た。

庭に松があつて、石があつて、その向うに塀があるのが夜目にもそれが明かに見えた。彼は種々な計畫を胸に描きながら、烈しく醉つてゐるのにも拘らず、足元正しく靜かに廊下を傳つて厠の方へと行つた。

厠の中では、出ない小便をしぼりながら、かなり長い間種々なことを考へながら立つてゐた。しかしそれも際限がないので、そこから出て來て、そこにある手水鉢で手を洗はうとすると、ふとある光景が鋭いかれの眼に歴々と映つた。

折曲つた廊下の向うは、丁度上さんのゐる帳場のあるところに當つてゐた。そこには電燈が明るくついてゐるので、暗い此方からは、その一間のさまがはつきりと手に取るやうに見えた。女の兒の寢てゐる傍に、机があつて、その此方に用箪笥が置いてあるが、上さんが此方向きになつて坐つて、頻りに錢勘定をしてゐた。そこに錢箱があつた。かれは暫く立つてそれを見てゐた。上さんが立つて用箪笥を明けるのをも見てゐた。ある的確とした計畫がその時かれの胸に浮んだ。

戻つて行く時は、わざと音高く、足元危く見せかけて、その上さんの居間の傍を通つて行つた。

『お下ですか。』

などゝ上さんは聲をかけた。

今度はいくらかその計畫のために、心が落着いて、かれは床の上に身を橫たへた。暫くすると、女の輕

『でも、二番煎じは恐れるからな。』

『煎じ直しは好いもんよ、ねえおつるさん。』留といふ女もうかなりに醉つてゐるのをかれは見た。五六杯さしたりさゝれたりする頃には、かれの眼の前には、黄い塵埃が舞つてゐるやうな氣がして、頭ががんとした。『かうして、酒を飮んで、騷いでゐる中だ……。騷ぐ中だけでも面白く騷がなければつまらない。』こんなことを考へたかれは、又盃を自分の口に當てた。

少し經つた後には、其一間からは陽氣な唄やら、きやッきやッと騷ぐ聲やら、女の男に押される氣勢やらが洩れてきこえた。三味線も何もなしに、手拍子か何かで、續けざまに、乃至は自暴に男は淫らな卑しい唄をうたつた。

『さうだんべいよ。そんなに醉つてゐちや歸れめいよ。泊めてやるべいよ。』こんな大口を聞きながら、やがて女の出て行く氣勢がした。浴衣に着替へて寢るやうに支度が出來てから、女は中々やつて來なかつた。かれは立つたりゐたりした。床のなかに入つて寢て見たが、何うも寢られない。頭がガンガンする。そして、隙を覗つては、その不安と絕望と焦燥とが頭を擡げて來る。……かうしてはゐられないやうな氣がする。……それに、計畫を實行するには、あたりをもつとよく見て置かなければならないやうな氣がする。……惡酒の刺戟で頭が重いと共に胸がむかつきさうになる。二階の一間に確かに行つたらしい女が氣になる。寢たり起きたり、わざ〳〵疊の上に來て坐つて見たりしたが、急に厠に行くやう風をし

した。

『何か言つたかえ？』

『何にも……』

『さうかえ……あゝ夢を見た――。』かう言つて、重苦しさうな不愉快な顔をして、盃を取つて女の酌を受けた。

其處に、女の廊下を歩いて來る輕い足音がした。障子が明いた。

『お待兼だよ、お留ちやん、お奢りよ。』

『ばア。』

と言つて、その留といふ女はそこに顔を出して、かれの傍に寄添ふやうにして坐つた。色の白い肉附の好い顔、丸々と肥つた白い腕、二つの乳の盛上るやうに高くなつた胸、かれは急に元氣の全身に漲り渡つて來るのを感じた。

『あそこに行つてゐたんだらう？』

かれは頷で二階をしやくつて見せた。

『何うせ、さうさ、きまつてゐらね。』かう言つて女は盃を男に渡して、『甚介なんか起すもんぢやないよ、男は。』

『うん……』

『枕を持つて來ませうか。』

『好いよ。』

と言つたが、またすぐ起きかへつて、

『來るのかえ？』

『今、すぐ來るつたら、貴方、さうでせうよ、お待兼ねでせうよ。久し振りですからね。』ちよつと餉臺にかれと對して坐つて見たが、『でも、お酒を持つて來るのね？　それから、一品、二品……』

點頭いて見せると、

『ぢや、すぐ寄こすからね、待つてゐらつしやい。』

かう言つて女は出て行つた。

と、又かれはすぐぐつたりと横に倒れて、前と同じやうに肱を顏に當てた。思はず溜息が出た。

ふと何も彼も忘れたといふやうに、乃至は軀も心も疲れ切つて了つたといふやうに、急に睡氣がかれに催して來た。女が再び酒と料理とを運んで來た時には、かれは重苦しい鼾を立てゝ、眠つてゐた。

『また、寢ちやつたのね。酒が來てよ、もし貴方。』

かう女は呼起した。恐ろしい夢から覺めたやうに、かれはまたすつくと起上つた。そして四邊を見廻

『親が大病なのに、來たの？　感心だわねえ。留ちやん、喜ぶわ、屹度。』

其處に、奥の二階の階梯の下の帳場にゐた四十先の氣の利いた上さんが出て來て、『貴方本當にお久しいのね。』『よく入らつしやいましたね。』『よく路を忘れませんでしたね。』とか言つて、二人して、其のまゝかれを奥の一間の方へと伴れて行つた。そこに行く前に、かれは上さんのゐる帳場のあるゴタゴタした六疊の電氣の明るい中を通つて行つた。そこには上さんの子らしい女の兒が、心持よさゝうに、半ば軀を蒲團の外に出してすやすや寢てゐた。

奥の一間へ入らうとするところで、かれは二階の明るい灯と、半ば明けられた障子とをちらと見上げた。そこには客がゐるらしかつた。

六疊の眞中にある餉臺の前にどつかと坐つたかれは、一番先に、時計を出して見て、

『なんだ、十一時だ。もう……』

と言つた。かれの頭には、消燈時刻はとうに過ぎ去つて、皆な暗い一間の中に並んで寢てゐる光景がありありと浮んで見えた。硝子窓を透して夜の空が白く見えてゐるさまなどもそれと見えた。

かれは黯然として、やがて傍に身を倒して肱を曲げて頭に當てた。さつき取つた軍帽だの劍だのがその傍に散らばつてゐた。

『あら、ま、もう寢ころんぢやつたの、イヤだねえ。醉つてるの、貴方？』

くやうにした。其處にはかねて知つてゐる色の白い丸ぽちやの女はゐなかつたが、矢張其時も出て來てちやほやした十八九の脊の低い眉のくしやくした女が、ふつと色の白い顏を明るい電燈の光の中にあげて、此方を見るやうにした。女はすぐ立つて來た。

『あら、まァ貴方！』いきなり入口の半ば明いた障子の蔭に來てその女は言つた。

かれは手で押へるやうにした。

『ゐるわよ。』

『今、ゐるのかえ？』

『今、ちよつと餘所に行つてゐるけども、ぢき來るわよ。あの人、この頃、よそに下宿してゐるんだから……。』

『本當に來るかえ？』

『來るッたら、お上んなさいよ。』かう言つて軍服の袖口を引張つたが、今度は短かい劍鞘を攫んで、店の中に無理に押入れながら、『一體、何うしたのさ、こんなに遲く……。兵隊さんなんか、今時分出てるものはないぢやないか。』

『外泊を貰つて來たんだい。明日故鄕に行くんだい。親が大病なんだい。』

靴をぬぎながら、こんなことを辯解らしく言ふと、女は、

かう思つて、かれは歩調を早くした。

その一區劃――あやしい女の大勢巣を作つてゐるその一區劃は、此處からさして遠くなかつた。表向は酒場か、でなければ小さな看板許りの小料理屋、その奥に二間か三間かの小さな部屋があつて、警察のさう喧しくない此頃では、場合に由つては、滿更泊めないこともないといふこともかれは知つてゐた。苦悶、懊惱、不安、さういふものよりより以上に强い魅力を持つたものは、女と酒とより他に何物もなかつた。

やがてその一區劃に入り込んだかれは、今までとは違つて、わざと歩調を緩くして靜かに歩いた。夜が更けたので、あたりはもう靜かで、滅多に人の通つて行くものもなかつた。かれは長い間、あちこちを彷徨ひ歩いたことを考へた。その時雨がぽつゝりと一つ顔に當つた。

『ヤ、雨かな……』

かう思つてかれは上を仰いで見た。空は眞暗で、星の影は一つも見えず、蒸暑い鬱陶しい空氣が、壓すやうにあたりに低く垂れてゐた。此頃の夜によく見る靄もいくらかはあるらしく、向うにある小料理屋の灯もぼんやりと光を放たずにかゞやいてゐた。

かれは醉つてゐた。いくらか體がよろ〳〵する位であつた。で、やがて二三度來たことのあるその店の灯の前に來たが、その入口の傍の低い欞子窓の一寸ほど明いた所へと顔を寄せて、そして店の中を覗

かれは猶暫く考へてゐたが、その間にもその未來の問題が少しく首を出しかけてゐたが、それを押除けるやうに頭を振つて『姐さん、もう一杯！』かうかれは叫んだ。

錢を拂つて其處を出たが、忽ち利目を現はした酒は、今迄とは違つて、かれの前に廣い節制のないしかし激昂した自由の世界を現出した。『なァに、構ふもんか。なるやうにしかならんのだ。』かう口に出して言つて、かれはまた頭を振つた。

かれは戰地のことなどを頭に繰返しながら歩いた。頭上で砲彈の炸裂する音を聞きながら、半日も進出が出來ないで、塹壕の中にうづくまつてゐた光景などが歷々と映つて見えた。『なァに、戰爭に行つた時の心持を考へると、何でも出來ないことはない。』かう思つて氣負つて凱旋して來た當時のことなどが不思議にもかれの前に現はれた。『何も小さくなつてゐることはない。これでも俺は金鵄勳章に値する功を立てた兵士だ。立派な帝國軍人の一人だ。』

急に、かれの頭に上つて來たのは、そのM市の南の方面にあるある一區劃のことであつた。と、女の顏――久しく逢はなかつた女の顏が、かれの記憶の底からほつかりと浮んで來た。色の白い丸ぽちやの豐な肉の持主である女の顏が……。

『なァに、構ふもんか、金なんか何うにでもなる。そんなことは其時になつてからで好い。もう一生の中に二度と逢はれるか逢はれないか知れない女だ。さうだ、さうしよう。思ひ立つたら勇敢にやらう。』

それは兵士としての今迄の自分等には何等の權力がなく、醉拂つた時なぞ、寧ろその前を威張るやうにして、歌など唄つて通つたものが、今ではその巡査の立つてゐる交番の灯さへ恐れられて、成たけそれを避けるやうにしてかれは歩いて來た。ふと、ある酒場らしい店の前に來た時、『なァに、構ふことはない、酒でも一杯飮んでやれ。』かう思つて、かれはいきなりそこに飛込んだ。かれはさつき女の家で財布の中からチャラチャラ金を出してわたしした時に、まだあとに五六十錢殘つてゐるのを知つてゐた。で、かれが卓の前の椅子に腰をかけると、色の蒼白い白いエプロンをかけた、何方から見ても心を惹くやうなところのない、十八九の給仕女が酒かビールかといふことを訊いた後で、コップに波々と正宗をついで持つて來た。

それをかれは顏を仰向け加減にして一氣に見事に呷つた。コップの底にさした電燈の光は、その酒が見る〳〵波を打つてかれの咽喉に旨さうに入つて行くのを照した。蒼白い顏の女は默つてその傍に立つて見てゐた。

『もう一杯。』

かう言つてかれはコップを出した。さも旨かつたと言ふやうに、かれはあと口を甜め廻しながら……。續いて女が持つて來た酒をも、かれは同じやうにして飮み干した。かれは烈しいアルコール性の刺戟が忽ち全身に熱く漲つて來るのを感じた。

つて渦を巻いたその中に、鐵槌のやうにはつきりと横たはつてゐるのは、爲替を竊取したあとの手紙が箱の底に殘つてゐるといふことゝ、折角取戻した名譽をこの一事ですつかり蹂躪して了つたといふことと、永久に脫營するとしても何うしてそれを巧に完全に實行して好いかといふことであつた。一度は强く永久の逃遁を肯定し、それより他に途はないと決心して、そして川端の闇の中から身を動かしたのであつたが、それとて確乎とした動搖しないものではなく、一二間步くと、そんなことはとても出來ないと思ふと同時に、かうして步いてゐる中にも憲兵なり巡察將校なりに發見されて、意氣地なく捉へられて、兵營に引張つて行かれて、衆人環視の中で、罵られ、吸鳴なれ、撲られ、果てはすつかり軍人としての名譽を毀損されて營倉に投り込まれてゐる自分の姿を見た。折角戰地で立てた軍功、故鄉への唯一の土產にしようとしてゐた功勞、それももう滅茶々々になつてゐる自分を見た。さうかと思ふと、二三日かうして步いてゐる中に、何處からか自分を救つて呉れるものがあつて、思つたより輕い罪で再び兵營に戻つて行くやうな徑路などをもかれは頭に描いた。

少くともかれは此處まで來る間に、賑やかな通りを步いて來た。人の大勢通る晴れがましい灯の中に自分の姿の際立つて見えるのを氣にして、成たけ暗い處を步いて來た。それから大きな門のある暗い板塀のところに身を寄せるやうにして立つて、長い間いくら考へても考へ切れない身の始末をかれは考へて來た。寺の前のやうなところも通つた。M町通らしい賑やかなところをも通つて來た。巡査の交番の灯、

『たうとう郵便局の息子さんも、行くげな。兵隊さんになつて……』町の藝者達もこんな噂をした。しかししんからかれの入營を悲しんで、表向では出來ないが、人知れずこつそりなりと見送りたいといふやうな女は一人もなかつた。それはかれは梓以來、女に對して愛撫したり同情したりやさしい心づかひをしたりするやうなことはもうなかつたから。

で其日は區長や、病院長や、小學校の校長や、その他の有志にぞろぞろ乘合馬車の立場まで送られて、萬歲を三唱されて、M市へと行つた。妻はそれでも舅と自分の父親と其他の親類の人達と一緒にM市まで送つて行つて、其夜は大きな旅館に一夜寢て、あくる朝早く區長に送られてかれは兵營の門を入つた。

十

氣が附くと、かれはM市の南の方面のあやしい女などの家每にゐる狹い汚い通りを步いてゐた。もう夜はかなりに更けたらしく、往來ももう人影が稀に、灯の影のみ徒らに瞬いて、客のない酒屋の店では女が欠びをしてゐるのが見えた。

かれは川の畔を去つてから、市中を何う步いたか、自分にもよくわからなかつた。頭は種々なことで一杯になつて、終には何が何だかわからなくなつた。故鄕のことやら、一年行つてゐた戰場のことやら、幼い記憶やら、兵營の中の友達やら、凄じい砲彈の炸烈やら、妻のことやら、さういふものが一緒にな

かれとかれの妻とに就いては、其後種々な相談がかれら兩家族の間に持上つたらしかつた。初めは除隊になつて歸つて來るまで家に置いて、嫁としてとめて行くといふ話であつたが、入營が近づいて來た頃には、矢張、それまでは里に歸して置く方が好からうといふことになつた。妻の籍もまた公には此方に入つてゐなかつた。

いよ〳〵入營する五六日前から、それでも送別の宴があちこちで開かれた。兎にも角にも、かれに取つては、今までの生活の一破壞であると共に一革新一大變化であらねばならなかつた。執念深く纏り着きからみ着いたこの山裾の町の空氣、溫泉宿の匂ひ、明るい賑やかな灯のかがやき、乘合馬車の喇叭の音、夕日にかゞやく色硝子の窓、軒を並べてゐる小料理屋の酌婦の白い顏、さういふものは、かれに取つて大抵は苦悶と懊惱と焦燥を與へたものではあるけれども、それでも猶ほ此處を離れて、廣い別の社會に入つて行くといふことは、かれには名殘惜しく感じられた。それに、新聞の記事だから、まだよくわからないけれども、殊によると、近くに外國との戰爭があるかも知れないといふことが、新たに入營して行く人々と、その人々の家庭とを不安にした。

二三日前から、町の入營者の家の前には、例の『祝入營』とか『送何兵某君』とかいふ旗が澤山に立てられて、黄い白い吹流しが晴れた冬の碧い空に捺すやうに靡いて見られた。中でも要太郎の家の前には、それが澤山に澤山に立てられて、袴を着けたり、赤い顏をしたりした人々が大勢出たり入つたりした。

が出かけて行くので、母親などは、あれのこれのと言つて心配したが、かれは別にそれを罪だともわるいことをしたとも思はなかつた。夜寢る時も、運わるく田舍の女郎屋で床振りにでも出遇つた時のやうに、殘酷に妻を取扱つたことも稀ではなかつた。

しかし、兵營に入つて行くことも、かれには喜ばしいことではなかつた。體格は大きいし、病氣は二三年前に罹つた花柳病位で、間がわるければ徵兵に取られるといふことはかねて覺悟してゐたことであつたが――時にはまたかうした不愉快な故郷に辱められて壓迫されて暮してゐるよりは、いつそ兵營にでも入つて、變つた世界の空氣でも吸つて來た方が好いとも思はないこともないではなかつたが、それでも愈々籤が中つて、入營と決定した時には、愈々その運命の大鐵槌が自分の頭の上に落ちて來たやうな氣がした。町から出て三年の兵營生活をして來た者の話は、今更のやうに、かれの身を壓迫した。鬼のやうな上等兵、寒い冬の朝の雜巾掛、暑い夏の行軍、嚴重な檢査、意地のわるい軍曹、新兵の間の辛さは、それはそれは口にも話にも出來ないといふ。除隊された今だから、かうやつて、のんきに昔話でもするやうにして話すけれどなどゝ言つて、その經驗のある人達は、軍隊に於ける勤めと規律の如何に困難であるかをも話した。それから又かれはひどいところからでも出て來たやうにして、または籠の中から放たれた鳥のやうにして、除隊兵の喜んで國に歸つて行くのをも度々見たことがあつた。軍隊は彼のやうな矛盾した扞挌した性格に取つては、必らず辛くあらねばならぬやうに思はれた。

がある。そこに青々とした畑がある。そこに昔と少しも變らない物置小屋がある。矢張その時のやうに米や麥や豆が入れられてある。雀なども同じやうにその喧しい囀りを續けてゐる……。

しかし妻のお雪は、そのやさしい心の持主ではなかつた。また男に縋つて來るやうな女でもなかつた。顏だけは、それでも滿足で、衣服でも着替へさせて、おつくりでもさせて、しやんとして伴れて歩けば、田舍の息子の妻としては、先づ〳〵十人並以上に見られるけれども、硬ばつたその心と、形式づけられたその態度はかれにまだ鍛錬の施してない線の單純な拙い彫刻を思ひ起させた。人の心の曲折とか、苦悶を通過して來た心の變遷とか、さういふものには少しも觸れる處のない女をかれは發見した。

女の里の父親や母親もかれに好い印象を與へなかつた。『道樂もまァ好い加減に切り上げて、ちつとはこれから精を出すだ。』『こんなことを言はれると、假令自分の最愛の娘だとは言へ、あゝいふ娘の力で、價値で、この辛いさびしい悲しい自分の心が慰められ暖められ滿足させられると思ふ愚な妻の親達を冷笑せずには居られなかつた。その父親の頭に出來てゐる瘤も醜ければ、母親の田舍臭い言葉も不愉快であつた。金と先祖の田地とを後生大事に守つて、眞黑になつて働いてゐるといふやうな生活もかれには物足りなかつた。

であるから、籤が當つて、いよ〳〵入營するといふ段になつても、かれは、妻に就いては何等の顧慮をも責任をも持つてゐなかつた。否、それ以前にも、妻を餘所にして、依然として茶屋酒を飮みにかれ

かれは其時三人の女の寫眞を母親から示された。

其の三人の一人が、束髪に結つた丸顔の脊の高い女が、それでもM市へ行つて一年女學校へ通つたといふ女が、見合をした時にはイャにきまりがわるさうに低頭いてゐた女が、悲しい辛いことを言はれるとすぐ泣いたり喚いたりするやうな女が、床に入つても完全に男に觸れることも出來ないやうな女が、髪の結ひ方や衣服の着方も滿足に知らないやうな女が、慌たゞしく不用意に彼の妻といふ名目の下に置かれたといふことは、かれに取つては、體にも心にも別に深い感動をも興味をも起さなかつた。一夜寢たあくる朝は、かれは床の中で、かれの關係した大勢の女とその女とを比べて退屈さうに欠びなどをしてゐた。

その女はお雪と言つた。それが不思議にも、突然にも、かれに曾てかれの關係した小婢を思ひ起させた。柔しかつたその心、專念に男の方に縋りついたおどおどした心、可憐な眼に涙を一杯溜めて泣いて寄つて來るやうな心、それが思ひもかけずかれの心に蘇つて來た。『お雪、お雪。』かう言つて母親の呼ぶ聲を聞くと、男の薄情に、男の冷淡な態度に眼を泣腫らして、しほ〳〵とその母に伴れられて行つたあはれな姿が思ひ出された。

何うかすると、その母親に呼ばれてゐるのは、あのお雪で、裏の小屋で今日も嫥曳をする約束があつた筈だといふ風にかれには空想された。田舍では、時は更にあたりの狀態を變へなかつた。そこに柿の木

『それにや、まア、兄の方からきめてかゝらなければいけねえんだが、……何うもあれは又あれで、學問ばかしで、女なんかには眼も呉れねいんで困る。この冬も、その話をしたが、今、祝儀をしねえでも、お前の好きな時まで待つから、約束だけでもして置けッて言つたんだが、それもイヤだッて言ふだでな。何うも困るが、仕方がねえ。順序ではねえが、要の奴から先に嬶どんをさがすかな。これで、來年徴兵にでも取られて餘所へ出るやうになつて、それでも了簡が定まらねえやうぢや、それこそ心配だからな。嬶どんでも持たせて、行々は分家でもさせるやうにしてやつたら、いくら何でもちつとは了簡も出べいからな。』こんなことを父母は言つて、そして彼方此方とかれの妻になるべき女を搜し始めた。

その相手はいくらもあつた。息子は評判がわるくても、町では昔からの家柄ではあるし、放蕩だと言つても、それは若い中には誰もあることだ。さういふことは婿には勘定に入れたッて際限がない。かういふ普遍的な、妥協的な低級道德の世間では、障礙になるにはなつても、さう大して重きを置いては居られなかつた。中には、『却つて、さういふ世間のことをよく知つてるものゝ方が結局好いもんだ。人情といふことがよくわかるから。』などゝ言つた。

かれがその相談を父母からかけられた時には、かれは何うでも好いといふやうな氣がしてゐた。さうかと言つて、全然興味を惹かないといふ譯でもなかつた。大勢の女の中の一人にその女があり、その女に特別に妻といふ名の附くといふことが不思議でもありめづらしくもあるといふやうな氣でかれにゐた。

九

兵營生活に入る前に、かれは一度妻帶した。

かれのやうに荒んだ破壞された生活にも、進んで妻になつて來るやうなものがあるのであつた。しかしそれまでの二三年のかれの生活、それは此處に繰返す必要はない。それは再び始まつた皮肉と反抗とに滿ちた生活、自分から自分の生命を浪費するやうな生活、借金と欺騙と虛僞とに滿たされたやうな生活、段々と老いて氣が弱くなつた母親の愚痴を背景にしたやうな生活、汚辱と不名譽とに塗られたやうな生活、さう書いて置けば、それで澤山であつた。

兄は其時分、入學試驗に及第して、東京の大きな學校の方へ行つてゐた。兄の前には美しい華やかな光明の世界への路が開けてゐた。兄は醫者になるつもりでその方の學問を修めてゐた。妹は一年前に良緣があつて、近所の町の大きな商人の許に貰はれて行つた。順序としては、名目上は兎に角、實際上はかれがその家の跡をつがなければならないやうな位置に身を置いてゐた。しかし父も母も決してさういふ態度をかれに示さなかつた。『まア、仕方がねえ、あれでも子は子だから、いくらかわけてやらずばなんめい。まア、それより何より、一番先に嚊どん持たせなければやなんめい。何しうても、女がなくちやじつとしてゐられねえやうな奴だから。』などゝ父母の言ふのをかれはよく耳にした。

兄などに比較したならば、言ふにも足りないほどの小さい要求、それすらかれは信用して父母から出して貰ふことが出來なかつた。かれはそのときのことを今でもをり〳〵は思ひ起した。それは丁度、これから冬にならうとする頃で、晴れた空は毎日のやうにつゞき、山には錦繡をかけたやうに紅葉が染め、風は大きな山脈を越して凄じく吹下して來た。奧の奧の山には雪が白く指さして仰がれた。かれは達し難い心の不平を抱いて、いつも裏の細い路を歩いた。

そこからは女郎屋の赤い蒲團が、さながらかれに昔の夢でも呼び起すやうに、または一度癒つた傷のうづきを微かに感ぜさせるやうに、または自分とは無關係でそして何處かに深い關係があるやうにくつきりと明かに午後の日影の中に現はれて見えてゐた。かれはぢつとそれに見入つた。時にはまたわざとそれを見ないやうにして通つた。林に添つたところには、栗が澤山に落ちてゐて、それを拾つて歸つて來たりした。ある夜は風が凄じく吹きあれて、山の木の葉は雨のやうに散つた。

それからは寒くなるばかりであつた。やがて雪が來る。あたりは一面に深くそれに埋められる。大湯の湯氣が白く颺る。町に住む人々には、これから炬燵と酒と女との世界が來るのであつた。あの放埓と無節制と淫蕩とが來るのであつた。そして人々はその山裾の狹い溫泉の町に滿足して住むのであつた。女と酒との生活はまたやがてかれに迫つて來てゐた。

靡きわたる雲、何處か遠くでガラガラと靜かな音を立てゝ通つて行く荷車の響、長くつゞいた街道の電信柱に添つて歩いて行く旅客、さういふものに對して何を考へるともなく、ぼんやりとしてゐると、浮標が動いて針の餌が空になつてゐるのも知らず、セコンドが動いて時間が經つて行くのも知らず、自分が經て來たやうな辛い苦しい世界がこの世の中にあるのも知らず、女が男に縋つて行くのも、男が女に引張られて行くのも、何も彼も忘れて了つたかのやうに、かれには思はれた。

かれは唯ぼんやりとしてゐた。

この釣魚の道樂は二年ほど續いた。その間にはかれはかれの將來のことなどを種々に考へたりした。いつそこんな處にぐづぐづしてゐるよりか、アメリカにでも行つて了はうか。過去の何物をも知つてゐない土地に行つた方が、なにほど自分の本當のことが出來るか知れないと思つた。現に一度などはすつかりその氣になつて、南米移民の勸誘員の町にやつて來たその旅館にまで押しかけて行つて、その細かい話を聞いたり、心をそゝるやうな外國の珍奇なさまに耳を傾けたり、規則書を貰つたり、そこに行くについての費用を細かく勘定して貰つて見たりした。

尠くともその希望は二ヶ月間かれの胸に燃えてゐた。しかし、信用のないかれは、父からも母からも親類からもさうした比較的眞面目な話を眞面目に聞いて貰ふことが出來なかつた。その要求は一も二もなく到る處で否定された。ある人は頭から笑つてそれを相手にしなかつた。かれの本當な眞面目な希望、

を溜めて置く堀、溝見たいなものがあつたりした。川柳の生えてゐるところや、芦や蒲の茂つてゐるところには、鯉や鮒やはやが澤山にゐた。さういふところで、かれは草を折敷いて、竿を水に入れて、じつとしてその浮きの動いて來るのを眺めた。『おい、おい、そんなところで騷いぢやいかん。折角、魚のゐるところに來たんだ。』こんなことを言つて、伴れて來た子供等を別の堀の方へ追ひやつたりした。

何うかすると、その堀切や溝の持主の百姓などがやつて來て、苦情を言つたりすることなどもあつたが、さういふ時にも、かれは別に反抗がましい態度を見せなかつた。かれは素直に竿の糸を卷いて、さつさと子供達を伴れて向うの方へ行つた。

夕暮など苧簀を持つて、町の通りなどを歩いて行くと、知人の二三が傍に寄つて來て、『此頃は好い道樂を始めましたな。』などゝ言つて、ごちやごちやと鮒や鯉が動いてゐる中を覗いて、『大變取れた！ 大漁だ。女にかけての名人は、矢張、魚釣も上手と見える。釣ることの名人は違つたもんだ。』などゝ言つて通りすがつた。

時には一人で出かけて行くことなどもあつた。さういふ時には、かれは殊に深い靜かな空想に耽ることを樂んだ。別に學問はないし、さうした種類の文學的の本も繙いて見たことのないかれではあるが、それでも川柳の蔭にそよそよと吹く風につれて小皺をつくつて寄つて來る小波、靜かに人の心に沁入るやうにあたりに淡く薄れて行く夕日の光、碧く地平線を劃つて聳えてゐる山、ふわ〳〵と羊の毛のやうに

つて持つて來てゐた。女は男の相手、男は女の相手といふやうに、成たけさういふ風に解釋して見る方が、かれにも樂であつたし、面倒でもなかつたし、世間の受けも好いし、女に對しても却つてさういふ方が有効であるといふことをもかれは段々覺えて來た。

しかし町ではかれの評判は矢張わるかつた。それに、かれのことゝ言ふと、人が殊更に注目して見るやうにかれには思はれた。かれの一つのわるいことは、十にも二十にもなつて世間の人達に反響して行くのに反比例して、かれの善いことの一つはその半分乃至三分の一も人の眼を惹かなかつたのをかれは見た。

その時代は、しかしかれに取つては無難であつた。かれも段々肥つた立派な體格を持つやうになつた。頭を綺麗にわけて刈つて、白縮緬の大幅の帶をしめて、時計の銀ぐさりを其處に見せながら、小料理屋の店の長火鉢の前に坐つてゐたりした。

その時分、かれは一時釣魚に熱中して、竿をかついで一里二里のところによく出かけて行つた。かれはもう二十歲であつた。一緒に行く近所の子供達の眼には、もう好い加減な大人に見えた。白い浴衣、鼠がゝつた三尺帶、長く綺麗に刈つた頭、茶莕を下げて、釣竿をかついで、いつも二人三人の子供を伴れて、かれは廣々とした野の方へと出かけて行つた。

野にはところどころに用水の長い流があつたり、そこから縱横に引いた小流があつたり、わざ〳〵水

といふやうなところがあつた。かれは兄と比べられることを恐れた。それが暫くして比べられることを怒るやうになつた。つゞいて自分のふしだらを詳しく父母から聞いて知つてゐながら、一言もそれに及ばない兄を仇敵のやうに憎んだ。兄の成績の好いのを以つて弟の不評判をかくさうとする父母の態度を憎んだ。

そしてかれはある夜金を持出して家出をしたのであつた。

八

しかしかれにも暢氣な時代があつた。

何うしてあゝいふ風に暢氣になつたか自分にもわからないが、一時變つた人のやうにぼんやりして、その持つてゐる皮肉と觀察と動搖とは全く何處かに捨て去つて了つたやうに、置き忘れて來たやうに、唯ぶらぶらして遊んでゐた。

家出をして一年ほどしてつれられて歸つて來てからも、かれの女に對する興味は決して鈍りはしなかつたが、しかし其頃はもう以前のやうに張詰めた突詰めた考を持つてゐなかつた。金さへあると彼はそれからそれへと女をさがして遊んで歩いた。地の女などにもかれはよく手を出した。

かれはさういふ種類の男の持つ女に對しての氣安さとのんきさと無關心といふやうなものを段々と養

の息子について行つたか、あれほどの漲る情と熱い心とを見せた女が、自分には何の言葉も殘さずに、わづかばかりの心殘りのしるしをも見せずに、路傍の人のやうに、否、路傍の人よりももつと無關心に何うしてこゝから離れて行つたか。行かれたか。それは虛僞か、欺騙か、それとも人間にもさういふことが本當に出來るやうに造られてあるのか。そこまで行くと、かれは髮の毛を挘らずにはゐられないやうな、熱い燃えるやうな焦燥を感じた。

さうかと思ふと、それとは丸で反對に、その虛僞と欺騙とを肯定して、復讎的に自分もさうした打擊を人に與へてやらなければ止まないといふやうな氣が躍然として起つて來るのをかれは見た。かれは皮肉な顏の表情をして下唇を堅く嚙んだ。年を重ねても容易に經驗することの出來ないやうな、又は或は一生さういふ經驗に逢はずにすむものもあるやうな深い大きな經驗に逢つたかれは、既に世間に多くあるナイーブなセンチメンタルな靑年などとは丸で違つた心持を養成されるべく餘儀なくされたのであつた。

その年の暮には、冬期休暇で、兄はM市の方から歸つて來た。學校生活の秩序正しい、元氣な、活潑な、物を受入れることに素直な、同じ我儘でも純な兄と比べて、かれはいかに大人らしく、陰氣にひねくれて、デジエネレートして見えたであらう。肥つた色の淺黑い健康らしい兄とは反對に、かれの顏は蒼白く、眼は鋭い中にどんよりと不定な動搖を藏し、體は瘦せてひよろ長く、過重の重荷に堪へられない

も錢を使つた』かうした言葉をかれは父母から口癖のやうに浴びせられた。

否、父母や親類からばかりではなかつた。町では誰もその事件を知らないものはなかつた。勿論口に出して、かれの面前でそれを言ふものもなかつたけれども、かれは侮辱と好奇と冷笑との眼に到る處で出會つた。誰も彼も皆なかれを指して見て笑つた。

かれは蒼白い勞れたやうな顏をして終日家の中にゐた。しかしその事件そのものよりも一層かれに強い打擊を與へたものは、その十一月の末に、女がかれの競爭者であつた他の村の豪農の息子に引かされて、土地を去つたといふことであつた。事件が起つてゐる間にも、かれは二三度女に逢ひに行つたが、それがぱつと世間に知れてからは、もう何うすることも出來なかつた。かれは寒熱の往來するやうな心の苦痛の中に其日其日を送つた。女を呪ひ、競爭者を呪ひ、自己を呪ひ、父母を呪ひ、この世間の存在を呪ひ、金を呪つた。また曾てはかれの唯一の生命のやうに感じ、唯一の慰藉のやうに感じ、唯一の快樂の場所のやうに感じた大きな二階屋を呪ひ、色硝子の窓を呪ひ、夜每にひゞきわたる太鼓を呪ひ、障子に移るお酌の踊り姿を呪ひ、女と二人相對して喃々綿々とした居間の長火鉢を呪ひ、遠くからきこえて來る長廊下のばたばたした草履の音を呪ひ、燃えるやうな緋の長繻袢を呪ひ、白い美しいベッドの中の肌を呪つた。かれは何うして好いのかわからなかつた。かれは自分がもうわからなくなつて、自分が世間の青年と同じであるかを自分に訊ねるやうな日などもあつた。それからまた女が何うしてその豪農

てゐたりなどした。かれは小石をほうつてかれ等を驚かした。

T町が一番遠かつた。そこに行くには何うしても半日かゝつた。しかし女に逢ふためには、そんなことは何でもなかつた。かれは山に添つたり泥池に添つたりして行つた。何うかすると、歸りは途中で夜になることなどもあつた。かれは何んなに山の斜陽の上に靡き下る自分の町の明るい灯を望みながら路を急いだであらう。

しかしかうした悪事が長く知れずに殘つてゐる譯がなかつた。N町の郵便局は一番最初にそれに疑を挾んだ。かれはある日その局員の一人にあとを尾けられた。あらゆる秘密は發かれた。其町の郵便局の次男息子だといふこともわかつた。恐らく、今であつたなら、あらゆる人達の調停と心配と運動とを以てしても、かれは縲絏の恥を免るゝことが出來なかつたであらう。幸ひに、まだその時分には、地方警察にも何處かルーズなところがあつた。それに、同じ郵便局の息子と言ふことゝ、その父親が地方でもかなりに知られてゐる人であることゝ、まだ志の固まらない青年の一生をさうした一過失で葬り去つて了ふことの殘酷であるといふこと、それから父親始めその町の有力者の切なる悃願とに由つて、かれの犯した罪悪はそのまゝ公に世間に發表せられずに濟むことになつた。そのためには父親は尠からず金を使ひ、母親は神經性の顔を愈々赤くして、口癖のやうに愚痴を零した。『親不孝』『泥棒』『家名を汚す悪人』『お前のやうな子を何うして私が生んだか』『馬鹿な奴もあればあるもんだ。貴樣が騙取つた金の百層倍

たと言ふことは、かれの一生に取つて實に見遁すべからざる一大事であつた。かれは女に逢ふために――寧ろかれの實在を確實ならしめるために、遂に郵便物の中から、小爲替券だけを選んで竊取して、それを他の町へ行つて受取つて來た。

その爲替を受取る町にいつでもかれは青年に似合はぬ細心な注意を拂つてゐた。かれは決して同じ郵便局で二度も三度もつゞけてそれを受取らなかつた。かれはかれの町の附近にあるT町、S町、N町とわざ〳〵出かけて行つた。それを實行するための認印も二つ三つほど作つて、Nの局では、何ういふ名、Sの局では何といふ名、Kの局では何といふ名といふ風にきめて置いた。

其頃にはかれの眼は鋭く光を放ち、態度にも落附かぬところがあり、何となくそはそはと注意深く四邊を見廻すといふやうな癖が出來た。かれは郵便局の人達の無心に調べる爲替券の手先や目色を不安な尖つた心持で見詰めた。そして局員がその爲替券から眼を離して、現金の入つてゐる机の抽斗を明けかけるとほつとした。金を受取つて外に出た時には喜悦が胸に溢れた。

S町から一里半、N町から二里、その間を急いで自分の町の方へ歸つて來た印象は今でもはつきりとかれは眼の前に浮べることが出來た。S町から來る方には、かなりに長い坂があつた。運送車や荷車が通つた。竹藪に赤い烏瓜などがぶら下つてゐたりした。N町から來る方には、前に遠く開けた裾野を見て、山の裾をぐる〳〵廻つて行くやうになつてゐた。子供達がざるやさで網を持つて、小川で魚を掬つ

れは嫉妬といふもの丶恐ろしさに體も精神も滅されて了ふやうな氣がした。梓には有力な客が二人も三人もあつた。ことに、ある村の大盡の息子が一番深く言交してゐるといふことを知つた時には、成熟の一歩を經たにすぎないかれの體と心とはガランとした恐ろしいある空虚に陷つたやうな深い大きな動搖を感じた。虚僞、欺騙、陷穽、さういふものが執念くかれに絡み着いた。

金がなくて登樓することの出來ない夜もかれはじつとして家に落付いてゐることは出來なかつた。さういふ時には、かれは裏の山路から、(露地を入つて行つて、見附かつて赤恥をか丶されたことが一二度あつた。)草や樹に縋つて、溝のあるところへ下りて、そこからぬき足さし足して、その遊女屋の裏口へと忍び入つた。そこからは、梓の居間が栽込を通してそれとよく覗かれた。それにしても、かれは若い十七八の青年の身で、何んなに暗い何んなに疼い心を抱いて、その灯の明るい女の居間と微かな嬉しさうな話聲とに對したであらう。暗い暗い心、胸が上つたり下つたりするやうな心、體も精神もこな〳〵に打砕かれて了ふかと疑はる丶ばかりの心、さういふ深い心をかれはそこで何遍となく經驗した。

人間の持つた最も底のもの、最も深いもの、最も淫蕩なもの、さういふものに邂逅すると、十分成熟し切つた人間ですら、何等かの感化を受けずには居られないものであるが、一歩々々深く掘つて行く穴が、さながら恐ろしい鰐の口のやうに恐ろしい暗い底をひらいて見せるものだが、年の上から言つても知識の上から言つても、まだ纔に最初の階梯を上りかけたばかりの彼が、かうした境に身と心とを置い

淡であつたといふことよりも、より一層冷淡であつたかれのことを、彼方此方に行つて話した。

然しかうした矛盾した扞格した性格にも、驗てさうばかりはして居られないやうな時が到着した。其頃、彼の通つてゐる女郎に、十七になる梓といふのがゐた。容色はさう好い方ではなかつたけれど、その姿態やら表情やら言葉やらに、何處か人の魂まで深く入つて行つて魅して了ふやうな處があつた。要太郎は始めは矢張、例の單なる歡樂の對照として通つてゐたのであつたが、暫くして氣の附いた時には、自分がすつかりその陷穽の中に陷つてゐるのを發見した。日が暮れて、灯がつきさへすると、かれは家にじつと落附いてゐることが出來なかつた。しかし、親の財產より他に一物を持つてゐない彼は、次第に思ひのまゝにならなくなつてゐる自分を見た。女郎屋でも、初めの中は、現金を持つて行かなくとも遊ばせたが、それもさう〳〵は長く續かなかつた。父も母も注意して嚴重に簞笥に鍵をかけ、ちよつと持つて來た金も其處等には置かず、爲替や貯金の爲めに出して置く金も、事務が終ると一々金庫の中に藏つた。

それに此頃では、かれの道樂と不身持があたりに知れわたつてゐるので、親類や知己や友達はもうかれの借金の相手にはならなかつた。皆な笑つて、或は怒つてかれを遇した。二里ほどある山際の叔母の許に無心に行つた時にも、あべこべに散々に小言を言はれて、腹が減つてゐるのに、夕飯をも食はせずに追ひ返された。彼は女に對する苦痛と世間に對する苦痛とを二重に嘗めさせられなければならなかつた。か

その小屋――その中にはいろ〳〵な物が雜然として置かれた。

かれに取つては、潮のやうに熱く漲つて來る小婢の情がいくらか煩さいやうな氣がしてゐた。容易く手に入れられたといふことも、戀そのものに就いての安價の表現のやうに思はれてゐた。下婢なんか、何うにもなるもんだといふやうなところもないではなかつた。それにも拘らず、かれはよく女とその裏の小屋へ行つた。

その女の縋るやうにして來るやさしい心、辛い忙しい生活の中にその瞬間をのみ唯一の生命のやうにしてゐる心、虐げられた小鳩がわづかにその安息所を其處に發見して絕えずまつはつて來るやうな心、大勢の中にゐてをり〳〵心を通はせるやうにぢつと此方を見る眼、それをなつかしいともいぢらしいとも思はぬではなかつたけれど――また田舍にはめづらしいその豐かな肌を自分で所有してゐるといふことを誇りにしないではなかつたけれども、それでもかれは決してそれだけでは滿足してゐられなかつた。かれの根本の矛盾した扞格した感情は、却つてさういふ弱い柔しい美しい愛情の隙間に冷淡な鑿を打込まずには置かなかつた。

その仲が知れて小婢が暇を出されて行つた時のかれの態度は、町のある部分の人達には當分噂のたねとして語られた。『呆れた青年だ。冷めたい奴だ。』かういふ聲をかれは到る處で耳にした。誰も皆なその弄ばれた小婢の不幸な運命と涙とに同情しないものはなかつた。その小婢の母親は、要太郎の父母が冷

危險と不安と反省とを感ずる筈であるが、かれには、何故かさういふところが缺けてゐた。強い感情であつたからか、それとも根本から反省心の缺けてゐる青年であつたからか、それともまたわざと皮肉に反抗的に押して出て行つたのか。

けれどかれの遊び方は、初めは對者を一人きめて置くといふ風ではなかつた。かれには世間の青年に多く見るセンチメンタルなところがなかつた。女に同情したり憐憫の心を持つたりするやうなところがなかつた。現にその時分宅でつかつてゐた小婢と出來てゐて、それで矢張かれは馴染の女郎の許へも通つてゐた。

小婢はM市の少し手前の村から來たもので、その時かれと同じ年であつた。名をお雪と呼んでゐた。『雪や、雪や。』かう呼ぶ母親の聲が奥からかれのゐる室の方まできこえた。ちよつと丸ぽちやの肉の豐かな色の白い子で、眼附と眉のところに可愛いところがあつた。二人の關係は、何方かと言へば、男がちよつと觸つて見たのに、女の方から潮のやうに漲る熱い心を寄せて來たのであつた。二人はいつも裏の小舍の中で媾曳した。

それは滅多に人の行かないやうなところであつた。家ではいくらか百姓もしてゐるので、馬までは飼つてゐなかつたが、小作の持つて來る米や豆や麥などを藏つて置く大きな小舍が裏にあつた。かれのゐる室、ちよつと樹の茂つた庭、それから野菜物の青々とつくつてある畠、それを通り越したところにある

の波に漂つてゐる自分を發見せずにはゐられなかつた。最初伴れて行つたのは、町で若衆になつたばかりの、かれよりは年上の友達であつたが、その後は、かれは自分一人でこつそりと裏からわからないやうに入つて行つたりした。

最初の年上の女郎は、二三度行くと、かれには面白くなくなつて來たので、今度は別の女郎屋に行つて、まだ出たばかりの十七ほどの若い玉菊といふ女を聘んだ。かれはいつか酒を飮む術をも、唄をうたふことをも覺えてゐた。歡樂の興味は時の間に深くかれの成熟しかけた體と心とを完全に捕へて了つた。

その時分であつた。かれがよく金を家から持出したのは――用箪笥の底、父の傍に置いてある箱の底、人が持つて來たのをちよつと母親が手近に置いた金なぞをも平氣でかれは持出した。そして聞かれると、かれは知らぬ知らぬと言つた。糺問すれば糺問するほど、かれは頑强に知らぬ知らぬと言つた。後には何を言つても默つてゐた。

兄は其頃はもうM市へ行つて中學校へ入つてゐた。それに引替へて、かれは成績がわるいのと、さう澤山學者ばかり出來ても困ると言ふので、何處にもやられずにぐつ〳〵家で遊んでゐた。かれはいつも暗い心持でゐたが、殊に學校を出てから情事に關係するまでの間の月日を暗い暗い心持で過した。そしてその暗い心の僅かな遣り場をかれは情海に發見した。

しかし大抵の若者なら、十七八の年輩では、さういふ波に深く入り込むといふことに就いて、一種の

何うかすると、その女が綺麗におつくりをして、褄を取つて、お座敷に出かけて行くところに出會ふことなどもあつた。さういふ時には、かねて知つてゐると見えて、女は猷にじろ〳〵と要太郎の方を見た。莞爾と笑つて通りすがつて行つたりした。それが、その綺麗な若い女が、自分の姉にしても好いやうな女が、父親と關係してゐる女だとは何うしても思はれなかつた。でも何うもそれが本當らしいといふことはをり〳〵かれの眼や耳に觸れた。母親が機嫌のわるい時にいふ『小光』と言ふ名は、その藝者の名であつた。『小光なんかに騙されてゐて、本當にしやうがねえ。』こんなことを母親の言ふのを要太郎はよく耳にした。

かれは時には、不思議だ、めづらしいことだと言ふ感じを抱いて、父親が椅子に腰をかけて、助手と相向ひ合つて、のんきな顔をして、郵便事務を取扱つてゐるのをぢつと見詰めてゐることなどもあつた。何處をさがしても、さういふところはない。さういふ感じのするところはない。やゝ淺黑い顔、尖り加減の鼻、どんよりとした眼、ところどころに白髮の雜つてゐる頭、もじやもじやと緒はない髮……不思議だとかれは思つた。

しかしさういふ風に稚かつたかれも、一年二年經つた後には、さういふ方面の知識にかけて驚くべき長足の進歩をしてゐた。かれに最初に情事を敎へたのは、自分の家とは二三町隔つた大きな女郎屋にその時分ゐた、かれよりも三つ四つ年の上の女郎であつたが、その翌年には、かれは旣にかなり深い情海

越しをして、それで飯が食へるかえ？』かう勸めてついて行つた旅客を離れて來て、車夫は大きな聲で言つた。

夜の町の賑かさ！　何處の女郎屋にも客が上つて、きやつきやつと女の騷ぐ聲が手に取るやうにきこえて、三味線と鼓とが到る處で自暴に鳴つた。お酌の小さな姿の踊つてゐるのがはつきりと明るく障子に映つて見えたりした。と思ふと、やがてその騷ぎはぱつたりと靜まつて、あとはしんと靜かになる。手を叩く音などがする。何處か遠くでまだ騷いでゐる鼓や三味線の音がきこえる。

その賑やかな町の通りを、白くおつくりした顏をはつきりと闇に見せて、褄を取つて、急いでお座敷へ出かけて行く藝者などをかれはよく見かけた。

それ以前にも、彼は父親の關係した藝者と言ふのを見たことがあつた。それは何でも十四五の頃であつた。かれは不思議な氣がした。世の中の人の言ふことは當にならないといふ氣がした。彼の眼には父親はもうかなりの年輩であつた。お爺さんと言ふ程ではないが、一廉の年寄のやうに彼には思はれてゐた。それがさうした若い二十一二の女に關係するといふことは、ありやう筈がないやうに思へた。世間の人達は好い加減なことを言つてゐるのだと思つた。その藝者と言ふのは、丸顏の、色の白い、ちよつと愛嬌のある女で、さういふ女のゐる細い巷路の中に住んでゐたが、世間の評判では、何でも父親が金を出して、自前にしてやつたといふことであつた。兄は一二度其家に行つたと言つて、よく自慢してゐた。

てゐた。

情事を始めて知つたのは、かれがまだ家出をしない前であるから、確か十七位の時であつたらうと思ふ。

七

かれの故郷は、温泉があり、温泉宿があり、それに雜つて、街道に面して、宏大な女郎屋が何軒もあるので、町の空氣としては、何方かと言へば淫猥に傾いてゐた。女郎がだらしない風をして、二階の欄干に凭つて通りを見下してゐることなどは決してめづらしい事ではなかつた。それに藝者も二三十人はゐたし、處々にある小料理屋には、其處にも此處にも色の白い酌婦が大勢置いてあつた。男と女と艶めかしい風をして並んで通りを歩いてゐたり、男のあとを追ひかけて女が袖を引張つてゐたりするさまを、かれは度々見かけた。其時分はまだ汽車が出來ない時分なので、此方から向うへ大きな山脈を越えて行く旅客は皆此處を通つて、一夜を温泉に過すのを例としてゐた。草鞋がけの旅客、俥に乘つて行く洋服姿の紳士、一緒に伴れた若い細君、をり〳〵は乘合馬車が客を集めるための喇叭をけたゝましく鳴らして折れ曲つてやゝ坂になつてゐる町をガタガタ通つて行つた。大きな温泉宿のある角のところには、俥の立場があつて、元氣の好い車夫が六人も七人も寄り集つて客を待つてゐた。『馬鹿言ふなえ? 六貫で山

つ、起きつ、轉げつしてゐるのを遠くで見てゐた妹は泣きながら駈けて行つてそれを母親に知らせた。驚いて母も出て來た。父も出て來た。

それでもかれは容易に兄に嚙り附いた手を離さなかつた。兄の顏から濃い血がだらだらと流れ落ちた。

『こら！ 要、何しやがる。兄に手向ひする奴があるか。』緣側から飛んで下りて來た父と母とは、一生懸命になつて二人を引離さうとした。しかしだにのやうに執ねく食ひついたかれは容易にその手を離さなかつた。

無理に離されたかれは、今度は父と母とに向つて食つてかゝつた。眼は血走り、體は震へ、齒をくひしばつて、誰彼の見さかひもなく飛び蒐つて行つたかれは、さながら狂人か猛獸のやうであつた。父と母とに押伏せられて、自分がわるいもののやうにポカポカ頭を打たれた時には、かれは口惜しがつて身もだえして聲を擧げて泣いた。

『此子は兄ばかりか、親にまで手向ひするのか。』

かう母親は叫んだ。

オイオイ聲を擧げてかれは泣いた。この世が盡きて了つたかと思はれるやうな大きな悲哀がかれを壓した。滅多に聲を立てゝ泣いたことのないかれであるが、その時ばかりは押へても押へても、その悲哀があとからあとへと胸にこみ上げて來るので、日の當つた白壁の前に立つて、いつまでもオイオイ泣い

男さん、』と言つて兄の周圍に大勢集つて來た。

何でも夏の休暇中であつた。場所は裏の廣場で、釣竿などがあたりに散らばつてゐたといふ記憶から考へると、例の裏の川へ釣魚にでも行つた歸りかとも思はれる。

その原因は忘れたが、何でもかれがひどく兄から壓迫されてゐたことは覺えてゐる。ひどく馬鹿にされてゐたことも覺えてゐる。かれは始めはいつものやうに暗く笑つてにやにやしてゐた。何方かと言へば、押へつけられて小さくなつてゐた。

急にもう堪らなくなつたと言ふやうに、かれは兄に武者振り附いた。

『何ッ！』

かう叫んで、其處に立つてゐる兄の胸倉をいきなり攫んだ。其時は流石に兄も弟の劍幕に呑まれたと見えて、ぐつと押されて倒れさうになつた。兄はかれに比べて、脊も大きく、體も肥つてゐた。何方かと言ふと、父親似である。年も三つ違ひの十九だ。

『何しやがる？』

兄は押されながら拳骨でかれの頭を二つ三つ擲つた。しかしかれは其時はもう平生の猫を被つた狼ではなかつた。かれは獰猛な本性を露はしたものゝやうに、いきなり兄の腕に着物の上からかじりついた。

『痛い！』かう叫んだ兄は、それを放さうとして猶ほ弟の頭をポカポカ打つた。引かく、かぢり付く、打

いんぢやない……』大きな涙はぼろぼろと、積つて氷つた堆雪の上に落ちた。
鋭い明方の寒氣は廣い荒凉とした雪の高原に滿ちた。あたりにはまだ人の影は見えなかつた。早立の俥も馬車もやつて來なかつた。かれは思ふさま泣きながら歩いた。かれの前には、大きな高原を隔てゝ、高い凄じい山が眞白に雪に包まれて、によきによきと並んで立つてゐた。今、始めてその形を現はし始めたばかりの朝日は、赤い眩い血汐のやうな光をあたりに漲らせて、黒い小さな點のやうになつて歩いて行くかれの姿を照した。
餘りに泣いたので、かれは朝日を正面に見ることも出來なかつた。

六

かういふ記憶がをりをりかれに蘇つた。それはかれが十六の時であつた。その原因はそれはもうとうに忘れてゐる。何ういふことであれほどまでにいきり立つたか、又あれほどまでに抵抗する氣になつたか、それはわからない。
兄はその時M市の中學校に行つてゐた。兄はよく出來た。學校の成績も好ければ、品行も正しいといふ評判であつた。弟のわるいといふことで兄の好いといふことを一層色濃くした。兄は制服制帽で有望な少年のやうな顏をして、夏や冬の休暇には、得意さうにして歸つて來た。町の娘達も、『正男さん、正

た。自分の生れて生立つた町が山裾に黑く固まつてゐるのがそれと微かに見える。大湯の白く颺つてゐるのもそれと指さゝれる。かれは急に悲しくなつた。ひとりでかうして雪を踏んで、誰も知る人もない廣い世間に出て行くのが――故鄕にもゐられず、父母の膝下にも居られず、人に見放され、また自ら見放して、かうして知らない世間に出て行くのが、堪らなく悲しかつた。一方ではまたさういふ境遇に此身を置かれるやうにした町の人々を呪ひ、一方ではさういふ弱い心と感情とを持つた自分を鞭打ちながらも、堪らなく悲しさが込み上げて來て、オイオイ聲を擧げて泣きながら步いた。

簞笥をこぢ明けて中から金を持ち出して來た自分の行爲も悲しければ、默つて皮肉に人に打突つて行つた自分の心持も悲しかつた。『俺には、こんなにやさしい美しい弱い心持があるのだ。町の奴等の持つてゐる心よりも、もつともつと淨いやさしい素直な心持があるのだ。それが誰にもわからない。誰も知つて吳れない。生みの父母すらも知つて吳れない。知つて吳れたのは、唯お婆さんばかりだ。そのお婆さんはもう墓の下にゐるのだ。』かう思つたかれは益〻聲を立てゝオイオイ泣きながら步いた。

『俺のこの美しい心、やさしい心、故鄕を別れるについてもかうして泣いて行く心、その心を何故他人は知つて吳れないのか。何故父母は汲んでそれを養成して吳れないのか。俺がわるいのか。それを普通の人のやうに表面に出さない俺がわるいのか。いや、いや、さうぢやない、さうぢやない。父母も同胞も親類も友達も學校の先生も、俺にさういふ心持を起させないやうに、やうにと仕向けた。俺がわる

には出來ぬ。あの醜い諂諛、あの野卑な獸のやうな笑顔、あんなことは己には出來ぬ。陰では人はわるいことをしてゐる。己のやつたことなどよりも數等わるいことをしてゐる。唯、かれ等はそれを旨くやつてゐるばかりである。人に知れないやうにやつてゐるばかりである。かう思ふと、かれはいつでも他人のお先につかはれて、正面に立たせられて、それで汚名を買つてゐることを考へた。

ある時、かれは金を持ち出して、家出をしたことがあつた。それはかれが十八の冬であつた。かれはもう町の周圍と汚辱と壓迫とに堪へられなかつた。街上で逢ふ誰の顔にも、自分の悪名がはつきりと書かれてゐるやうな氣がした。面と向つて何も言はないでも、向うから來る奴が自分に向つて何を言はうとしてゐるのかはつきりとかれにはわかつた。それほどかれは神經過敏になつてゐた。さうかと言つて、家にばかり引籠つてもゐられない。その狹苦しさと窮屈さと退屈とに堪へられない。神經性らしい焦々した母親の顔も氣にかゝる。默つてのんきさうに煙草をふかしふかしふかしてゐる父親の顔も癪に觸る。友達と言ふ友達は誰も彼もかれを一種冷やかな眼で見る。かれはとてもこんな狹い處にはゐられないやうな氣がした。かれはある夜かねて知つてゐる奥の箪笥の鍵を別に拵へて置いた合鍵で明けて、金を百圓ほど持出して、そしてまだ夜の明けない頃に、こつそりと裏からぬけ出して、雪の積つてゐる上をさくさくと踏んで歩いて、そして街道の方へと出た。

一里、二里ほど行つて夜が明けた。振返ると、國境を劃つた大きな山脈の雪が美しく燿々と日に光つ

親に喰つてかゝつてゐることなどもをり〳〵はあつたけれど、いつも父親の方が下手に出て、大きな聲を立てることはなかつた。さういふ穩かな圓滿な家庭に生ひ立ちながら、何うしてかればかりが統一を失つた感情的な強情な反抗的な性質を養成したであらうか。

かれが成年期に近づいた頃には、町でのかれの評判は散々なものであつた。郵便局の次男息子、かう言つて誰も彼も背を向けた。『えらいわるが出來たもんだ。今にあれや何んな事をするかわからねえ。』かういふ町の人の定評であつた。學校は十一位まではよく出來たが、大抵三四番のところを下らない位の成績であつたが、十二三からはぐつとわるくなつて、落第も二度ほどするし、卒業する時にも、最後から二番目といふ最もわるい成績であつた。それでもかれは別に自省するといふやうな風もなかつた。脇を向いて、默つて、執念深く、皮肉な表情をしてゐた。

五

他人が何うしてかう自分にばかり辛く意地惡く當るのかわからないといふやうな氣がいつでもしてゐた。何故この自分がわるいんだらう。また自分のやることは何故さうわるく他人に見えるのだらう。他人も自分自分で勝手なことをしてゐる。自分の好きなことをしてゐる。それでゐて、何故自分が自分の好きなことをしてゐるのを他人は咎めるのだらう。お世辭を言つてゐれば好いのか知れないが、それが己

むことゝをその頃から覺えた。

老祖母の生きてゐる中にも、さういふ經驗は一度あつた。八疊の間に簞笥がある。そこには前に緣側があつて、南向きの日當りよく、冬でも障子を明けて置いて好い位に暖かであつた。かれは其處でよく遊んでゐた。ところがその簞笥には錢が仕舞つてあつたのであつた。老祖母は時々そこを明けてヂャラヂャラと音をさせながら錢の勘定をした。それを度々見てゐるので、かれはある時そこが明いてゐるちよつとの間をねらつて、錢を五錢か六錢かつかみ出した。が急に老祖母は入つて來た。かれは見られて顏を眞赤にした。しかし老祖母は別に叱りもしなかつた。『錢が欲しいけ? なア欲しけれや言へやな。いくらでもやるで、お婆さん金持だで。』などゝ笑つた。その言葉が小言を言はれた以上に身に染みたと見えて、かれは今でもそれを思ひ出した。

何うしてかれの經て來たやうな心と體の境遇に置かれたかと言ふことは、かれ自身にもわからなかつた。かれの家は物に困つてゐる家ではない。食ふものでも使ふ物でも何でもあり餘つてゐる。金錢がいれば母親でも父親でも平氣で出して呉れる。それに、家庭と言ふ上から言つても、何方かと言へば、圓滿で、團欒的で、町でも數へられる好い家庭を成してゐた。かれの十四五の時、父親が町の藝者にはまつて、酒に醉つたり金を使つたりしたことはあつたが、それも養子の身分なので、萬事がこつそりと內所で、泊つて家を明けるやうなことはつひぞなかつた。何うかすると、朝から母親が赤い神經性の顏をして父

たら又あのお婆さんが來て『坊や、可愛い坊や、』と言ふだらうと思つた。かれは今でもその老祖母のことををり〳〵思ひ浮べた。現にさつき河の畔までやつて來る時にも、かれはその老祖母の顏を眼の前に浮べた。

その老祖母の墓は、町から山路を五六町登つて行つた大きな寺の墓地の中にあつた。歷代の尾崎家の墓地の中にあつた。歷代の尾崎家の墓地の中に！　一生財產をつくることにのみ沒頭して死んで行つた老祖父の墓の隣りに……。

今時分は屹度あの山の上の栗の花が咲いてゐるだらう。その時々につれて、かれはそんなことを思つた。

しかしその老祖母の死んだ後のかれの記憶は索寞たるものであつた。幼い頃は身體が弱く、頭ばかり大きかつたので、『布袋、布袋、』と言つて、兄に酷められた。町でも有名な惡戯な兄は、父母の前では、やさしいことを言つてゐて、陰ではよくかれをひどい目に逢はせた。母に言つても、母はそんなことに取り合つてゐるやうな女ではなかつた。父は兄を愛してゐたので、『弟の癖に何だ。』と言つてすぐ反對に叱られた。

老祖母が死んでからは、かれは一人でさびしく寢なければならなかつた。飯もいつも冷飯ばかりを食はせられた。十三四歲の頃は默つてむつつりしてゐるやうな兒であつた。そして噓をつくことゝ物を盜

つたことをかれは今でもをり／＼思ひ起した。
その老祖母のゐる中は、かれは唯愛せられ、撫でられ、甘やかされて育つた。家はさう大して財産があるといふ方ではないが、それでもその老祖母のつれ合ひの祖父が一生懸命に家道に熱中したので、さう齷齪しなくつても樂に生活することが出來てゐた。郵便局の尾崎さんと言へば、縣内でも誰知らぬ者はない位であつた。父は隣村から來た養子で、從つて母親と老祖母とに權力があつて、お婆さんの前では、父は頭が上らなかつたのをかれは稚心にも覺えてゐた。かれには一人の兄と一人の妹とがあつた。兄とかれとは物心のついた時分から仲がわるかつた。それは何うしたわけかわからないが、老祖母に自分が一人可愛がられたことなども、その一つの原因を成してゐるのであらうとかれは思つた。
老祖母の死んだのは、かれの十一の時であつた。雪のふる日で、學校で授業を受けてゐると、先生がかれの傍に寄つて行つて、『内から迎へが來たから、すぐお歸り。』といふ。何事かと思つて外に出て見ると、近所の爺が學校の下駄箱のところで待つてゐた。『御隱居さき、加減がわりいで。』かう言つてかれを伴れて行つた。
歸つて行つた時には、もう老祖母は死んで了つてゐた。二三日前から、加減がわるいにはわるかつたが、さう急に死んで行かうとは家の人もかれも思はなかつた。しかしかれは死といふことをまだよく知つてゐなかつた。かれは涙もこぼさなかつた。葬式をして穴に埋めて了つてからでも、かれは幾日かし

吳れた。

何でもかれの記憶では、かれは毎朝床から起されると、すぐその老祖母に負はれたらしかつた。長く軒に垂下つた氷柱、軒下を子供の群つてすべつて遊んでゐる雪橇、はアとつく人の白い呼吸、遠くに白くぴかぴかする山の雪、寒い朝の軒の雀の囀り、手拭を下げて大湯に出かけて行く浴客のどてら姿、さういふものゝ最初の印象を、かれはすべてその老祖母の背中から得た。『そら見ろよ。チウチウがたんとゐたべ。』こんなことを言つて老祖母は背に負つたかれに指し示した。

ある日、かれは矢張その老祖母の背中の上で、今まで聞いたことのないやうな賑かな音樂の音を聞いた。かれは負はれた老祖母の肩のところから小さい首を出して、延び上つて、それを見ようとした。『今來るで、見せてやるで、おとなしくしてろや。』かう老祖母は言つて、段々近くなつて來る賑やかな囃の方へ近寄つて行つた。何でもそれは秋の午後であつた。黄ばんだ日が一面に人家の並んだ街道にさし込んで來てゐた。それは男と女と隊を組んで、旅から旅へと稼いで歩いてゐるやうな人の群で、頭に載せた番臺の上には、小さな旗が、ピラピラと靡き、三味線を彈いた女の顏には、處々斑らに白粉がついてゐた。一人の女は月琴、一人の女は三味線、男は面白い剽輕な恰好をして、丸い太鼓を打つて唄をうたつて步いた。子供達は大勢其處に集つて、錢を出して、飴とその小さな旗とを喜んで買つた。かれもその小旗が欲しかつた。老祖母がなだめても賺しても、その小旗を手にしないまでは言ふことを聞かなか

は大きな山脈を此方から向うに通つて行くやうな街道が町を横斷してゐるので、荷車だの運送車だの乘合馬車だの俥だのが絶えず音を立てゝ通つた。十月になると、山又山の奥は雪で、その月の末はもう屋根の上がいつも眞白になつた。半ば雪の解けた泥濘の中に深く喰ひ込んだ二條の車の轍の跡、向うの家の屋根を越して黄く硝子窓にさし込んで來る夕日、物干棹に並べてかけられてある衣服や足袋、深く雪の積つた朝にチャ〳〵と喧しく軒下に集る雀、さういふ時には、湯の元の大湯からは、白い湯氣がぱつと颺つて、それが遠く二里も三里も下の山の路からも指さゝれた。

通りに面した三等郵便局のペンキ塗の大きな構、それはもう今は古くなつて目に立たなくなつてゐるけれども、それの始めて出來た時は、それは立派なものであつた。眼も眩いほどであつた。『まァ、立派だな、分署よりや立派だ。』などゝ町では皆評判した。青いペンキ塗は、日に光つて、銅版畫でも見るやうであつた。それは丁度かれが七八歳の頃で、かれを此上なく愛した老祖母がまだその時分には達者で生きてゐた。父の顏ももつと若々しかつた。白髮なども生えてゐなかつた。父が通りに面した卓で事務を執つてゐる傍で、かれはよくその手にぶら下つたり膝に抱かれたりした。

三人の孫の中で一番かれを愛した老祖母の顏は、今でもその前にあるやうにはつきりと思ひ出された。良工が苦心して刻んでも、あゝは出來まいと思はれるやうな慈愛の籠つた深い複雜した顏の皺、笑ふとやさしく出る靨『よし、よし、泣くんぢやねえぞ。それ呉れべ。』などゝ言つて老祖母はよく煎餅などを

た。戰地に行つた時でも、いざと言ふと、かれは糞落附に落附いた。危難に瀕した時とか、大事に臨んだ時とか、さういふ時にはかれは、いつでもさうしたわるく落附いた冷靜な心持になつた。

かれの前には、兵營の狹苦しい窮屈な生活とは違つて、自由な、廣い天地が橫はつてゐた。かれは脫營兵に就いての種々な話を思ひ浮べた。十人の中、九人までは、何處かで搜し出されてつかまへられるが、その中の一人は巧に遁げ終らせることが出來たものだといふ話をかれは聞いたことがある。現に、長い間その逃跡を晦してゐたものから直接にその話を聞いたこともある。その一人になり得ない筈はない。何處か遠くに行く。知人などの一人もゐない海の涯とか山の奥とかいふところに行く。そして一二年働いて暮す。何處に行つたつて、食つてゐられないことはない。かう思ふと、罪惡を犯して巧にそれを隱蔽してゐる人達の心持などが想像されて來た。

灯のついた河舟がまた一つかれの前を動いて通つて行つた。

四

通りに面した田舍の三等郵便局の一室がかれの眼の前に浮んだ。それは丁度山の裾のやうな處になつてゐる町で、溫泉が湧出してゐて、古い二階造の家々には、溫泉御宿とか、御宿とか書いた招牌が古くなつてかゝつてゐた。山の翠微はすぐその町の前から起つて、雲は絕えずそれにかゝつた。それに、そこに

ふ運命の下に生きなければならない自分なのか。

……兎に角、今はもう駄目だ。今は何うしても兵營に歸つて行くことは出來ない。よし又强ひて歸つて行つたにしても、あの懲罰令の規定の下に嚴重な所罰を受けなければならない。

かれはぢつと闇を見詰めた。

すぐ下に大きな川が流れてゐた。それはかなりに廣い幅で、闇の中にも水の黑く光つて流れてゐるのがわかつた。對岸の土手などもそれと微かに見えた。自分の下には、芦だの薄だのゝ新芽の繁つてゐるのがあつて、その向うに灯の小さくついた船が靜かに通つて行つてゐた。櫓をあさつてゐる船頭の影が黑く闇を劃つて動いた。ギーと舵の鳴る音がした。

ふとかれのゐるすぐ上の土手の路を提灯をつけて誰か二三人で通つて行く氣勢がした。かれははつとした。中隊の者でも搜しに來たのではないかと思つて、體を小さくして草の上に蹲踞るやうにした。話聲は自分のすぐ上を掠めて通つたが、さういふ兵士がそこにゐるなどとは氣がつかずにそのまゝ通つて行つて了つた。

暫し經つた。かれはぼんやりしてゐた。今まで種々な雜念が起つて來たとは反對に、今度は落附きすぎる位に冷靜になつてゐる自分を要太郎は發見した。それはこれまでにも度々かれの經驗した心の狀態であつた。『この子はまァ何て圖太いんだか。おつかねえやうな子だ。』かう言つて稚い頃から母親は呆れ

なことをかれは考へて、それのすむまで其處で見てゐた。で、一時間ほどして、其處を出ようとすると、ばつたりその同年兵に逢つた。また二人で町を彷徨き歩いた。そしていつ入るともなく、その横町に入つて了つた。あの時、彼處に入る氣にならなければ好かつたのだ。奴さへ誘はなけれやあそこに入る氣にもならなかつたのだ。かう思ふと、その同年兵が呪はれた。あいつめ今は俺のことを何の彼のと言つて、班長や下士共におべつかつてゐるのだらう。

あいつの顔が……えへらえへら笑つてゐやがるあいつの顔が。女に調戯つてまづい唄をうたつて、その揚句、女にふられやがつたあいつの顔が。

ふとまた『何故あの時ぐんぐん兵營の門の中に入つて行かなかつたらう』と思つて、かれはその時の逡巡と躊躇とを後悔した。あの時なら、まだ、入つて行けたのであつた。いや、あの特務の出て來た時でも入つて行けたのだ。何故あの時に入つて行かなかつた？　かう思つたかれは頭の毛を掻りたいやうな焦燥を渾身に感じた。

雜然とした回想が颶風のやうにかれの頭の中をかき廻した。稚ない時分からのわるい癖、鄕黨から指彈され冷笑され度外視されたやうな自分の生活、自分のことに就いて怒つたり泣いたり恥を忍んだりした父母の顔、何うして自分はさういふ生活をしなければならなかつたか、自分がわるいのか、それとも自分を生んだ親がわるいのか。それとも又自分を取卷いた周圍のものがわるいのか。それとも又さうい

類はすつかり捜されたに相違ない。あの女から來た手紙もすつかり見られたに相違ない。こゝまで思つて、ふとかれは吐息を吐いた。さうだ、たしかにあの爲替の卷き込んであつた奴の手紙が入つてゐる筈だ。あの爲替はもうとうに郵便局で受取つた。が奴め、二三日前から來た筈の手紙が來ない、來ないと言つてゐた。それなのに、そこからその手紙が出る。自分のやつたことが知れる。もう知れてゐるに相違ない。

『馬鹿な、ドヂな眞似をしたもんだ！』かう自分で口に出して言つたが、もう追附かなかつた。かれはかれと兵營との距離が非常に遠くなつたのを感じた。もう何うしても歸れない、そこに歸つては行けない。かう思ふと、かれはぐつたりした。

何も彼も完全に破壞されたやうな氣がした。續いて今日の日、かうした運命になる最初の一歩を歩き出した今日の日を呪ひたくなつた。それと言ふのも財布に、あの爲替の金があつた爲めだつた。要太郎は朝皆と元氣よく兵營の門を出て行つたことを思出した。金があるので、大手を振つて、かれは町から町を歩いた。ある遠い親類になる家を訪問した。そこにかれより四つほど年下の丸ぽちやな娘がゐた。それに調戲つたり何かして、晝飯を御馳走になつて、一本飲んだ麥酒に醉つて其處を出た。又町を歩いた。丁度山王の祭か何かで、軒には美しく並んで提灯が下つてゐた。それから活動小屋をちよつと覗いた。ジゴマか何かをしてゐた。俺にもあゝいふことが出來ないことはない。すればいくらでも出來る。こん

特務らしい男が一人、劍をがちやがちやさせて、門から出て來た。步哨が敬禮をしてゐるのがそれと微かに見えた。要太郎はそれを見ると、さながら重い罪人でもあるかのやうに、慌てゝそこから遁げ出した。

三

一時間後には、要太郎は川の畔に來て、ぼんやりして立つてゐた。

今時分は隊ではもう自分に就いて、種々な噂をしてゐるに相違ない。あの赧ら顏の意地惡の班長は、得意さうに、自分のあの料理屋に入つたことを週番士官や仲間に報告してゐるだらう。あの同年兵は女にもてなかつた恨を誹謗と讒誣とに託して、あしざまに自分を罵つてゐるであらう。勝手なことを誇張して言つて自分の罪を重くしようとしてゐるだらう。同班の肥つたあいつは、しかつめらしく、あの厭な世辭笑ひをして、班長の機嫌を取るべくあることないこと自分のことに就いて饒舌つてゐるだらう。かう思ふと、その一室のさまが歷々と見える。二つづつ並べた寢臺、その上の棚に置いてある手廻りのものを入れる箱、中央の大机、整頓を入れた包、廊下の架に立てゝある銃、それにぴかぴかと輝いて反射する電燈、つゞいてその室から扉を排してずつと長い階梯を下りて行くところにある中隊長のゐる室、週番士官のゐる室、長い卓、そこに班長や週番下士が立つてゐて自分の話をしてゐる。無論、自分の箱や衣

たり信用されたりして來たことが、自分には不徹底な淺薄な上つらな觀察としか見えなかつたけれども、それでもかれに取つては、評判のわるいのよりも好い方が好かつた。それに、第一、國の方で安心した。父母もその操行の改まつたのを手紙で喜んで寄越したりした。此間母親が逢ひに來た時にも、ほくほく喜んで行つたことなどを要太郎は思出した。

遲刻、營倉、そんなことに、考へやうによつては、よくあり勝のことで、おとなしくその制裁を受けさへすれば、何でもないと言ふことは一方にはわかつてゐるが、しかし要太郎にはさういふ風に考へることは出來なかつた。自分の生活、漸く恢復しかけた生活、それがまた今度の事件ですつかり全く破壞されて了つたやうにかれには思はれた。何うしても此のまゝ歸つて行けないといふ氣分が強い力でかれを壓迫した。

氣が附くと、要太郎はいつか兵營の柵の側近く來てゐた。もうすつかり夜だ。それは星のない曇つた夜で生溫かい人を焦燥させるやうな空氣があたりに滿ちてゐた。ぼやけた夜風が壓すやうに不愉快に塵埃を吹いた。

皆な揃つて食事ももう終つた頃だ。かう思つてかれは兵營の窓毎に明るくついてゐる灯を仰いだ。あたりはしんとしてゐる。步哨が默つてあちこち步いてゐるのが闇の夜を透して見える。一步二步、近づいて見たが、かれは又引返した。

『しまつた！』かれは思はず立留つた。

もう日は暮れてゐた。あたりは茫と夕べの靄に包まれて、兵舍の灯や町家の灯がぬれたやうにぼんやりとかすんで見えた。突然、さつきあそこに自分が入つて行く所を意地悪の班長にチラと見懸けられたことを思出した。一緒に行つた同年兵が女にふられて自分より早く歸つて行つたことを思ひ出した。『駄目だ駄目だ！』かうかれは心の中に叫んだ。

地團太踏んでも及ばないやうな焦燥がかれの全身を領した。感情に強いかれ、意地に強いかれ、幼い時から強情で母親に持餘されたかれ、さういふかれが底の底から現はれて來て、全身が赫とした。

入營した一年はかれは非常に評判がわるかつた。營倉に入つたのも一度や二度ではなかつた。ある時は窃盗罪に擬せられて、自分の私物箱や寢臺を調べられたり、丸裸にされて調べられたりした。紛失した物品が自分の寢臺の下から出た時には、班長や上等兵に打つたり蹴られたりした。それが去年戰爭に行つてから、大分さうした不名譽を恢復して來た。戰場ではかれは勇敢な一兵卒として誰にも認められた。斥候に出かけた時には、敵の騎兵の追跡に逢つて、林にかくれたり、池の中に半身を浸けてその目を避けたりして、その重要な任務を果した。

『貴樣は、此頃は好くなつたぞ。その意氣を忘れてはならん。帝國の名譽ある軍人と言ふことを第一に念頭に置かなけれやいかんぞ。』こんなことを言つて中隊長から褒められた事もあつた。その褒められ

づいて女の艶めかしい言葉や、白い肌や、その時の狀態や、さういふものが、驅けてゐる間にも、かれの頭を横ぎつて通つた。かと思ふと、營倉に入れられた時のガランとした室がそれに聯關して繰返された。寢臺も何もない室、大きな格子戶の卸された室、何もない冷たい板敷の室、そこでかれはまた七日も十日も暮さなければならないのか。宛がはれた冷めたい握飯を食はなければならないのか。あの氣難かしい意地惡な班長や曹長に横鬢を張られなければならないのか。

……かれは急いで走つた。かれは左の手で、小さな劍のブラブラするのを押へながら走つた。

ある町家の店にかゝつてゐる時計はもう時刻を過ぎてゐた。かと思ふと、まだ二三十分間のある時計の處もあつた。かれは走りながら自分の時計を出して見た。もう五分しかない。それに、兵營まではまだ十五六町もある。

あるところでは『なるやうになれ』と思つて、多少自暴氣味で、小さく步調を緩くして步いた。班長などにも反抗してやるやうな氣分で步いた。五分か十分、それが後れたためばかりに、營倉に一週間も十日も入れられなければならないといふ情ないはめなどをも考へた。しかし、少し行つた時には、矢張さうしては居られなかつた。矢張要太郎は驅けた。

兵營が見えるかと思ふあたりに來ても、門限の喇叭が鳴らないので、ほつと呼吸をついて立留つたと同時に爽かに夕暮の空氣を劈いて鳴りわたつたその音！　急に閉ざされた鐵の門！

門內にその姿を隱した。

暫くは往來が絕えた。何處か工場で、汽笛の鳴る音が吼えるやうにきこえた。また一人二人入つて來た。しかしそれだけであとは絕えた。門限の時刻を報ずる喇叭はやがて夕暮の空氣を劈いて、嚠喨として、四邊に鳴り渡つた。

二

その鳴り渡る門限の喇叭の音を要太郎はそこから五町ほど手前で耳にした。しまつた！　と思つてかれは立留つた。胸は俄かに强い鼓動を感じた。

さつき氣が附いて時計をポケットから出して見た時にも、門限の時刻の旣に迫りつゝあるのを知つた。慌てゝかれは其處から出て來た。かれは兵士達のよく行く白粉を塗つたあやしい女のゐる小料理屋の二階の奧にゐた。『大變だ、大變だ、ぼやぼやしてるとまた營倉だ。』かう言つてヅボンを穿いたり上衣を着たり劍帶を緊めたりした。送つて出て來ただらしない風をした女をも見ようともせずに、金を財布からぢやらぢやらと音させて出して、そして狼狽へて其處から出た。あたりにはもう兵士達の姿は一人も見えなかつた。さつきあれほど彼方此方を彷徨いてゐた兵士達はいつの間に何處に行つたかと思はれるほどであつた。かれは駈足で走つた。女と戲れてゐる間にいつとなく時間が經つたことなどを考へた。つ

『俺か……。俺なんか隱しやしねえ。奴と三人で、これを…………、』と鼻を觸つて見せて、『これをやつてな、すつかり負けちやつた。』

『取られたんか？』

『すつからひんさ。』

『何うだか。』

『本當だよ。隱しやしねえぞ。仕方がねえ、今度の日曜は拳でも打つて籠城さ。』考へて、『あつたら、少し貸せや。』

『あるもんか、俺だつて。』

『貴樣なんか好いや、家はいゝし、金は何うでもなるし、あゝいふ情婦もあるしよ。金がなくなれや、爲替ですぐ送つて來るぢやねえか。』

『家だつて、さう〳〵は送らねえや。』

ふと、營門の前に近づいて來てゐるのに氣が附いて、急に話をやめて立留つて、型の如く歩哨に敬禮して、急いで門の中に入つて行つた。

續いて三人づれの初年兵が入つて行き、そのあとから又一人入つて行つた。刻々毎に門限の時刻は迫りつゝあつた。慌てゝまた脊の高い古兵が一人、二人、三人まで駈足で走つて來て、急いで敬禮なして、

く一日を送つたもの、總て一週間の激しい勤務と勞苦とを忘れて、籠を離れた鳥のやうに、自由に快活に遊び廻つて來た。しかしその待焦れた樂しい一週の一日も過ぎた。これから六日は又骨の折れる演習をしなければならない。上官の叱責も默つてきかなければならない。朝も暗いうちに起きなければならない。こんなことを思ひながらかれ等は皆急いで、歩哨の立つてゐる大きな營門へと近づいて行つた。

門の前で一々立留つて敬禮して、手帳などを見せて行つた。

門の中には大きな建物と廣い營庭とが見えた。營庭にはぶら〳〵彷徨いてゐる兵隊が二三見えた。横に長く連つてゐる兵舍にも、正面に見える兵舍にも、もうところどころ灯がついてゐた。夕べの靄は靜かに地上に這つてゐた。

横町から出て來た二人の兵士は、

『何うだつた、今日の外出は、もてたか？』

『…………………』

『いやに莞爾笑つてゐるな、持てたな。』

『駄目さ。』

『何が駄目なものか。聞いたぞ、聞いたぞ。』

『それよりも貴樣は何うだ？』—

一兵卒の銃殺

一

薄暮はその靜けさと、初夏の頃によく見る夕べの靄と、處々に輝き初めた灯と、そことなく靡き渡つた夕炊の烟とを以て、次第にあたりに迫りつゝあつた。大きな兵營のある町の通りでは、今しも門限に遲れないやうに、彼方からも此方からも兵士達が急いで歩いて來るのが見えた。向うの横町からも出て來れば此方の通りからも出て來た。急いで駈けて行くものもあれば、暢氣さうに二人づれで何か話しながら歩いて來るものもあつた。列に離れた雁のやうに淋しさうに向う側をぽつり〳〵歩いて來るものなどもあつた。さういふ人達は總て一日の日曜の外出を出來るだけ十分に樂んで來た。親類の家に行つたもの、活動寫眞小屋に半日を費したもの、小料理屋に行つて女を相手に戯れて來たもの、知己も下宿もなく、さうかと言つて酒を飮んだり芝居を見たりする趣味もないので、ひとり郊外の靜かなところで菓子などを食つて來たもの、昨日圖らず若い女房が母親とやつて來てゐて、町の小さな旅籠屋で久し振りで樂し

一兵卒の銃殺

花袋全集第八巻目次

再び草の野に

（武藏國北埼玉郡川俣村）

田山花袋著

第八巻

一兵卒の銃殺・再び草の野に

河ぞひの春

花袋全集刊行會